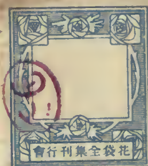




大正十二年十二月七日印刷
大正十二年十二月十日發行

花袋全集第五卷
（非賣品）



不許複製

著作者 田山錄彌
東京市小石川區東青柳町二十九番地
發行者 川俣馨一
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者 松浦政吉
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所 株式會社 博文館印刷所

發行所
東京市小石川區東青柳町二十九番地
花袋全集刊行會
電話小石川一〇五四番
振替東京三一七〇〇番

『それぢやお休みなさい。』H子もかう言つて後から續いた。襖はすぐしめられた。

MとY子とは手持無沙汰のやうに、暫し默つて坐つてゐたが、Mはやがてランプを持つて、背の高い姿をくつきりとあたりに見せて、襖をあけて、向うの室へと行つて、枕元の机の上にそれを置いた。圍爐裏のある室は暗くなつた。

Mの眼はふと其處に佛龕の中に深く藏された三尊佛のあるのを見た。不安が、罪過が、自づから陷つて行つた深淵が黑くかれの前に橫つてゐるのを感じた。Mは立つたまゝ手を拱いて凝と深く考へ込んだ。しかし何うすることも出來なかつた。いかなる報酬が來ようが、罰が來ようが、かうなつてはもう何うすることも出來なかつた。そこにY子が色の白い莞爾した顏を見せて靜かに入つて來た。

Kの室では笑聲がした。ランプの影が頻りに動いた。

——　——

——花袋全集　第五卷　終——

圍を運んで行つた。

『おい、手傳はうか。』

かうKが笑ひながら言ふと、

『よう御座んすよ。もうこれで好いんですから。』

H子の聲は其方から聞えた。

眞中の圍爐裏のある室で、かれ等はまた集つて一しきり話して、茶などを淹れて飮んだ。明日はKもH子もT湖までY子を見物に伴れて行つてやるといふ豫定で、その話などが種々と出た。お宮の見物は都合によつて、明日の朝か、でなければT湖から歸つてからにするとKは言つてゐた。

夜は更けて水聲は愈々高く聞えた。

『ランプはこれを持つて行つて置く方が好い。僕の方はあの小さいんで好いから……。』かう言つてKは小十能で圍爐裏の火をいけて、『もう遲いんだ……寢ようぢやないか。』

『さうだね。』

『かうして置けば、もう火も危くない。此處には明りはなくたつて好いから……ぢや寢よう。』Kは立つて、仕切の襖を明けて次の間に行つた。

『好いですとも……。』

H子は圍爐裏のある室の隣で、夜具を出してゐたが、『此處のをもつと使つても好いんでせうか？』

Mは立つて行つて、

『好いんですとも、……いくらでも出してつかつて下さい。』H子のゐる室の中を覗いて、『いくらでも使はないのがあるんだけども、干してないから黴臭いでせう。』

『さうね。』H子は臭をかいだらしく、『そんなに澤山はいらないんです。』

Mは手傳つて、一枚二枚を其處に持ち出した。

『ぢや、此處をあけて置いて、向うと此方に……、』Kは頷でしやくつて、『その方が好いだらう？』

『さうね、さうしませう。』

かう言つたH子はY子に向つて、『ぢや、Yちやんも手傳つてお呉れな。』

Y子も立つて、其處に積んだ夜具を隣の六疊に入れた。

『ぢや、お前さん、よく此方の方をしてお呉れね。』

『え……。』

かう言ふY子の聲が聞えた。

で、其方はY子にまかせて、今度はH子が此方に自分等の寢間の準備するために、メリンスの四布蒲

『何うもさうらしい。』Mは白い顔を仰向にして笑つた。

Mの胸には、さつき使の者が來た時から、晝間湛へた不安がまた烈しい力で首を擡げつゝあつたのであつた。さうかと言つて今更何うすることも出來ないのをかれは思つた。既に釜中の魚である。しかも自から好んで入つて來た釜中の魚である。自から心張棒を戸にかつた心はあべこべにかれを深い陷穽に陷れたのであつた。

『惡友？』

かうした心持が強く起つて來た。しかし誰もさうしたかれの煩悶を知らなかつた。KとH子とは、ランプを持つて、餉臺の上に散らばつたものを一つ一つ勝手の方へと運んで行つた。Y子もそれを手傳つた。Y子は勝手がわからないので、茶碗や德利を勝手元に接したところまで運んだ。Mは雨戸も閉めない縁側に立つたり、皆なして忙しさうに働いてゐるところに行つたり、筧のちよろ〳〵落ちてゐるところに行つて口を漱いだりしてゐたが、再び室に入つた時には、KとH子とが、もう寢る支度に取り懸つてゐるのを眼にした。

『もう、寢ようぢやないか。遲いから。』KはMに言つたが、『雨戸は閉めないでも好いかしら？』

『好いさ……。誰も來やしませんや。』

『僕はいつでも閉めたことはないのだけれど……。』

『また來たんぢやないか。』

『大丈夫だ、もう、さつき、すつかり心張棒をかつて置いたから。』

『いやだ。風が來たんですよ。』

かうH子は外の氣勢を聞くやうにして言つた。

夜は次第に更けた。

盃を勸められる度毎に、Mは、『もう澤山！』と言つた。Mはをり〳〵時計の蓋をぱちんと明けて見た。

さつきからH子がそれを見てゐるので、『もうおつもりにしませうね。』とKに言つた。

『何時だえ？　もう。』Kは訊いた。

『十一時すぎだ。』

『もう、さうなるかねえ、今夜は馬鹿に早いな。それに、君はちつとも醉はんぢやないか。』

『いやもう隨分飲んだ。一升ではきかんだらう。此上飲んぢや苦しくなる。』

『ぢや、もうやめるか。』

『さうしませう、何うも醉つた。』

『內攻したかね、矢張。』

爲方がないので、Mは立つて行つた。Mに限らず、KもH子も折角の企てが無駄になつて了ひはしないかと思はれて心配になつた。皆默つて了つた。
Mは上り端の暗いところで、二語三語使のものに言つてゐたが、——使の者は年寄らしかつた。——やがて要領を得て歸つて行つたあとの戸をぴつしやりと閉めて、今度は心張棒までかつて、そして此方へと靜かに入つて來た。
『何うした？』
『何に、少し用事が出來て……。』
『濟んだのかえ？』
『もう濟んだ……。』
『變に思はれやしないか。』
『大丈夫だ……。年寄だから、何にも分りやしない。唯、女の下駄が多いんで、吃驚したらう。』
『わかりやしまい……。』
『大丈夫だとも。』
また盃を重ね始めたが、幾ら飲んでもMはいつものやうに醉はなかつた。話は話と際限なく續いた。
また表の戸がガタ〳〵と音がした。

Ｋはこんなことを言つた。

『一體、女が了簡がわからないんだ。女が罪人だ。女が皆なやらせるのだよ。』かうした言葉がＫの口から出る時分には、もうかなりの酒の醉が出て來てゐた。Ｍは面白さうに莞爾して、さも今夜は酒が旨いと言はぬばかりに盃を口にあてた。

女達も遠慮をせずに、箸を刺身や吸物につけた。

突然、誰か來た氣勢がした。Ｋが立つて行つたが、すぐ引返して來て、Ｍを呼んだ。

『僕か？』

『何か用だとさ。』

『用？』

困つたやうにして、『僕ゐるつて言つた？』

『言ひもしないけれど、言つたやうなもんだな。』

『あそこからかえ？』

頷で向うをしやくつて見せた。

『さうらしい……。』

が、もう今年はすつかり無くなつちやつた……。』

『さうだね、今年はいろんな人が來て貰つたからね。』

『いつも餘ることはないね。』

『さうだらうね。』『丁度燗がついたらしいので、Kは盃をMに指して、『今年は隨分いろんな人が來た。』

Y子はその札を見てゐたが、『好いんですか、それぢや戴いて！』かう言つてそれを帶の間に藏つた。

そして燗徳利を取つて、MにもKにもお酌をした。

女の明るい顏が二つそこにあるだけで、酒は別に變つた趣をも呈さなかつた。KとMは殆ど半年ほども、かうして二人相對して盃を啣んで、女の話や、妻帶の話や、家庭の話などをして笑ひ興じた。

『これで女さへ傍にありや好いんだが。』などと言つた。そしてKはいつも醉つて爐傍に倒れて寢た。

Mは酒量が强いので、Kが倒れて了つてからも、猶も獨語を言ひ言ひちびり〱やつてゐるが、それでも時にはいたく醉つて、矢張そこに倒れて夜半になつてから起きて歸つて行くこともあつた。Kに取つては、かうした遊蕩は、女は、寧ろ避けたいと思つて、そしてこの山の中に來たのではあるが、H子との關係なども馬鹿々々しいと思つてゐるのではあるが、しかしかうして註文通りに、女が來てゐて見ると、其處にまた捨て難い面白い興味が湧いて來ずには置かなかつた。

『まア、飲み給へ、今夜は好いよ、いくら人間の罪過を重ねても爲方がないよ。矢張人間だからな。』

『だッて……。』

『いやかね。矢張……。』

『結構ですけどもね……。』

『けどもかね、矢張。』

『だッて、まだ若いんですもの。姐さんなんか丁度好いわ。』

『まア、此人？　默つてゐるかと思ふと、あんなことを……。』

H子は笑つた。

Mはのんきさうに、いかにも樂しさうに莞爾して其處に坐つてゐたが、やがて思ひ出したやうに靜かに財布の中をさがして、何か小さな札のやうなものを餉臺の上に出した。

『たッた一枚あつた……。』

H子はそれを見たが、『あ、見物の札、Yちやん貰つてお置きよ。それで、お宮がすつかり拜見が出來るんだから。』

『さう、これで。』

Y子はそれを手に取つて見て、『これがあればお賽は出さなくつても好いの？』

『これですつかり案内がつくから。』Mは半ばKに向つて、『一年中、きまつて何枚ッて貰つて置くんだ

の上の罎を取つて德利に酒を移したものだが、時にはMもそれをやつたが、今日はH子が細い白い手で今しも頻りに罎から酒を德利に移さうとしてゐた。Kは火にかけた汁物の鍋の蓋を取つて頻りにその加減を見てゐた。

『隨分、長湯でしたらう。』

『さうでもありませんよ。』

H子はかう言つたが、向うの間に立つてゐるY子に、『お前さん、此方にお入りな。そして此處にお坐り。』

『え。』

Y子は靜かに入つて來て、H子とMとの間に坐つた。

『隨分、涼しいのね。寒い位ね。』

『どうしても山だからね。お前さん、それは夏は涼しいよ。一番先に來た時なんか、夏を知らない位だつたよ。』

『好いわねえ、かういふ山は！』

『だから、此處の御寮さんになるに限るね。』

Kはだしぬけに Y子に向つて言つた。

て見せて、やゝ暫く其處に涼んでゐた。H子の綺麗な橫顏がランプの光線の中にはつきり見えた。何か指圖されたらしく、Y子はやがて立つて此方へ來た。

『好いんですよ。ひとりでやるから、……始終やりつけてるから……。』

『でも……。』

『それぢやかけて貰ふかな。』

Mはわざと笑つて、Y子が後からかける白い給に手を通した。初めにちよつと顏を合せた時は美しく、次に正面に向ひ合つた時にはそれほどでもないと思つたが、今また見ると、頰の豐かな色や、年の若さや、長い髱の具合などがかれに擽つたいやうな心持を起させた。

『あゝ好い湯だつた。』

『溫くはありませんでしたか。』

『丁度好かつた。』すぐ言葉をついで『さつきは熱かつたでせう？』

『それほどでも……』

『難有う、もう好う御座んす。』帶をしめて、被布を着て、そのランプの傍に置いた小形の金時計と財布とを一まとめにして手に持つて、そして圍爐裏のある茶の間の方へとやつて來た。

餉臺の上には、旣に刺身だの鹽燒だの燗德利などが並んでゐた。女の來ない中は、Kが手づから茶棚

だから爲方がないといふ氣がして、昨夜考へたやうな心持は微かに遠くなつてゐた。湯は好い加減にかれの體をを溫めた。かれは風呂の側のところに身を凭せるやうにして、すぐ前の室の机の上に置いてあるホヤのやゝ黑くなつたランプと、その向うの茶の間の圍爐裏の餉臺の傍にある明るいランプの光線の夕暮の闇に薄ひろがつてゐるのとを樂しい心持で見た。H子とKとY子と一緒になつて何か話してゐるさまもそこからは影繪のやうになつて見えた。

上り端に、料理店からららしく、人の來た氣勢がして、それをKが出て行つて受取つてゐる後姿が見えた。H子は此方へと立つて來た。

『來たの？　もう！』

『來た、來た。』

『大變、御馳走ね。』

『何アに……。それに、碌なものはないからね。』

こんなことを言つてゐるのが聞えた。首を出して覗いて見ると、Y子が白い顏をぼんやりとランプの光線の中に見せて坐つてゐるのが見えた。

Mはかなり長湯をして風呂から出たが、煤けたランプのある薄暗い光線の中で、白い腰卷を際立たせ

『あゝ大きな寺だ。Yちやん、本當に約束してお置きよ。』
『さうね、いゝわね。』
かう言つてY子は笑つた。
Mの不安らしい氣分も段々除れて來たらしかつた。Kもさつき考へたことは、あれは底の底ことだ。遊戯本能は遊戯本能で滿足させればそれで好いのだ。かういふ風に輕く思ひ出して來てゐた。
『何うだ、湯に入らないか、君。』
KがMに言ふと、
『まだ、入れるかしら?』
『入れるとも……。』
『それぢや一つ入るかな。』
かう言つて、Mは立つて次の間に行つた。其處で着物を脱いだ。
風呂場からは前の庭を隔てゝ、大きな谷の水の音が地を搖がすやうにして聞えて來てゐた。それに雜つて、筧の音が、または風呂の水桶に水の落ちる音が靜かにちよろちよろと聞えてゐた。Mはこの間中常に見てゐたKとH子との歡樂を思ひ出さずにはゐられなかつた。長い形の好い髱、白い細い指、それが今日は自分にもやつて來たことを考へて浮いた輕い心になつた。佛の道に對する罪過、それも人間

明るい顔をした女を一人づつ置いて想像して見ると、變な氣がするよ。いづれ、さうなるにはなるだらうけれど……。』

『まア、さうしたいと思つて、骨を折つてゐるんだけれど……。』

『その時は、Yちやん來るんだね。のんきで好いぜ！　寺は。それに此處は他の寺と違つてお經は讀むぢやなし、食ふ心配はなし、旦那さまはやさしくして吳れるし、こんな好いことはありやしない。』

言ひかけてKは笑つて、

『何うだね。Yちやん？』

『來ませうかね。』

『私も、さうなつたら來ても好いと思ふわ。本當に、Sさんのやうなあんな大きな立派な寺に入るなら、それは好いわ。それやね、Yちやん、大きな寺よ。華族さまだつて、あんな家に住んでやしない。』

『僕も、一つやらなけりやならないと思ふんだけども。そら……この一軒先、そこに寺があるでせう。あそこを普請しようと思つてゐるんだけども……何うも具合がわるくつて……あそこは立派ですよ。Sの寺よりも大きいですよ。』

『何處です。』

『この一軒先。』

『先生、Kあたりに行つてゐたから、內所で餘程やつたんでせう。』
『何うして、拳なんかお上手ですもの……。』
『皆な、內所でやつてゐるんだらう?』
『さア。』
Mは笑つて、『やつたツて、高は知れてゐるけれど、それでも、まア、Sなんか開けてゐる方ですね。一番、僕なんかゞ駄目さ。』
『それでも、外ではお遊びになるんでせう。』
『金がないからね――』
『金で遊ぶのではないでせう。』
『でも、矢張これがなくつちや――』
Mは指を丸めて見せた。
『Sのも、餘程一人さがして來ようと思つたけどもね。』
『先生は――』
Mは否定したやうな笑ひ方をした。
『これで、山の憲法がきまつて、皆な女房を一人づつ持つやうになると面白いな。かうした大きな寺に

『だつてしやうがないぢやないの。そのために來たんだもの。』

『…………』

その話を暫くしてから、H子はKにした。そしてつけ加へて言つた。『本當に、あの子、我儘でしやうがありやしない。だから、お座敷に出てもお客の機嫌が取れなくつて困るんですよ。あれでも一とかど好い藝者のつもりでゐるんだから。』

Kは默つてそれを聞いた。

H子とKとMとは、また圍爐裏の傍に來て話した。H子が茶を淹れる傍にY子が來て坐つて、茶をついだ茶碗をKやMに勸めたりした。つくばねの他に、羊羹だの、饅頭だのが出された。

H子がMに訊いた。

『Sさん、何うなさいました。』

『ゐましたよ。』

『先生、中々開けてるね。』

傍からかうKが言ふと、

『開けてるどころか、よつぽどお遊びになつた方ですよ。でなくちや、あんな調子は出ませんよ。』

らけ出したと言つて好いか、何とも知れないやうな自己の心に對して自から罵るやうな氣分を感じた。自分とH子の間柄だツて、決して相愛とか何とか言ふものではない。H子は此處に來る前にある男と逢つてゐる。そのために喧嘩もしてゐる。かれ等の歡樂も他で見たやうな面白いものではない。言はゞお互に魂の玩弄をしてゐるのである。それにも拘らず、ちやんとさういふことがわかつてゐるに拘らず、人間は何處までさうしたことが出來るかと思つてやつて來た。言はゞ試驗だ。解剖臺に自分で自分の心を載せて見てゐるのだ。

イヤなイヤな氣がした。

それにも拘らず、かれは今又さういふことを敢てしてゐる。Mもまたそれを敢てしようとしてゐる。そしてまた、その心の一面には、さういふことをするのを面白がる本能があるのをKは見逃すことが出來なかつた。

『なアに、構ふことはない。人間のやることだ……。』かうKは思つた。

H子が立つて行つたあとをそツと追つて行つたY子は、

『姐さん……。』

『…………。』

『え？』

取つた。

『下にあるのを採つて來たのかえ？』Kはかう言つて、『あれは、しかし、賣るためにつくつて置くんぢやないか？　怒られるぜ！』

『なアに。』

すぱすぱとMは烟草を吸つた。

『綺麗ですね。』

もう一度H子が言つた。

其處に湯上り姿のY子が入つて來た。ぽつと顏が赤くなつてゐる。小づくりな、眉と眉との間の遠い、ちよつと艷な顏をしてゐる。年は二十二三。

丁寧に挨拶をした。Mも丁寧に挨拶をした。それを不思議な現象であるかのやうにKはぢつと見た。

Kは皮肉な感じを味つた。K自分等が始終歡樂を見せつけてゐるから、その半をMのためにわけてやらうと思はぬでもない。また同じ歡樂を味ふなら、一緒に味ふ方が好いと思はぬでもない。更にまたかうした生活のMに、さういふものを押つけて見るといふ遊戯本能もないではない。しかし、一面Kは人間の魂といふものを玩弄したやうなイヤな氣がした。

Kはかうした、淺薄と言つて好いか、それとも亦あさましいと言つて好いか、人間の心の底の底をさ

Mはちよつと立つて行つた。

縁側から顏を出したが、すぐ狼狽て、引込ませた。其處に女が立つてゐる。Y子は湯から上つて、着物を着て、帶を緊めやうとするところであつた。顏と顏とが合つた。兩方で兩方を見た。Mは赫とした。美しい眉と眼とあがつた。

きまりがわるいので、すぐ圍爐裏の傍に歸つて來るわけには行かなかつた。Mは用もないのに、用のある振りをして、縁側から庭に下りて、向うの崖の方へと歩いて行つた。

ダリアを折つて來た。

赤い大きなダリアである。それは崖から下りて行つた隣の畠に植ゑてあるのである。Mはわざ〳〵その花を折りに行つたやうに見せかけて、經机の上に置いてある花瓶を持ち出して、それを筧の水のちよろちよろと落ちるところへ行つて、洗つて、水をかへて、そしてそのダリアを生けた。

それを持つて來て、經机の上に置いた。

『好い花ですね。』かうH子が言つた。

『ちよつとかうして置くと好い。』

こんなことを言つて、それを眺めるやうな風をして、そして圍爐裏の傍に來て斜に坐つて、烟管を手に

ね？』と言つたが、もしさういふことが出來るなら面白いといふ風に言つた。戯談半分に、『好いとも……いくらでも出すとも……別品かね』などとも言つた。Mの禁慾の生活に取つては、尠くともさうしたことはめづらしい、面白い以上に體も心もそゝられるやうなことであつた。しかしKの言ふことは矢張戯談だと思つてゐた。ところが、昨日、『明日來るさうだよ。氣に入るか、何うかわからんけれどね。』と突然Kは言つた。Mの體は震へた。

Mは昨夜は終夜眠らなかつた。いろ／＼なことが頭を混亂させた。さういふことを行ふのを敢て罪過だとは思つてゐなかつたけれど、また一方にはさうした深い經驗しない人生の底に一度は入つて見るのも面白いと思つたけれども、しかし何處かに法に對し、在來の生活に對し、同僚等の皆な勵行してゐる禁慾に對し、何となく後護たいやうな心持がした。自分の魂をけがしはしないかといふやうな氣がした。しかしさうした反省も眼前に迫つた大きな事實に對しては何の效もなかつた。Mは今日も一日爲事が手につかないやうにして、來る女の眉やら眼やらを頭に浮べた。

事務上行かなければならない小旅行があつて、それがかれの順番であつたけれども、かれは强ひてそれを同僚の一人に頼んで、そして二三日自分の體を明けて置くやうにした。時間が近づくにつれて、かれはそは／＼した。今度は何か都合があつて女が來ないのが心配された。爲事を濟ますと、かれは誰にも疑はれないやうにして、そツとそこから出て來た。

『ありませんとも……』Mは一つ二つつまんで口に入れて、『ふん、油であげたんですな。面白いもんですな。』猶つゞけて二つ三つ食つて、『東京には珍しいものがありますな。何つて言ふんです、名は？』

『つくばね。』

かうH子が教へた。

『つくばね、なるほどな。あの正月のはねですな。』

また二つ三つ手に取つた。

此間にも、風呂場の方からは、女が湯に入つてゐる氣勢が絶えず聞える。それが擽つたいやうなまたは不安なやうな心の動搖を絶えずMに與へる。Mはかうした遊蕩の分子が人間の心の核子の中に潜んでゐることを不思議にも且つ恐ろしいやうにも思つた。半月以前からのKとH子との歡樂は既にかれに目を睜らせるやうなシインを幾つかみせた。Mは體が冷めたくなつたり熱くなつたりした。さうしたことに丸きり經驗はないではないが、しかしかうしたことが出來ようとは思はなかつた。此處で行はるべく進行しつつあるとは思はなかつた。つゞいて（何んな女だか見たい、）といふ欲望が盛に起つて來た。

しかし立つて見に行くわけにも行かなかつた。

此前、H子の家にY子といふ抱へのある話をKとした。その時、Kは、『ひとつ呼びよせるかな。そして見物させてやるかな、何うだえ、君、少し金を出したまへ。』と言つた。Mはその時、『そんなことが出來るか

ま靜かに茶の間に入つて來て、袈裟をかけたまゝで、丁寧にKとH子とに挨拶した。法衣がぱつとあたりにひろくひろがつた。

H子は、

『もう、御用はおすみですか。』

『濟みました。』

丁寧に言つて、袈裟を取つて、立つてそれを障子の隅にある經机の上に置いて、また坐つて、今度は懷から烟草入と烟管と半分なくなつた敷島とを出した。

『今、湯に入つてるんだよ。』

Kは頷で風呂場の方をしやつくつて見せて、そして笑つた。

H子は眞面目で、『何うかと思つたんですけども……。好い鹽梅に、都合が出來たさうで、參りました。』かう言つて、一時間ほど前にY子が東京から土産に買つて來た蠶豆を油で揚げたものを袋のまゝそこに出した。

『これはめづらしい豆ですな。』

『ちよつと好う御座んす。』

『此方にはないね。』Kがかう言ふと、

惡友？

午後三時着の汽車で來たY子が風呂に入つてゐる時、Mは一日の用事を濟ましてやつて來た。Mは成るたけ跫音を立てないやうに、果して來たか來ないかを先づ覗くやうな態度で、そこに法衣姿の白い顏を出した。

それを茶の間の圍爐裏に對ひ合つて睦しさうに坐つてゐたKとH子とがすぐ見附けた。

『あゝいらしつた！』かうH子がいくらか笑つたやうな表情でKを見て言つたが、その時にはKはもう立つて行つて、一種きまりがわるいともつかない不安ともつかない笑顏をしたMを緣側に迎へた。

『お客さん、來ましたか？』

『來ましたよ。』

いくらか笑ひを含んだKの顏を見て、『さうですか、三時ので？』かう言つて緣側から上りかけて、ふとそこから正面に突當つて見えてゐる風呂場の方で女の湯をつかつてゐる氣勢に耳を寄せたが、そのま

『あはゝ。』

同僚は皆笑つた。

『えらく開けたもんだ。何所の家にも、一人づゝ色の白い奴がゐて、喧しく聲をかけるぢやないか。そして市から歸つた機屋達が皆なそこに寄つて騷いでゐるぢやないか。びつくりしちやつた。』

『それで、引張られたんですか。』

『よせば好いのに……。つい出來心でね。綺麗な二十位な奴がゐて、羽織の袖が切れるまで引張つて離さないぢやないか。仕方がねえ、まあちよつと一服吸つて行けと思つて、上るには上つたが、上つて見ると、さうは行かないでね。いとどない財布の底をはたいちやつた……。來週もまた引込みだ……。』

『あはゝ。』

若い同僚達は大きな聲をして皆な一齊に笑つた。

『何うでした? 好い女でしたか、心臟は大丈夫でしたか。』

仲の好い一人はかう言つて、傍に寄つて來て、荒木の肩のところを輕く叩いた。皆はまた一齊に笑つた。

『えらく變つちやつたもんだ。』

ひとりで合點してゐて、容易にその內容を話さないので、

『何方へ行つたんです。一體、昨日は？』

『なあに、日向の沼の方へ行つたんだがね。』

『よく沼の方へ行きますな。』

『なあに、あそこに地藏さんがあるアね。あそこへ行つて見ようと思つて行つたんだよ。昔ね、親父につれられて行つたことがあるから。』

『矢張あるでせう。』

『あるにはあるよ、しかしそのことぢやないんだよ。あそこへ行つてね、日向沼の周圍をぐる〳〵廻つてね、地藏さまへ行つたんだよ。好い天氣だつたし、あそこらには松原があるし、好い遠足さ。それに地藏さまの前のところに、ちよつとした家があらあね。そこで、ゆつくり遊んでね。日の暮れる頃出て來たんだよ。』

話しかけて、煙草をゆつくりふかして、『ところが途中で日が暮れて了つて、高根に出たのが、八時頃さ。ところが、びつくりして了つた。あそこは實に開けた。實によく開けた。あまり灯が多いから、もう町へ歸つて來たのかと思つたね。ところが、そこらにある灯は皆なだるま屋ぢやないか。』

『でも、君方にはさうだらうけれど、荒木さんにはいろんなことが思ひ出されるから面白いんだよ。さういふ心持は年を取つて見なければわからないけど……。』こんなことを言つて、『それで彼方此方歩きましたか、佐野の方へも行つて見ましたか。』

『え、もう大抵歩きましたな。此間は大新田の方へ行つて見ました。』

『何にもないでせう。』

『それは何にもありませんがな……』荒木は笑ひながら言葉を濁すと、

『しかし、のんきで好いですよ。荒木さんなんかもう何にも心配はないんだもの。さうして、遠足でもしてゐりや好いんですものな。』

『何うしまして――。』

荒木は頭を掻いて見せた。

矢張東京に行かずにゐたある日曜日の翌日であつた。午飯の時に荒木は同僚に言つた。

『昨日はひどい目に逢つちやつた。』

『何うして？』

『何うしてつて、えらいことだ。』

『何うしたんです？』

『可哀相なことをした。やさしい女だつた。』かう言つて考へて、『何つて言つたけな、さう〳〵、お初つて言つたつけ。何所に行つたかな。』こんなことを考へながら、かれは薄暮の空氣の中に長い間立盡した。

若い同僚達は、かれの遠足の話を知つてゐた。後には、それを種にして、よく荒木にからかつたりした。

『さうして一人で歩いて面白いですかな。』

『面白いことはないよ。しかし、昔行つて知つてゐるところは、行つて見たいやうな氣がするね。』

『だつて、ぽつ〳〵田圃の中を歩いたつて仕方がないでせう。』

『さうぢやないよ。君方も、僕位の年ごろになるとわかるよ。』

東京に歸る日が續いて、此方にゐない時には、『遠足の方が大分お留守になりますね。』などと同僚達は言つた。

ある同僚は、『でも、荒木さんと歩くのも好いけれど、なんにもない田圃を歩いたり、つまらないお宮なんかをめづらしがつたりするんですもの。僕等にもわからない。』かう言つて、川の縁の方に行つた時の話などをした。

理事は理事で、

心の中には流れて行く年月といふことが堪らなく感じられるのであるけれども、それを言ひあらはす言葉を持たないかれは、唯ぽつねんとして、左の手を頰に當てゝ、茫然として唯あたりを見てゐた。夕日が段々かれの皺の多い横顏を照らした。

ある垣根の傍を通りながら、かれはふとあることを思ひ出して立つた。それも矢張日曜日の遠足の歸りであつた。その日は、子供の時分、よく泳ぎに行つた田圃の方から、釣りに行つた堀切の方へと出かけた。途中にある寺は燒けて了つてなかつたけれど、自分達がよくその傍を通つて歩いた鼻の缺けた地藏尊はまだ依然として殘つてゐた。その日もかれはかなり歩き疲れた。殊に物を食ふ店のあたりにないので困つた。日が暮れる時分、かれは漸く士族屋敷の處に來て、そしてその垣根の前を通つた。

『さうだつたな、此處だつたな、あの女と逢つたのは――。』

かう思ふと、今まで少しも思ひ出さなかつた追憶が流るゝやうにかれの頭に簇つて來た。それはもうかれには初戀ではなかつた。丁度かれは東京に出やうとする頃で、女は何でもその近所の店屋の娘だつた。色の白い肌理の細かい柔しい女であつた。かれは二人の關係の世間に知れかゝつてゐるのを其時此上なく恐れてゐた。女が平氣で絡みついて來るのも邪魔になつてゐた。

女の泣いた姿が今でも其處に立つてゐるやうな氣がした。

其處にお參りをしたものは、皆なそれを竹の皮に包んで土產にした。それを子供心にも旨いと思つてゐた。

訊いて見てもちよつとわからないので、手まねまでして形容して見せると、

『あゝ、あれですか。あれも、昔は澤山ありましたがな。今ぢや、もう、あんなものを召上るものがありませんでな。とうにやめやした。』

『さうかね、ないのかね、旨かつたがな。』

殘念さうにかれは言つた。かれは沼の一端の見える室に、一人ぽつねんと坐つて、袂から朝日の袋を出して、それに火をつけて靜かにすつた。子供がさで網で頻りに沼尻の川を搦つてゐる上には、明るい日影が晴やかにさしてゐた。

『何にしやすべ。』

『鰻は出來るかえ。』

『へい。』

『ぢや、鯰と鰻を吳れないか。』

かれは其處に落付いて二時間ほども坐つてゐた。酒を飮まないかれは、やがて出來て來た鯰と鰻で飯を食つた。

堂から庫裡の前を通つて行つた。あの和尚が今でも生きて其處にゐるやうな氣がした。庫裡の傍の見覺えのある井戸では、寺男が鋤などを洗つてゐた。

沼に添つた一里の道、それは靜かで、明るくつて、そしてしんとしてゐた。林があつたり、畑があつたり、竹藪があつたりした。ある小學校の廣場には、靜かな穩かな日が流るゝやうにさし込んでゐた。そこで、先生達がボールなどを投げてゐた。頰かぶりをした百姓の曳いて行く車の音は、その車が向うに隱れて了つても、まだ靜かに聞えてゐた。

沼尻の卑濕地には、其處にも此處にも家鴨が飼つてあつて、菅や藻などが茂つてゐた。ギヤ〳〵と喧しく啼いて、泥淖の中を步いてゐる家鴨の群をかれは長い間眺めて、『これが皆雁だとか相鴨だとか言つて賣られて行くんだな。』などと考へた。

一里の道も、心臟の弱いかれには、さう近いとは思はれなかつた。社のある近所に行つた時には、かれの額は汗ばみ、足は勞れ、心臟の鼓動は高くなつてゐた。かれは靜かな森を見た。その中にある荒れた古い社を見た。昔とは違つて淋しい人ッ子一人ゐないひろい境内を見た。

澤山あつた筈の茶屋も店を明けてゐる家は一軒しかなかつた。汚ない着物を着た上さんがかれを奧の暗い一間に案內した。

雜魚を叩いて、それを饂飩粉でこねて、簡單なさつま揚のやうにしたものが此處の名物であつた。

頭に長い間絡みついて忘られずに殘つてゐた。

天氣は好し、風はなし、今日の日曜は少し遠くの方に行つて見やうと荒木は思ひ立つた。一里ほど行つたところに、雷電神社がある。そこにも矢張此處と同じやうな鮒や鯉や鯰の澤山に取れる沼がある。少年時代に、かれは父親や祖父に伴れられてよく其處に行つた。その時分の人達は、參詣をかこつけに、其處だの、高取の天神だの、もう少し遠くの方では、佐野の元々大師あたりまでよく出かけて行つて、河魚料理か何かで一杯飲んで來るのを樂みにしてゐた。荒木はそこに行つて其時分の樂しい追憶に耽らうと思つた。

袷に羽織にインバネス、そのインバネスが邪魔な位に好い暖い秋の日和であつた。途中で、ふと沼に沿つた寺に寄つて見る氣になつて、山門を入つて、楢林をぬけて、墓地の方へと出て行つた。人の影もなくあたりはしんとしてゐた。自分の敎はつた漢學の先生の石碑の前に立つて、長い間ぢつとしてゐた。かれは、やがて前に、石段の向うに、濃い紺色をして沼の水の一ところ林の間から見えてゐるのを見た。林からは葉を漉した日影が絣を織るやうにチラ〳〵と地上に落ちてゐた。

沼の方をぼんやり眺めて、また引返して、今度は觀音堂のある前に行つて、其時分自分等の惡戲をした、和尙の大事にしてゐた大きな蜂の巢のあつたあたりを眺めて、それから覗くやうにして、靜かに本

『違へたもんだね。僕はビールぢや駄目だよ。いくら飲んだつてこれぢや役に立たない。ウイスキーはあるまいな。』手を鳴らして女中を呼んできいて見て、矢張、ないかな。ぢや好い酒を持つて來て呉れ、地酒ぢや困るよ。』

時々口を挿んでも、相手にされないので、細君はさびしさうにしてゐた。友達は、『お前、遠慮せずに、飯を食ふ奴は食つて了へ。日本の女は遠慮していけない。』こんなことを言つてゐたが、不意に、『お前、金持つてるか？』

『え。』

『いくらある。』

細君が懷中から出して渡す財布を友達は改めて見て、『何あに歸りの汽車賃さへありや大丈夫だ。おい荒木君、此處に藝者がゐるんだね。一人二人呼んで見やうぢやないか。』

『碌なのはゐはせんよ。詰らないからよした方が好い。』

『なあ、呼ばうな。』今度は細君の方に向つて言つて、『こいつ、これで三味線は少し彈くんだよ。』

やがて藝者が二人來て、唄を唄つたり三味線を彈いたりした。荒木はその友達の細君が長唄をかなり達者に彈くのを見た。日の暮れる頃まで騷いで三人は其處から出た。友達はその席で、藝者に外國の賣女の話や、イタリーのキヤンキヤンの話などを面白さうに話してきかせたが、それが半ば老いた荒木の

た。

『何處が好いんだえ？　一體。』

『吉田屋だらう、矢張。』

『吉田屋つて言へば、それ、高田がそこの女中にくつついて、評判になつて學校にゐられなくなつた家だね。』

『さうだ、さうだ。』

『さういふ料理屋でさへ、追憶があるんだからな、だから故郷は忘れられないな。』

『本當だ。』

吉田屋では、大廣間の隣りの八疊で、二人は午飯を食つた。鯉の洗ひに蒲燒に蓴菜の酢の物に鱠のすつぽん羹――それにも故鄕のなつかしい追憶があつた。庭を隔てゝ大きな欅の若葉が美しく見えた。

『君は飮まんのかえ？』

『僕は心臟がわるくつて酒は駄目だ。』

『晩酌もやらんかえ？』

『晩酌どころぢやない。』コップについだビールを指して、『これに半分位飮むと、動悸がして仕方がないんだから。』

あつちこつちにまごく〳〵してゐたがね、矢張故郷が戀しいよ。鮨や、天ぷらや、まぐろの刺身が好いよ。……しかし、此處ぢや話せない。折角來たんだから何處かで、晝飯を食はうぢやないか。好いだらう、一時間や二時間。』かう言つて、その昔の友はかれを一緒に停車場から誘ひ出した。

それは矢張同鄕のもので、役所に屬官をしてゐる時分、殊に懇意にしてゐた男であつた。外交試驗に及第して、支那からフランス、イギリス、スペイン、トルコなどとあちこちの公使館に長い間書記生を勤めてゐた。それが去年久し振で高等官になつて歸つて來た。

二人は並びながら歩いた。あとから靜かに細君がついて來た。それを荒木はをり〳〵待つてやるやうにした。

『躑躅は？』

『もう行つて見て來たんだよ。士族屋敷や、城址なども歩いて來たよ。變つたね。僕の家なんかありやしないよ、もう。城址に來た時には、感慨無量だつたよ。ウオタルローの古戰場に行つた時以上だつたよ。故鄕却是似他鄕つていふ支那人の詩があるが、唐人の寢言だなんて思つてゐたが、實際さうだよ。僕なんか知つてる奴は一人もゐないんだからね。』

『本當だね。しかし、杉山がゐる筈だが。』

『杉山、あいつ、此方にゐるのかえ。ふん。』などと言つたが、別に逢つて見やうなどとも言はなかつ

の入込んで入つてゐる船着から例の小さな櫓の舟にのつて、がづ、藻や芦の新芽の出てゐる沼を渡つて行つた。社に出かける途中で、かれはさういふ連中の中に知つてゐる人の顔をよく見かけた。

ある日、電話だといふので、『僕にかえ、僕に電話？』念を押して立つて行つて聽話機に耳を當てると、元氣な高い聲で、『君は荒木君かえ、僕、誰だかわかるかえ？　分るまい？　兎に角めづらしい人なんだがな。君が逢へば、びつくりする人だがね。ちよつと來給へな。すぐ此處にゐるんだよ。停車場で電話をかけてるんだよ。』

何うしても笑つて名を言はないので、ちよいと賴んでレールを越えて行つて見ると、其處に綺麗な二十六七の意氣な細君を伴れて、新しい袷の洋服にステツキを持つた紳士が莞爾笑つて立つてゐた。

『ヤア、君か？　何時、お歸りでした？』

『なあに、昨年の暮歸つて來たんだがね。びつくりしたらう、僕だとは思はなかつたらう。』

『本當だ。君だとは思はなかつた。』傍の細君の方を見て、『奧さんかね。』

『去年歸つて來て、つい此間結婚したばかりだよ。獨身で通さうと思つたけども、親類の奴がやかましくつてね、つい、降參しちやつた。』かう言つて大きく笑つて、その細君を引合せて、『矢張、日本が好いね。何處へ行つたつて日本のやうな好いところはありやしないよ。木は多いし、氣候も好いし、山水は綺麗だし、ロンドンだとか、パリーだとか言ふけれど、矢張日本が好いよ。僕なんか丁度十五年

これがたづねて行くと、『母さん、荒木さんが。』と言つて、いつも奥に驅け込んで行つた。

來た當座は、よく其處に出かけて行つたものだが、ある日若い同僚の一人に、『荒木さん、好いところを見附けましたな。』と何氣なく言はれたのを氣にして、正直なかれは、それから成べく其處に行かぬことにした。

町から士族屋敷の方へ行く處には、もと大手の門のあつた跡があつて、土手と壕とがつゞいてゐたのであるが、それが今ではすつかり平らにされて、城址の公園の方へ行く大きな街道が開通せられ、その一部には町家が軒を並べて、奥に、大きな活動寫眞館が建てられた。初めかれはその近所にある旅館に下宿した。青い菜の畑、娘達の赤い襷の常に見える桔槹の井戸流し、野から無造作に引抜いて來た殺風景な庭の松、さういふものを見ながらかれは毎日暮した。夜は活動の辯士の聲が賑かに手に取るやうにそこから聞えた。何うかすると、かれはひとりで活動に出かけて行つたりした。時には中で同僚の一人に邂逅して、翌日、社で、『荒木さん位になつても、矢張、活動は面白いもんですかね。』などと言はれた。

沼のほとりにある名高い躑躅の花の咲く頃には、それを見に來る東京の客が汽車の着く度にぞろ〳〵と下りた。派手なコートや、帶や、綺麗に結つた髮や、二人づれの雪駄や、二枚草履や、春の日に光る蝙蝠傘などが絶えず續いた。さういふ人達は、停車場から町を通り越して、晴々とした田圃に出て、沼

た。かれの住んでゐた家も矢張畑になつてゐた。初午の夜に、餓鬼大將になつて、自分が太鼓を叩いた小さな稻荷の宮はまだ殘つてゐたけれど、裏の林は切られ、近所の家は壞され、あたりがすつかり畑になつて了つてゐるので、それがその社だとはちよつと思はれなかつた。士族の去つたあとには、百姓か、でなければ市日毎に織物を町に持ち出す機屋などが來て住んでゐた。秋の晴れた日には、唐箕からもみ殼が飛んだり、すくもがぶす〳〵燻つて燃えてゐたり、機屋の物干に紺糸や茶糸がかけて干されてあつたりした。

ある家では、かれの懇意な肥つた妻が死んで、其時分近所に圍はれてあつた妾が本妻に直されてゐた。その時分、若くつて綺麗であつた妾も、もう好加減のお婆さんになつて、『もう私もこんなになつたんですよ。』などと言つてゐた。

時の間に過ぎ去つて了つた過去がかれには不思議に思はれた。夢中で、うはの空で、一日づつ積み上げた月日が、かうした隔りを築かうとは思はなかつた。しかし、かれはそんなことに心を惱ましてはゐなかつた。人間て面白いもんだなどと考へた。

唯一人殘つてゐた女の同級生をその士族屋敷の荒れた小さな家に發見した時には、かれは昔の少年時代に歸つたやうな態度で半日話した。女は亭主に死なれて、娘と息子とをかゝへて、賃仕事や糸繰などをして其日を送つてゐた。息子は町の小學校の教員をしてゐた。娘は頰の赤い肥つた大きな女であつた。

い時分には、二十代だつたがな。』
『早いもんさね。』
荒木はかう言つて、『妹さんがあつたけな、何つて言つたけな、百合さん、あれは何うしなすつた。』
『あれは遠方に行きましたよ。大阪の先の何とかいふ處ですよ。あれも、困り者でさ、亭主がわりいもんだから、一生、碌な眼も見ずに終るのさ。子供かな。子供は五六人もあるよな。』
『さうかえ、百合さんが――。まだ若くつて綺麗だつたが――。』荒木はこんなことを言つて口を噤んで考へた。その百合といふ子は荒木と同級生であつた。お烟草盆に結つて、赤い鹿の子などをかけてゐた。

これに限らず、荒木の昔を知つてゐる家では、皆なめづらしがつて彼を迎へた。大抵は息子が小學校の教員をしてゐるか、でなければ金貸をしてゐるか、でなければ地面や家作で生計を立てゝゐるやうな人達が多かつた。ある家では、八十先になる婆さんがまだ生きてゐて、『まあ縫助さんかえ？　よく來て呉れた。』などと言つて奥から腰を曲げて出て來た。ある後家さんは、堅い養子を貰ひ當てゝ家の周圍なども綺麗にしてゐた。近所の貧しい人ばかりなのに似合はず、自分の住む離座敷を新たに造つてなどゐた。

しかし、さういふ人達も多くはなかつた。荒木は昔の士族屋敷の半ば麥畑桑畑になつてゐるのを見

『はア、此處かね。』荒木は感嘆したやうに言つて、『ぢや、稲荷さんも昔のところとは違ふところへ持つて行つたんだな。』

『さうでがんすとも、……元は此處んところにあつたんさ。』

老農はその前の處を指し示した。

『道理で、見當が丸でつかなかつた。』荒木はかう言つてまた長い間其處に立盡した。

ある家の前に出てゐた六十位の婆さんが、何處かで見たやうな顏だと思つて、立留つて見たが、思ひ出せないので、二三歩歩き出して、漸く思ひついて、又引返して、

『杉山さんでしたね。』

聲をかけられて怪訝さうに見てゐた婆さんは、『まア、縫助さんけえ？ めづらしい。まア。製粉に來てゐるとは聞いて知つてゐたけれど、まあ、まあ。丸でわからねえな。途中で逢つたつてわかりやしねえ。まア、上んなされ、茶でも一杯。』かう言つて無理やりに引張り上げられた。縫助といふ幼い頃の名を呼ばれたのも荒木にはなつかしかつた。

『まあ、白くなつたなア、いくつだな、縫助さん。』

『九。』

『四十と、さうかな、私なんかも年を取るわけだな。もう六十と五だからな。まだ、縫助さんが小さ

あまりあたりの樣子が變つてゐるので、そこで行逢つた人に訊くと、

『すぐ其處です。』

成程少し行くと、新しい小さな社が見えた。しかしそれが何うしてもあの古い、大きな、屋根の破れた、壁に蛇などのゐた昔の稻荷の宮とは何うしても思はれなかつた。かれは不思議な心持がしながら歩いた。

裏に廻つて、先づ神木のあつたあたりをそれかこれかとさがして見た。しかし、一面に綺麗な麥の畑になつてゐて、それらしい跡は何處にも見當らなかつた。その時分よく筍を採りに來た眞竹の藪のあたりもすつかり畑になつてゐた。

かれはぽつねんと立盡した。

暫くしてから、畑に老いた百姓がゐるのを見て、かれは聲をかけた。

『つかんことをきくがね。こゝらに神木があつた筈だがね。枯れて切られたのは知つてゐるけれど、一體、何處等にあつたんだね。』

老いた百姓は耳が遠かつた。二三度繰返して、漸く分つて、默つて歩いて出て來たが、十五六間歩いてから、

『此處ですよ、あつたな。根も何も掘つてかへして了つたから、今ぢやわかんねえがね。』

ると、其處等に散歩してゐる人達は、製粉の半老いた會計係が、ひまさうな顏をして、沼の縁の日當りのところに行つて、默つて沼の方を眺めてゐるのを見ることなどもあつた。

沼も昔とは全く趣を變へてゐた。岸まで一面に深く茂つた蘆荻などはもう見られなかつた。水の上に新しく出たがつ藻の芽、ひよつくり浮んでそして沈むむぐり、櫂で輕くあやつつて行く小さな舟、それには依然として昔の面影が殘つてゐて、心を遠く少年時代に誘つて行くけれども、ちよつと見れば、これが昔のあの沼かと疑はれる位であつた。沼の向うにある名高い躑躅を見に行く舟には、都會からやつて來た若い男や綺麗な女などが乘つてゐた。時には藝者の乘つてゐる舟なども通つた。躑躅のある公園では、赤い旗や赤い提灯などが美しく春風に吹かれてゐた。

ある日曜に、荒木は城址の方に出かけて行つたが、ふと其處に城に緣故のある名高い稻荷があつて、その傍に大きな樫の神木があつたことを思ひ出した。かれの頭には其時分住んでゐた自分の宅の窓から、いつも夕日の金色の中に黑く鮮かに見えてゐたその大きな木が思ひ出されてゐた。その大きな木の梢から日が暮れて行くやうにさへかれには思はれてゐた。

その樫の木がとうに切られて了つたことはかれは知つてゐた。しかし根位は掘かへしたにしてもいくらかは殘つてゐるだらうと思つた。かれは、中學校の裏を通つて、其方の方へと行つて見た。

『稻荷さんは、此の近所でしたね。』

た。妻の方は若いから、逢ふのを樂みにして、力にしてゐるやうなところもあるが、心臟に病氣のあるかれは、成るべくならばぢつとしてひとりで靜かに寢てゐたいと思つた。妻の要求を滿足させずに歸つて來る朝の機嫌のわるい顏を見るのも餘り好い心持はしなかつた。それに別に歸つて行かなければならない用事もなかつた。

今度にかぎらず、かれは時々休日を此方で暮した。その時には、かれはきまつて、あちこちを歩いたり昔の知つてゐる人を訪ねたり沼の畔に行つてぽつねんとしてゐたりした。沼の畔には今度大きな工場が出來るので、大勢人足や大工や車馬が往來した。昔は荒地であつた城址、草藪であつた城址、草や木のこんもり茂つた中に物凄く殘壕の水が黑く光つて見えてゐた城址、それがこんなに開けやうとは彼は思はなかつた。かれの大きくなる時分には、農に歸した士族の一家族が僅かにその處々を開墾したばかりで、蛇だの蝮だの狐だのが多くそこに住んでゐた。殘つた石壘の傍を通ると、蜥蜴のわるく日に光つた影が物凄く石と石との間に隱れて行つたりした。それが何といふ變遷だらう。明るい派手な公園が出來たり、外國にでも見るやうなハイカラな養牛場が出來たり、今度はまた百萬圓以上の大きなモスリンの工場が出來やうとしたりしてゐた。本丸と三の丸の境の壕も埋められ土手も平らにされ、もとは其處からは見えなかつた沼が、公園に行きさへすると、すぐ一目に見渡されるやうになつた。公園には松などが手際よく配置されて、自分の敎はつた先生の碑や、元の藩侯の頌德の碑などが立つてゐた。何うかす

『何う致しまして――。』

外交係はこんなことを言つて、そこにかけてある帽子を取つて、威勢よく靴を鳴して外へ出て行つた。

荒木は話にも飽きて、持つて來た講談本を讀んで見たが、それも面白くないので、事務室を出て、トロコの縱横に通つてゐるところを通つて、工場の方へと行つた。そこでは大きな構への內に、エンジンが凄じく活動して、何十本と知れない麥を舂く杵が絕えず盛に動いてゐた。大きな篩からは白い粉が雪のやうに落ちてゐた。職工長は職工の働いてゐる間をぶら〳〵と手を後に組んで步いてゐた。

『これはアメリカのですか？』

『え。』

『何うしてもあつちのが好いかね。』

『さうですな。』

などと職工長は好加減に挨拶した。荒木は杵の盛に動くところに行つて、默つて立つて長い間見てゐた。

次の土曜日曜には、荒木は此方にゐることにした。東京に歸つて見ても、別に面白いこともなかつ

用がないと、若い人達はこんなことを言つて笑つた。
『君方はまたそんな話をしてるね。』
『荒木さんなんか、さういふことを澤山して來たんでせうね。』
『馬鹿言ひ給へ、僕なんか、さういふ方にかけてはごくうぶなもんさ。』
『何うだか――。』事務員は笑つて、『堺屋に下宿してゐた時分は困つたッて言つたぢやありませんか。』
『さうさ、あゝ見せつけられちや困るよ。毎晩騷ぎやがるんだから。キヤツキヤツて言つて、夜はまるで寢られないんだもの。』
『あそこは、そんなにひどいかな。』
『あそこのことなら、荒木さんに聞くにかぎるよ。』
ふと電話が鳴つた。立つて行つた外交係は、やがて戻つて來て、『さア、それぢや、一つ出かけるかな。』
『もう來たのかえ。』
『うん。』
『外交係なんて好いもんだな。』荒木は莞爾しながら、『これから一杯飮めるんだね。社の金で三味線の音が聞かれるんだね。旨いもんだな。』

『さうですかね。』わざと笑つて、『でも、荒木さんの奥さんは若いから。』曾て一度連れて來たことのある妻を、この事務員だけは、途中で逢つてよく知つてゐた。

『何うして子供が出來ないんでせうね。』

『種がわるいのさ。』

『そんなわけはないがな。』かう言つて、毎年子供の生れるので困つてゐる松田といふ事務員の方を向いて、『松田君のやうなのもあるからな。』

『松田君は別ですよ。』

色の白い外交係はニヤ〳〵笑ひながら言つた。松田は四角な丸いものを貰つて來て、始終それをつかつてゐるけれど、何うしても出來るなどと言つて笑ひながら話した。『あれを貰ふだけでも大變だから、洗つて干してつかふんですがね。ぢき駄目になつて了ふもんですな。弱いもんですな。』

『何度位つかへるえ、君。』

『なアに、二三度位のもんですよ、精々。それに變でね。干して置くのが――。』

『これは何だえなんて、子供が聞いて困つたなんて言ふ話はよくあるぢやありませんか。』

『さう言へば、あるところで、子供がそれを面白がつて、口に當てゝふくらましてゐるところを親が見附けたといふ話があるぢやありませんか。』

の方へつけて置いて呉れ給へ。』かう言つて置いて、今度は若い外交係の方に向いて、『君、吉田屋の方に電話をかけて置いて呉れ給へ。それから、杉山君、小使に言つてね、あの客間を掃除して置けつて言つて置いて呉れ給へ。』

客間は和洋折衷の立派な一間で、そこには社に來る得意の客を歓待する準備が完全に出來てゐた。隣の副室には長火鉢などもあれば、押入の中には絹布の蒲團なども二組三組揃つて入つてゐた。粉を買ひに來る得意の客は、時にはそこに二日も三日も泊つて行くやうなことがあつた。社では、そこで製造する上等の粉で饂飩を打つて置いて、客に御馳走したりした。事務員などもよくそれを食つた。

荒木は一服煙草を旨さうに吸つて、それから理事の命じた金を自分の大きな帳簿へと書き加へた。

若い氣の置けない事務員は種々なことを言つて、荒木にからかつた。

『荒木さん。』

かう事あり氣に呼んで置いて、わざと間を長く置いて、『今度も、奥さんの顔を見に歸るんですか。』

『女房の顔なんか見たい年でもないよ。』

『そんなことはないでせう。一週間逢はずにゐると、隨分待遠しくなるでせう？』

『そんなことがあるもんかね。』

『昔のまゝだ。』

かう言つて聞かせても、その自分の追憶を心からわかつて聞いて呉れる人のゐないのを荒木は淋しく思つた。

かれは天神の境内から、大きな寺の門の見える傍を掠めて、昔は畑と土手であつた大きな停車場前の通りに出て、それから停車場の方へと入つて行つた。停車場のレールを隔てゝ、かれの勤めてゐる大きな會社の白いペンキ塗の建物が見えてゐた。

丁度下りの汽車が來てゐるので、ちよつと待つて、それが靜かに出て行くのを見送つてから、レールを横切つて、近路をして、裏門からかれは會社の方へ入つて行つた。エンジンはもう盛に動いて、粉の袋を運ぶトロコは社内を縱横に活動してゐた。若い同僚が其處にゐたのを見つけて、

『今朝は早いね。』

『早いどころか、もう理事が來てるよ。』

『さうか、それは大變だ。』

こんなことを戯談半分に言つて、荒木は靜かに向うの事務室へと入つて行つた。事務室には、もう若い理事がちやんと來てゐて、荒木の出て來るのを待つてゐた。机につくと、理事はすぐ大きな帳簿を持つて來て、『君、これを今日出すんだからつけて置いて呉れたまへ。午後に來るんだ。客が――。交際費

時にうんとふん張らなかつたから。同輩で成功したものは皆なえらくなつてゐますからな。』かういふことを平氣で口に出してゐるが、しかしひとりでゐる時には、徒らにうかうかと樂に過して來た年月が惜しかつた。『あいつは少將になりやがつた……。一緒にゐた時分には、そんなに出來た男ぢやなかつたがな。』などと二三年前までは、新聞を見て殘念さうに妻に言つたことなどもあつた。しかし、今ではもうさういふ心も銷磨し盡して了つた。何んな人間でも矢張同じ人間だといふあきらめもついて來た。

『今日は木曜日、明日、明後日は土曜日だ。今度は歸らうかしら。この前の日曜に歸つたばかりだから、今度は此方にゐやうかな。』などと考へながらかれは歩いた。

野にはもう秋が來てゐた。空は澄んで、天末を劃つた山々は碧く美しく見えた。荒木は此間の日曜に若い同僚に誘はれて、町から遠くない松林に初茸狩に行つたことなどを思ひ出してゐた。路端に熟していがの落ちてゐる栗の實、赤い實のチラ〳〵交つてゐる草藪、薄や萱の雜つてゐる榧木の林、松林を通して來る秋の靜かな日影、子供達の目白のおとりに出してゐる鳥籠、林の中に一ところ開墾してある農園、さういふものは、昔かれが少年時代に見たものと少しも變つてゐなかつた。昔澤山取つた覺えのある松林は大きく背が高くなつてゐるが、矢張その近所の小松原には初茸が澤山出てゐた。『こゝは昔から出るところなんだよ。』荒木はこんなことを言つて、自分の籠を同僚に見せたりした。ある農家では水を貰つて飲んだ。

ふ光景が長い間の月日と絡み合ひ縺れ合つて、かれの頭に見えたり消えたりした。『あそこにもう少し辛抱してゐれば好かつたんだ。それも、家にいくらかの財産があつた爲めに、何アに、そんなに無理をしなくつても好いッて妻も言ふし、體も弱かつたもんだから。』こんなことを考へながら、かれは歩いた。『しかし、今の會社もかれには居心がわるくはなかつた。去年の秋頃、同鄕の先輩が、『何うだ、荒木、唯遊んでゐても仕方がなけりや、國の製粉に行つて見ないか。あそこなら知つてゐるものばかりだから樂だよ。』かう言つて勸めて呉れた。製粉會社の專務取締役や支配人などもかれはよく知つてゐた。專務はかれよりも若い男で、町の金持の息子で、大學を卒業して、洋行などもして來てゐた。それに、町出身の高等商業出の若い理事などもゐた。かれは其處に來て、客分のやうな位置に据ゑられたことを考へた。月給も安かつた。『まア、君なんか、不自由してゐないんだから、遊ぶつもりで來て貰ふんだから、これで我慢して呉れたまへ。その中に何うかしますよ。』專務はこんなことを言つて笑つた。その時荒木は、『でも、ね、家を東京に置いて置くんだからね。土曜日曜に歸る旅費も要るからね。それに、下宿してゐなくつちやならんし。』などと言つた。荒木に取つては、客分にされて、勝手なことを言つて、氣の置けない連中の中に勤めてゐるのは好いけれど、それでも、雇はれるといふ段になれば、大きな顏をして、君僕といふ關係ではゐられなかつた。いくら若い男でも、いくら自分より後輩でも、理事は理事、專務は專務として立てゝ置かなければならなかつた。『僕なんか駄目ですよ。意氣地がないんだから……。若い

町の要路に立つて、勢力の中心になつてゐるものは、皆な自分よりは後輩で、年が十も十五も違つてゐた。鼻垂らしの、やんちやの、いけない餓鬼などと思つてゐた子供が、立派な中年の旦那になつて、角帶をしめてやはらか物などを着て、大きな店に坐つてゐた。かと思ふと、日露戰爭時代に其處等で多く出來る麥の一手買占をやつて、時の間に巨萬の富豪になつた男は、町で名高い、若い綺麗な藝者を圍つて、それを天神の境内に置いた。かれは毎朝會社に通勤する途中に、その捷路を拔けて通つて行くので、何うかすると、そのぞろりとしたどてら姿に邂逅することなどもあつた。櫺子格子のしやれた窓には朝日が晴やかにさしてゐた。

かれはてくてくと歩いて行つた。かれは東京に置いてある妻と妻の母のことなどを考へた。無意味に夢のやうに過ぎ去つた月日、それをもかれはをりをり頭に浮べた。軍人志願者の豫備校の生徒としてのかれ、漢文や漢詩が旨かつたと言つてほめられた時代のかれ、その豫備校の近くにある寺の一間を借りてひとりで自炊してゐたかれ、兄から月々の手當が來る度に、こつそりとその寺の裏から拔けて、細い路を通つて、人知れず明るい灯の遊廓に通つた時分のかれ、それから暫く經つてある役所の雇から同鄕の先輩のひきで段々屬官になつて行つたかれ、今の妻と妻の母とが小金を持つてさびしい暮しをしてゐるところに段々昵近になつて、終には信用されて遂にその家の入聟になつて行つたかれ、役所をやめて、鐵道の方に入つて、會計の一部を擔當して、時には巨萬の金を此方から彼方へ持つて行つたかれ――さうい

日曜日の遠足

青田に面した中二階の一間で眼をさまして、明るい朝日の光線の漲つた中で朝飯を濟して、新聞をザッと讀んで、それから荒木は靜かに出勤の支度に取懸つた。スコッチの脊廣に埃のついた古びた鼠色の中折の帽子と銀の鎖のついた銀側の時計と、それから何うかすると、机の上に置いた講談本などを風呂敷に包んだ。『何うせ、今日もひまだらう。これでも讀んでやれ。』などとかれは思つた。

荒木はもう四十五六になつてゐた。まだ爺さんと言はれるほどではないが、老年が人よりも一倍早く身に迫つて來てゐるやうなのを感じた。髮ももう半ばは白くなつた。鬚も白くなつた。額の皺なども多くなつた。掌の皮膚などもガサガサした。心や氣は昔のまゝで、自分ではまだ若いと思つてゐるのに、いつの間にか老年は自分の周圍に迫つて押寄せて來てゐた。『何うせ、もう爺だよ。』などと元氣に笑つてゐるけれど、机を並べた青年から荒木老人などと言はれると、餘り好い心持はしなかつた。

それも道理だ。自分の周圍には、もう自分等の時代の同じ年輩のものは數へるほどしかゐなかつた。

その夜は驚くほど美しく空が冴えてゐた。丘の上の松も黒くこんもりとして見えた。夥しく澄んだ天上には、星は硝子か何ぞのやうにピカ／＼した。

街道に添つた村には灯も見えなかつた。九時を少しすぎた頃、上りの終列車は、天上の美しい光景に氣兼ねでもするやうに、又は人間の誇りとした力の弱小なのを耻ぢ且つ嘆くやうに、静かな微かな響きを立てゝ通つて行つた。

婆さんはかう言つて話した。お貞の逃げて行つた時分と比べては、新しい三階なども出來、客も東京から大勢來るやうになつたことなどをも話した。

墓場は山の上にあつた。果してその近所は殘雪の泥濘が深かつた。拾ふやうにして歩いても、お貞の下駄と足袋は汚れた。二人は辛うじて其處まで上つた。

墓場には麗らかな日が當つてゐた。新佛の墓の周圍には造花や放鳥の籠の雨に打たれたのがまだ置いてあつて、ついさつき誰かゞお詣りしたらしい線香がまだ二分ほど殘つてさびしい烟を立てゝゐた。父と母との墓に向つたお貞は流石に泣き崩折れずには居られなかつた。山樒をさして、線香を手向けて、長い間其處に蹲踞んで手を合せてゐたお貞が再び立つて此方に來た時には眼は赤く泣腫されてゐた。

歸りには、お貞は山から別な路を少し下りて、自分の大きくなつたなつかしい白堊の土藏や離座敷やその裏につゞいた桐畑や、坂に沿つた昔風の塀などを見た。向うの遠い山には、例の大きな松が依然として晴れた日影の中に黑く聳えてゐるのが見えた。

その夜、溫泉宿の離れでは、遲くまで供養の鉦の音がきこえてゐた。カン、カンと靜かに叩く音につれて、悲しい御詠歌の調子が流れるやうにあたりに漂つた。それは丁度この大きな宇宙に無限に調和して行つた人達を讃美するやうに思はれた。カン、カン――鉦の音は靜かに續いた。

お貞は思ひ切つた中年の女のやうな口振で言つて、『それでも、秀は來るかえ。』

『今日は來るだんべいと思ふんだが――。』

『もう何人子持だえ？』

『三人だんべい。中つせいは可愛い男の兒だつし。』

お貞は何も土產を買つて來ないからと言つて、婆さんに一圓、嫁に一圓包んでやつたりした。やがて三十分ほど經つた頃には、そこから殘雪の楢林の中の細い坂路を二人は一緒に上つて行つてゐた。婆さんは手に線香と山樒とを持つて先に立つた。

『墓場のところは路がわるかんべと思ふんだが。』

『何アに、好いよ。』

『でも、その下駄がだいなしだんべ。』

『何アに構はない。』

林が盡きると、路は丘の開けた背のやうなところに出た。そこからはさびしい溫泉宿の新築の三階や母屋や白壁の土藏や此方に出てゐる離座敷などが一目に見下された。浴槽のあるあたりの烟突からは、薄白い烟が碧い空に眞直に上つてゐた。

『あの離れで、大旦那さ亡くならつしやつた。』

お貞は婆さんの眼から涙の流れるのを見て、自分も堪らなくなつて眼を押へた。お貞は勘當を許されることを願つてもゐなければ、兄や親類にも逢はうとも思つてはゐなかつた。お貞は今では、長い間の辛酸を甞めつくして、何うやらかうやら立派に獨立の出來る身となつてゐた。一緒に逃げた男とはとうに離れて了つたけれど、それから大勢の男の世話にもなつたけれど、今では家に抱妓の二人も置いて、立派な手賴になる旦那も出來て、再び田舍に歸つて來ようなどとは思つてゐなかつた。

『お母さまの時もなア。』

かう言つて婆さんは泣いた。

『いゝえね、お墓詣だけでもしたいと思つてね、兄もあゝいふ兄だから、知らせて吳れないのは仕方がないけれど、お袋も親爺も死んで、お墓詣もしないつて言つちや、佛さまに濟まないから……。え、何うして知つたつて言ふの？　藤が手紙を吳れたよ、それでも……。』

『藤ちやんがやつたかな、それでもよくやつて吳れたな。』

『それで、ね、今日は四十九日でせう。だから、別の日にしようかと思つたんだけれど、なアに構ふことァない。お婆さんに賴んで、裏からソッとお墓まゐりだけでもして來ようと思つてね。なアに、ねえ、もううちのあとのことなんか何うでも好いのよ。詫なんか言つて入れてもらはなくつても好いんですよ。』

その間に十二三年の月日は經つてゐた。しかし街道に沿つた村にはいくらも變遷のないのを女は見た。半鐘臺、汚ない百姓家、郵便箱をかけた家……あそこは、自分の友達のおてるといふ娘のゐた家だ……。あそこは津島といふきかない男の兒のゐた家だ……。やがて長岡へのまがり道……道……橋……社……。

婆さんはその車の段々と此方に近寄つて來るのを見た『東京から溫泉へのお客さんが來たさうな。』かう思つて自分の仕事の方に心と眼とを集めたが、再び見た時には、車はもうすぐ近くに來てゐた。其處には若い綺麗な女の客……ふと、はつと思つた婆さんは思はず立上つた。

『まあ、お貞やん。』

かう言つて婆さんは寄つて來た。婆さんは此間から此のお貞の話を度々した。溫泉場の總領娘で、今の若旦那のすぐの妹になつてゐる。お貞は十八の時に、身が持てないで、親から勘當されて、行方不明になつてゐた。今度大旦那が死んだのについてもお貞やんは何處に何うしてゐるだらうと婆さんは折々思ひ出しては涙を流した。家ではお貞の今の生活を知つてゐるらしかつたが、兄も親類もそこに知らせてやらうともせず、婆さんの他には此際問題にもならずに葬式もすんで了つた。

『今度はなア、飛んでもねえこんでな。』

かう言つて婆さんは、『まア、まア、そこぢや話が出來ねえから。』と言つてお貞を無理やりに座敷に請じた。お貞は帶の間から小さな財布を出して車夫に拂つた。

囀つてゐた。

さつき通つた村の人に、

『穩かで結構でやす。』

などとその婆さんは挨拶した。

ふと向うに車の音が靜かに聞えた。婆さんは手を留めて、やゝ低く見晴しになつてゐる下の方を見た。車が一臺午前の晴れた日影を受けて、靜かに此方に上つて來るのが見えた。

その車の上の客は例のさびしい停車場で下りて、若い改札の手に東京からの切符を渡して、そしてその前のところで長岡までの車を命じた。それは三十二三の女で、容色はもう衰へてゐたが、昔ははなやかであつたといふ匂ひがまだ、眉や額のあたりにそれとなく殘つてゐた。派手な縞のコートを着て、髮を銀杏返に結つて、鼻緒の細い吾妻下駄を穿いてゐた。襟には縫ひのしたのをかけて、着物はお召か何かを着てゐた。

成たけ人に顏を見られないやうにして、あたりに氣をかねてゐるらしい女客は、車を持つて來た車夫が知つてゐる顏でないのに先づ安心したといふ風で、そのまゝ車に乘つて『長岡』と低い聲で唯一言命じた。

こんなところに停車場が出來ようとは思ひもかけなかつた。こんなところにかうした茶店が出來ようとも思ひもかけなかつた。女は供養塔のところに行つて初めて昔の記憶が明かに蘇つて來るのを見た。

了つた。選擧の話や、米の話がまた車内を賑やかにした。
汽車は野を越えて、例の街道に添つた村から、次の停車場の方へと行つた。そこでは、驛長が若い助役と二人プラットホームに立つて入つて來る汽車を迎へた。山の雪はキラキラと日に光つてゐた。
車掌は、もう其話を忘れて了つてゐた。驛長にも助役にも何も話さうともしなかつた。丸いもの丶受渡しがあると、汽車はすぐ發車した。

街道に添つた村から溫泉の方へ行く路は、小さな社のあるところから、段々山の裾の方へと上つて行くやうになつてゐた。斜坂になつた楢林の下には、雪が白く殘つて、篠の葉がガサガサと靜かに音を立て丶ゐた。
一方には松山が續いてゐた。
路は薄い氷の張つた小川を渡つたり、林の陰の泥濘を横切つたりして、萱の枯れてマッチをすればすぐに燃え出すばかりに思はれる藪の傍を掠めて、爪先上りに上へ上へと登つて行つた。
これを行くと、一町ほどで溫泉場の入口の池のところへ出て行くのであるが、その曲り角に一軒小さな汚ない百姓家があつて、そこでは、日向で六十近い婆さんがせつせと糸を紡いでゐた。家の前の廣場は、霜解にぐちやぐちやして、井戸端の傍に青苔の生えた石などが置いてあつた。雀は靜かに低い軒に

に飛込みやがつた。夜なら、とても駄目なんだが、晝間だつたから助かつた。それに、好いことには、此處は交換になつてるから、いくらか速力が加減してあつたもんだから、それで助かつた。本當に吃驚させやがる。』車掌はその驚愕がまだ靜まらないやうな興奮した顏色をして話した。

汽車が踏切を越えて少し行つた頃、窓から外を見た人達は、其處に古い汚れた綿フランネルで頭を包んで、厚ぼつたいどてらの老いた百姓が、毬のやうになつて、片足を引きながら、助役や改札に押されるやうにして歩いてゐるのを見た。

『何だ。醉つてるんぢやねえか。』

『いや、醉つちやゐませんよ。正氣ですよ。眞靑な顏をしてゐましたよ。』まだ此處に立つてゐる車掌は言つた。

『それはなア、レールに横になるんぢや、眞靑にもなるべいよ。……なア、車掌さん。それで助かつた時には罰があるんだらう。』

『懲役一年でさ。ちやんと鐵道規則に書いてありますから。』

『馬鹿だなア。』

かういふ言葉が其處からも此處からも起つた。しかし、老いた身をレールに横へようとまでした百姓に對する同情の言葉は誰の口からも出なかつた。汽車の進むにつれて、人達はすぐその小悲劇を忘れて

ある日の午前十時頃であつた。その驛に入つて來ようとする下りの汽車は、ふいと非常汽笛を鳴して停車した。薄い青い烟が殘雪の白い野に橫折れて靡いた。

汽車の窓からは、いろ〳〵な顏が出て、彼方此方を見廻した。『何うした、何うした。』などと言ふものもあれば、『誰か轢いたか。』などと言つてゐるものもあつた。『しかし、晝日中、レールに飛込む奴があるかな。』室の隅にゐた田舍紳士の男はかう言つて笑つた。

『何だ、爺さんだ？』

『轢かれたのか。』

『別嬪か何かなら、話の種にもなるが、爺さんぢやなア。』

こんなことを言ふかと思ふと、一方ではそんなことは何でもないといふやうに、頻りに米の値の安くつて困る話などしてゐる中年の男などもあつた。

見ると雪の白く殘つた桑畑の向うの路に、それと聞いて、急いで見に出て來た女達が三人も四人も並んで立つてゐた。赤いモスリンの前垂や半ば壞れかけた島田髷などもその中に雜つてゐた。

汽車が靜かに動き出す時分に若い車掌は入つて來た。

『何うした？』

『吃驚させやがつた。なアに、六十位の爺さんだがね、汽車がそこの踏切にかゝらうとすると、不意

の方ですけれど、湯の多いのは向うですな。向うの旦那、いや、今の若い旦那ぢやありませんが、年を取つた方の旦那、その旦那のお蔭で、鑛泉の脈を堀り當てゝ、澤山出るやうになりましたから……。しかし、な、壽命にはかなひませんや、何でも、はア、その大旦那も大分わりいつて言ふこつてす。何でも先々月あたりから、どつと床についたまゝなんだが……今度は、はア助かりさうもねえつていふこつた。好い旦那さんだツたがな。』客の訊きもしないことを、大きなめづらしい事件でもあるやうに車夫は話した。

『それや若旦那さんもしつかりしてまさア、新しい三階が出來たのも皆な若旦那の指圖ですから……』

『でも湯が汚なくつて困るね。』

客がかう言ふと、

『汚ねえどころか。長岡は綺麗だ。私は、長岡のもんだから、さう言ふんぢやねえが、改築になつてから、それや綺麗になつた。石のたゝきだアで。』

車夫はこんなことを話しながら、林に傍つた殘雪の泥濘の中を靜かに街道に添つて供養塔の方へと進んで行つた。林の下の篠原は靜かに音を立てゝゐた。

この停車場の一つ手前の停車場は、上りと下りとの交換驛になつてゐた。それは矢張平野の中にぽつり建てられたやうな停車場で、桑畑の向うには、新しく出來た茶店の二階などが見えてゐた。

何うかすると、町の方へ出て行く田舍娘が色の黑い顏に眞白い白粉をつけて、モスリンの派手な帶をしめて、寒さうに待合室の中に立つてゐることなどもあつた。そこの壁には、鐵道の沿線の名勝地を指點した地圖や、大きな寺で行はれる儀式の廣告や、團隊旅行のビラなどが、時間表や鐵道規則などの間に雜つて下げられてあつた。

Booking office の中には朝日が朗らかに透つてゐた。

待合室の外から少し小高くなつて、倉庫があつて、そこには藁包や箱包や薪や米俵などがかなり一杯に積まれてゐるが、それを隔てゝ向うに美しい山の雪の輝きが見えた、碧い空をくつきりと劃つた山のさびしさが嚴かに人間に臨んでゐた。

時に雪が野までやつて來ることなどもあつた。見るが中に、ひろい野は一面に眞白になつて行つた。さういふ日には乘る客も下りる客もなく、汽車は唯停つてそして唯出て行つた。

それでも汽車の開通につれて、今まで近在のものしか知らなかつた山合の溫泉場へも、都の客が段々多く來るやうになつてゐた。『車が一臺や二臺はなくつては困るよ。』かう驛長や若い助役に勸められて、兩方の溫泉場から一人づつ挽子がやつて來てゐることゝなつた。泥濘にまみれた車はさびしさうに右側の茶屋の前に置かれた。

車夫は客を乘せながら話した。『何方ッて言つて別に效目にはちがひはありませんな。賑かなのは此方

までに停車場に歸つてゐないことなどもあつた。絶えず莞爾して、停車場の茶屋の店に行つて、微塵棒を箱から取つて食つたり、子守や娘達を捉へてからかつたりなどした。『改札さんっ改札さん。』と言つて女子供は絶えずこの周圍に寄集つた。

六十近い小使は唯默々としてゐた。朝はきまつて暖爐に焚く石炭を大きなバケツに入れて、それを十能でがらがらとしやくつた。近所の大百姓の次男息子であつたのが、段々落魄して、老後をかういふところに過さなければならなくなつたといふことは、自分の口からはつひぞ話したことがなかつたけれど、驛長も助役も改札も皆よくそれを知つてゐた。晝近くなると、かれは大きな藥罐に湯を沸して、茶を淹れて、それを驛長の卓の上に持つて行つた。丁度その時分上りの三番がやつて來た。

明るい停車場には客のための大きな四角の火鉢が置いてあつた。そこには、何うかすると、火が活々と起きてゐることもあるが、大抵は堅炭が消えてごろ〱してゐた。寒い野をやつて來た百姓達は、いつもいきなり其處に行つて火をかき起して見るのが例になつてゐるが、とても起きさうもないのを見ると、その儘、懷手をして、立つて彼方此方と歩き出した。

『まだ、一時間あるなア。』

かう絶望的に言つて、入口の方へと出て行つた。

のことが書いてありますよ」ト者の言つたやうに、フッと若い叔母が訪ねて來る話があるんですがね。

……本當にロシアの廣い野を思はせるやうな停車場ですね。あ、それから、」と、思ひ出すやうにして、『それからザイチエフといふ新しい作家があるんですがね。その中に「客」といふ短篇がありますよ。曠野の中で突然客が來るといふ話ですがね。實際、何とも言はれない。廣い宇宙だ。光榮ある天上界だ。人間に比べて何といふ賑かさを持つてゐるでせう。「一切の物は燒き盡さるゝであらう。凡て生の醜は燒き拂はれるであらう。貴方の所では一切の物が亡びるであらう。」ッて言ふ言葉がありますがね。ゝなど、外に出て空を仰ぐと、本當にさういふ氣がせずには居られませんね。』

しかし若い助役にはさういふ心持はよくわからなかつた。何うしてそんなことを考へるのだらうと思つた。ニコライにゐたのでさういふ心持が起るのだらうとも考へた。若い助役には星や月や空は唯綺麗な立派なものとしか映らなかつた。人生は唯樂しい希望の多い樂園のやうに思はれた。丈夫な體には若々しい血が漲るやうに流れて、その前途にははなやかな幻影が美しい色彩を彩どつてゐた。

『奥さんはあんなにやさしいいし、子供はあんなに可愛いいし、生計には不自由なこともないのに、何一つ不足といふものがないのに、驛長さんは何故あんなことを考へるのだらう。』若い助役はをり〱こんなことを頭に浮べた。

これに引かへて、若い改札はよく溫泉の方へ出かけて行つては夜を更した。何うかすると、朝の一番

『いや、もう駄目ですよ、妻や子があつちや……。本當にさびしい。夜など、心からさびしいと思ふことがありますよ。外に出て見ると、風の音ばかり。それも平野だから木や林や家屋に當ることがないから音だつて都の風の音とは違ひますからね。そして空を仰ぐと星ばかりが天上界の賑かさを見よといはぬばかりにかがやいてゐるぢやありませんか。昨夜もつくづく人間といふものが小さく弱く思はれて仕方がありませんでした。何の爲めに人間は生きてゐるんでせう。この大きい宇宙の中から見れば、人間なんか言ふに足りないぢやありませんか。五十年經てば、私なんかもう生きてゐるたくつたつて、生きてゐられないのだ。それから思ふと、この自然の大きさ……』

今日に限らず、驛長はよくこんなことを言つた。若い助役は常にそれを不思議にしてゐた。もしや驛長の常に繙いてゐるロシア語の本の中に、或は新しい雜誌の中に、さういふことが書いてあるのかしらと思つて、をりをりその頁を繰つて見たりした。それに、さういふことをいふ時には驛長はいつも眞劍な眞面目な張りつめた顏をしてゐた。

『でも、さびしいのは仕方がありませんね。』

なだめるやうに言ふ若い助役の言葉には頓着せずに、

『本當に、チエホフの短篇の通りだ。まア、聞いて下さい。ロシアの曠野の中の停車場の驛長の話ですがね。汽車が毎日時間をきめて通るばかりで、人一人其驛から乘つたり下りたりすることのない停車場

時には、停車場前の茶店ももう二三軒兩側に出來　ゐた。ある店には、『たばこ』といふ札がかゝつたり、ある店には長岡鑛泉支店などといふ看板がかゝつたりした。若い助役はその中の一軒の二階の一間を借りて住んだ。

若い助役はのんきに暮した。私設の小さな鐵道だけに、九時の最後の貨車が通つて了ふと、あとはもうしんとなつて了つて、別に停車場に殘つてゐる用事もなかつた。で、改札ともう一人の男にあとを賴んで、助役はいつも自分の二階へと歸つて行くのが例になつてゐた。あたりは暗くなつて了つても、その窓だけは明るく街道か　見えてゐた。『助役さんの室だんべい、おそくまで起きてゐなさつしやる。』こんなことを村の者は言つて通つた。何うかすると遲くなつてから、驛長がやつて來ることなどもあつた。驛長はさびしい、さびしいと常に言つてゐた。

『本當の田舍だねえ、こんなさびしいところが日本にあるかと思はれるやうな氣がしますよ。九時過ぎには、もう人の足音も聞えないんですからね。君はよくさびしくありませんね。』

『だつて、貴方は奧さんもあるし、あんな可愛いお子さんもあるぢやありませんか。貴方がさびしくつちや、私なんか何うするんです。』

『君はまだ希望があるからね。希望といふ唯一の友達があるからね。』

『貴方だツてあるぢやありませんか。』

やき渡つた。野を縁取つた山は黑くさびしく默然としてゐた。

その月の末には、廣い野の中に停車場がぽつんと一つ出來上つてゐた。レールからは少し低くなつてゐるけれど、その停車場の待合室の硝子窓を透して、山の雪が明るく手に取るやうに見えた。汽車は開通式の日から煤烟を平野に漲らせながら絶えず其處に來ては停車した。初めの中は、『それ汽車が來た！』と言つて、めづらしがつて、子供達は飛出して行つた。

停車場には三十五六になる鬚の濃い驛長と、二十一二になる若い助役とが來てゐた。その他にこれも矢張若い改札がゐた。自分の社宅の出來る間、驛長は近い方の山の溫泉場のある家に下宿して、其處から每日通つてゐた。不思議にもその驛長は文學が好きで、新しい雜誌などをよく買つて讀んでゐた。死んだ父親の關係で、青年時代に駿河臺のニコライの信徒になつて、ロシア語を少し學んだことがあるので、未だにトルストイやツルゲネフの小說を手から離したことがなかつた。父が死んで、自分で一家を經營しなければならなくなつたために、好きな文學を捨てた遺憾は未だにかれの胸の底にはつきりと殘つてゐて、何うかすると、ノートの隅に夜おそくまでかゝつて感想めいたことを書いてゐることなどもあつた。新らしい雜誌を讀みさしては、いつも近づいて來た汽車をプラットホームに迎へた。

やがて社宅が出來て、顏の青白い弱さうな細君と可愛い四歲位になる男の兒とを驛長が其處に迎へた

ところであつた。そこは半ば桑畑で半ばは麥の畑になつてゐた。小川には春はげんげなどが咲いた。

繩張をしたり土臺を掘ゑたりして、やがてその工事は始まつた。その時分には、もうレールは餘程遠いところまで行つてゐた。次の停車場あたりまで行つてゐた。黑い煙を吐いた機關車は時には木材を載せた貨車を運んで來て、それをそこに置いて行つたりした。野はもう寒くなりつゝあつた。小鳥はもう何處かへと行つて了つた。晴れた暖かい日があるかと思ふと、寒い雨がつゞいて降つた。風の立つ日には、大工の鉋屑が遠い畑まで飛んで行つた。

『寒いわけだ。山は雪だ。』

焚火を取卷きながら、こんなことを大工が言つた朝には奧の方の山の頂はもう白くなつてゐた。霜は新しい木材や木片を白くした。

大工達は其處に集つて來る子守などを相手にして、『もつと此方へ來いよ。もう男が戀しいだんべ。』などとからかふと、中で大きい子守は舌を長く出して見せた。

大工は板圍ひをして其處に寢とまりをした。彼等は大抵この近所のものではなかつた。最初に井戸を掘つて小倫が其處から水を汲んだり米を炊いだりした。夜は酒など買つて來て飲んで騷いだ。

その明るい小屋がいつも闇の中にくつきりと見えてゐた。夜は靜かに、廣い野には風が凄じく荒れ廻つてゐた。空はいつも變らぬ穹窿の下に嚴かに冷やかに下界に臨んで、無數の星が燦然として四邊にかゞ

七時半の湯の仕舞ひの拍子木が夕暮の靜かな空に冴えて聞えると、其處に住んでゐる人達は、若者も老人も子供も娘も皆そのあとの湯を貰ひにと出かけて來た。浴槽は近所の人達で一杯になつた。荒れた唇や、手や、大きな黑い體や、子守のねんねこや、帶や、さういふものがかなりに廣い浴場を一杯にした。

『停車場が出來るんだツてな。』
『何處さ？』
『そら、あの太右衞門どんの畑と武平どんの畑のところとだよ。』
『いよ〳〵あそこに出來るかな。』
『矢張、長岡の旦那が骨折つて吳れたで、あそこに出來るやうになつたんだな。』
『それはさうさ。』

こんな話があちらこちらで取換された。平野の寒い風の中にちぢこまつて生活した人達に取つては、この汽車の出來るといふことは何んなに珍らしく且つ喜ばしいことであつたか知れなかつた。若者や娘や子供達は工夫のせつせとレールを布いてゐる傍に行つて、めづらしさうにして立つて見てゐた。『いつ汽車が來んだんべ。』などと訊いたりなどした。

その停車場の出來るといふところは例の道祖神と供養塔との立つてゐる處から眞直に三町ほど行つた

其處に來る人達は、大抵そのひろい野を横切つて、段々近づいて來る丘に添つて、例の丘のはづれにある大きな松を仰いで、そしてその山合の溫泉場へと入つて行つた。

「山の陰さなつてるで、此處は暖かくつて好い。己ら方は吹晒しだからな。寒いからな。」かう言つて芋を洗ふやうにして汚い小さい浴槽の中に、昔の人達は浸つてゐた。

鑛泉の湧出量がいかにも少い。これでは仕方がない。かう言つて、其處の主人は、いろいろに研究して、東京から、其道の技師を聘んで來たりしたのは、もうかなり以前のことであつた。「駄目だんべい。身代潰して了ふだんべい。」近所の人々は皆かう言つて噂をした。しかし主人は度々の失敗にも辟易せずにその事業と研究とを續けた。その爲め、家產は蕩盡しても好いといふほどの熱心と努力とを以てした。その人の一生は或はその爲めに費されて了つたと言つても好い位であつた。果してかれは鑛泉の湧出脈をさがし當てた。それは今から三十年ほど前であつた。今では新しく設備した浴槽の隣に、タンクのやうな大きな鐵製の水溜があつて、眞鍮のねぢをひねると、それから鑛泉が溢れるやうに流れ落ちた。

山合の小さな村、そこに住んでゐるのは、皆なその鑛泉の爲めに生活してゐるやうな人達で、誰も皆その主人を旦那、旦那と言はぬものはなかつた。その主人の言ふことは誰も喜んで聞いた。世離れた生活の流がそこに淀んで靜かに淵を作つてゐた。

てゐた。向うには、水田が見え、土橋が見え、丘に凭つた小さな社が見え、さびしさうにところどころに立つてゐる百姓家が見えた。

昔——遠い昔から、そこを曲つて山の方へ行く人達があつた。

こんなことを言つて訊いた。と、

『長岡の方けえ、そんだら、そこ行つて好いだアよ。』

『まだ、遠いかな？』

『いんにや、もうぢきだんべい。その山のわきさ、まはりや、すぐだ。』

『湯さ、込んでゐるべいかね？』

『なアに、はア、此頃は、野良忙しいでな。空いてゐるべいよ。』

『難有うよ。』

かう言つて土橋を渡つて、山の裾について歩いて行つた。近所の百姓達が味噌や醤油や、米を背負つて行くやうな小さな溫泉場で、それはそこから山の裾を廻つて、鏡のやうに澄んだ池の縁を通つて、段丘と丘との間に入つて行くやうなところにあつた。藁葺の家、別に瓦葺の大きな二階屋などがあつた。山の間から湧き出す少量の湯を沸かして、近所の百姓の湯治に來るのを待つやうなところはその山の向うにもう一つあつた。

しかしこの供養塔と道祖神とがかうして長い月日を此處に默然として立つて殘つてゐるやうに、または全く自然に同化して了つたものゝやうに、または全くこの自然と限りない靜かな調和を保つてゐるやうに、または全く人間とは關係を絶つて了つたものゝやうに――。

この二つの石碑の前からは丘とその丘の上に連つた山と更にその上に美しく輝いた雪の奥山とが一目に見わたされた。雲雀は野から空に囀つて揚つてゐた。

それから一二歩出ると、全く野だ。ひろい野だ。草藪では風が私語き林では葉がかさかさした。路には毛絲の屑や紙屑などが吹かれ轉つてゐた。一週間ほど前に降つた雪が草藪の中に白く殘つて見えた。

獅子舞の姿をした七歳位の男の兒と獅子を持つた四十恰好の男とが、ひよつくりそこに顯れて來た。濃い淺黄のかぶり物は汚れて小さな獅子の頭は男の背中のところに日の光を受けながら負はれてゐた。男の兒は寒さうに震へながら歩いてゐた。長い路を歩いて、餓ゑて、疲れて、ともすると、男の足に後れさうになつてゐた。

『何うしてるんだえ。さつさと歩けな。』

かう言つて振返つて、男の子供の歩いて來るのを待つた。『なアよ、もう少しだでな、先きまで行くと、何か食はせてやるからな。我慢して歩けよ。』男は續いてなだめるやうに男の兒に言つた。

この街道の村の中ほどの處に、こんもりとした林があつて、そこから路が一筋右に折れて曲つて行つ

た大和障子が新しく際立つて白く見えて、萎びた蜜柑を入れたざるが障子の硝子越に見えてゐた。ちよつと立寄つた自轉車が柱によせかけて置いてあつたりした。かと思ふと、汚ない百姓の裏緣が貧窮の縮圖か何ぞのやうにはつきりと覗かれた。暖い日影の他には何も自然から恩惠を得ることの出來ないやうな南向の緣側――そこには綿の半出た汚れた蒲團が干してあつて、白髮のせむしの婆さんが後向きになつて坐つてゐた。傍ではそれも矢張つぎはぎの筒袖を着た六才位の男の子が青い洟を垂しながら眩しさうにして街道の方を見てゐた。白い雲がをりをりその子供の瞳に映つて通つて行つた。

軒の傾いた家、壁に大きな穴の明いた家、根太が曲つて、あれで何うして立てつけが自由に出來るかと思はれるやうな家、馬の入れてある臭い汚ない小屋、肥料の一杯に溜つた淺い汚い流し溜、さういふものがそれかれそれへと續いた。さぞ雨が洩るであらう、さぞ寒い夜風が襲つて行くだらうと思はれるほど屋根は壞れ、壁が破れてゐる家などもあつた。

ある家からは街道を見るでもなく、あたりを見るでもなく、喪心したやうな單純な顏をした中年の百姓がぼんやり立つて、唯暖かい日影に當つてゐるのが見えた。

村の外れには道祖神の小さい碑が立つてゐた。注意して見ると、そこには百五六十年以前の日が刻みつけられてあつた。その傍には其時分そこで倒れ死んだ遠い國の旅客の供養塔が一つ立つてゐた。其時分も矢張この村はかうしてあつたのだ。車も、汽船も自轉車も飛行機もなかつたその時分にも……。

かう話して聞かせる男などもあつた。その丘の近所では、冬は何うかすると、兎が捕れた。年に由ると、五疋も六疋も捕れることがあつた。一面の草藪で背の低いしの篠の中に兎はかくれてゐて、それを上から追ひ出すと、前足の短かい兎は慌てゝ飛び出した。それを人々はあとから鐵砲で打つた。『あんまりひまだで、一つあの松の丘へ兎でもさがしに行つて見るかな。』こんなことを言つて、百姓の若い息子達はよく出かけた。

『お月さんいくつ、十三七つ……』

かういふ子守唄が街道の家の軒下に聞える時分には、その松はいつも美しい月の最初の光を受けてゐた。斜にさしだした松の梢の葉が黑く濃かにくつきりと見えて、白い雲などがあたりに流れた。月がその松の梢を離れてから、平野は初めて水のやうな白い光に浴した。

街道には家が五六十軒ほどさびしく並んでゐた。それも軒をつらねてゐるところは僅かで、野に出て行くにつれて、家と家との間に草藪があつたり、畑があつたり、空地があつたりした。曲り角に古い半鐘が一つあつて、それが一度か二度鳴つた。藁家、瓦屋――瓦屋と言つても、大抵は此處等で出來る赤土の薄い扁平い安い瓦で、霰になど逢へばすぐ壞れて了ひさうなものであつた。ある家の戸は堅く閉められ、ある家の戸は一面に明放されてゐた。赤くニスを塗つた郵便箱を軒下にかけた家には、張り替へ

所、半崩れかけた竈、つぎはぎの着物を着た母親、がさがさした大きな手を持つた父親、鷄小屋――中でも、一人は貰ひ子で、朝早く起されて、學校に行く前に鷄の世話をしなければならなかつた。霜の深い朝も、その子はひとりで起きてとやに行つて、逸早く戸を明けてやつた。と、夜の明けるのを待ち傘ねてゐた鷄達は、親も子も嬉しさうな羽搏をして、バタバタと外へ出て來た。その子供は水を鉢に入れてやつてから缺けた椀に餌を持つて來て、そしてそれをあたりにまき散した。コ、コ、コ、と多くの鷄は其處に集つて來た。

子供達はそこから田圃を越して、半里ほど山の方へ向つて歩いて行つた。山の雪は依然として美しく日に輝いてゐた。しかし子供達はそれを美しいとも思はなかつた。今日は風が出るとも思はなかつた。畑の緣、川の畔、林の傍、さういふところを快活に面白さうにして唯通つて行つた。

平野に靡き伏した名殘りの丘が彼方此方に見えてゐた。その一番外れの丘の上には、大きな松が一本さびしさうに立つてゐる。それは少くとも四五百年經過した大きな松の幹であつた。今の代の祖父祖母にも、矢張このまゝであつたといふことで『あの松べいは、いくら經つても、年を老つたやうに見えねえな。』などと婆さん達は言つた。

『おら、あの松のところに行つて見たが、かなり大きい松だよ。茂右衞門さんの山から少し行くと、あそこへ行けるがな。……三かへり位あるべいかな。』

廣い野には一里二里を隔てゝ、ところどころに小さな村があつた。その村へと通ずる細い細い道は、或は眞直に、或は折曲り、或はぐる〳〵と小川の畔に添つて何處までもついて行つてゐた。土橋の下のささやかな水には、水晶のやうな氷が張つて、それに朝の鮮かな澄んだ空が聰しげに映つてゐた。氷の下には、やがて來る春の暖かさを待つ小鮒や、だぼはぜや、目高などがぢつとしてちぢんでゐた。川の土手の日當りには、根芹が青く見え出してゐた。

その多い路の一筋をたどつて行つて見ると、桑畑の向ぅに、楢林がつゞき、その向ぅに萱や薄の枯れた藪がつゞき、麥畑がつゞき、水田がつゞき、また桑畑がそれにつゞいた。松の二三本ある下には小さな墓場などが見えたりした。ある石は倒れて半は土に埋れてゐた。

朝日に向つた小さな社などもあつた。その前を子供達が二三人、鞄を下げたり汚れた襟卷をしたりして朝早く學校へと通つて行つた。

『おめい今日は行くか。』

『何處へ。』

『向ぅの村へ遊びにさ。』

『行かねえ。』

こんなことを言つてゐた。かういふ子供達は皆な向ぅの森の中の小さな藁屋から出て來た。煤つた藁

野の道

野を遠く縁どつた山には雪が一面に深く積つてゐた。それが光線の加減で、何うかすると白金のやうな美しい輝きを見せた。そこからは、いつも顏も手も切られるやうな寒い冷たい風が凄まじく平野に落ちて來た。と、林は皆な鳴り、枯葉は殘らず梢を離れて飛び、頰かぶりをした百姓の手拭は奪はれ、娘の赤い毛糸の襟卷は吹き飛ばされた。

たまたま廣い野に行逢つた百姓達は、

『えらい風だな。』

『今日もふきでこまりやすな。』

こんなことを言つて、路端に吹寄せらるゝやうな形をしてすれ違つて行つた。風に向つて行く者は、前にこゞむやうにして步き、追手を受けた者は毬のやうに體を丸くして走つた。障るもののない野を風は自由自在に荒れ廻つた。

吉は默つて坐つてゐることが多かつた。しかし、酒に醉ふと、追懷が新たに蘇つて來るやうに、蒼白い疳の立つた顏をして、『呼んで來い、俺のお八重を呼んで來い。』と叫んだ。後には、『此處にゐるぢやありませんか、八重ちやんが――』などと言つて女將は勝太郎の方を見た。

刑事が賴まれてその談判の中に入つて來る時分には、順吉はその待合に行つて酒を飮んでゐることが多くなつてゐた。やがて、女の家から、火鉢だの簞笥だの額だの掛物だのコオトにするセル地だの澤山送りとゞけてよこされた。金の指環は紙に包んであつた。順吉は二階の一間に並べられたそれ等の物品を唯默つて見た。

かと思ふと、靜かにぢつとしてゐることなどもあつた。机に向つてせつせと計算などをしてゐた。晴れた暖かい緣側に仰向に倒れて、目をつぶつて深く何事かを考へてゐる時などもあつた。其處に、婆さんは手製のしる粉などを持つて行つてやつた。

婆さんが折を見て、くど〳〵と意見などをすると、順吉はおとなしく默頭いて默つて聞いてゐた。『先でもさう言ふんだから、先づ兎に角一度さうした方が好いぢやないか。向うでも、預つた金は返すし、他にこしらへて貰つたものなどもすつかり返すと言ふんだから、さうした方が好いぢやないか。それや本當を言へば、そんなことは言はれた義理ではないのはきまりきつてゐるけれど、先きでさういふ風なのを、此方でいくら思つたつて仕方がないよ。吉田さん。わるい夢を見たと思つて、あきらめて、さうする方が好いよ。』初めはこんなことは言はせもしないし、受附けもしなかつたが、此頃では默つておとなしく順吉は聞いてゐた。

その後も、女の方からは、手をかへ品をかへていろ〳〵と人がやつて來た。ある人はお八重が此頃ヒステリーで、非常に體をわるくして、田舍の方へ保養に行つてゐるといふ話などをした。例の待合の女將などもやつて來た。姐さんだのお酌だの勝太郎だのがやつて來た時には、その二階で陽氣に騷いで、後で待合の方に一緒に出かけて行つた。

別れるなら、もう一度逢つて……と思詰めた心も段々日增に薄らいで行つてゐるのを順吉は見た。順

と顔を赤くした。しかも流石に知らぬ顔も出來ぬらしく、すれ違ふ時に丁寧に挨拶した。順吉も挨拶した。しかし『姉さんは？』と聞いて見る氣はしなかつた。

同じ血の通つてゐる肉體だ。顔にもあの女の面影がある。姉に似ないやさしい質で、伊東に一緒に行つた時にも、姉と順吉と物言ひを始めると、幼い心にオド〳〵して、『姉さん、何うか此處に來てゐる中は、默つてゐて下さい、後生だから。』と言つたことがあつた。それに、順吉がその妹の爲にいろ〳〵盡してやつたことも一通ではなかつた。順吉は振返つて見ようとしたが、ふと反抗の念が簇々と起つて來てやめた。順吉は泣きたかつた。

女の家でも非常に順吉の態度を怖がつて、此頃では娘をお座敷へも出さぬやうにしてゐるといふ話や、夜、傍の格子窓を覗かれるのを恐れて裏口に木戸を拵へたといふことや、近所でもピストルの一條が話の種になつて尾に鰭をつけて評判になつてゐるといふことなどを順吉はをり〳〵耳にした。兎に角何うにか話をつけなければ稼業も滿足に出來ないので、女の方では困つてゐるといふことであつた。順吉は今でも時々發作的に女の名を呼んだりした。その時には、何も彼も忘れて了つたやうに婆さんには見えた。『眞砂屋へ伴れて行け！』かう言つて二度も三度も吹鳴つた。夜など床の中で、『お八重、お八重。』と言つて涙を流した。

た？　誰のお蔭で、姐さん達や一流どこの妓達にひけを取らないやうな位置をつくることが出來た？

かう思ふと、殺しても足りない憤怒が日に何回となく起つて來た。しかしその憤怒のいかに終らなければならないかといふことを想像する度に、順吉の頰はいつもさびしい涙に濡れた。

止むを得ない用事があつて店に行つた時にも、友達を訪問した時にも、餘りに堪らない欝を晴すために球つきに出かけて行つてゐる時にも、女に對する焦燥が絕えずその胸に執念くからみついてゐた。藝者の内にごろ〳〵してゐる友達は、『皆な奧をつきつめて見れば、そんなもんだよ。別に不思議はないよ。思ひ切るさ。思ひ切つて、もつと好い女を相手にして、うんと見せつけてやるサ。一人好いのを取持つてやらうか。不思議なもんだよ。さうすると、却つて女の方で口惜しいやうな心持がするもんだよ。』などと平氣で言つてゐたが、さういふ風に平氣で物の考へられる友達が羨しかつた。順吉は日の暮れる頃など、ひとりで、外套にくるまつて、さびしく流れてゐる川を見詰めて立つてゐた。

ふとある角を曲ると、向うから女の妹がやつて來た。學校の歸りと見えて、紫紺の袴をはいて、蝙蝠傘を持つてゐた。此方から順吉の行くのを初めは知らずにやつて來たが、中途で知つて、さも困つたといふやうにサツ

も構はない。一月に何度と逢ふことを制限されても好い。何んなに虐待されても構はない。あの反つた白い指を見ることが出來れば、あの表情のある顏を見ることが出來れば、あの柔かい肌に觸れることが出來れば……。

しかし、それも出來ないのを思ふ時、順吉は自分の生命のすつかり滅びて了つて行つたやうな佗しさと辛さとを總身に感じた。

順吉はあらゆるものゝ自分から離れて叛いて去つて了つたのを見た。希望も勢力も生命も金も何も彼もかれはそれに向つて浪費した。友情や義理や人情や、さういふものもかれは平氣で犧牲にした。順吉は女を知らなかつた以前と知つてから以後とを比べて考へずには居られなかつた。

銀行を退くやうになつたのも、女の爲めと言へば言へる。國の兄弟や親類に反抗して喧嘩面までして金を取つて來たのも全く女の爲である。女を知らない以前には友達もあれば希望もあつた。これから何う世の中に出て行かうといふ目算も立派に立つてゐた。自分を引立てゝ世話をしてやらうといふ大勢の先輩もあつた。かれの前には大きな路が開いてゐた。それを皆捨てゝ捨てゝ顧みなかつた。

女は誰のお蔭であの狹い家から今の廣い家に移ることが出來た？　誰のお蔭で江の島や伊東や箱根や稻毛を知ることが出來た？　唯のお蔭で抱妓でも置かうといふやうな自前の姐さんになることが出來

『歸る。』

かう言つて、順吉はすぐ立上つた。痛恨がまた胸に押寄せて來てゐた。かういふ人達に、自分の痴かさを見られるに堪へないやうに、かれは急いで其處に脫いで置いた羽織を着た。

其處に入つて來た勝太郎は、

『何うなすつたの？』

『お歸りになるんだつて。』

『お歸りに……さう？』

帳場で貰つて來た林檎を其處に置いて、敢てとめもせずに、後からインバネスを順吉にかけた。順吉は半ば覺めた佗しい心を抱いてこそこそとそこから出て來た。今までお八重なしに來たことのない家、今まで泊らずに歸つたことなどのない家、いろ〳〵な甘い歡樂の思ひ出のある家、それをかうして一人さびしく出て行くといふことが、順吉の胸に張り裂くやうな思を誘つた。『かうしてゐる中にも、女との間を離れつゝある。』かう思つてかれは堪らない悲痛を感じた。

何をしても好い、男が幾人もあつても、世間でいふやうな藝人の情夫があつても何でも好い。何うしても好い。俺のかうした心を何處かで滿足させて吳れさへすれば好い。女の心の隅の隅の方に置かれて

『まア。』
と言つて勝太郎は立つて行つて、やさしく顏を寄せて脊中を撫でた。女將と女中とが大騷ぎをして金盥を持つて來た。
『却つて出て了ふ方が好いのよ。』脊中を撫でながら、『お苦しいですか。だつて、あんまり召上るんですもの。見てゐてもヒヤ〳〵する位だつたんですもの。出して了ふ方が好いわ。』
順吉が體を上げるのを見て、『もうよう御座んすか。』勝太郎は女中の持つて來たうがひの水を取つて、帶のところから手巾を出して渡した。
席に戻つても、順吉は矢張つまらなさうにしてゐた。勝太郎のちよつと向うに行つた間に、其處にゐた上さんがちよつと耳を寄せるやうにすると、
『好いよ、好いよ、そんなことは。』
『でも、あの妓が……』
『好いから……歸して下さい……』
『お氣に入らない？』
『さうぢやないけれど、僕は今日は歸るから。』
『お歸りになるの？』

『苦しいでせう。だツて、あんなに召上るんですもの……』

などと言つて、順吉の倒れてゐる傍に來て、髮の好い匂ひのする色の白い顏を寄せた。

『おひやを持つて來ませう、ね、さうして少しぢつとしていらつしやい。さうすると、ぢきさめますから。』かう言つて、コップに水を持つて來たりした。

やがて其處に上さんの姿が見えたと思ふと、二人の間にはこんな話が取交された。

『さうだツてね。』

『常盤では、始終あの人が來るんですよ。この間も來てましたわ。八重ちやんの方では、かなり深くなつてるらしいよ。』

『利口な妓なんだけれどもね、何うしてさういふものにかゝつたのかねえ。』

『でも、駄目よ、お上さん、名代の女くひだツて言ふから……。八重ちやんだツて、今に目が覺めるよ。』

『それにしてもいつ始まつたことなんだえ？　前にはそんな話はちつとも聞かなかつたがねえ。』

『まだつい昨今なんでせう。』かう言つたが、順吉の起上つたのを見て、『もう好う御座んすか。お頭は何う……』勝太郎はその傍へと寄つて行つた。長襦袢の紅い色が衣の裾からチラ〳〵と見えた。

『顏の色はまだ少しわるいねえ、吉田さん、もう少し休んでゐらしつた方が好くない。』女將がかう言ふと殆ど同時に、順吉はすつくと立つて、緣側の所へ行つて、蹲踞んだ。苦しさうに反す氣勢がした。

ある夜は淋しさに堪へられなくなつて、初めてお八重と逢つた待合へと行つた。上さんはいつもの如才のない調子で、茶や酒を運んで來た。

『さうですつてね。あの妓がそんなことはない筈なんですがね。』

などと言つて慰めた。

知つてゐる姐さん達やお酌や若い妓などがやがて大勢やつて來た。順吉にはこの大勢の中にいつものやうにお八重がゐないのが堪らなくさびしかつた。三味線を聞いても、踊を見ても、少しも浮き立たなかつた。

お八重の話が出ると、

『もう、そんな話よして呉れ。』

かう言つて顏を蹙めた。流石に場馴れた姐さん達も、後には困つて、默つて酒を飲んでゐる順吉を見た。

『あゝ〳〵。』

かう溜息を吐いて、順吉は兩手を後頭部に押當てゝ仰向に倒れた。

姐さん達が歸つて行つたあとまでも、綺麗な二十一二の勝太郎といふ藝者は、いつまでも一人殘つてゐた。

て、少しは聞かなくつちやねえ。私も度々言ふんですけれど……』

『兎に角逢はせて下さい。』

『また、逢はせる時は逢はせます。私だつて、何も無理に逢はせないつて言ふんぢやありません……しかし、今日は本當にゐないんですから。』

『呼んで來て下さい。』

『何處に行つたかわからないんですよ。』

順吉は急に押默つて、低頭いて了つた。順吉は一時間ほどしてから、婆さんに連れられて宅の方へ戻つて來た。

『馬鹿！』

道々順吉は自分で自分を罵つた。

婆さんの眼にも順吉の樣子が可哀さうに思はれた。ぽつねんと障子に凭りかゝつて考へてゐる姿を見ると、あれほどまで思つてゐるのにとも思はれた。つとめて、氣をまぎれさせようと思つて、婆さんはいろ〳〵とその機嫌をとつた。

『おい、婆さん、眞砂屋に伴れて行け。』

發作的に順吉は絶叫した。

『でも、本當にゐないんですから。』

婆さんが聞いてゐると、順吉は家に上つたらしかつた。婆さんはいくらか安心して、あとを追かけて來たといふ顏をして勝手口から靜かに上つて行つた。順吉は蒼い顏をして坐つてゐた。

『何も、遁げかくれする譯でもないんですけれど……』

『僕は何にもしやしません。唯一度逢はせて吳れゝば好いんですから。』

『でもゐないんですから、二階にも何處にもゐやしないんですから。』

『何處に行つたんです。呼んで來て下さい。僕にわるいところがあれば、あやまる。それはいくらでもあやまる。しかし、母さん、僕だつて、このまゝ何うすることも出來ないぢやありませんか。』

『だから、私も上つたりあれの叔父も上つたぢやありませんか。』

『あんなことは出來ない。』

婆さんは、『でも、此方でもさう仰有るんだから、無理を言つたつて仕方がないんだから、兩方で好いやうに話し合つた方が好いぢやありませんか。ねえ、母さん。母さんだつて、別に、吉田さんに何うかうと言ふ譯ぢやないんだから。』

『だから、逢はせて吳れたつて好いでせう。』

『でも、ね、この場合だから、そんな無理を言つたつて仕方がないんだから、中に入る人のことだつ

『何處にお出かけになるんです？』

と訊くと、

『何處でも好い。』

『でも心配だから。』

『あいつの處に行つて、了簡を聞いて來る。あいつに逢つて來る。』

婆さんが留めても、言ふことを聽かないので、婆さんは裏口からこつそり跡をつけた。

順吉はわきめも觸らずに檢番の前の道を眞直にその家の方へと行つた。軈て躊躇するところなく女の宅に入つて行くのを婆さんは見た。

婆さんは氣が氣でなかつた。裏から入つて行つて、樣子を窺つてゐると、入口には母親が出て何か頻りに言つてゐるらしかつた。不意に不斷着のまゝのお八重は、細帶をしめたまゝ、勝手口から慌てゝ裏口の方へ遁げ出して來た。そこに立つてゐる婆さんとぱつたり出會つた。

『早く、早く。』

かう言はれるので、お八重は愈々慌てゝ隣の垣に添つた道から裏の方へと姿をかくした。

『何も隱さなくても好いでせう。逢はせて下さい。一目で好いから逢はせて下さい。』かういふ順吉の聲が續いて聞えた。

取持たうとした。
お八重の家では、問題が大きくなるにつれて、もしものことがあつては心配だと言ふので、成るべく娘を外へ出さないやうにしてゐた。『お八重をよこせ、お八重に逢はなければ誰が來ても口もきかない。』かう順吉が絕えず呶鳴るのを聞いて歸つて行つた人達の報告は、一層お八重の家を不安にさせた。お八重はいつも隱れるやうにしてお座敷に行つた。
順吉はさびしく暮した。時々發作のやうに、『お八重を呼んで來い。』と叫んだ。飮めもしない酒を飮んで强ひて醉をやらうとしてゐた。此頃では、酒を二階に持つて來させて、二階で一人で飮んだ。
お八重に對する批評――今まで知らうとしても知れなかつたことを順吉はやがてあちらこちらで耳にした。ある藝人にかなり深く打込んでゐるといふ話をも聞いた。ある姐さんは、『え、あの人の薄情は昔から名高いもんですよ。この前にもさういふことがありましたもの。』などと言つた。
順吉は女との間の次第に破壞されつゝあることを知つた。それは眼に見えない力が人知れずやつて來るやうなものであつた。『かうしてゐる中にも、あの女と離れつゝある。』と思ふと、俄かに胸が張裂けるやうになつてぢつとしてはゐられなくなつた。意地わるくも、女に對する愛着の念は燃えるやうに熾んになつた、樂しかつたその時々の思出は、はつきりとかれの頭に刻みつけられてゐた。
ある夜、急に出かける支度をするので、婆さんは、

と言つて行きましたから。』

順吉にはこの母親のために自分が盡してやつたことが一つ〳〵思ひ出されて來てゐた。江の島にも伴れて行つてやつた。稻毛にも伴れて行つてやつた。コオトも拵へてやつた。それに、時々やつた小遣もちつとやそつとではない。順吉は赫とした。

『そんなことは出來ません。それはイヤです。お八重をよこして下さい。お八重ぢやなくては駄目です。』後には順吉は恐ろしい顏をして叫んだ。

八

一日二日經つ中には、その話は近所界隈にも知れ渡つて行つてゐた。母親につゞいて、お八重の叔父に當る人などもやつて來た。しかし、順吉は頑として聞かなかつた。『そんな金なんか欲しくありません。取れるやうにして持つてお出なさい。それで、そんなことで、この話がすまされると思ふんですか。』順吉はかう言つて威丈高になつた。

いつも一緒に聘んでやつた姐さんは、『あの妓も情のこはい妓ですからね。なにもそんな大騷ぎにしないたつて好いのに！』こんなことを言ひながら、『でも、あの妓だつて、立派な口はきけはしないんですよ。常盤などでの噂もあるんですから。』などと言つた。ある時は、順吉を伴れ出して行つて、他の妓を

午後になつてから、お八重の母親はやつて來た。しやんとした扮裝をして、いつもに似合はない切口上で、順吉と一時間ほど話した。『ぢやそれで母さんは好いと思ふのですか。』順吉の聲は段々高くなつて行つてゐた。

『好いと思ひませんけれど……娘のお蔭で、かうして朝晩の御飯も樂に戴いてゐるのですから、娘にもしものことがあつては、それこそ私達は路頭に迷はなければならないんですから、大事な娘ですから。』

『だから、それはさつきからあやまつてゐるんです。わるいと思つたから、昨夜もわざ〳〵斷りに行つたんです。』

『でも、一度でもあゝいふことをされると、娘が心配です。それは御恩にはなりました。お世話にもなりました。しかし、あれもこはがつてをりますから。』

こんな話が絶えだえに下に聞えた。順吉の細い低い聲もくど〳〵聞えた。裏も表も知つてゐる婆さんは、『あんなことを言はれた義理ぢやないんだけれど、もう切上げ時だと思つてゐるんだからね。』などと思ひながら、はき〳〵しない順吉の態度を齒痒く思つた。『ぢや、お八重も、さう思つてゐるんでせうか。』順吉の聲は急に甯走つて聞えた。

『それは何うだかわかりませんけれど、多分はさう思つてゐませうよ。兎に角、私にさう申して來い

裏の戸がまた明いて、婆さんが上つて來た。

『何にも、そんなに大きな事にしなくつても好さゝうなもんだのに……』かう言つて、長火鉢の向うに坐つて、『今、ちよつと行つて見たが、母さんの劍幕はえらい劍幕だつたよ。危ないものなんか持つてゐるやうなところに、大事の娘はやられない。そんな人ぢやないと思つたなんて言つてゐるんだもの。』

順吉は默つてまた煙草を一服吸つた。

『行きがかりつて言ふことがあるんだもの。何もそんな風に思はないたつて好さゝうなものだのに…。私まで何の彼のと言はれて……。何を言つてもわからないんだもの。』

順吉は突然訊いた。

『お八重はゐたかえ？』

『ゐなかつたよ。二階にでもゐたか何うか知らないけれども、ゐなかつたやうだよ。父さんもブンブンしてゐたよ。』

『フン。』

順吉はかう言つて立上らうとするので、『御飯？』と訊くと、『飯は食はない。』かう言ひ捨てゝ二階に上つて行つた。

俺がわるかつたんだ。お前がなくつては、俺は一日も生きてゐられないのだ。」順吉はかう獨りで心の中に叫んだ。泣きながら順吉は歩き出した。

ある朝、順吉は自分をさびしくその二階の一間に發見した。昨夜遲く冷めたい雨が降つて來て、外套も帽子も着物もすつかり濡れた。それがすつかりそこにぬぎ捨ててあるのが一番先きに順吉の眼に附いた。

『まアひどくぬれたぢやありませんか。』かう言ふのを構はずに二階に上つて來て、敷いてあつた床の中に倒れたのを思ひ出した。順吉は眼を見開いて空間を見た。

繰返しても繰返しても盡きない同じ考へが絶えずかれの頭を循環した。下ではとうに婆さんが起きて朝餐の支度の出來てゐるのがわかつて居りながら、順吉は何うしても起き上る氣になれなかつた。婆さんにも顏を合はせるのが恥かしかつた。

暫くじてから裏の戸の明く音がした。婆さんはどこかに出て行くらしかつた。しかし順吉は起上らうともしなかつた。同じ懊惱と同じ絶望と同じ追恨との中に、時間は段々經つて行つた。

順吉が起きたのは、それから暫し經つた頃であつた。下に下りて見ると、鐵瓶の湯が煮立つて、味噌汁の鍋がその傍に下して置いてあつた。順吉は例の通り齒を磨いて水道から水を出して顏を洗つた。それでも長火鉢の前に坐つて煙草を一服吸つた。

入つて行つた。

すぐ母親が出て來た。順吉と知ると、ちよつと、躊躇したが、思つ切つたやうに、『お氣の毒ですけれど今夜はこれでお歸りなすつて下さい。あれも氣が立つてをりますから。それに、家にもをりませんし。』

『さうですか。』

あやまらうと思つた順吉の心は忽ち憤怒の情に壓せられて了つた。順吉は戸を荒々しくしめて外に出た。

あれしきのことに廉を立てゝ、好い幸ひに自分を離して了ふつもりだといふ疑ひが起つて來ると、今までの女や母親や妹の態度が一々思ひ當つて考へられた。金の爲に、唯金のためにちやほやしてゐたのだ。愛情などといふものは少しもなかつたのだ。愛情と信じ、肉體の羈絆と信じてゐたことは、皆な自分の幻影から出たことであつた。かう思ふと、順吉はこれまでいかに笑はれ、いかに甘く見られ、いかに馬鹿にされてゐたかを思つて、體中がくわつとして來た。

『馬鹿』かう言つて順吉はわざと自分の頭髮を捲つた。

併しその憤怒の情も軈て女に對する愛着の情に變つて行つてゐるのを順吉は見た。愛着の情は拂つても拂つてもかれの心を離れようとしなかつた。かれは却つて今になつて女の肉體が益々かれの生命に必要になつてゐるのを發見した。涙は烈しく胸を衝いて來た。『お八重、お八重、堪忍してくれ、許して呉れ、

るやうな思ひがした。

『金でも何でも返すと言つた。返すと言つたッて、これまでにつかつた金は何うするんだ。此間預けた金ばかり返したッて、それで好いと思つてゐるのか。馬鹿。』と罵つて見ても效がなかつた。

氣が附くと、順吉は闇の中を土手の方へと歩いて行つてゐた。家を出て、何う歩いて何ういふ風にして此處迄やつて來たか順吉にはわからなかつた。其處には待合の軒燈が五つも六つも竝んでついてゐた。自分と女と歡樂を盡した待合の軒燈も其の中に交つてゐた。川は暗く流れてゐた。

順吉は櫻の幹に身を凭せながら長い間立つてゐた。

種々簇り起る雜念の中で、矢張愛着の念の一番熾んなのを發見した時には、順吉は思はず溜息をついた。意地わるくも、歡樂の羈絆がそれからそれへと思ひ出された。『そんなことは出來ない。そればかりは出來ない。』かう言つて順吉は頭を振つた。

初めて女に逢つてからの徑路が繪のやうになつて順吉の頭に映つた。女に對する愛着の舞臺は其處にも此處にもあつた。突然順吉は心に叫んだ。『さうだ、今行つて話して來よう。俺がわるかつたッて言つて來よう。』かう思ふと、暗黑の中に急に一道の光明を得たやうな氣がした。順吉は勇み立つた。かれは土手を下りて、細い通りを女の家の方へとグン〳〵歩いて行つた。

女の家は何事もなかつたやうにしんとして丸い軒燈が明るく前を照してゐた。順吉は格子戸を明けて

かう言ふのを、『まア、まア。』と言つて、婆さんは辛うじてお八重を下におろした。お八重は下で猶暫く婆さんと話してゐたが、一時間ほどすると、順吉は何處へ行くともなく格子戸を明けて外に出て行つて了つた。

順吉は外に出るには出たが、ゐても立つてもゐられないやうな氣がした。頭も體もくわつとして、胸が張さけるやうに苦しかつた。愈々時が來た。愈々破滅の時期が來たと思ふと、今まで自分のやつてゐたことが一つ〳〵蘇つて自分の腸をゑぐつた。女に對する憎惡と愛着とが一緒になつてかれの心を斬り刻むやうに思はれた。『よくもあんなことを言はれたもんだ　薄情女！　始めからさういふ積でゐたんだ。』かう思ふと、腸が煮えくりかへるやうな氣がした。

その癖、一方では女を失つた場合の悲しささびしさわびしさがひしと身を襲つた。『あの女さへゐなくなつたら自分は何うするんだらう。何う生きてゐるんだらう。あの女、あの女。』順吉の胸には、その女の爲めに蕩盡した自分の財産のことや、賣つて了つた家のことや、兄弟や親類や世間や、さういふものが結び合ひ縺れ合つて押寄せて來た。

『そんなことはさせない。』かう自分で獨語したが、何をさせないのか自分にも本當にはよくわからなかつた。女の態度が憎かつた。あの言葉が憎かつた。その一方では、甘い女の歡樂が一つ〳〵絡みついて思ひ出された。『確にある。確かに言ひ交した深い男がある。』かう思ふと、口惜しさに、體が寸斷され

馬鹿だ。僕は馬鹿だ。俺は阿呆だ。己は何ういふ顏で、世の中に顏向けが出來るんだ。』順吉の頰にはボロボロと大きな涙が流れ落ちた。

『まア、まア、氣を靜かに――』

かういふ婆さんの手を振放つて、

『構はんで置いて吳れ、俺が――俺が馬鹿なんだ。』

坐つたまゝで、順吉は聲を立てゝ泣いた。

『まア、好いから、此處は、私にまかせて下さい。八重ちやんも、あんまりいろんなことを言ふからいけないんだ。何もさう思つてるから言つた譯でもないんだから。』

お八重は默つて、順吉の泣くのをぢつと見てゐたが、自分も悲しくなつたやうに、眼から涙を滲ませてゐた。

『本當に、今夜のところは私が預るから、ね、吉田さん。』

顏を覗くやうにして言ふと、

『いや、もう、構はないで吳れ。』順吉は平手で涙を拭つて、『だつて、言ひやうがひどい。此方の心も知らないで。』

『だから、知らないつて言ひやしませんよ。』

『そんなことは言はせない。そんなことをさせて、默つてゐる位なら、これまで心配しやしない。』

『でも仕方がないぢやありませんか。私がさうなら。』

『本當にさうなのか。』

男の聲は鋭く聞えた。

『本當にさうでないにしても、貴方も男らしくもない。女に、さう言はれても、まだその女を思つてゐるんですか。』

『馬鹿！』

凄じい聲が聞えると共に、『何をするんです。』といふけたゝましい女の聲がつゞいて聞えた。慌てゝ婆さんが上つて行つて見ると、順吉は眞靑な顏になつて、かねて藏つてあつたピストルを片手に持つてゐた。

女も眞靑になつてゐた。

『何をするんです。貴方、吉田さん、氣をしつかりなさい。』婆さんはかう言つて、女をかばひながら順吉の手から離すまいとするピストルを取上げた。

順吉は堪らなくなつたやうに、『好い、好い、さういふ氣なら、それで好い。さういふ氣で長い間僕を釣つてゐたんだ。僕は……僕は……僕は。さういふ女のためにどんなに心を盡したか知れなかつたんだ。

ません。しかし、貴方も今の場合だし、私だつて、貴方の言ふやうにはならないんだから、だから譯を言ふんぢやありませんか。』

『だつて駄目だ。』

男の聲は低く泣きさうになつてゐた。

婆さんは此處まで來て始めて聞耳を立てた。女がいよ〱切出したと見える。厭だ、厭だとは、女もかねがね言つてゐたが、たうとう言ひ出したと見える。『だつて、このまゝにしてゐるなら好いけれど、いくら世話になつたつて、毒藥を袂に入れて置くやうな人とは、怖くつて一緒になつてゐられやしないものねえ。命が大事だから。』と女は昨日も言つてゐた。婆さんは順吉の生活を知つてるだけ、可哀相には思はないではないが、さうかと言つて何うすることも出來なかつた。

『ぢや、何うしようつて言ふの？』

暫くして女の聲が聞えた。

順吉は默つてゐたが『何うもしない、何うもしない。』

『ぢや、私がこのまゝ來なくなつても好いんですか。』

『そんなことは出來ない。』

『出來ないたつて、私の體ですもの、私の勝手ですもの。』

かう言つた順吉の眼の色は變つてゐた。仕方なしに、お八重は母親にそれを渡した。

お八重のお座敷に出てゐる間を、長火鉢の前で默つて頭を垂れて考へてゐた順吉が、不意に立つて歸つて行くことなどもあつた。『何か腹でも立てたのかしら。』こんなことを皆で言つてゐると、あくる夜はまたいつもの通りやつて來た。

七

婆さんが下で聞いてゐると、お八重の聲が際立つて高く聞えた。例の嫉妬が始まつたと思つて、婆さんは別に氣にもとめなかつた。しかし二階から落ちて來る聲は段々高くなつて行つた。

『でも仕方がないんですもの。』

『仕方がない、仕方がないつてさつきから言ふけれど、今更そんなことをされて、僕は堪るかい？』

『だから、さつきから言つてるぢやありませんか。それには、そのやうにするからつて、筋道を立てるからつて。』

『いくら筋道を立てたつて、そんなことはいやだ。そんなことをさうかつて言つて聞いてゐられない。僕の心持だつて考へて呉れたつて好いぢやないか。』

『それはよくわかつてゐます。今までお世話にはなりました。それはなりました。ならないとは言ひ

『まア。』

お八重は氣味わるさうに順吉の顏を見て、

『それで何うして？　逢つて？』

『逢ひやしない。』順吉は續いて銀座の商店の方へ行つた話もした。默つて順吉の顏を見守つたお八重はもう笑へなくなつてゐた。まご〳〵すると、自分までもその深みに引込まれるやうな氣がして無氣味になつた。

お八重は好い加減に調子を合せてゐたけれど、此頃、順吉の態度が段々わるく眞面目に無氣味になつて行くのを見た。いやに默つてお八重の顏を見詰めてゐるやうなこともあれば、堪らなくなつたやうな溜息を人の前でつくことなどもあつた。宅に來ても、默つて深く物を思つて坐つてゐるやうなことが多くなつた。

疑ぐり深い順吉の眼に、お八重は到る處で出會した。それればかりではなかつた。お八重は、順吉の溜息と物思ひと、をり〳〵言ふ言葉との陰に、かういふ社會に耽溺して詰つて行つた人の運命を見た。順吉の境遇の次第に底に落ちて行つてゐるのが、聞かないでもお八重にわかつた。順吉があとからつゞいて出した百圓をお八重はつとめて返すやうにした。

『でも、好いぢやないか、何うせ前にも預けてあるんだから。』

『ぢや、あの人さへ承知すれば好いんだねえ。あの人さへ……』

『えゝ。』

『承知して呉れるだらうか。』

『何うですか知れないけど、分つた人だから、承知して呉れるかも知れないわ。』

順吉は默つて考へてゐたが、

『初めて逢つて、話が出來るやうな人かえ？』

『貴方、行つて賴むつもり。』

お八重は眞劍な順吉の顏を見ながら、かう反問した。

『駄目だらうか。』

『駄目つて言ふことはないだらうけども、そんなことをかしいぢやないの？　何つて言ふの？　お八重を呉れつて言ふの？』

お八重は笑はずには居られなかつた。

『實はあそこにも行つて見たんだよ。』

『あそこへつて會社へ？』

順吉は點頭いて見せた。

『あゝ』

二人して立寄つて聞くと、伊萬里燒の大きな火鉢は十圓ほどするものだつた。

『隨分高いものね。』

『これなら、しかし立派ですから。』

傍から小僧は口を入れた。

たうとう買ふことにして、『それぢや、屆けて下さいますね。あの檢番のところを少し行つたところですから、眞砂屋つて言ふ家ですから。』かう言つて、賴んで二人は其處を出た。

『私、あの火鉢を昔から買ひたい買ひたいと思つてゐたのよ。たうとう念がとどいてうれしかつた。あの火鉢に火を入れて置くと、緣が暖くなつてそれは好いのよ。』女はうれしさうに道々話した。

ある夜、順吉は、

『本當に、あの人ッきりなのかえ。あの人さへ承知すれば好いのかえ？』

突然かう言ふので、

『あの人つて？』

『そら、あの恩人だつて言ふ？』

『え、さうよ……』

母親の聲が下に聞えると、順吉はいつでも二階から下りて來た。

『今日はゐますか。』

『まだゐますか何うですか。さつき今日は芝居に行くなどと言つてゐましたが。』

『芝居は何處？』

『市村でせう。』

こんな話をいつも取交した。母親は好い抱妓のない話などもした。

しかし、お八重の機嫌の好い時がないでもなかつた。さういふ時には、順吉は二階のひろびろした室で、取膳で酒などを飲んだ。今稽古してゐる一中節の一節などを女は彈いてきかせた。

何うかすると、二人揃つて、裏の方の町などを歩くことなどもあつた。ある日、ある大きな瀨戸物屋の前に立留つた女は、

『あの大きな火鉢を買ひたいわねえ。』

『もう、ぢき春だよ。』

『でも、まだ火鉢のいらなくなるのは隨分間があるわ。五月までは要りますもの。』

『ぢや、買へば好い。』

『買つて好くつて。』

『まア、不思議ねえ。』

こんな話をした。

『お鶴姐さん、中々だからねえ。あの人の眞似は出來ないよ。言はゞ旦那筋の人だわねえ。それに染ちやんを泊らせるなんて。』

『姐さんも少し變なんだよ。』

『さう。』

かう言つて、お八重は眼を睜るやうな表情をして見せた。

午近くまでその二階でぐづ〳〵してゐることなどもあつた。順吉は相變らず默つてつまらなさうな顏をしてゐることが多かつた。お八重は、順吉を他にして、長火鉢の前で婆さんと世間話などをした。

婆さんはお八重の話を順吉に滅多にしなかつたけれども、順吉の話はよくお八重に話して聞かせた。

『一日、默つてゐて、口をきいたことなどはないよ。お前さん。御飯の時、下りて來るだけだよ。』などと婆さんは話した。ある日には、『今日めづらしくお客があつてね。何でも難かしい話らしかつたよ。私は何も深いことは知らないけども……家のことらしかつたよ。』などと言つた。

婆さんとお八重の母親とは、懇意にして、何か出來ると、互に持つて行つたり持つて來たりした。婆さんはお八重の家に行つて一時間も二時間も話して來た。

女がかう言ふと、順吉は默つて、蒼白い顏をして、深い思に包まれたやうにして、長い間顏を上げずにゐた。

時には女の方からツケ〳〵言ふやうなこともあつた。

『だツて、無理ですよ、そんな。』

『ぢや、何うすれば好いのだえ？』

『他に、いくらも好い女がゐるぢやありませんか。〆香さんでも、雪枝さんでも好いぢやありませんか。』

こんなことを言ふこともあるけれども、それでもお八重はよくその順吉の二階に泊りに行つてやつた。朝など、お八重は其處から毛すぢだの石鹼だのを持つて、近所にある風呂に行つた。

朋輩は、

『昨夜は此方？　早いのねえ。』

『あれから何うして？』

『あれから、私もぢき歸つたから、あとは知らないけれども、染ちやんが泊つたらしいよ。』

『染ちやんが……本當？』

『さうらしかつたよ。』

ですもの。十二時でしたもの。』かう言づて申譯をすると、順吉はそれに對して何の言葉をも出すことが出來なかつた。

『後生だから、私の言ふことを聞いて吳れる？』

『聞くとも……』

『後生だから、もう少し私をかうしてソツとして置いて下さいな。貴方の心がわからないんぢやないのよ。それはちやんとわかつてゐるのよ。だけどもう少し經たないと、貴方の言ふやうには出來ない私の體なんだから。元のやうにしておいて吳れない？』

『元のやうツて？』

『此處の二階なり、あそこなりで逢ふばかしにしておいて下さらない？』

『何うして？』

『譯があるのよ。』

『その譯を話してお吳れ。』

『それは、あとでわかるから……今は聞かれても話せないのよ。』

『話してきかせたツて好いぢやないか。』

『後生だから、それは聞かずに置いてね。後生だから。』

は生きてゐられない。本當に生きてゐられないんだ。僕はお前の爲めには、僕の出來るだけのことを盡したんだ。僕の體も、僕の財產も、僕の一生も……それなのに……それなのに……それなのに……』大きな淚はボロ〳〵と痩立つた順吉の蒼白い頰を流れ落ちた。

六

月日は經つて行つた。土手の下には靑い草などが萠え始めた。夜は近所の池で蛙のコヽと鳴く聲が聞えた。夜風はまだ寒いけれど、あたりはぼうと霞んで、通り拔けの遊園地の裏の六角燈の灯が、明るい光線の輪を大きく描いた。『今晚は――』などといふ艷な聲が格子戶のところで聞えた。

順吉は此頃は、每晚のやうにお八重の家に出かけて行つた。お八重がお座敷に出てゐようがゐまいが、長火鉢の前に坐つて默つてその歸るのを待つてゐた。お八重はまたお八重で、順吉が來てゐようがゐまいが、檢番から口がかゝつて來ると、すぐおつくりをして出かける支度をした。

『今夜、歸りに寄るから、もう宅に行つてゐらつしやいよ。』

お八重はこんなことを言つた。

約束して置いて、歸りに寄らない夜などは、順吉は焦れて〳〵婆さんの手におへないやうなこともあつた。その癖、お八重が『昨夜寄らうと思つたんだけども、あんまりお座敷をしてくたびれて了つたん

かな家で、始めて順吉がお八重に逢つたのもそこであつた。女將は三十五六の氣のきいた上さんで、『まア吉田さん。』と言つて、行く度びにいつも下にも置かぬやうな取扱ひをした。順吉の爲めに特別に浴衣だの掻卷だのを拵へて置いた。藝者あがりだけに、調子が柔かで、口が旨くつて、痒いところに手の屆くやうなところがあつた。女中にはお高といふ年增がゐた。

かねて知つてゐる年增の藝者や、お酌や踊の旨い妓達がその夜はずらりとその席に竝んだ。三味線は頻りに鳴つた。順吉は醉つて女の肩に手をかけたりした。順吉の眼の前には種々な色彩がチラ〳〵と三つも四つにもなつて見えた。煩悶も懊惱も何も彼も皆な熔けて流れて行つてゐた。烈しく醉つて床の中に倒れてから、『いゝか、おい、お八重、僕は養子になるんだぞ。こんな好いお婿さんは何處に行つたつてありやしない。』こんなことを言つて足をドタバタさせた。さうかと思ふと、暫く經つて女中が行つた時には、床の上に眞面目になつて坐つて、大きい涙をホロ〳〵と眼から落してゐた。『よう御座んすよ、貴方の言ふ通りになりますよ。見つともないぢやありませんか。』女はこんなことを言つてゐた。

『一體何うしたの？』

心配して女中が訊くと、

『何アに、醉つてるんですよ。』お八重はかう言つて順吉を寢かすことに骨を折つた。しかし順吉は何遍となく床の上に起き上つた。『これほど……これほど思つてゐるぢやないか。お前がゐなくつては、僕

『本當だよ。貴方の方ばかりして下すつても、此方でそれだけのことが出來なくつては仕方がありませんから。』

『何アに、好いんだよ、少しばかりだから、預つて置いて吳れ給へ。その中まとめて、抱妓でも置けるやうにするから。』

『でもねえ。』

『まア、好いつて言ふのに……』

『ぢや、母さん、お預りしてお置きよ。』

かう娘に言れて、

『さう……ぢや、』母親はそこに置いてある紙包を別にあらためもせずに押戴く眞似をして取つて、そのまゝ簞笥のある室の方へと行つた。

『また、近い中に伺うかするから。』

『いゝえ。』

順吉は兎に角金を女に預けたといふことに滿足を感じた。これで兎に角女にある義務を感ぜさせることが出來ると思つた。

その夜、順吉は女を伴れて、かねて行きつけの待合に出かけて行つた。それは寺の後にあるやうな靜

『あんな妓は駄目だよ。』

『さうかしら、私は此間中から見た中では好い方だと思ふんだけれど。』

母親は何か言はうとしたが、それはよして、『まア、もつと見なくつちや――』

突然、順吉は內懷から財布を出した。何をするのかと母子が思ふ間もなく、中から紙包を其處に取出して、

『此間のね、段々その中にするつもりだけれど、先づこれだけ預つて置いて吳れないか。二百あるよ。』

餘り突然なのに呑まれたといふ風に、母子は唯顏を見合せた。お八重の方を見た母親の眼には、これを受取つて好いか〱といふ疑問の意味が深く籠められてあつた。

一座は暫し默つた。

お八重の胸には、此間の夜それとなしに話した寢物語が一つ〱蘇つて來てゐた。養子になつても好いなどと言つた男の言葉が胸に支へた。店を賣れば二千や三千は何うにでもなると言つた言葉も思ひ出された。お八重は順吉の眞面目な眞劍な顏を見た。

『少しだけどもね……その中、また何うにでもするから。』

『いゝえ、そんなことはないんですけれども……お預りしてもねえ母さん。』

いろ〳〵世間話をして、茶などを飲んでゐると、格子戸が明いて、やがてお八重は歸つて來た。『入らつしやい。』と挨拶したが、男の傍に坐つて、煙管を取上げて、『何處へ行つてゐたんですの、浮氣？』

『そんなのんきぢやないんだよ。』

『でも、三日も內を明けるなんてめづらしいから。』

一服喫つて、トンとはたいて、急に思ひ出したやうに、『今日新富に行きませうか。』

『芝居はつまらない。』

『私も餘り行きたくはないんだけど、賴まれて困つて了つたの。藝者も義理さへないと好いけれどもねえ、芝居だけでも、今月行つて見なければならないのが四つもあるのよ。稼業はひまで、芝居にばかり行つたつて面白くも何ともありやしないわねえ。』

『でも自動車なんか隨分通るぢやないか。』

『皆なつれ込ばかりよ。土地はひまよ。昨夜なんか二十位しか動かないんですもの。』これでは仕方がないといふやうな表情をして、『でも、梅ちやんのところなんか、抱妓がよく賣れるんだとさ。あの子が精を出して吳れるんで、姐さん大助かりですよなんて、母さん言つてゐてよ。本當にあの子はおとなしい子だものね。家にも是非置かなくつちやね、母さん。』

かう言つて、『此間の妓は何うしたらう？』

が知れて呉れるのを順吉は望んだ。しかし、何もそれらしい氣勢はなかつた。二階はからりと明いて、洗つた足袋が二足干してあるばかりであつた。

ちよつと近所へ行つたとて、お八重はゐなかつた。母親は眼がまだ痛いのだけれど、寢てもゐられないと言つて、布で押へながら長火鉢の前に坐つてゐた『下女が何うしても欲しいんですけれども、好いのがなくつて困つてゐるんですよ。』かう言つて、『さう言へば、二三日お留守でしたつてね。お店の方へ行つてゐらしつたんですか。』

『婆さん來ましたか。』

『婆さんも來ましたけれど、お八重も行つたんですよ。』

『何日?』

『昨夜でしたか、一昨日でしたか。』

『さうですか。』順吉は母親の方を見ながら、『ちよつと用があつたもんですから。』

『お店? 旅行?』

『いや、店にもとまりました。それにしても眼は何うです?』

『いくらかは好いんですけどもね。何うも矢張痛みましてね。』母親はかう言つて、眼に濕布する藥の入つた土鍋を火の上にかけた。

順吉は歩きながら、内懐に手を入れて、財布を明けて、金を二つにわけることに苦心した。十圓札を一枚一枚數へて見た。あとに殘して置く金を先づ先きに數へて、それを財布の別のところに入れて、更にあらためて、やる方の金を數へた。確かにその數があつたが、念の爲めに、もう一度數へて見て、それを四つに折つて財布の出し好いところに入れた。あとに、別に、金が五六圓あつた。

これで順吉は安心したやうな顏をして歩いた。川霧は着物をぬぐやうに靜かに次第に晴れて行つてゐた。櫓を押して流を下つて行く船は繪か何ぞのやうに見えた。土手の休茶屋では、葦簾の蔭で赤い襷をかけた女が何か頻りに饒舌つてゐた。

朝歸りの自動車が一臺順吉を掠めるやうにして通つて行つた。若い美しい藝者の横顏を順吉はチラと見た。

華表の脇から土手を下りて、細い通を曲つて、わざと裏の方から入つて行つた。そこには酒屋があつたり理髮店があつたりした。湯のし屋の男は、薄日の影に布を張つて、頻りに刷毛でその上を擦つてゐた。

家と家との間にある百坪ほどの空地では、男の兒が二三人集つて頻りに凧を揚げてゐた。順吉はそこから曲つて溝板を踏みながら、段々その家へと近づいて行つた。そこを少し行くと、女の二階が見える筈である。順吉は女の祕密を嗅ぐやうにしてこつそり歩いて行つた。女に祕密があるなら、今の際それ

櫻の木がさびしく竝んで見えてゐた。車が一臺二臺土手を通つてゐた。

順吉は二三日來のことを頭に描きながら歩いた。兄が知つたら、何んなに驚くだらう、番頭が知つたら、何と言ふだらう。順吉は誰にも內密で自分の判を持ち出して登記所に行つたことを思ひ出した。萬事祕密に事を運んだ仲介者の顏が見えたり、登記所の前に寒さうに蹈んでゐる小狗が眼の前にちらついたりした。金を受取つた時には、これが自分の總ての財產といふ氣がした。一晚知らん顏で店に泊つた。店にあるものはまだ自分のものだが、今月からは家賃を拂はなければ此の家に住んでゐられないと思ふと、堪らなく心細い氣がして容易に眠られなかつた。今朝は早く起きて、かねて取引してゐる銀行にその金の大部分を當座預けにした。

順吉は懷に三百圓ばかりの金を持つてゐた。やるのはいつでもやれる。まづ當座それだけやつて置かう。さうして樣子を見よう。かう考へながら順吉はやつて來た。ふと步きながら、もう百圓へらして、二百圓だけ渡して置かうと考へ直した。百圓位持つてゐなければ困るとも順吉は思つた。

順吉はやる金と殘す金とをわけて置かなければならないと思つた。また持つてゐる金を女や女の母親に見られないやうにすることが肝心だとも思つた。何處か靜かな休憩所でもないかと思つて順吉はあたりを見廻した。しかし、その近所にはさういふものは見當らなかつた。と言つて、下宿の二階に歸る氣にもなれなかつた。女や女の母親の前に一刻も早く金を竝べて見せてやりたいやうな氣もした。

『本當に好いわねえ。』

姉妹はかう言つて餘念なく海を眺めて立つてゐた。

『あの時分はまだ好かつた。まだ金があつた！』順吉はかう叫んで自分で自分の胸を押へた。金――最後の金のなくならない中に、女を何うかして了はなければならないと順吉はすぐつゞいて思つた。少くとも自分のものに。大勢の男の許から安全に自分の許に。

三人でなくとも好い、二人でも好い。兎に角抱妓を置いて、あの女が稼がないでも生活が立つやうにしてやれば、あの女だつて自分の情に絆されないこともあるまい。あの母親だつて、恩義に感ぜずにはゐられまい。つまらなく金をつかつて了ふよりは、一度にさういふ風にしてやる方が好い。このまゝ續いてゐれば何うせなくなつて了ふ金だ。女もさうして貰へば好いといふやうな口吻であつた。さうして體を自由にしてやれば女だつてまさかのことは出來まい。さうだ、さうだ！　順吉は決心した。順吉は目のまはるやうな氣がした。

五

ある寒い朝、順吉は土手の上を歩いてゐた。薄日を受けた川霧は、やゝ紫色に染つて、軽く孕んだ帆がその中から一つ〳〵顯れて來た。もう午近い時刻であるに拘らず、あたりはしんとして、葉の落ちた

つて言ふもの見たことがないから。』お八重はこんなことを言つて、平氣でその中に入つて行つた。集つてゐた信者達はめづらしさうにして、きよろ／＼と此方を見た。若い青年はイエスの訓を書いた小さな刷物などを呉れた。讃美歌につゞいて、傳道師らしい男が立つて、イエスの大きな德をたゝへたやうな話をした。青年時代に基督教の信者で、洗禮まで受けようとした順吉は、限りない反省の念に責められずには居られなかつた。順吉は女と女の妹とを促して其處から出て來た。

『耶蘇つて面白いもんですね。お經は讀まないんですね。』女はこんなことを言つて笑つて、『矢張お寺の方が神々しくつて好いわね。お寺に行つてお經を聞いてゐると、心から難有くなりますけれど、耶蘇ぢや駄目ね。』

『あれでも坊さんなのよ、姉さん。』

『あれで坊さん？　あの立つて何か饒舌つてゐた人が？』

姉と妹はキヤツキヤと言つて笑つた。

やがて町の通が盡きて、三人の前には、濶々とした海が現はれた。『あれ、姉さん、お月さまが。』かう言つて妹の指さす方には、繪に描いたやうな月が靜かに海から輾り上つてゐた。黑く一刷毛に撫でたやうな海岸の山の向うには、波がキラ／＼と美しい細かい光を漂はした。

『好いわねえ。』

『さうなら、さうと思つてゐるが好いよ。』

順吉はその時ほど金を使つて痴かな眞似をしてゐる自分を罵りたく思つたことはなかつた。順吉も腹が立つてゐた。

『好いんですね。さう思つてゐて好いんですね。その口を忘れずに置いて下さい。好う御座んすか。』

女も流石に怒つて蒼白い疳の立つた顏をしてゐた。

『好いとも。』

順吉はぷいと外へ出て行つて了つた。その時のことがをり〳〵順吉には思ひ出された。その時には順吉はいつも悲觀した。あらゆる金、あらゆる力、あらゆる深切をつくしても、その女の體を自分のものにすることの出來ないのを情けなく思つた。

しかし溫泉場で過した十日は、順吉に取つては一番樂しい月日であつた。海に船を浮べて遊んだ時のことや、海水の中に透きとほつて見える女の肌や、發動機の小さな舟で初島に遊びに行つた時のことや、大きな波や、さういふものは長い間順吉の眼にちらついて見えた。盆の二三日は田舍の町は賑かで、酸漿提灯などをつけた子供達が大勢町を通つて行つた。順吉達も樂しい心持でその町の通を歩いた。ある家の前では、迭火などを焚いてゐた。何處の家にも明るい灯がついて、靜かな笑聲が洩れて聞えた。

灯の多い處に近寄つて見ると、それは基督敎の傳道の集りであつた。『入つて見ませうよ。私は耶蘇を

『だつて、貴方のやうなのは少いわ。貴方はすぐ深く思つて了ふから駄目なのよ。もつと輕い氣分でいらつしやいよ。』

『でも……』

『出來ないつて言ふの。外に何にもわるいところはないけれど、執念深いのは貴方の疵よ。男つて言ふものはもつとさつぱりしたところがなくつちや——』

『でも心から思ふからだよ。』

『それはさうでせうさ。それはわかつてゐるわ、私にだつて……。けれども、心から思ふつて言つても思ひやうがあるわ。貴方のは餘り一本道だわ。』

順吉は其時は默つてゐた。

ある時は女の望みを適へてやらなかつたので——順吉が剛情を通したので、たうとう女を怒らせて了つた。女の望みと言つても、ほんの些細なことであつたけれど。

『私、明日歸りますからね。』

『さうか。』

『だつて、本當にわからない人つてありやしない。貴方は心から思ふの、眞劍だの、眞面目だのつて言ふけれども、根は薄情なんだから。』

その文句は今でもちやんと覺えてゐる。――わたくし妹と一緒に此處にまゐりました。十日ほどをるつもりです。萬事御目にかゝつた時申上げます――かうした簡單なものであつた。宛名はまだ書いてなかつた。順吉は宛名を書いてからまた見ようと思つてそツとして置いたが、何時の間にか、女はそれを出して了つた。

『あの端書何處にやつたの？』

突如かう訊くと、

『端書なんか知らないわ。何んな端書？』

『此處にあつたぢやないか、』

『さう？　知らない。』

女が隱さうとするので、順吉は强ひてそれを聞かうともしなかつた。しかし、女が隱したといふ事實は、順吉に種々なつき詰めた考を起さしめた。かれは未だにそのことを覺えてゐた。

虛僞をついたり、隱したりするのを何とも思はない社會にゐる女だといふ風に輕く思つて了ふことの出來ないのが順吉には何よりも辛かつた。あの端書をやつた男の誰であるかは、今でも順吉の頭に深く絡みついてゐた。

逗留してゐる内には、女の機嫌のわるい時なども度々あつた。ある日の會話を順吉は思ひ出した。

行くまでの艀にすつかり醉はされて了つた。一等室にぐつたりと寢たまゝ起きて景色を見ようともしなかつた。青白い顏には後れ毛がかゝつて、後にはブリキの金盥に物などを吐した。

溫泉の出てゐる海岸、漁師の家の澤山に竝んだ町、かれ等の選んだ旅館は、二階から海の見える大きな構へで、その奧の方の副室のついた八疊で順吉は樂しい十日を過した。

夜遲く仕切つた方の浴槽に二人して入つてゐると、知らない浴客が不意に入つて來て、それを見て慌てゝ出て行くやうなこともあつた。女のつまらなさうにしてゐるのを順吉はつとめて慰めるやうにした。順吉は其處では女の言ふことを何でも聞いた。

宿から海岸へ出て行く道を、順吉達はよく步いた。海水浴に出かけて行くために、順吉は女の海水着を買つてやつたりした。女の白い肌は碧い海水の中にすき透るやうに見えた。

『伊東ッてあつい處ね。』

かう女が度々眉を蹙めるほどそれほど暑いところであつた。日中は女は貸本などを借りて、襦袢一つで橫になつてそれに讀み耽つた。都新聞を每日かゝさずに讀んで、『あ、三助さんのことが出てゐるよ、……でも、これはうそよ、あの人にはもつと別に好い人があるのよ。新聞なんて、好加減のことを書くもんね。』などと言つた。

順吉はある日女が書いて硯箱と一緒に碁盤の上に置いた一枚の繪葉書を發見したことを思ひ出した。

に腰をかけた。何うせ逢ふわけには行かないが、蔭ながらでも好いから見たいと思つてゐると、やがてその書生に逢ふために、向うから一人の男が出て來た。幸ひに、あけたドアは半開いたまゝになつて長い間放つて置かれてあつた。順吉は其處に大勢の社員の集つてゐるのを見た。その中にその男がゐるんだ……。かう思つて斜に其方を見てゐると、丈の高い髭の濃い男が大股に歩いて此方にやつて來るのが見えた。

ドアが急に外から烈しく閉められた。

順吉は慌てゝ階梯を下りた。かれはそのドアの音に追はれるやうにして下へと走り下りた。外に出てほつと呼吸をついた。

四

その時は女と女の妹と三人して出かけた。まだ金を澤山に持つてゐた。かれは女がもうすつかり自分のものになつたやうな氣がしてゐた。

ある海岸では、松を透して海の見える室で午飯を食つた。波打際から十町ほど隔つた沖には、自分等の乘つて行くべき白い青いペンキ塗の汽船が波にゆられながら薄い烟を烟突から颺げてゐた。『あの船で行くんですか。小さい船ね。大丈夫かしら。』などとお八重は言つた。果してお八重は岸から沖の汽船に

橋の袂で電車に乗つたがれは、いつかその會社の近くの停留場に來ると、下りるともなく下りて了つた。それは通りから少し入つたやうなところにある大きな會社で、店の方には小僧達が頻りに客に應對してゐた。店の前には卸しの荷を積むための荷車や箱車が澤山に集つてゐた。

知つてゐる人がゐないから、とても中までは入ることが出來ないと思つて、大きな入口のドアを押した順吉は、思設けず自由に二階三階までも上つて行けさうなのを發見した。かねて女から聞いてゐる名を思はず口に出して言ふと、そこにゐた小僧は指して二階を教へた。

其處に竝べて置いてあつた草履を穿いて、順吉は大膽にも二階の階梯を上つて行つた。上り終ると應接間らしいものがあつて、その奧では大勢社員が忙しい事務を取つてゐるのが見える。かれはそこを傍に見て、猶上らうとすると、不意に應接間の扉が明いて、其處から立派な髭の濃い紳士が出て來た　しかし別に順吉を怪しまうともせずにすれ違つて下りて行つた。順吉は猶昇つて行つた。その奧にその男のゐる一室のあるのを順吉は知つてゐた。

その部に屬した應接間は、二つに仕切つてあつて、兩方に丸いテイブルが置いてあつた。奧の方をちよつと覗いて見ると、そこには客があつて、ハイカラな男が頻りに何か話してゐた。順吉は人に見られるのを恐れるやうに、窓の方に顏を向けて、そして外を見てゐた。

また、あとから客が上つて來た。書生風の男であつた。勢よく卓の上に風呂敷を置いて、そして椅子

い顏を見た。』

『こちらは越前のですが、これは北海道や樺太のから見ると、餘程よろしう御座います。』

『ぢや、それを貰つて行きませうか。』

かう言つて一つ買ふことにきめて、今度は自分の國で出來る飯章魚の鹽辛の話を持ち出した。

『え、あれも、何うかすると、參ることが御座いますけれど、何しろ、長く置けないもんですから、來てもぢき賣つて了ひます。おところがわかつてをりますれば、參つた時におとゞけしても宜しう御座います。』

かう言つて、男は奧の卓のところに行つた。順吉が見てゐると、頻りにもう一人の若い男を相手に何か仕入のことを話してゐた。

順吉は嫉ましいやうな羨しいやうな氣分に充されて其處から出て來た。ひとり手に自分とその男とが比べて考へられた。そのハイカラなやさしい笑顏がこびりつくやうに順吉の眼に映つて見えた。かれは思はず溜息を吐いた。

その時ふと順吉はもう一人の男の方を思ひ出してゐた。『だツて恩になつてゐる人もあるんですから。』と女の言つた男である。『そりやわかつた人ですから。』とも女の言つた男である。順吉はその男の勤めてゐる會社をも女から聞いて知つてゐた。次手にその男も見てやりたいと思ひながら歩いた。

十四五の小僧が出て迎へた。

『何かめづらしい罐詰がないかね。』

かう言ひながら、順吉は奥の卓に凭りかゝつて、洋服姿で、派手なネクタイをあたりに見せて、懇意らしい人と頻りに話をしてゐる三十五六の男に眼を着けた。確かにそれだ。女の家で見たことのある寫眞の男だ。寫眞よりはぐつと肥つて立派になつてゐた。順吉は俄かにあつい血の體中に漲つて來るのを覺えた。女の親指の下に青く微かに殘つてゐるその男の血が思ひ出された。

『何かないかね。』

『いろ〳〵御座いますが。』

種々の罐詰を手に取つたり何かしてゐながらも、順吉の心と眼とは絶えずその男の方に向つてゐた。あの女の肌を知つてゐる男、一時は互に熱くなるまで惚れ合つた男、今でもこつそりあの二階で逢つてゐるのかも知れない男、かう思ふと、その幸福な男が堪らなく羨しくなつて來て、種々な雜念が早く凄じく順吉の胸に渦巻き上つた。しかし男はそんなことゝは夢にも知らず、話が濟んだ後の挨拶をして、店先まで丁寧に客を送り出して行つたが、戻り際に、

『何ういふのが宜しう御座いますか。』

と言つて、手近にあつた罐詰を取上げて順吉に話しかけた。順吉はやさしい笑を含んだ綺麗な色の白

ものはない。越前の蟹の罐詰などを今でも男は女の許に屆けてやつたりした。女はある時話した。『此間奥でよし町の女を伴れて來てゐるところに出會したのよ。それから電話をかけて、罰金をおよこしなさいツて言つたら、蟹と蝦の罐詰を送つてよこしたのよ。あそこのは旨いわねえ。』こんなことを女は言つた。それから、芝居の見物を多く賴まれたり何かすると、女は電話でその見物を男に賴んだりすることなどもあつた。『いつでもゐるかえ、あそこに……。』かう言つて訊くと、『え、ゐるわ。あの人が行つてから、あそこは大變よくなつたんですもの。去年まではねつから駄目だつたのが、今年からは大變好いんだツて。利口な人ですからね、此間もちよつと寄つて見た時には、前垂なんかして、意氣な番頭さんになつてゐたわ。』などと女は話した。

一軒々々注意して行つたに拘らず、氣がつくと順吉はいつか尾張町の角の見えるところまで來てゐた。電車の交叉點に人が大勢集つてゐるのが見えた。大時計は三時半のところを指してゐた。

『尾張町よりは前の筈だ。』かう思つて、順吉はそこから引返した。柳の葉には日が薄く照つてゐた。少し戻ると、角に構へのさう大きくない日覆ひのしてある店が眼に附いた。店には一杯に罐詰類が竝んでゐて、上を見ると、藤屋としてあつた。順吉ははつと思つて、そのまゝそこを通り越して、また引返して、思ひ切つて其處に入つて行つた。

『入らつしやい。』

は遁げた。
長い間に築き上げた感情と、旨目につかつた金とが、女に對する心持を容易に解釋することが出來ないほど複雑にしてゐるのを順吉は見た。これで女が知らん顔をして、薄手をも負はずに平氣で自分から別れて行くことが出來ると思ふと、順吉は赫となつて、自分で自分の拳を堅く握りつめた。

銀座の商店にゐる男が氣になつて氣になつて仕方がない時があつた。何うしてもさうだ。何うしても今でも關係がある。かう思ふと、ゐても立つてもゐられないやうな氣がした。でなければ、あんなに氣の強いことを女が言ふわけがない。確かに男は時々あの二階に來る。そして泊つて行く。堅い堅い約束がしてある。順吉はある日一人でこつそりその男を見に出かけて行つた時のことを思ひ出した。
それは去年の秋の頃であつた。半ば曇りかけてゐたが、をり〳〵薄い日影が街頭の柳の葉を照してゐた。順吉は電車でそこまで行つてその橋の袂で下りた。アスハルトを敷いた人道には、人がぞろ〳〵と通つてゐた。大きな勸工場の中からは、子供に人形を買つてやつた若い細君が莞爾して出て來た。ステツキをついて帽子を阿彌陀にかぶつた新聞記者らしい洋服姿の男が急いで歩いて行つた。
順吉はその左側を一軒々々注意しながら歩いて行つた。
かねて女から聞いて知つてゐた。罐詰や地方の名物を賣る大きな店、銀座で藤屋と言へば誰知らない

は、順吉はそつと裏から忍んで行つて、塀の外に三十分も立盡してゐた。二階には確かに灯がついてゐて靜かに笑ふ聲が聞えた。かと思ふと、しんと靜まり返つて暫くは人のゐる氣勢もしなかつた。順吉は塀の中に入つて行くことの出來ない身を嘆いた。

順吉が知りもせぬ球を精出して覺えて、角の球つきに入るやうになつたのも、いろ〳〵な姐さん達やお酌達に懇意になつたのも、檢番の箱屋などに挨拶をされるやうになつたのも、皆な女の眞の狀態を知りたいためであつた。順吉は宅の婆さんの言葉の中からも、其處らに大勢ゐる女中の口からも、絕えず女のことを知らうと注意した。

『そんなに疑ぐるなら、何うともなさいな。』

『何うともとは何うするのだえ？』

『よすなり、何うするなり、他にいくらも好い女があるんですから……。私のやうなものよりもつと好い人がいくらもゐるぢやありませんか。』

『馬鹿を言へ、今、やめられて堪るもんか。今までのことを何うするんだ？』

『今までのことツて？』

順吉は女の冷かな言葉に赫として、何か言はうとして、どもつてそして默つて了つた。さういふ思出は順吉には澤山あつた。いざとなると、『だツて藝者にそんなことを言つたつて無理ですよ。』と言つて女

元氣はなくなりましたね。滅多に昔のやうに遊ばなくなりましたね。それだけ遊びが上手になつたんですね。』こんなことを女に言はれると、順吉は不愉快な顏をして凝と女の顏を見た。絕えず細かい細かい觀察を自分の經濟の上に注いでゐるらしい女が氣になると共に、かうして女に近附いて來た自分の痴かさが繰返された。時にはつとめて金に困らないやうな樣子を粧つて、ありもしない金を女の姐さんや朋輩や義理ある妓に浪費して了ふことも少くなかつた。

何んなに困つた時でも、順吉は月の末には屹度その手當の金を女の宅に屆けた。

今の二階の一間を借りた時にも、何もこんなところにわざ〳〵下宿しないでも好いのであつた。店にゐれば、皆なに立てられて、旦那ですましてゐられるのであつた。しかし、女を——それほど心と金とをつぎ込んだ女を大勢の男の中に唯で投り出して置くには堪へられないやうな氣がした。勿論、その時には女の勸誘もあつたのだが、『さうする方が好いわ、さうすれば、私、始終來るわ。泊つて行つたッて構ひやしない。何うせ宅には誰も來ないんですから。』かう言つた女の言葉に誘はれたのであるが、しかし女が氣にならなければ、何もわざ〳〵高い間代を出して、無駄な金を費つて、かうしたところにひとりで下宿してゐる必要はなかつたのであつた。來た當座、順吉は女の一擧一動を知らうと思つて、こつそり女の聘ばれて行つた待合の垣の外に立聞したり、女の車の跡を追かけたり、女の宅の周圍を人知れぬ闇に思ひをつゝみながらさまよつたりした。女の二階に男が來てゐるといふ想像に惱まされた時に

順吉の耳に殘つてゐる。

女と初めて知つた時は、女が看板借から自前の姐さんになつた親達を其家に呼び迎へた當座であつた。初めゐた家は、二階が一間、下が二間の小さい家で、かう狹く不自由では仕方がないと言つて始終こぼしてゐた。そこから今の家に移轉するについても、順吉はいくらかの金を出してやつた。段々順吉はその家の人々と懇意になるやうになつて行つた。時には旦那然と長火鉢の前に坐つてゐるやうなことも尠くはなかつた。

順吉はいつの間にか月々の手當が殖えて行つたことを考へた。何うかすると、ツンケンした無情い素振を見せることもあるが、此方の出やうに由つては、自分と一緒になる氣が女にないでもないやうな處があつた。女はこれまでに關係した種々の男の話を順吉にして聞かせた。お茶屋や姐さんのイヤな交際に倦んだ時には、『いつそやめて了はうかしら。』などと言つて、女は涙含んだ眼色をして順吉の腕に絡みついた。

始めはそれほど苦痛に思はなかつた月々の手當が、段々苦しくなつて來る時分には、順吉はもう兄弟や親類から意見されるやうな位置にその身を置いてゐた。無限に續く手當のことを考へると、金のきれ目が緣の切れ目といふやうな氣がして仕方がなかつた。順吉はやがて來る女とのわかれを想像して絕えず懊惱した。

しかし順吉は手元の不自由になつたことを女に見透されることを恐れた。『この頃、貴方も元のやうな

銀行をよして、身を固めなければならないと思つて、田舍に行つた時分と今とを引較べて順吉は考へて見た。あの時分は、女とはまださう深い關係も出來てゐなかつた。玉と祝儀で逢つてゐた。其時分は女も今のやうに自分につれなくもなかつたことを考へた。それにあの時分はまだ月々の手當などもやつてなかつた。

その月々の手當をやるやうになつたのも、女の望んだといふよりも、寧ろ自分からさう仕向けて行つたやうなものであつた。それは矢張ある一間で泊つた時であつた。女のやさしい呼吸は順吉の心を蕩かすに十分であつた。女の後向の長い髱からは油の好い臭がした。

その時、女はぐるりと此方を向いて、

『本當に?』

『その位のことはわけはない。』

『ぢや、して下さいね。さうすると、私も大變樂になつて嬉しいわ。』

『好いとも、わけはないよ。』

『さうすれば、御祝儀なんかその度々に戴かなくつたつて好いわ。』

さう言つて女は喜んだ。その一夜ほど女が自分のものゝやうな氣がしたことはなかつた。その夜は更けてから大粒な雨が凄じく降つて來た。離れの板屋根にばら／＼と當つたその雨の音は、今でも歴々と

の紅い袖、さういふものは常に開けない男の心の扉を容易に開かせた。帶を買つてやつた時もさうなれば、袷をつくつてやつた時もさうであつた。ある年の暮には尠なからぬ金を弊屣のやうに捨てるやうにして女にやつた。

あの金は是非問屋にやらなければならない金であつた。明日は屆けてやらう。かう思つてかれは財布の奥深く藏つて置いた。忘れもしない、その日昔の友達がやつて來た。友達は僅かばかりの金で入牢しなければならなかつた。友達は泣かんばかりにしてその金の才覺を賴んだ。しかし順吉は無いと言つて斷つた。そしてその金をその夜順吉は女に渡した。

『好いよ、此處に少しあるよ。』

順吉にはいくら金があつても女がゐなくつては仕方がないやうに思はれた。遠くの方に女の馴染があつた。それが大きな藝者屋の旦那で、大勢抱へなどもゐて、行けば七百圓位は出して吳れるといふ話をした時には、順吉は今にも女は其方に行きやしないかと思つて心配した。

順吉は女と初めて知つた時分のことををりく頭に浮べて見た。その時分はまだ銀行に行つてゐた。同僚に、この女の友達の馴染があつて、それで順吉はお八重を知つた。それからもう三年になる。同僚も今では銀行をよして、兜町の方へ行つて、一時は大變に好かつたが、今ではすつかり失敗して、女の家にごろくしてゐた。

『えゝ。』
『それは本當かえ。』
『さうすれば好いんですけれども、大變ですからね。』
『今夜はすつかり話してお呉れよ。僕は眞面目に言ふのだから、さういふことをして困るやうなことはないのかえ、あるならあるツて言つてお呉れよ。』
『そんなことはないわ。』
『本當に？』
『え。』
『今日來た人は？』
『また始めた……、人が眞劍で聞いてゐれや、すぐあゝなんだから、……私はそんなんぢやないツていふのに……』
言葉に似合はず女はやさしい微笑を顏に湛へて男にその柔かな體を寄せかけた。

三

順吉は總て今までさうして女に入揚げて來たことを繰返した。柔らかな女の腕、紅い女の唇、長襦袢

やかない。決してやかない。僕は何んな隅つ子の方にでも滿足してゐるから、このまゝにして置いて哭れ、金なんかいくらあつたッて仕方がない、お前がゐなくつちや――』かう言つて、泣かれたことがあつた。

お八重も默つてゐた。

小半時も順吉はかうして考へてゐたが、『君の體はすつかり綺麗にして了ふことは何うしても出來ないのかえ。』

『そんなことはないわ。』

『でも、いろんなことがあるッて言つたぢやないか。』

『それはあるわ。だけど、旦那つていふほどの人ぢやないんだから。』

『ぢや、何うすれば好いんだ。』

『これで、私は係累が多いんですからね。親や兄弟の方もまだ見てやらなければならないんですからね。』

『それさへ見てやれば好いのかい。』

『大變ですからねえ。』

『この間言つたね。抱への三人も置けば、引いても好いッて言つたね。』

『でも、それは無理ですよ。かういふ稼業をしてゐるのですもの、さういふ約束をして見たつて仕方がない。』

『あゝあゝつまらない。』

かう言ふ男の溜息をきゝながら、お八重は腹這になつて、敷島を一本出して火をつけた。

順吉は默つてゐた。再び蘇つて來た胸の懊惱を何うすることも出來なかつた。これほど思つてゐる男の心を女は何うして汲み取ることが出來ないのかと思ふと、段々悲しく心細くなつて來た。離れられないまで女に引つけられて行つた自分の體も情けなかつた。その癖、この女に離れて後のさびしさと佗しさとを想像すると、とてもこの女の體を捨てる氣にはなれなかつた。三日ほど遠出に行つてゐなかつた時の辛さを順吉は繰返した。

吉は　頭を抱へて、突伏して、深く考へ込んでゐた。

『何うしたの?』

『何うもしない。』

『でも……』

かう言つて、お八重は順吉の方を見て、輕い溜息を吐いた。お八重は順吉のよく泣くのを知つてゐた。ある時などは、『何うか、さう思はずにゐて呉れ、お前と別れるなら、僕は生きてゐない。嫉妬なんか

『でも、ちよつと行つて來るわ。ぢき明くお座敷だから。』一遂つて出かけて行くやうな時には、順吉は一層不愉快さうな顏をした。是非行かなければならないやうなお座敷の馴染の客を順吉は想像した。『だつて、それは無理よ。そんな風ぢやとても貴方には藝者屋の御亭主にはなれないわねえ。』などとお八重は笑つた。

しかしその夜は一つかゝつて來たばかりで、それを斷つてからは、何處からも口がかゝつては來なかつた。晝間の懊惱は忘れたやうにして順吉は樂しげに酒を飮んだ。

十時にならない中に、婆さんは餉臺や片附物を二階から下に下した。二人も下に下りて、茶を飮んだり世間話をしたりしてゐた。『お炬燵は入れて置くんでせう。』といふ婆さんの聲はやがて二階から聞えて來た。

二階に上つてから、

『だつて、それは無理ですよ。』かういふ女の聲が聞えた。

話は續いた。

『……そんなことはありやしませんよ。二人きりだつて、そんなことを晝間何うしやうもないぢやありませんか。』

『でも、何んなに僕が――』

のやつてゐることが單に虚僞に向つて愛情をそゝいでゐると思當ると、ゐても立てもゐられなくなつた。新しい箪笥、大きな定紋のついた鏡臺、冬のコオト、長襦袢、それからあそこにも伴れて行つてやつた、こゝにもつれて行つてやつた、芝居につれて行つたのも何遍だかわからない。かう思うて、自分の財産の段々少くなつて行くのに業が煮えた、仕事の方に下さなければならない資本も、もう大分手薄になつてゐた。

『をばさん、二階の方が好い。』

で、餉臺は例の通り二階に運ばれた。德利、盃、よせ鍋、電燈は明るく樂しげに一間に輝きわたつた。お八重は大島の不斷着に縮緬の羽織を着て、此間拵へた長襦袢の袖を見せてゐた。順吉にはこの歡樂の一間が自己に迫つて來るあらゆる困難の唯一の避難所のやうに思はれた。兄や親類の意見も、番頭のむづかしい顏も、彼方此方から取りに來る懸けの言ひ譯も、四方から押よせて來てこの自分の最愛の女を奪つて行かうとする壓迫に對する懊惱も、何も彼もこの女の肉體の前には殘りなく消えて行つてゐた。

女の爪彈につれて、順吉は赤い顏をして小唄などを唄つた。

餘り深酒をしない順吉は、いつもぢき醉つて傍に倒れた。時には掻卷をその上にかけて置いて、女は下に行つて長い間婆さんと話してゐることなどもあつた。お座敷の電話がお八重の宅の方からかゝつて來る時には、順吉の不愉快さうな色がいつもその顏に現はれた。

度をもう既に何遍經驗したか知れなかつた。全然自分のものにした上でなければ、嫉妬も效がなかつた。……順吉は思はず溜息をついた。

『何うしたの？』

『何うもしない。』

かう言つて順吉は打消した。

女にはその他にもまだ男があつた。ある時お八重はその話をしだ。『矢張、男が利口だつたんですね。かうしてゐちやとても堪らないと思つてよしたんですね。いゝえ、惚れたツて言ふより、他から惚れた仲にして了つたやうなもんですわ。』かう言つて、女は昔話でもするやうにして話した。親指の下のところにある男の血の跡は未だに微に殘つてゐた。それに、その男は銀座の方の商店につとめてゐて、今でもをり〳〵お八重の家にやつて來るらしかつた。母親も妹もその男とは懇意にしてゐるらしかつた。女は、『それはもう綺麗なの、此方に偶に來ちや、八重ちやん好いのを取持つてお吳れなんて言ふんですもの。』などと言ふけれど、その女の言葉が何の位まで信用されるものであるかは順吉には判らなかつた。時にはその影が大きく映つて、今でもこつそりやつて來てゐるのではないかと疑はれた。自分に引較べて、一度その位にまで深くなつた男がさういふ風に單純に女から手を引いて行くとは思はれなかつた。ことにこの女からは一層離れ難いやうな處があつたっで、順吉はかういふ風にその影を大きくして見て、自分

『何うでも好いなんて、……お酒を少し飲みませうよ。』
『それぢや少し取つてお出。』
女の莞爾した顏を見ると、疳の立つた蒼白いその顏が意氣地なく崩れて行くのを婆さんは見た。順吉は長火鉢の向う側に來て坐つた。
やがて婆さんは出て行つた。
『あれからぢき歸つたのよ。母さんが歸るとぢきだつたわ。』
『何ういふ人？』
順吉は腹の中の懊惱をこの一句に集めたやうな思ひをしながら　しかもやさしい聲で訊くと、
『あれが恩人なの。』
女は笑ひながら言つたが、すぐ言葉をついで、『だつて滅多に來るんぢやないんですもの。一月に一度も來やしない。うそ、そんなんぢやないんですよ。何でもよくわかつてゐる人なんだから……』
順吉は默つて唯坐つてゐた。かう言はれると、順吉にはもう何も言はれなくなつた。腹の中の懊惱を打明けたところで、それはすぐ嫉妬になつて了ふ。女を怒らせて氣持のわるい思ひをまたするよりは、女の機嫌の好い笑顏を見てゐる方が順吉には樂であつた。それに、言ふ時はまた別にある。別なところでなくてはそれは有效に言へないやうなものである。順吉は自分の打突けて言つた嫉妬に對する女の態

てるの？』

『あゝ二階に。』

『さう。』と言つたが、『お婆さん、家に行つて、着替を取つて來て頂戴な。これぢや仕方がないから、それから、さつき貰つたお菓子を少し頂戴ッて。』

『三河屋は？』

『きいて頂戴な』

かう言つた時、二階から順吉の下りて來る氣勢がした。

障子を明けて入つて來る順吉の顏をちよつと見て、『さつきは難有う……寒かつたでせう？』

『いや――』

『あれから、お客が歸つたから、すぐ來やうと思つてゐると、春月からかゝつて來たもんだから、慾張つて出かけたのよ。此頃のやうに不景氣ぢや、一つだつて大切ですからね。』

『母さん何うして？』

傍から婆さんが訊くと、

『まだ痛いッて寢てましたよ。本當に困つて了ふ。』かう言つたが、『貴方、三河屋に際はない？』

『何うでも好い。』

『八重ちやんがあとで來るッて言つてゐたよ。』
『さうかえ。』
かう言つて、順吉は二階に上つて行つた。寒い曇つた日であつた。順吉は病院の寒い待合室などを頭に描きながら、机の前に坐つて見たが、ぢつとしてゐられないので、また下に下りて行つた。婆さんは蒼白い癇の立つた順吉の顏を見た。
『寒いねえ、お炬燵でもして上げやうか。』
『なアによござんす。』
婆さんにも順吉が時々可哀相に見えることがあつた。あれほど思つてゐるんだからと思ふと、女のつれない心なども繰返された。『もつと知らん顏をしておやんなさいよ。あんまり深切すぎるんですよ。』などと言つて慰めた。
夜になつてから、車が留つて、格子戸が明いて、お八重が入つて來た。お座敷の歸りといふ綺麗な扮裝をしてゐた。好い色に醉つてゐた。
『あれから、春月さんからかゝつて來て行つたのよ。』
『焦れ切つてゐたよ、お前さん。』
『さう？　おう寒い……。』かう言つて顏を長火鉢の火の上に當てゝ『外は寒いのねえ。お炬燵は出來

篠の駒下駄と黑の外套とは車上の順吉の頭の中を凄じく攪き亂した。順吉の體は熱くなつたり冷たくなつたりした。長襦袢の袖が見えるかと思ふと、今度は長火鉢の傍のメリンスの大きな座蒲團が見えた。確かに酒を飲んでゐた。女の顏はほんのりと赤くなつてゐた。順吉は自分にして神の力があるなら、そつとそこに行つて、二人が何んな話をしてゐるかを痛切に知りたかつた。唯ちよつと一言でも好い。女が一言言ふ、男が一言言ふ、唯それだけで好い。こんなことを思つた順吉は、あることを想像して急に堪らなくなつた。あとには二人きりだ。弟もゐない、妹もゐない。唯二人きりだ……。何んなことでも出來る……何んなことでも……。かう思ふと、自分が今まで女の爲めに盡した深切が皆なはね返つて自分に戾つて來た。『それでだ、それで己の言ふことをきかないのだ。』かう思ふと、體がまたくわつとして來た。前には母親のつくねた白髮交りの髮が見える。自分の拵へてやつたコートの縞地が見える。男の顏と女の顏とがチラ〳〵する。女が自分の痴かなのを笑つて男に話してゐるのが聞える……。耳はがんがん鳴る……。

二

二時間ほどして病院から歸つて來たが、わざと母親の車だけを歸して、自分は自分の宅へと戾つて來た。順吉はすぐ婆さんに女の宅に行つて貰つた。しかし、客はまだ歸つてゐなかつた。

見てちよつと挨拶した。

一番先に男の篠の駒下駄が眼に着いた。順吉の胸は俄かに騒ぎ出した。自分が女の心の一番奥の方にゐるなどと思つてはゐられなかつた。思はず力の入つた格子戸は高い音を立てた。

お八重は曇り硝子の間からちよつと顏を見せたが、慌てたやうに、しかし正面は明けずに、細帶をしめたまゝで、此方へと出て來た。

手で『あとで話すから。』といふ眞似をして見せて、『ぢや、あの宜しくお願ひしますよ。本當にお氣の毒ですね。』かう言つて、わざと聲を高くして、

『痛がつて、困つてゐるんですから。』

女はいつか順吉を格子戸の外へ押出すやうにしてゐた。『ぢき歸るんだから。』小聲で、艶な表情をして男の耳元に口を當てた。

順吉は曇り硝子の奥に男の影が見えたやうな氣がした。入口にかゝつてゐる黒いインバネスなども見えた。女は二三歩歩いて來て、意味ありげな笑顏を見せた。いつもの大島の不斷着の下からは、初めの頃自分の買つてやつた長襦袢の色の褪せたのが見えてゐた。

『ぢや、お願ひしますよ。』

お八重は暫く其處に立つてゐた。

てゐた、順吉は三年前に別れた妻のことなどを折々思起した。

料理店から待合、待合から藝者の家に入込んで行つた徑路などをも繰返した。順吉は女の體に自分の體のしつくり絡みつき纏れついてゐるのを想像した。金も隨分つかつた。目に立つてこれとはしてやらないが、やれ義理だとかやれ小遣だとか言つて女の爲めにつかつた金は少くはなかつた。持つてゐた金はもう殘り少くなつてゐた。順吉は時々暴風雨のやうな烈しく焦立つた思にさいなまれた。『己の深切が通じない筈はない。兎に角、あの女を己のものにしなければならない。一年でも好い、半年でも好い。』

こんなことを考へて焦躁した。

土手のところに立つて待つてゐると、迎へに行つた婆さんは、目のわるい母親を伴れて、細い通から出て來た。雇つた車が二臺其處に竝んでゐた。

『何うも痛くつて、痛くつて。』

母親はかう言つて、片手に持つた氷袋を眼に當てゝゐた。』

『ちよつと――』

と言つて、順吉は細い通の方へと駈け出して行つた。

順吉はお八重の顏を見ずには――客の何者たるかを見究めずには行かれないやうな氣がした。順吉はわざと大股に足音を立てゝ歩いて行つた。隣の藝妓屋では、姐さんが丁度出かけようとする處で、此方を

順吉の心を少なからず明るい方に作れて行つた。順吉はいくらか氣が落附いて家に歸つて來た。

『八重ちやん？』

『あゝ。』

『何つて言つたの？』

『母さんをつれて行くんだよ、これから。着物を出してお吳れよ。それに、をばさんも土手まで行つてお吳れ。』

婆さんは何も言はずに、簞笥から着物を出した。順吉がこの二階を借りてから、もう三月以上になつてゐた。婆さんの亭主は、ゴムの工場に勤めてゐた。

お八重の方からのつけとゞけが十分にしてあるので、婆さんはお八重母子のことを決してわるくは言はなかつた。お八重の持つた祕密なども決して打明けるやうなことはしなかつた。『八重ちやん、怜悧だから。』とか、『中々腕がある人なんですから。』とか言ふ位にとゞまつてゐた。

順吉は二三日來自分の身の上のことを考へてゐた。銀行の方をやめてから、獨立しなければならないと言つて、兄や親類に相談して、國に歸つて、自分の貰ふべき金を無理やりに貰つて、そして今の處の店を買つた。それは小さな洋服店ではあるけれど、――自分にもその道にかけては何の經驗もないけれども、番頭にしつかりしたのがゐて、地道にやつて行けば、多少の利益は見ることが出來るやうになつ

でのんきに樂しいことを考へてゐたのはあれは自分であつたかと思はれるほどであつた。昨夜からいろいろ繰返した樂しい空想、三人して病院に行つて、歸りは何處で奢つて來よう。目がわるいんだから、天ぷらも鰻も駄目だ。何處か並木あたりで、さつぱりした室で靜かに午飯を食はう……こんなことを考へたのもすつかり駄目になつた。順吉は柱に凭りかゝつて立つてゐた。

其處へ、表から、『をばさん、吉田さんに電話よ。』

かう言つて、いつもの隣の仕込みがしらせて行つた。

いつも借りる電話は二三軒ほど行つたある姐さんの家にあつた。順吉は急いで駒下駄を突かけて出かけて行つた。

果してお八重だ。『お氣の毒ですけどもね、貴方、今日一緒に行つてやつて下さいな。生憎、お客があつてね。私は一緒に行つてゐられないんですがね。母さんは行くつもりでゐるんですけれど……。いいえ、長いお客ぢやないんですよ。ぢき歸るんですから。ね、よう御座んすね。支度をさせておきますからね。……それぢや何うぞ……お願ひしましたよ。』かう言つて、此方で何も言はない中に電話は切れた。勿論電話が切れないにしても、此處でとやかく云ふ事の出來るやうな順吉ではなかつた。それに、女のぢかにかけてよこした聲が順吉の苦痛をいくらかは和げた。ぢき歸るんですからと言つた言葉も力強く耳に響いた。假令さういふ男があつたにしても、自分の方がその男よりは奥の方にゐるといふ考が

ら、私が氷を買つて來てやつたよ。』

『それで行くのかえ？』

『だから、八重ちやんは行かれないけど、母さんは行くつて言つてたよ。すぐ支度をするッて言つてたよ。……八重ちやん、あれで中々腕があるからねえ。』あとの一句は獨言のやうに言つた。

『何んなお客だえ？』

『鬚の濃い四十位の男だよ。イヤに人の顏をじろ／＼見る厭な男だよ。』

かねてそれとなく聞いてゐた男に相違ない。その男に相違ない。奧の待合に時々やつて來る男に違ひない。かう思ふと、順吉の胸は、氷を當てられたやうな氣がした。此間の夜、お八重と一緒に土手を歩いてゐた男の黑い後姿が眼の前にちらついて見えた。『私、世話になつてるッて言ふほどではないけど、恩になつた人がゐるんですから……。その人に默つて何うすることも出來ないんです。』かう言つた女の言葉などが颶風のやうにかれの頭に襲つて來た。

『今朝來たのかしら？』

『さうらしかつたよ。何だか、八重ちやんは昨夜何處かで飮んだとか言つて、座敷には一杯着物や何か〻散らばつてゐたよ。起きたばかりの處にそのお客が來たやうな樣子だつたよ。』

順吉はそれ以上に詳しく聞く氣にはなれなかつた。それほど心は焦立つてゐた。今まで二階のところ

戀ごころ

一

勝手の戸の明く音がした。婆さんは歸つて來たらしい。順吉は二階から下りて行つて、

『支度はもう出來てゐたかえ？』

『支度ッてまだ出來てるなかつたよ。母さん、寢てたよ。』

かう言つたが、婆さんは烟管を取上げて、『それにお客でね。』

『お客？』

順吉はある急なショックを本能的に總身に覺えた。『お客？　朝から？　何んな人……』婆さんの顏の中からあるものを搜すやうにして見た順吉は、俄かに口を噤んで其處に立盡した。

『これからお酒が始まるところなんだもの。』婆さんはのんきに烟草を一服すつて、『それから二階に行つて見ると、母さんは痛い〳〵ッて言つてゐるぢやないか、お前さん。下女もゐないし、困つてゐたか

『何うだか。』

『本當ですとも、ねえ、お照さん。』振返つて見たが、お照は遠く離れて番頭と並んで歩いてゐた。

振返ると、山の嶺には雪が白く寒く朝日にかゞやいてゐた。湖畔の路を通る時には、風が凄しく吹いて來て、地上の落葉をガサ〳〵と捲き起した。私達一行は段々瀧近く歩いて行つた。原の方へ出て行く路からは、瀑見茶屋の小屋がさびしく葉の落ちた林の中に見えてゐた。

た。

私の旅鞄と行李とは、三番目の馬の背の隅に小さくなつて積まれてゐた。その中には私の半生の經驗と苦悶と歡樂とを描いた未完の原稿が入つてゐた。私は四ケ月の山住ひをまた繰返して考へた。

肌にさし透るやうな寒さが、私達一行の周圍にあつた。人々の吐く息は白く凝結した。湖畔を通る時、振返つて見ると、湖尻に湧き出してゐる湯氣が徒らに白く颺つて、蘆ですつかり包まれた溫泉場はしんとしてゐた。

女達は尻を端折つて、草履をはいて、元氣よく馬のあとについて歩いた。番頭にからかはれて樂しげに笑つたりした。おせんは先に歩いて行く私に追ひ附いて、『足が早いこと……中々一緒に歩けませんね。』などと言つた。私達は話しながら歩いた。

『來年もまた來るかえ?』

『來ますとも。』

『來年來て見ると、もう嫁に行つてゐて、おせんちやんは來てゐないなんて言ふんだらう。』

『そんなことはありません。』

『何うだかわからない。もう待つてゐる人が町にはゐるんだらうから。』

『母さんばかりですよ、待つてゐるのは。』

さくさくと崩れた。

ある朝、私は山に既に雪が來たのを見た。

『昨夜、雪が降つたね。』

『寒いわけですね。』

おせんはかう言つて、山の雪を眩しさうに見た。町に歸る日の近づいたことを思ふと、その寒い山の雪も女達には樂みの一つであるやうに見えた。

『去年より今年は早い。』

賑かな暖かい家庭のある町、戀人や父母の待つてゐる町、誰もその町に向つて心が波打ちつゝあるやうに私には思はれた。『これから町に歸つて半年火燵にでも當つて、孫達とでも遊んで暮すんですよ。』老いた上さんは笑ひながらこんなことを言つた。

下りて行つた日は、風が强かつたが、天氣は好かつた。刈つた蘆で包んだ家はもう其處にも此處にも見えてゐた。同じ日に下りて行く家も一二軒はあつた。

駄馬が三頭も四頭もやつて來た。番頭や女中達は、持つて行く家具やら、寢道具やらを手傳つて馬に乘せた。馬の嘶きはをりをり高く朝の空氣に響いて聞えた。老主人に上さんに番頭。まだ殘つてゐる家の前を通るたびに『お先きに行つてやす。早う歸つてお出でなさい。』と言つて、丁寧に挨拶して通り過ぎ

ら引いてある長い樋の外部は全く氷で閉されてゐた。内湯はもうぬるくなつたので、私は大湯の方へといつも手拭を下げて出かけた。

『寒くなりましたな、今年ももうお了ひですな。』

近所の溫泉宿の人達が湯の中でこんなことを話し合つた。今年の客の多かつたことなどを話してゐた。馬車屋の亭主は、もう明日下りるといふことであつた。ある夜は、月が氷のやうに冴えてゐた。家に歸りつくまでに、手拭はいつも棒のやうになつた。

私は四ケ月の山の生活を繰返して考へた。私はまた都會の巴渦の中に出て行かなければならない身であつた。愛慾のきづなの中に、煩悶と嫉妬と虛飾との生活の中に――。私は私の仕事を半ばにして山から出て行かねばならない身を思つて黯然とした。

しかし、人々の歸つて了つた後を雪に閉ぢこめられて了ふにも堪へなかつた。老主人は來て言つた。『殘るものと云つて、ほんに、番人ばかりで御座いますから。……また來年は四月のお釋迦さま時分までには上つてをりますから、何うか、來年も早くお出で下さいますやうに。』

女達は樂しさうにして欬々しく働いてゐた。終日長く大根を梯につけてゐるのなどが此方から見えた。二階はもうすつかり戸を閉めて、店に近い室の方に私は机や行李を移した。踏むにつれて、庭の霜柱は

てて三組客があつたばかりだといふことであつた。女中達は町に下りて行く日の段々近くなつて行くのを喜んだ。『え、もう、ぢき下りて行くんですつて。向うの家では、もう下りる支度に取りかゝりましたから。』などとおせんは來て話した。

家々から出た人足が湖水の縁の蘆を刈つてゐるさまも絶えず私の室から見えてゐた。頰かぶりをしたり、菅笠をかぶつたりしてせつせと長い蘆を刈つた。中には赤い襷をかけた女なども雑つてゐた。

『もう、家の人足も出てゐますよ。』

欄干の處に立つて、おせんは其方を見ながら私に言つた。

『駄目ですよ、もう一月お殘りになるなんて、それは駄目ですよ。何處の宅だつて、明けて行くものなんかありやしませんもの。それに、世話をして呉れる人はありませんからね。あすこの大湯の傍に二人番人が殘るばかりなんですから。』

『でも、今月一杯は歸れなくなるやうなことはないだらう。』

『それは大丈夫でせうけれども……駄目ですよ、私達と一緒にお下がんなさいよ。』

こんなことを言つて、快活に笑つておせんは下に下りて行つた。

凄しい冬はもうすぐ眼の前に迫つてゐた。日光の光は薄くなり、寒氣は烈しくなり、風は強く山の嶺を渡つた。裏の畑の大根はもうすつかり取られて、繩で結んで軒に下げられた。朝行つて見ると元湯か

間にすぎ去つて了ふのだ。歡樂も苦痛も煩悶も努力も何も彼も流れて行つて了ふのだ。そして最後には、自然！　自然ばかりが殘るのだ。こんなことを思ふほど私の心は悲哀と憂愁とに閉ぢられてゐた。風はまた一しきり木の葉を吹き捲いて通つて行つた。

湖水には夕の雲がさびしく赤く映つてゐた。

六

心の祕密から來る悶えや、あさましい人間の慾や、この世にありとも思はれない濃い樂しい歡樂や、その歡樂から生じて來る悲哀や、體と體との上に起る快感や――さういふもの丶絕えず往來する私の周圍には、いつも靜かな自然が取卷いてゐた。朝は霜が瓦を白くした。元湯の湯氣の白く凝結して颺つてゐるのが私の室の硝子障子から明かに見えた。

私は女との二度目の爭鬪に筆を着けてゐた。私の周圍には、いろ／＼なものが取ひろげられた。外國の小說もあれば、自分の書いたその時分の日記もある。束にした手紙もある。絕えず押寄せて來る幻影を私は日に何遍打消さなければならないか知れなかつた。落附いた心を維持するために私は全力を擧げた。私は苦痛と歡樂との複雜に雜り合つた心持を繪を見るやうな心持で見ることに骨を折つた。麓までは來ても、もう此處まで上つて來るやうな客はなかつた。あてにした日曜日にも、溫泉場すべ

な。』

私は不思議な氣がせずには居られなかつた。私は二十年この小屋に住んで、世の中に何があらうが、戰爭があらうが、飛行機が出來やうが、そんなことはすこしも知らずに、かうして死んで行く人間を頭に繰返した。私は深い人間の生活に觸れたやうな氣がした。何も彼も死だ。それだけは確かだ。私はかう思つて樹の間から微見える物置小屋の方を見た。私は周圍の嚴かな自然が用捨なく人間に迫つて來るのを覺えて戰慄した。

暫くしてから、

『お上さん、原の娘さんかね。』

『へえ。』

また私の顏を見て、『二三日前から來てるんですけど、あつちにも用があつてな。……旦那さん、溫泉から來たんかね。』

私は筧のところに行つて、長い間、樋から水の落ちるのを見てゐた。

夕暮はいつかあたりに迫つて來てゐた。山の峽から吹き下して來る風に、木の葉は、ばら／＼と雨のやうに散つて落ちた。瀧の落ちる音はドウと物淋しくあたりに響いて聞えた。

私は憂はしいさびしい心を抱いて、もと來た路を湖畔の方へと靜かに引返して行つた。何も彼も時の

雨ざらしの緣臺の傍に行つて私は立つて瀧に對した。

爺さんの代りに、今日は四十ばかりの上さんが小屋の中から出て來て、例の色の褪せた毛布を緣臺の上に敷いて、如才ない挨拶をして、角の除れた金米糖を硝子の皿に入れて持つて來た。

『もう、紅葉は駄目だね。』

『も十日遲う御座いやす。』

上さんはかう言つて、瀧壺のところにある大きな楓の木の方に眼を向けた。

『お爺さん、何うしたえ？』

餘り馴々しく私が訊いたので、上さんは不思議さうにちよつと私の顏を見たが、向うの物置の方に顏を向けて、『爺さん、あすこに寢てゐやす。』

『何うしたのかえ？』

『はア、もう年が年だで。』

『そんなにわるいのかえ。』

『もう、今日か明日かと思つてゐるんですよ。年が年だから……八十と六ですから。』

『醫師もゐないだらうね、此處等には——。』

『溫泉に行けやゐやすけども、もうお醫者さんなんか呼ぶでもあんめいと思ひやしてな。老病だで

凌げないこともねえ。』
夏こそそのすぐ上の路は綺麗なパラソルや、美しい丸髷や、外國人をかきのせた輿などが通るけれど、その時分には、すさましい風に雪で、四邊は全く太古の自然の姿に歸つて行つて了ふのであらう。私は半凍つた瀑の下の小屋にぽつねんとひとり坐つてゐる老爺の姿を思ひ浮べずには居られなかつた。
『その時分は何をしてゐるんだね。』
『晴れた日には、これでも鐵砲を持つて出かけますア。兎や猿は澤山にゐるが、運が好いと猪位取れるからな。』
『猪位のもんかね。』
『あ、今ぢや猪位のもんだな。昔は、私のわかい時分には、熊でも何でもゐやしたがな。今ぢや開けてもう駄目だ。』
こんなことを言つて、爺さんはよく昔のことを話した。これから南の山奥にかけて、冬は獵師の極樂境であつたなどといふ話もした。
『米と釜とを持つて、十日も二十日も山ん中にゐたもんだ。』昔を思ひ出すやうな顔の表情をした。
久しく私は出かけて來なかつた。爺さん、何うしてゐるだらうなどと思ひながら私は下りて行つた。瀧は綿のやうに布のやうに美しく瀧壺に亂れ落ちてゐた。

住むやうになつたのは、その息子の戰死が大いに與つて力があつたらしかつた。其の時一緒に來た婆さんは四五年して死んで了つた。『今では力になるのは、原の中央に茶店を出してゐる二番目の娘ばかりでさ。貴方がたお出になる時、通つて來さしやつたらうが、あの松のあるところの茶店が、娘と婿が出してるんでさ。何アに、はア、碌なことも仕出來さねえがな。』

爺さんのゐる處には、棚が澤山釣つてあつて、口の缺けた茶器だの茶碗だのが一杯に並べてあつた。客が水を飲みたいなどと言ふと、爺さんは腰を曲げて立つてそこからコップを出して渡した。

『水はそこに出てゐますで。』

かう言つて、山裾の樹の繁つたところを指した。長く引いた竹の樋から綺麗な水がちよろ／＼桶に流れて落ちてゐた。その傍には物置らしい小屋があつた。

『冬になつても此處にゐるのかね。』

『ゐますでな。』

『雪が積るだらうね。』

『それほどでもありましねい。風が強いだで、雪はたんとは積りませんヤ。』

『寒いことは寒いだらうね。』

『戶外はかなり寒うがすが、暴れる日は、すつかり戶を閉めて、圍爐裏に榾を入れて置くだで、さう

よちよちと折れ曲つた路は、やがて私を瀧壺の方へと伴れて行つた。瀧壺の傍には、木小屋のやうな小さい瀧見茶屋があつて、大きな體格をした爺さんが、客の姿を見かけて、色の褪せた毛布を持つて來たり、茶を小さな急須に淹れて持つて來たりした。山の中からさがして來たらしい形をした木の根を一面にそこに並べて置いた。

何うかすると、都の客が、『これは面白い。』などと言つて買つて行つた。爺さんは黑く屋根裏の煤けた下で、せつせと草鞋などを打つてゐた。

私はよくその爺さんに話しかけた。

『さむしくないかね。こんなところにゐて？』

『別にさむしいとも思ひやせん。もう長くなりますから。』

『もう何年位ゐるんだね？』

『もう二十年もゐやすナア。』

この小屋の中に二十年、それを聞いた時には、私は不思議な氣がした。爺さんには息子もあり娘もあつた。娘は鑛山の方へ嫁いで行つてゐた。『娘は來う來うと言ひますけれども、かうやつて、一人でゐる方が樂ですから。』こんなことを爺さんは話した。總領の息子はアメリカに行つて行方知れずになり、二番目の息子は日清戰爭の時に戰死した。爺さんが一亷の獵師の身分から此處にかうした小屋をつくつて

さがさと路傍に吹ころがされた。溫泉宿の二階の障子はぴつしやり閉つて、欄干にかけられた手拭が徒に白く見えた。

樋から落ちる水桶の中には、紅葉の赤い大きな枝が投込まれてあつたが、それも、段々色がわるくなつて、今では見る影もなくなつて了つた。朝など、女中は手を眞赤にして白い大根を洗つてゐた。ぢつと見てゐると、心まで滲み込んで來るやうな夕日の影、サツと靜かに降つて通つて行く時雨、山から凄しく冬が押寄せて來るやうなこがらしの風――夕暮などに店先に出てゐると、紅葉見の都の客がさも疲れたやうに足を引摺つて來たりした。

私は Part の一を書き上げて、ほつと息を吐いた。自分の生活が何の程度まで出てゐるかは自分にもわからないけれど、兎に角これで滿足しなければならないと私は思つた。私の机の前の障子には、暖かい日影がさして、蠅がブン〳〵飛んでゐたりした。私は刻み上げた女の姿に時々思を集めて恍惚としてゐた。

ある日の午後であつた。私は湖畔に添つて瀑の方へと志した。それは湖尻の水の漲つて落ちるやうな瀧で、そこからはひろい高原が唯一目に見わたされた。私は久しく其處に出かけて行かなかつた。夏の中は、よくやつて來て、半日遊んで行つたことも度々あつたが、寒くなつてからは、つひぞ此處に來たことはなかつた。私は瀧の水上に立つて、凄しく水沫を立てゝ落ちてゐる瀧を眺めた。

少し休ませて貰はうと思つて、私は其處に腰をかけた。私は默つて見てゐた。
『溫泉場のお客さんけえ？』
私は點頭いて見せた。
『もうお客は減つたんべな。』
『もう、いくらもゐない。』
『これからは寒くなるばかりだからな。』
私は訊いた『お前さん方は何處から來るんだえ？』
『うむ――遠くだ。』
『鑛山の方からかね。』
『もつと遠くだ。』
まだ一ヶ月位は此處に起臥して、木を伐り出してゐるといふ話であつた。私はかういふ生活を私の生活に引較べて考へた。
私は草藪の奧に流れてゐる水の音をたよりに、段々下へ下りて行つて見た。草がくれに細い綺麗な川の流れてゐるあたりまで行つて、私は長い間其處に立盡した。
湖畔を取卷いた紅葉の色彩もほんの暫くの間であつた。ある夜の山おろしに、葉はすつかり散つてが

険しい山路、賑やかな町、長い汽車を想像した。一度首をひるがへせば、私の心は一目散にかの女に向つて走るべく準備をしてゐるのを發見した。私は首を振つてそして前に進んだ。

小さな木小屋が林の中にあつた。其處まで來るには、私は少くとも一時間以上を費した。私は疲れてゐた。

木小屋の前のところは、林が一ところ切開かれて、明るい日影が草藪の上に落ちてゐた。二人の樵夫は頻りに大きな木を挽いてゐた。木の屑が到るところに散亂してゐた。

『水を一杯頂戴したいもんだが。』

かう言つて入つて行つた。一人の若い方の樵夫は、手を留めて、私の方を見たが、

『そこにあるから、澤山お上んなさい。』と言つて、向うの方を指した。

そこには二つの水桶があつた。柄杓が添へてあつた。私は人生に渴したもののやうに柄杓に口を當てて思ふさま飲んだ。水は冷めたかつた。

『好い水ですね。』

私はかう言つて、『此の近所にこんな好い水があるんですか。』

『このすぐ下にあるだ。』

老いた樵夫の引く鋸の歯からは、木屑が絕えず落ちた。

れは其の時の狀態だけで、氣の附いた時には、その眞理は皆な指の間から滑つて逃げて行つて了つてゐた。そして唯、孤獨――殘るのは孤獨ばかりであつた。

自分は何んなにいろ〳〵なものに對して誓を立てたらう。熱い心、烈しい心、さういふ中を私は長い間通つて來た。手と手とを堅く握り合はせ、心と心とを深く結びつけ、離さうとしても離すことの出來ないやうな境をも經て來た。そして今は何うだ。霧の中にかうして唯一人ゐるではないか。

こんなことを思ひながら私は步いた。霧は白く流れてゐた。

ある晴れた日、私は裏の山の方へと入つて行つた。鑛山から山越しに女に逢ひに來た男のことなどを考へてゐた。その鑛山のあるあたりまでは行かうとは思はなかつたけれど、兎に角、少し步いて見ようと思つた。私の前には深い深い林が續いた。大きな樹が縱橫に倒れてゐたりした。

私は私の心を、私の體をこの深い林の中に埋めて了ひたいと思つた。草藪は草藪に續いた。何うかすると、重なつた葉の間から洩れて、日影がぱつと赤い光線をあたりに漲らせてゐるやうなところもあつた。赤い實を綴つた枝や草などもあつた。

『あゝあゝ。』

思はず私は溜息を吐いた。

をり〳〵私は後を振返つて見た。それは私とかの女とを連絡してゐる一筋の路であつた。私は廣い原、

五

霧が一面に閉ぢこめて、一間先も見えないやうな日もあつた。私はその深い霧の中を衝いて、湖畔を辿つた。

をりをり樹が見えたり湖水の一部が見えたりした。岸の草は枯れて、黑く淀んだ水が惡魔のやうに覗いて見られた。天地は全くしんとして了つてゐる。唯霧が白くながれて動いてゐるばかりである。都會の賑かな生活に比べて、何といふ靜かなさびしい自然だらう。樹は唯生長してそして枯れて行くのである。山は聳え湖はたゝへてゐるばかりである。

霧の中から人の姿が現はれた。山はしごを負つてせつせと此方へ歩いて來た。

『今日は。』

かう言つて挨拶をして通りすぎた。

私は何とも言はれないさびしさを胸に感じた。自分は唯一人である。この深い霧の中に唯一人である。

私は『一人』といふことを考へながら歩いた。何も彼も皆な過ぎ去つて了ふのである。一夜の歡樂も、美しい女の抱擁も、負ひきれないほどの名譽も何も彼も倏忽にして過ぎ去つて了ふのである。我々は口を酸くして宇宙の眞理を論じ且つ探究した。ある時には眞理の一角をつかみ得たと信じた。しかし、そ

の前の篠椅子に女が身を横へて靜かにそれを見てゐるのは、まだ昨日のやうに思はれる。二階を下りて、湯殿に行く廊下、そこは女の常に歩いて行つたところだ。『おゝ、冷めたい水だ、丸で手が切れるやうですね。』かう言つた水は矢張同じやうに樋から流れて落ちてゐた。

私は筆を執る氣になれなかつた。私はその考から離れようとして、二階を下りて外へ出た。客の少ない溫泉場はしんとして、旅館の室の灯の影も稀れであつた。私は水の樋から落ちるところに、何處からともなく微かにさし込んで來る月の光を見て立つてゐた。水はちら〳〵と細かに搖いた。

其處で何か物を洗つてゐたおせんは、

『お湯にいらしつたの。』

『いや、散步。』

かう言つて、私は共同浴槽の方へ行つた。浴槽には湯瀧の落ちる音がドウと聞えるばかりで、誰も入つてゐるものはないらしかつた。私は引いてある長い樋に添つて、元湯の沸き出すあたりまで行つた。山の寒い夜露は草の上にしどゝに置いて、微かに殘つてゐる蟲の音ももう絕え〴〵になつてゐた。私は山裾の奧の浴槽の處まで行つて、そこから引返して來た。

この散步は少くとも私の心を落附かせた。不思議にも私の心は書くことに向つて熱してゐた。私はその夜はおそくまで机に向つた。

とも……しかしこのまゝでは別れられない。一度逢つて、靜かに話して別れたい。ですから是非もう一度來て下さい。』かういふ手紙をあけた時には、私は思はず溜息をついた。實際、靜かに一夜話して、それで綺麗に別れることが出來たであらうか。却つてその爲めに二人の間は別れられないやうになつて行かなかつたらうか。私はそれから今までつゞいて來た月日を考へた。

『貴方のやうな薄情な人はない。勝手におしなさい。今の中に何うかしなけりや、年を取つてから何んな眼に逢ふかわからない。足元の明るい中に何うかしなけりや、私だつて、あとになつて困りますから。』

『勝手にするさ。』

『勝手にしますとも……。』

こんな會話を私等は何遍繰返したことだらう。一本の手紙にはかう書いてある。『私がわるう御座んした。何うか、此間のことは堪忍して下さい。私はさういふ心持で言つたのではなかつたのですから。あれから、私は何んなに泣いたでせう。私達の間は、こんなことで別れられる仲ですか……』

それからそれへと讀んで行つた私は、いつか落附いた靜かな心持ではゐられなくなつた。私は私の今ゐる室に女と二人で來て泊つた時のことを繰返した。

この室からは、矢張その湖水が見えてゐた。その朝は山に白い雲が靜かに綸のやうに靡いてゐた。そ

心とを比べて考へて見た。今まで机の傍で考へてゐた生活と、この老人の生活と、そこに何んな廣い間隔があるだらう。私は靜かに歩きながら、淡い水のやうな老人の心の境を繰返した。

老人の皺だらけの顏には夕日が赤く照つた。

四

靜かな溫泉場で互に取交した手紙を讀んだ二人の戀人の物語を胸に描きながら、私は女からよこした手紙を鞄の中から出してひとりで讀んだ。

これまでにも私は度々その手紙を出して見た。しかしその夜のやうに落附いた靜かな心持でそれに向つたことはなかつた。私は其處にも此處にも女を見た。女の明るい聰しげな眼を見た。女の綺麗な顏と姿とを見た。何も彼もその手紙の中に深く籠められてあつた。

新草の萠えるやうな思ひもあれば、あつい燃えるやうな心もあつた。逢はれぬ恨み、病の後の逢瀨、ある手紙には、赤い女の口紅が黑ずんで乾きついてゐた。フランスの短篇作者の作の中に、『だつて爲方がない、戀は戀だから……。他に理由はないのだから、體と體とが兩方に必要になつて來るのだから、離れてゐても、その間には、見えない力と線とがあつて、それが絶えず波打ちつゝあるのだから……』かういふ言葉があつたが、それが今更のやうに烈しく強く私の心に蘇つて來た。『別れてもよう御座んす

ふと氣が附くと、裏の畑で、此處の老主人が尻端折に裸足といふ姿で、頻りに塵埃の山を燃してゐた。黄い煙が靜かに薄く颺つてゐた。私は二階から下りて、下駄を突かけて其方へと行つて見た。靜な山畑だ。大根の青い葉の上に夕日が斜にさしわたつて、名も知らない鳥がキ、と鳴いて過ぎた。山際の樺や山毛欅の葉はもう黄くなつて、梢が半ばあらはになつて見られた。

私は靜かな心持になつてゐた。町にあるその老主人の家が、息子の代になつても町で屈指の裕福な身代になつてゐるのは、皆なこの老人の働いた結果であつた。老人は維新の亂の時に、賊軍について會津の山奧に行つたが、城が圍まれる時分、三日も四日も飯を食はずに山越しに逃げて町に歸つて來た。『世の中が變るんだから、何しても、かうしてはゐられない、私もな、さう覺悟しましてな、それから働きましたよ。何でもやつて見ないものはない位ですからな。』こんなことを言つて、老人はある夜私にその經歴話をしてきかせた。この溫泉旅館も、皆なこの老人の經營したものであつた。老人は今でも四月になると、町からはるばるこの山の中にやつて來た。『年寄仕事には好い仕事ですよ。』などとも言つた。

『旨い大根がもう食へますね。』

『え、もう出來ました。』

かう言つて手を留めて『何うも、塵埃がぢき溜りましてな。』

私は老人を相手に長いこと話した。火と水の中を通つて來た老人の心とその巴渦の唯中にゐる自分の

『うむ――詰らないものだ。』
『小說？』
『うむ――』
『可哀相な小說が讀みたいものね。』
『小說は好きかえ。』
『好きですとも……でも、小說なんかよんでゐると、おかみさんに叱られますからね。』
『「不如歸」見たいなものが好いんだらう。』
『え「不如歸」大すき、可哀相ねえ。』

誰か呼ぶ聲が下で聞えたので、おせんは急いでバタ〳〵と驅け出して行つた……。私の眼の前には女の姿があり〳〵と見えた。私は筆を執つた。

私の胸には、外國の海岸で、人知れぬ幽棲を求めて、暑い日影の海の上に二人絡みついて泳いでゐる繪のやうな光景が浮んだり、蔽ひをすつかりしめ切つた馬車の窓から紙屑を捨てた白い綺麗な手が見えたりなどした。ある女は久しく逢はなかつた戀人をそのまゝ浴場の中に迎へ入れた。私に手を伸して、後に置いてある鞄を引寄せて、その中から黃い紙表紙の外國語の本をさがして、そしてそのある一ところに長い間讀み耽つた。

『さうですか。ぢやもう一月か一月半ですね。』

『半年拶いだかはりに、町に下りると、面白いことが澤山あるだらうね。』

『町だツて、面白いことはありはしません。雪が降つて、風が吹いて、唯、寒いばかりですもの。』

『でも、此處よりは好い？』

『それはさうですけども……。』

かう言つて矢張立盡してゐる。今一二年と言はず、この女も、何處か小さい店屋か何かの細君になつて、男といふことを知るのであらう。その白い肌や體が男の肌に向つて靡いて行くのだらう。苦勞をするのだらう。そして子供を產んで年を老つて行くのだらう。そしてその生活が何んなつまらない生效のない生活でも、それに滿足して暮して行くのだらう。私の經驗したやうな世界、さういふ世界は夢にも知らずに、さういふ複雜した心の世界が此の世の中にあるとは知らずに、のんきに一生を送つて行つて了ふであらう。そして死んだ墓の上に雪が積るのだらう。かう思つた私は、私の胸に横つた複雜した心理の光景に比較して考へずには居られなかつた。私の書かうとする女主人のやうな女もゐるのに……。私の經驗したやうな凄まじい祕密がこの兩性の間には橫つてゐるのに……。

おせんは此方をふり向いて、

『始終、書いていらつしやるのね。何をお書きになるの？』

のまだ完全に醫えない私に取つては、それは容易な業ではなかつた。私の心はすぐそれに捉へられて行つた。

名工が刻んだ彫塑にあらはれたやうな細かい影の多い襞に逢つては、私はよく躊躇して溜息をついた。私は肱椅子に凭りかゝつて長い間湖水に泛んでゐる舟を見詰めた。

輕い足音がしたと思ふと、おせんの莞爾した顔が現はれた。昨日頼んだ洗濯物をたゝんで持つて來て呉れたのであつた。

『難有う。』

『綺麗になりませんよ。』

『いや、澤山だ。』洗濯物をそつちの方へやつて、『寒くなつたね。』

『本當ですね。』

かう言つて、其處を去らずに、後姿を見せて、湖水の方を眺めて立つてゐた。相變らず大きな束髪に結つてゐた。

『もう、歸りたいだらうね。』

『え、』無心に笑つて、『もう、蘆を刈りはじめたのか知ら。』

『今朝刈つてたよ。』

それから客は歸る一方で、來ても一晩泊りの客ばかりであつた。日の光がもう秋のやうに弱く黄く當つて、大根の青い葉の上には赤い蜻蛉などが亂れて飛んだ。欄干から見わたされる湖水の一部は、染めたやうに碧く澄んで、穗を出した芦がさびしく暮の風に靡いた。山のかひからさし込んで來る夕日は黄く草原の上に落ちた。

凄しい風雨で家が搖ぐやうな日には、私は二階から下の間に机を移して、雨戸を閉めて小さくなつてゐた。午後からは、樋が壞れて湯が來なくなつた。客室から母屋の方へ行く廊下は、しどとに濡れて、吹きちぎれた山の木の葉が一杯に溜つてゐた。

三

友達夫婦の歸つて行つた日から、私は仕事を始めた。始めは矢張何うしても出來なかつたが、午後から少しづつ筆が進んだ、眞に勞れた筆だ。

私は引摺られるやうにして一字一字書いて行つた。私は長い間の空しい努力と無益な浪費とを考へた。私は筆を措いては、野と山と水とを見た。

私はせめてあの女だけは書きたいと思つた。あの女の肉體、あの柔らかな肌につゝまれてゐる心、あの怜悧な才ばしつた男を飽まで引つけなければやまない姿、あれを何うしても描きたいと心がけた。傷痍

つて來させて、二つ三つ彈いて吳れた。

『一中節の好きな女を知つてゐたもんだから、何だか昔が思はれて爲方がない。』

かう私が言ふと、

『大變なところで、お惚けを聞かせられますね。』

と言つて女は笑つた。

翌日の午後、車を二臺並べて立つて行くのを私は後から見送つた。それは浴客に歸思を催させるやうな寒いさびしい晴れた日であつた。五六日前から、歸る人達の車は絕えず續いた。大きな旅鞄に信玄袋に土產物をつゝんだ包、番頭は揉手をしながら、腰を下げて、いつも湖畔のところまで送つて行つた。人達は長い間眤んだ人達に別を惜しむやうにして歸つて行つた。

『また來年は早く來ますよ。』

こんなことを言つて行く人もあつた。

客の歸つて行つた宿屋の圍爐裏の傍の夜は靜かであつた。娘や女中達や老主婦などのぐるりと取卷いた上に、ランプが靜かに照してゐた。番頭は帳場に居眠りなどをしてゐた。

『大分、靜かになつたね。』

かう私はおせんに言つた。おせんは疲れたやうにほつと溜息をついた。

に來てこぼした『奥方のつもりか何かでゐるんですよ。奥さんツて言はないと機嫌がわるいんですよ。』などと言つた。『大變大きい髮ね。さういふのが此方では流行るんですか。』かうその中年女が訊くと、『さういふわけでもないんですけれども……。』かう言つて自分で髮を撫でゝ見た。

ある日おせんは言つた。

『あの方はお歸りになるのですつて。』

『誰？』

『向うの東京の方。』

『さうかえ。それは惜しいね。さう言つてゐたかえ。』

『旦那さんが明日山から來て、一緒に歸るんですつて。』

『それは惜しいね。』

二月以上も聞馴れた三味線に別れるのが私には此上なく惜しかつた。それに、あちらこちらで邂逅したその顏――湯殿に、廊下に、庭に、共同浴槽の前に、湖畔に、いろ〳〵なところで邂逅したその明い顏にわかれるのが惜しかつた。

その晩それでも向うから別れを告げに來た。住所などを敎へて、『是非、歸つたら、一度遊びにお出でなさい。』などと言つた。三味線の話をすると、『私なんか駄目ですよ。』とは言つたが、それでも三味線を持

すから。』などと女は私に話した。私は二里の嶮しい山越しをして、此方へ下りて來る男の戀を想像した。

さういふ男の心に私は昔の私を發見せずには居られなかつた。時にはさういふ『昔の私』が今の私の心に蘇つて來たりした。私は白い肌と濃い髪と齒のかち合ふ音とを思つた。旦那は鬚の濃い色の黑い何方かと言へばあまり好い男ではなかつたけれど、何處か女の心を容れるに足りるやうな男らしさとやさしさとを持つてゐた。

宿の人達の事情にも私はよく熟してゐた。初めはわからなかつた娘と女中との區別もわかれば、老主人と番頭と老主婦との關係も飮み込めて來た。女中達は皆な私達と同じやうに、嶮しい山路を登つたりめづらしい瀧や湖水を見たりしてやつて來た。『え、四月に上つて來て、十月の末は歸つて行くんで御座いますから、半年以上此方にゐるやうなもので御座います。』色の白い髪の濃いおせんと云ふ女中がつゝましやかに言つた。

『町には待つてゐる人があるんだらうね。』

初めはこんなことを言つてからかつて見たが、そんなことにはまだ馴れてゐないのを私はやがて發見した。おてるといふのは、赤い襷をかけて、白い脛を見せていつもせつせと働いてゐた。

おせんはいつも入毛澤山の大きな束髪に結つてゐた。老貴族の妾が高慢だと言つてはよく私の机の傍

肱椅子に身を凭せて聞いてゐると、何となくさびしい心がつまされて、私の頰に涙の落ちて來たことも一度や二度ではなかつた。女は一中節の小春髪結がすきで、よくそれを彈いた。むづかしい込んだ手が靜に巧にあやなされて行つた。『八景』の中では、『更けて青田にこがるゝ螢、櫺子まで來て蚊張の外…』といふところが殊に私の心を惹いた。

段々懇意になつて、『今日は旦那さんがお出でになる日ですね。』などゝ私は言つた。旦那の來る日はきまつて髪結がその室に呼ばれて行つた。綺麗に結つた髪をくつきりとあたりに見せて、ほつと上氣した顏で湯殿から出て來る浴衣姿は、かういふ山の中の溫泉場では見られないほど艶であつた、私は小說本などを貸してやつた。

その旦那のつとめてゐる鑛山は、そこから山を越えて二里ほど行かなければならなかつた。金の多く出る山で、四五年の中に、谷合には立派な村落が出來たとさへ言はれてゐる。そこに行くには、此處に來る前の大きな原から行く方が路が樂なのであるが、旦那はそつちを通らずに、いつも近い山越しの路を選んでやつて來た『私にも一度行つて見ろッて云ふんですけれどもね……大變ですからねえ、輿なら行けるさうです。山の中に、此處のよりは小さいさうですけども、湖水があつたり何かするんですッて、いゝえ、旦那つて、此處に長くゐる譯ぢやないんですとも……。來たのは去年ですよ。來年あたりは、東京に歸るんでせう。何でも山に知つてゐる人があつて、是非來て吳れッて賴まれて來てゐるんで

てゐなければならないやうに出來てゐるだらうか。つくられてゐるであらうか。つくられてゐる人間はそれでも好い。しかし自分にはそれは出來ない。倦きるものは倦きる。棄て去るべきものは棄て去る。滅ぶべきものは滅ぶ。生きるべきものは生きる。自由でなければならない。

こんなことを考へたが、しかしそれはほんの暫しの間であつた。私はいつか私の通つて來た今までの徑路を繰返してゐた。本能の底に横つてゐる報酬の理と言ふやうなことを考へながら歩いた。

二

二階は此頃はすつかり明いてゐた。何處に机を持つて行つて坐らうが差支なかつた。私は三月の間に其處にやつて來た種々な人達を頭に描いた。若い妾を伴れて來て十日間滯在して行つた貴族だといふ老紳士、折角新婚旅行に來て室がないので狹い六疊の一間に押込められた若い夫婦、勇しい扮裝をして朝早く高山に登つて行つた學生の群、ある朝早く湯殿の戸を明けて行くと、其處に髱の長い肌の色の白い女が向うむきになつて鏡に向つてせつせとおつくりをしてゐたことなどもあつた。ある中年の女とは懇意になつて、種々東京の話などをした。それはこの奧の鑛山の幹部につとめてゐる男の跡を趁つて來たやうな女であつた。男には東京に家もあれば女房もあつた。三日おき位に男はやつて來て泊つて行つた。女は山の中の獨居をさびしく、をり／＼宿にある三味線を持つて行つてひとりで彈いた。夜など欄干の

達夫婦に取つては、普通の家庭にあり得ないもののやうに思はれた。『そんなに長く留守にしてゐらしつて、よくおしげさんが默つてゐますね。』かうぢかには聞かないまでにも、言葉の中にはいくらかさういふ語氣が雜つてきかれた。友達夫婦は私の噂を彼方此方でき〻かじつて、自分で勝手に解釋して、種々と違つた觀察を私の上に投げてゐるらしかつた。

『でも、さうばかりは言つてゐられないよ。藝術家だつて、矢張人間のすることは矢張しなけりやならないからね。何うも藝術家つて言ふものは自由すぎるよ。それは僕だつて、君の心持はわかるがね。もう少し拘束する必要があるね。君なんぞは何方かと言へば、餘り自由すぎるんだよ。』

『少しも自由なことはありやしない。今でもまだ自由を求めて悶えてゐるんだよ。』かう言つた私は中途で話をよして了つた。私はかういふ山の奥まで世間の聲が聞えて來やうとは思はなかつた。

私は歩きながら考へた。

私は私の生活を繰返して見た。自由すぎるだらうか。無拘束すぎるだらうか。無反省すぎるだらうか。ある女からある女へと移つて行く心と體、何故それがわるいのであらうか。妻と子とから受ける幸福、社會から受ける幸福、自己の自由を拘束して、妥協したところから起つて來る幸福、それも誰かに幸福には相違ない。さういふ幸福に甘んじてゐられる人間は澤山ある。しかし人間はさういふ幸福に甘んじ

って來た。

『ヤア、君か。』

『此處にゐるのか。』

『ヤア、奥さんと一緒かえ。』

思ひがけない友達夫婦は、私のゐる室の奥の一間に案内されて、それから其處に今朝までゐた。友達は會社の方へ出て居た。『二三日ひまが出來たから、たまにはと思つてつれて來たがね、矢張、嬶は厄介だよ。日本の女、殊に家庭の女は、世間を知らないから一層厄介だよ。』などと言つた。細君はめづらしさうにして、種々な話をした。途中で見た瀧や名所の話などもした。廣い原を通る時のさびしさなども話した。

此頃こそ二人の生活が扇を開いたやうに遠く離れて了つて、滅多に逢ふやうな機會はなくなつて了つたけれども、その細君が初めて友達の家庭の人になつた時分には、私達は三日にあげず、互に行つたり來たりしたものだ。私の妻もその細君と親しい交際をつゞけてゐた。

『おしげさんもお子さんだちもお變りはありませんか。いつも御無沙汰になつて了つて、一度上らなけりやならないと思つてゐるんですけれど……。』

『いゝえ、お互ですよ。』

妻があり子供があるのを投り放しにして、三月も四月もかういふ山の中に來てゐるといふことは、友

友達は別れをつげた。細君もわかれをつげた。

『ぢや、左樣なら。』

『左樣なら。』

見ると、番頭も送つてゐた。細君を先きに、友達は後から續いた。湖畔を縫つた路はうねく〳〵と長く續いて、色づいた春の低い灌木だの熊笹の藪の間などを通つて行つた。二臺の車の並んで行くのが長い間此方から見えてゐた。細君の水淺黄の蝙蝠傘もさびしく見えた。

私は踵を旋した。

木賃らしい小さな宿の店先では、大きな包をかゝへた行商の男が新しい草鞋の紐を結んでゐた。ある雜貨商の店では、上さんが襷をかけて、せつせと勝手元を働いてゐた。大きな溫泉旅舍の障子はぴつしやりと閉つて、二階の欄干にかけた手拭がさびしく朝風に動いてゐた。

過ぎ去つた夏の賑かさに比べて、何といふさびしさであらう。白いリンネルの服を着た外國人、快活に馬上に跨つた外國婦人、赤いネクタイ、紫のパラソル、藝者らしい綺麗な女と並んで步いて行く浴衣姿の男、夜は暗い浴槽に浴客が一杯集つて、浪花節を唄つたり、流行唄を唄つたり、聲色をつかつたりした。あの賑かさは何處に行つたらう。かう思ひながら私も步いた。

一昨日の夕方、ふと二階から下りやうとすると、下から新たに着いたらしい客が女中に案內されて上

『しかし、もう隨分長くなるぢやないか。來たのが七月だから、もう三月になるね。』

『もう、さうなるかね。』私の胸には徒らに過ぎ去つた月日が振返られた。三月の間、私は何をしたであらうか。持つて來た爲事の何を私はしたであらうか。私は机の上に徒らに展げられた白い原稿紙を眼の前に浮べた。

『これから少し靜かにして、みつしり書かうと思ふから。』

私達の前には、やがて朝の靜かな湖水の一部が見え出した。山は十月の初はもう寒かつた。早い葉は黃くなつて落ちた。湖尻には湯氣が白く颺つて、湯の匂ひが冴えた朝の空氣に染みるやうに思はれた。路傍の共同浴槽から赤い肌をした男が手拭をさげて出て來た。

『好いなア、かういふ處に始終ゐられゝば――。』

『でも、東京も好いよ。』

『しかし東京に歸つて、またあくせくしなければならないと思ふと、イヤになるよ。』かう言つた友達はちよつと笑つて『君の東京に歸らない理由はちやんと知つてるよ。』

『そんな理由なんかありやしないよ。』

『まア、しかし、成たけ早く歸り給へ。』

車夫はいつか梶棒を下してゐた。もう少し送つて行かうと言つたけれど、もう此處で澤山だと言つて

山の湯

一

『早くお歸んなさいまし。』

『え、難有う。』

私はかう言つて躊躇して、『でも、僕なんか誰も待つてゐる人はないんだから……。』

『でも、東京にはまた面白いことがありますよ。』

さびしい私の生活に同情するやうな顏をして細君は言つた。私は友達夫婦の歸京を送るために揃つて宿から出懸けて來た。あとからは二臺の車が續いた。

『本當にいつ歸るんだい？』

二三間先に歩いて行つた友達は振返りながら私に訊いた。

『さア、まだわからない。』

呼んだ。丁度その時飛び込んだ二三間先のところに一艘の傳馬が靜かに通つてゐたが、それッと急いで櫓を漕いで船を此方へと寄せて來た。暫しい間髪を亂した女の體が浮いたり沈んだりして流れて行くのが月の光のキラキラする中に明らかに見えてゐた。

近所にゐた車夫と船頭とが漸くそれを引上げた時には、照子はもう半ば感覺が失つてゐた。車夫の腕に抱かれて、唯ぐつたりとしてゐた。『照ちやん、氣をしつかり、氣をしつかり!』などといふ女達の聲が聞えた。大勢集つた人の影は黑く濃く地上に落ちてゐた。

『旦那は一體何うしたんだらうね。』

かう女達の一人は言つた。

『照ちやん、しつかりおしなさい。』

かう聲をかけられても照子は矢張ぐつたりとしてゐた。首と手とがだらりと下つた。髪はぬれて白い肌にくつ附いてゐた。

種々なことをガヤガヤ言ひながら、細い巷路の方に土手から下りて來る一行の黑い影は、月の光の下に明るく見えてゐた。角には誰も彼も皆出てゐた。小〆も出てゐれば、眼のわるい二人の婆さんも出てゐた。その中を車夫に負はれて家の方へ歸つて行く照子の顏は、半ば死人のやうに蒼白かつた。

『待つて頂戴！』

女は氣違ひのやうな聲を漲らせながら、月の光の中を一生懸命に追ひ蒐けて行つた。あとから梅香の母親だの、秀松だの、白鬚の爺さんなどが續いて驅けて行つた。

『待つて頂戴！』

土手の上で、女が辛うじて男に追ひ附いたのが此方から黑く見えた。土手の上からキラキラと川に碎ける月の光が美しく繪のやうに見えてゐた。

女が何か二言三言言つたかと思ふと、『貴樣のやうな汚らはしい奴と口は利き度くない。』と言ふ聲がして男は女をぐつと前に突き飛ばした。女は蹌踉とした。

『ぢや殺して頂戴！』

女は男の方に身を寄せて行つた。男は女の頰を烈しく打つた。

『打つて頂戴！　もつと打つて頂戴！　殺して頂戴！』

『勝手に死にやがれ。』

『死ぬとも……勝手に死んで見せるとも。』かう言つたかと思ふと、女はイキなり土手の上から河に向つて身を跳らした。凄じい音がしてサッと水煙が立つた。

後からついて來た細い通りの中の人達は、土手に上るとすぐこの光景を見て、凭驚して、慌てて助けを

の姿を近所に見せた。ある時には、旦那が自分で警察の刑事に頼んで、花牌を引いてゐる中に踏込ませて、照子と照子の母親とを分署まで引張つて行かせて、そゝをあとで金を使つて自分で取下げたりした。

『何うかしてるんだよ、あの旦那、氣が何うかしてるんぢやないか。』後には近所でもかういふ噂をするやうになつた。

それは十月の末の月の明るい晩であつた。照子の家では、宵から旦那が來て、何かごた〳〵話聲が聞えてゐたが、丁度九時少し過ぎた頃、『貴樣のやうな妓は勝手にしやがれ、一生もう逢はないから、さう思へ！』かういふ聲が聞えたと思ふと、格子戸がガラリと明いて、人の驅出す音がけたゝましく聞えた。

『待つて頂戴！　言ふことがあるから待つて頂戴！』

かう言ふ金切聲と共に、あとを追つて續いて女の驅出した氣勢がした。

何處の家でも皆な驚いて外へ飛び出した。梅香の母親の出た時には、跣足で、散し髮で、照子の走つて行くのが見えた。走つて行く旦那の外套も月の光にそれと見えた。

『待つて頂戴！』

金切聲が四邊に響いて聞えた。

しかし旦那はそんな奴から聞くやうなことはないといふ風で――むしろさういふ苦痛と焦燥とから全く免かれて了ひたいといふやうに、急に足を早くして土手の方へ驅けて行つた。

親はその話をした。『何でも、お前が出かけて行つてから少ししてだよ。何かごた〳〵してゐると思ふと、照子さんとお婆ちやんと若旦那と三人で大喧嘩さ。餘り見兼ねたから、私、とめに行つたんだがね。何でも照ちやんがその男とかに、「だつて洋服位拵へてやりたいよ。」とか何とか言つたんだとさ。そんなことを言はなけりや好いのに……。それでなくつてさへ、自分の子供だか何だか知れない位に旦那は此頃疑ひ出して來てゐる矢先だから堪らないよ。母さんはそんな眞似をこれにさせて默つてゐたのかツて旦那は怒り出す。照子さんは泣きしやべりにしやべる。大騷ぎさ。それに、お金のこともあるやうだよ。此頃の身分では、旦那も金が元のやうに廻らなくなつたんだね。それを、ちよい〳〵口に出して言ふと見えるんだね。仕方がないから、私とお隣の政ちやんと二人で漸くなだめて來たがね、照子さんだつてあの腹だもの、むしやくしやしてるんだよ、お前。』

『旦那はそれで自分の子ぢやないツて思つてゐるの？』

『さうでもないだらうけれど、離れてゐると、さういふ風に氣を廻すと見えるんだよ。照子さんも、のんまり何かイヤなことを言はれるもんだから、中ッ腹になつてゐるんだよ。』

『そんな男があるのかしら？　本當に？』

『それはわからないよ。旦那はそのことを頻りと言つてゐたから……。』

その話のあつてから、旦那はまた大阪に行つたが、それも長い間ではなく、十日ほどすると、またそ

五

大阪から來た若旦那の姿は照子の家にちよい〳〵見えてゐた。朝など、手拭を下げて風呂に出かけて行くことなどもあつた。照子の腹はもうかなり眼に立つほど大きくなつた。近頃では、お扮裝も面倒だといふ風で、櫛卷になどしてゐることが多かつた。顏はやつれて蒼白くなつてゐた。

『照子さんの家、餘程ごた〳〵してゐるらしいのね。』梅香は母親にこんなことを言つた。人の出入も多かつた。疳高い聲で物を言つてゐる男の後について若旦那の細い激した聲が聞えるかと思ふと、娘に向つて母親の怒つてゐるやうな聲も聞えた。格子戸を荒々しく明けて、そゝくさと若旦那の出て行く姿などを近所の人達は見た。

男の兒がさびしさうにして格子戸の前に立つてゐるのを、抱妓達がつれに來て、

『お父ちやん、歸つて來て嬉しいでせう。』

などと訊くと、男の兒は何も言はずに、唯頭を振つて見せた。

『お土産を澤山貰つたでせう。』

矢張頭を振つてゐた。さびしさうに笑つてゐた。

ある夜遲く梅香がお座敷から歸つて來ると、『大變だつたよ、今日照子さんの家――。』かう言つて、母

今の抱妓はてつきりそれだよ。此間も大師樣に一緒に伴れて行つたりした。よく氣恥しくないよ。』

軍醫の隱居の話などもよく出た。前の上さんは、よく働く堅い人だつたが、それが去年の春頃に急に亡くなつて、あとに下女ともつかず親類の女ともつかないやうな年增が來てゐた。夏の夜など、よくその細い通りに緣臺を出して、白鬚の爺さんと團扇などを持つて一緒になつて涼んでゐた。照子の母親などとは、花牌の仲間で、『爺さんあゝ見えてゐて中々花牌が旨いんだつて。照ちやんのお婆さんがとてもかなはないんだッて。』などと話したが、つい二三日前、一緒に土手の方に曲るとすぐ、『思つた通りだッたよ。此間から、あの年增がゐないと思つてゐたら、昨日遲くこつそり來て、今度木更津の方に片附いたから、あつちの方に來たら是非寄つて下さい。網元の傳平ッて言ふと、土地では知らないものはないからッて言ふんだよ。そして、このことはお爺さんに內所にして置いてお吳れといふのだからね。あのお爺さんに卷き上げられて、少し持つてゐた金もなくしたんだね。玩具になつてゐないで唯で金を取られる奴があるもんかね。それはあの爺さんを怖がつて恐ろしがつてゐたよ。お宅では、他とは違つて、滅多なことを仰しやらないから、何處にも申上げないけれども、お宅にだけは申上げるんだつてね。あゝ見えて、あの爺さん、中々すごい腕だよ。それに、あの年增も並ぢやないね。女郎上りか何かだね。』二人はこんな話をして步いて行つた。川にはモーターの音がけたたましく聞えてゐた。

『さういへば、此處の姐さんも、もう難かしいつていふ話だね。』
『肺病ぢや仕方がないねえ。』
『それでも、元の旦那が來て世話をしてゐるんだツて！』
『え？　元の旦那ツて？　深川の？』
一人の方が點頭いて見せると、『まァ、あの旦那感心だねえ。隨分ひどくされたんぢやないか。』
『だから、今では手を合せてゐるツて言ふよ。後の旦那なんか、病氣になつてから寄つきもしないツて言ふからね。』
こんな話をしながら二人は靜かに土手の上へと登つて行つた。『俥で行かうか、歩いて行かうか。』二人はちよつと相談したが、歩くことにきめたらしく、靜かに一歩々々辿つて行く姿が此方から見えた。
眼の性の殊にわるいといふ方の婆さんは、何うかすると宅の爺さんの若い時のことなどを話してきかせた。『一番困つたのは、抱妓に手をつけられることだよ。宅のなんか、何んな抱妓でも手をつけないものはないんだからね。それが何より一番困つたよ。性のわるい抱妓に踏まれたのもちつとやそつとぢやないよ。此頃だよ、女に氣がなくなつたのは。ほんに此頃だよ。男ツて仕樣のねえもんだ。』などゝ話した。その時には、一方の方の隣の藝者屋の爺さんの話が屹度出た。『あの爺さん、しみつたれだから、ちよつと氣性のあるものには手が出せないけれども、こいつは大丈夫だと思ふと、今でも當るんだつてね。

のかしら？』かう思ひながら、梅香は自分の家に入つて行つた。

四

毎朝十時頃、その細い路から土手の方へ出て行く二人の婆さんがあつた。二人とも藝者屋の母親で、二人とも梅毒から來た眼病で、毎日誘ひ合つて町の醫師の許へと通つて行つてゐた。二人は話しながら歩いた。

『照ちやんの旦那が歸つてゐるんださうですが、嫉妬で大變なんだつてね。』

『何うして？』

『照ちやんにも何かあるんだとさ。』

『さうですかねえ……。』

『お店には內所で、大坂からこつそり出て來てるんださうだけれど、何でも留守中に男が入り込んでゐた手紙を見られたとか何とかで、揉めてるんだとさ。』

『何處の家にもごた〳〵があるねえ。』

かう言つた時は、二人は土手の方へ出る角の處に出てゐた。其處には格子づくりの藝者屋が一軒あつた。

『一體、何うしたの？　やさしく言つたッてわかるぢやないの？』

梅香は傍から靜かに言つた。

ごた〳〵してゐる間を、小〆は裏の明家に入つて蜘蛛の巣の中にぶる〳〵震へてゐた。『もう大丈夫。』かう言つて抱妓が其處から伴れて來た時にも、顏はまだ眞青になつてゐた。『一體何うしたの？』かう聞かれて小〆はかいつまんで其話をした。『ぢやお前さん惚れてゐた譯ぢやないのね。さう？　旦那の處へそんなことまで書いてやつたの？　困るわね、それは――。それで、鶴藏さんとは何うしたの？　あの男がゐるために、そつちにも行けなくなつてゐるのね。困るねえ！』などと女將は顏をしかめながら言つた。『兎に角もう少し隱れてお出でよ。まだ其處等にぶら〳〵してゐるかも知れないから……。しかし、本氣ぢやないよ。あんな本氣があつて堪るものか、向うで震へてゐたぢやないか。狂言よ。威嚇してやる積りか何かよ。』

『さうね。あんな浴衣なんか着て、今時分。狂言よ。』

秀松は傍から言つた。

お座敷がかゝつて來て梅香が外に出た時には、外にはもう其男はゐなかつた。朧ろけな月が靜かに家の黑い影を地上に落してゐた。照子の家の前に來かゝると、ぱつと入口が明るくなつて、格子が明いて、そこから照子が出て行つた。一間位離れて歩いて行く黑い男の影が前に見えてゐた。『旦那が歸つて來た

が、血相かへて其處に棒立に立つてゐた。頻りにそれを遮つてゐる女將の姿も見えた。

『小〻を出せ。』

『〻ちやんなんかゐませんよ。』

『ゐないことがあるものか。今、入つて來たのをちやんと見て知つてるんだ。』

『だつて、ゐやしないもの。』

『出せッて言つたら出せ！　隱すと承知しないぞ、皆な叩き殺すぞ。』

眞靑な顏をして、手をぶる〳〵と震はせてゐた。『お前さん。こんな危ないものを持つて何うする了簡だえ……。』かう言つて、女將はそれをもぎ取らうとした。男は手拭にくるんだ刄物を高く持上げた。

『何うしたんです？　一體？』

『何でも好いから、あの女を出せ！』

『ゐないのを出しやうがない。』かう言つた時には、女將の態度はもうすつかり落附いて來てゐた。『お前さん、無闇に人の家に入つて來て、刄物なんか持つて、女だと思つて馬鹿にしちやいけないよ。』

『出しさへすれや好いんだ。』

『ゐないといふのに、解らないねえ、この人は？　何處か他をさがしてお出でな。』

『來てゐたに相違ない。俺が見てた。』

うつして頂戴よ。』かう言つて梅香は繰返して三味線を彈いた。『筆のかさの合の手のところがあるわねえ。あそこを豐子姐さんはかう彈くけれど、私の教はつたのはさうぢやないのよ。』秀松はかう言つて、それを自分で彈いて見せたりした。秀松は二三年前柳橋の方に出てゐた。

秀松の家には、近所の人達がよく電話をかりにやつて來た。それは照子の母親、梅香の母親、政勇といふ自前の姐さんなどといふ人達であつた。電話は抱妓達の大勢ゐるところにあつた。『あそこ位無愛想な家はありやしないよ。電話を借りに行つたつて、ふんつて言ふ顏をしてゐる。抱妓達までさうなんだから腹が立つよ。何も唯で借りはしまいし、つけとゞけは餘りかへるほどしてあるのに……。』こんなことを言ひながらも、検番の電話ではかけにくいことがあつたりするので、何ぞと言つては、人達はそこに驅け出して行つた。

月の薄明るいある晩のことであつた。梅香が秀松と長火鉢のところで話してゐると、突然抱妓のゐる方で、『小〆さん、早く、早く。』といふ聲が聞えた。梅香が入つて來る時に土手下の自前の小〆が其處で何か言つてゐたのを見たが、その聲のけたゝましいので、吃驚して振向くと、小〆は緣側づたひに慌てて跣足で奥の方へ逃げて行つてゐた。

『何うしたの?』

かう言つて梅香と秀松との立上つた時には、白地の浴衣を着て、片手に刄物を持つた遊び人らしい男

の方は才ばしつて、悧巧で、何んな話でも流れるやうに出て行くといふ風だが、秀松はイヤに落附いて、押默つて、お座敷に出ても滅多に口もきかないといふ質であつた。近所の評判では、表面秀松の旦那にしてゐる兄ちやんと言ふ人は、秀松の養母で今そこで津の國屋といふ待合をしてゐる女將とも同じく出來てゐて、兎角内輪が揉め勝で、此間も大喧嘩があつたなどといふ話であつた。『お前さん、もうすこししつかりおしよ。餘り默つて落附いてゐるからいけないのよ。』などゝ見かねて梅香が言ふと、『だつて、私、何か言つたつて、しやうがないんだもの。母ちやんには敵はないもの。』などと矢張落付いて平氣で言つてゐた。『秀ちやんのは、兄ちやんにほれてゐるんだか何だかわかりやしないよ。見ても齒痒いやうよ。だつて、私、困るんだものなんて言つてゐるんだもの。』梅香はかう母親に話した。

その癖、二人は交情が好かつた。珍らしいものがあると、互に持つて行つたり持つて來たりした。時には二人で三味線を合せて、互に持つてゐる小唄のうつし合ひをしたりした。

『せかれせかれてくよくよ暮らすエ
たまに逢ふ夜はせかれては逢ひ
あひてはせかァれ
わかれともない明の鐘……

秀松の本調子に梅香の三下りがよく合つて聞えた。初め秀松がこの小唄を梅香に敎へた。『好いわねえ。

『何ですか、面倒で仕方がないんですよ……。昨日も先方から人が來て、何の彼のつて面倒でね。…それに、大阪の旦那の方からは、お店の人のいふことゝは丸で違つたことを言つて來るんでね。』

照子の母親はこんなことを長々と話して行つた。『一時はあんなに好い好いつて羨しがられたけれど、照子さんの内所だつて餘り好いんぢやないね。』其處の中姐さんは後で母親にかう言つた。その中姐さんの家には、大きな商人の番頭だと言ふ人が一週間おき位に來ては、こつそりその二階に泊つて行つた。始めは近所の人々もその姿を見たことはなかつたが、隣の相場師の細君がある朝歸つて行く姿を勝手元で茶碗を洗ひながらちらりと見て、『あれがお隣に來る人だよ。』かう言ふと、其處に寢衣姿で齒を磨きに來てゐた亭主は水口からちよつと覗いて見たが『あの人？　あの人ならよく土手の近所で見かけるよ。けれども、あの人ばかりぢやないんだらう、隣に來るのは？　鬚の生えた四十位の人も來て泊つて行くぜ。』などゝ言つた。

その中姐さんは梅香と呼ばれてゐた。かなり賣れる藝者で、藝もあれば容色も好かつた。それに七三で置いた妓が旨く當つて、毎月百五六十圓も摚いだ。『お宅のはよく賣れますね。羨しいやうね。』表ではこんなことを言ひながら、裏では『何うしてあんな妓が賣れるんだらう。不思議のやうだね。』などゝ噂した。

この梅香が奥の藝者屋の養女の秀松と交情が好かつた。兩方でよく遊びに行つたり來たりした。梅香

照子が歸つて來て二三日經つてから、照子の母親は何かの用事で、前の藝者屋へとやつて來た。

『私の考へた通りでしたよ。』

『何故です。』

『何故つて、お前さん、若いものゝやることはだらしがないよ。餘り意氣地がないんで、苦々しくなるよ。』

『何うしてですえ？』

『だつて、今度のことだつて、皆なあれがわるいんですの。だから、素人の家になんか入つたつて駄目だつて、口の酸くなるほど私は言つてきかせたんだよ。何ういふもんかあれはぢき夢中になつてね。その癖、浮氣も隨分する方なんだけども……。』

『旦那は此頃何うかなすつたんですか。』

『それがさ、あの人がまた若いもんだから、何もそんなことはしないでも好いものを、あれの爲めに親と喧嘩なんかしたんだよ。あの人が親を打つたとか何とかいふ騷ぎになつて、今ぢや大阪の店の方にやられてゐるんですよ。』

『まアさうですか。それは御心配ですね。けども向うさまでも、お子さんまでおあんなさるんだから、大切にはして下さるんでせう。』

一日に見えるので、遠慮して、成るたけ明けないやうにしてゐるが、それでも、照子と旦那と取膳か何かで睦ましさうに酒を飲んでゐるところなどがをりをり見えた。醉ふと旦那は淸元を唄つた。

『奥の兄ちやんより餘程好いわね。』

などと抱妓達は言つた。

三

照子が日本橋の本宅に行つてゐた間は四月位であつた。其間、母親と前の旦那の子とはさびしさうにして暮してゐた。母親は花牌が好きなので、何うかすると近所の人達を集めて、遲くまで引いてゐることなどもあつた。しかし大抵は、酒を飲んでその子を抱いて早くから寢た。軒燈が徒らに閉した格子を照してゐた。

『結構ですね。』

などと前の藝者屋の母親が風呂で一緒になつて聲をかけると、

『海のものとも川のものともまだわかりやしませんよ。内輪が中々難かしくつてね。』

『でも結構ですよ。』

『何ですか――若いもの丶やることは――。』などと言つてゐた。

うしても新派だ。』などと言つて笑つて歩いた。その細い路を出た處には、評判の娘の鳥屋があつて、何うかすると、夜は三味線の音が賑やかに聞えた。

この界隈の人達は、皆な照子の旦那をよく知つてゐた。その旦那は、照子より年が三つ四つ下で、何でも日本橋あたりの化粧品問屋の若旦那だといふことであつた。元の旦那が死んで、照子が二度の勤めに出たのは、今から三年ほど前のことであつたが、一年ほどは好い旦那も出來ずに唯ぐづ／＼暮してゐた。それが昨年の春あたりからふとしたことから今の旦那が出來て、『照ちやんが旨いんだよ、今にあの旦那がつまるにきまつてるよ。』などと多くの妓達に言はれながらたうとう離れることが出來ずに懷姙までして了つた。『照ちやんは人情深いのよ、屹度……。すぐあゝ出來て了ふんだから。』ある老妓はこんなことを大勢の中で笑ひながら言つてゐた。

去年から今年の春にかけて、若旦那は殆ど毎晩のやうに通つて來てゐた。土手から下りて入つて來る細い通には、日が暮れて一時間ほど經つと、屹度チリリンといふ俥の鈴の音が聞えた。

『そら、照子さんの旦那。』

かう誰も彼も言つた。

旦那は中折をかぶつて、角帶をしめてゐた。いかにもやさしい人柄な男で、近所の抱妓達は、

『好い男ね。伊井に何處か似てるわね。』などと噂をした。前の藝者屋の二階からは、照子の家の中が

には、役者を亭主にして、相談づくで、別に旦那を家に入込ませてゐる藝者などがゐた。角には子供が大勢ゐて、綿の出た蒲團などがよく二階に干してある相場屋さんだと言ふ一家族が住んでゐた。

その通を褄を取つた藝者だの、玉帳をぶら下げた箱屋だのがよく通つて行つた。奥の藝者屋は待合を兼ねてゐたが、そこの養女だといふ綺麗な中姐さんは、夕方になると、白地の浴衣にへこ帯をだらしなくしめた男と一緒に角の玉突場へと出かけて行つた。抱妓達はその男を兄さん兄さんと呼んでゐた。

照子の家の傍には、細い通があつて、そこを行くと、裏には百坪ばかりの空地に、夏は一面に草が茂つてゐた。夜は螢などが飛んでゐた。何うかすると、闇の夜などに、男と女とが其處で何かこそこそ話をしてゐるのを見かけることなどもあつた。『呆れて了ふよ、誰があそこにゐるかと思つたら玉の家の女中と政どんが闇の中に立つてゐるぢやないか。家のお常なども油斷がなりやしないよ。』こんなことを其處の藝者屋の母親が言つてゐた。その空地からは、路がまた細くなつて、溝の水が溢れてグチヤグチヤしてゐた。炭俵の空いたのや板片などが其處に置いてあつた。でも、通りに出る近路なので、其處に住んでゐる人達はよくそこを拔けて通つて行つた。矢張、其の近所の藝者屋に入込んでゐる一人の男は、女と一緒に其處を通りながら『こゝは新派の芝居か、活動などに好いね。お前が歩いて行く後から、僕がピストルか何かを持つて、この女！　この薄情女！　思ひ知れとか何とか言つて、ズドンと一發放つと、お前が泥の中にばつたりと倒れる。裾がまくれて白い足が出る。胸からは血がだらだら流れる。何

けよ。』と言つては、よく照子の許へ持たせてやつた。と、『これが、何より可愛いよ。私の息子はこれだよ。』などゝ言つてほく〳〵照子の母親が喜ぶので、後には、『お婆さん、また息子をつれて來たよ。』などゝ言つて藝者屋の母親は袖の下から德利を出して渡した。

さうかと言つて、さう大して澤山飮むといふでもなかつた。精々二合、多くつて三合位ゐであつた。しかし、酒を飮むと、馬鹿に元氣がよくなつて、ぢき痰呵を切つたり、昔、仲にゐた時分の自慢話をしたり、娘の意氣地なしを罵つたりするので、照子は成たけ酒を飮ませないやうにしてゐた。

『お母さん、默つてお出でよ。』

『默つてゐられないよ。唖ぢやないよ。酒の二合位買ふのは當り前だよ。お前たちばかりで好い事をしてゐやうたッて、それはいけないよ。』

こんな聲が以前にもよく外に洩れて聞えた。『照子さんのお婆ちやん、また醉ひちやんだよ。』などと近所ではよくその噂をした。

二

その細い通りにはいろ〳〵な人が住んでゐた。主に藝者屋が多かつたが、中には堅氣な人達も住んでゐた。息子が海軍の軍醫をしてゐるといふ白鬚のお爺さんの家からは裏の待合の庭が見えてゐた。其隣

終日家の中に引込んで玩具などを弄つてゐた。隣の年增の藝者が箱根土產に買つて吳れた木製の鐵砲の音が時々ポカンポカンと其處から聞えた。

格子戶の前で遊んでゐると、

『坊やさん！　坊やさん、母さん、歸つて來て、嬉しいでせう。』

こんなことを通りすがりに言つて行く藝者などもあつた。

すぐ前の家の抱妓は、よくすかして家に伴れて來て菓子などをやつた。

『母さんとお婆ちやんと何方が好き？』

『お婆ちやん。』

『母さんは？』

『母さんは嫌ひ。』

『ぢや、小父さんは？　お父ちやんは？』

『お父ちやん？　お父ちやんは好きだい。』

かう言つて、貰つた菓子は其處で食はずに、『お婆ちやん、お菓子。』と言つて、格子を明けて入つて行つた。『今の旦那をお父ちやんッて言はせてゐるのね。』などと抱妓は姐さんに言つた。

其處の藝者屋で、餘つた酒などがあると、家には飮む人がゐないので、一酸つぱくして了はない中にお上

二千圓貰つたなんて丸でうそですとさ。やるツていふ證文だけなんですツて……。今度なんかでも、旦那の父さんや何かに氣が合はないで、何うしても手を切つて了へツて言ふんですツて。そのことで、旦那も當分大阪か何かにやられたツて言ふ話ですよ。』

何處からか聞いて來てこんなことを言ひ觸らすものなどもあつた。

『もう、幾月位でせう？』

『さうね。引いた時が四月だツて言つてゐたから、七月位ね。』

『もう眼に立つかえ？』

『さうね、さう思つて見れやわかるけれども、割合に小さいわ。』

『お產が大變なんだツてね、あの人のは――。今の坊やさんを產んだ時でも、三日も四日も苦しんだツてね……。照子さんも、あの子の旦那が生きてゐると仕合せだつたんださうだけれどね……。お婆さんいつでも滴してるよ。』

『あのお婆さんの言ふことは解りやしない。』

そのお婆さんが、照子の先の旦那の男の兒を伴れて突當りの風呂に出かけて行く姿を其處等の人達はよく見かけた。何うかすると、照子が自分で伴れて行つてることなどもあつた。今年七つになるけれど、發育不十分の低能兒で、碌々口もきけなければ、近所の子供達に雜つて一緒に元氣なく遊ぶでもなかつた。

九時すぎ

一

『照子姐さんはまた歸つて來たんですね。』

『さうですッてね。』

『矢張、さう好いことばかりはないと見えるわね。』

こんな噂が其處等近所に住んでゐる妓達の口に上つたのは、秋になつて草花などを見に行く人が大勢土手を通る頃であつた。降り續く雨に心配した洪水も何うやら無難に通つて、此頃では著しく減水した川の上を往來するペンキ塗の小蒸汽に毎日晴れやかな夕日がさした。

『さうだらう、お前……。一度褄を取つたものが堅い商家のお上さんなんかになれやしないよ。商家なんて忙しいもんだもの。』照子の家のすぐ前の藝者屋の母親はかう言つたが、段々照子の歸つて來たに就いての噂がいろ〳〵とあたりに取沙汰された。『そんなに好いんぢやないんださうですよ。』引いた時に、

へと志して歩いて行つた。

睦じい平和な二家族であつた。池の畔では、私達は藤棚のある折れ曲つた橋を渡つて行つた。風船だの玩具だのを賣つてゐる爺が其處此處にゐた。『あ、金魚！　金魚！　大きな金魚。』かう言つて二番目の男の兒がめづらしさうに聲を立てると、『金魚ぢやねえやい。緋鯉だい。』などゝ後から行つた總領の男の兒は言つた。女の兒は長い袖を欄干に凭せかけて、麩をねらつてパク／＼鰓を見せる大きな緋鯉をめづらしさうに見てゐた。

友達も覗き込んで見てゐた。私はかうして人知れず長く續いて行く祕密といふ事を考へずには居られなかつた。私は夕日の池の中にごた／＼と入亂れて映つてゐるお靜さんや妻や友達や上さんの姿を見た。色彩がチラ／＼と動く中に友達の白い顏がはつきりと見えてゐた。賑やかに樂隊の音がしてゐた。

つた。友達は私の末の兒を高く抱き上げてそれを見せた。猿の前では、子供は餌などをやつた。
私達はそこからまた電車に乘つて活動寫眞のある方へと行つた。丁度、午なのでその前に飯を食つて行かうと言ふので、私達は電車を下りるとすぐある大きな鰻屋に上つて行つた。そこも客で一杯であつた。私達は辛うじて奥の一間に入ることが出來た。
『かうして見ると、隨分大勢だ。』こんなことを言つて友達は數へて『皆なで十人ゐるんだからね。』
『子供のお伴は閉口だ。』
『でも、賑やかで好いわよ。私は子供がない故か、かう大勢ゐると、何だか心丈夫のやうな氣がしますよ。』上さんは私の末の兒と友達の末の兒とを兩方に置いて、洟をかんだり顔を拭いたり髪を直してやつたりした。お靜さんと私の妻とは、やがて女中の運んで來た鰻の丼を小さな茶碗にわけてやつた。中には大きな丼の方が好いといふ男の兒もあつた。私と友達はビールを飲んだ。
活動寫眞では、二等といふのを私が金を出して一等を買つて、高い棧敷のやうな空いたところに行つて見た。アメリカンインヂャンの生活を仕組んだ芝居は、幼い兒にはよくわからなかつた。船や、海や、波や、兵隊や、さういふものが却つて子供を喜ばせた。お靜さんは私の後のところに腰をかけて唯默つて見てゐた。三時間ほど私達は其處にゐた。
そこを出た時には、もう夕日が斜に大きな建物の窓に當つてゐた。私達はそれから賑かな觀音堂の方

『今日は大變でせう、しかし。』

『さう、日曜で、そして大祭日と來てゐるから。』

矢張花見に出かけるらしい人が彼方此方の停留場から乘つた。ある橋近くに行く頃には、子供達は全く埋められて了ふやうに電車は込み合つて來てゐた。上さんと妻との並んで腰かけた向うにお靜さんは離れて立つてゐた。

電車は彼方此方から大勢の花見客を運んで來てゐた。街には軒並に國旗が立つて晴々した顏をした人達が、ぞろ〳〵と通つた。ある活動寫眞館からは賑やかなガチャ〳〵した樂隊の音が聞えてゐた。

『まア、苦しかつた。』

下りると、女達はかう言つてホッと呼吸をついた。八分通り咲いた花は塵につゝまれていやに白ちやけて見えてゐた。長い石階には、蟻のやうに群集が上つて行つてゐた。

私の妻は一番末の六歳になる兒の手を引いて靜かに歩いた。上さんの派手な姿を人達は振返つて行つた。

『何うしても、素人とは見えませんね。』

後から行くお靜さんと私の妻とはこんな話をした。

動物園の象の前に立つた時には、子供は吃驚したやうな顏をして、暫しはそこから立去らうとはしなか

『をばさん、もうお客來たよ。』[illegible]領の女の兒がかう言つて店から上つて來た。

『下宿屋のお上さんも行くんですつて。』かうお靜さんは妻に言つた。

『面倒だから、よせつて言つたんですけどもね、昨夜來て是非一緒に伴れて行つて下さいつて言ふものだから、面白くないと思ひましたけれども。』かう申譯をするやうに友達が言ふと、『なァに、賑やかで却つてよう御座んすよ。』かう妻は靜かに言つた。お靜さんの支度が出來る前に下宿屋の上さんはけばけばしい派手な扮裝をして、旣に店頭に來て立つてゐた。

やがて私達は出かけた。

友達とお靜さんと並んで歩いて行く後から、『よく似合ふわねえ、さうして一緒に歩いてゐると。』など上さんは言つて笑つた。男の兒は電車の方へ驅けて行つた。

電車の中では、子供ががや〳〵と賑かに入つて行つて、空いた席を逸早く占領して、顏を窓硝子のところに並べて、目まぐるしく動いて行く外を見てゐた。絡みついて來る二番目の女の子を、『父さんの方へお出で。』などゝお靜さんは云つた。乘客達は皆な此方を見た。

私と友達とは並んで腰をかけた。

『好い天氣ですね。』

『さうですね。』

友達も贊成した。兩方の子供を連れて、皆なして出かけやうといふことに話はきまつた。お靜さんは餘り進まないといふ風で、『私、お留守番をする。』と始めは言つてゐたが、私が勸めると、『ぢや行きませうかね。』と言つて應じた。皆な會費で行かうといふ話であつた。と、『お前さん、かういふ時には貴方が奢るものよ、時には奢つたつて好い。』などとお靜さんは亭主に言つた。

その日は朝から麗らかな好い天氣であつた。私と私の妻とが子供を三人伴れて、停車場から行くと、店頭には子供達が銘仙の着物を着て、鬱金の縮緬の帶などをしめて、嬉しさうな顏をして飛んだり跳ねたりしてゐた。お靜さんは髮を綺麗に結つて、今、丁度鏡臺を持出しておつくりをしてゐるところであつた。友達は縮緬のへこ帶に時計を絡ませてゐた。

『大變によく出來たのね、今日は、鬢がよくさう出ますね。』庇髮に自分で束ねた私の妻は、かう言つてお靜さんの方を見た。

『駄目ですよ、私は髮が何うもくせがあつていけないのですよ。』お靜さんは、こんなことを言つて、肌ぬぎになつた體をそこ〳〵に藏つて私の方を見た。乳房の小さく白いのが私の眼に附いた。

お靜さんはお召の派手な着物に腹合せの帶をしめた。指環は一つしかなかつた。それは結婚した時旣に持つて來てゐたもので、お邸の若樣から貰つたものらしかつた。私の妻はイヤに光るコートを着てゐた。

いつも歸りにそこに寄つて行くんですよ。私、口惜しいつてなかつた。本當にあんなに口惜しいつてなかつた。』

『それで何うしたの？』

『私、口惜しいから、ある日わざと「若樣」つて聲をかけてやつた。と、先でも吃驚して、それから一月ほどして、別な方に引越して行きました。』

お靜さんはこんなことを話した。お靜さんは種々と昔のことを思ひ出すやうな顏をしてゐた。私はお靜さんの性格がそれですつかり飮込めて來たやうな氣がした。私はお靜さんの顏を凝と見た。亭主も知らない前生涯の祕密――それをかうして私が知つてゐるといふことに私はある不思議な得意と誇りとを感じた。始めて女をすつかりつかんだやうな氣がした。

九

花の噂が每日の新聞に上つて來る頃、ある日曜日を選んで子供達をつれて一緒に花見に出かけやうといふ計畫が誰からともなく出來て來てゐた。『たまにはお花見でもしなけりやねえ、お靜さん、年中くすぶつて暮してゐるんですもの。』かう私の妻は言つた。『子供だつて、たまにや喜ばしてやらなければ、』などとも言つた。

から、今でもあゝいふところの女中を見ると昔のことを思ひ出しますよ。』

『へえ、ちつとも知らなかつた。』

『半年位ゐたでせう、あれでも……。それからそのお邸に奉公に行つたんですよ。そこには二年ゐましたよ。大旦那にはお妾が二人もあつて、それはいやらしい家庭でしたよ。そして、少し綺麗な小間使ひには、すぐ手をつけるんですからね、でもね、私はこんなだから、そんな目には逢ひませんでしたけどもね。……そこに若樣がゐましてね、大學に行つてゐらしつてね、これがまたおとなしい人なんですの。大旦那とは丸で違つた氣質で、默つて書齋に入つて勉强してゐるつて言ふ風な方でしたよ。私はよくそのお世話をして上げました。』

『それが初戀ですね。』

お靜さんは笑つて『それが可笑しいんですよ。そら、私のあの二階の向うに、一軒ちよつとした家があるでせう。あそこに引越して來た人があるんですよ。それはもう三四年前のことですがね。私、今の家の前の人達と懇意でしたから、あそこに行つてゐて、何氣なしに、裏を行つたり來たりしてゐると、ある日、庭で草花か何かいぢつてゐる人がその若樣ぢやありませんか、私吃驚しましたよ。餘程聲をかけやうと思つたけれど、まア、その時は默つて通つて了つたんですの、と、何うでせう。そこにお妾さんが圍つてあるのよ。それがまた好い女でも何でもないんですよ。丁度つとめてゐる學校の歸途か何かで、

ね。本當にイヤらしい奴だ。』
いつもなら、『だつて商賣だから仕方がない』とか何とか言ふのだけれど、何う思つたか、お靜さんは今日は默つてゐた。私の顏を時々意味ありさうに見た。
私はお靜さんの半生を段々詳しく知るやうになつてゐた。お靜さんを通じて、今まで知らなかつた友達の祕密なども聞いた。お靜さんの妹で、友達を深く思つてゐる女のあることなどをも聞いた。『だから、私よりも妹がなほる方が好いんですよ。內だつて妹に氣があるんですから、貴方、逢つたことはありませんか。下町に貰はれて行つてゐるんですがね。私なんぞより容色も好し、氣立もやさしいし、それに若う御座んすからね。』などと言つた。
ある日遠くに行つて、人氣を離れた小さな室で三時間ほどすごした時には、私達の心はいつもより一層深く觸れ合つてゐた。私達は何も隱さず話して、お靜さんは十六七時分の事を話した。『これは、誰にも話したことはないんですよ。內でも知らないんですよ。』お靜さんはかう言つて、ある邸につとめてゐたことだの、ある料理店に奉公してゐたことなどを話した。
『そんなことがあつたんですか。』
『だから、私位苦勞したものはないんですよ。そら、あそこに上野に鳥屋があるでせう。あそこにゐたことがあるんですよ。赤い襷などをかけて、メリンスの帶なんかをしめて働いてゐたんですよ。です

來ないのを知つてゐる私は、常にお靜さんに向つて疑惑の眼を向けずには居られなかつた。いろ〳〵な方面から私はそれを探らうと苦心して、細かい言葉にも常に注意を拂つてゐた。ある時行つて見ると、丁度其處にその代診が來てゐた。髮を綺麗にわけて、イヤにジャラ〳〵した扮裝をしてゐた。お靜さんは顏を赤くして私を迎へた。

代診はじろ〳〵と捜すやうにして店に上つて行く私を見た。長火鉢のところで私が聞いてゐると、お靜さんは一刻も早く歸れかしといふやうな口の利き方をしてゐた。男はしかし容易に歸らうともしなかつた。種々なことを長たらしく話し込んでゐた。その癖主人が歸つて來ると、そこ〳〵に逃げるやうにして歸つて行つた。

『また來てるんだね。』

友達は厭な顏をした。

『だつて、來るんですもの。』

『餘り下らんお世辭を言ふからだよ。彼奴の顏を見ると、身ぶるひが出る。イヤにジャラ〳〵して、人の顏ばかり見て、あんな厭な奴つたらありやしない。』友達はかう言つたがすぐ言葉をついで、『餘りお世辭を言ふからわるいんだよ。物を買ひに來て三十分も四十分も店頭で話してゐる奴があるもんかね。お前もわりいんだよ。それから、あの爺もイヤな奴だね。五十にもなつて、妾をさがしてゐるんですが

二階のすぐ傍にある梅はもうすつかり咲きすぎていやに黑く萎びて了つてゐた。風が吹いてまだ障子が明けられないやうな寒い日もあつたが、靜かな晴れた日には室の眞中まで暖かい日影がさし込んで、『實際此處にゐると、春がすつかり來て了つたやうな氣がしますよ。店のあの暗い室よりいくら好いか知れません。三圓や四圓にはかへられませんよ。』などと主人は言つた。主人は其處でのんきさうに昔の小說の本などを讀んでゐた。

醫師の代診のことを考へると、私はいつもイヤな不愉快な氣がしたが、女がそれを否定してゐる以上、その上に何も言ふことは出來なかつた。それに、私の知つてゐる限りでは、お靜さんは夜おそく歸つて來ることなどはないやうであつた。琴平さまへももう滅多にお詣にも行かないやうだつた。私はそこの待合に行つて、種々樣子をさぐつて見たが、それは男の方で知つてゐる家で、お靜さんは三度ほど其處に行つたきりで、あとは姿をも見せないらしかつた。『お存じなんですか。』などとそこの女將は私に訊いた。

代診に關しては、『いゝえ、あの方だつて、さう度々入らつしやる方ではないんで御座いますよ。あの人のお友達に、長年、私共でお客にしてゐる方がありましてね。そのお客さまが伴れてお出でになつてからの御懇意で御座いますよ。』

しかし、お靜さんのやうな境遇に身を置いた女が、一度體を任せた以上容易に男から離れることが出

『綺麗になつてゐたらう。』

『内ぢやあそこに毎晩寢るんだなんて言つてましたがね。あの夫婦は變ですね。仲が好いやうで、わるいやうで……。旦那が弱いつて言ふのは本當かしら？』

『何うだかねえ。』

『相變らずお靜さん面白いことばかり言つてゐましたよ。冗談で言つてゐるのかと思ふと、さうでないんですね。本氣で言つてるのよ。』

『餘程長くあそこにゐたかえ？』

『二時間位ゐましたよ。あそこで、お茶を淹れて貰つて、お菓子なんか御馳走になつて、今日はお靜さん、イヤに莞爾してた。』

私にはお靜さんと妻とその二階の一間でのんきに話してゐるさまが歷々と眼に見えた。お靜さんの笑つてゐる顏もはつきりと見えるやうな氣がした。お靜さんと私との心はそんな處でも微妙に觸れて感じられた。

主人は毎日役所に通つて、お靜さんは毎日店頭に坐つて、私の妻は毎日子供の世話に滷龤して暮してゐた。私は窓の下に坐つて本を讀んだり物を書いたりした。暖かい日には、郊外に桃を見に行く人などもあつた。

から三時までの間であつた。私は停車場を下りて、躍る心を抱きながら、其の店の前を通つた。店にはいつもお靜さんが出てゐて目くばせをした。

　私は裏の巷路から入つて行つた。誰の眼にも附かないやうに、私は奥から入つて行つてそして靜かに階梯を上つた、お婆さんは知らずにゐることさへあつた。やがて足音がしてお靜さんは靜かに襖を明けて入つて來た。下のお婆さんは、親類の人だと聞いてゐるので、別に何とも思はないらしかつた。

　何うかすると、歸りに、初めて來たやうな顏をして、あらためて店から上つて、奥の長火鉢の前で、茶などを御馳走になつて歸つて行くことなどもあつた。

　ある日、二階から來て、長火鉢の前で話してゐると、友達が歸つて來て、また引返して二階につれて行かれた。私は變な氣がした。

　妻はある日私に言つた。

『今日、始めて裏の二階につれて行つて貰つた。』

『好い二階だらう？』

『さうね。ちよつと氣が晴れる二階ね。でも、夏は西日がさして暑いでせうね。風は來るでせうけれども。』

かつた。ある日は私はその話をした。

お靜さんは、私の言ふことを默つて聞いてゐたが、やがて、『え、貴方がさういふ積りならそれでも好う御座んすとも。』思ひ切の好い口の利き方をした。そして私達は一日二日別れた心持でゐた。しかしそれは到底實行の出來ないものであるといふことを私達は經驗した。

『そんなことを考へるのはもうお止しなさいよ。』

後にはお靜さんは笑ひながら言つた。

その二階にはいつもよく日が當つた。下では近所の上さん達のべちや〳〵饒舌る聲がした。水道の栓のある路の角には、娘達が手桶を持つて出かけて行つた。水の落ちる音が小さな瀧のやうにきこえた。硝子戸のはまつた本箱の中には、鐵道旅行案内、山水案内などゝいふ本が澤山に入つてゐた。壁には友達の着替の洋服や變りチヨツキなどがかけてあつた。靑い絨をかけた机の上の一輪挿しには、何うかすると、綺麗な赤いダリアなどが生けてあつた。

階梯に足音が聞えると、

『誰、お婆さんですか。』

お靜さんはいつもかう聲をかけた。

私は一時間以上そこにゐたことはなかつた。それは大抵午前の十一時頃か、でなければ、午後の二時

『だつて、不思議な緣ぢやありませんか。貴方のところにお淸さんが、嫁に行く時分からの緣で十ものね。』

ある日は私は醫者の代診の話を持出した。とお靜さんはいくらか困つたやうな顏をして、『では、疑はれてはイヤだから話しますよ。本當は困つてゐるんですの。私あれから、何遍も斷つたんだけれども。』

『何つて言ふの？』

『別に、さう難かしいことも言ひはしませんがね。始終、内にやつて來て、いろんなことを言つて困るんですの。』

『何んなことを言ふの？』

『何處かに行かうつて仕方がないんですよ。だから、私は内で此頃やかましくつて、外には出られないからつて言つて置くんですけれどもね。』

『でも、逢ふには逢ふんでせう。』

『そんなことはありませんよ。』

お靜さんは眞面目になつていくらか怒つたやうな顏の表情をした。私は默つてゐた。

私は私自身にもわからないやうな複雜した心を經驗せずには居られなかつた。私は始めは不安と恐怖と後悔とを感じた。もう、これきりで、關係を斷たう。さうだ、さうしやう。かう何遍思つたか知れな

『男つて存外氣が小さいものですね……。』

『とても女には敵はない。』

『何故？』

『何故つて譯もないがね……。』

かう言つて私は躊躇した。

『お清さんだつて、ちつとも知らないでせう。』

『それは知らないがね。』

『唯、落附いてゐさへすりや好いんですよ。』

ある日にはまた次ぎのやうな話をしたこともあつた。

『でも、いくらか變なやうに思つてゐるにはゐるらしいのね。』

『困るよ、それは――。』

私が眞面目になると、

『大丈夫ですよ。私だつて、これが知れゝば大變だつて言ふ位のことは知つてゐますから。でも不思議ね。』

『何が――。』

『だから、學校に行つてゐる間に來るのね。あの暗い室にゐると、貴方ぢやないけど本當に氣が詰りますからね。』

『もと、誰か借りてゐたんですか。』

『若夫婦が此間までゐたんですよ。散々ふざけてばかりゐたんですつて。借りる時、此處のお婆さんがさう言つてゐましたよ。』

『それぢや夫婦に取つちや記念の室だ。』

『さうでせうよ。結婚すると、すぐ來たんだつて言ひますから。女學生あがり見たいな女よ。よく店に買物に來ましたよ。貴方知つてるでせう。』

『うむ……變な女だつたね。女優のやうな髪の結ひ方なんかしてね。』

『本當よ。』

お靜さんはかう言つてゐる間にも、絶えず私の方を見た。私は其日は友達と話して、日が暮れるとすぐ歸つて來た。

その二階で、私はある日お靜さんと二人きりでこんな話をした。

『大丈夫ですよ。』

『でも、變な氣がするよ。』

『少し高いんですけども……お靜もお前さんの機嫌のわるい顏を見てゐるのがイヤだから、半分出してやるつて言ふもんですからね。』

『いくらです。』

『四圓五十錢。』

『そんなに高くはありませんね。』

階梯を昇る足音がしたと思ふと、そこにお靜さんは顏を出した。

『好いでせう。』

その『好いでせう。』がある意味を持つて私には聞き取られた。私はお靜さんの顏をぢつと見た。

『夏は風通しが好いよ、屹度。』

お靜さんはこんなことを言つて、障子を明けて裏の方を眺めた。ぼつと霞んだ日で、崖の下には草などが靑く萠え出してゐるのが見えた。

そこに持つて來てある小さな桐の長火鉢の傍で、三人してのんきに茶などを淹れて飮んだ。『私も、母さんに店番をして貰つて時々此處に寢ころびに來ませうよ。靜かで好いから、子供がゐなくつてさぞのうのうするでせうね。』

『子供がすぐ追かけて來るよ。』

『行つて御覽になりませんか。』

『行つて見ませう。』

私は友達と一緒に裏口から出かけた。細い巷路を通つて、路のぐちや〳〵したところを向うに行くと、崖に添つた處に、小金を持つた爺さん婆さんの住んだ小さな二階屋があつて、下が六疊に四疊半に臺所、二階は六疊の一間であつた。庭には梅だの梧桐だのが栽ゑてあつた。爺さんは何處か小さな會社の集金掛で、毎日朝早くから出かけた。

私達が入つて行くと、其處にゐた品の好い婆さんが出て挨拶した。階梯は入口のすぐ側のところにあつた。

『好いですね。』

私は階梯を上るとすぐ言つた。欄干も緣側もない疊の數だけの二階で、床の間なども半床のけちなものだが、それでも兩方明いてゐるので、室は明るかつた。裏の障子を明けると、樹の多いお宮の神樂殿が見えた。友達は既に本箱や机や座蒲團などを其處に運んで來てゐた。

『好いところがありましたね。』かう言つた私はさつきお靜さんの眼から受けた暗示を思ひ出してゐた。

『餘程しますか、この位の二階は。』

のことがわかつて來た。代診は主人の留守には、平氣で店に買物に來た振りをして、長い間其處で話などをして行くらしかつた。ある日妻は其處から歸つて來て話した。『店には、いろ〳〵な人が來るけれど、隨分冗談なんか言つて行くものが澤山あるのね。お靜さん、昔と違つて、交際が上手になつたにはびつくりする位ですよ。冗談なんか言ふと、何うしても物を買ひに來る人が多いさうですよ。今日も、イヤに色の生白い男が來て、三十分もいろ〳〵なことを話して行くんですもの。よくあゝして相手になつてゐられると思ひますよ。』

ある日出かけて行つて見ると、友達は莞爾して、『たうとう二階を一つ借りました。行つて御覽になりませんか。』かう言つて私を誘つた。友達はお靜さんが店を持つた時から、何處かに好い二階があつたら借りたい借りたいと言つてゐた。『何うも、この狹いところでは客が來ても困る。それに暗くつて仕方がない。一つ何處か借りなければ仕方がない。』と口癖のやうに言つてゐた。

『好い處がありましたか。』

『なァに、言いッていふ譯には行きませんがね、近いから便利です。』

『何處です？』

『すぐ其處よ。』

お靜さんは傍から言つて、た眼である暗示を私に與へ。

『それはないけども、遲く歸つて來ることなんかよくあるのよ。女に逢つて來たか來ないかなんかすぐわかるわ。女の匂ひが何處かでするわよ。此間なんか、何て言つても夜つぴて脊中を向けてやつた。』

その夜は遲く歸つて來た。私は闇の夜路を歩きながら、『わからない、わからない。』と獨語した。空には星が閃めいてゐた。

八

何の事もなくて過ぎた。妻とお靜さんの間にも何の事件も起らなければ、お靜さんと亭主の間にも疑惑の影らしいものもさして來ないらしかつた。私は不思議と思つた世界が何の不思議な世界でもなく、大事件と思つたことが何の大事件でもないのを一日々々に經驗して過ぎた。

妻は矢張お靜さんのことを何の彼のと言つて噂した。お靜さんが私の家にたづねて來る時には、子供などを相手にして平氣で小半日も遊んで行つた。しかし私達はところ〴〵でいつも短かい會話を取かはした。

自分ながらよく安心してゐられると思ふほど落附いてゐたが、それよりも一層女の方が大膽でそして沈着であつた。それでも私は醫者の代診とお靜さんとの關係に就いて、段々詳しく知ることが出來て來てゐた。無論、女が眞實を話してゐるとは思はなかつたが、いろ〳〵の話の口裏からおぼろげながらそ

『今だつてそんなことを言ひやしないぢやないか。』

『此間言ひました。』

『だつて、毎日のやうに明けられちや、實際困るんだもの仕方がない。役所を一日やつて來て、家に歸つて來てまで店番をさせられちや、やりきれないからな。』

私は何となく厭な不愉快な氣がして、話を別な方へと持つて行くやうにつとめた。其處に下宿屋の上さんがやつて來た。お靜さんはいやにはしやいで、菓子なんぞ買つて來て、お愛想をしたが、『久し振りで一つやりませうかね。』などゝ言つてまた例の花牌を取出した。

その夜は上さんも機嫌が好く、代り〴〵店を見ながら二時間ほど花牌を引いて遊んだ。私はまた二三十錢負けた。

上さんは花牌を引きながら、いろ〳〵な話を私達にしてきかせた。昨夜もつれ込の客があつた話などをもした。女は二十一二で、何うしても何處かの娘らしい風で、男は勤人らしかつた。女が惚れてるのが、それは見せたい位であつたなどゝ上さんは話した。近所の料理店の女中の話の出た時には、『へえあそこの女中なんかゞ矢張お客をくはへてやつて來るんですか。』『驚いたやうにして主人は言つた。例の上さんのお惚け話なども一座を賑はした。嫉妬ぶかい人は何うしても辛いなどといふ話が出ると、

『だつて、旦那さんは泊つて來ることなんかないでせう？』

『貴方には何でもわかりやしない。すぐそこにあるんだつてわかりやしないんだもの。』

お靜さんはこんなことを言つて機嫌よく笑つた。此間のことなどは何處に行つたかといふ風で、至極平和なのんきな顏をしてゐる。私は不思議な氣がした。

私はあの時の言葉などを頭に浮べてゐた。弱い體を持つた女の悲しさといふことなどが思ひ出されて來てゐた。この間、此處に來た時のあの慌てたさまと今日の落附いたさまとを私は引較べて考へずには居られなかつた。お靜さんの眼は、それでも時々私の顏の上を往來した。

やがて麥酒たの肴だのが餉臺の上に並んだ。私達はいつもの通りにして酒を飮んだ。お靜さんは勝ち誇つたやうな晴々した顏をして何の彼のと冗談口をきいた。

役所の行政整理の話がまた出ると、

『やめられたら、私が養つて置いてあげますよ。男の一人位、私の稼ぎで、いくらでも食はせて置けますから。』

『生意氣を言つてるなァ。』

『生意氣ぢやありませんよ。今だつて、さうぢやありませんか。貴方の月給なんか私は當てにしてやしませんもの。その代り、養つてあげる代り、私がちよつと內を明けたり何かしたつてぐづ〳〵言つちや駄目ですよ。』

私は初めてお靜さんの所在を知つた。

二番目の子供が外から歸つて來て、『母さんは？』

『其處等にぐづ〳〵して油を賣つてゐるかも知れないから見てお出で。』

『あたい、腹が減つちやつた。』かう言つたが、そのまゝ二階に上つて行つた。『お婆ちやん何か頂戴。』

といふ聲が聞えた。

其處にお靜さんは近所の上さんと何か話しながらやつて來る氣勢がしたが、やがて店から上つて來て長湯に磨いた白い綺麗な顏を其處に出した。

『おや、内海さん、誰かと思つた。』

かう言つて入つて來て、亭主と私と向ひ合つて坐つてゐる長火鉢の傍を通つて、手拭に包んだ石鹼箱を持つたまゝ、勝手の方へと行つた。丸髷と丈の高い體とが薄暗い空氣の中に浮いて見えた。

勝手の水道の栓から水を一杯コップに汲んで飮んでゐるのが硝子戸を越して此方に見えてゐた。

やがて此方へ來て、『お出なさい。』と言つていつもの通り挨拶した。私はお靜さんの眼を避けるやうにした。『だつて、女の湯ですもの、長いのは當り前ですよ。男とは違ひますものねえ、内海さん。』などゝ言つて、戸棚から茶器を出すのを見て、

『何だ、そんな處にあつたのか。己ア、あちこちさがした。』

『しかし君なんか大丈夫なんでせう。』
かう言つて友達の顔を見ると、
『まア、僕なんか大丈夫だと思ふんですけどもね。恩給になつてゐる年寄連はびくびくしてゐますよ。少くとも五人や六人はやられるさうですから。』
『そんなに減らして人が足りなくならないんですかね。』
『矢張、人が減れば、何うしても忙しくなりますよ。』
また客が來て立つて行つた。
『難有う御座います。』かう言つて友達は再び入つて來た。
『此頃は花牌は矢張やりますか。』
『何うかするとやりますよ。』
『お靜さん此頃でも下宿屋に出かけて行きますか。』この『お靜さん』と言ふ言葉を言つた時、私は一種の刺戟を體に感じた。
『滅多に行きませんよ。』かう言つて、茶器をあちこちとさがしたが、『馬鹿に遲いんだからな。湯に行つても一時間や二時間はかゝるんですから閉口して了ふ。』
『お湯に行つたんですか。』

『内所にして置きさへすりや大丈夫ですよ。』かう言つた言葉がいろ〳〵に解釋された。何處かで女が勝利を誇つてゐやしないかといふ疑惑も出た。

私は二三日家に引込んで外へ出なかつた。仕事をする氣にもなれず、本を讀む氣にもなれず、唯ごろ〳〵して暮した。時には祕密の前に戰へる自分の臆病を自から罵つて見たりした。

しかし私は『跡』を見ずには居られないやうな氣がして、その四日目に、夕方から出かけて行つた。友達が店にゐて、丁度來た客に何かナイフのやうなものを見せてゐた。矢張いつものやうなはずまない顔をしてゐた。

『お上んなさい。』

と言ふので、私は上つて長火鉢の前に行つて坐つた。何も彼も元のまゝであるのに何も不思議はないのであるが、それが私には目新しく感じられた。『お靜さん、何處へ？』かう訊かうとして私は躊躇した。

『此頃は忙しいのですか。』

『え、年度がはりがちよつと近寄つてゐますから。少し忙しくなつて來ました。來月になると時間通りに歸つて來られません。』

『大變ですな。』

『それは好いんですけども……此頃は行政整理で皆なビク〳〵ものですよ。』

妻はこんなことを言つて、向うに行つて了つた。私は矢張床の中にゐた。女の心と女の體と言ふやうなことを私は考へてゐた。いろ〳〵なことが頭に絡つて來た。振放つても振放つてもそれが私の體にからみついて來た。『何故あの時、跡なんかつけたらう。何故あの時あんなことをしたんだらう。』こんなことを思つたが、しかし、私は後悔はしてゐなかつた。後悔よりは――今まで知らない不思議な世界が私の前に展けて來たのを戰慄した。

私は十時すぎに起きて、長火鉢の傍に行つて、朝飯を食つた。まだ頭が痛かつた。妻とお靜さんの仲などを考へながら、私は飯を茶碗に盛つて呉れる妻の顏を見た。何も知らないといふことの不思議さを私は思つた。

それに女の心と體といふ事が繰返し繰返し疑問になつた。單に戀するとか戀したとかいふやうな單純な心でもゐられないと共に、戀の滿足といふやうな純な心持でも居られなかつた。私は女についてはかなり多くの經驗を持つた積りでゐた。しかし今ではその經驗も何の役に立たないといふ事を思はせられた。

あゝいふ態度に出るだらうとは前から想像されてゐたが、それがあゝいふ事實になつて顯はれて見ると、その先にまだ深い〳〵女の祕密が横つてゐた。何ういふ積りで、あゝいふ態度に出て行つたか、あゝいふ顏をしたか、あゝいふことを言つたか、あの涙は虛僞の涙か、それともまた眞實の涙か、それがある處まではわかつてゐて、それから先がわからなかつた。その先を私はあれかこれかと想像した。

滴り落ちてゐたのを覺えてゐる。此方に曲る路の角で大きな犬に吠えられて、慌てゝ走つて逃げたのを覺えてゐる『餘り遲くなるといけませんから。私、先きに歸りますから。』かう言つてお靜さんの歸つて行つたのを覺えてゐる。私は門のくゞりをあけて、玄關で、大きな聲で妻を呼び起したのを覺えてゐる。

妻は子供達に飯を食はせて學校に出してやつてゐる樣子であつたが、暫くしてから、此方へやつて來て、

『昨夜は大變でしたね。』

『何うして？』

『だつて、着物を御らんなさいよ。丸で泥よ。何うかしたんですか。』

『犬に吠えられて、びつくりして逃げたもんだから。』

『何處で、』

『あそこん處で。』

『雨は降るし、私は今夜は泊りかと思つたから、早くから戸を閉めて寢て了つたんですよ。昨夜の貴方の機嫌ちやなかつた。何處で飮んだんです。隨分、ひどく醉つてゐましたよ。』

『まア、あつちに行つてお出で、頭が痛くつて仕方がない。』

『餘り飮むからですよ。』

お靜さんは、例の鋭敏な複雜した感情を籠めた眼で、私の方をぢつと見詰めた。見る〳〵お靜さんの眼からは、涙が滴れて來た。やがて堪らなくなつたやうに、お靜さんは右の手で額を抑へて、顏を見られないやうにした。私は何も言ふことが出來なかつた。長い間抑へに抑へて來たお靜さんの生活が私の眼の前を通つた。

込み上げて來るやうな歔欷、拘攣るやうな顏の筋肉の顫動、そこには長い〳〵間の苦痛と煩悶とが織り込まれてゐた。

歔欷は猶暫く續いた。

『御免なさい。いろ〳〵なことを思ひ出したもんだから。』暫くしてから、お靜さんはかう言つて手巾で涙を拭いた。

あくる朝、私は私の家で目覺めた。私は夜通し惡夢に襲はれてゐた。眼を覺ますともう夜は明離れてゐた。私は雨戸を明けて外を見た。昨夜の雨はまだ降つてゐた。

私の頭はガン〳〵鳴つた。私はまた床の中に倒れた。

私は其處にかけてあるインバネスを見た。それには泥濘が一杯についてゐた。私は夥しく醉つた身を人氣の少ない電車の中から下りて、雨の烈しく降る中をテクテク歸つて來たのを覺えてゐる。向うの丘から此方の丘に來る新開の町では、いつも起きてゐる蕎麥屋までも寢て了つて、ぼんやりした軒燈から雨が

私はその態度に引つけられずには居られなかつた。私はお靜さんの辛い苦しい忍耐と沈默との生活を長い間よく見て知つてゐた。

『私なんか本當に詰らない。……こんなになつて行つたのも、皆な内の人の爲めですからね。』かう言つたが思ひ出したやうに、『内海さん、私はもうすつかりよして了ふから、後生だから内所にして置いて頂戴。』

『それは大丈夫だがね……何もそんなにしないでも好いぢやないか。』

『あの時分、貴方は旅に行つてゐたのよ。……構はない、私すつかり話しますよ。貴方がゐればそんなことにはならなかつたんですよ。いゝえ本當にそれはさうですよ。貴方知つてるけども、そら二階の母さんが病氣で寢てゐる時分ね。貴方一度來て下すつたことがあつたでせう。暑くつて、苦しくつて、内ではぐづ〳〵してゐて何うにもかうにもならなかつたんですもの……。何故、貴方、旅になんか出かけたんでせう。』

『まァ、そんなことは好いですよ。』

『だつて、私の心だつて、貴方にはわからないことはないでせう。』

私達は心で思つてゐる事と口で言つてゐることゝの間に夥しい距離を感じないわけに行かなかつた。言葉を交してゐる中はさうでもないが、默つてゐると、堪らなくなるほど私達の心は觸れ合つてゐた。

『貴方、よく行く家なの?』
『さうぢやありませんけどもね。……』私は言ひ淀んで、『兎に角、えらい處に邂逅したもんですよ。』
『本當に、あれは困るのよ。內海さん。後生だから、あれは內所にして置いて下さい。私あれぢや困つてゐるんだから。』
『何ァに、僕はそんなことを誰にも言ひやしませんよ。』
『本當に困つてゐるのよ。私、此間から何うしようかと思つてゐたんですよ。私がわりいにはわりいのですけどね。向うしてあんな魔がさしたかと思ふんですよ。一體、貴方がわるいんだけども……。』
『何うして?』
『何うしてッて?』と言ひ淀んで、其處にあつた盃を取りあげて一杯飲んで、『私なんか何うせもう駄目ですよ。』
『何故。』
お靜さんは默つて盃を私にさした。私は默つてそれを受けた。女中が女の爲めの肴を運んで來た。
『內海さん、私なんか、本當に下らないつまらない一生ね。內海さん、貴方はよく知つてゐますね。お淸さんなんかに比べたら、私は何んなに不仕合せな暮しをして來たでせう?』お靜さんの言葉には胸の迫つて行つたらしい響が名殘なくあらはれてゐた。

お靜さんはそれでも着物を着替へて來てゐた。室に入るとすぐぬいだコートの下には、お納戸の引繊にお召の着物を着て、ちよつとした帶をしめてゐた。顏がいつもより白く綺麗に見えてゐた。

『內でお湯に行つてゐたもんだから、ついおそくなつて……』

例の人をひきつけるやうな笑ひ方をして、餉臺の脇に來て坐つた。私は盃を取つてそれをさすと、例の辭退もせずに受けて、半分ほど飮んで傍に置いた。

私達は唯顏を見合せてゐた。

やがて盃を返して、お酌をして、『寒いのね。』などゝ言つて、顏を火鉢の上に寄せた。

何方からか何か言はなければならないやうな形になつてゐた。しかし、それを何う言ひ出して好いかわからなかつた。私はまた盃を女にさした。

『私、そんなに戲けないのよ、ォホヽ。』とまた笑つて私の方を見た。

私は遂に始めた。『えらい幕を見られたもんでしたね。』

『私、何うしたんだか、ちつともわからないんですよ。一體、何うういふの？』

『昨日、一昨日の夜、あそこに行つてゐたでせう？』

『貴方、ゐたの？　あそこに？』

『まア、そんなことですね。あの奧の室に三十分か一時間位待つてゐたでせう？』

『そんな處に行かないでも好いぢやありませんか。金をつかつて損だ。』

『好いんですよ。』

で、私は其處に行くことにした。店に坐つてゐる亭主の顏が此時私の頭に上つて來たが、すぐそれを私は打消すことが出來た。近いところなので、私は電車にも車にも乘らず、傘をさして歩いて行つた。灯の濡れて光る町の大通を明るい電車が靜かに通つて行つてゐた。

蕎麥屋の店からは、丁度二人伴れの客が、『お歸んなさい。』といふ黄い聲に送られて出て來てゐた。二人は何か相談しながら暫くそこに立つてゐたが、やがて私のあとから、矢張その細い巷路へと入つて來た。

それはこんな處にこんな料理屋があるかと思はれるやうな家であつた。狹い中庭には、燈籠だの松だのがあつた。客は何の室にもゐなかつたが、私は特に離れた奥の一間を選んだ。

女中が來て五燭の電燈を十燭に取替へて行つた。

私は其處で小一時間待つた。夕方でちよつと出られないのだらうと思つたから、私は別に氣を揉みもせずに、刺身に酒などを命じて、氣を落附けて待つてゐた。『おつれさまがおそう御座いますね。』などと女中は笑ひながら言つた。

やがて、『お出なさいまし。』といふ聲がして、つゞいて、『え、さつきからお待兼でゐらつしやいます。』といふ聲が低くきこえた。私の胸は不思議に躍つた。

に切符を渡して、私は構内を出て四邊を見廻した。お靜さんの姿はまだ何處にも見えてゐなかつた。

私はもう一度待合室の中に入つて、柔かな長い椅子に腰をかけて、そこにある新聞をひろげた。世の中にはいろ〳〵なことがあつた。人殺しもあれば、喧嘩もある。大官の縲絏に繋がるゝものもある。藝者と銀行員との情死もある。遠い國では血を流して爭つてゐる戰爭もある。私は不思議な氣がした。まだよく見終らない中に、お靜さんは向うから入つて來て、そつと私の傍に來て立つて四邊を見廻して溜息を吐いた。丸髷と蒼白い顏とが夕暮の空氣の中にくつきりと際立つて見えた。

『待ちましたか。』

靜かな聲でお靜さんは言つた。

『いゝえ、今來たばかり。』

『さう。』と言つたが、『生憎ね、雨が降つて。それに寒いですね。』

『雪になるかも知れない。』

『さうね。』

考へるやうにして、また四邊を見廻したが、顏を寄せて、行く先のところと家とを低い聲で私の耳にさゝやいた。『さう、あそこの角に蕎麥屋がありますね。あの奥のところよ。ちよつとした料理屋ですよ。……私、一度歸つてすぐ行きますから。』

あくる日は生憎に朝から雨が降つてゐた。私は半日を立つたりゐたりして暮した。大きな樹から雨の脚の長く滴り落ちるのが硝子戸を透して見えた。

約束した時間はやがて近づいて來た。私は出かける支度をした。妻はいつもの遊びと思つてゐるらしく、『雨が降つて寒いぢやありませんか。こんな日にわざ〳〵出かけて行かないたつて好いぢやありませんか。』などと言つた。

私は紺蛇の目の傘をさして出かけた。ことに由ると、雪になりやしないかと思はれるほど風が寒く顔を吹いた。垣に添つた路のところ〴〵には、梅が白く咲いてゐた。

途中で、近所に住んでゐる男とすれ違つた。

『どちらへ。』

『ちよつとそこまで。』

『寒いぢやありませんか。また雪ですね。』

かう言つてすぐ別れた。此方の停車場のプラツトホームには人の影も見えなかつた。雨は段々強くなり出した。長い貨物車が長蛇のやうに地響をさせて下を通つて行つた。時計は五時十五分前のところを指してゐた。

約束した停車場についた時には、もう町の灯が明るく雨に濡れて光つてゐた。長い橋を上つて、車掌

『だつて家ぢや、面倒ですから……。その時すつかり話しますから。ね、後生だから、さうして下さい。好う御座んすか。誰にも言つちやいけませんよ。さつきのことも誰にも言つちやいけませんよ。』

私の點頭いたのを見て『それぢや、本當にね。雨が降つてもよ。』

かう言つて、お靜さんは急いで歸つて行つて了つた。私は潮の急なのを感ぜずには居られなかつた。私は獨りで心の中に笑つた。さつき家を出る時の不愉快な念はすつかり拭ひ去られて、あとには生々した若若しい歡樂の血が漲り渡つた。私は停車場の方へ歩いて行つた。

私は私の心のいつかすつかりお靜さんの方に偏つてゐるのを感じた。今までに、其處まで行つていつも引返して來た道義の念と言つたやうなものは、不思議にも既に全く力を失つてゐた。亭主も自分の妻も何もなかつた。唯、代診の男ばかりが私の眼にちらついて見えた。

その夜は私は眠られなかつた。色々なことが想像された。お靜さんと自分との間に長い間に醸されたロマンチックな空氣などはもうとうに何處かに行つて了つてゐた。確實に物をつかまなければ何うしても滿足が出來なくなつてゐた。時にはそれを碍げようとするいろ〳〵な觀念が頭に上つて來ないではなかつたけれど、それは力の弱い影が薄い何うすることも出來ないやうなものであつた。私の體には、若々しい血が漲り渡つた。私はいつか十分に虜になつて了つてゐるのを自覺しながら、却つてその方に心と體とを向けてゐた。

が來たのを好い機會に店の方に出て行つたが、『何を上げます。』といふ聲もいやに上ずつて聞えた。其處に今日は少し頭痛がすると言つて、亭主は早引にして歸つて來た。お靜さんはそは〳〵してゐた。亭主の洋服を後からぬがせてやりながら、私の方を恐ろしいものゝやうにして見た。『大丈夫ですよ。誰も知つてはゐませんから。』といふ眼色をして見せても、それを落附いて見ようともしなかつた。私は二時間ほどゐて其處から出て來た。非常に不愉快な氣持が私を襲つて來てゐた。日がもう暮れ果てゝゐた。寒い風が私の袖を吹いた。

二三間行くと、後から、

『貴方、貴方、内海さん。』

と言つて、お靜さんは追かけて來た。私は立つてお靜さんの此方に來るのを待つてゐた。

『あのね、貴方にお話したいことがあるから、明日ね……明日は貴方は都合がわるくない?』苦しさうに呼吸をついて、『明日五時までにあそこの停車場で待つてて下さらない?』

『あの事なら心配しないでも大丈夫ですよ。誰にも言ひはしませんから。』

『他に話があるんですよ。最非、貴方に聞いて貰はなければならないことがあるんだから、來て下さい。ね、よござんすか。』

『家でも出來るぢやありませんか。』『出來ないのを知りながら、私はわざとかう言つて見た。

痛いところにいくらか觸れたやうに、お靜さんは私の顏をぢつと見たが、『何ですの？　一體。』

『本當に隱したつて駄目ですよ。』かう三度念を押してから、『何時からなんです？』

『何が？』

『わかつてゐますよ。ちやんと――。』

お靜さんの顏は俄に赤くなつた。いくらか狼狽てたやうな態度で、『何？　一體？』

『本當にいつからなんです。話してきかせたつて好いぢやありませんか。私、ちやんと知つてゐるんですよ。すつかり知つてるんですよ。……でも私きり知つてる人はないんですから、大丈夫には大丈夫だけれども……。』

『………。』

『あやしいと思つたら、私、ちやんと言つてきかせませうか。あなたの行く家に、何んな上さんがゐて、何んな女中がゐて、何ういふ間取りで、貴方が何處に何うして坐つてゐるたか。ちやんと知つてゐるんですから。』

『だつて、私、何にも知らない。』

『そんなに隱さなくつたつて好いですよ。私きりだから、知つてるのは――。』

私はわざと笑つて見せた。お靜さんの顏には困つたやうな狼狽てたやうな影が往つたり來たりした。容

れてゐたといふ心持も雜つてゐた。男に靡いて行つてゐる女の心と體とが靡爛した果物の臭ひを嗅ぐやうな感じを私に與へた。

お靜さんはいつもと變らずに、莞爾して私を迎へた。私はお靜さんの體をさがすやうにして見た。今までお靜さんに對して感じてゐた感じとは丸で違つた感じを私は其處に經驗した。美しい想像よりも確りした現實が私の心にこびり着いてゐた。人間の深い祕密を玩弄に取扱ふといふめづらしい心持も加つて來てゐた。

私はいかにしてこれを有効に打明けようかと考へて、長い間、長火鉢の前に坐つてゐた。私は強ひて心を落附けて、茶を一杯二杯飲んだ。

祕密の鑰を握つた人間が其處に坐つてゐるとは知らずに、お靜さんは、機嫌の好い顏をして、いつものやうな話を始めた。

私は突如に、

『隱しても駄目ですよ。』

『何を？』

お靜さんは顏を擧げた。

『本當に隱したつて駄目ですよ。』私の聲はいくらか笑ひを含んでゐた。

『何ういふわけ。』

『あとで話すよ。』

私はいつか酒に醉つて了つた。姐さんが來る時分には、足元も危いばかりに醉つて了つてゐた。氣が附くといつかお酌が二人までも來てゐた。

私は奥の方が氣になつてゐたが、後には三味線に合せて唄などを唄つた。抑塞された氣分が酒に發したといふ加減もあつて、お酌をつかまへて冗談を言つたり、いつもに似合はない皮肉を妓達に浴せかけたりした。ふと便所に行くと、丁度其處から出て行つた男の後姿が見えた。嘗て友達の病氣の時にも來てゐた若い醫者の代診らしかつた。

私の頭はガン〳〵鳴つた。三味線は私を埋めるやうに鳴つた。氣が附くと、私はいつか床の中にゐた。

『わけがあるんだよ。何もすき好んで、こんな處に來やしないよ。』こんなことを言つて私は枕に頭を當てた。

七

私はこの祕密を胸の中に祕めて置いた。妻には無論話さなかつた。私はその翌日亭主の歸つて來ない時間を見計つて出かけて行つた。不思議にも私の好奇心は募つてゐた。憎むといふ心の一方には、欺か

『何うしたの？　一體。』
『まア、好いから。』
かう言つて盃を出した。
それと知れてから、女將は急にチヤホヤし出した。『さうなんですか、ちつとも知らないもんですから、失禮しまして。』などと言つた。『ぢや、姐さんにかけませうか。』
『好いよ、好いよ。』
『でも……。』
『かけて下さらなければ、私、さういふから構はない。』
『お前はそれぢや厭かえ？』
『だつてねえ、お上さん。』
聘ぶとも聘ばないとも言はない中に、靜香は向うに行つて電話をかけて了つた。やがて入つて來て、『姐さん、今、鶴屋にゐるんですつて、もう、會が濟むから、ぢきに伺ひますつて言つてゐました。』女將が向うに出て行つた後で、『何うして、そんな處に行つたの？　ツて姐さん言つてたわ。本當に何うしたの？　冗談？』
『少しわけがあるんだよ。』

料理が來る時分になつても、まだ奥にはつれの男が來ないらしかつた。一二杯女中を相手に酒を飲んでゐると、入口の方に女將の挨拶する聲が聞えた。『もう、さつきからお待ちでゐらつしやいます。』といふ聲もした。つゞいてすぐ傍の廊下を男の歩いて行く足音が靜かにした。

『來たんだな。』

私は腹の中で言つた。これが、かうしてゐるのがもし自分でなくつて、亭主であつたら何うだらうとつゞいて思つたが、その時の喜劇ばかり想像されて、友達を憐むといふ心は少しも起らなかつた。その男が何んな男だか、それが唯見たかつた。

『今晩――』

と言ふ聲がして、襖の明くのと一緒に女は入つて來たが、挨拶して顏を上げるとそのまゝ『あらまア。』と言つて立盡した。生憎にもそれは私の知つてゐる妓であつた。義理で二三度聘んでやつた靜香といふ妓であつた。

『何うしたの……一體今日は？』

私は手で制した。

傍に寄つて來て坐つて、『姐さん、來るの？』

『今日は姐さんは來ない。』

『二十から二十二三位。』

『成るたけ若い方がね。』

こんなことを言つて女中は出て行つた。

何だか氣になつて仕方がなかつた。何んな風にしてお靜さんは坐つてゐるか、何んな心持をして男の來るのを待つてゐるか、それが私は知りたかつた。私はまた廊下の方へ出て見た。

其方で手の微かに鳴る音がした。

また入つて來た女中に、

『向うは空いてゐないの？』

『塞がつてをります。』

『靜かな座敷だね。お客がゐるかゐないかわからないぢやないか。』

『まだお伴れの方がお見えになりませんから。』

かう言つてゐる處に、女將は入つて來た。例のお世辭をべちや〳〵言ひながら、私の方に絕えず觀察の眼を寄せてゐた『お馴染が澤山おあんなさるんでせう。あれば、その方が好いんですがね。』など〻言つた。私は成たけこの土地を知らないやうな風をしてゐた。知つてゐる藝者の名などはおくびにも出さなかつた。

私は二十分ほどしてから、その巷路の中に入つて行つた。

初め田舍出らしい色の黑い肥つた女中が出て來たが、ちよいとと言つて引込んで今度は瘦せぎすな上さんが出て來た。かういふ土地の習慣に慣れてゐる私は、向うの躊躇してゐるのを見て、すぐ、財布から十圓札を出して上さんに渡した。

上さんは莞爾してすぐ私を案內した。

『こちら、こちら。』

と言つて、そこの明いてゐた襖をしめて、奧の六疊へと私を通した。

私は四邊に氣を配つた客は何の室にもゐないらしく、何となく陰氣でしんとしてゐた。床の間には桃の花を書いた幅などがかゝつてゐて、花瓶にはチンコ柳などが生けてあつた。

お靜さんはこゝから一間を隔てた裏の室にゐるらしかつた。男はまだ來てゐないらしかつた。私はそつと隣の襖を明けて覗いて見たりした

さつきの女中が煙草盆とお茶とを運んで來たが、『お馴染は？』

『お馴染なんかありやしないから、誰でも一人手輕なのを呼んで吳れ。しかし、何うせ聘ぶんなら、綺麗で若いのが好いな。』

『年は何の位？』

えてゐた。私は五六間あとからついて行つた。
細い巷路は盡きても、お靜さんは何の家にも入らなかつた。矢張小刻みな駒下駄の音が聞えてゐた。
細い巷路はやがて盡きて、廣い通へと出て行つた。人目を兼ねて、わざとかういふ横路を通つて行くのだといふことがやがて私に飲み込めた。廣い小路を私は猶ほ一町ほどつけて行つた。
土地でも一番下等な待合の並んでゐるところへやがてやつて來た。果してそこの傍にある巷路の中にお靜さんの姿は消えた。
巷路の中へ入つて行くには、人に怪まれる恐れがあるので、私は暗い塀のところに身を寄せて中を覗いて見た。國の家といふ軒燈の出てゐる中にお靜さんは入つて行つた。
『えらい穴があるんだな。』
私は思はず腹の中で言つた。
私は其處をつきとめてから、一度そこから廣い通の方へと出て來た。氣が附くと胸は烈しく躍つてゐた。ある事業に向つて熱心に突詰めて行つてゐるやうな氣分を感じた。
いづそ其處等を一二時間ぶら〳〵してゐるやうかとも思つた。さうしたら、屹度その相手の男がやつて來るだらう。しかし、しかしと私はすぐ思ひ直した。男はもう來てゐるかも知れない。それに、もつと詳しく見てやる必要がある。私の財布には一夜の遊興に費す位な金は入つてゐた。

了ふから不思議なもんですね。』

お靜さんは默つて聞いてゐたが、『それはさうね。』

今夜も花牌をひかないかと言ふのを、私は無理に振り切つて、そして外へ出た。不思議にも私の心は焦焦してゐた。ある心の自分に卽いて來てゐる時と、離れて行つてゐる時とのことなどを私は考へた。暗い影が私の頭を蔽ふやうに襲つて來た。

六

二度目に逢つた時は、まだ日が暮れたばかりであつた。私は其處等をぶら／＼してゐた。ふと電車から下りて此方へ歩いて來るお靜さんの姿を私は見た。矢張、琴平の緣日の日であつた。

私はあとからつけた。

お靜さん一人で、急いで歩いて行つた。『今夜こそ、今夜こそ――祕密を見とゞけてやる。』かう思つた私の心は一種の暗い心と好奇心とで一杯になつてゐた。

そんなことを知らないお靜さんは、初めはあたりを憚るといふやうにあちこちを見廻したが、やがて急いで巷路の中に入つて行つた。

それは灯などのところ／＼についてゐるやうなところであつた。ある家からは三味線の音が靜かに聞

私はしかしこれを誰れにも言はなかつた。妻にも言はなければ、友達にも言はなかつた。私は私の心の奥深くそれを祕めた。そして、何んな顏をしてゐるかと思つて、お靜さんの態度を見に行つた。

『此頃は矢張彼方？』

『もう、喧嘩して了ひましたよ。』

『あんなことを、うそでせう。』

『うそなことはありやしません。もう彼方になんか行きやしませんよ。女なんて、動物見たいなものだから、相手にしたつて仕方がないやうなもんだ。』

『イヤに、悟つたんですね。何うしたんですの？　一體？』

私の顏を凝と見て『何か好い加減なことを言つてるんでせう？』

『でも、祕密つて言ふものは面白いもんですね、色戀でも、祕密の中が樂しい。出來さうで出來ない中が樂しい。出來ても內所で逢つてゐる中が面白い。私のやうに逢ふとすぐ喧嘩するやうになつてはおしまひですよ。』

『それはさうでせうね。』

『祕密のうちですね。それに人間は、祕密をあの人が持つてゐると思ふと、好奇心が出て來るもんですね。』ぢつとお靜さんの顏を私は見て『あけすけに言つて了つちや何んな大事件でも大事件でなくなつて

『ちつとも惚けてなんかゐないぢやないの?』

『さう? だツて、私が待つてゐても、却々出て來なかつたぢやありませんか。』

『だつて、餘り急くからさ。』

それに對して何か言つた一人の方の言葉は聲が低くつてよく聞き取れなかつた。アハヽと笑ふ聲がまた聞えた。二つの影は低く高く話しながら、縺れるやうにして電車の方へ行つた。

私はわざと二三間あとから、知れないやうについて行つた。停留場の灯は、二つの影を黑く地上に落した。二人は何かこそ〳〵と話してゐた。

やがて電車が來た。お靜さんの横顏が電燈にそれと照されて見えた。つれの女は知らない女であつた。お靜さんが吊革につかまつて立つてゐるのが、暗い私の方からはつきりと見えた。やがて電車は動いて行つた。

唯これだけであつた。別に不思議なことではなかつた。しかし、私にはこれが大きな事件ででもあるやうに私の心の奥を刺戟した。私はお靜さんの祕密の一部に觸れたやうな氣がした。

夜遲く、十一時すぎにさういふ町を歩いてゐるといふことゝ、つれの女が知らない女であるといふことゝ、二言三言言ひかはした言葉の背景に、男がゐるらしいといふことゝが、私の心にある複雜した衝動を與へた。『内で此頃、嫉妬ぶかくなつて仕方がないんですよ。』と言つたことなども思ひ合はされた。

五

それから三四月は事もなくて過ぎた。正月が來て、續いて春が來た。梅の噂などもちらほら人の口に上つた。

ある晩、私は濠端のある家から出て電車の方へと行つた。細い巷路を通つて、通りに出ようとすると、私のすぐ前を歩いて行く二つの女の影があつた。

『アハヽ。』

と笑ふ聲がふと私の前に起つた。私ははッと思つた。それはまぎるゝ方なきお靜さんの笑聲であつた。私は今時分こんなところを歩いてゐるお靜さんを不思議にせずには居られなかつた。一人は男ではないかと思つて、闇の中を透すやうにして見た。

矢張女であつた。

時間はもうかなり遲かつた。十一時を少しすぎてゐた。活動寫眞の歸りかしらとも思つても見たが、その近所にはそれらしい常設館もなかつた。私はこつそりあとから跟いて行つた。

二つの影は面白さうに話しながら歩いた。

『たんとお惚けなさいよ。』

その次ぎ、逢つた時に、

『此頃は、御信心ですつてね。』

わざと輕い調子で言つて、私はぢつとお靜さんの顏を見た。

お靜さんはちらりと此方を見た。その眼の中には、確かにある影が早く通つて行くのを私は見た。

『なァに、信心つて言つて、あそこの奥さんが矢張あそこの信心家で、一緒に行かないかつて言ふもんですから。』

『始終、行くんですか。』

『なァに、まだ、二度か三度ですよ。』

かう言つて、神棚の上に置いてあるお宮などを見せた。

『信心とは隨分變りましたね』

『だつて、店が繁昌するつて言ひますから。』

『繁昌しますか。』

『何だか、まだわからない。』

お靜さんは笑ひながら言つた。

『動いてゐるばかりぢやないかね。』

『何うもさうぢやないらしい。中々思ひ切つたことを言ふからね。何か、……何かあるんだね。確りとした自信と言ふやうなものが――さう言つては少し違ふが、かう何かしつかりとつかんだものがあるんだね。』

『君にも矢張いろんなことを言ふかえ？』

『言ふにも何にも……男は男で勝手なことをするが好い。女は女で勝手なことをするッていふやうなことをよく言ふね。木山君、すつかり操縦されてゐるといふ形だね。』

『何しろ、變だ。』

私の妻も私に種々なことを話した。活動寫眞や小芝居などによく出かけて行くといふ話もした。『周圍にゐるものに、餘り好い人がありませんからね。あの下宿屋の上さんだの、本屋の上さんだの、それからもと女中をしたことのある上さんだのが不斷往つたり來たりしてゐますからね。店を持つと、何うしてもあゝなるもんと見えますね。』

妻はかう言つて、『それに、此頃は商賣が繁昌するやうにつて、琴平さまにお參りに行くんですつてね。』

私は不思議な氣がした。私はあることを想像した。ゾラの小說か何かの中にある夫人が教會堂に出かけて行く振りをして、男に媾曳することを書いたものゝあつたことを思出した。

にゐて、私の爛れて濁つた心が絕えず其方に偏つてゐるやうな氣がした。お靜さんは熱心に花牌を打つた。『そらいろが出た！』などとお上さんはお靜さんの顏を見て笑つた。

『や、僕は駄目だ、こんな手では出られない。』

主人はかう言つて、大抵は下りて、店と奧との間のところに坐つて、此方を見たり外の方を見たりしてゐた。髭の濃いのと色の白いのがはつきり此方から見えた。

『貴方、駄目ですよ。下りることばかり考へてゐるんですもの。』上さんはかう言つて自分が下りて無理に主人を入れたりした。

『あゝ、もう十一時半だ、電車がなくなる。』

かう言つて私はやがて暇を告げて其處を出た。

お靜さんに對する私の疑惑は日增しに深くなつて行つてゐた。何うも唯ではあゝいふ態度に出て行かれる筈はない。單に目ざめとばかり言つては居られない。中心、動くところがあつて、あゝいふ風になつて行つたのは事實だが、それは心ばかりではないやうである。私は時にはこんなことを思つた。

私と同じやうに、お靜さん夫婦を知つてゐる私の友達は、ある時私に次のやうな話をした。

『何うも不思議だ。確かに、その底には何か潜んでゐると思ふね。それが何んなものだかわからないけれど……。』

ぢやなし、さう〳〵清香、あの人知つてますか。』
『よく知つてゐますとも、好い姐さんでしたね。』
『その人とも關係があるんでせう、內海さん。此人中々箒だつたんですからね。』
傍からまたお靜さんが口を出すのを私は外して、
『まだゐますかしら？』
『をりませうよ。何でも三四年前に家を持つて、新さくら家つて言つてゐましたから。……抱妓もゐるんでせう。』
私は其時分のことを考へてゐると、上さんは、『旦那、旦那』と人なつかしさうに此處の主人の店にゐるのを呼びかけて、『旦那も、お入んなさいよ。』
『僕は店番をする。』
『三人よりぬけるものがある方が面白いからさ。お入んなさいよ。』
無理に入れられて、私達は四人で一時間ほど花牌を引いて遊んだ。その時分には店にもうお客は少なかつたが、それでも時々主人が立つたりお靜さんが立つたりした。靑と赤との三本が五錢、四光が十錢といふ標準で、あとは數をきつた餘分を一錢二錢と出した。私は時の間に三十錢ほど負けた。
私の脈管には以前の耽溺の血が再び漲つて來てゐた。體があつくなつたりした。以前の女の體が其處

『常香つて言ふのは？』

『常香？　相模屋のぢやないんでせうね。』かう言つて考へてゐる傍から、『お上さん默つてきいてゐるへがありますかよ。その女ですよ、この人の大騷ぎをしたのは。』

かう言つてお靜さんは高い聲を出して笑つた。

『さう？　旦那、素惚けは罰金よ。』

笑ひが靜まつてから、

『本當に何んて言つてゐらしやつたんです？』

『私？』

ちよつと笑つて、『かう素人になつて了ふと、何だか自分ぢやないやうな氣がするわよ。梅龍つて言つてゐたんですよ。』

『屋號は？』

『分さくら家。』

『ぢや豐吉姐さんの家ぢやありませんか。』

『え、よく御存じね。』

『あそこに、何とかいふ中年增の姐さんがゐましたね。何つて言つたけな……　鬮屋ぢやなし、鹿の子

をして、いやに品をしたり色眼を使つたりした。一面には、私を觀察するやうな眼色をして、こつそり私を見てゐたりした。

上さんの出てゐた土地には、私も以前にはよく出かけて行つてゐた。お茶屋にも待合にも懇意なのが三四軒あつた。知つてゐる姐さんもかなりにあつた。

『何ッて言つてゐらしつたんです？』

『看板があんまり好くありませんでしたから……。』少しきまりがわるいといふ風に言ひ澁つて、『旦那のは何年頃ですの？』

『さう、戰爭の少し後位だから、もう六七年になりますね。』

『ぢや、私の出てゐた時よか餘程前ですわ。私は去年引いたんですから。』

『何年あそこにゐらしつたんです？』

『足かけ三年位。』

『淸住つて言ふ家がありますね。』

『え、知つてますわ。』

『あそこに淸子つて、言ふ姐さんがゐましたね。』

『え、肥つた、年增の……。私なんかよくお座敷で一緒になりましたわ。』

私はある心の動搖を感じた。私が山の中にゐる間に、益々開けて發展して行つたお靜さんの生活を思はない譯には行かなかつた。私はぢつと其處に置いてある花牌を見た。

嘗て經驗した私の耽溺生活がまた私に蘇つて來た。それはもう五六年前のことであつた。私はある女と關係して、そこの二階で、毎夜夜明け近くまで花牌を引いた。色の白い女の膣、勝負に夢中になつた熱した顏、赤い青い色彩などが私の眼の前にチラついて見えた。疲れてヘト〳〵になつてから、私はいつも女と寢るのが常だつた。

『こいつはやり始めるときりがないんでね。』

『あァに、本花ぢやないから。』

『下宿屋の主人もやるんですか。』

『どうですか、僕は一度しか行つたことはないから、よく知りませんがね。何でもそこの尺八の師匠だの、醫者の代診なぞも來るんだつていふことですよ。あそこの上さんが好きだから。』

こんな話をしてゐる中に、お靜さんはその上さんと一緒にやつて來た。以前にも店先で一二度逢つたことはあるけれど、口を利くのは今日が始めてであつた。成ほど藝者をしたことのあるといふことは一目見てすぐ解つた。着物の着こなしにも體附にもそれらしい面影は殘つてゐた。ちよつと綺麗な色の白い顏をしてゐた。お靜さんは私のことをかねて話して置いたと見えて、他人でないやうな親しい口の利き方

瓶を置いたまゝ、お靜さんは莞爾した顔を見せた。

暫く離れてゐた感じがまた私の體に蘇つて來てゐた。それは旅に行かない以前よりも一層濃い深いものであつた。離れられない運命が何うしても自分等の間に横つてゐるやうな氣がした。十時すぎになつてから、

『好いでせう、少しなさいよ。私、下宿屋のお上さんを呼んで來るから。』

かう言つて、お靜さんは花牌を取り出した。

『こんなことを始めたんですか。』

『だつて、何にも樂みはないんですもの。本花ぢやないのよ。二三度なさいよ。十二時までは電車があるから。』

かう言つて外へ出て行つた。

『えらいことを始めたんですね。君もやるんですか。』

『なァに、ほんの少しさ。一時間位やるんですよ。下宿屋の上さんが好きなんだから……。土曜と日曜には、何うかすると、半日位、店番をさせられるんですよ。』

『下宿屋へ引きに行くんですか。』

『えゝ。』

『行つたら大變でせうね。』

『何故。』

『何故つて……ねえ貴方。』

今度は亭主に話しかけた。友達は面白さうに笑つてゐた。

山の中にゐても、をり〳〵その時の光景を思ひ出した。そこには靜かな筧が終日音を立てゝゐた。ある深い杉の林の中に入つて行つた時には、私は自分で自分の生涯を振返つて、貴重な生活が徒らに性の苦しい焦燥のために消費されて行くのを悔んだ。奥の大きな御堂からは僧達の一齊に聲を揃へて讀經するのが聞えた。

旅から歸つて來て、初めて其處を訪問したのは十月の中頃であつた。一時危いと思はれた病人は、何うやら彼うやら恢復して、まだ床にはひつてはゐるけれど、もう危いことはないと言つて友達は安心してゐた。行つた時は、お靜さんはゐなかつたが、やがて藥瓶をさげて歸つて來た。

『馬鹿に遲いね。』

『だつて……向うにだつて都合はありますよ。』

『ぐづ〳〵してゐては仕方がないぢやないか。日が暮れて了ふよ。』

『お出なさいまし。何時歸つてらしつたの？』亭主の方には返事をせずに、そこに黄色い藥の入つた藥

ろ〳〵なことを私に語つた。
旅から歸つて來た時に、ちよつと見舞に行くと、醫者だの病人だの藥瓶だのの中に暑さうな顏をしてお靜さんは坐つてゐた。大きな丸髷に結つて、私の持つて行つた果物の贈物を、病人に見せたりなどした。病人はかなり重い容體らしかつた。
『山ん中は涼しいでせうね。』
『えゝ。』
『私は、今年の夏は散々ですよ。丸で火爐の中にでもゐるやうな氣がしますよ。』かう言つて階下に下りて來て、氷などを取つて呉れた。友達も役所がお休みで家にゐた。
『あちらにも矢張、藝者はゐますか。』
『ゐるにはゐます。』
かう私が笑ひながら言ふと、
『もうお馴染が出來たでせうね。』
『そんなどころぢやありませんよ。』
『ぢや、私行きませうか。』
『え、何うぞ。』

し私は何となく氣分が變で、いつものやうにはしやいだ態度は示さなかつた。お靜さんもイヤに萎れてゐた。

その夜十時すぎに私はアンナや、ボヴリー夫人のことなどを考へながら、暗い路を家の方へと歸つて來た。不思議にもさうした境遇に置かれた人達のことが繰返し繰返して考へられた。一夫一婦の習慣は人類保存上、社會組織上必要なことは言ふまでもないが、それならば、何故さういふ心が湧くやうにこの人間はつくられてゐるのか。何故さういふ心が漲つてあふれて來るのか。何故人間にはあきるといふことがあるのか。問題はそれからそれへと私の頭に簇つて來た。一年の中に一度は人妻と通じても咎めないといふある田舍の習慣なども思ひ出されて來た。家に歸ると妻は子を抱いて深く寢込んでゐた。

四

その年は私は旅に出てゐることが多かつた。私は海岸に行つたり、遠い田舍に行つてゐたりした。山の中では、二月も三月も暮した。

二階にゐる友達の母親が病氣で、長い間寢てゐるといふ音信をも聞いた。私はいくらか避ける積りでその山の中に行つてゐたのではあるが、不思議にもお靜さんの姿は絕えず私の眼の前を離れなかつた。寧ろそのために、その面影は却つて濃やかになつて行つたやうにも思はれた。私の頭の中にあるお靜さんはい

『もうすぐ歸つて來ますから……。』

かう言つて挨拶されて、止むを得ず私はお靜さんの方を見た。お靜さんは顏を赤くしてアハヽと笑つた。その笑顏！　その眼！　私は體を顫はせた。

『少し早かつたですね。來ようが——。』

『なァに、もうすぐですよ。』

かうした平凡な話を私達は交換した。私は長火鉢の前に坐つて、お靜さんが此方を見る時には眼を脇に外らすやうにした。その癖お靜さんの後姿は飽かずに見た。脊の高い體の奧に潜んだ心持を讀まうとした。

三十分ほど私はさうしてゐた。しかしその反應は裏面に急に表面に平和なものであつた。普通の世間話の他には、私達は何も話さなかつた。隣の猫の兒の死んだ話などを私達はした。

友達に對する私の良心もかなり力強く目覺めて來てゐた。

洋服姿の友達が、一日の仕事に疲れ切つたやうな顏をして、ぐつたりして歸つて來た時には、かうした思を抱いてゐる私が呪はしく感じられた。かういふ男がかうして此處に坐つてゐるのがあさましかつた。

其夜は酒を御馳走になつて、相變らず男女の關係の話などをして、三人一緒になつて笑つたが、しか

亭主とお靜さんとの間柄にも、私はいろ〳〵な想像を加へて見た。無論二人は交情が好かつた。普通の夫婦以上に仲が好かつた。何うかすると、日曜日などに二人連れ立つて、お靜さんは、ちよつと見ると、一度稼業をしたことがありやしないかと思はれるやうな意氣なつくりをして、そろつて嬉しさうに出かけて行つた。さういふ時には、子供はいつもあとに殘された。

冗談に、唯面白半分にやつてゐるのではないかとも疑はれた。或はさうかも知れないと思つて、自分の深入して行きさうにする心を押へたことも度々であつた。

別にさういふ積でもなかつたけれど――或はいくらかさういふ氣分が何處かにひそんでゐたかも知れないけれど、兎に角、ある日、私は少し早く出かけた。まだ役所からは歸つてゐないだらうと思つてゐた。

停車場で時計を見ると、何うしても、一時間乃至三十分早かつた。その間を何うするんだらう。二人きりで坐つて何ういふ話をするんだらう。こんなことを考へた私は、寧ろ少し此處で時間を經過させて行かうかしらとも考へた。しかしその結果を見たいといふ心もかなり强かつた。

『靑と靑とを合せたら、何ういふ色になるか、何ういふ反應を呈するか。』こんなことを私は思ひながらやがてやつて來た電車に乘つた。

果して友達はまた歸つてゐなかつた。私は豫想迴りに躊躇した。しかしお靜さんの熱心な勸めには從はない譯には行かなかつた。私はお靜さんの眼を恐れた。

二人の間に醸されたある空氣、それに觸れないやうにして、また、一面にはわざとそれに觸れるやうにして、私達はいつも話をした。あまり觸れずにゐるのも淋しく物足らなかつたと共に、餘り觸れすぎてその空氣を壞して了ふのも惜しかつた。亭主を中にして、私達は性慾の强い弱いといふ話や、男の惚れる惚れないなどといふ話をよく交換した。

お靜さんは亭主を前に置いて「一體、内は氣が小さすぎるんですよ。内に來る人なんか、皆な言ひますよ。内は藝者なんかには屹度すかれる方だつて。だから、少し遊ぶ方が好いんですけれどもね。……本當ですよ。いろの一人や二人出來たつて、私、妬きなんかしませんよ。私も一緒に行つて遊んで上げるわ。」

『うん、あんなことを言つてる。』

亭主は否定するやうに言つた。

『本當に内は無性ですから、横のものだつて竪にしやしません。うんなんて、ぐづ〳〵してるんですからね。あの事だつて、それは無性なんですから、決して手なんか自分で出すことなんかありやしませんよ。狡るいんですからね。樂なことばかり考へてゐるんですからね。張合がありやしません。』

こんな話は不思議にも私の心に深く絡み附いて殘つた。前にあるお靜さんそのものよりも奥に深く藏されてあるある物を私は想像した。或は——或は、其處に私の一生涯を破壞して了ふやうなものが、包まれてゐやしないかとすら思はれた。

三

お靜さんと私との關係は、此頃一種の情調を帶びて來てゐた。心と心とは何處かで觸れ合つてゐた。私が行つて亭主と話してゐると、お靜さんの眼は硝子障子の蔭や、臺所や、店の一隅などから絶えず私を見てゐた。

『貴方なんか、女が皆な惚れますよ。それやね、若い人は駄目よ。二十五六先きでなけりや駄目よ。若い中には、男のことなんか本當にわかりやしませんもの、顏さへよければ好いんですもの……たけど、本當に男は顏ぢやありませんよ。腕ですよ。膽ですよ。』

こんなことを言ふかと思ふと、默つて意味ありさうに私の顏を見た。眼といふもの――眼といふものが何んなに心を話すものだかと言ふことは、昔から戀するものの皆な知つてゐることである。氣が附くと私はいつか獨りで、凭椅子の上で、その眼の意味を考へてゐるやうになつてゐた。

それに限らず、私は種々な方面から私に對するお靜さんの話を耳にした。私は離れた心持ではゐたけれど、その話が私の興味を惹くところを見ると、私とお靜さんとの間には、ある一種の可能性を持つたあるものが横つてゐるのに氣が附かずには居られなかつた。お靜さんはいつもそはそはしたやうな態度で私を迎へた。

すよ。いろんな人が來てお靜さんを相手に冗談など言つて行くんですもの。本當に、此頃、お靜さん、さばけた人になつてね。始めて來た人なんかとアハヽ、言つて冗談を言つて笑つてゐるんですもの。此間なんか、あそこで張物をしてると、後から抱きついて行く人があるんですつて、何處かへ行かう、行かうつて言ふんですつて、面白いお客があるんだつて。そして、さういふ人は皆な貴方位の年恰好の人が多いんですつてね。三十五六から下の人は決してさういふことはしないさうですよ。矢張、圖々しくなるのね。貴方位になると――。』

それぱかりではなかつた。その近所にはいろ／＼な人が住んでゐた。もと不見轉藝者で、自分より年下の男を亭主にして、男の田舍から金を引出して、下宿兼旅館のやうなことをしてゐる三十一二の上さんは、毎日のやうにやつて來て、亭主の惚けや昔ゐた狹斜の話などをした。その上さんは、お靜さんの亭主の惚れだと自から稱して、亭主が役所から歸つて來ると、舌を鳴して鼠鳴きなどをして見せた。夜遲く、店を終つたあとまで話して行く時には、『熱いけども、精々お勤めなさい。』などと言つて歸つて行つた。女中をしたことのある上さんとは、お靜さんは殊に仲好しで、一緒にあちこちにあそびに出かけた。着物や下駄の好みなどがすつかり下町風になつてゐた。

店の仕事をしてゐる五十男もあつた。『面白いんですよ、あの人。前の人の時分に、二階を貸して置いたんださうですけれどね。妾をさがしてゐるんですよ。何でも若いのが好いんだつて、二十位でも好いんだつて言ふんですよ。』などと話した。

お靜さんは、さういふ人達を相手に面白さうに笑つた。お靜さん夫婦には、此間までお靜さんの亭主の實の母親が田舍に行つてゐたのが世話をしてゐた兒が死んだので、急に其處から歸つて來て、此頃では二階に住むやうになつてゐた。妾の園はれてゐた二階には、七十近い老いた母親が朝夕不自由勝な起臥をしてゐた。

『もう、二階は借りられないかね。』

『だつて、母さんがゐますもの。』

こんことを言つてお靜さんは笑つた。

お靜さんは綺麗に丸髷に結つて、派手なかせかけなどをして、いつも店頭に坐つてゐた。煙草の他にいろ〳〵な小間物や學校用品などを置いた店には、種々な人がいろ〳〵なものを買ひに來た。近所の子供が、『をばさん、花火線香をお呉れ。』などと言つて入つて來た。店頭で風船などをふくらませてゐる可愛いおかつぱの女の兒などもゐた。

かと思ふと、長く店頭で話し込んで行く客などもあつた。ある日妻の話に、『あそこの店は面白いんで

わかつた。お靜さんに取つてはお靜さんの亭主は、常に滿たされない甕のやうなものであつた。やさしいのと、男の好いのとの他には、何物をもお靜さんに與へて吳れなかつた。私はお靜さんの暗い顏から人知れず淚の流れて落ちるのを見た。

狹い暗い谷の底のやうな二間の家、大雨の降る度に床が水に浸つて了ふやうな家、舊い巷路をずつと奧に入つて行つたやうな家、其處に私は襤褸や汚れた着物や暗いランプやすり切れた疊の中に默つてつまらなさうにして坐つてゐるお靜さんを見た。私は心も體も押へに押へた可哀相なお靜さんを見た。私はボヴリー夫人のことなどを想像した。

お靜さん夫婦がある人から煙草屋の店を安く讓り受けて、其處に移つて行つたのは、一昨年の暮だ。

『私は私で、家で商賣をしなけりや好きなことは出來やしませんもの。』などと其時お靜さんは言つてゐた。

二

『お靜さんは、店を持つてから、大變に變つた。丸で人が違つたやうですよ。』私の妻は行く度にさう言つて私に話した。

其處には種々な人がやつて來た。醫者の代診見たやうな色の生白い男もあれば、新聞社の附屬の代理

お靜さんの亭主といふ人は、靜かなやさしい氣の弱い人であつた。髮は濃く、色は白く、鼻は高かつた。お靜さんの結婚した當座、私の妻などは羨しがつて、『好い男ね。それにやさしいんですからね。あれで、お金さへあると好いんですね。』などと言つたものだつた。鐵道の計算の方に出てゐて、月給は少なかつたけれど、長い間つとめてゐるので、今ではなくてはならない人の一人になつてゐた。毎日朝出かけて夕方には歸つて來た。私は私達の交友以外に、氣の置けないのと、話が合ふのと、いつも平らな靜かな調子でゐるのとが好きで、月に二三度は屹度遊びに行つた。

お靜さんが結婚してから、今年でもう十二三年經つてゐた。その間に女の兒が二人男の兒が一人生れた。その中で男の兒は幼くつて死んだが、女の兒は皆な丈夫で育つて來た。妹の方はもう九つになつてゐた。『もう、お了ひですとも……私、子供なんかあつたつてなくつたつて好いんですもの。』などとお靜さんは言つてゐた。

お靜さん夫婦の生活を私は長い間見て來てゐた。その時分のお靜さんは、默つて暗い顏をしてゐる人だつた。何うせ、世の中の人のやうに榮華が出來ないなら、何んなきたない扮裝をしてゐたつて構はないといふ風で、よごれた着物などを平氣で着てゐた。私が行つても、また來たつていふ顏をして、すつと立つて無愛想に向うに行つて了ふやうな人だつた。

でも、私は苦しいお靜さんの生活をいつも同情して見て來た。私にはお靜さんの心持が不思議によく

かういふ風に思つた。

その話をすると、

『さうですかね。』

かう言つて笑つてゐた。時には、『さうかも知れませんよ。それに、一體、家のが弱いんですよ。丸つきり此頃ぢや駄目なんですから……尼さんのやうな生活をしてゐるんですから。』

『そんなことはないでせう。』

『さうですよ。』

押しつけるやうに笑ひながら言つた。

誰れも經驗のあることだが、さういふ女性に對しては、男は皆な一種の親しみを持つものである。子に盲目になつてゐる女、金に盲目になつてゐる女、名譽や虛榮心に盲目になつてゐる女、すべてさういふ風に他のものに盲目になつてゐるものは駄目だが、一度男に向つて目覺めたものは、意識してゐるとしてゐないとに拘らず、皆な何處かに男に對するある微妙な表情と色彩とを備へて來てゐた。顏の筋肉の顫動にも分明にそれが見えてゐた。私は長い間さういふ男女の關係の中を通つてゐた

お靜さんは私の妻の友達だ。私の妻の嫁いで來た時分は、まだ娘で、私の家などにもよくやつて來た。お靜さんを通して、私はお靜さんの亭主を知つた。

は行かないもんでせうね。』

『それは容易に行きませんがね。さうなるんですよ。でなくつちや別れなくつてはならないんですもの。別れるのはイヤだから、何んな思ひをしてもその女にくつついてゐるより外仕方がありませんからね。だから、世間にもよくあるぢやありませんか、間男のあるのを知つてゐて、毎日のやうに喧嘩をしてゐながら離れられずにくつついてゐるといふ夫婦がよくあるぢやありませんか。』

『さういふのは、女が旨いんですね。』

『旨い拙いよりも、惚れられる惚れられないですね。不思議なもんですよ、男女の間といふものは――。』

『さうね。』

かう言つてお靜さんはアハヽと笑つた。その笑ひ方は、つい昨年あたりから始まつた表情で、以前はそんな風は少しも見せなかつた。それは長い間默つて押へに押へてゐた體のある部分が急に開けて發展して來たといふやうな笑ひ方であつた。笑ふ時に顏が少し赧くなつた。

私は一種の目覺をお靜さんに見たやうな氣がしてゐた。持つてゐたものがすつかり眼を明けて來た――丁度親知らずといふ齒が成年季になつて出て來るやうに、性慾にもある部分はある年齡まで開けずにゐて、それが何かの動機で目覺めて來るものだが、お靜さんは丁度今それだ。その時機に達したのだ。私は

毒草

一

私には此頃お靜さんの態度が疑はれ出した。尤も、この疑惑はもう昨年の春あたりからである。あのむつつりした默つてゐる人が何うしてあゝはしやいで何でもつけつけ言ふことが出來るかと思つてゐた。變な眼色をして私を見たり、謎をかけるやうなことを私に言つたりした。私の長女には、『常ちやんの父さんをばさん大好きよ……。』などと言つた。

用もないのに、私の家にやつて來て、半日遊んで行くこともあつた。私が晩酌をしてゐると、其處に坐つて、男女の間の話などをよくした。私達はもう社會道德に對する氣兼とか恐怖とか遠慮とか言ふものからすつかり脫却して了つてゐるやうな年齡に達してゐた。私達は二三年前までは顔を赧めずには話せなかつたことをも平氣で話した。

『さういふもんですかね。でも、男は嫉妬が深いものだから、却々さういふ思切りの好いところまで

會の群集と雜沓との中に巧みにまぎれ込んで了ひたいと思つた。しかしそれは矢張徒勞であつた。一週間を經たない中に、刑事は其處にもやつて來てゐた。勇吉はわくわく震へた。

刑事も其後度々やつて來たといふ妻の話であつた。何うかすると、夜などこつそり樣子を見に來るものもあるらしく勇吉には思はれた。職業の方もさがす氣が出なくなつて了つた。Socialist といふ嫌疑がかゝつてゐるといふことが知れては、何處でもつかつて呉れる處はありさうに思はれなかつた。望みをかけて來た小學校教員の方は殊にさうであつた。教員にならうとするには、默つて隱して置いたところで、本籍から屹度通牒して來るに違ひなかつた。二度目に暦を持つて博士をたづねた時に、思ひ切つてその話をすると『困るねえ、それは――。何うかしてその嫌疑を解いて貰はなければ、本當に何にも出來やしないよ。困つたことになつてゐるんだねえ。』かう博士は言つて、矢張勇吉の體中をさがすやうにして見た。俄かに博士の態度が變つて行つたやうに――さういふ嫌疑を持つてゐる人間に邸に出入されては困るといふやうに思つてゐるらしく勇吉には邪推された。

勇吉はゐても立つてもゐられないやうな氣がした。

『貯金はすぐなくなつて了ふし……。』

勇吉は絶えずかう思つて、例の鉛筆で計算をやつて見たりした。

正月が來た。注連飾などが見事に出來て、賑やかな笑聲が其處此處からきこえて來た。

しかし勇吉はぢつとしてはゐられなかつた。正月の初めにもつと家賃の安い家を別な方面にさがして、逃げるやうにして移轉して行つた。刑事の監視をのがれたいといふ腹もあつた。出來るならば、この都

つた。ある店では、『暦はもう遲いですよ。もう大抵何處の宅だつて買つて了ひましたからな……もうちつと早ければ賣りやうもあつたでせうけれども、かう押詰つちや駄目ですよ。』などと言つた。勇吉はためしに置いて貰ふ位で滿足しなければならなかつた。

それでも百枚ほどは、足を棒のやうにして、彼方此方の店に行つて賴んで置いて貰つた。本鄉から小石川、牛込、下谷、淺草の方まで行つた。每日勇吉はヘトヘトに勞れて家に歸つて來た。

二三日經つてから、置いて來た店を勇吉は廻りに出かけて行つた。勇吉は非常に失望して歸つて來た。殆ど一軒も賣れないと言つても好い位であつた。何處でも店の隅の方に形式だけに置いてあつた。『其處にあるから、見て行つて下さい。』などと言つた。『賣れませんな矢張、ゆつくり廣告でもしなけりや、いくら好い物だつて賣れやしませんよ。』ある店ではこんなことを言はれた。勇吉は都會の塵埃にまみれて暗い顏をして歸つて來た。

荒蕪地で、藥賣をやつてゐた時の方が何んなに好いか知れなかつたなどと勇吉は思つた。そこには廣々した天然があつた。其處に住んでゐる人も、都會に住んでゐるやうな忙しい冷淡な人間ではなかつた。

步いてゐる路にも、餓を刺戟する蕎麥屋、天ぷら屋などもなければ、性慾を刺戟する綺麗なびらしやらする女もなかつた。勇吉は計畫が全く徒勞になつたやうな氣がしてがつかりした。

『はァさうですか、これは成ほど面白いな。』こんなことを言つて大正三年の處をくるくる廻して、『これで來年一年の七曜が出るんですな、これは面白い。』刑事はかう言つてまた今年の處を廻して見た。

『一つ差上げませう。』

『さうですか。』と言つたが、『イヤ何ァに、買ひますよ。』

勇吉が吳々も賴むと、『私は疑つても何もゐやしないですけれどもな、職務ですからな、しかし長い中には、段々樣子を見て、帳面を消すことになつてゐるんですから……私の方だつて用の少い方が好いんだから。』後には刑事も打解けてこんなことを言つた。

七

暦を五六枚持つて、市中の雜誌店や何かを勇吉が廻つて歩いたのは、もう年の暮も押詰つた二十五六日であつた。市中は賑かに派手な粧飾などをして、夜は電氣が晝のやうに街頭を照しだ。車や自動車が威勢よく通つて行つたりした。

何處の雜誌店でも、相手にしないやうな家が多かつた。仕かけを說明してきかせても、容易に飮み込めないやうな人ばかりであつた。

『まア、なんなら二三枚置いて行つて御覽なさい。』かう言つて吳れる家は中でも深切な好い方であ

は瘦せた神經性の男を勇吉に見た。勇吉の眼のわるく光るのも氣味わるく刑事は思つた。何をするかわからない危險人物のやうに刑事の眼には映つて見えた。

『何うも、さうでせうけれど……私の方も役目ですからな。』

刑事はこんなことを言つた。

『實際、馬鹿な話なんです。仕事をするにも、そんな風に思はれてゐると、非常に迷惑なんです。友達の手紙の中に私の名があつたから、帳面に書かれて了つて、かうやつて、何處までも何處までもついて來られるんですが、その帳面から名を消して戴くわけには行かないでせうか。調べるなら、いくら調べて頂いても好いんです。却つて望むところなんです。調べもしないで、唯、跡をつけられるんですから困るんです。調べて頂きたいもんですがな。』勇吉は聲を顫はして言つた。

『何うも仕方がないんですよ。』刑事も流石に氣の毒さうな顏をして笑つて言つたが、其處に積んである印刷物を見て、『何です、それは？』

勇吉はそれを一枚取つて渡した。刑事はヤマダトコヨゴヨミなどと讀んでゐた。曆だといふことだけはわかるが、トコヨゴヨミとは何ういふ曆だか刑事はよくわからなかつた。刑事は勇吉の顏をヂロヂロ見てゐたが、『何です、これは？』

勇吉はお前なぞにはわかるもんかと言ふやうな顏をして、得意さうにその仕かけを話して聞かせた。

妻は失望したやうに言つた。今から一時間ほど前、巡査が入つて來て、『お前は北海道から來たのか。』と訊いた。『士別の近所にゐたんだな。』かう言つてつゞいていろ〳〵なことを訊いた。Socialist の取扱を受けてゐたといふことをちやんと巡査は知つてゐた。イヤなことを種々言つて、また其中主人のゐる時來ると言つて歸つて行つた。

『何うしても駄目かね。』

勇吉は默つて暗い顏をしてゐた。東京に行けば、そのイヤな監視を遁れることが出來ると思つて、それを唯一の希望にして來たのであつた。しかしそれも空頼であつた。かうした弱い者を酷める社會の殘酷さが染々と痛感されて來た。勇吉は恐ろしくなつて體を震はした。

『お前のやうに氣にしたつて仕方がないぢやないか。わるいこともしないのに、向うで勝手について來るんだから仕方がないぢやないか。』

かうしなめるやうに妻には言つて聞かせたけれど、勇吉は妻以上にその監視を恐れてゐた。これで出京の希望が十の八九まで破れたやうにさへ勇吉には思はれた。

二三日して刑事が訪ねて來た時は丁度活版所から出來た暦を屆けてよこして吳れたところであつた。勇吉は丁寧に刑事を座敷に通して、死刑に處せられた友達と自分との關係に就いて詳しく話して聞かせた。しかしヂロヂロと體を捜すやうにして見る刑事の眼に出會つて時々聲を顫はせたりなどした。刑事

房と子供をかゝへて遊んでなんかゐられない。』かれは蕎麥屋にも入らずに、飢ゑた腹を抱へて、裏店の狹い自分の宅に歸つて來た。

印刷は何うもはかどらなかつた。二十日でも、もう遲いと思つてゐるのに、二十一日になつても、まだその曆は出來て來なかつた。催促に行くと、『何うも廻すところが旨く行きませんでな。』などと言つて、主人はその半分出來かゝつたものを持つて來て見せた。成ほど旨く廻らなかつた。『もう少し厚い紙にしなけりや駄目だ。』などと言つた。周圍の意匠はかなりによく出來てゐた。四季の花卉が四隅に小さく輪廓を取つて書いてあつた。『明日までには是非拵へて下さい。でないと困るんですから。』かう強く賴んで、勇吉は其處から歸つて來た。イヤに曇つた寒い日で、近所の工場の煤烟が低くあたりにむせるやうに靡いて來てゐた。

家に歸ると、妻は不愉快な心配さうな顏をして坐つてゐた。

突然、

『貴方、また來たよ。』

勇吉はゾッとした。『え？　來た？』

漸く免れた危難に再び迫られて來たやうな戰慄を勇吉は覺えた。勇吉は棒のやうに其處に立つてゐた。

『矢張、駄目ですね。』

歸る時に、漸く思切つて、『これはあつちで取れたので御座いますが、私がつくつたんだと猶好いんですけども、……さうぢや御座いませんけれども、折角持つて參つたんですから。』

かう言つて、木綿の汚れた風呂敷から新聞紙に包んだ一升足らずの白隱元豆を其處に出した。

『イヤ、これは難有う。好い豆が出來るな、矢張、彼方では。』

博士は莞爾しながら言つた。

勇吉は唯まご〳〵して暮した。印刷が出來上らない中は、販路の方に取かゝることも出來ないので、仕方なしに職業の方を彼方此方で訊いて見たりなどした。路の通りにある職業周旋のビラの澤山に張つて出してある家の中にも入つて行つて見た。其處には矢張かれと同じやうに職業を求める青年がゐて、あるかなしの財布の中から五圓札を一枚出してゐたりした。勇吉はいろ〳〵なことを訊いて其處から歸つて來た。

ある學校友達は、此前東京に出た時分には、早稻田の學校に入つて劇の方に志してゐたが、此頃では大分文壇に名高くなつて、その人の書くものなどが時々芝居に演ぜられたりなどしてゐた。一度其處を訪問して見やうと思つたが、まア印刷が出來上つてからと思つて、途中まで行つたのを引かへして戻つて來た。『千枚で五十三圓、二十圓位で出來ると思つてゐたのに……大分の違ひだ。』こんなことを思つて、かれは歩きながら貯金を腹の中で勘定したりした。『二月、三月はまア好いが、さうかと言つて、女

『博士の證明までついてゐるんですな、これなら確かなもんだ。』などと言つた。『忙しいけども、兎に角二十日までにこしらへて上げませう、千枚ですな……。』かう言つてちよつと途切れて、『それで紙の色は何が好いでせう。』

勇吉は見本に出した小さな帳面をひつくりかへして見た。色の種類も少なく、好い色もなかつた。ふと、かれの崇拜してゐる作家の短篇集の表紙に似た色が其處にあつたのを見て、『これにしませう、これにしませう。』と早口に言つた。

『知つてる繪かきがありますから、何か少し周圍に意匠をさせませうか。いくらもかゝりやしません。餘り周圍に何もなくつてはさびしいですからな、書齋の柱なんかにかけて粧飾にして置くもんだから……。』深切な主人はこんなことを言つて呉れた。原稿を持つて行つてから俄かに主人の態度の變つて行つたのも勇吉には成功の第一のやうに見えた。

博士の邸を本郷の高臺に訪ねて行つた時には、怪しい姿を玄關にゐる大きな犬に嚙みつくやうに吠えられて、かれは狼狽した。幸ひに博士は在宅で、立派な庭に面した大きな室で逢つて呉れた。『それは好いですな、登錄すれば一層好いんだけども、まあ、誰も始めは眞似るものもあるまい。少し賣出してからにする方が好い。』などと言つて、版權登錄の手續などを教へて呉れた。勇吉は土產に持つて行つたものを出すのが恥かしいやうな氣がした。

た。妻はあの荒蕪地の中からかういふ處に急にやつて來たのを不思議に思はずにはゐられなかつた。『私、まだ體が搖いてゐるやうな氣がして。』二三日經つてからも妻はこんなことを勇吉に言つた。

六

勇吉は着いた翌日から、彼方此方と活版所をさがして訊いて歩いた。しかし落附いてかれの要求を聞いて呉れるやうな所は稀であつた。勇吉の樣子をヂロ〳〵と見て、てんから相手にしないやうなところも何軒かあつた。『さうですな、今は年の暮が近いもんですから、忙しくつてとてもお引受は出來ませんな。春にでもなれば、また緩り御相談をしてもよう御座いますが……。』ある小さな活版屋の爺はこんなことを言つて笑つた。勇吉は氣が氣でなかつた。かれは一軒から一軒へと熱心に訊いて見て歩いた。

かれは活版所をさがすだけにも二三日を徒らに費さなければならなかつた。漸くさがしあてた處は、場末の小さな活版所で、見積もあまり安くはないと思つたけれど、ぐづぐづしてゐて機會を失つては大變だと思つて、勇吉は兎に角其處で印刷させることにして、その翌日すぐ原稿を持つて行つた。

鬚の生えた四十恰好の主人は、勇吉からその原稿の說明を聞いて、『成るほど、これは面白いもんだ。千年前でも千年後でも何日は何曜日だつて言ふことがちやんとわかるんですな、これは新案だ。』などと言つて、丸いものを自分で廻して見たりした。

作ですよ。この冬が思ひやられますよ。』などと言つて、粟も稗も馬鈴薯も取れなかつたことを車中の旅客に話して聞かせたりなどした。

氣候も段々暖くなつて來た。畠には麥が青々と生えてゐた。『あちらに比べたら、何て好い處なんだらう。かういふところに住んでゐる人達は何れほど仕合せだか。』勇吉の妻はこんなことを思つて、雪一つない地上に草や木の青々と生えてゐるのをめづらしさうに見た。

『暖かいこと。』

かう勇吉に言つて見たりした。

賑かな大きな目も覺めるやうな停車場――幸ひにも其處には豫め手紙をやつて今日の到着を知らせて置いた遠い親類の男が迎ひに來てゐて呉れた。荷物と一緒に自分と女の兒だけ車に乘せられて、借りて置いて呉れた裏店のやうな三軒つゞきの狹い家にやがて皆なは落附くことになつた。それは檑鉢の底のやうになつてゐる處で、ちよつとの隙間もなく家が一面に建て込んであつた。

『何て家の多い處だか――私吃驚した。』こんなことを勇吉の妻は言つた。

三疊に六疊、床の間もないやうな小さな家であつた。それでも彼方の寒い堀立小屋よりはいくら增しだか知れないと妻は思つた。新しい楓杓、新しい桶、瀨戶で出來た釜、鍋、藥罐、さういふものをやがて親類の男は買つて來て呉れた。その男は勇吉の母方の從弟で、近所の工場に勤めてゐるやうな人であつ

足を蝦のやうに曲げて、何も彼も忘れてぐつすりと寢た。

船から下りたところにある停車場では、故郷の方にわかれて行く汽車が今發たうとして烟を擧げてゐるのを見た。『國になんか寄つてゐられない。そんな暇はない。さうでなくつてさへ遲くなつたんだ。もう十二月ぢやないか。』かう言つて二人とも素通をして行くことにきめてゐたけれど、此處に來ては流石に國の方に心をひかれない譯に行かなかつた。『かうして東京に行けばまたいつ國に行つて、親や同胞に逢はれることだらう。』こんなことを思つて、勇吉の妻は涙をそつと袖に拭つた。

其處でも二人は停車場の前の茶店にも休まなかつた。一錢でも多く金をつかふことを二人は恐れた。東京に行つて、暦が賣れるか、ある職業にありつくかするまでは、餓を忍んでも暮さなければならないやうな境遇であつた。勇吉の妻は其處で泣く子の爲めに駄菓子を二つ三つ買つたばかりであつた。

三等室は矢張混み合つてゐた。一日も二日も汽車や汽船に搖れ通しにやつて來た體は、へト〳〵に勞れて、物に凭りかゝりさへすればすぐ居眠が出るやうになつてゐた。勇吉は蒼い昂奮した顏をして、兩方から押つけられるやうにして小さくなつてゐた。窓の硝子に、箒のやうにぼさ〳〵した頭を凭せかけて昏睡してゐたりした。

勇吉の妻は段々賑やかな町や村や停車場の多くなつて來るのを見た。人が澤山に路を通つてゐた。こんなに大勢人が居るかと不思議に思はれる位であつた。海を一緒に越えて來た人は、『北海道はえらい凶

きながら、便所のところに凭りかゝつてゐなければならなかつた。それに便所の扉は幾度か明けられたり閉められたりした。後には夫は立ちくたびれて堪らなくなつたといふやうにして荷物の上に腰を掛けた。

大きな町の雪に埋つてゐるさまなども見えた。鮨、辨當、正宗、マツチ、煙草――と長く引張つた物賣の聲が今だに耳について殘つてゐるやうに思はれた。海に近い町に來て、汽車を下りて、停車場の傍の方の小さな旅舍で朝飯を食つた時には、ひどく勞れて、一時間でも二時間でも好いから寢て休んで行きたいと妻は思つた。其處は勇吉に取つても妻に取つても思い出の多い處であつた。結婚した翌年二人は山の中から海を渡つて其處に來た。そこに二人は一週間ほどゐた。『その時分は樂しかつた。』などと妻は思つた。

追立てられるやうにして、埠頭の方へ駈けて行く二人の姿が續いて見えた。向うに渡る汽船の白いペンキ塗は碧い海の中にくつきりと見えてゐた。めづらしく其朝は晴れてゐた。朝日が煌々と眩しく海に碎けて光つてゐた。

寒い汚い狹い船室に、動物か何ぞのやうに人々は坐つたり寢たりしてゐた。一種のイヤな臭氣が何處からともなく襲つて來た。妻は眠くつて眠くつて仕方がなかつた自分を見た。『己は甲板の上に行つてゐるぞ。』かう勇吉が言つて出て行くのをうつゝに聞いて、女の兒に乳を含ませながら、大勢の人達の中に

五

小さな海岸の停車場から目も覺めるやうな賑やかな大きな上野の停車場までのさまぐ〳〵の光景は、何枚續きの繪か何ぞのやうになつて勇吉の妻の眼に映つて見えた。雪、雪、雪、何處を見ても雪ばかりの廣い荒漠とした野原の中の停車場が見えるかと思ふと、何本もわからないほどの煙突が黑い凄じい煤煙をあたりに漲らしてゐるやうな大きな町なども見えた。ある線からある線へ乘換へる停車場では、二人は寒氣に顫へながら、家から持つて來た冷たい結飯などを食つた。女の兒が泣いて泣いて何うしてもだまらないので、一度背中から下して、乳を含ませて見たりなどしたが、矢張そりかへつて火がつくやうに烈しく泣いた。

『貴方、ちよつと抱いて見て下さい。』

かう言ふと、夫は暗い顏をして默つてそれを抱いてあちこちと搖つて步いた。暗い暗いプラットホームだつた。汽車は大きな眼のやうに光をかゞやかして凄じい地響をさせてその停車場に入つて來た。夥しく混み合つた三等室を勇吉の妻は眼の前に浮べた。大きな荷物を抱へて二人は入つて行つたが、何處も一杯で坐る處がなかつた。

妻だけは何うやらかうやら割り込むやうにして腰をかけさせて貰つたが、勇吉は大きな荷物を下に置

十一月の末が來ても、まだ土地の處分が完全に出來なかつた。勇吉は段々焦々し出して來た。『暦は十二月から正月が賣れるんだ。ぐづ〳〵してゐて時を失つては大變だ。』こんな風に考へたかれは、終には安く土地を手離して了はなければならなかつた。『何アに構はない、貯金の金があるから、東京に行つてから一月二月は何うにでもして行かれる。少し位安くつても早く行ける方が好い。』勇吉はかう思つて土地賣買の證文に判を捺した。

勇吉の妻も無論東京に出るといふ計畫を喜んでゐた。まだ東京を知らないかの女に取つては、東京は何んなことでも出來るところのやうに思はれてゐた。果して夫の言ふ通りならば、こんな寒い荒蕪地の中に暮してゐるより何れほど好いか知れなかつた。絶えず心配になつてゐるSocialist の嫌疑を避け得らるるだけでも好いと思つた。始めて運が開いて來たといふ風にも考へられた。長年夫を知つてゐるので、時には『何を言つてるるんだかわかりやしない。そんな暦が賣れるもんだか何だかわかりやしない。』かう不安に思ふこともないではなかつたが、雪の中に顫へて餓ゑてゐるよりは、何んな苦勞をしても東京に行く方がまだしも好いと妻は思つた。

『私は何んな苦勞をしても好いけど、貴方もしつかりして下さらなけりや仕方がないよ。』

かう妻は勇吉に言つた。

かれは喜ばしさうな顔をして言つた。

『何ッていふ名をつけようか。』續いてかれはかう思つた。萬代暦、何うも固すぎると思つた。新式萬世暦、年代暦、かうも考へた。しかし何れもこれも皆な氣に入らなかつた。もう少し砕けて出て、ちようはう暦、百年こよみなどといふ名をつけて見た。何うも矢張自分の思つたやうな好い名がなかつた。

勇吉はその名の爲めに尠くとも三日四日考へた。ふと、トコヨといふ字が頭に浮んで來た。トコヨゴヨミ――好い、好い、これが好いこれが好いと思つて、嬉しさうに膝を叩いた。山田式トコヨゴヨミ――二三度口でよんで見て、『矢張、式なんて言ふ字がない方が好い。ヤマダトコヨゴヨミ、それで好い、それで好い。』かう得意さうに言つて、それを原稿の上のところに、ゴヂックスタイルで丁寧に書いた。そしてその上に理學博士吉田卓爾先生證明と横に書いた。

『これで好い、これで好い。』

勇吉はある大きな事業をしたやうな心持で雀躍して狹い室の中を歩き廻つた。

四

出京の準備は思の外手間取つた。土地の處分をして、少しでも多く金を作りたいと思つたので、金を借りた家に行つて相談をしたりなどした。懇意の醫師の許などにも行つた。

、コヨゴヨミ

用だつていくらもかゝらない。一枚二三十錢位で賣り出せば屹度賣れる。さうだ。好いことに思ひ附いた。』かう思つて、かれは文庫の底からその曆の原稿を出して、更に博士の手紙を讀みかへした。『七曜の數の出し方は確かに貴下の新研究と存候――。』かう書いてあつた。今まで持つてゐた才能を何故今までつかはずに置いたかと勇吉は思つた。限りない勇氣が全身に漲つて來た。神！　神が救けて呉れた！こんな風にも思つて雀躍した。

Socialist としての壓迫も、東京に行けば何うにでもなると勇吉は思つた。『東京は廣い。身を躱して了へばわかりやしない。巡査だつて、刑事だつて、さう〳〵はさがして歩かれやしまい。それに、東京には代用小學校がいくらでもある。教員の口だッてさがせばわけはない。さうだ、さうだ。こんなところに躍踞して、雪の中に餓ゑて死んで了ふことはない。それに限る！』勇吉は妻にすぐ言つて聞かせやうとは思つたけれど、まァあとで、すつかり決つてからでも好いと思ひかへして、その愉快な計畫を自分一人の腹の中に納めて置いた。勇吉はボールの厚紙を押入の中から搜して、不完全な原稿の訂正に其日を費した。

丸く切つたボール紙をぐる〳〵廻して、別の紙の數字と合せるやうに勇吉は骨折つてこしらへた。すべてがかれの思ふやうに行つた。かれは使用法を箇條書きにして書いて見たりした。

『旨い、旨い。これで出來た。』

ふばかりだ。』

かう思ふと、勇吉はゐても立つてもゐられないやうな心持がした。それに、海岸の村で聞いて來たSocialistに對する官憲の方針はかれの恐怖の血を泡立たせた。自分のあとには常に刑事がついてゐて、自分の考へてゐることは何も彼も知つてゐる。かう思ふと、怖くつて仕方がなかつた。片時も心の安まる時がなかつた。自分は何もわるいことはしないのだけれど、今までのことが旣に大きな罪になつてゐて、突然刑事や巡査がやつて來て自分を伴れて行きはしないかとさへ疑はれた。

かれは部落に一人ゐる巡査を怖いものに思つて、その駐在所の傍は常によけるやうにして通つて行つた。

ふと思ひついた。かれは例の通り膝を拍つた。晴々しい顏をしてかれは心の中に叫んだ。『さうだ。さうだ、さうしよう。あいつを持つて東京へ行かう。あいつなら確かだ。確かに賣れる。誰も必要な重寶なものだから……。』かれは海岸の村にゐる時分、一生懸命になつて、ある一種の曆を發明したことを思ひ出したのであつた。それは千年前乃至千年後の二十八宿と七曜日が數字の合せ方で間違ひなく出て來るといふやうなものであつた。それをかれはかれの不思議な數學的の頭から案出した。かれはそれを鄕里出身の理學博士に送つて賞讚を博した。現にその博士の手紙を勇吉は持つてゐた。『さうだ、それに限る。曆は安くつて必要なものだから、いくらでも賣れる。東京に行つて、安い印刷所でこしらへれば費

い。』勇吉はゐても立つてもゐられないやうな氣がした。

『御飯は?』

『今、食ふ……。』

かう言つたが、勇吉は夢中で膳に向つて二三杯啜いのをかき込んだ。で、いくらか元氣が出て來た。『まァ考へやう。』かう思つて、蒲團を引ずり出して、古い汚い襟に顏を埋めたが、疲れてゐるので、いつとなくぐつすり寢込んで了つた。

勇吉は一日二日全く考へ込んで暮した。百姓の事業の方も捨てゝ了ふのは惜しいとは思つたが、これから先凶作が毎年つゞくかも知れないと思ふと、不安がそれからそれへと起つて來た。それにかれの持つてゐる土地を物にしようとするには、まだ少なからぬ金が必要であつた。今でさへ借りた金に困つてゐるのに、此上金を工面することなどはとても出來なかつた。貯金はいくらか持つてはゐても、それは萬一の時の爲めに殘して置かなければならないものであつた。勇吉は溜息をついた。

ある日は何か思ひついたことがあるやうに、急に勇み立つて海岸の村へ出かけて行つたが、歸つて來た時には、矢張しをれた動搖した顏をしてゐた。自分の住んでゐる村の人達からはことにかれは何物をも得ることが出來ないのを見た。

『兎に角、かうしちやゐられない。かうしてぐづ〳〵してゐれば、親子三人雪の中で饑ゑて死んで了

『何うだつたね。』

『駄目だ、駄目だ。』

『ちつとは、それでも……。』

『駄目だ、駄目だ、すつかり駄目だ。』勇吉は神經性の暗い顏をして、『藥なんぞ買ふものは一人もありやしない。』

『困つたね。』

妻はかう言つて、『まア、上んなさい。留守に彼方から來たよ。いくらでも何うかして吳れッて……。』

『さうか。』

勇吉はかう言つたきりで、草鞋をぬいで上にあがつた。腹は減つてゐるけれど、飯を食ふ氣にはなれなかつた。粟と麥とを雜ぜた雜炊――それすら今年から來年にかけての材料を持つてゐないといふことが、一番先に勇吉の胸につかへた。勇吉は母親の背に負はれてにこりともせずに瘦せていぢけてゐる女の兒を不愉快な心持で見た。

古い煤けた簞笥、ブリキの落しの安火鉢、半分壞れかけた炭取などが其處に置いてあつた。壁に張つたトルストイの肖像は黑く煤けて見えてゐた。勇吉は煖爐の前に坐つて、後頭部に兩手を組合せて、やがて來る寒い冬を想像した。雪、雪、雪、恐ろしい雪がすぐ眼の前に迫つてゐた。『かうしちやゐられな

てゐる勇吉には、その災害の甚しいのが一層明かに眼に映つた。ある村などでは、殆んど全く無收穫といふやうな悲慘な狀態に落ちてゐるのを勇吉は見た。丘に添つた村はひつそりとして煙の立つてゐる家などはないといふ位であつた。いつも威勢よく鈴の音をさせて山を越えたり野を越えたりして停車場の方へ行く駄馬の群にも滅多には出會はなかつた。何處の村も皆なひつそりとしてゐた。

勇吉は非常に大きな打擊を受けた。百姓の事業の方も無論さうだが、それよりも一層困つたのは、藥のぱつたり賣れなくなつたといふことであつた。病人は却つていつもより多いのだけれど、何處の家でも藥屋などは買はなかつた。大抵は富山から來る置き藥で間に合せた。

『藥屋さん、氣の毒だけど……この凶作ぢや藥も貰つて飮めねえや。』

かう到る處で勇吉は言はれた。

勇吉は重い雜嚢を肩からかけてそして遠い旅から歸つて來た。

『駄目だ、駄目だ。』

かう言つて、小さな自分の家に入つて行つた。六疊一間に、其の奥に小さい二疊があるばかりであつた。十月の末はもう寒かつた。

雪も二三度やつて來た。ブリキの暖爐の中には、薪が燻つて、煙が薄暗い室の中に一杯に滿ちてゐた。妻は裏の方に行つてゐたが、聲を聞きつけて此方に來た。背に痩せこけた女の兒を負つてゐた。

れて行つた。勇吉は鉛筆で數字を書いた帳面の上に、髪の延びた蒼白い顏を落して、屈託さうに何か考へてゐることなどがよくあつた。

しかし、計算が合はないでも、天候さへ十分ならば、かれの計畫は段々成功して行くであらうと思はれた。「なァに、さう心配したものではない。三年も經てば餘程目鼻が明いて來ます。」かう年を取つた近所の百姓は言つて吳れた。ところが不仕合せにも二年目は天候は好い方ではなかつた。菜種も、豆類も、粟もすつかり駄目だつた。百姓はこぼしながら馬鈴薯や玉蜀黍などを食つた。今年こそ、今年こそと言つて、昨年の凶作の取りかへしをしやうとした今年は、また昨年以上に天候がわるかつた。暑い日影の照つたことなどは殆んど一度もないと言つて好い位であつた。秋の末のやうな薄ら寒い氣候が農作に肝腎な夏の盛りのすべてを占めた。此處では、五日でも一週間でも好いから、くわつと暑い日の光線の照りわたるのが必要であつた。強い日の光を受けさへすれば、作物は一日二日の中に三尺も四尺も伸びるといふやうな處であつた。

で作物は皆な成熟せずに終つた。粟にも穗といふ穗もつかなかつた。馬鈴薯さへ完全に出來なかつた。豆、麥、稗、蕎麥――すべて小さくいぢけて實を結ぶ間もないのに秋の霜は早くもやつて來た。凶作といふ聲が到る處に滿ちわたつた。物價は俄かに高くなつた。とてもやり切れないなどと言つて、半分耕した土地を賣拂つて他國に行つて了ふものが頻々として續いた。ことに、旅をして彼方此方を見て歩い

かう言つては、また深く讀み耽つた。二三時間の中に　かれはすつかりそれを讀み盡して了つて、中で氣に入つたものをもう一遍讀みかへしたりした。『是非、やつて見やう。』つぶやくやうにかれは獨語した。

夜遲くついた旅客の馬の鈴の音がちやらちやらと靜かに窓の下のところでした。勇吉は窓を明けて見た。廣い空には星が煌々とかゞやいてゐた。

三

確かな計算を立てゝ、少し耕しかけた田地を安くある人から買つて、日雇取に賴んで開墾に着手し始めた。自分は矢張藥賣に遠く出かけて行つてはゐたが、兎に角勇吉は百姓にならうと決心した。それより他に自分の出て行く道はないとすら思つた。旅から歸つて來て自分の荒蕪地が少しづつでも開墾されて行つてゐるのを見るのは樂みであつた。しかし半年と經たない中に、確かな計算だと堅く信じてゐた數字が數字通りになつて行かないのを勇吉は段々發見した。一年間に規定された荒蕪地を完全に開墾するには猶多くの金と力とを要した。天然と戰ふのについて思ひもかけない障碍が澤山に一方にあると共に、日雇取達は何の彼のと言つては怠けて遊んだ。開墾が出來て貸した方の土地には、小作人は菜種などを蒔いたが、それも十分な收穫を得ることが出來なかつた。藥の方で儲けた金は段々土地の方にすひ取ら

亭主は振返つて見て、
『誰のつて言ふことはありましねえ。此間、お客様が忘れて置いて行つた小說本だ。』
『ちよつと借りて行くよ。』
『え、ようがすとも……。』
其夜一夜、かれはその短篇集を手から離さなかつた。夕飯前に讀み、寢る前に讀み、蒲團の中に入つてからも讀んだ。かれは其處にかれの日常多く見てゐるやうな旅客だの乞食だの强盜などを見た。愚かな百姓、色氣のない田舍娘、行商人、それは皆なかれの常に眼で見たり話で聞いたりするやうな人達であつた。作物の背景になつてゐる天然もよく似てゐた。矢張、榫の林や白楊や白樺などで取圍まれてあつた。空は廣く星はキラキラと煌いてゐた。
『そつくりだ、そつくりだ、かういふ人間はいくらもゐる。』
讀みながら勇吉は何遍となくかう繰返した。
『かう書けば好いんだ。』
こんなことを言つたかれは、昂奮して膝を拍つた。かれは自分の逢つた人間を頭の中に繰返して見た。
『あれもさうだ、あれも好い、あいつも書ける。』かう言つてまだ膝を叩いた。
『さうだ、さうだ!』

十里行つて賣切れるか、二十里行つて賣り切れるかわからなかつた。一度は三十里近くも行つて、それでも賣り切れずに、山越をして海岸に出て、そして漸く歸つて來たことなどもあつた。旅舍のない村では、賴んで漸く泊めて貰つた。

二

ある夜、勇吉は荒れた小さな驛に來て泊つた。そこにある街道からある街道へ通ずるやうな處で、旅客が馬を次ぐ宿驛になつてゐた。

廣い路に添つて、人家が十二三軒あつた。明るい灯のついた三味線の音のする料理屋などもあつた。十月の初めは、もう內地の初冬の頃の氣候で、林の木の葉は黃葉してバラ〳〵と散つた。

旅舍の店の處を通らうとして、ふと見ると、ゴルキー集と書いた短篇集の散々讀み古されたのが其處の机の上に置いてあつた。勇吉はそれを手に取つて見た。不思議にも藝術に對する憧憬が湧きかへるやうに起つて來た。この前にも立場などで古新聞の破片などに自分の崇拜してゐた作家の作を發見して、東京の方をなつかしく思つたことも二三度はあつたが、しかし其時ほど強い烈しい憧憬を覺えたことはなかつた。勇吉は頁をくつて見てゐたが、

『これは誰のだい？』

やうになつて見えて來た。そしてその最後の一枚には、肥つた妻と自分に似て頭顱ばかり大きく發達した女の兒と蒼白い顏をした自分とが暗い寒い一間で寒さと飢ゑとに戰へてゐた。

かれはかれの行く部落の人達にもやがて段々懇意になつて、後には『藥屋さん、藥屋さん。』など、呼ばれた。唯で午飯を御馳走して吳れる家などもあつた。『此間の藥はよくきいたよ。この通り治つた。』ある百姓はかう言つて怪我をした足を出して見せたりした。勇吉は到る處で、遠い國から遙々とこの荒蕪地へやつて來てゐる人達を見た。中には一村を擧げて同じ調子の國訛の言葉をつかつてゐるやうなところもあつた。人々は皆な精を出して働いてゐた。『これでも一生の中には、國に歸るつもりですよ。』などと人々は皆な言つた。『寒いし、それに、かういふ處で、一生暮す氣にはなれないね。まア、金をためて、國に歸つて、好い田地でも買つて、年を取つてから、樂をするんだねえ。』などといふ人もあつた。かと思ふと、荒蕪地をある程度まで耕して、それを後から來たものに賣つて、もつと交通の便な、開けた町に近いところへ出て行かうとしてゐる人などもあつた。森だの藪地だのからは、大きな伐木を燒く煙が高く高く擧つてゐるのを勇吉は見た。

雜囊に一杯藥を入れると、二貫目位の重量があつた。それが段々一日增しに輕く輕くなつて行つた。勇吉はそれを樂みにして步いた。

兎に角それだけ賣り上げれば、かれはいつも家の方へ引返して來ることにきめてゐた。しかしそれが

かけて行つた心持や希望が逸早く氷のやうに解けて行つて了つたかれを勇吉は歷々とその山路に見た。一年ゐても何うにもならないので絕えず焦々して神經を昂らせてゐた彼。持つてゐる思想を紙にのぼすことが出來ないで煩悶した彼、美しい女の幻影にあこがれて輾轉反側した彼、キラキラする烈しい日光のやうな刺戟に堪へられずに絕えず眩惑する頭を抱へるやうにしてゐた彼、蒼白い髮の長い顏をして破調の詩に頭を痛めてゐた彼、下劣な肥つた家婢と喧嘩して腹を立てゝその頭を撲つて怒られた彼、電信柱が人間と同じく動いてゐるやうな氣がして驚いて歸つて來た彼、鄕里の友達の學校生活を羨しく思つて一夜寢られなかつた彼、――さういふものは、いつも一人步いて行く勇吉の道伴になつてゐた。東京から歸つて、腹立まぎれに、自暴まぎれに、鄕里のある家に火を放けやうとして、氣違扱ひにされて、遠い田舍にやられたことなどもかれは時々思ひ出した。『何うしてかうだらう。何うしてかう頭が惡いんだらう。』かれは以前にもよくかう思つて、顏をしがめて、頭を叩いたり何かしたが、今でも矢張かれは頭のことを絕えず氣にしてゐた。步きながら、コツ〳〵自分で頭を叩いて見たりした。

『こんな立派な思想が自分にはあるのに――。』今でも何うかすると、さう思つて、かうした僻境に年を取つて行くのを勇吉は情なく思つた。『他の人には皆なそれ〴〵明るい平和な生活なり家庭なりが出來て行くのに、何故、自分ばかりは、かういふ暗い慘めな押詰められたやうな生活ばかりが續いて行くんだらう。』かう考へる時には、一層明かに自分の通つて來た路が暗い繪の具で塗られた何枚續きかの繪の

事もなければ、かれに向つてガミ／＼言ふ力の強い妻もゐない。心を絶えずイラ／＼させる子供の啼聲もしない。何をしようが勝手である。そこでのみかれは自由に呼吸をつくことが出來るやうな氣がした。『空と日と鳥と……何といふ自由なひろい天地だらう。』かう獨りで言つて、大きな自然に壓伏されたやうに、後頭部に兩手を當てゝ、死んだやうになつて、一時間も二時間も草原の中に寢ころんでゐることなどもあつた。

『おーい。』

など、大きな聲を立てゝ、氣違ひのやうに手を振つたりなどした。

長い山路を通りながら、勇吉はまたよく昔のことを考へた。山路を一人歩いて行くかれに取つて唯一の道伴だと言つても好い位であつた。いろ／＼なことがかれの頭に衝き上るやうに集つて來たり散ばつて行つたりした。

東京で暮した一年の生活、それがいつでも一番先に湧き出すやうな力でかれに蘇つて來た。顫へるやうな神經をかゝへて、かれはある作家の玄關にゐた。其處でかれはいろいろな人を見た。當時の文壇で名高かつた小説家だの詩人だのを見た。美しい若い文學志願の女の群などにも逢つた。戀、功名、富貴——さういふものの中に小さくなつてぶる／＼顫へてゐるやうなかれであつた。かれの崇拜した作家は東京の郊外にゐて、トタン張の暑い書齋で、大きな作を試みて熱心に筆を執つてゐた。田舍で想像して出

『出來る、出來る、小作にさせても出來る。確かに出來る！』

かう發作的に叫んで、路傍の草の上に腰を下して、肩にかけた雜嚢の中から紙片と鉛筆とを出して、急いで數字を書いて計算して見たりした。『さうだ――これが十圓、これが二十圓、これが五圓、確かに出來る。一軒分だけ拂下げを願つて置いて、それに開墾をさせれば、二年かゝれば無論出來る。さうすれば、こんなにして遠い路を歩かなくつても好い。豐饒な土地は何んなにでも生活の道を與へて呉れる。さうだ、さうだ、歸つたら、早速着手しよう。何も官憲などを恐れてゐる必要はないんだ。獨立獨行だ！』さも大きな獨創的な考を得たやうに、膝を叩いて勇吉は跳り上つて喜んだ。それは廣く四邊が見渡されるやうな處であつた。向うには山毛欅の森や白樺の林が廣く遠く連つてゐた。此處等あたりまでは、開墾者もまだ入つて來ないと見えて、低い灌木の野や、笹原や、林の中に、路が唯一筋細くついてゐるばかりで、あたりには百姓の姿も見えなかつた。夏の日が明るく心持好くかれの腰をかけてゐる草地を照した。

『さうだ、さうだ。それに限る！』

かれはまた絕叫した。そしてまた新しいことに氣が附いたといふやうに、早く鉛筆を紙の上に動かして計算をした。

これに限らず、勇吉は草の上に寢ころんで休むことがすきだつた。上には空と日の光とがあるばかりだ。何んな大きな聲を出しても誰も何とも言ふものもない。其處にはかれのあとをつけねらつてゐる刑

過したことを勇吉は思ひ出してゾッとした。其處では刑事が時々樣子を見にやつて來た。默つて一時間も坐つてゐることなどもあつた。その度每に、勇吉は辯解したが、それは何の役にも立たなかつた。『でも、かうやつて來るのが私共の職務だから。』などと刑事は笑ひながら言つた。勇吉はその友達から來た手紙をすつかり出して見せたり、國の新聞に載せた歌の意味を解るやうに解釋して聞かせたりしたが、それでも矢張駄目だつた。で、一冬は少しばかり貯金して置いた金で辛うじて過して行つた。しかし斷頭臺に上つて、十二分に絕命した若い友達の悲慘な光景は絕えずかれの體に蘇つて來てゐた。

懇意な深切な醫師があつて、勇吉の境遇を氣の毒がつて、藥の行商を勸めて呉れたので、かれは辛うじて生活の道を得るやうになつた。その翌年は、一夏かれは其處から此處へと步いて行つた。幸ひにもその年は豐饒で、藥は思つたより賣行がよかつた。『思ひ切つて百姓にならう。それが一番好い。自分で耕して自分で食ふ。世の中では Socialist と呼ばうが何うしようが、そんなことは頓着しない。』かう勇吉は幾度となく決心した。しかしその度每に、かれの體格が鋤犂を取るに不適當なのを考へてかれは躊躇した。かれの體は小柄で、瘦せて、力がなかつた。『せめて、妻位の體があれば――。』かう思つて妻の肥えた體を見たことも一度や二度ではなかつた。

山路を步きながら、

して歌つた、それは事實だ。しかし、事實を歌つたばかりで、Socialist と斷定する役人達の無學がわかる。

『自分は藝術家だ。Socialist ではないつていくら辯解してもわからなかつた。』こんなことを思つた勇吉の頭には、あの多くの人達が死刑に處せられた時の光景が歴々と浮んで來た。かれはそれを思出す毎に、いつも體がわく〳〵と戰へた。それは日本などには到底起ることがないと信じてゐた光景であつた。外國――殊にロシヤあたりでなければ見ることが出來ないと思つてゐた悽慘な光景であつた。その時新聞を持つてゐたかれの手はぶる〳〵戰へた。其處には、かれの知つてゐる友達の名前が書いてあつた。その友達はかれが東京に出てゐる頃に懇意にした男で、よく往來しては、烈しい思想を互に交換したりした。しかし、勇吉は其時でも藝術といふことを忘れてはゐなかつた。Socialism を承認してはゐたが、それは藝術上の Socialism であつた。勇吉は間もなく郡視學に喚ばれたり警察に呼ばれたりした。休職――かうして唯一の生活法であつたかれの職業はかれから永久に奪はれて行つた。

その時、妻は今の女の兒を懷姙してゐた。『貴方は本當に、そんな人なんですか。なら、私、今からでも出て行く。怖い、死ぬのが怖い。』妻すらかう言つて、勇吉の體をさがすやうにした。『さうでないなら、さうつて、ちやんと申譯が出來さうなもんですね……。そんなわからないことはお上だつてなさる筈がないんですがね……。』などと言つた。海岸の小さな小屋見たいな家で、ぶる〳〵慄へながら寒い寒い一冬を

勇吉は三日間、雜囊を肩からかけて村から村へと歩いて行つた。自分の村から二三十里近くのところまでも出かけて行つた。雜囊の中には、藥が澤山に入つてゐた。風邪の藥、胃腸の藥、子供の氣つけにする藥、ヨードホルム、卽効紙などがごた／＼と一杯になつて入つてゐた。勇吉はそれを自分の村から五里ほどある停車場の町に行つて、懇意な醫師に處方をつくつて貰つて、小さな製藥會社から成べく安く下して貰つて來た。

『藥、入りませんか。』

かう言つて、かれは荒蕪地の處々にある家に入つて行つた。一軒から一軒へ行くのに、萱や篠の一杯に茂つた丘を越えて行かなければならないやうなこともあれば、澤地のやうなぐじや／＼した水のある處をぐるりと廻つて行かなければならないやうなこともあつた。『藥屋さんかネ……今日は好いがな。』伊勢あたりから移住して來た百姓はこんな口の利き方をした。『まア、休んで行かつし、……藥はいらないが、遠いところを來て疲れたらうナモシ。』などと言つて、煖爐の傍に請じて呉れる婆さんなどもあつた。村から村へ三里もさびしい山路を通つて行かなければならないやうな處を通る時には、勇吉の勇氣も幾度か挫けた。『獨立獨行――何でも自分で生きて行くに限る。小學校でつかつて呉れなければ、自分で働いて食ふばかりだ。Socialist！結構な名をつけられたものだ。自分は Socialist だらうか。それは思想にはいくらかさういふ傾向を持つて居るかも知れない。國の新聞に出したあの歌などにはさういふ事を主と

に渡つて來ない前に一緒になつたのであるが、かれはそれを伴れて彼方から此方へと漂泊して行つた。海岸の村に來るまでにも、かれは尠くとも四ヶ所の小學校を勤めて歩いた。ある山の中では、自分一人きりで、十五六人の兒童を相手にのんきに暮した。そこは粟餅、きび飯、馬鈴薯、蕎麥、豆などより他に食ふことの出來ないやうな處であつた。勇吉は今でも其處の生活を振返つて考へずには居られなかつた。

『何故、あそこから出て來たらう。何故あそこにゐなかつたらう。あそこ位好いところはなかつた。あそこ位自分に適當したところはなかつた。…………………矢張、淋しかつたのかなァ、世の中に出たかつたのかなァ。』こんなことを言つては、其處から出て來たことを悔んだ。

妻に向つては、『彼處を出て來たのは、お前にも責任があるよ。お前も出たがつてゐたからな。』何うかすると、勇吉はこんなことを言つたが、しかし、妻に對して常に多く要求してゐないかれは、さう深く妻を相手にしようとは思はなかつた。妻はまた妻自身の獨立した領分を持つてゐて、體と物質との兩面から常に勇吉を壓迫してゐた。

『貴方、何をそんなに考へてばかしゐるんですよ。』

こんなことを言つては、勇吉が暗い窓の下で、蒼白い顔をして、神經を昂らせて、鉛筆で手帳に何か書きつけてゐたりするのを叱るやうに言つた。

トコヨゴヨミ

一

雜嚢を肩からかけた勇吉は、日の暮れる時分漸く自分の村近く歸つて來た。村と言つても、其處に一軒、此處に一軒といふ風にぽつぽつ家があるばかりで、內地のやうにかたまつて聚落を成してはゐなかつた。それに、家屋も掘立小屋見たいなものが多かつた。それは其處等にある木を伐り倒して、ぞんざいに板に引いて、丸太を柱にして、無造作に組合せたやうなものばかりであつた。勇吉も矢張さういふ家屋に住んでゐた。

『もう二年になる。』

勇吉はいつもそんなことを考へた。海岸に近い村に教鞭を執つてゐた時分は、それでもまだ生活に餘裕があつた。『何うせ、田舍に埋れた志だ。無邪氣な子供を相手に暮して行くのが自分には相應はしい。』かう思つて自から慰めた。國から兄弟達が心配して送つてよこしたやうな妻は、かれがまだ海を越えて此地

一二年經つてから來た二人づれの客の一人は、綺麗な色の白い丸髷に結つた二十六七の女であつた。爺がその話をすると『お前さんかえ？　最初に見つけたのは。可哀相なことをしましたよねえ。お師匠もあれからぐつと弱くなつて、たうとう昨年亡くなつて了つたからね。私はその娘さんに逢つたことはなかつたけども、好いお師匠で、何んなにしても一緒にしてやるつてその時分言つてゐたんですがね、何うして死んだんだか、矢張因緣ねえ。』後の半分は、伴れの男に言ふやうにして言つた

しかし其話も段々爺の口に上らなくなつて行つてゐた。燈臺へ行く赤ちやけた路からは、依然として鋸の齒のやうに細かく刻まれた石切場の谷が覗かれてゐた。波の音は高く半島の岬端を取り卷いて聞えた。

高原の上に聳えてゐる山の後の處に小さな寺があつて、その下の谷合のやうなところに村の共同火葬場があつた。午後の四時過、人々は靑い僧衣を着た田舍坊主を先に立てゝ、五六人の人に送られて、畑の中をさびしく通つて行くその棺を見た。爺さんも主人も女中もその群の中に雜つて見られた。

高原には秋風が立つて、薄の穗や萩や萱がさびしく靡いてゐた。棺はやがて埃の立つ赤ちやけた街道を橫切つて、松の林の傍に添つた細い路を谷合へと靜かに下りて行つた。さびしい寺、短かい讀經、悲しげな鐘の音、——やがてそれもすんで、棺は松原の奧の小高い丘の蔭の火葬場へと運ばれて行つた。

あくる日の朝、二人が骨を拾ひに出かけて行つた時には、朝露がまだ深かつた。二人の足袋はしとどに濡れた。

日は日と經つて行つた。何も變つたものはなかつた。高原の停車場からは、相變らず綺麗な女と男とが一緒に睦まじさうに話しながら出て行つた。松原の中の淸水は微かな音を立てゝ流れ落ちてゐた。手桶を天秤でかついで水を汲みに出かけて行く茶店の爺さんの姿も、矢張每朝其處に見えてゐた。爺さんは其朝の悲劇を人々に語つた。石切場に添つた長い路を話しながら步いて來たりした。多い遊覽客の中には、その話を覺えてゐて、『あゝ鶴太夫の娘か。そこでやつたのか。』などと言ふものもあつた。爺さんは、『男の衆の方の人は惜しがつてゐましたよ。僅かの金だから、死なななくても好かつたにッて言つてな……。それに上さんにもまだ乳呑兒があつたからな。』などと話した。

父親は唯點頭いて見せた。

此方が火葬ときまるまでは、細君も強ひて東京に死骸を持つて行くとも言はなかつたのであつた。それが不思議にも、急に『何うしても持つて行く。』と細君は言ひ出した。伯父の勸めも頑として きかなかつた。『東京に行つて、私が何んな工面をしても立派な葬式をしますから。』かう細君は言ひ張つた。一緒に燒くといふことが急に細君の決心を固くしたのであつた。

八

翌朝、一番汽車で男の方の一行は出發して行つた。『お見送りをするんですけれども……。』かう言つて、女の父親は、代理に門弟を停車場までやつた。門弟は歸つて來てからその細君の頑固なことを繰返して師匠に話した。汽車は海の見える高原を川近い町の方へと出て行つた。

師匠と門弟とは、その日一日、その海岸の旅館にゐた。しかし萎れた師匠の姿は終日その一間に入つたきりで、一歩も外に出ようとはしなかつた。役場にも分署にも、門弟は皆な一人で行つて用事を辨じた。燈臺の茶屋へも門弟は禮を述べに出かけて行つた。

女の死骸ばかりが此處で火葬にされるといふことは、旅館にゐる人々や近所の女達の心を動かした。

其日は矢張よく晴れてゐた。海は影の濃い悲しい淋しい碧の色を見せてゐた。

駐在所に長い間置かれた女の棺の蓋は、やがてぶる〳〵震へた老いた父親の手に明けられた。ランプは薄暗く女の蒼白い顏と亂れた髮とを照した。

『大變お世話になりました。親が來れば好いのですけれども……生憎、遠くに行つてをりまして、急なものですから。』

父親はこんなことを巡査に言つた。

女の棺はやがて旅館の別の室の方へと運ばれて來た。かうした旅では、死者に對する普通の儀式すら完全には出來なかつた。棺の前の小机には、唯形ばかりの線香と花とが手向けられた。

男の伯父と門弟とは種々打合せをした。『あの伯父つて言ふ人は中々解つた方だ。話が面倒でない。』などと門弟は師匠に話した。女の持物——書置、信玄袋、蝙蝠傘、化粧道具などがやがて其處に屆けられて來た。父親はぶる〳〵手を戰はして書置を讀んでゐたが、やがてそれを卷返しながら、『皆な棺の中に入れて了つて吳れ、思ひ出すから。』かう言つて、兩手を頭の後に組んで長い溜息をついた。『彼方に持つてつたつて仕方がない……燒いて行く。』かう父親は言つた。門弟はそれを男の伯父の方に話しに行つたが、長い間を置いてから戾つて來て、『向うはその儘東京へ持つて行くさうですよ……あの伯父つていふ人は、持つて行くのでは、費用もかゝるからつて言ふんですけれども細君が承知しないんですよ。』

『さうか——。』

『可哀相ね。』

松原の中に見えなくなつた二人の姿は、暫らくすると、明るい灯の多い停車場の方へ出て行つた。丁度その時最終の汽車の音が遠くから聞えて來てゐた。段々速力が緩くなつてやがて停車場へと近づいて寄つて來たが、機關車の煙突から出る赤い火の子は、丁度花火のやうに亂れて畑の上に落ちて見えた。停車場附近の灯は、闇の中を劃つて一ところ明るくかがやいてゐた。

其處に、女の父親が一人の門弟と一緒に乘つて來てゐた。父親は東京でも名高い師匠の一人であつた。まさか、本名を名乘つても行かれないので、従兄といふことにしてやつて來た。父親は一人娘の死にすべて此世のあらゆる望を失つて了つたやうな打撃を心と體とに受けた。母親なしに育てた一人娘、自分の藝をもかなり仕込んでやつた一人娘――老後の杖とも力とも賴んでゐたのに、それほど氣に入つた男ならば何んな無理でもして一緒にしてやるとかねぐ〳〵言つて聞かせてゐたのに……。『仕方がねえ、これも私が運がわりいんだ。』父親は一緒につれて來た門弟に何遍となく繰返して言つた。

旅館では二人の來るのを皆な待受けてゐた。男の方の伯父や細君には、厭でも逢はなければならなかつた。二人が男の伯父のゐる室に入つて行つた時には、細君は子供を抱いて乳を飮ませてゐた。

『私はあれの従兄で。』

父親はかう言ふより他に仕方がなかつた。二人は別に室を一間かりることにした。

た。』まァ、終列車まで落附いてゐるより他仕方がない。』かう言つて伯父は酒を飲んでゐた。海は次第に暗くなつて行つた。

女の死骸を収めた棺は、駐在所の暗い土間に依然としてさびしさうに置かれてあつた。新しい棺は白く闇の中に見えてゐた。

駐在所の裏にある家の窓は明るく灯にかがやいてゐた。笑聲なども聞えた。平和な生活が其處にあつた。松原の中の淸水は微かな音を立てゝ流れ落ちてゐた。闇の中を提燈が一つ通つて行つた。燈臺の灯はをり〳〵明るく海を照した。

大きな方の旅館から出て來た若い男と女とは、手を組合せて闇の中を松原の奧深く入つて行つた。

『女は二十位だ。』

『行つて見て？』

『ちよつと行つて見た、さつき……。』

『見えて？』

『土間に、二つ竝べてころがしてあつた。女の髪が見えてゐたよ。』

『可哀相ね。』

『男の方の身が詰つてゐたんだつてね。つかひ込みかなんかだつて……。』

果して書置があつた。それは長押の額の裏に入つてゐた。餘り手近に置いて、死なない前に發見されることを二人は恐れたらしかつた。連名で旅館の主人に宛てたのが一通、男から細君に宛てたのが一通、他に女の書いた方には、父親に宛てたものと、男の細君に宛てたものとがあつた。

細君はその書置を顏に押當てゝ泣いた。女から細君に宛てたものには、詫文句が細々と書いてあつた。金釘のやうな拙い字で、口で物を言ふやうに書いてあつた。――何うか許して下さいまし――さういふ言葉が彼方にも此方にもあつた。細君は自分一人取殘された悲哀に胸が一杯になつた。

棺が出來上つて、二つの死骸がそれに收められたのは、もう夕暮近い頃であつた。女の方は何うするかわからないが、『此方は兎に角引取らう。』と言ふので、人目に立たぬやうに、駐在所の裏から松原に面した奧の一間へと運んで來た。伯父は體一つでは足りない位な忙しさの間に、悲哀に暮れた姪の身の上をも心配しなければならなかつた。乳呑兒の心配もしてやらなければならなかつた。半里ほどある村役場や分署の方へも出かけて行つた。

海に面した方の室には、人が出たり入つたりした。主人も來れば番頭も來た。駐在所の巡査も爺もやつて來て何の彼のと話した。その中で伯父は死骸を東京に運んで行く方法などのことを心配した。女の方の親類がやつて來て、話が早くきまれば、一刻も早く東京に引上げたいと思つたが、それも思つたやうにはならなかつた。燒いて骨にして行くか、死體のまゝで持つて行くか、その判斷さへ容易につかなかつ

銀行の方の話を伯父はして、『だから、當人は死ぬ覺悟はして來たんです。ですから、私達もそれを心配して居たんです。八千圓つて言へば大金には相違ないが、なにも死ななくつたつて好い、女房子を殘して死ななくつても好い。親類もありますし、銀行の方だつて、示談にして呉れる譯に話がついたんですから……。本當に殘念なことをした！……さう言へば、女の家の方へは電報を打つて呉れましたね。』

『え、すぐ打ちました。』

『汽車の都合は何うでせう？』

『すぐならば、四時と六時に東京を立つ汽車が御座いますから、』

『それぢや今夜遲くも來ますな。』

伯父はかう言つて、『兎に角、棺は二つ大急ぎでつくつて貰はなくちやならない。』

『それはもう申附けてあります。』

二人のゐた室からは、いろ〳〵なものが出て來た。男の持つて來た本なども出た。何か書置がありさうなものだとは、初め旅館の主人やら番頭やらがさがした時にもさう言つたが、伯父もさう思つて彼方此方を殘るところなくさがして見た。男の財布には、金が五六圓まだ殘つてゐた。女の小さな鏡入れの中には三味線の糸などが入つてゐた。信玄袋の中にごた〴〵と入つてゐる鏡やら化粧道具やらは、死に赴いて行つた二人の急な決心を人々に思はせた。

『もう好い、一先づ歸つて、いろんなことをしなけりやならないから。』

無理に引離すやうにして、伯父は細君を引立てた。

細君は人目も何ももう忘れてゐた。涙は押へても押へても溢れて來た。伯父に手を取られた細君は、其儘、裏の方から旅籠屋の方へと伴れられて行つた。

『何も、死なねえでもな……。乳呑兒もあるんだとよ。罪だ〻罪だ……。』

『何んなだんべい。あの上さんの身になつたら……。』

『本當だよな、死んだものはよかんべが、生きてゐるものはなァ。』

こんな話聲が群集の中から起つた。

七

歸つて來てから、伯父は別室で、旅館の主人からいろ〳〵なことを聞いた。フム、フムと伯父は聲に力を入れて點頭いて見せた。主人は『い〻え、迷惑つてそれは致し方は御座いません。さういふお世話は、旅籠屋がするのが當り前で御座いますから……。唯、かういふことになつたのがいかにも殘念で御座います。さうと知つたら、もつと注意を致してをるんで御座いましたが、そんな樣子はすこしも御座い〻せんもんでしたから。來た間もなく二十圓お預りして、安心して了つたんで御座います。』

『いろ〳〵世話になりました。』

伯父はかう言つて挨拶した。

『何うかして助けて上げていと思つて、いろ〳〵やつて見たんでがんすよ。私が引上げた時には男衆の方はまだ體がいくらか溫かだつたから。』言ひかけて、ちよつと間を置いて、『藁火も焚いてあつためて上げ申したけどもな……。殘念なことでした。』

『ぢや、一緒ぢやないんですか、別々ですか。』

『えゝ別々です。男衆の死骸のあつたところと女の死骸のあつたところとは、丸で別でしたからなア……。何うしても、潮の加減ぢやあんめいと私は思ふだ。』

爺と伯父とこんな話をしてゐる間に、細君は二步三步進めたと思ふと、そのまゝ死骸の傍に行つて、菰をまくつて夫の死體を見た。急に堪らなくなつたといふやうに、其處に蹲踞んで兩手に顏を押當てた。束髮に結つた髮の後櫛のところが微かに戰へた。

細君は續いて其處に竝べて置いてあつた女の菰をまくつて、その死骸をぢつと見た。女は白い蠟のやうな顏をして、微かに眼を明いてゐた。髮は房々と亂れて白い肌にかゝつてゐた。小さな乳房なども細君の眼の前にあつた。細君は何とも言はれない悲哀に襲はれて、急に聲を立てゝ泣いた。

伯父はすぐその傍に行つた。

『あゝ、あゝ。』

溜息をついて、『世の中には、悲しい辛いことがあるものだなァ、お清。』かう言つて伯父は慨嘆した。

『何うしてあるんです？』

『そのまゝになつてる。』

『私も行つて見なくツちや――。』

留めても言ふことを訊かないし、夫の死狀を妻に知らせずに見せずに置くわけに行かないので、暫くしてから、伯父は細君を伴れて出かけた。

駐在所の前には、近所の人達が大勢集つて何か頻りに言つてゐた。筒袖を着た漁師の噂などもあつた。二人が入つて行くと、急に押默つて指さし合つて何かコソ〳〵話した。

菰がかけられたまゝ、土間に二つ並べて置かれてある死骸を前にした時には、細君の頭には暴風雨のやうにいろ〳〵なことが通つて行つた。細君は蒼白い顏を四邊に見せて默つて其處に立つてゐた。

巡査は二人とも其處に出て來てゐたが、一言二言言葉を交した後、その慘しい光景を見るに堪へないと言ふやうに、そのまゝ外に出て、其處に押寄せて入つて來やうとする大勢の人達を制してゐた。

丁度、其處に茶店の爺が入つて來た。巡査の一人は、『この爺さんが一番先に捜して呉れたんです。』と二人に說明した。

細君を番頭は見た。髪は束髪に卷いてあつた。

伯父は番頭と並んで女達よりも先に立つて歩いた。フムフムなど〻言つてゐた。伯父の顏には興奮した眞面目な色が上つてゐた。松原に入ちところで、伯父は細君に話した。『矢張さうですか。』かう言つた細君は下唇を堅く嚙みしめた。顏の筋肉が顫へたと思ふと、涙は頰を傳つて落ちた。

一行は先づ旅館へと行つた。昨日まで二人のゐた室には、信玄袋と風呂敷包と女の蝙蝠傘とが置いてあつた。細君はちよつと入つて見たが、堪らなくなつたと言ふやうに顏をハンケチで押へて、すぐ其處から出て來た。海に面した室に三人は默つて坐つた。若い娘の眼も赤くなつてゐた。

『見つともないから、落附いてゐてお呉れよ。』

伯父は賴むやうに繰返して言つた。

旅館の主人が來たり番頭が來たりした。茶を運んで來た女中は、氣の毒さうに細君の方をぬすむやうにして見た。それは先の日に三味線を持つて來た女中であつた。伯父は番頭の話しかける今朝の悲劇を、『まア、それはあとで聞く。』と言つて幾度となく制した。伯父は細君の興奮するのを恐れた。『お前、疲れたらうから、少し休んだら、何うだ？　別の室で。』などと言つた。

一緒に行くといふのを、『まア、己が見て來る。』かう言つて出かけて行つた伯父は、二十分ほどして歸つて來た。

來る時、乳香兒は是非置いて行きたいと細君は言つた。伯父もそれを勸めた。しかし、乳なしで世話をしてくれるやうな親類の女は周圍になかつた。仕方がなしに、伯父の娘が一緒に來ることゝなつた。

男が家出してから、男の勤めてゐた銀行でのつかひ込み事件がすつかり家の人々にも知れて來てゐた。七八千の金を男は三年の間につかひ果した。男の金つかひの荒いのを細君は前から薄々知つてゐて、その爲め何の位心配したか知れなかつた。細君はその藝者にも逢つてゐた。

藝者も男と時を同うして姿を躱したといふことがやがて知れたので、細君の心配は一通りでなかつた。飯も碌々咽喉に通らないといふほどの不安の中に一日は一日と經つて行つた。人を賴んで心當りを彼方此方とさがして貰つたが、行方はつひにわからなかつた。細君は乳香兒をかゝへて、朝から涙に袖を濡した。

つかひ込み事件の方も大變だが、それよりも何よりも夫の體の安全なのを祈つてゐた甲斐もなく、今朝電報を受取つた時には、細君の手はぶる〳〵顫へた。細君は慌てゝ伯父の家へ飛込んで行つた。ゴシユジンヘンシスグコイ――、電報にはそれだけしか書いてなかつた。『女も一緒ちやなかつたのでせうか。』かう言つて涙を拭きながら細君は訊いた。

汽車の中は殆ど夢中でやつて來たと言つて好かつた。停車場を出ると、娘は代つて乳香兒を抱いた。旅館の番頭は、其處に迎へに出てゐた。お召の袷に黑紋附の羽織を着た背の高い容色の好い二十五六の

六

二人の泊つてゐた旅館のすぐ近くに小さな村の駐在所があつた。そこは入口が廣い土間になつてゐて、その奥の板敷に、安物の卓が一つ置いてあつて、椅子が二脚並んでゐた。巡査が二人其處にゐた。死屍は擔架で運んで來たまゝ、その廣い土間の一隅に置いてあつた。矢張菰で蔽つたまゝになつてゐた。男は右に、女は左に並んで置かれてあつた。

旅館では今朝のそのことが知れると、すぐ男の宿所にあてゝ電報を打つた。噂はそれからそれへとひろがつて、二里ほど離れてゐる町の新聞記者などもやつて來た。東京の藝者だといふことがかなり世間の好奇心を惹いたらしかつた。東京の男の宅から返事の電報が來たのは、死屍を駐在所に持つて來て三十分ほど經つてからで、そのため正規の手續はせずに、そのまゝ引取人の來るのを待つことにした。

駐在所には旅籠屋の番頭だの茶屋の爺だの檢視の人達などが出たり入つたりしてゐた。裏の窓の硝子戸には、午後の日影が明るくさし透つてゐた。

東京を十時半に發した汽車は、午後の三時近くになつて漸くこの半島の高原の停車場に着いた。そこには、男の妻とその妻の伯父と娘とが乘込んで來てゐた。細君は今年の春生れた乳吞兒を抱へてゐた。伯父は茶色の中折をかぶつて紋附の羽織の上に細かい縞のインバネスをはおつてゐた。

『いくらもそこらに轉つてゐるァ。』

『石がか――。』

こんなことを言つて石切場の方へと下りて行つた。

擔架はやがて死屍を運んで來た。燈臺の方の死屍が先づ其處に來た。上には菰がすつかりかけてあつて、手も足も顔も見えないやうになつてゐた。人足は一刻も早くかういふやうな任務を果して了ひたいやうに、ぐんぐん燈臺の路を坂の下の方へと下りて行つた。女の方の死屍は、男の死屍が丁度石切場の外れあたりに行つた時分、折れ曲つた崖の路を此方へ出て來て、茶店の前に來て、ちよつと休んだが、其處に出てゐた上さん達は『まァ、可哀相に……。』死ぬほど思つた仲なら、何んなことをしたつて一緒になれないことはなかんべにな。』などと言つてその後を見送つた。菰の間からは、黒い髪が少しばかり見えてゐた。

一二時間の間に、種々な噂がさまざまな人の口に上つてゐたが、それもやがては收つて、燈臺への路には、今まで何のこともなかつたやうに靜かに秋の日影がさしてゐた。石切場の石を鑿る音がトンカントンカン聞えてゐた。

波は依然として半島の周圍を取卷いてゐた。

兎に角、駐在所まで死體を引揚げなければならなかつた。其處から擔架を持つて來る間、巡査は爺の茶店の處に腰をかけて、其方へ下りて行かうとする群集を制止してゐた。もうかれ是九時近くなつてゐた。燈臺の方に見物に來る遊覽客などもあつた。中には青年男女なども交つてゐた。

『え、情死？』

『女は何ういふ人？　藝者？』

などと言つて通つた。

まだ其處に死屍が置いてあるといふので、ある人達は崖から下を覗いて行つたりした。ヂッグザッグした岩石の間には路がついてゐて、其處に集つてゐる人達が其處から小さくなつて見えてゐた。『よく、こんなとこを、夜、女の身で下りて行つたもんだね。』

『死ぬ氣なら、何んな處でも行けるよ。』

『あ、そら、見えるだらう、かけてある菰が……。そら、あの漁師の傍んところに。』中にはこんなことを言ふものもあつた。

石切場の小屋のあばずれ女達は、

『おらも情死でもするかな。』

『誰とするだ。相手があんめい。』

『男が燈臺の下で。』

『まァ、厭なこつた。』

一方では燈臺の方へ知らせに行くと共に、一方では人がまた大勢崖の下の方へと行つた。若者のあとからは犬がついて行つた。

さういふ報告を受けて、爺が巡査と一緒に其處へ下りて行つた時にはもう大勢人が集つて行つてゐた。岩と岩との陰に、女の死體が漂つて、黑い髮が藻か何ぞのやうに亂れてゐた。白い脛が半分見えてゐた。爺ともう一人の漁師が裸になつて水の中に入つて行つた。巡査は集る群集を制した。『まだ、若い、綺麗な女だ。』こんなことを言ふ女達もあつた。

死屍を引揚げて、見えないやうに菰をかけたが、爺はもう人工呼吸をかけやうともしなかつた。爺は疲れてゐた。『何も、若い身でなァ、死なねえでも好かんべいにな。』などと言つた。

爺の觀察に由ると、一緒に死んだものが潮の加減で流されて來たとは何うしても思はれなかつた。『男が先に死んだだんべ。女はおつかなくなつて此處まで逃げて來たんだんべ。そして男が死んだのを考へて、此處から飛び込んだんべ。』かう爺は言つた。『おら、いやだ、いやだ、人助けも好いが、かういふ若い者達の死屍の片附は、おらァ、もう厭だ。』爺はこんなことを言つて、岩陰にぬいで置いた着物を着た。

『一緒に死んだんなら、流されて沖へ出るわけはねえ……。女は逃げたか知れねえよ。』こんなことを其處に集つた人達は噂してゐた。岩陰では爺は藁火を焚いてゐた。

それから尠くとも一時間位は經つた。『これは駄目だ、とても助からねえ。』爺は殘念さうに言つてゐた。駐在所からは早速巡査がやつて來て、劍を手で押へながら、燈臺の裏の路を胎内くゞりの方へと下りて行つた。

丁度その時分、茶店のすぐ向うになつてゐる崖を傳つて、朝早くから岩かげに貝を拾ひに行つてゐた漁師の嬶は、眞靑になつて慌てゝ飛んで來た。

『そこに女が死んでる。』

『え、女が……何處に?』

茶店の上さんは訊いた。

『其處に、……其下んとこに……、俺は吃驚したにも何にも……。ちつとも知らねえから岩につかまつて貝をさがしてゐると、そこに白い者が見えるでねえか。吃驚したにも何にも……。俺ら飛上る位たつた。』

『ぢや、矢張、死んだんだ。情死だァ。』

『まだ他にもあんかね。』

るりと廻つて、念の爲めに、その向ふをのぞいて見た爺は、『ゐた、ゐた、其處にゐた。』と叫んだ。男は俯伏になつて波に漂はされてゐた。着物は半分まくれて、股が白く見えてゐた。

急いで岩角に取ついて、帶をつかんで引上げやうとしたが、容易に上がらない。『おい、俺が入るから、貴樣そこで帶を持つてろ。』かう隣の息子に聲をかけて、爺は漸くそれを岩と岩との間の砂地に引揚げた。

『まだ、溫けいな、三四時間位しかたゝねえな。』爺はかう言つたが、其處等にもう一つ相手の死體が漂つてゐやしないかと思つて、其處此處と四邊を眴した。しかし何にもそれらしいものは見當らなかつた。

遠くの岩の方へ傳つて行つた息子に爺は聲をかけた。

『ゐねえか？』

『ゐえね。』

爺は馴れてゐるので、其間にも、一生懸命に死體に人工呼吸を施してゐた。體がまだいくらかは溫かであつた。彼方此方を搜し廻つた隣の息子は、やがて手を空うして其處に歸つて來たが、

『ゐねえか、さうか。一緒に死んだにちげえねえと思ふがな……。女はおつかなくなつて逃げたかな。』

爺はかう言つて、『まァ、仕方がねえ、貴樣、藥を持つて來、助かるかもしれねえ。』で、隣の息子は一散に駈け上つて、それを茶店から水明樓の方へと知らせた。

噂は口から口へと傳つて行つた。

の前にちよつと立寄つた男は『さうか爺さん行つたか。うむ……さうか……矢張爺さんが見附けたのか、……さうか……まだ體が暖かい？』かう言つたが『情死だつて言ふぢやねえか。』

『さうだんべつて言ふんだが、昨日來て此處にやすんだ衆だんべつて思ふんだが、男の死體きりまだ上んねさうだよ、昨夜、遲くなァ、水明樓で心配して來たゞで、命助けてやんべいと思つて彼方此方さがしたんだが、夜ぢや見當がつかねえでな……。今朝やつと見附けたんだ。』

『胎内くゞりか。』

『さうだつて言ふこつた。』

男は走つて行つた。

昨夜十二時過ぎから、爺は殆ど眠らなかつた。水明樓の番頭と二人で彼方此方と隈なくさがした。しかし何處にもその姿は見えなかつた。『殊に由ると、急に思ひ立つて、銚子の町へでも出かけて行つたのかも知れない。しかしそれにしちや何とかことわつて行きさうなもんだ。』二人はこんなことを言つて、燈臺の路を歩いた。『兎に角明日になんねえけりやわかんねえ。』で、夜の二時頃に水明樓の番頭は歸つて行つた。爺も家に歸つて寢たが、何うしても氣になつて眠られない。人の命を助けてやることを唯一の得意とも誇りともしてゐる爺は、今、死にかけてゐやしないかと思ふとじつとして居られない。夜が明けると、隣の茶屋の息子を呼び起して、急いで燈臺の後から胎内くゞりの方へと行つた。岩の方からぐ

つて來た。

『何だ、何事だ。』

今朝漁に出やうとした漁師はかう言つて訊いた。

『又やつつけたとよ。』

『また、やつつけた。男か女か？』

『男だとよ。』

『野郎か、よく命の惜しくねえ奴があるなァ。』

『助からねえか。』

『何うだかまだ知れねえ。』

人達は走つて行つた。

『何處のお客だ。』

『何でも下の客だつてよ。』

『水明樓のか。』

『さういふ話だ。』

茶店の前から燈臺の門の方へと人達は驅けて行つた。その旅籠屋の番頭もその中に雜つてゐた。茶店

『大きにお世話だ。』

男だか女だか解らないやうな聲が小屋の中から聞えた。喧嘩かと思へば、さうでもないやうであつた。續いて笑ふ聲がした。闇の中にそこだけ明るく見えてゐる障子には、男と女の影が映つた。背の高い男はやがて其處から出て來たが、小便をすると、そのまゝ内に入つて行つた。

燈臺に行く路は、全く闇に包まれてゐた。その明るい小屋の障子の他には、灯の影は何處にも見えなかつた。爺の茶店は、日が暮れると戸を閉めて早くから寢た。爺は女の兒を抱いて寢てゐた。

波の音は凄じくこの半島の絶角の周圍を取巻いてゐた。風もいくらかはあつた。かういふ暗い夜に、沖を行く汽船はあるだらうか。一分每に廻轉する燈臺の光を遙かに認めて危く岸に寄らうとした針路を太洋に向けて走つて行く汽船はあるであらうか。燈臺の光は、丁度人間に臨んだ神の大きな力でもあるかのやうに――またはおそろしい怪物が闇の夜を己が世界と振舞つて暴れて光つてゐるやうに、太い幅廣い光線ををり〳〵あたりに漲らせて行つた。

高原の上の停車場には、丁度今最終の列車が到着してゐた。

五

燈臺へ行く路は、その朝いつもに似合はない活動を見せてゐた。人達は大勢海岸の方から急いで走つ

もう一度燈臺のところまで戻つて來た女は、男の肩に凭らなければ歩けないほど疲れてゐた。顏の色は蒼白く、唇は土色になつて震へてゐた。岩の陰で長い間休んでゐた時には、女の頬に涙が流れてゐた。

『早く行かうぢやないか。』

『え丶……。』

女は容易に立上らうともしなかつた。女はハンケチで顏を押へてゐた。

『早く行かう。』

男はまた促した。

男の顏も蒼白かつた。二人は燈臺の裏の處まで上つて來て、其處でまた長い間休んでゐた。燈臺に住んで居る人達は、岩に腰をかけていつまでも海の方を見てゐる二人を見た。

四

『馬鹿女。』

『何方が馬鹿女だ……てめえの尻早は誰でも知つてるぢやねえか……頭の上の蠅を追へ。』

『何とでも言ひやがれ。』

『言はなくつて何うする。手前は人の飯を貰つて食ひやがつた、乞食女。』

此處でも、上さんは胎内くゞりの話を二人にしてきかせた。『昔は行つて見る人もなかつたんだけど…
…家の爺がな、名所にしちやつたんでがんすよ。今ぢや燈臺に來て、そこまで下りて見ねえ人はねえ位だ
……、なアに、行はねえだよ。行つて御覽なんし。』

やがて其處を出かけた二人は、燈臺の前に行つて、暫く立ち留つて、鐵索の上に飄つた天氣豫報の旗などを見てゐた。燈臺の上の硝子窓には、朝日がキラキラと映つて美しく五色に輝いてゐた。

二人は何も言はなかつた。しかし、海にある何物にか惹かれるやうに、二人はいつか燈臺の石塀について裏の方へと廻つて行つてゐた。草には朝露がしとどに置いて、拾ふやうにして歩いてゐる女の白足袋も青く汚れた。燈臺の裏には其處に住んでゐる人達の棄てた塵埃の山があつて、其處には汚い溝などが流れ出してゐた。二人はそれを越えて行つた。

やがて燈臺を後にして立つた二人の前には、廣い海が一面に展げられた。それは穩かな朝で、日に照つた縮緬の皺のやうな波の上には、鰯舟が黑い胡麻つぶのやうになつて何艘となく見えてゐた。岸の黑い岩には波が押寄せて來ては碎けた。

胎内くゞりは、そこからまだ二三町下に下りたところにあつた。丁度、岩の一部が波の爲めに削られて出來たやうな洞窟で、前には深い碧い海が、鰐か何ぞの口のやうに物凄く開けてゐた。二人は其處まで下りて行つて見た。

いで歩いて來た。

二人はそのざゝるの中を覗いて見たりした。『食へやすとも……これ煮て食ふと旨いだ。』などとその嬶は笑ひながら說明した。

爺の茶店では、上さんが頻りに暖簾などをかけてゐたが、二人が疲れたやうにして入つて行くと、赤い毛布を慌てゝ持つて來て、前に出してある縁臺の上に敷いた。『好いお天氣で御座んすなァ。』などと上さんは愛想を言つてから茶を運んで來た。

爺が一緒に伴れて行かうとするのを今朝は何うしても厭だと言つてきかなかつた女の兒は、其處に立つて、二人の茶を飮むのを見てゐた。茶色の犬は、もう一つの方の縁臺の下に寢てゐたが、のつそり起上つて、二人の傍に來て鼻を押附けた。

貝殼だの繪葉書だのが其處に一面に竝んでゐて、傍には煙草だのサイダーの壜だのが置かれてあつた。赤い毛絲の小さい網の中には種々な形をした小さな貝が澤山に入つてゐた。『お土產に貝でもいかゞです。』などと上さんは二人に勸めた。

『サイダーでも飮むかね？』

『澤山。』

女は頭を掉つて見せた。

やつて來るのを待つてゐた。男は鼠色の中折を冠つて、セルの單衣に新しい縮緬の帶をまきつけてゐた。
二人の姿は、靜かに坂を登つて、段々石切場の方へと近づいて行つた。やがて大きな谷は二人の前に開けた。工事小屋の傍で、男や女が石を切つたり運んだりしてゐるのが小さく蟻か何ぞのやうに見えた。工夫の振り上げる槌につれて、柔かい石の崩れて來るのなども見えた。

二人は靜かに歩いた。をり〳〵めづらしさうに覗くやうにして谷の方を見た。兩方の海が見え出した頃には、女は男から一二間後れ勝ちになつてゐたが、男はそれを待つてやつて、左の海の方を指さして見せたりした。波は凄じく岩に碎けてゐた。

通りすがつて行くあらくれ女の群は、

『好い男だ、役者だんべいか。』

こんなことを無遠慮に言つて幾度も振返つて行つた。

丁度、水汲みに出かけて來た爺は、二人と摩れちがひながら、

『お前さん達、燈臺見物かね。なら、燈臺の裏の方に廻つて見さつせい。そこには、胎内くゞりつて言ふのがあらァ、東京の人は皆な誰でも行つて見るだ……。なァに、少し下りさへすりや好いだ。わけはねえ。』

聞きもしないのに、こんなことを教へて向うに行つた。その向うからは、漁師の唄が大きなざるをかつ

女中は唯恍惚としてそれに聞き惚れた。

やがて女は三味線を下に置いて、

『駄目ね、矢張……。』

『結構です。お上手ですこと。』

『矢張、自分の持ちつけた三味線でないと駄目だわねえ。』

『それはさうだね。』

かう言つた男の言葉につれて、女は不意に今までの興がさめたと言ふやうに、三味線を傍に押しやつて了つた。女の顏にはいつものさびしさがまた上つて來てゐた。『もう一つ何か聞かせて頂けないでせうか。』かう女中は賴んで見たが、女はそれに應じやうともしなかつた。

三味線はそれから三日も四日も床の間に置いたまゝになつてゐた。

二人が初めて燈臺の方へと出かけて行つたのは、來てから七日目の晴れた朝であつた。昨日の雨は拭つたやうに晴れて、イタリアンブルウとも言はるべき濃い深い碧の空には、白い高い燈臺がくつきりと捺したやうに浮び出してゐた。

『行つて見ようぢやないか。』かう男に誘はれて女は初め草履ばきで出かけたが、少し行つてからまた引返して、今度はちやんと駒下駄を穿いて出て來た。男は坂の半ば迄登りかけた所で、女の急いで此方へ

三

ある夜女は言つた。

『姐さん、三味線がありますか。』

『御座いますけれども……碌なのは御座いませんでせうよ。』女中はかう言つて立つて行つたが、やがて三味線を其處に持つて來た。

それは家の女中達の彈く稽古三味線で、天神などがぐら〳〵してゐた。『ひどい三味線ね。』かう言つて女は絲を直したり紙を挿んだりしてゐたが、暫くすると其處から靜かな爪彈の音が洩れて聞えて來た。常に似ずめづらしく女ははしやいで、常盤津だの淸元だのをそれからそれへとつゞけて彈いた。女中が行つて見ると、男も機嫌のよささうな顏をしてゐた。

女中が所望すると、

『では何を彈きませうね。』

女はかう言つて考へて、『……矢張、常盤津が好いわね。戻橋か何んか。』

やがてあんなボコ〳〵三味線から、こんな好い音〆が出るかと思はれるやうな音が流るゝやうに四邊に漂つて聞えた。むつかしい込んだ相の手が巧に鳴つて、一種言ふに言はれない哀愁が人の腸を斷つた。

『え、行つて見ませう。』

かうは言ふものゝ、二人は遂に出かけようともしなかつた。ある時、女中の一人が松原の中に水を汲みに行つてゐると、ふと其處に草履ばきの姿を見せた女は、暫く立つて見てゐたが、

『綺麗な水ね。』

かう言つて、一杯柄杓に口をつけて飲んで『お、冷めたい。好い水だこと。』

來る時に綺麗に結つてあつた形の好い丸髷は、三日目にはもうこはれて、裏にゐる髪結が呼ばれて行つたが、『髪のむづかしいお客さまね。え、え、藝者ですとも……。でなくつちや、あんなに髪を氣にするものはありやしませんよ。鬢の出具合が氣に入らないで、私、困り抜いた。』などと言つてゐた。女は今度は銀杏返しに結つた。

その旅館には客は澤山泊つてゐなかつた。二人の他には一組か二組位しかゐなかつた。それに引かへて、大きな旅館には、まだ流石に客がゐて、天氣の好い日には、燈臺の方へ行く遊覽者がぞろ〳〵と通つて行つた。女は海に向いた室の縁側に立つて默つてそれを見てゐた。

雨の日はさびしく暮れた。鼠色の雲は低く地平線の上に漂つて、廣い海洋には一帆の影も見えなかつた。旅館の傍を山から流れ落ちる溪川の水は、黄く濁つて瀧津瀬のやうに海に注ぎ込んでゐた。

『女の方が病氣かもしれないよ。』

『さうかも知れないね。』

『しかし肺病とも違ふやうだけれど……。』

『さうね、咳嗽なんかしないね。』

こんな噂を女中達はした。三日目の朝に、番頭がわざ／＼出かけて行つて訊くと、『二週間ゐるたい積だ。』かう男は言つて、財布から金を二十圓出してわたした。その他に一圓纏頭を與れたので、番頭はへいへい頭を下げて戻つて行つた。

來た翌日、二人はちよつと海岸の方へ出て行つたが、三十分も經たない中に歸つて來た。それからは滅多に外に出ようともしなかつた。男は何うかすると元氣な調子を見せて、面白い話をして、女中を笑はせることなどもあつたが、女は大抵默つて、さびしさうな顔をして唯笑つてゐた。

餘りさびしさうにしてゐるので、『ちと、お出かけになつてはいかゞです。これから裏の方へまゐりますと、漁師の村がありまして、漁がある時にはそれは賑やかで御座いますよ。それに、犬若ツて言ふところは、面白い岩なぞ澤山に御座いますから。』

かう女中が言ふと、

『行つて見やうかねえ。』

『さうね。』

襖を立てゝ見て、『此方なら、さう波の音が高くはありませんね。』

『こつちにしようか。』

『え。』

で、二人は其日からその裏の六疊へと移つた。蝙蝠傘に信玄袋に、インバネスにメリンスの風呂敷包、女は信玄袋の中から紙だの化粧道具だのを出した。

その一間には松原を透して微かに夕日がさし込んで來た。根の上つた松の下にはまだ青い草がところどころに生えて、向うの路を廻つて行く漁師の唄などが靜かに聞えた。夜は靜かに月の光かさしてゐた。

『いかゞで御座んした？　波の音は？』

『此處なら餘程好い。』

『さやうで御座いますか、此方は波が高う御座いますもんですから……。何うかすると、喧しいなんて仰有る方が御座いましして……。』

女中はかう言つて、朝飯の膳を下げて行つた。

小さな庭には、秋草がまだ殘つて、桔梗があはれ氣に咲いてゐた。庭を掃除に來る奴僕の男は、女が机の上に小さな鏡を立てゝ、頻りに化粧をしてゐるのを見た。

此處に來る前に、男は車夫に訊いた。『あそこで靜かな家は何處だえ？』

『何處でも今は靜かです。もう避暑のお客は皆な歸つて了ひましたから。』

かう車夫は言つて、別の大きな旅館の名を教へた。しかし男は『もつと靜かなところ。』を望んだ。『ぢや、あそこなら、ごく靜かです。』かう言つて、車夫は二人を此處に伴れて來た。

二人はわざと汽車には乘らずに、二里ほどある町から車に乘つてやつて來たのであつた。

女はさういふ社會の女に似合はず、イヤに沈んで、口も碌に利かうともしなかつた。『もとはたしかにさうですけれど、今は藝者をしてるんぢやないかも知れませんよ。』そこに給仕に出た女中はこんなことを言つた。

あくる朝、男は、

『何うも昨夜は波の音が高くつて眠られなかつた。姐さん、もつと靜かな室はないでせうか。』

『では此方になすつては？』

女中はかう言つて、男を裏の松原に面した六疊へと伴れて行つた。

『さア、少し陰氣だけども、此方の方が好いやうだね。ちよつと待つてお呉れ。』

かう言つて女を呼んで

『何うだえ？』

旅館の中では、一番新しく出來た家で、廊下を眞中に、海に面した室と裏の松原に面した室とが五間ほどあるばかりで、いつも客もさう澤山にやつて來なかつた。爺はそこの主人と懇意なので、そこの屋號のついた暖簾を自分の茶店にかけたりして、客が聞くと、いつでも其處に案内してやるであつたが、しかも他の二軒――ことに大きな一軒の繁昌には及ぶべくも見えなかつた。裏庭はいつも靜かで、秋は秋海棠などがさびしく咲いてゐた。

避暑客の大抵歸つて了つた十月の中頃であつた。其處にある夜二人の客が來て泊つた。一人は銀行員らしい扮裝て、髮を綺麗にわけた色の白い二十二三の男であつた。一人は誰が見てもすぐそれとわかる綺麗な女で、來た時には大きな形の好い丸髷に結つてゐた。純金の指環を二つも三つもはめてゐた。

宿帳には同ゆき二十一歲と男が書いた。

『少し逗留して行きたいんだが、靜かな室はないだらうか。』

かう言ふので、番頭は氣をきかせて海に面した一番外れの八疊へと通した。茶代は普通よりは多かつた。女中が板を持つて行くと、『お前、何を食べる？　食べたいものを仰有い。』男はやさしい調子で言つて靜かに笑つて見せた。

『私は何でも結構……。』

女はさびしさうに言つた。

原の中に入つて行つても、爺は容易にその話をやめやうとはしなかつた。
松原の松の海岸に靡き下つた處に、綺麗な水が溢るゝばかりに湧き出してゐた。爺は其處に行くと、天秤から手桶を外して、それを一つづつその中に入れた。松の影が靜かに水の上に落ちてゐた。
海岸にある二三軒の旅館でも、飲料水だけは皆な此處まで汲みに來た。赤い襷をかけた女中達に爺はよく聲をかけた。
『何うだね、此頃は客はあるかね？』
爺は昔のことなどを考へてゐた。此處には三十年前には、一軒も家がなかつた。波ばかり高く颺つてゐた。それが、まア、何といふ變遷だらう。大きな旅館が出來て、色の白い女中が來て、夏はつばの大きな麥稈帽子などを冠つた女が大勢海の中に浸つてゐたりした。毎日都の人達がぞろ／＼燈臺の方へ出かけて行つた。そればかりではなかつた、松原の向うには停車場などが出來て、綺麗な夫婦づれが幾組ともなく此方へとやつて來た。

二

手桶をかついで坂を上つて行く爺の姿はやがて燈臺へ行く路の上に見えてゐた。
爺が毎日水汲みに行くその清水のところから、海に臨んだ一軒の旅館の裏座敷が見えてゐた。三軒の

もう何人助けてやつたかしれやしねえ。御維新の時はまだ十六だつたが、その時そこで沈沒した官軍の汽船の人達を助けたのが手始めでな。もう百人やそこら助けてやつてゐるだよ。お上からもお褒美を貰つてゐるんだからな。燈臺の鐵爺ッて言へば、誰も知らねえものはねえ。此の間も新聞の先生が來て、俺の履歴を十日もつづけて書いた。』などと言つてよく自慢した。

爺は毎日朝早く天秤棒で手桶をかついで、石切場の谷に添つた長い路を松原の方へと水汲みに出かけて行つた。何んな日にも――何んなに暴風雨の日にもそこにこの爺の姿を見ないことはなかつた。『なアに、この近所でも水は出るがな、石切場の奴達は皆なそれをつかつてゐるがな、水ばかりは溜水ぢや氣持がわるいでな、それで、俺アかうやつて毎日汲みに行くんでさ。なアに、馴れてるでわけはねえ。』爺はかう言つて、まだ七歳位の女の兒を伴れて、靜かに松原の方へと下りて行つた。

『孫さんかね？』

何うかするとかう言つてその女の兒の頭を撫でゝ、持つてゐた菓子を呉れて行く都の女達などもあつた。すると、爺はすぐそれを相手にいつも長い長い自慢話を始めた。『全く金づくぢや出來ねえ仕事だよ。それでもな、此間はな、女ッ子だッけが、東京の柳原とか言ふところにゐたもんだが、危いところを助けてやつてな、意見してやつたが、誰も引取人がねえ。仕方がねえので、俺ア、旅費をつかつて、伊香保まで送つてやつただよ。でもな、向うでも喜んでな、御馳走をして呉れた上に金を五兩呉れやした。』爺は松

『えらく、深く掘つたもんだね。五六年來ない中に、大きな谷になつちやつた。……さうかな。錦石なんかに東京で使ふやつかな。ごく軟かな石なんだな。』東京から來た人達は、いつもこんなことを言つて、路の兩側に深くひろげられた谷を見下しながら、燈臺の方へと靜かに歩いて行つた。

旅籠屋のある海岸から上つて來る路は、始めは砂濱で、草履でも足の汚れないやうなところであるが、小さな坂を上ると、葉の青い草や小松などが生えてゐて、松原の中から出て來た赤ちやけた路がすつとその石切場の方へと曲つて行つてゐた。尖つた石が到る處に出てゐた。

右にも左にも海が見えて、波の打寄せるさまは繪か何ぞのやうに思はれた。

誰でも其處に來ると足を留めないものはない位であつた。『好いなア、何うだ。向うは？』指された方には、彎曲した磯濱に白い波が颺つて、松の靡いたのが列をなして遠く向うの鼻まで並んでゐた。

白色の高い燈臺はすぐその前に聳えてゐた。光達十海里、一分毎に廻轉する光は、遠洋をわたつて來た船客に、初めて故郷のなつかしさを與へるといふので名高いものであるが、そこまで行くには、遊覽者は、猶ほ石切場の谷の縁のやうな處を通つて、崖の下に横つた怒濤を見下して、赤い毛布のある緣臺の出てゐる二軒の茶屋の前を通らなければならなかつた。一軒の方の茶店には、『鮑いつでもあります。』などと書いた札が出てゐた。

その茶店には、六十近い岩乘な爺がゐた。『俺はかう見えても、人助けばかりしてゐる。この年までに、

燈臺へ行く道

一

石切場の崖の上の小屋には、朝日が朗らかにさして、そこから前に展げられた海が一目に見渡された。岸の處々には、碁石のやうに散らばつた黑い岩に波が碎けて、向うに岩石の岬が象の鼻のやうに長く太洋に向つて突出してゐた。

石を切る下に使はれてゐる女達は、狹い小屋の中に男の勞働者と一緒に集つて、何か頻りに饒舌つて笑つてゐたが、時間が來るとやがて崖の傍の細い路を通つて、石切場の方へと下りて行つた。それはよくもこんなに切り擴げたと思はれるほど深い大きな谷で、崖が到るところ鋸の齒のやうになつてゐて、もう少し切りひろげられると、岬端の燈臺へ行く路もそのまゝ崩れて了ふかと思はれるばかりであつた。谷の中には、仕事小屋、水を汲み上げる桔槹、鐵色の錆びたたまり水、石を運ぶためのトロコなどがごたごたと見えてゐて、燈臺へ行く路からは、丁度一目にそれを見下して行くやうになつてゐた。

通つて行く幼い生徒達か、いつもの通り向うの家の間や田甫道や垣の間の道からぞろぞろと出て來た。やがて唱歌の聲が聞えて來た。町の郊外の製木所のエンジンの音も聞え出した。

かなり日が長けてから、墓番の正爺は、いつもの仕事着を着て、鎌を持つて、墓場の方へと入つて行つた。昨日仕殘した處に來て鎌と箒とを置いて、墓石に腰をかけて、先づ一服といふ形で、旨さうに烟草を鼻から出した。

其處に寺の上さんが入つて來た。

『昨夜はえらい降りでしたな。』

『よくこんな好いお天氣になつたね。』上さんはかう言つたが、『向うの方をもう少し綺麗に取つてお呉れな。今、よく取つておかないと、あとで困るから。』

昨夜の葬式の話は正爺の口にも上さんの口にも上らなかつた。上さんはすぐ其處から出て行つた。爺は草をむしり始めた。

近道の停車場の灯の方へと出て行つてゐた。

七

翌朝は眩いほど好く晴れてゐた。

やはらかな墓地の土には、跣足の痕だの足駄の痕だのが縱横についてゐて、落花がその上に一面に散つてゐた。一夜の風雨の中に闌な春は暮れて了つてゐた。

泥濘をこね廻した跡には、繩だの紙屑だのが散つて、まだ完全に出來てゐない土饅頭は、人を埋めたといふよりも、むしろそつと死骸を掘つて行つたあとといふやうな混雜と不規律とを示して居た。墓地は晴やかな朝日の光に照されてゐた。心持好ささうに鶯は長く囀つた。

一番の汽車はいつもの通り麥の畑の緣の上に黃ろく白い煤烟を漲らせて靜かに野を掠めて通つて行つた。榛の並木の梢からは、雫がバラバラと珠のやうになつて落ちた。

何も變つたものはなかつた。寺の上さんは白い手拭をかぶつて、手桶を下げて、井戸端に來て水を汲んだ。釣瓶からサッと手桶にあけた水には、朝日が美しくかゞやきわたつた。主僧は手拭をへこ帶に挾んで、心持好ささうに鹽で齒を磨きながら其處等をぶら〳〵歩いた。

小學校の屋根の向うにある天氣像報の青い旗は西北の風の方向を示してゐた。暫くすると、小學校に

『可哀相だな。』東京の客はいつかその不仕合せの女のことを考へてゐた。

墓地では、送つて來た人達が丸くその周圍を取卷いてゐる中で、粂と龍とが荒繩のかゝつたまゝの棺をその儘穴の中に靜かに下した。黑く光つてゐる穴の中の水のそれにつれて動いてゐるのが、かざした提灯の光に微かに見えた。

酌婦が覗くやうにすると、後に立つてゐた男が、『そんなに入りたけりや一緒に入れてやらうか。』と言つて、後から輕く押つける眞似をした。『いやあよ。田村さん、吃驚した。』けたたましい聲を立てゝ酌婦は後の方に身を退いた。笑ひ聲が一しきり聞えた。

『水が大變出てるね。』

『此處はこれだからイヤだね。』

『その代りすぐ土になつて了ふね。』

『それはさうだけれど……。』

こんな話聲が續いて風雨の中に聞えた。粂は棺の浮んで來ないやうに半分足で踏まへて、一方から土をかけた。龍も傍から鋤を動かした。時の間に墓は築かれて了つた。

やがて人々は散じた。粂と龍とは門前の自分の宅に寢に行つた。悔みに來た人は銘々の町の宅の方へと歸つて行つた。川本の主人の寺に挨拶に行つてゐる間に、酌婦と田村とは、手を握つたり何かして、

主僧が本堂から歸つて來て、僧衣をぬいで座敷に來ると、丁度其時、少し目を覺しかけた東京の客は、

『これからかい？』

『いや、もう濟んだ。』

『すんだ、早いなア。』かう言つたが、今度は、すつかり眼を覺して起きかゝつて、『馬鹿に早いね。餘程寢たかね、僕は――。』

『二時間位寢たらう。』

『もう何時だえ？　一體？』

『十時四十分位だらう。』

『寢た、寢た。』長い伸をして、『酒を飲んでゐて苦しかつたらう、お經を讀むのが――。』

『なアに、すつかりさめちやつたから。』

かう言つて、主僧は全く醒めた蒼白い顏を見せて、『もう一杯飲まうか。』

『いや、もう澤山。』

『ぢや、茶でも淹れやうか。』

うん、結構だな。』主僧の顏を見て、『もう葬つたかね。』

『もうすんだらうよ。』

廻道をして山門の方から入つて來た。一度は傘が風に吹き取られさうになつて女は聲を立てた。『だから、ついて來ない方が好いと言つたんだのに……。』かう主人はたしなめるやうに言つた。かついで來た男が棺を棺臺の上に載せると、主僧は蠟燭の灯を彼方此方に配つて、鉦を一つ鳴して、讀經を始めた。

靜かな悲しい氣分が何處となく主僧の讀經の聲の中にこもつてゐた。細く立つた聲は人々の心に染み渡つて聞えた。

ほの暗い光線の中に開かれたこの一場の光景は、不思議な心を人々に起させるに十分であつた。讀經後の焼香に人々が靜かに立つて動いて行くさまは、この世のものとは思はれなかつた。蠟燭の灯に近い主僧の顏は古いすゝけた昔の繪の中に鮮かに殘つてゐる色彩のやうに見えた。

酌婦は長い間手を合せて祈念した。

その時分には、門前の長屋の墓番の老夫婦は、もうとうに床の中に入つて寢てゐた。爺は輕い鼾を立てて好い心持さうにして眠つてゐた。ひとりで長く眼覺めてゐた老婆は、ボタボタ疊の上に落ちて來る雨洩りを氣にして、豆ランプを持つて立つて內の中を彼方此方と見て歩いた。丁度其時、寺では鉦の音がしてゐた。『あの川本のお葬式と見える。』老婆はこんなことを思ひながら、再び床の中に入つた。雨はまだ矢張トタン屋根の上に凄じい音を立てゝ降つてゐた。

『遲いな』

かう主僧はつぶやくやうに言つたが、間もなく人聲が庫裡の入口のところでした。棺が來たのであつた。

主僧は不斷着の上に僧衣をはおつて、上に金襴の袈裟をかけた。いつもならば、足袋をはきかへるのだが、今日は汚れた白足袋のままで、本堂に通ずる長い廊下を靜かに手燭を持つて歩いて行つた。廊下には庭の落花が雨にぬれて一面に白くついてゐた。

本堂にはさつき上さんがつけて行つた蠟燭がもう半分過ぎともつてゐた。寺の紋のついた提灯と竹筒臺の置ランプとが其處に置いてあつたが、それでも廣い本堂はまだ薄暗かつた。隙間からへつてゐる風に本尊の前の蠟燭の灯はチラチラと動いた。

賽錢箱の置いてある處の雨戶が二枚明けてあつて、其處に、かついで來た棺が白く見えてゐた。荒繩の太いのが眼に立つた。

それでも川本の主人と、其處に來て酒を飮んでゐた親類の爺と、二三人の男とがついて來てゐた。一番あとから一人の方の色の白い緣側の柱の處に立つて泣いてゐた酌婦が靜かに上つて來た。

此處まで來る間に、酌婦は路のわるいのに躓いて、二度も三度も轉ばうとした。『いくら商賣だッて、さう轉ばないたッてよかんべ。』などと男達は笑ひながら、凭りかゝる手を把つたりしてやつた。一行は

「三四尺位あるかな。」
「その位あんべ。」
「よかんべ、よかんべ、この降りぢやとても落附いて掘つてなんかゐられやしねえ。ぐづぐづ言ふ方が無理だ。」

龍も穴から上つて來た。粂はランタンを其處に出して、もう一度穴の中を覗いて見たが、「よかんべ、よかんべ。」

暫くすると、傘と、提灯とを樹の枝から外してゐる龍の姿が見えた。粂は鋤と畚とを集めて、ランタンを右手に持つた。やがて雨の降り頻る中を墓場から此方へと來る二人の影が黑く見えた。

墓地には風雨が荒れてゐた。

六

東京の客はもう醉つて倒れてゐた。小搔卷を上さんがソッと上からかけてやつてからも、もうかなりの時間が經つた。

それと反對に、主僧は全く酒から覺めてゐた。茶の間で、長火鉢を挾んで、上さんと何か面白さうな話をしてゐた。やがて柱にかけてある時計が十時を打つた。

は段々赤土になつて行つた。水がじくじく出て來た。

三尺位掘ると、一人は中に入つて水を桶でかい出さなければならなかつた。二人は顔から體からすつかり赤土だらけになつた。

『おい、龍、あかりを見せねえか。』

龍は其處に置いてあるランタンを取つて下の方を見せた。

『これだからな、この水だからな。』

桶で五六杯かき出して、そしてまた鋤を動かした。

凄じい風がサッと吹いて來たと思ふと、樹の枝につるして置いた番傘が吹き飛ばされて、提灯の上にバラバラと雨が當つた。灯が消えさうにチラチラ搖いだ。

『待つて呉らつし。』

龍はランタンを傍に置いて、五六間先に吹き飛ばされた破れた傘を拾つて、そしてそれを再び樹の枝に結び附けた。

龍は今度は傘に代つて穴の中に入つた。水は黑く薄暗い灯に光つて見えてゐた。龍の脚は一尺ほども泥の中に入つてゐた。傍にある花の散つたのが白く龍の體にくつついて見えてゐた。

『もうよかんべ。』龍は穴の中から言つた。

墓地の南の隅の方は、それでもその二つの灯の光でぼんやりと照されてゐた。墓石のいくつとなく立つてゐるのが薄暗い光線の中に氣味わるく見えて、野と墓地との界の榛の並木の風雨に鳴るのが凄じく聞えた。灯の外は墨を流したやうに暗かつた。

寺の上さんが掘る位置を指圖して行つてから、粂は鋤を土に下した。雨にぬれた春泥に柔かであつた。そこには萱間見ると蒲公英だの野蒜だのの一面に生えてゐるところであつた。行倒れの乞食をこの前一度その近所に埋めたことがあつた。龍は右の隅から鋤を入れて掘つて土を傍に積んだ。全身ずぶ濡れになつて、せつせと穴を掘つてゐる二人の姿が暫く薄ぼんやりと其處に見えてゐた。

『やけに降るなァ。』

かう言つて、粂は半ば掘りかけた鋤を立てゝ休んだ。古い帽子の廂からは汗と一緒に雨が雫になつて落ちた。

『えらい時に、穴を掘らせやがる。八貫五百に負けさせやがつたが、一兩でもこんな商賣はいやだ。』

かうは言ひながら、腹の中では、これで明日は一杯旨い酒が飲めるなどと考へてゐた。

『今日の佛は若い女つちよだッて言ふが、あつたら女をなくしたもんだ。惜しいもんだ。その位なら、俺でも抱いてやれや好かつた。』

こんなことを言つても、龍は返事もしないで、默つて掘つてゐるので、粂はまた鋤を動かし始めた。土

人が言つた。と、其隣の男が、

『博覽會、何うでした？』

『いや、はや、人が一杯で、碌に見ることも何も出來やしませんわ。押し合ひへし合ひで、肩と肩とをすつて歩くんだから。』

『行くなら、來月かさらい月だ。』

『しかし、その時分は、田舍は忙しくなるから、田植やおかひこが始まつちや、田舍の人は出られませんからな。』

『だから、其時分になると、ぐつとすくべ。』

話はそれからそれへと續いた。酌婦の一人が來て線香を上げて行つたりした。『もう何時だ？　九時？ぢや、そろ〳〵支度にかゝんなくつちやなんねえぞ。定公と貞次郎の宅へ行つて來て呉れや。』かう主人は酌婦に言つた。

五

ランタンが寺にないので、粂はもう一度停車場に行つて、無理に頼んで、古い半分壞れかけたのを借りて來て、中に二分のランプを入れた。龍は提灯を樹の枝にかけてその上に破れた番傘を吊した。

『まァ、仕方がねえ、あきらめてゐるんでがんさ……。』主人は自分の盃に手酌で酒をついで、『これも何かの因縁だんべ。私の家に死ににやつて來たやうなもんだからね……。だから私や、お寺にもよく賴んで來やした。懇ろに弔つてやつて下さいてな。坊さんも至極氣の毒がつて吳れましたよ。』

『まァ、それが佛の爲めだ。好い事をして置けば、損をしたものはすぐ戾つて來やすよ。』分別顔をした親類の爺は言つた。

『それにしてもな、面瘍つて怖ねえもんだな。』

『本當だ……』

『見る見る大きくなるんだからな。半日と言つてゐねえ。今度のことなど、何ァに、はじめは、腫物をちよつとかきこはした位に思つてゐたんだ。當人もさう思つてゐたんだよ。餘り痛いつて言ふし、それに、顏が一面に腫れ出して來たから、商賣品に傷がついてはと思つてな、それで田口さんに見せたら、これはもう手後れだつて言ふんだから、吃驚したにも何にも……。』

『本當に油斷がならねえ。』

こんな話をしながら一座は賑やかに酒を飲んでゐた。外では雨がまだ盛に降つてゐた。雷はとうに止んだが、風は愈々強くなつて、裏の寺の山は凄じく鳴つた。

『これぢやもう東京の花ももう駄目だんべ。』吹荒るゝ風の氣勢に耳を傾けるやうにして隅に坐つた一

こんなことを男の一人は言つてゐた。

『親はわりい。わりいにはきまつてゐる。娘が死んだのを、他人さまにお葬式までして貰つて、それで遣つて來ないなんて、そんな法はない。しかし、此方ぢやいつも儲けてゐるんだから好いやな、たまには。』

『儲けるどころか。』

『去年の田の方は好いしさ、二人はよくかせぐしさ。僕のとこなどから見ると、よつぽど此方の方が好いんだ。』

『駄目だよ、少し位田の方が好いたつて、かういふ眼に逢つちや、片なしだ。先が相手にならねえんだから丸損さ。』

『でも、まァ寺で引受けて吳れて好かつた。……あの坊さん、慾張りでないから好いや。新しく地面を取るんぢや、ちつとやそつとのことでは、お寺によつては中々出來ねえんだからな。あの、佐間の先禪寺な、あの坊さんになんかかゝつたら大事だ。私は好いが、さういふきめにしてあるんだから、世話人が喧しく言つて仕方がねえツてぬかしやがるからな。坪、二兩位のことは何處でも言ふよ。』

『全く慾のない坊さんだ。』

かうもう一人の男が言つた。

其處にゐる二人の酌婦の頭には、一週間前の夜に、その娘を作れて、主人が得意さうな顏をして秩父から歸つて來た時のことが浮んでゐた。それは小づくりな色の白い痩せた女であつた。『好い女だんべ。藝を仕込めば、藝者にでも何でも出來るァ。向うで、女中奉公はしてゐたんだが、まだわるくすれねえから、使ひやうで何うにでもなるァ。』主人はこんなことを言つて、二人の酌婦にあてつけがましい語氣を見せた。名をお雪と呼ばれてゐた。『お雪、お雪。』かう主人はやさしく呼んだ。新しく來た女が珍らしいといふ風に見えた。『あんな新參者に負けるもんか。』二人の酌婦も一時はかう思ふほどであつた。それにも拘らず、お雪の死んだ時には、二人の酌婦は眼を泣き腫らしてゐた。染々身につまされたらしかつた。一人の方は緣側の柱の處に立つて長い間すゝり上げてゐた。

奥の座敷には、主人の同業者が二三人來て酒を飮んでゐた。棺は一番廉いのを買つて來た。棺に入れる時には、流石に湯かんだけはしてやつたが、おゆづりは縫つてやる人もなかつた。襦袢と腰卷のまゝで無理やりに小さな棺の中に入れた。はれた顏は薄紫色になつて、二目とは見られないやうになつてゐた。棺の上には太い荒繩で十文字をかけた。

棺の前の机の上からは、線香の烟が細く覺束なく立つてゐた。酌婦の一人が晝間裏の山から折つて來た山しきびがぼんやり見えてゐた。

『まァ、然し、死んだものは可哀相さ。』

馬鹿のやうな龍公もにやにや笑ひながら點頭いて見せた。

『ぢや歸んべいか。』

『うん。』

『待つてお呉れよ。』

かう上さんは言つて奥に入つて行つたが、今度は主人と一緒に出て來た。『仕方がねえ野郎共だな。』こんなことを言ひながらやがて奥から出て來た主人の肥つた顏は酒で赤くなつてゐた。『仕方がねえ、そんぢや七貫づゝやんべ。』

何の彼のと言つて、一人八十五錢づゝやることに最後はきまつた。それまでに主人は上さんの話した話を繰返した。

『お喧しうごいした。』

かう言つてやがて二人は出て行つた。

『泣面に蜂だ。』主人はかう獨語のやうに言つたが、『でもな、一晩寢かして置いちや、また金がかゝるからな。一兩や二兩にはかへられねえよ。』

『馬鹿々々しい、本當に……。』

上さんはぐづ／＼こぼしてゐた。

『怖かねえ？　でけいなりをして……』

上さんは親もやつて來ないことだの、六十兩損をした話だのをまたしても二人の穴掘男に繰返して聞かせた。娘の親から返事が來てから上さんは既に何遍來る人々にその話をしたかわからなかつた。一人だツてお客を取りやしないんだから。一文だつてかせぎやしないんだから。何んてまァ運がわりいんだんべ。』かういふ風に上さんは話して、『あきれたもんだよ。人情も何も知らねえんだから。娘の死んだのに、汽車賃を送れば行くもないもんだ。だから、負けて掘つてお呉れよ。』

『だツてなァ、龍公。』粂は煮え切らない風をして其處に立つてゐた。

龍も口の中で何かぐづ〳〵言つてゐた。

『お寺のきめが、七十錢か七十五錢ぢやねえか。お寺ぢや何ッて言はした？』

『それぢや彼方へ行つて聞いて來いッて言ふだ。』

『いゝやくざもねえ、一兩もかけて、それも二人かゝつて……。負けといてお呉れよ。』

『いくらに負けるだんべ。』

『二人で一兩で掘つてお呉れよ。』

『それぢや駄目だ、話になんねえ。』粂は仕方がないといふ顏をして、『俺達も、折角かうして跣足にまでなつて來たんだから、仕事をしていが、五十錢ぢや厭だ、なァ龍公。』

三味線の音が賑やかに聞えた。薄月の夜など、近在から來る若い息子達が二人も三人もそこに立つてゐると、酌婦が店から出て來て、何か聲高く笑つた。店にゐる酌婦の顏は電燈に青白く映つて見えてゐた。

停車場の傍には、大きな噴水があつて、水が其處から綺麗に流れ落ちてゐた。其處で酌婦が赤い襷をかけて、蹲踞んで洗濯などをしてゐると、藥罐に水を汲みに來た驛夫が何か戲談を言つてからかつて行つた。町の小間物屋の男が車を曳いて驛に着いた荷物を受取りに行つてゐる傍では、『私にもレートを一つお呉れよ。』などと言つてゐた。

今夜はしかし人の影も見えなかつた。軒燈に吹つける雨は、銀箭のやうに光つて、路は夕立の時のやうに綺麗に洗はれてゐた。レールに添つたところの信號標は青く闇の中に光つて見えてゐた。

川本の家の雨戸は一枚明いて、其處から火が洩れてゐた。

『御免なんしよ。』

かう言つて二人は入つて行つた。

酌婦が二人其處にさびしさうに坐つてゐた。奧には、客が三四人もあるらしく、酒に醉つた主人の話聲なども聞えてゐた。肥つた上さんは元氣のない顏をして出て來た。

『一人で掘れべいがな。』

『この雨ぢや、一人ぢや駄目だ。それに、怖かねえから……。』

『兎に角一人でいつもの通りの賃錢で掘るなら好いが、それがいけなけりや、川本へ行つて相談して來いツて言つてやれ、此方ぢや、そんなことに關係してゐないんだから……』

上さんは二度も三度も彼方へ行つたり此方に來たりした。穴を掘る男は何かむづかしいことをくどくど繰返した。『この降りだから。』などゝ言つた。

『勝手にさせる方が好いツて言ふのに……わからない奴だな。』終には主僧は面倒臭がつて相手にしなかつた。

四

穴掘りの粂と龍とは、もう跣足になつて來てゐた。鋤だの畚なども持つて來てゐた。成たけ此處で話をすまさうと思つたけれど、要領を得ないので、停車場前の川本まで出懸けて行くことにした。

『えらく降りやがるな。』

『これぢやずぶ濡れだ。馬鹿に寒いなァ。此頃の陽氣ぢやねえ。』

こんなことを言ひながら、雨を衝いて、田圃道を通つて、灯の多い停車場の方へと出て行つた。

停車場の近所の五六軒の家は皆なぴつしやり雨戸を閉めてゐた。うどん屋、小料理屋、すし屋などが並んでゐて、晝間は其處に白粉をべつたりつけた酌婦が汽車から下りる客を呼び込んでゐた。夜は二階に

つとの間に、こんなに濡れちやつた。』かう言つて上さんは濡れた衣の膝の處を見せた。
客には酌婦の死がいろ〳〵の感じを起させるやうに見えた。何ぞと言つてはその話をした。『何ういふ娘だッたか知らないが、娘の死んだ電報を受取つて、出て來られないやうな親も可哀相だな……秩父つて言つたね、秩父の何處だらう？』
『何處だかそれは聞かなかつた。』
默つて坐つてゐた客の頭には、憐れな酌婦と死と風雨とが一緒になつて集つて來てゐた。かうした邊僻な田舍寺の一夜といふことも興味を惹くらしく見えた。
主僧が酒を勸めると、
『もうよさう。』
『まア、好いぢやないか。』
『もう澤山だ。』
上さんがまた入つて來た。
『一人ぢや駄目だから、龍と二人で掘るつて言ふんですがね。……そして、何うしても一人一圓づつ貰はなけりやッて言ふんですがね。』
『足元を見て高いことを言ふな。一兩取るには一日も二日もかゝる癖に。』主僧はかう言つて笑つて、

『今朝の明方ださうだ。』

『醫師にも碌々見せなかつたんだね。』

『さうかも知れないよ。』

『しかし、不思議なもんだね、わからんもんだね。一週間までは、こんな見ず知らずの土地に來て、見ず知らずの墓の土にならうとは死んだ當人は夢にも思はなかつたんだからね。何んな好いことがあるかも知れないと思つてやつて來たんだからね。』考へて、『何んな女だつたらう？ 見たことはないかえ？』

『ないね。』

『無論、容なんぞ一人もついてゐないんだらうね。』

『これから出さうと思つてゐた處なんださうだから……。』

『一人も知つてゐるものもない全くの他鄕だね。その他鄕で、かういふ晩春の風雨の夜に、無造作に葬られて了ふんだね。ロマンチツクだね。宜しく浮ばれるやうにお經を讀んでやるんだね。』

主僧は笑つてゐた。

其處に上さんが入つて來た。

『掘るつてかえ？』

『正爺はイヤだつて言ふから、粂か誰かに賴んで貰ふやうに言つて來ましたよ。……ひどい雨、ちよ

『ふん、悲慘なもんだね。』

かう言つたが、客は考へて、『向うでもさうだらうけれど、此方の主人の方でもいくらか取れるものなら金を取かへさうといふ腹があつたんだね。それにしても悲慘だね。全く商賣品になつて了つてゐるんだからな。……それにしても、親も親だね。何も金のことは別問題なんだからやつて來れば好いんだ。出來ないものは出來ないだツて構ひやしないんだ。屹度無智な親なんだねえ。さういふことがわからないんだからね。來れば、すぐ金を取かへされる位に思つてゐるんだね。悲慘だ。』かう言つて客は頭を振つて、『悲慘だなァ。』

外には雨が盛に降つてゐた。

暫くしてから、『で、川本の主人が來て何ッて言ふんだえ？』

『だから、さういふ譯だから、墓地の地面を何うか安くして貰ひたいッて賴みに來たださ。[illegible]も出て來ないやうなものを、一晩家に置くのもかひがないッて、急に今夜埋めて了ふことになつたんだとさ。……だから、僕も言つてやつたよ、それはいくらでも安くしてやる。南の隅にあるからつてね。しかし、死んだ者は可哀相なんだから、罪はないんだから、よく供養を營んでやんなさいッて言つてやつたよ。それや、此處等の奴は、我利我利だからね。一文だツて錢を出すのを厭がつてゐるんだからね。』

『それで何時死んだんだえ？』

『子供かえ？』

『何ァに……可哀相なんさ、……停車場の前に、小料理屋があるね。』

『あゝ、だるまなどのゐる？　裏に蒲團などの干してある？』

『あゝあれだよ。川本ッて言ふんだがね。今、その主人が來てね。十九になる、つい此間つれて來た酌婦が急に死んだんだとさ。』

『酌婦が——何で死んだんだえ？』

『面瘡で死んだんだとさ……。つい、一週間ばかり前に、秩父の方からつれて來たばかしなんだとさ。それが急に、昨日、一昨日、ちよつと顏に吹出物見たいなものが出たんだッて、それをかきこはしたら、顏中一杯に腫れ上つて、醫師にかけた時には、もう手後れなんだッて、こはいもんだね、面瘡と言ふものは——。』

『それは面瘡は大變だ。あれは殆ど一刻を爭ふもんだよ。』

『それでね、川本の主人、こぼしてゐるんだよ。まだ碌々座敷にも出したことがない。何でも六十圓とかで伴れて來たんだとさ。それが、危險だと言ふので、早速秩父の親許の處へ知らせてやつたんださうだが、向うでは、汽車賃を出せば行くッて言つてよこしたんだッて……。いくら貧乏だつて、餘りだッて言つて憤慨してたがね……、なァに、向うでも、金を取かへされると思つたんだね。』

業だから、やるツて言ふかも知れやしねえよ。衆がイヤだつて言つたら、龍も聞いて見ませうか。』

『さうしてお呉れよ、兎に角掘らなけりやならないんだから。』

爺は破れた番傘をさして雨を衝いて出かけて行つた。電光がサツと光つて、凄じい雷聲がそれに續いた。

寺の上さんは、婆さんと何か一言二語話してゐたが、『ぢや、何とかすぐ返事を持つて來てお呉れよ。』かう言つて寺の方へと歸つて行つた。

奥の座敷で、主僧は東京から來た客と酒を飲んでゐた。話が段々面白くなつて行つてゐた。其處に、もう少しさつき、雨を衝いて訪ねて來た客があつた。主僧は客を茶の間に延いてかなり長い間話した。

『はア、はア。』などゝいふ聲も聞えてゐた。

三十分ほどして客は歸つて行つたらしく、やがて主僧は座敷にやつて來た。

『何だえ？　用かえ？』

『葬式を一つやらなければならない。』

『今夜？』

客も驚いたといふ風を見せた。

『十時に來るんだよ。まア……、好いから飲みたまへ。』

『今かね。』

この吹降に、この闇夜に……。

『今、川本の主人が來てね、あまつ子が死んだッて言つて來てね。』

『あまつ子ッて、川本のけえ？』

『なァに、あそこにゐる女つ子だがね……。掘つて吳れるかね。』

『わしや、はァ、御免蒙りやすべい。』

『駄目かな。』

『年を取りやしたから、はァ、難儀な仕事は駄目でがんすよ。それも、こんな降りででもなけりやですけど……。』

『それもさうだね……誰かなからうか。』

『粂の野郎が好いでせう。』

『粂はゐたかえ？』

『ゐやしたッけ、さつき……。』

『お前、一つ賴んで來てお吳れな……今夜の十時に葬式をするッて言ふんだから。』

『十時にな……。』吃驚したやうな顏をして、『粂も何ッて言ふだかな……。』考へて、『しかし、何も、稼

そればかりではなかつた。やがて晩春の頃に起る雷さへ加はつた。濺ぐやうな雨は電光と雷聲とに伴つて瀧津瀬のやうに亂れ落ちた。

墓番の爺の家では、雨が到るところから漏つた。便所に行く所には、仕方がなく、バケツに雜巾を入れてそれを凌いでゐた。

ふと傘に雨のあたる音が軒下でしたと思ふと、

『正爺ゐたかえ。』

寺の上さんの聲だ。

『は、お上さんけえ？』

かう言つて、爺は立つて、前の入口の雨戸を細目に明けた。

外は眞暗である。

傘をすぼめて入つて來た上さんは、

『えらい降になつたね。』

『本當でがんす。天氣は變るとは思ひやしたけども……こんなに降るとァ知りやせん。今朝は好い天氣でしたからな。』

『正爺、お前、氣の毒だが、穴を一つ掘つて呉れないかねえ。』

は頼むと言つて、その客は墓參をすませて、待たした車に乘つて歸つて行つた。『面白いことがあるもんだね。』などと後で主僧は上さんに話した。上さんは上さんで、『寺井ッて、今の寺井の何かでせうか？』

『百年も前の昔の話だから、何かであつたとは思ふが、よくわからないさうだ。』

『そんなにたゝるもんかね。おつかねえもんだ、人の思ひッて。』上さんはこんなことを言つて臺所の方へ下りて行つた。

その墓の傍の草を取り終ると、爺は一休みしようと思つて、墓の石に腰をかけて、烟管に烟草をつめてマッチを摩つた。鶯が矢張その近くで鳴いてゐた。日影がいくらかぼんやりと曇つて來てゐた。

『天氣が變るかな。』

爺はこんなことを獨りで言つた。

三

ほつ〳〵午後から降り出した雨は、夕暮近い頃には、凄じい大降りになつて、風も凄じく出て來てゐた。咲き亂れた花は泣いたやうに白くほの暗い薄暮の空氣の中に見えてゐた。

『今年の花もこれでお終ひだ。』

かう主僧はをりから東京から來てゐる友達に言つた。

で、主僧は過去帳を澤山に出して來て、それを一々客の前で繰つて見た。其處には無數の名が宿帳か何ぞのやうに書いてあつて、それが祥月命日にわけてあつた。

『命日はわかりませんか。』

『わかりませんな、古いことですから。』

客も後には手傳つて過去帳を繰つた。主僧は櫃の底に藏つて置いた別の過去帳を持つて來たりした。

『ありました、ありました。』かう主僧は言つて、『これでせう？』

『あ、これです。』

そこには死んだ年月日と俗名と戒名とがちやんと書いてあつた。寺井宗兵衛側室そめ行年二十二歳と書いてあつた。

『これだ、これだ。』

『これですな。』

主僧も客も喜悦の聲を立てた。

『四月十五日、丁度今頃ですな。』

『さう〳〵花の時分だつて聞いてゐました。』客も思ひ出したやうに言つた。

近い中に更めて、寺井の跡のものと一緒に來て、相應な法要を營むつもりだから、何うか何分その時

麗な人で、江戸の柳原か何かで生れたさうです。何ういふことで、その寺井の家の妾になどなつたかといふことは少しもわかりませんけれど、何でもその時分は、寺井の家は榮えてゐまして、その主人などは江戸にもよく出て行つたものと見えます。處が、昔の小說本などにもよくある話ですが、その人が私の曾祖母を生んだのを、本妻がひどく妬いて、それはとても一緒に住んでゐられないやうな取扱をしたさうです。それで終には毒を飮んで死んだのださうです。私の祖母は曾祖母から聞いたと見えまして、よくその話をするのを私も微かに覺えてをりますが、佛はやさしい綺麗な町にもそんな人はないと言はれたさうです。處が、そのたゝりと言ふんですか、寺井の主人は其翌年死にますし、家は段々傾いて行つて、その本妻などもあとで慘めな死に方をしたといふことです。それればかりならまだ好う御座いますが、代々夭死をしたり、不具の子が生れたりして、今でもそれがたゝつてゐるといふので、去年でしたが、その寺井の後のものがたづねて來て、是非行つて法要を營んで貰ひたいと申すのです。寺井の方でやつたのでは効目がないから、私共でやつて貰ひたいと言ふのです。え、その寺井の後ですか？　今でも碌なことはしてをりませんがな。』

『はァ、はァ、さうですか。』

かう繰返して聞いてゐた主僧は『寺井といふ大きな家があつたといふことは私も聞いてをります。寺にもいろいろなものを寄附してゐます。』

庫裡の玄關の前に、一臺の車は長い間置いてあつた。春の日が靜かに照つてゐた。

『お客かな。』

爺はさう思つたが、その次ぎに見た時には、其處にはもうその車はなかつた。『いつ歸つて行つたんべ。』など〻思ひながら、爺は垣から垣へと草を捲つて行つた。

二

そのすぐ前に大きな墓が一つあつた。古い墓であつた。苔が蒸してゐた。爺は無論知らないが、その墓石の下には、毒藥を飮んで死んだ町の豪家の妾が埋められてあつた。それが――その墓の主が町でも評判の綺麗な女であつたなどといふことは、今まで誰も知つてゐるものはなかつた。主僧も知らなかつた。主僧の先代も知らなかつた。それが二日前寺の玄關に四十ばかりの身なりの賤しくない男が尋ねて來た。主僧は座敷に通した。

『今から百年位前の事ですが、俗名寺井そめといふのが御座いますまいか。お分りになりますまいか。』

『古いことですな……。』

主僧が躊躇してゐると、その男はやがてわざわざ東京から訪ねて來た理由を話し始めた。それはその男の曾祖母の母親に當る人であつた。『私は今は石田姓を名乘つてをりますが、何でもその佛は立派な綺

『今日は。はァ、好いお天氣で……。』

『爺や、墓に草が生えたから、今日は取つてお吳れよ。餘り放つて置くと、お參りに來た人にわるいからね……。西の方から先にする方が好いよ。周圍も掃除して貰はなくつちやならないから、大般若ももうぢきだから。』

爺は『はァ、さうすべい。此間からさうは思つてゐやしたけど、風だの、雨だのではァ、よく風が吹いたでな。』

『もう麥もさくを切らずばなるまいね。』

『はァ。』

『もう吉田屋さんぢや切つたんべ。』

『切つてやしたッけ。』

爺は廣い臺所の處に長い間棒立に立つてゐた。其處に、主僧が今起きたばかりの顏を出した。『お早うがんす。好い天氣で、結構で御座りやす。』かう爺は丁寧に挨拶をした。で、爺は其處から出て、寺の門前にある小屋のやうな自分の家に行つて、支度をして、のつそりのつそり墓地の方へと出かけて行つた。

風もないのに花はチラチラと散つた。何處かで牛の鳴く聲がした。

狹くしきつた澤山の墓の間を縫つて、門前の墓番の爺は朝から頻りに草を捲つてゐた。其處には他鄕で生れて、中年で此處にやつて來て、土地の人に親のやうに敬まはれた醫者の墓もあれば、他人の妻に烈しく戀をして早く生命を失つて了つた若者の墓もあつた。つい此間死んだ若い綺麗な町の娘の墓には、花が一杯に手向けられてあつた。墓番の爺はせつせと唯草を捲つた。

ぢき近くにある町の雜音は、それでもをりをりこの靜かな墓地の中まで傳はつて來た。街道を通る車の音、寺の森を掠めて通つて行く汽車の響、時間每に騷がしく聞えて來る小學校の生徒の聲、それが止むと、門前の長屋の上さんの子供を叱る聲が際立つて聞えて來た。

墓番の鳧がふと其處に姿を見せた。

『新さん、また來たがな。』

『好い加減に言つて置けよ。』

『でも、度々だからな。』

『好いやうに言つて置けよ。』

鳧はやがて歸つて行つた。鶯は矢張好い聲で鳴いてゐた。鐘樓の向うの不動堂では、子守が二三人唄を唄つて遊んでゐた。

やがて寺の上さんの通つて行くのが見えた。今朝寺に行つて、爺は上さんと次のやうに話をした。

風雨の夜

一

午前は麗らかな日が照つて、墓地のところどころにすつかり咲いた花が眞白に見えてゐた。要垣の嫩芽の下には、蒲公英の花が黄ろく咲いて、野蒜が綠の色を濃かに綴つた。向うの野の麥の中からは雲雀が絶えず空にあがつてゐた。

『好い天氣だな、今日は風もねえ。』

墓地の傍の細い路を野の方へ出て行く百姓達は、かう心持好ささうに挨拶して摩れ違つて通つて行つた。

墓地は靜かであつた。新しい花崗石の墓の上では鶯が好い聲を立てゝ鳴いた。春はもう闌になつて、草といふ草は皆な綠に萠え出してゐた。山門から本堂に行く長い敷石の傍には、大きな木瓜が目もさめるやうに赤く見事に咲いてゐた。

『好いでせう、さうなさいよ、ね、私のところにね。お母さんが昔寢かしつけたやうに寢かして上げますよ。子守唄でも何でも唄つて上げますよ。ね、ね、さうなさいよ。やんちやを言ふもんぢやありませんよ。』かう言つて、女將は順吉を自分の寢間の方へと伴れて行つた。藝者をした頃の若い女將の肖像畫のかゝつてゐる寢間の方へ。

『あんな無理を。』
かう言つたが、そのまゝ女中は奥の女將の室の方へ行つた。
順吉の青白い頬には涙が流れてゐた。たまらないさびしさが底から湧き上るやうに順吉の胸を襲つて來た。順吉は壁に身を凭せて、電燈の光の來ない蔭のところに立つてゐた。
そこへ、奥から女將が派手な長襦袢姿でやつて來た。
『貴方、まア、さうでせうけれどもね。お氣に召さないでせうけれども、女も可哀相ですからね。これから歸すッたッて、もう遲いんですから。今夜は我慢して、ね、ね、後生だから。』
『お上、僕はさびしい。』
『それはよくわかつてゐるんですけども……。本當に今夜はおそいんですから……。あの妓だッて可哀相ですから。』
『一人で寢たいな。』
『ぢや。』と女將は順吉を廊下から向うの方へ引張つて行つて、『私のところでお休みなさい、ね、ね、好いでせう。』
順吉は立つてゐた。其處にも、此處にも、女が一人づゝ寢てゐて、永久に自分は獨りでは寢られないやうな氣がした。

『何でも好いよ。』

『では、誰かね、もう遲う御座いますから。』かう言つて女中はすぐ下りて行つた。

一時間ほど經つた後には、順吉はひとりで下の廊下のところにうろ〳〵して立つてゐた。あたりはしんとしてゐた。

其處に來た女中は、

『何うしたの？　貴方？』

『さびしいな、何だかたまらなくさびしい。おい。』と女中を近く呼んで、『何處か室がないかな、ひとりで寢るところは？』

『何を言ふのよ、貴方。』

『ぢや、歸るかな。さびしい。本當に心からさびしい。』

『歸れるもんですか、今から。』

『歸れるよ。』

『もう何時だと思つて？』かう言つたが、女中も困つたといふ風で、『そんなこと言はずに、今夜だけおとなしくお休みなさいよ。もう遲いから、他にッて言ふわけに行かないんだから。』

『ぢや、歸して吳れないか。僕はひとりで寢たいんだ。』

などと呶鳴つて、入口から入つて來て、廊下のところに横に倒れた。女中も女將も慌てゝ帳場から出て來た。

『おい、君、えらく醉つたね。』

畫家はかう言つて、女中に伴れられていつもの二階の一間に行つた。

夜はもう時間をすぎてゐた。

女中や女將に介抱されて漸く二階に上つた順吉は、

『君は此處に知つてる人があるんだらう？』

『イヤ。』

『何とか言つたね。』

『藤枝とか言つたよ。』

『藤枝かえ？　君の知つてるのは、さうかえ？』かう言つたが、

『ゐるだらうか。』

『かけて見るわ。』かう言つた女中はイヤに莞爾と笑つて、順吉の顏を見た。その笑顏にはある意味が書かれてあるのを、順吉は醉つてゐてもよく知つてゐた。果して女中は上つて來て、『藤枝さんはおあいにく。他には？』

た掛幅、布袋の置物、庭の車井戶、厚い唇の女中、如才のない愛嬌たつぷりな女將、上品の切下げ髮の老母、風呂場の水道の鐵管、それより以外にかれを此處に引いて來るものはないやうにすら順吉には思はれた。鈴吉とも逢つて見たが、その粗い皮膚をした手や腕は、すぐ順吉を孤獨の境につれて行つて了つた。

餉臺の上にはいつもきまつて無名異燒の小さな盃が置かれてあつた。順吉はそれを昔から好きであつた。『色が好いね。ぬれると、女の唇の色のやうになるね。』かう言つて自分で唇に當てゝ見て、『かうやつてゐると、本當に女の唇のやうな氣がする。』などゝ言つたものだ。前の馴染の女もそれを知つてゐて、『本當にさうね、好いわね。』などゝ言つた。

その盃に對ふと、種々の追懷が流るゝやうに順吉の胸に溢れて來た。

『女はゐなくつても、何もなくつても、これさへありや好いよ。この盃さへありや――この盃の爲めに、俺は此處に引張られて來るやうなもんだね。』

順吉はこんなことを言つて笑つた。

ある畫家と料理屋で飮んで、そこから一緒に其處に引上げて來た夜は、順吉は近頃になく夥しく醉つてゐた。

『おい、貞公。』

あれから何處かで飮んでひどく醉つて歸つて寢て了つたといふことであつた。あくる朝やつて來た時には、順吉はまだ床の中にゐた。

『うそよ、そんなことはありやしないわ。』などと女は言つた。

それから一月ほど經つた後には、千代龍と順吉との間はもう綺麗になつてゐた。順吉の心は女に向つてまださう大して深くなつて行つてはゐなかつた。順吉は其處にもその心の空虚を滿すことの出來ないのを見た。

飛んで行つた小鳥――前の小鳥、好い聲をした、美しい毛色をした小鳥が、まだかれの心にからみ着いてゐた。順吉は矢張大勢の女を相手にして酒を飮んだ。

『本當に困るわねえ。貴方位藝者にむづかしい人はないわ。』

いかにも困つたといふ顏をして、女中は順吉に言つた。

『なアに、好いぢやないか、そんなことは、何うでも……。その中、好い鳥がかゝつて來るよ。』

『そんなことは言つてゐられないからね。』

『さうかな。』

順吉もをりをり自分は何の爲めに此處に來るのだらうなどと考へた。馴染になつた室、床の間にかけ

『あゝ、この人ですか。』

次に友達は『あゝさうですか。へえ、この姐さんかね。これは面白い、私にも何か書かせて頂きませう。』かう言つて、笑ひながら袂から萬年筆を出して二言三言書いた。

『ちよつと拜見。』

若葉が手を出すのを、友達が渡さぬやうにして取つて、『これを出すんだよ。記念になつて好い。』

『いやよ、そんなもの。』

かう言つたが、仕方がないといふやうにして若葉は默つて了つた。

順吉は何か女と打合せをしたいと思つた。しかし、その中、もらひが來て『好いでせう。』と言つて一番先に千代龍は歸つて行つた。それが順吉の心を曇らせた。友達と女との間には、先に交渉が出來てゐやしないかと疑つた。それから十一時過まで飮んで、そして、順吉は友達の車で歸るのを見送つて、それからそこを出て來たことを思ひ出した。

其家に來て、

『今、あそこで飮んでゐたんだよ。先生は先きに歸つたんだけれど、何處かにゐるだらう、かけて吳れ給へ。』

かう言つて、順吉は醉つた體を其處に倒した。しかし、其夜千代龍は到頭やつて來なかつた。何でも

『あら、さうぢやありませんよ。』

『汚しても氣の毒だね。』

『なァに、好いのよ。』

で、友達はそれに即席の歌を書いた。友達の字は見事で、銀扇の中にぼかした梅の繪と巧みに調和してゐた。歌も旨かつた。

千代龍は手に取つて見て、

『好いわねえ。』

銀扇は順吉からもう一人の友達の手に移つて行つた。友達は更に若葉といふ妓をつかまへて、

『君、あの人が遠くに行つて淋しいだらう。まだ却々歸つて來ないねえ。』などと言つてゐたが、葉書を二三枚お酌に持つて來させて、その一枚に、『おい、此處に君の口紅をつけ給へ。』

『何うするの。』

『好いからつけたまへよ。』

若葉は白い端書を口に當てた。友達はそれを手に取つて、紅梅の花びらのやうに印せられた女の口紅を見て、『これで好い、これで好い。』かう言つて、それに説明をつけて、裏にフランス語で、宛名を書いて順吉にわたした。

つた。

千代龍の踊は見事なものであつた。名古屋の西川の流儀丈に、何處か態度に確かりとした處があつた。それに背のあるのが感じをしなやかにした。あの女が――あの色の淺黑い女がかうまで艶やかに見らるゝかと言ふやうな氣がした。順吉は一種の得意を感ぜずには居られなかつた。

『好いわねえ、西川のは。』

三味線を下に置いた老妓は、感心したやうに言つた。女は扇を持つたまゝ元の座に來て坐つたが、やがてそれを傍の方にやつて、德利を持つて、友達と順吉とゐる間へと入つて來た。

『旨いねえ。』

もう一人の友達は言つた。

友達は『おい、何つて言ふんだえ？　今のは。』などと言つて、少し醉つた體を崩して、盃を女の方へさした。やがて『君、あの扇をかし給へ、歌が出來たから。』友達はこんなことを言つて、向う側にゐるお酌が取つてわたす銀扇をひらいて見て、

『いゝかえ、書いても……。』

『え、もう、どうせ、碌なんぢやありませんから。』

『碌なんぢやないから好いッて言ふんだね。』

た。かれはかなりに醉つてゐた。夜更けの灯や電車の線路や、赤い電燈などがかれの眼の前にチラチラした。暖かい春の夜風は靜かにかれの熱した顔を吹いた。

料理屋の下階の一間、松だの高野槇だの石燈籠だののある庭を前に控へた縁側の片隅には、咲きすぎた落花がチラ〳〵と美しく散つてゐた。そこの一間、そこに客は三人、藝者は四人來て、日暮から夜の十一時過ぎまで騒いだ。客は二人は友達で、一人はかれであつた。かれは友達と席を並べて坐つてゐた。藝者は始めに若葉といふのが來て、次にお酌が來て、その次に老妓が來て、最後に千代龍がやつて來た。順吉は千代龍と友達との最初の一瞥を注意して見てゐた。『遲くなつて了つて、待つたでせう。姐さん、でも、髪結さんがおそいんですもの。』などと千代龍は言つて、老妓の傍のところに來て坐つた。順吉の方は見ずに、わざと友達の方に向いて『しばらく。』と言つて挨拶した。

關係のないらしいといふことは、友達と千代龍との樣子でわかつたが、それでも順吉にはまだ底の底があるやうに思はれた。お酌が踊つたあとを若葉が踊つて、中途で扇を落したりした。『でも、ね、扇を落すのは、そんなに恥ぢやないのよ。それは時と拍子ですから。』などと、友達と順吉との間に坐つてゐた千代龍は辯解した。

順吉もつとめて女との關係を二人の友達に知られないやうにしてゐた。しかし、順吉は女の態度を殘るところなく注意して見やうと心がけた。さういふところから、女といふもの丶心持をも知りたいと思

友達の話を順吉がすると『あゝあの方も御存じ。あの方、お目にかゝるのは宴會ばかしだけでも、よく彼方此方立つて歩く人よ。藝者の許を廻つて歩いて行くやうな人よ。』

その夜は順吉は泊つて行つた。踊があるので、長襦袢姿は艶にやさしく見えたけれど、あくる朝のさし向ひには、順吉は耽溺客の常に感ずる佗しさとつまらなさとを感じてゐた。白粉の剝げた女の顏はイヤに薄黑く灰色に見えてゐた。

八

それでも順吉と千代龍との關係は、割合に長く續いた。それには友達の言つた言葉と、女が順吉の身分を買ひ被つたことゝが大きな原因をなしてゐた。それに一方では順吉は友達と女との關係を疑つてゐた。口ではあゝは言ふけれど、かうした種類の女は何を言つてゐるかわかりやしないなどとも思つた。時々かまをかけて友達の話などを持ちかけて見たりした。

友達が心を注いでゐると思ふと、容色はそんなに好くなくとも、氣分はそんなに合つてゐなくとも、此まゝ弊履を捨てるやうに捨てゝ了ふ氣にもなれなかつた。出來るならば、もつとこの女の心の奧まで入つて行つて見たいとも思つた。

ある夜であつた。順吉は濠端の名高い料理屋の門をひとりで出て、いつもの家の方へと步いて來てゐる

『千代龍さん、何う?』
『來るかしら。』
『來ますとも。』
『ぢや、かけて見て呉れたまへ。』
女中はもどつて來て、『今、皆さんがね、御飯を召上つてゐるところなんですつて、それがすむと、すぐ來るつて。』
『さうかえ、大丈夫かえ、逃げられやしないかえ。』
『大丈夫よ。』
一時間ほどして果して千代龍がやつて來た。『姐さん、さつき、此方に、本當に失禮したのよ。すつかり忘れて了つたんですもの。何處かで見たことのある方だとは思つたけれど、龍ちやんのだとはすつかり忘れて了つてゐたのよ。』千代龍はかうはしやいだ調子で言つて、順吉の傍に來た。
順吉は一緒に席をつらねた豪い軍人達の恩惠を、かうしたところで、かういふ風にして得やうとは思はなかつた。代龍は莞爾してゐた。順吉の隣に坐つてゐた大佐の話などをした。『あの方のね、好い人があるのよ。あの人、木村さんッて言ふんでせう。參謀本部に出てる方でせう。ちやんと知つてるんだけれども……。』などと言つた。

ないし、秀子のやうに若々しくもない。それに藝もかなりにある……』順吉は前の女がゐなくなつてからの心の空虚を其女に充す機會の來るのを待つてゐた。

機會はすぐやつて來た。しかし誂へても出來ないといふやうな好い機會が――。それはそれから十日と經たない中であつた。その土地のある料理店に大きな宴會があつたが、それは豪い軍人などの大勢やつて來るやうな會であつた。ある戰役に花々しい名譽を轟かした將官なども來てゐた。

その席に千代龍も來てゐた。

女義太夫だの、寫眞の撮影だの、いろいろすんで、席が大分賑やかになつた時分、千代龍はそれと知らず順吉と順吉の隣の大佐の前に來て酌をした。

見たやうな顏だとは思つたであらうが、千代龍は半ば順吉の顏を忘れてゐるらしかつた。電車の中でも見た人かしら位にしか覺えてゐなかつた。

酌をして貰ひながら、順吉が一言二言言ふと、『あゝさうさう、すつかり忘れて了つたわ、私。さうでしたね。龍ちやんでしたね。あそこでしたね。』かう言つて順吉の傍に寄つて來て、龍子のゐなくなつた話などをした。

順吉は其處から早く引揚げた。そして、いつもの家にやつて來た。『さう。今まであそこにゐたの？誰が行つてゐて？』かう女中に訊かれて、『千代龍と瓢子が行つてゐたよ。』

その稍氣に入つた女と出來たのは、かれこれ一月ほど前であつた。それは不思議な成行であつた。順吉の友達に、その土地でかなり遊ぶ男がゐた。しかし、その友達も順吉のその土地で遊ぶのを知らず、順吉もその友達がその土地のことにそれほど明るいとは知らなかつた。

ある別の土地で、順吉はその友達ともう一人別の友達と三人して酒を飲んでゐた。ふと話がその土地のことになつて行くと、『あゝ、あそこには若葉つていふのがゐるよ。それから千代龍つて言ふのがゐるよ。僕は宴會黨だから、詳しくは知らないけれど、千代龍ッて言ふのは、ちよつと好い感じのする女だよ。不思議なもんだね。女ッて言ふものは顏ぢやないね。感じだね。あの女なんか、ちつとも顏はよくないけれど、何處か落附いてゐて好いよ。』こんなことを友達は言つて、『一度あの土地で靜かに飲まうぢやないか。』

其場では順吉は默つて知らぬ顏をしてゐたが、實は順吉は一度ならず二度までもその千代龍を聘んで知つてゐた。勿論、關係したのではなく、前の女のゐる時分、踊りが旨いといふので、取卷きに聘んだのであつた。北州や保名などを其女はよく踊つた。

不思議にも、順吉にはその女に對する興味が湧いて來た。友達の言葉を考へて見ると、成ほどさうだとも思はれた。『何んだ、あんな背の高い女。』前の女がゐる時には、かう言つて振向いて見もしなかつた女だが、今になつて考へて見ると、成るほど好いところがあつた。秀香のやうに情味がなくなつてもゐ

七

秀香と順吉との關係はそれつきりになつてゐた。あれ以來何方からも手を出さうともしなかつた。しかし聘ぶと、秀香は平氣でやつて來て、平氣で話した。そんな素振は顏にも出さなかつた。

一月、二月は過ぎて行つてゐた。もう花などが咲いてゐた。山の樹立の間からは、白く櫻が見えて、濠端の泥濘の中に、落花が夥しく散つてゐたりした。

いつか二人きりの時に、

『何うしたね。』

かう順吉が言ふと、

『何うもしないわ。』

『もう駄目だね。』

『駄目ね。』

秀香は舌を出して見せた。そこに女中が入つて來て、その話はそれなりになつて了つた。

順吉にはその時別に稍氣に入つた女が出來てゐた。秀香はそれを知つてゐるらしかつた。イヽなどと言つて、變な顏を見せたりなどした。

『さうですとも、關係があつたんですとも……。今でも、何うかすると、來るわ。だから知つてるのよ、龍ちやんのことをよく。』

『矢張、泊つたり何かして行くのかしら？』

『さうでせう、屹度。』女はちよつと考へて、『何でも、此處のお上の親類になつてゐるやうな人よ、貴方、見たことがあつて？』

『ある、二三度。』

『此處ででせう。』

『うむ――。』

『好い男だわねえ。』

『さうだ、ちよつと新派の役者見たいな、イヤに色の白い。』

『さう、さう。』

順吉はその男が帳場のところで、團扇をつかひながら、柱に凭りかゝつて、派手な浴衣を着て、女將と何か話してゐたのを見たことがあつた。夏の夜だつた。月が窓から水のやうにさし込んでゐた。

『本當かねえ？』

『本當ですつて。』

『あの龍子の情人が？』

『さうですとも……龍ちゃんとあの人とをこゝの女將がつけたんですもの。此處で逢つてゐたんですもの。』

『さうかね。』

『だから、聞いてゐて御覽なさい、此處のお上さんは龍ちゃんのことは決してよく言はないから……。お客と藝者のつもりで、始めは何の氣なしにつけたんだわね。お上さんもまさか龍ちゃんがあんなに深くなるとは知らなかつたんだわね。』

『かなり深かつたのかしら？　あのお上とその男と？』

『深いッて言ふほどでもないのね。あゝいふお上さんになると、心持がわからないわ、私達には――。惚れるとか何とか言ふんぢやないんですもの。あのお相撲だッて、さうよ。別に、命もッて言ふやうなことはないのね。場所の時に逢つて、せいぜい五六度も遊べば好いのね。あの位の年になると、女はあゝなるかしらと思ふわ。』

『さうかなア。』

『今？』

『え。』笑つて、『今でもあの情人に逢つてるのかしら。』

『何ゥだか、そんなこと知るもんか、この僕が。』

『それはさゥね……。それから、秀子さんだつてね。』

『そんなことすつかり訊いてきたのかえ。』

『え……。』

女中が知らせて來るまで、順吉と秀香とはこんなことを話してゐた。二人の寢たところは、物干に出て行く方の四疊半であつた。そこでは、前の女が朝起きては、長襦袢のまゝで、用心のためにかつた心張棒や釘などを外してよく戶を明けて吳れた。朝の光の流るゝやうにさし込んで來るところで、二人は靜かに煙草を吸つて話したりした。ある時には、女はおそくなつてから來た。眼がさめると、女はいつか入つて來て蚊帳の外に立つてゐたりした。順吉はそんなことを頭に繰返しながら、感情の乾き切つた情味などのすつかりなくなつた女とかうして一緒に一夜をすごすといふことを佗しくもさびしくも思つた。

ある女から順吉はこんなことを訊いた。

『さうですつて、うそぢやないんですッて。こゝの女將とも關係があつたんですッて。』

『好きな人なんか拵へてゐるやうぢや駄目よ。』

『鈴吉の家には、今、好い人が來るッつていふぢやないか。』

『鈴ちやんが旨いんですよ。今に、放り出されて了ふから見てゐて御覽なさい。あの人、あれで却々腕があるんだから。』

『さうかね……。ちよつと見ると、惚れつほいところがあるやうだがね。』

『あゝ見えてゐて、却々惚れるやうな人ぢやないのよ。幼い時分から一緒にゐたから、よく知つてますけれどもね。』

『何方が先きに自前になつたんだえ。』

『私の方が半年位先きでした　その時分、鈴ちやんに好い旦那があつたのだけれど、ちよつとその時役者にはまつてゐたり何かしてたものだから。』

『君の噂なども隨分出るぢやないか。』

『新聞にかゝれるのは廣告見たいね。嘘でも、何でも、書かれないより書かれる方が好いわ。』ふと言葉をかへて、『さう言へは、龍ちやんだッたんだつてね？』

『何故？』

『だつて、お上さんにすつかり聞いちやつた。』

『え。』
やがて秀香は上つて來た。『あゝ、寒い、いつまで寒いんだらう。』などと言つて、顏を火鉢に當てるやうにした。
女中の下りて行つた後で、
『貴方は、鈴公のかと思つた。』
『鈴公なんか知らない。』
『さうだッてね。今、お上さんに聞いた。でも、本當に困るんだもの。あんな色の生白い妓がゐちや私だつて困るんだもの。』
『それはさうだらう。』
『それから内所だよ。』
『それはさうさ。』かう言つたが、順吉は、『でも、散らしの方が好いつて言ふぢやないか。それの方が割りが好いつて言ふぢやないか。』
『それはさうね。碌でもない旦那なんか一人守つてゐちや、ひぼしになつちまふわね。散らしの方が好いわねえ。』
『でも、好きな人は別だね。』

んだ色の生白い妓は、ちよつとと言つて下に立つて行つてゐた。
女中も下りて行つたが、暫くして、
『秀香さんちよつと。』
順吉はひとりぼつねんと坐つてゐた。夜はもう十時をすぎてゐた。
女中は上つて來て、順吉の傍に坐つたが、『今、秀公に話して見たのよ。好いッて言ふんだけれども、あんな不見轉が來てるぢやないのッて言ふのよ。この次ぎならッて言ふのよ。』
『さうか。』
『しかし、もつとよく話して見るわ。それにしても、あの一人の方の妓は歸しませうね。』
『あゝ。』
女中はトントン階梯に音を立てゝ下りて行つた。暫くあたりがしんとした。さつきまで騷いでゐた奥の間でも、藝者が厠に行つたり何かする氣勢がしてゐたが、それも納つて、あとは裏の通を行く鍋燒うどんの聲が悲しげに聞えた。
女中はまた上つて來た。
『秀公、ね、好いッて、今、お上さんと何か話してるわ。』
『一人はもう歸つたのかえ？』

女將が眼くばせをしたので、背の低いお酌はこそ〱と下りて行つた。

『何うしたんだえ、お酌なんかいぢめて。』やゝ醉のさめた女將はたしなめるやうに言つた。

『誰がいぢめて？』

鈴吉は眉を昴げた。『私こそいぢめられてゐるんぢやないか。』

『一體、あの子も生意氣なんだよ。』いくらか醒め加減になつた秀香はかう言つて、『駄目だつて言ひやしないけれども、そんなことを言つたよ。』

『だつて好いぢやないか、お前。そんなことを言つたつて構はないぢやないか。』女將はぽつんとして座が開けたやうな顏をして坐つてゐる順吉の傍に行つて、『ねえ、まア、お客樣をほつたらかしてあきれたもんだよ。一つ上けませう。』盃をわたして、立つて、傍にある電鈴を押した。

やがて顏を出した女中に、『お銚子のあついのをね。』

しかしこれも僅の間であつた。十分ほど經つた後には、皆なして立つて踊つたり跳ねたり手を拍いたりした。午後の町には、獅子舞の囃子などが通つて行つた。

六

順吉と秀香と女中とが矢張同じ一間にゐた。それはそれから十日ほど經つてからであつた。もう一人聘

背の低いお酌の顔は青くなつた。

『何を言つてるのよ。』

『何でもないよ、秀香姐さんなんか引込んでお出でよ。何うせ、私はさうなんだから。』

また始まつたといふ顔を誰も彼もした。お酌は俯むいて了つた。

『何うしたんだえ？』

鈴吉は盃をまた青白い唇に當てた。鈴吉の眼からは、涙が滲み出して來てゐた。いかにも物に激昂したといふ風が歴々と見えてゐた。また酒を德利からついだ。

『もうおよしよ。』

見かねて、女將が傍から言ふと、

『立派ですよ、綺麗ですよ、踊りは旨いよ、今に好い旦那が出來るよ。』見ると、鈴吉の眼からは涙が青白い頬に傳つて落ちて來てゐた。『何うせ、かうき棹は棹が泣き出すんだよ。』かう言つたが、堪らなくなつたやうに、『お上さん、あたいは、もう、明日から藝者はよすよ。本當に、ねえ、川島さん、これでも、この年までなるのに、それは、あたいだツて苦勞したんだよ。今時分になつてお酌さんに、あんなことを言はれやうとは思はなかつたよ。鈴吉姐さんぢや、――鈴吉姐さんぢや駄目なんでせうよ、何うせ。くやしい。』涙はぼろぼろと手に持つた盃の中に亂れて落ちた。

『あたいは彈かないの。』
『何うして?』
『何うしてでも好いわよ。』
かう言つて、其處にあつた盃を取つて、一杯ぐつと飲んだ。何か氣に入らないことのあつたのは順吉にもすぐわかつた。女達は皆な鈴吉の青い顏を見た。
秀香と女將とが三味線を彈いて、兎に角、踊りは濟んだが、濟まないのは鈴吉の態度であつた。
『何うしたのよ。』
　好いよ、何うでも……。』
『また、何かおかむりをまげたのね。』かう秀香が言つた。
丁度、其時、一本になり立ての妓と、背の低いお酌とが順吉の傍に坐つてゐた。鈴吉は床の間を後にして坐つてゐた。
ふと、鈴吉は、
『何うせ、ね、女將さん、私は何も出來ないんだから。』
『何だね、お前さん。』
『何うせ、私には、立派なお酌さんの糸はひけないんだから。』

政子は默つて、ぐい〳〵酒を飮んでゐたが、後には、醉つたのが隱されずに、その態度やら顏やらに顯はれて來た。『お前、醉つたね。』かう姉の秀香が言ふと、

『醉つて？』

『醉つて、あとで苦しくなつたッて知らないよ。』

『大丈夫よ、姐さん。』かう言つて、順吉にしなだれかゝつて、『ねえ、川島さん、大丈夫ね。もつとお酌をして頂戴な。』

盃を出しても、誰もついでやるものがないので『誰もあたいにお酌をして吳れるものはないのね。』

かう言つて、自分で德利を取つた。

餉臺の上には、冷えた德利が二三本並んでゐた。丁度其日は、土地で名高い藝者屋の綺麗なお酌や一本になり立ての妓などが來てゐた。曾我兄弟を踊つたり何かした。お酌の背の低いのと、一本になり立ての妓の背の高いのとが際立つてあたりに見えた。男形の方をお酌がつとめた。

酒と話だけでは、席がしらけさうになるので、やがてお酌たちは、再び何か踊ることになつた。踊る物がきまらないので、お酌達は向うの方へ行つて相談したり何かしてゐたが、醉ひながらも三味線の調子を合せてゐた鈴吉は、ふいと三味線の撥を外して、それを襖のわきに置いて、此方へと立つて來た。

『何うしたの？　鈴ちやん？』

鈴吉と秀香と女將と三人寄ると、きつとあとは酒に醉つて、お酌だの老妓などを澤山に聘んで、踊を踊つたり拳を打つたりして騷いだ。流連の朝が三八夜、時間になつて了ふやうなことも珍らしくなかつた。『何でも好いよ。たんと、お燒きよ。あれでも、あたいを待つてゐて呉れるんだよ。』鈴吉はこんなことを言つて、べろべろに醉つて、猪口の酒を餉臺の上にした〻かに滴した。

女將は女將で、例もする昔の藝妓時代の話を繰返し繰返し話した。『小高つて言へば、ねえお前さん、大政さんなんかでひどく贔屓にして呉れたんだからね。よく飲んだよ。あの時分は？　飲むと隨分無茶な事をしたもんだよ。そら、お前さん、あの時分、水道の鐵管が路傍に置いてあつた時分だよ。醉つて、お客樣と一緒にそこまで出かけたのは好いけども……お客樣が、おい小高、あの鐵管の中を潛つて、此方へ出られるかッて言はれて、出られますともとかなんとか言つて、そら、そこが醉拂ひだね。お座敷着のま〻で、あの鐵管の中をくゞつたぢやありませんか。丁度雨上りか何かで、路がわるいと來てるだらう。着物も帶もすつかり泥だらけ、髮にも一杯泥がついてゐたのを、それを知らずに、大政に行つたもんだよ、お前。すると、ね、今ゐるおかねさんの姉さんに當るおつるッていふ女中がゐたァね。好い女中衆だつたァね。そのおつるさんが、まァ、小高さんッて、びつくらする騷ぎさ。それで、當人は平氣でゐたんだからね。』

さう言つて、『ね、川島さん、今日は騷ぎませうね。』

兀ちやんがあらうが、情人があらうが、あの女が此處にゐて吳れゝば好かつたなどと思ひながら順吉は默つてゐた。濃い髮や白い肌などを思ひ出してゐた。

『だツて、川島さんも目がないよ、あの妓と小糸さんと比べれや、何方が好いか位は誰にだツてわかるのに、貴方にはそれがわからないんだもの。』

『好いよ、好いよ、そんな話。』

順吉はかう言つて打消した。

そこで餘所ながら見た藝者には、すぐれて美しいと思はれるやうなものもあつた。ある妓は艶に、ある妓は俠に、ある妓はさつぱりして見えた。お座敷着の裾の模樣や、長襦袢の色や、綺麗に撫でつけた髮や、さういふものがすべて美しく派手やかに見えた。その話を女中にすると、『なら、その中の好いのをかけたら、好いぢやないの。同じことよ。他で見るからさう思ふのよ。』かう女中は笑ひながら言つた。

五

鈴吉と同じ位の年恰好で、仲好で、もとは同じ家からわかれて自前になつて、今では三人位抱妓やらわけやらを置いてゐる秀香といふ中姐さんがゐた。小づくりな、眼の好い、怜悧さうな女で、藝も鈴吉に比べては一段も二段も上であつた。その妹に政子といふのがゐた。姉妹とも盃をよく口に當てた。

『えゝまだ、面白いでせうねえ、屹度。松葉屋のおとつさんや、お向うの兄ちやんなんかが行くんでせう。私も去年さそはれたんだけど、……つい用があつて行けなかつた。』
『川島さん、本當に行きませんか。』
『行つても好いね。』
『鈴ちやん、本當に、川島さんには、好いのを一人取持つてね。一緒に取巻いて行きませうねえ。』
『まだきまらないの？　さう？』
鈴吉がわざと目を睜ると、
『だッて、川島さん、龍ちやんにまだ思ひを殘してゐるんですもの。』
『殘してなんかゐやしないよ。』
順吉は傍から言つた。
『なら、好いけど……殘してゐるんですよ。あの妓、ちよつと旨かつたからね。あの妓にかぎつて、裏が返らないことは滅多になかつたからね。上手なところがあつたんですよ。そら、麻布から來た兀ちやんがゐたわねえ。』
『さう、さう。』
かう言つて思ひ出したやうにして、鈴吉は笑つた。

『さう？　此方？　龍ちやんの。』

かう言つて、鈴吉は川島の方をちよつと見た。順吉はこの鈴吉が、姐さん株で抱妓の三人も置いてゐながら、三味線も碌々彈けないといふことや、『鈴ちやんには、かうき棹は棹の方で泣き出すわ。』と言はれてゐることや、京都の縮緬商の息子で親に勘當されてゐるのを自分の宅に引取つて置いてやつてゐるといふことなどを彼方此方から聞いて知つてゐた其處のわけの友彌といふ妓は、『何うするんですかね。きつと、あとで、うんと絞るつもりよ。姐さん、實は惚れてなんかゐやしないんだもの。』などと順吉に話した。

『川島さんと旅をすると面白いのよ。サツぱりしてるんですもの。龍ちやんがゐるから、遠慮しようと思つて、此方ぢや心配して、女中に別間を聞いて貰つてゐるのに、好いよ、好いよなんて仰有つてね、ぐん〳〵寢て了ふんですもの。』

『まア、さう？』鈴吉は順吉の方を見て、『これから暖くなると、旅は好いわねえ。貴方、一度上方か何處かへ伴れて行つて頂戴よ。』

『旅は好いね。』

『道了さまの講中があるから、その中一緖に入らつしやいませんか、一緖に……。それは連中が面白い人ばかりですから、それは大騷ぎよ。鈴ちやん、まだ行つたことはないねえ。』

浸けてあつて、『お前、もう、其方はお燗がついたよ。』などと女中に言つた。女中はそれを持つて行つたあとで、其處の壁の處にある電話の把手をぐる〳〵廻して、『菊の屋さん、〆奴さんお座敷……さう、それぢや、梅香さん。え、梅香もゐない。困つたねえ、ちよつと待つて下さい。』かう言つて、受話機を耳にしたまゝ、女將の方を振向いて、『二人ともゐないんですッて、何うしませうね。……さう、君ちやんぢや具合がわるいわね。秀の家にかけて見ませうか。』かう續けて言つて再び電話をかけ始めた。

女將の坐つてゐる後には、玉帳だの會計帳だのが下つてゐて、茶器、銅器などが混雜と一杯に置いてあつた。何うかすると、出入の吳服屋らしい男が來てゐることなどもあつた。その男は肥つて赤い顏をして、イヤに順吉の方を見た。日が暮れて、今が潮先と言ふ時分には、綺麗な若い妓が二人も三人も入つて來て、挨拶して座敷の方へ行つた。ある姐さんは、『お上さん、ゆふべ、すつかり負けちやつた。』などと言つて舌を出した。『あの人とやるからわりいんだ。たちがわりいのは誰だッて知つてるぢやないか。』女將はこんなことを言つて笑つた。

時には女將が酒に醉つてゐることなどもあつた。『貴方、川島さん、一つお上んなさいな。川島さん、皮肉だから嫌ひさ。』かう言ふかと思ふと、『でも、ね、感心なところがあるのよ、貴方は。箒でも、浮氣の方ぢやないわね。』などと言つた。前の馴染の女と女將と三人して大洗の方へ行つた時の話などをした時には、鈴吉といふ束髮に結つた年增がそこに坐つてゐた。

せてやらうと思ふんですよ。』などと言つてはゐるが、蔭では不見轉をしないと言つて、歸つてさへ來ると、小言を言はれるといふ話であつた。『今の坊やちやんだッて、苦勞するんですよ。お上さん、あゝ見えてゐて、それは隨分なんだから。』などとも女は言つた。

泊つてのあくる朝十時頃など、二階に順吉がひとりでゐると、下には師匠が來て、七歳になるその貰兒に下方を教へた。それが晴れた日の障子に震へるやうに聞えた。其處に入る女達は、坊やちやん、坊やちやんと言つて、物を買つて來てやつたりチヤホヤしたりした。女將は日の長けるまで奧の間で寢てゐた。

風呂場は母親の寢間――そこには簞笥が三棹まで並べて置いてあつた――から、緣側を通つて行くやうなところにあつた。もう一人下働の下女がゐて、それが朝早く起きて鐵砲の中にコオクスを入れた。水道の管からは、水が瀧のやうに溢れ出た。

順吉は沸き立ての湯にひとりぽつねんとつかりながら、前の馴染の女と一緒に入つた時のことなどを思ひ出してゐた。其時女は、下働の女中に、『お小遣になさい。』と言つて五十錢銀貨を一つ握らせた。お婆さんは腰は曲つてゐたが、色の白い上品な切下姿で、何うかして廊下などですれちがつたりすると、

『まァ、貴方、お久し振でした。いつも御機嫌がよくつて。』などと挨拶した。

女將は女將で『まァ、貴方、此方にお入んなさいよ』などと言つて、順吉を長火鉢のある室の方へ伴れて行つたりした。光澤の好い大きな長火鉢、ピカピカ光る銅壺、そこには客に出す爲の德利が、二本

やうな女は大嫌ひだ。顔ばかり綺麗でも、怜悧で、手があるやうな女でなくつちや、一緒に遊んだッて面白くない。』

『ぢや、誰にしませう？』

『まァ好いから。』

かう言つた順吉は、好い機嫌で、酒を持つて來るやうに女中に吩咐けた。

女中は高崎近所のもので、色戀にはもう懲々といふやうな態度をいつもしてゐた。年はもう二十七八を過ぎてゐた。金を澤山に溜めて持つてゐるといふ評判だッた。『あれで却々男に馬鹿にされるやうな人ぢやないんですからね。金さへ溜めてゐれば好いやうな人なんですよ。何でも小千圓できかない位貯金してゐるでせう。』などと前の馴染は窃かに順吉に話した。そればかりではなかつた。順吉はその女の口を透して、そこの女將の今の旦那は、本郷あたりの請負か何かで時々やつて來るといふことや、相撲の大戸崎が情夫で、毎年一月と五月とには相撲が大勢やつて來るといふことや、その時分にはお上さんは大抵家を明けたり何かするので、旦那と喧嘩が始まるのが常だといふことなどを聞いて知つてゐた。女將には今年十七になる貰兒が一人あつて、それがよし町か何かに出てゐた。表面では、『何うせ、あれも立派な姐さんにはなれないんですから、何んな旦那でも一人出來さへすれば持たせて、好いたものなら一緒にさ

ゐるんだね。露香の方は、それでも秀子と僕と關係があることを知らないから、さう大して疑を持つてゐないけれど、秀子の方は、僕と露香と關係があつて、それでかうして、わざと一緒に聘んだのぢやないかといふ氣が何處かでしてゐるんだね。露香が十口言ふ中に秀子は二口位しか言はないんだ。そしていやに眼を働かしてゐるんだ。露香の言ふことを一生懸命に注意してきいてるんだ。』

『でもわかるでせう。』

『その中には解つたやうだツたけれど、それは僕はわざとはぐらかすやうにしてやつたからね。……終には、それに、秀子め、貴方戲談しちやいやよ、川島さんなんて言ふから、露香にもわかつたらうけれど、あゝして並べて見ると、可笑しなもんだな。』

『何ですね、貴方、人形か何か並べたやうなことをして。』

『でも、をかしかつた。』

『で、何うして？　秀子さん、來るの？』

『來るか來ないか知らない。そんなことをちよつと、便所のところで言つてゐたけれど、うん、またなんて好い加減にして歸つて來ちやつたから。』

『わるいねえ、貴方？　かけませうか、秀ちやんに……』

『好いよ、好いよ、別の女の方が好いよ。あんな女は面白くない。いやに澄して、高くとまつてゐる

あつた。

四

順吉は醉つて女中に話した。

『面白いもんだね、關係のある女と關係のない女とを二人並べて見るといふことは？』

『何うしたんです？』

『うん、別に何でもないがね。今、大政で、露香と秀子とを聘んで見たんだよ。』

『貴方一人で。』

『あ、先に露香が來たつけ。僕は露香には一度料理屋で逢つて顏は知つてるんだ。まァッて言ふやうな譯さ。で、二人でいろんな話をしてゐたんだね。と、三十分ほどしてから秀子が入つて來た。藝者がお座敷に入つて來る時には變な眼附をするね。もしや逢つてはならない人ぢやないかしらんッて言ふやうな表情だね。藝者なんて言ふものは、始終ビクビクしてゐるやうなもんだね。』

『まあ、人がわるい……。』

『まァ、聞けよ、さうすると、露香が氣の置けないやうな風をして、僕と話してるだらう。秀子め、ちよつと面喰つたッていふ風なんだね。それから、注意して見てると、二人はお互に樣子を讀まうとして

順吉は室にもどつて來て、『姐さん、何かきかして下さいな。』などと靜かな聲で言つた。順吉は盃を口に當てながら、お酌の無邪氣な綺麗な顏をなつかしむやうにして見た。

順吉は長い間醉はずにゐた。顏はいくらか青くなつて見えた。

『もう何時だえ。』

『十一時がもう少し前に打ちました。』

『ぢや、電車がなくなる。』いつもかう言つて、慌て〻順吉は歸る支度をした。時計を帶にまきつけて、インバネスを着て、そして急いで廊下から玄關に出た。

いつでも女中と女將とが送つて出た。玄關の格子の向うには籠行燈がぼんやりついてゐて、藁で包んだ蘇鐵などが其處に白く見えてゐた。女將のゐる長火鉢のある室には、明るく電燈が點いてゐた。

そこから電車の停留場はすぐ前に見えた。赤い電燈が淋しさうに人通りのない夜更の街に光つてゐた。近所の二階からは、賑やかなかつぽれの音が手に取るやうに聞えたりした。

電車の灯が向うの停留場あたりに明るく光つて見えることもあるが、時には十分も十五分も經つても電車はやつて來ないことなどもあつた。おそい電車は大抵空いてゐて、中には窓に首を凭せて假睡をしてゐる男などもあつた。電車の中には、何うかすると、知つてゐる男が乘つてゐて、それがわざと知らない顏をしたりすることなどもあつた。電車の來ない時には、再び戻つて、車を頼んで貰ふことなども

『何う？』

『好いよ、好いよ。』

『ちつとも好くはないわ。本當に何うするの？』

『好いよ。』

『好いよぢやわからないわ。今日はそれぢや歸るの？』

『うん、歸る。』

『ぢや、いけないのね。困るわねえ。ぢや、誰か外のを。』

『いや、氣に入らないんぢやないんだよ。結構だけどもね。厄介だからな。また、やれこれやらなくつちやならないと思ふと、面倒臭いからな。馴染なんかゐない方が好い。』

『あんなことを言つて。』

女中は考へてゐたが、

『ぢや、何うするの？　歸しても好いの。』

『好いよ。』

『さう。』

女中は向うに行つた。

かねて知つてゐる土地でもすぐれたお酌や老妓なども來てゐた。この妓ならと思つて女將の聘んで呉れた背の高い後姿の好い女などもゐた。その女は順吉の傍に來て坐つてゐた。

何方かと言へば、顏の少ししやくれた、受口の、色の白い女であつた。三味線はかなり上手に彈いた。しかし、順吉の好奇心を惹かないといふことは、女將にも女中にもわかつてゐた。

『ちよつと、貴方。』

かう女中が言ふと、順吉は、

『好いよ、好いよ。』

『でも、一寸。』

『わかつてるよ。』わざとお酌の方を向いて『ねえ、そんなことは好いやねえ。』

『お立ちなさいよ、そんなに困らせるもんぢやありませんよ。』

傍から老妓が言つた。

『厄介だな。』

皆なから勸められるので、仕方がなしに、順吉は立つて廊下の方へ行つた。

『貴方、本當に人がわるい。』

女中はかう言つてから、肩のところを叩く眞似をして、遠いところに押してつれて行つて、小聲で、

『え、清川の龍ちやん、もうあの人引いたんでせう。』
『あゝ。』
『あの人には二三度一座をしたわ。怜悧な人でしたわね。賣れた人ね。』
かう言つて、『あの人、此處に情人があつたんでせう？』
『さうだッてね。』
わざと盃をさして、『君は何處にあるんだえ？』
『私なんか駄目よ。そんなものがある位なら、苦勞なんかしませんよ。』
話をしても別に面白いこともないので、順吉は茶碗を取つてボソボソと飯を食ひ始めた。

三

ある夜はイヤに落附いてさびしさうにつまらなさうにして順吉のゐるのを女將も女中も見た。いろいろにして機嫌を取つて見ても、順吉は竟に竟に冴えなかつた。『何ァに、かうして來るのも、矢張室に馴染んでゐるからだよ、お上。此處に來ると、屹度この懸物がかゝつてゐて、ちんこ柳か何かさしてある。大黑のこの置物がある。この天平美人がゐる。それが好いんだよ。女なんか何うでも好い。』こんなことを言つて順吉はひとりで酒を飲んだ。

『だツて、逢はない中と、逢つてからとは違ふもんだからね。あそこで、金のことなどを喧しく言はれると愛想が盡きるよ。まア、乘りかゝつた船だから、一度はとは思ふがね。』順吉は笑つて、『それもね、逢つてから、又別な味が出て來りや何うなるかわからないけど……。』

『だから、およしなさいツて、私があれほど言つたんだ。』

『好いよ、好いよ。』

その朝は順吉は近所の料理屋から取つて貰つた味噌椀や鷄卵燒などを菜に、さびしい顏をした女を相手にしてつまらなさうに酒を飮んだ。女は半年ほど前この土地に來たある家の抱妓で、座敷着なども何遍も縫ひかへしたやうなのを着てゐた。齒が少し出てゐて、笑ふと、額に皺が寄つた。

『ちつとはいそがしいかね。』

『丸で駄目ですよ。』

『秀子ッて言ふ妓を知つてるかえ。』

『え、知つてるわ。』

『ぢや、雪子は。』

『雪ちやんとは滅多に一座をしたことはありませんけど、一度あつたわ。』

『龍子つて言ふのがゐたねえ。』

の女が手水をつかひに風呂場に下りて行つたあとへ茶を運んで來た女中は、イヤに笑ひながら、

『何うでした?』

『何が?』

『何がもないもんだ。』

『好いんだよ。もうあれでたんのうしたんだよ。ちつともよくありやしない。丸で大根だよ。』

『さう。』

『だッて、あれから、金の話をするんだものね。あそこまで行つて金の話をするまで振られちや、男だッてやり切れないね。しかし、あれで好いんだ。一度でも逢へば、それでたんのうするんだ。もうよくわかつた。』

『それで、何うするの?』

『何うもしやしないよ。』

『あの妓だッて、それぢや可哀相だよ。私は又あとを貴方がかけるから、照ちやんあのまゝ歸つたのかと思つた。さうぢやなかつたの?』

『あゝ。』

『男つて、そんなもの。』

『わかつてるよ。』

『なら、好いわ。』

『それから、内所にして置いて頂戴よ。』

『好いよ。』

かう言つて、順吉は小照の手を痛いほど握つた。小照は『痛いわねえ、貴方。力があるのねえ。』

暫くしてから、女中は莞爾しながら上つて來て、

『貴方、お起きなさい……。そら、早く起きなくつちや、照ちやん、歸つちやうつて？』

順吉はむつくと起きて、厠へ行つて、それから女中に後を押されるやうにして、下の四疊半に入つて行つた。

その四疊半の隣は六疊で、女將とその貰兒の寢間になつてゐた。貰兒は今歳七歳で、冴えた聲でよく下方などを打つてゐた。その向うには、女將の本當の母親の寢るところがあつた。女將の藝者をしてゐた時分の姿を描いた鉛筆畫などが額になつてかゝつてゐた。

二

小照の歸つたあとで聘んだ藝者は、顏の貧相な、わるく瘦せた、淋しい表情をした女だつた。朝、そ

『照ちやん、ちよつと。』

かういふ女中の聲が下でした。

小照が下に下りてゐる間はかなりに長かつた。順吉は獨りで盃を重ねた。餘りに量のない順吉はもう苦しくなるほど醉つてゐた。小照が上つて來た時には、順吉は赤い顏をして横に倒れてゐた。順吉の眼には莞爾した小照の顏が映つた。

『苦しいの、おひやを上げませうか。』

『誰か呼ばう。』

『なァに、私が持つて來るわ。』かう言つて持つて來て、順吉が旨さうに飮んで了ふのを見て、『私、今日十時のお約束があるのよ。』

『ふむ――』

『それまでは好いんですけどもね。……泊つては行かれないわ。』

『泊らなくつたッて好いよ。』

『それにね、私ね、こんなことはしたことはないんだから……。不見轉とは違ふんだから……。』

『下で、何か言つたのかえ。』

點頭いて見せて、『貴方、よくわかつてるの。』

駄目なのはわかつてゐるけれども、別に誰かいいのがないかと考へてゐた。

順吉は順吉で、此家に來るやうになつた自分の心の徑路などを繰り返した。かうして、かういふところに來るやうになつた心の孤獨なことも考へた。八疊の間には廣業の醉筆の天平美人の横額などがかゝつてゐた。下の六疊の前が中庭になつてゐて、其處には平生は使はない飾りの車井戸などがあつた。二階の下の四疊半、壁と庭との間に挾つて、こんなところに室があるかと思はれるやうな長三疊、障子を明けるとすぐ物干になつてゐる六疊、さういふ室のさまを順吉はをりをり頭に浮べた。その六疊の間ではある女は、『ね、ちよつと待つてゐて頂戴、一時間よ。ちよつと稼いで來ますから、その中、これが私よ。』こんなことを言つて、匂ひの高い麝香紙を順吉の懷の中に入れたりした。狹い長三疊で、此間までゐた女に逢つた時は、暑い暑い夏の夜だつた。風は何處からも入つて來なかつた。『暑い、何うも暑い。』こんなことを順吉は言つた。

『今日は誰も聘ばないの。』

『澤山聘んだッて仕方がないぢやないか。藝者は食へるんぢやあるまいし。』

『さう、召上れないの？　私はまた召上れるかと思つた。』

小照の三味線は何方かと言へば旨い方ではなかつた。しかし聲には量があつて、長唄などを唄ふと旨かつた。後には、流行唄などを小照は彈いた。

すつと立つて、今度は順吉と女將の間に坐つて、『隨分お久し振ね。』
『うん。』
『うんだつて、此方は――。』
『だッて、返事をしたんぢやないか。』
『隨分な挨拶ね。ねえ、お上さん、人が寒いのに、わざ〳〵寢てるところを起きて來て上けたのに……。』
『今日は貴方を酷めるんだとさ。』
女中が傍から言ふと、
『誰が？』
『此方が。』
『さう？　嬉しいわねえ、たんと、酷めて頂戴ね、貴方。』
小照は順吉にしなだれかゝつた。
順吉はつねに似ず機嫌の好い顏をしてゐるのを女將も女中も見た。女將も女中も好いお客だと思つてゐた。前の女にもこの客はかなり金をつかつた。月に尠くも二三百圓の拂ひはした。芝居にも作れて行けば、向島あたりにも出かけて行つた。土地で名高い料理屋で騷いで、その後を女と此處に轉げ込んで來たりした。何うかして、氣に入るやうな、長く續くやうなものを取持ちたいと女將は思つた。小照は

ゥ酷めてやるやうな華奢な女でなくつちやイヤだつて仰有るんですよ。』

『まあ、』と女將は自分の方を見て、『ぢや私なんか、眞平の方ですね。何うでせう、まア、こんなに肥つて……。』かう言つて、肥つた膝を輕く叩いて見せた。

奥の間ではお座附が始まつてゐた。客は二人づれらしかつた。順吉はさつき便所に下りて行く時、襖の明いたところから若い妓と並んで坐つてゐる商家の番頭らしい男を見た。

『いつも賑やかだね。』

『お蔭さまで。』

處へ、輕く階梯を上る音がしたと思ふと、靜かに襖の傍に寄つて來る人の氣勢がして、すッと二寸ばかり明いた處から、小照の白い顏が浮き出すやうに顯はれた。

『あら、此方。』

すつと入つて來て、『何方かと思つたのよ。下には婆ちやんと三毛きりゐないんでせう。何でも二階だつて言ふから來たんですけれどもね。……何方かと思つたのよ。』其處に品をして坐つて、

『貴方いらつしやい！　お上さん、今日は。』

『お前さん、隨分口は達者ね。』

『だッて。』

様だつて、お馴染がなくつちや、おみ足が遠くなるのは、當り前ですからと思つてね。これでもね、精精骨を折つてさがしてはゐるんですけれども。』順吉のさした盃をちよつと口に當てて、『何ういふのが好いんですかね……。そればかりはね、ちよつとわかりませんからね。あァ、あんな人がと思ふやうな妓に精々と通ふ人もあるんですからね。そら、お前。』女中の方を向いて、

『あの妓ね。そら、此間、お目にかけた妓ね。ちつとも、好いことはないんですけどもね。あれでもね、かなりお賓をつかふ方があるんですからね。』

『此方は、「なんだ、あれは。」と言ふんですもの。隨分、私きまりがわるい思ひをしました。本當に、此方は口がわるいんですから。』

かう女中は傍から言つたのを女將はすぐ引取つて、『それに、そら、此間の？　あれもいけませんでしたか。さうですわねえ。あの妓位なら、もう何處へ出したつて恥かしくないんですがね。矢張、氣合ですかね。』

『まァ、好いよ、その中好いのに邂逅するだらう。』

『まァ、是非、さうして頂かなけりやねえ。一體、何ういふのが好いんでせうね。薄手の方がお好きなんですね。』

『此方はね、お上さん、大きい妓はきらひだつて言ふんですよ。』女中は笑ひながら、『此方からギウギ

『好いッて言ふのに……。あんな奴のことは何うでも好いッて言ふのに……。』

『でも、ね、お上さんも心配してるのよ。誰か好いのがないかッてね。それは、本當よ。本當に心配してるのよ。』

『心配して吳れるのは難有いが、ぢかでやらせられるやうぢや、心配して貰つた甲斐がないやうなもんだね。』

『でも、ね、お上さんが今下で言つてたわ。よく言つて見るッて？　その代り、ちつとお賽が出るかも知れないッて言つてたわ。』

『構はないよ。』

四五杯飮むと、順吉の顏はぽつと赤くなつて來てゐた。順吉はある期待を心に持つて、いつもより機嫌の好さゝうな顏をしてゐた。其處へ誰か上つて來る氣勢がした。やがて襖が明いて、前を大きく束髮に結つた色の白い女將の顏があらはれた。

『まア、貴方。お久し振ね。今日もお噂してたんですよ。何うなすつたか知らと思つて。』かう言つて入つて來が、床の間の花の凋つてゐるのを見て、それをちよつと直して、『何うかなすつて？』

『なアに……。』

『矢張、あの妓がゐないから思ひ出すこともないんでせう。怜悧な妓でしたに……。それや、ね、お客

『好いよ。』

『ぢや、ぢかね。』

かう言つた時には、女中の姿は後の襖から廊下の方へ出て行つてゐた。順吉はひとりで小照の姿を頭に浮べながら默つて坐つてゐた。順吉は小照を前から知つてゐた。此の家に來た三度目位から知つてゐた。細い指をした華奢な藝者で、年はもう二十二三だが、小づくりなので二十位にしか見えてゐなかつた。

『ぢや、ね、今度ね、今度は是非ね、今日は生憎これなんですもの。嘘ぢやないのよ、本當よ。ぢや見せて上げるわ。』かう言つて帶の間から脫脂綿を見せたりなどした。小照はいつも何の彼のと旨いことを言つて座敷を外して行くやうな女であつた。それを順吉は常に心憎く思つてゐた。女が自前の姐さんでもなく、立派な旦那があるといふのでもないのを知つてゐるだけそれだけ、順吉にはそれが心外に思はれた。馴染んだ女がゐなくなつた後、順吉は二三度かけて見たが、いつも出てゐてやつて來なかつた。

『是非一度は、逢つて見たい。』かう順吉は思つてゐた。

女中は酒と通し物とを持つて入つて來た。莞爾しながら餉臺を布巾で拭いて、『今、すぐうかがひますツて。』

『ゐたかえ。』

『え、すぐ……。』かう言つたが、『それにしても、あの人さへゐりや好かつたのにね。今に、又出ますよ。』

『あんな大きな女はイヤだ。一度で懲りちやつた。とても、此方がかなはないからな。』

『戯談をおつしやいよ。』

澄して言つて、煙草をスパスパ吸つて、『何んなのが好いんでせうね、本當に、貴方には――。』思ひ出すやうにして、『政ちやんはいけないし、鈴公は駄目だし、きイちやんはいけなかつたし、さう思ふと、貴方も隨分箒ね。』

『だつて、碌なのはゐないぢやないか。』

『矢張、あれが好いんでせう。あれを思ひ出すんでせう。もう好い加減にあきらめなさいよ。あんな妓なんかいくらもあるぢやないの？　あの人ね、向うに圍はれてからも、始終逢つてるんだツて、これと。』拇指を出して見せて、『だから旦那も、此頃は薄々勘附いて來たらしいツて、何うせ長いことはない。』

と、順吉はそれに觸れられるのを厭ふといふやうに、『いゝよ、あいつのことなんか何うでも……。』

『ちつとも好くはないんでせう。』

『まァ好いから、誰でも早くかけて呉れなくつちやァ困るぢやないか。』

『さうね。』女中は立上つて、『ぢや、照ちやんをかけるの？』

順吉は點頭いて見せた。

『出來なくつても知らないよ。』

孤獨

一

『誰にしませうね。』

『小照は來ないかな。』

『照ちやん、さア。』女中はちよつと考へて、『來るでせうけれども……。』

『駄目かえ。』

『駄目な事は無いでせうけれど……。』順吉の傍にべたりと坐つて、餉臺の上に置いてあつた敷島を一本取つて、それに火をつけて吸つて、『貴方、秀ちやんにきめて了へば好いのに……。あの妓は隨分貴方のことを言つてるのよ。』

『いやだよ、あんなの。』

『何うしてイヤなの？　好い妓ぢやないの？　背はあるし、色は白いし、藝だつてあるのよ、あれで。』

孤獨 外十編

どゝ話した。大抵の姐さんは、皆去年ので間に合せた。『本當に、こんな不景氣ぢや爲方がない。』こんなことを言つて、呉服屋は頭を搔いて見せた。

桐家では、この暮にはひとりわけの妓を置きたいなどと言つてゐた。小奴の方の始末がついたので、とても一人では駄目だから、是非一人好いのをさがさなければと言つて、あちらこちらの桂庵に口をかけた。桂庵から種々な女を伴れて來た。

新道の人達は、噂とちがつて、何の悶着も起らない桐家を不思議にした。相變らず母親は如才なく、妹は肥つて、小藤は元氣よくお座敷に出て行つた。好い男の方をやめたのかと思へば、さうでもなく、旦那はまた旦那で、莞爾した顏で、いつものやうにやつて來ては泊つて行つた。

年の暮は段々押詰つて行つてゐた。寒い風が吹いたり冷めたい雨が降つたりした。春のお約束の數が次第に景氣よく殖えて行つてゐた。ある流行妓の綺麗な妓は、もうお約束が三十幾つあるなどと噂された。

小藤は一方旦那の情が忘れられないと共に、一方まだ男のことが思ひ切られないといふやうな心持でその年の暮を過した。押しつまつてからやつて來た旦那は、默つていつものやうに姐さん達の春の約束をつけて呉れた。別に變つたこともなかつた。小藤が新らしく出來た出をひろげて見せると、『色が思つたより旨く上つたね。それに、梅の模樣が變つてゐて好い。』などと旦那は言つた。母親の忙しがつてゐる傍で、妹は姉の長襦袢の襟などをつけてゐた。

兒を里に出して再び褄を取つて出るといふ噂であつた。ある家の姐さんは、たうとう家が張り切れなくなつて、夜逃同樣にして何處かへと姿を躱した。

吳服屋の男は、ちよい〳〵その新道に姿を見せた。月の家の小鶴の家では、立派な春の出が出來たなどと噂された。桐屋の噂も彼方此方できかされた。『まだ、あの旦那も男も來るんだらう。』などゝ小鶴が訊くと、『え、來るんですとも……。』此間も旦那に逢ひました。』

かう吳服屋は言つた。

『藤ちやん、何んな出が出來たの？』

『ちよつと好いんです。梅の花の大きく出たものですがね。あんまり安いんぢやありませんよ。』

『矢張、あの旦那がして吳れたのかしら？』

『さうでせうよ。』

『旨いねえ、矢張、藤ちやん。』

『何うして、あそこの姐さんは……。それに、母さんも中々しつかりしてゐますから。』

『帶は？』

『帶ですか。帶はあるからなんて言つてゐましたけれど……。』

吳服屋はつゞいて、今年は不景氣で、出を新たに染めさせた家は指を折つても數へるほどしかないな

『それはさうね。あの人だッてさうですもの、すぐ心の裏が見えるんですもの。見え透いて困る位なんですもの。』

旦那は考へて『だから、浮氣をするにしても、此方で損ばかりしてゐては、爲方がないよ。損をするにしても、第一に自分の身を考へなけりやいかんね。その爲めに、生活が立たなくなるやうぢや爲方がないね。一番先は、生活だからね。』

『それは本當よ。』

『だから、そこのところをよく考へるさ。そして浮氣を出來るだけの浮氣にして置くさ。母さんなんかに心配をかけない程度にしておくさ……。』かう言つて笑つて、『もう少し、長い目で見てるんだね。そして好かつたら、一緒になるんだね。』

『でも、駄目だと思ふわ。』と、小藤は考へるやうな顏色をした。

その細い新道に住んでゐる妓達の上にも、短い間に種々の推移があつた。隣の鈴吉の家では、たうとう事件が破裂して、役者は別に近所に家をさがして住むことになつた。久しく明いてゐた前の家には、下谷からある妓が家族と一緒に移つて來て住んだ。旦那は若い男で、そこから每朝何處かへ出かけて行つた。

角の藝妓屋では、一時旦那が隆々とした勢で、お腹が大きくなつて廢業させる時には、世話になつた姐さん達を招待して、立派な引祝などをしたが、此頃ではすつかりいけなくなつて、來春からは、その男の

『でも、人の奥樣になれば――。』

『何うだかわからないよ。長い間お互に思ひ合つてゐて、いざ細君になつて見ても、窮屈で家庭などにぢつとしてゐられなくなつて、また出て、待合の女將となつて、そこに、元の亭主が情夫のやうにして通つて行くツていふ話は、よくきくからね。矢張、他に忘れられない小馴染といふものがあるんだよ。そしてさういふ人にも時々逢つて見たいんだよ。少くともさういふ餘地をつくつて置きたいんだよ。男一人に全く占領されて了ひたくないんだよ。』

『さうかしら?』

『さうに違ひないよ。』

『さう言へば、さういふところがあるかも知れませんね。』

『だから、あゝいふ情夫が一人位あるのも好いさ。』

『すぐあゝなんだから……。さうぢやないツて言ふのに……。』

『無理はないよ、しかし、小さい時分から、さういふ風な境遇ばかり通つて來たんだから。だから、とても普通の女のやうにしてはゐられやしないよ。矢張、情を玩弄品にばかりされて來たから、さういふ風になつたんだよ。その證據には、本當の情を受けても、それを疑つたり何かして、すなほに受入れられないやうなところが屹度あるに違ひない。』

『なァに、やめなくつたッて好いぢやないか。本當に身が堅められる自信があれば、一緒になる方が好いぢやないか。』

『駄目だわねえ。』

『無理に駄目にしなくつたッて好いよ。』

『でもねえ、あれでねえ、もう少ししつかりしたところがあると好いけれど、何うも締りがないんですもの。金なんか、借りだつて、返さうなんて思ふことはないんですもの。』

『他に、女があるのかえ?』

『その方は此頃はないらしいわ。此前の時にも、さう深い女ではなかつたんですけどもね。私がいくらか目が覺め氣味になつて來て行つたもんだから、それを引張る氣で、ああいふ女を見せつけにつれて來たんですわねえ。今考へて見ると、よくわかるわ。何でもあとから考へて見るとわかるものねえ。』

『それはさうだよ。僕だツて矢張さうだよ。今になりや、すつかりお前のことがわかつて來るからね。』

『でも、私は本當に貴方には隱しやしないわ。もう、何にも祕密は持つてないわ。』

『でも、隨分酷い目に逢はせたもんだ。』かう言つて旦那は笑つて、『しかし、矢張、かういふ稼業をしてると、氣分が何うしてもさうなるんだと見えるね。男ひとりでは何うしても滿足してゐられないといふやうなところが出來て來るんだね。』

『何うせ、何とも思はなかつたんでせう。煩さい奴だ位に思つたんでせう。それにちがひないわ。でなけりや、すぐ來て下すつたつて好いわけなんですもの。』

『勝手なことばかり言つてる。自分のことは棚にあげて――。』

『本當ですよ。もつと酷めてやる方が好う御座んすよ。』笑ひながら傍から母親が言つた。

小藤はいつもよりも旦那の機嫌の好いのを見た。そればかりではなかつた。小藤の方から言つても、離れがたない心が、更に一種の情味を加へて來るやうなのを覺えずには居られなかつた。小藤は三味線を出して彈いたりなどした。二人になつてからは、將來の話なども細々盡きずに出た。小奴が仕替へに出た話などをした時には、小藤は小奴の賣れなかつたことだの、言ふことを聞かなくつて困つたことなどを話した。山崎に關しては、『うそよ、本當よ。とても駄目よ。だツて、私が皆なしてやらなくつてはならないんですもの。いくら好い男だつて、それぢやイヤになるわ。こつちがつゞきませんもの。』かう小藤は言つて種々と男の話を旦那にしてきかせた。『ね、後生ですからね、默つて止すことだけはしないで頂戴ね。後生ですから……止すなら止すつて、イヤになつたつて、はつきり言つて下さいね。此間はそれは心配したのよ。』こんなことをも小藤は言つた。

ある時、旦那と小藤とは次ぎのやうな話をした。

『忙しかつたんだよ。』

傍から母親は言つた。『本當に困つたんですよ。あの晩は……。もう遲いからツて言つて、いくら留めても言ふことをきかないんですもの。』

『あの晩は隨分つまらなかつたわ。おまけに寒い晩で、暗いさびしいところを通つて行つたのよ。それで貴方の家をぐる〳〵廻つて來たんですもの。隨分馬鹿々々しいわね。』

『時には、さういふ眼に逢ふのも好いさ。僕なんか、この家の周圍を何遍廻つたか知れないんだから。』

『うそばかりおつしやい。』

小藤は打つ眞似をした。

『だから油斷が出來ないぜ。』旦那はかう言つて大きく笑つた。

旦那の心がまだ自分を離れないのを見た小藤は、すつかり連日の重荷を下したやうな氣がした。小藤は嬉々と唯うれしかつた。『あの晩、てる子ちやんの聲がしてたわよ。母ァさん、おやすみなさいなんて言ふ聲がきこえてゐたわねえ、㗛ちやん。』妹の方を向いて言つて、『あの時、書齋にゐたの？』

『あゝ。』

『その次ぎの朝、手紙を見た時は何んな氣がして？』

『さア……』

『うむ、少し用があつたもんだから。』旦那はかう言つて莞爾しながら、此方の方へと入つて來た。
『今も今、お宅に行つて呉れッて、これに言はれてゐたんですよ』母親も嬉しさうにして言つた。
『うそよ。用なんかなかつたのよ。』
『いや、ちよつと出られないことがあつたもんだからね。』
『うそよ。』
かう言つて小藤は凝と旦那の顏を見たが、『怒つたんでせう？』
『怒りなんかしないよ。』
『怒つたのよ……。それに違ひない……。』ちよつと途切れて、『此間の晩はゐらしつたの？』
『うん、ゐた。寄ればよかつた。』
『だッて、始めから寄るつもりで行つたんぢやないんですもの。それに、もうおやすみになつてゐたやうだつたわ。』
『起きてゐたよ。』
『さう？　それで、あの手紙、奥さんに見られて？』
『見られやしない。』
『ぢや、矢張、朝早く起きて、貴方があそこから出したの？……それなのに、ねえ、貴方は隨分ね。』

『それは始めからわかつてるぢやないか。』

『でもね、お金があつて、遊んでゐるんなら、面白くないことはないわ……。いくらもさういふ人もあるんだもの。』

『まだあんなことを言つてる。』

『ね、行つて頂戴よ。後生だから。』

『勝手ばかり言つてるよ。一體、お前があんまり大袈裟なんだよ。浮氣をするなら、するにしても、もつとぢみにしなくつちやうそだよ。この間のやうなことをするんだものね。あれぢや、旦那だツて默になつて了ふのは當り前だよ。』

『今度はぢみにするわ。』

『馬鹿をお言ひでない。』

こんな話をしてゐると、ふと格子戸が明いて誰か來た氣勢がした。

虫が知らせたやうに急いで立つて行つた小藤は、嬉しさうに手を拍いて、思はず聲を立てた。

『まァ、旦那！』

母親も立つて行つた。

『何うしたんです、まァ貴方。』

小奴が住替へに出て、そつちの方がきまつたなら、その金にいくらか旦那から出して貰つて、『もつと綺麗な賣れる妓を置かうと思つたが、その思惑も何うやら外れさうになつて來てゐるのを小藤は見た。それに、小奴の住替への口にも思はしいのがなく、いつそ田舍にでも行かうかなどゝ言つてゐるので、『その位なら、もう一度此方でかせいで御覽な。』と言つてきかせても、小奴はいつも煮え切らないことを言つて家の方へ歸つて行つた。小奴にしても、此家にゐては、とても月々の稼高もきちんきちんとは勘定をしても貰へないといふ腹があるらしかつた。いろ〱な方面から、歡樂の報酬が小藤の身の上に迫つて來てゐた。

『母さん、大塚へ行つて來て頂戴よ。』小藤は終にこんなことを言ひ出した。

『私が行つたッて、しやうがないぢやないか。』

『でも、困るぢやないの?』

『だッて、爲方がないよ。皆な、身から出た銹なんだから。』

いつもなら、すぐ反抗する小藤も默つて唯暗い顔をしてゐた。

母親は言つた。『だッて、私が行つたつて、耻をかきに行くやうなものぢやないか。山崎が來てゐるのに旦那にそんなことは言つて行かれないぢやないか。』

『あの人は何うせ駄目よ。』

書齋らしい室には灯の影も何もなかつた。小藤はそこでも一寸覗いて見たが、犬の子がひよつくり其所から頭を出したので『まあ、イヤだ。びつくりした！』かう言つて、再び表門の方へ引返して來た。そして小藤はその門の袖のところに靜かに步み寄つて、今日書いて置いた手紙をそつと郵便函の中に入れた。小藤は旦那の早起きなのを知つてゐた。二人は引返した。

それでも旦那は姿を見せなかつた。をり〳〵來なければ來なくつても好いといふ心持になつたが、さういふ時に全身を捧げやうと思ふ一方の山崎が、煮え切らない好い加減な暢氣な調子で物を言つてゐることを考へると、小藤はぢつとしてはゐられないやうな氣がした。確實に攫んだと思つた山崎が、存外つかんでゐないといふことを發見した時には、小藤は自分の愚かであつたことが痛切に身に染みて振返られた。

質の利子も拂はなければならず、待合の勘定もしなければならず、吳服屋にもこの暮れには少しは纏つた金をやらなければならず、お茶屋へのつけとゞけもしなければならず、さうかと言つて、母親にそれを出して置いて貰ふわけにも行かない。小藤は暢氣に浮氣などをしてゐるやうな氣分には何うしてもなれなかつた。山崎が來ても、小藤はいつも浮かない詰らなさうな顏をして相對した。一緒になるといふ話も此頃はもう二人の間には出なかつた。

て、サッサと向うの方に歩いて行つた。女づれは束髪に結つた三十前後の女であつた。別に怪みもせずに話しながらすれ違つて行つた。

曲ると、其所に裏門があつた。一方は垣の中、に二階屋があつて、それにつゞいて、二三軒小さな家が並んでゐた。ふと、五六間先に行つた小藤は、二重になつてゐる垣の中から灯の影が栞越しに動いてゐるのを認めた。小藤はまた垣に身を寄せた。

今度は子供の聲がはつきりと耳に入つて來た。婢の物を言つてゐるのなども聞えた。其所が茶の間になつてゐるらしかつた。細君らしい聲もきこえた。

手招きして、小聲で妹に、『てる子ちやんまだ起きてゐるのよ。聞えるだらう?』

『あ。』

妹も垣に身を寄せた。

子供は、今、寢衣を着換へて寢るところらしかつた。『母さん、おやすみなさい。』かう一人が言ふと、また一人が、『母さん、おやすみなさい。』と言つた。それからあとはしんとした。

『旦那はゐないのかしら?』

『もう、寢たのかもしれないわ。御酒をあがると、いつでもすぐお休みになるから。』

『さうね。』

小藤は垣に身を寄せて、其所から中を覗いて見た。何か物音がしやしないか、子供の聲でも聞えやしないか。かう思つて、小藤は聞耳をも立てた。妹は姉の半身がそのまゝ動かずに黒く地上に落ちてゐるのを、少し離れて、長い間立つて見てゐた。

姉はやがて垣から離れた。

『聲がして？』

『何だか、子供の聲がしてゐるやうだけど……。』

『てる子ちやんの聲ぢやなくつて。』

『よくわからない。』

小藤はまた歩いて行つた。裏の方にも樹が一杯に繁つてゐた。夜風は靜かに殘つた葉の上に吹いた。

『ひろい家ね。』

『隨分ひろいわ。』

『書齋は何方になつてゐるか、お前知らないの？』

『さうね、何でも、向うの方でせう。座敷の向うの方に離れがあるやうだつたから。』かう言つて妹は奥の方を指さした。

ふと女づれが向うから話しながら近づいて來た。で、二人は話をやめて其所を通る人のやうな顔をし

つた。
冠木門の前には敷石が敷いてあつて、丸い軒燈の光は、はつきりと表札の字を明るく讀ませた。家の周圍を取卷いたかなめの生垣の中には、大きな建物の屋根が夜目にもそれと明かに見られた。四邊はしんとしてゐた。雨戸はすつかり閉まつて、灯の影は何所からも洩れて來なかつた。
『もう寢たのかしら。』
『まだ、寢やしないでせうけども、雨戸が閉まつてゐるから。』
『玄關から直ぐ座敷になつてるの？』
『さうよ。』
こんな話をしながら二人は其所に立つてゐたが、小藤はそのまゝ垣に添つて、中を覗くやうにして、邸の角の處へと行つた。要垣の中はひろい庭で、月の光が庭木の影を縱横にそこに落してゐた。姉のあとについて妹も靜かに歩いて行つた。邸の角から細い路がついてゐて、それについてゆけば、ひとり手に家の裏の方にゆくやうになつてゐた。
此方の隣の家からは、靜かな話聲が洩れて聞えてゐた。
『此所が勝手ね。井戸があるわ。』
『さう。』

『さうね。こんなにあるとは思はなかつたわ。間違つたのかしら。』妹も胡亂にたつたらしく立止まつて、『何處かできいて見ませう。』

妹は向うに、明るい窓を見附けて駈けて行つたが、やがて引つ返して來て、『矢張間違つたのよ。さつき、坂を上がつて曲つてから、又、左に曲るのを忘れたのよ。』

『困るねえ。』

で、あとにもどつて、少し行くと、果して其處にこまく〳〵した町らしいところがあつて、その向うに自働電話の灯が明るく見えてゐた。

『もうわかるわ。』

妹は急に自信を得たやうに、サッサと先に立つて歩いた。またいくらか爪先上りになつてゐるやうなところであつた。大きな門と軒燈とが、軒毎に續いた。

路の角に街燈が一つ明るく點いてゐた。其向うに、大きな二階屋が見えた。妹は指さして、『あそこよ。』

『あの二階屋の家？』

『あの向う、そら、門のあかりが見えるでせう。あそこよ。』

二人はやがてその軒燈へと近づきつゝあつた。丁度、角屋敷になつてゐるやうなところで、矢張、栽ゑ込の樹木が深く四邊を籠めてゐた。櫻らしい木の枝からかけて、月は白くその奥にある大きな樹に照

『さうね……。もういくらもないわ。そこから少し行くと、また坂があるのよ。それを上がると角に大きな邸があつて、それから曲つてゆくんだと思つたわ。』言ひかけて、妹は考へるやうにして、『それから、何でも町のやうなところがあつて、角に自働電話があつたわ。』

『ぢや、まだ大變だね。』

山の手の夜は靜かであつた。家々の門に軒燈かさびしくついてゐるばかりで、人一人通つて行かなかつた。やがて二人は坂の所に來た。それは低い坂で、成程妹の云つたやうに、角に大きな石の門のある邸があつた。栽ゑ込の常盤木が深く茂つて、丸い電燈の光は松や椿の葉裏を照してゐた。

そこから曲つて、二人は猶暫く歩いた。書生らしい男が向うからやつて來て、じろじろと此方を見ながら擂れ違つて行つた。それでも中にはまだ雨戸を閉めない家が一二軒あつて、其所からは靜かな話聲が洩れて聞えた。

『自働電話のところからは、まだ餘程あるの?』

『そこからはぢきだわ。』

しかし、行つても行つても、町らしいものも、自働電話らしいものも來なかつた。路は段々さびしい屋敷町へとはひつて行つた。

『お前、大丈夫かえ? 間違つたんぢやないかえ?』

暗い水に物凄く映つてゐるのが見えた。

『さむしいところだらう？』

『え、隨分。』

『それでも、路はちやんと知つてるかえ？』

『大抵、知つてる積りだけど……。』

こんな話以外に、二人は別に何も話さなかつた。やがて電車の明るい灯の中に二人の姿は見えた。

乘換をするところの電車の停留場は、廣告燈だの、電燈だの、家々の灯などで晝のやうに明るくなつてゐた。自働車が人の大勢待ち合せてゐる傍を勢よく通つて行つた。

電車の中の灯に照された小藤の顏は、際立つて神經性に蒼白く見えた。電車は段々さびしい山の手の屋敷町の方へ進んで行つてゐる。

さびしいある停留場から下りた二人は、少し行つた所の石塀のあたりから曲つて、蕎麥屋だの八百屋だの靴屋だのの並んでゐる新開らしい町を通つて、また曲つて、暗い坂を降りて行つた。寒い風が吹いて空には月が寒さうに光つた。

『さびしいところね。』

小藤はかう言つて、『まだ、餘程あるのかえ？』

小藤は考へてゐたが、急に『お母さん、あの此間の着物を出して頂戴。』

『何うしても行くのかえ？』(強情だね)といふ顔の表情をしたが、それでも母親は小藤の言ふなりに箪笥から着物を出した。コートも襟巻をも出した。

『お咲、お前、行つてお呉れ。』

『はい。』

妹は從順に立つて、自分も出かける支度をした。

『寒いよ、外は……』

『大丈夫よ、まだそんなに寒くはない。』

『行くなら、晝間にしたら、好ささうなものだがね。』

『行つたつて、上がりやしないのよ、唯近所まで行つて見るのよ。』

『御苦勞な話だね。』

『好いのよ、何でも……』

小藤はぷいとした。で、爲方がないので母親は默つて了つた。

やがて二人は出かけた。寒い月が明るく空にかゝつてゐるやうな夜であつた。橋の傍まで行くと、月の水に碎ける影がチラ〱と寒く光つた。岸にかゝつた船の船尾のところでは、裸火を焚いてゐるのが

『それで、行つてどうするんだえ？　平生、行つてもしないで、まさか、夜、初めて行つて上がる譯にも行かないぢやないか？』母親はかういつて小藤の顔を見て、『それより、明日お咲に行つて貰ふなり、手紙を出すなりする方が好いぢやないか。』

『あがらなくつても好いのよ。唯、行つて見るのよ。』

『遲いよ、もう……』

『八時なら、まだ遲くはないわ。』

母親は默つて了つた。言ひ出しては、通さないではおかない娘の性質を母親はかねてよく知つてゐた。

『お咲、お前、一緒に行つて呉れるね。』など、小藤は言つてゐた。妹は敢て拒みはしないが、母親と姉の顏を見い〳〵生返事をしてゐた。

『電車を下りたところから餘程あるのかえ？』

『さうね、十町位あるわ。』

『いや、此所から橋のところ位なもんだと思へば大丈夫ね。』

『さうね。』

『もつと遠い？』

『もう少しあるわ。』

當然心配しなけりやならないんだから。』

『それがあの人に出來る位なら、心配しないよ。』

『ぢや、そんなことは言はない方が好いよ。』

小藤は默つて顔を曇らせた。一方の旦那も此頃は小藤の事情を知つたらしく、次第に足が遠くなつてゐた。小藤は山崎のことを考へたり、旦那のことを考へたり、質の利息のことを思つたりして日を暮した。『誰か二百圓ばかりお實を貸して呉れる人はないかしら。』小藤は交情の好い奥の朋輩の許に行つてはこんなことを話した。

一夜小藤は急に思ひ立つたやうに言つた。

『母さん、これから大塚まで行つて來やうと思ふのよ。』

『これから？』

母親は眼を睜つた。

『お唉に一緒に行つて貰つて……。』

『だつて、お前、もう遲いぢやないか、もう八時だよ。』

『でも、構はない。』

ま來なくなるやうなことはある筈はない。かう思つて、手紙を書くことを思ひ止つて、二三日待つて見ることにした。

一日經ち、二日經つても、矢張、旦那は姿を見せなかつた。いつも遣つて來る時刻には、小藤は殊に待ち心になつてゐた。格子戸が明く度に、旦那ではないかと思つた。

しかしそのまゝにまた一週間は經つて行つた。其間に山崎は二度もやつて來て泊つて行つたりした。ある日は雨が降り、ある日は風が吹いた。隣の鈴吉の家では、照山との關係がすつかりばれて、役者と鈴吉とは毎夜のやうに喧嘩をした。ある夜は、鈴吉は狂言に卒倒して見せて、近所合壁を騒がしたりした。

『母さん、何うしたんでせうねえ？』

『本當だねえ？』

入費の多い年の暮がもう迫つて來てゐるのに、此處で旦那に離れられては、それこそ爲方がないといふ心配が母親の胸にももう段々萠して來てゐた。しかし、母親はわざとそれを顔には現はさなかつた。

『だツて、爲方がないよ。お前がわりいんだから。』といふやうな調子で母親は口をきいた。

『あの方の利息も入れてやらないと流れて了ふわね。』

『それは當り前さ、お前。』母親はかう言つて、『山崎に出してお貰ひよ。山崎が男なら、その位のことは

うな人は情がないにきまつてゐわ。』とか何とか言つたが、それは通り一遍の心持で、その奥に潜んでゐるまことの心は、決してそんなものではなかつた。寧ろその不滿が小藤に種々な懊惱やら不安やらを齎らして、そこから由崎との關係なども實は始まつて來たのであつた。

その細君には、小藤はこれまでに一度も逢つたことはなかつた。しかし旦那の口から、種々なことを聞いて、何んな人であるかと言ふことは略想像して知つてゐた。それに、旦那は今年の春あたり、カビネ形の細君の寫眞を一枚持つて來て置いて行つた。髪を恰好の好い束髪に結つて小さな白い花の細かく出た黑の裾模樣を着て、立派な帶をしめて、いくらか顏を斜に、微笑を湛へて立つてゐた。これが大勢の子供の母親とは思はれないほど年若く見えた。『お若いわねえ、これで三十五？　三十位にしか見えないわねえ。』などゝ小藤はその時言つた。小藤はある日寫眞箱の中から寫眞を發見して、凝とそれに長く見入つた。

小藤は圓滿な家庭を想像して、くわつと心が燃えた。何うしても、此まゝ旦那とは別れられやうとは思はれなかつた。

手紙を書き出して見た。

一度、二度、三度まで、思ふやうに書けないので丸めて捨てた。四度目には、つまらない、手紙なんかやるのは、却つて此方の心を見られるやうなものだ。母親の言ふ通りだ。もう少し待つて見やう。此ま

つた道を二人して靜かに步いて近い溫泉宿に行つた時には、旦那が心からの戀人か何ぞのやうに思はれた。細君さへなければ、年位少し違つてゐても、無論自分が身を任せたに相違なかつた。今でも小藤はさう思つてゐた。旦那の細君になる時の幸福などを頭にくり返すことなども偶にはあつた。

それが――さういふ細かい關係が何うして普通のお客か何ぞのやうに平氣で別れて行つて了ふことが出來やうか。あの時だッて、旦那のことを思へばこそ、無理に二人に逢つて貰つたのだ、さういふ心持は男なんかにわからないかしら……。

手紙でも出さうかしらと小藤は考へて見た。しかし、拙い自分の字を旦那の細君に見られるのかと思ふとすぐその思をひるがへして了つた。これまでにも、手紙をやつて、細君に見られて笑はれたことが一度や二度ではなかつた。あの時以來、小藤は旦那に手紙をやることをすつかり思ひ絕つた。『だッて、貴方はすぐ何でも奥さんに見せて了ふんですもの。もうこりごりしたから手紙なんか上げません。』と其時小藤はきつぱり言つた。

細君と旦那と交情が好いらしいのも小藤には物足らなかつた。何ぞと言ふと、『お照、お照、』と旦那は細君のことを言つた。『だッて、女房は女房さ、今更何うにもしやうがないぢやないか。』旦那は笑ひながらよくこんなことを言つた。

初めは細君に對する旦那の愛情を寧ろ頼もしいやうに思つて、『それが本當だわ。奥さんを思はないや

自分が旦那に對して持つた力――眼やら肌やら姿やら心やら體やら、さういふものはまだ旦那に對して立派な力を持つてゐるとは信じてゐるけれど、一方ではそれと反對に、旦那がもしこれきり自分を捨てて行つて了つたらどうだらうと思つた。その場〻、小藤は邪魔がなくなつて、清々して好いとは決して思はないに相違なかつた。『何んな事があつても別れるのはイヤですから、それだけはよしませうね、ね。』かう言つて旦那の腕を自分の腕に組み合せた夜のことなどが小藤の頭に往來した。確かに自分はさう思つてゐるのだけれど、旦那もまた、『何んなことがあつても別れるのだけはよさう。都合がわるければ一年に一度でも好い。七夕の逢瀬でも好い。』なんて言つてゐるけれど、それはその時だけで、歡樂のエクスタシイに陷つた時だけで、それが何ういふ風に向うから溶けて流れて行つて了ふかわからなかつた。自分にしてもさうだから、向うだツて何うなるかわからないと小藤は思つた。

時にはさういふ心持からすつかり離れて、何うなつたつて構はない。先方でさういふ氣なら、それでも好い。何うせ稼業なんだから……。旦那なんか拵へやうと思へば、いくらでも出來る。何もそんなことをくよくよするには當らない。かう思つて廣々とした心持になることもないではないが、さういふことはわづかの間で、すぐ心は旦那と自分との長い間の關係の方に落ちて行つた。其處にも此處にも思ひ出すやうな種は澤山にあつた。ある山の上の宿屋、ある海岸の波の音の高い旅館、ある家のある一間は川に臨んで、向うに橋が見えて、その橋の上の春雨の中を靜かに紺蛇の目の傘が通つて行つてゐた。雪の積

『本當だね。』

母親も心配にはなつたが、これきり旦那が手を引かうとも思はれないので、『なァに、その中入らつしやるよ……。お前だツて、勝手な眞似をして置いて、今更そんなことを言はれた義理ではないぢやないか。』

『でもねえ。』

『ぢや、矢張、旦那に來られなくつてもお前は困るんだねえ。』

『それはさうだわ。だツて、長い間お世話になつたんだもの。』

『勝手なもんだね。』

母親はかう言つて笑つた。

もう何うしても來なくつてはならないと思ふ頃になつても、旦那は姿を見せなかつた。そろ〱小藤は心配になり出して來た。此間、別れた時も、別に機嫌をわるくしたやうな形跡はなかつたけれど、考へると、種々な狀態やら言葉やらが、ある意味を持つて小藤の頭に蘇つて來た。あの時以來嫉妬らしいことを旦那は言はなくなつた。それが小藤には第一氣にかゝつた。旦那の腹の中には、確かにある決心が出來たに相違なかつた。

『さうかしら？』

『此間いらしつた時、別に變つたことはないんだらう？』

『變つたことはないわ。』

山崎も時々はやつて來たけれど、小藤はもう今までのやうに大騷ぎをしなくなつてゐるのを母親は見た。底の底まで行つて見て、ふいと引返して來たやうな不思議な心理が此頃小藤の心の上に起つて來てゐるらしかつた。『だッてね、いくら惚れてゐたッて、あれぢや、とても駄目だわねえ。』時には小藤は絶望したやうに母親に言つた。母親の想像した通り、山崎は約束のものは月々よこしても、それ以上に茶屋小屋に勘定がたまつて、段々身動きも出來なくなつて行つてゐた。

十一月の末の日影の寒い窓のところに坐つて、小藤はやがて歲暮の近くなることなどを考へてゐた。山崎に對して愛情がいくらか覺めかけて行つた時に、急に手を引くやうな形を見せて來た旦那のことが小藤には少なからず心配になつて來てゐた。そんなことはない、そんなことはある筈はない。あれほど私に心を絡ませて來てゐた旦那が、俄かに私から離れて行くといふやうなことはない。それは確かに男の手だ。かうは思ひながらも、その手が果して手であるか、それとも本當であるかといふところに行くと、小藤にもその判斷はつかなかつた。小藤は一日一日と心さびしく暮した。

『母さん、本當に何うしたんでせうね。』

行つてゐるのを見た。一週間、十日目位になつても、旦那がやつて來ないと、小藤はいつも氣を揉んだ。

『何うしたんでせうね？』かう言つて心配さうな顏をして、ほつねんと長火鉢の前に坐つてゐた。

『だッて、お前がわりいんぢやないか。旦那だッて、腹が立たないことはないんだからね。』

此頃、小藤は山崎に對していくらか覺め加減になつてゐるのを知つてゐるので、母親はわざとこんなことを言つた。

小藤は最近に逢つた夜、旦那は種々と將來のことを話したことなどを繰返した。その時は旦那の心も體もいつもに似ず、小藤の心と體とに深く絡みついて來てゐるのを感じた。火と水との中に其身を置きながら、その火にも燒けず、水にも溺れないといふやうな強い賴み甲斐のある旦那の心、そこに捨て難いある情味の出て來るのを小藤は思つた。『なら、どんな事があつても私を捨てない？』小藤はかう言つて、凭りかゝるやうな心の姿を示した。其時、小藤は藝者をやめる話や、それ以後の生活の方法や、費用や、さういふことを詳しく旦那に話してきかせた。

『母さん何うしたんだらうね。もう、此間入らしつてから十二日目になるよ。』

『さうだねえ、餘り間が遠すぎるね。』

『お咲に行つて貰はうかね。』

『何處か旅にでも行つてゐらつしやるかもしれない。』

も何もありやしないんだから……。娘の體が何うならうが、悲しからうが、辛からうが、そんなことは何うでも好いんだから。』

『好いぢやないか、まァ。』

急に一轉した形勢に再び吃驚した旦那は、かう言つて傍からなだめた。

『ちよつとも、私のことなんか心配して吳れやしないんだから……。』

『まァ、好いよ。』

母親は默つてこそ〳〵と勝手の方に行つた。小藤は緣の赤くなつた眼に微笑を含んで旦那の方を見たが、『本當に、私のことなんか誰も考へて吳れる人はありやしない。私なんか、早く死んで了へば好いんですよ。』

今度は小藤は立つて着物を脫いだが、再び此方に來た時にも、肝立つた神經は歴々とその蒼白い昂奮した顏に見えてゐた。旦那には何が何だか少しもわからなかつた。この小藤の態度が、何うした心理の發現であるかといふことも旦那には飮込めなかつた。旦那は默つて唯坐つてゐた。

小藤は頭が痛いなどゝ言つて、頭痛膏を兩方の顳顬に張つた。

それから一月二月經つて行つてゐた。小藤は不思議にも自分の心が以前よりも多く旦那の方へ偏つて

かう旦那が言つても、小藤は返事をしなかつた。小藤は唯欷歔り上げた。

『本當に、何うしたんだえ。』

母親も傍から言つた。『何うかしたのかえ。何かあつたのかえ？』

それでも小藤は猶顏を旦那の膝から擡げなかつた。押へた手巾の下からあつい涙の滲んで來るのを旦那は感じた。

『本當に何うしたんだえ？』

『私なんか……私なんか――。』かう言ふ聲が微かに聞えて、小藤はまた體をもがいた。

『話さないぢやわからないぢやないか。氣分でもわるいのかえ？』

小藤は輕く頭を振つて見せた。

『お前、また醉つたんだらう？』母親は傍に寄つて、『本當に、始末にいけない。醉ふといつでもかうなんですよ。騷ぐか泣くか、何方かなんですからね……。お前、着物が臺なしぢやないかね。それに、旦那だツて膝が重いぢやないかね。』

抱へて起すやうにして、『着物をぬいでから、寢るならお寢よ。』

これを聞くと、ぐつと癪に觸つたといふやうに急に身を起した小藤は、『着物の方が惜しいんでせうよ。私の體より着物の方が惜しいでせうよ。』キツと目を据ゑて、『母さんは、すぐあゝなんだから。人情

い、何うせ不仕合せに生れついたんだから、一家の犠牲にばかりなるやうに生れついたんだから――』

小藤はかう獨りで言つて、あつい涙の兩頰を傳つて流るゝのに任せた。

家に歸つて見ると、旦那は長火鉢のところに坐つて母親と何か話してゐた。旦那はいつものやうに機嫌の好い顔をしてゐた。

『何うしたんだえ？ ひどく醉つてるぢやないか。』小藤が入つて來てべたりと其處に坐るのを見て旦那は言つた。

『醉つちやつたわ。』

『また飲んだのかえ。』

困るねえと言はぬばかりに母親が顔を見い／＼言ふと、

『でも、爲方がないわよ。何うせ、私には長生きなんか出來ないんだから。』かう言つたが、お座敷着のままで突伏すやうに旦那の膝へ體を凭らせて、『私なんか、何うなつて了ふんだらう？』

急に堪らなくなつたやうに身をもがいて泣き出した。

母親も旦那も事のあまりに思ひがけないのに吃驚したといふやうに、唯ぢつとそれに見入るばかりであつた。小藤の體は斜に線を描いて、帶のあたりが浪を打つやうに微かに動いて見えた。

『何うしたんだえ？』

事があると言つた。『そんなことはないけれどもね……今日は行かない方が好いよ。其中行くよ。』かう出崎は言つた。『なら、好いわよ。』かう捨臺辭を言つてそして小藤は電話を切つた。

お客を送り出した時には、小藤はかなり醉つてゐた。『何うかしたの？　お前さん、今日は？』などゝ女中は訊いた。『でも、あんまりくさ〳〵するんですもの……。何を言つてもぐづ〳〵してゐるんですもの。くさ〳〵しちやつたのよ。』

『お前さん、あと口があるんだがね。一つかせいで行かない？』

『さうね、今日は歸るわ。何だか頭が痛くつて爲方がないから。』

かう言つて、小藤は斷つて、其處から出て來た。車に搖られながら、『何うなつたつて構はない。なるやうになる方が好いわ。あゝぢれつたい！』などゝ思ふ一方には、何故、先の旦那が落籍せてやると言つた時に、素直にひかされて貰はなかつたらうなどゝ思つた。あの旦那なら、金はあるし、深切だし、今頃はこんな苦勞をしなくとも、立派に圍はれてゐることが出來たものを……。かう思ふと、自分はすつかり、あの時から運を取り逃して了つたやうにも考へられた。知つてゐる妓達の仕合せな生活も種々に思ひ浮べられた。ある妓は奧で立派な二階屋に住んで琴などを習つてゐた。ある妓は可愛い男の兒を生んで、乳母をつかつて贅澤な暮しをしてゐた。(何故自分は子供がないんだらう。せめて子供でもあれば、何んな男にでも、縋つて苦勞をして見るのに……。でも、爲方がない、こんなことを思つても仕方がな

『お前、斷つてお出でよ。』

『でもよくやすんでゐるから。』

で、支度をして小藤は出かけた。不思議にも、不愉快で、何だか思ひもかけない災厄がやつて來るやうな心持がして爲方がなかつた。一方では得意のやうな氣もするが、一方では何故あの時男を歸して了はなかつたかといふ後悔の念が盛に起つた。餘りに乘氣になつて馬鹿なことをしたといふやうに思はれた。

お客は一人で、ほつねんとして奥の間に坐つてゐた。女中に訊くと、初めてのお客だといふ。唄を唄ふでもなく、三味線を彈かせるでもなく、さうかと言つて深酒をするでもなく、ぐづ〳〵と面白くもない田舍の話などを話しかけて、時々皮肉なことを言つたりした。小藤は何となく癪に觸つた。『一つ戴きませうか。』など丶言つたが、一時間も其處にゐる間には、いつか飮むともなく飮んだと見えて、やがて體は燃えるやうに熱して來てひとりでいろ〳〵なことを饒舌り出した。女中が行つて見た時には、『貴方、本當に、そんなに固くなつてゐるもんぢやありませんよ。もう二三人藝者をお聘びなさいよ。お騷ぎなさいよ。』など丶言つてゐた。後にはお客なんかほつたらかして、自分で勝手に、三味線を自暴に彈いた。

しかし、かうなるについては、單にお客が癪に障つたばかりではなかつた。來て三十分ほどした頃、小藤はお帳場の傍の電話室の中に入つて何か頻りに電話で話をしてゐた。軈て女中は小藤の突詰めた顏をして其處から出て來たのを見た。小藤は態々呼出した山崎の言葉を氣にした。山崎は何うしても今日は用

『いゝえ、今、車で歸つたわ。』

『さうかな。』

母親もやがてまた二階にあがつて來てゐた。母親はすまなかつた申譯などを長々とした。旦那は成たけそれに關した話は避けるやうにと心がけてゐるらしかつたが、しかも話はいつか其方の方に向つて行くのを小藤は見た。行がかりで逢はせて、その逢はせたのが、却つて旦那に對して不利益であつたやうに小藤には思はれた。男のイヤに廉を立てたやうな態度も、氣にかけずには置かれなかつた。

『いつそ、私、何處かに行かうかしら？　今ならまだ少しはお寳が借りられるから……。』小藤はこんなことを言つて、神經性の顏をした。小藤の心は俄かに沈んだ。小藤の頭には種々の考が縺れた絲のやうにこんがらがつて集つて來てゐた。一方、男と今までのやうな關係をつゞけてゐれば、とても今までのやうな生活はつゞけて行かれない。さうかと言つて、男を捨てゝ旦那に金を出して貰ふのもつまらない。誰か自分の祕密は知らずに、金を澤山積んで吳れるやうな人がないかしらなどと思つて見ても、さういふ旨いことは何處にもなかつた。小藤はいろ〳〵に考へながら、醉つた旦那の赤い顏を見た。

醉つて旦那が寢てしまつた處へ、奧の料理屋からお座敷がかゝつて來たので、『ちよつと、行つて來ますからねえ。起きたら、さう言つて置いて下さいよ。』

『さう』

そこに、車がやつて來た。

『ぢや、すぐ入らつしやい。明日でも、明後日でも……』小藤は立つて行く山崎の後から送つて行つたが、母親がちよつと勝手の方に行つた間を見て、『今日は何方に居るの、向うの方？　なら、あとで電話をかけるわ。來たつて好いぢやないの？　母さんなんかに氣兼なんかしなくつたつて好いわよ。用がすんだら、夜おそくつても好いから、奧に來ない？』

『まア、この次ぎにしよう。今日は來ない方が好いと思ふよ。』

『あんなことを言つてるのよ。』

母親も妹も出て來た。山崎はやがて車に乘つて、深く幌をして、ちよつと挨拶してそして歸つて行つた。

小藤は暫く簞笥の前のところに立つて考へ込んでゐたが、やがて思ひ返したといふやうにして二階に上つて行つた。小奴は姐さんと入ちがひに下に下りて行つた。

『下に行つてゐても好いよ。』

『もう、歸つたのよ。』

『歸つた？　だつて車の音がしなかつたぢやないか。』

行つてお相手をしてゝお呉れよ。』と頼んで、笑ひながらその前の處に來て坐つたが、『歸らなくつたつて好いんでせう？』

『イヤ、今日はちよつと用があるから。』

『だッて、そのつもりで來たんぢやないの？　歸らなくつたッて好いつもりで來たんでせう？』

『イヤ今日は歸らう、兎に角歸る方が都合が好いことがあるんだから……。』

『さう？』

かう言つて男の顏を見たが、『用がすんだら、來たら、何う？』

『まァ、都合にしやう。』

『折角、來たのにねえ。』

『何ァに……』

男の言葉の中にも、イヤに眞面目な形式振つたところのあるのを小藤は見遁さなかつた。母親に對しても、この場合遠慮しなければならないと男は思つてゐるらしかつた。それに奥の待合の勘定の溜つてゐるといふことに就いても、男は母親に氣兼をしなければならなかつた。

『ぢや、何うしても歸るの？』

『今日は歸らう。』

つて？』
『ないよ。』
『本當に、言つて下さいよ。言つて下さるわけだつたんですもの。』
『まァ、好いよ――。』盃を干して、
『それよりも、此頃は何處で逢つてるんだえ。此處に來るんだらう？』
『そんなことはないわ。』
『何うだかわからない……。』
『それはないわ。』
『まァ、然し、そんなことは何うでも好いや。何うでも勝手なことをしてるのが好いのさ……。』
かう言つて考へて、『それにしてもえらい芝居を打たせたもんだな。かうして二人並べて見るといふことは女には得意なんだね。今のお芝居ではお前が一番旨い役をつとめたわけだね。』
『そんな風に思ふの？　それどころぢやなかつたわ。心配だつたわ……。でも、本當にすまなかつたわねえ。』小藤は考へるやうな顔をして、下の話聲に耳をすましてゐたが、『もう車が來たらしいわねえ。ちよつと挨拶して來ますから。』かう言つて、急に立つて下に下りて行つた。
丁度その時山崎は長火鉢の傍に坐つて母親と話してゐた。小藤は小奴に、『お前さん、ちよつと二階に

を見せて、緣側を向うに行つた。階梯を下りる音が靜かにきこえた。
『送つてお出でな。』
『いゝのよ。』
『好いことはありはしないよ。』
『まだ、車が來ないでせう、屹度。』かう言つて小藤は旦那の顏を見て、笑ひかけて何か聞きたいとい
ふやうな風をしたが、それはよして、『お氣の毒でしたわねえ。』
『それよりか、お前のことをよく賴んで置いてやつたよ。』
『私のことを……。いつ？　噓でせう……。』
『噓なことがあるもんか。』
『いつ？　今？』
『お前が下に下りて行つてゐた間に……。』
小藤はいくらか顏を赧くして、
『さう。何ッて賴んだの？』
『旨く賴んで置いてやつたよ……。好い男だねえ。』
『あんなことを……。ちつとも好くなんかないわ。何處か、おつちよこちよいのやうなところはなく

かう母親が傍から言ふと、
『イヤ、もう醉ひました。』
『まだ、いくらも飲まないぢやありませんか。』
『いゝえ。』
山崎は其處に置いてあつた盃の酒を殘らず飲干して、徳利を持つた旦那の手を避けるやうにして、『もうやめませう。』
『ぢや、車を呼びませうか。』
母親はかう言つて山崎の顏を見た。
『え、何うぞ……』
母親は下りて行つた。やがて山崎は立ちかけたが、旦那の方を向いて、
『大變失禮しました。』
『まア、好いでせう。』
「また――」
『今、車が來るわ。』
小藤は傍から言つた。それにも拘らず、山崎は丁寧に挨拶して、その儘立つて、欄干のところに後姿

男の顔はやゝ赤くなつた。

『本當ですよ。ひとつ、大に力になつて貰ふんですね。』

かう言つては見たが、旦那は餘りに深く入りすぎて、皮肉にも、厭味にもきこえるやうに思はれたので、急に押默つて盃を手に取つて、飲んで、自分が手酌をした。旦那の顔からは、微笑の影がいつか全く消えて行つて了つてゐた。

『ひとつ、明けたまへ。』

男は默つて、ぐつと飲んで旦那に差さうとするのを、旦那は無理に押へて、徳利を押しつけるやうにして酌をした。

暫しの間二人は默つて相對した。

男は、ちよつとへこ帶の間から銀側の時計を出して、蓋をあけて、時間を見て、默つて、またそれを元の通りに藏つた。

母親と小藤とが上つて來ると間もなく、山崎は歸り支度をした。山崎は再び帶の間から時計を出して見たが、『四時半頃に、ちよつと用がありますから……。いゝえ、何アに、大したことぢやないんですけども……』かう言つて、小藤の方をちよつと見た。

『まア、好いでせう』

住んでから、今だに行つて見る機會がないといふ話などをして、『ですから、何しろさういふわからない頃に出て來たのですから、故郷と言つても、ちつとも知つてはをりません。一度は行つては見たいと思つてゐるんですけれど、都會の氣風に染みると、田舍なんかに行く氣にはなりませんでね。』

『それはさうでせうとも。』

『旦那はよく知つてゐるんですよ。彼方此方を……』

傍から小藤は言つた。

旦那も男も小藤も互に其間に微妙に連絡してゐる三つの肉體のことを考へずには居られなかつた。それは丁度はやてのやうにやつて來た。そしてそれが襲つて來る時には、三人とも言ひ合せたやうに押默つて深く考へ込んだ。その沈默の間を隣の仕込みの拙い三味線が皮肉に縫つて行つてゐるのを三人は耳にした。

小藤はふいと立つて下りて行つた。

男と旦那とは相對した。

旦那は急に笑ひながら、

『本當に、君のことは眞劍に思つてゐるんですよ。』

『イヤ……』

『此頃、弱くなつたわねえ、貴方も……。』小藤は旦那の方を見て言つた。

こんな平凡な對話が長く續いた。男は旦那の面白さうに笑ふのを見、旦那は男の得意さうに種々と話をするのを見た。しかし、表面はかく平和に、靜かに、何の蟠りもないやうに見えてゐながら、裏面では、心の波の烈しく巴渦を卷いてゐるのを誰も感ぜずにはゐられなかつた。小藤には特にそれがよくわかつた。

母親は下に用事が出來て下りて行つた。小藤は何となく心の動搖と壓迫とを感じたといふやうに眼を鋭く旦那の方へと移して行つた。いくらかてれかくしといふ風で、

『召上らないの？』

かう言つて、德利を取つて前にある盃を旦那の手にするのを待つて、靜かに酌をした。

旦那と男との會話は、丁度その時芝居の話になつてゐた。男は舞臺監督のことだの、舊派の役者の內部だの、背景のことだの、女優の內幕だの、脚本のことだのを何彼と話した。旦那は、『一度見たことがありますが、ちよつとわからない飲込めないやうなものでした。』などゝ言つた。

男の生れた故鄕の話なども出た。

『あゝさうですか、山口ですか。あそこらは、昔行つたことがありますから、少しは知つてゐます。』

かう旦那は言つて、その近所の名所古蹟の話などをした。男は十四の時、其處を出て、一家東京に移り

『いや、僕なんかもう行つたつて爲方がない。それに忙しいから。』

『それはさうでせうね。』母親は酌をしながら、『でも半年で西洋まで行つて來られるんですからね。世の中はひらけたもんですね。私の從兄なんか行く時分には、行くだけにも半年位かゝつたんですがね。』

『それは便利になりましたよ。』

山崎は盃を口に當てながら言つた。山崎はやゝ醉つて顏が赤くなつて來てゐた。急に、旦那は、

『君は？　酒は？』

山崎の答へるのを待たずに、傍から小藤は言つた。『弱いのよ。ぢき、醉つて了ふのよ。』

『旦那と同じ位でせう。』

かう母親は笑ひながら傍からつけ足した。

『僕と同じ？　そんなことはないでせう？』

『さうよ。ぢき醉つて了ふのよ。』

『本當ですか？』

『え、餘りいけない方です。』

山崎は旦那の顏を見ながら言つたが、『貴方はお強いんでせう？』

『駄目です。もとは少しはやつたけれど、今は一本位ですつかり醉つて了ふんだから。』

と旦那との心の關係を探るやうな位置に身を置いてゐるやうなのを感じた。

『矢張、向うに行つて來る方が好いでせうね。』

『それは、何うしてもさうですけれど……』ちよつと考へて、『でも、矢張、思ふやうには行きませんから。』

『何處です？　行かうと思へば？』

『何處ッてきめてもゐませんが、一まはりあちこちを見て來たいと思つてゐるんです。初めドイツに行つてロシヤからスカンヂナビアの方までも行つて見たいと思つてゐますけど……』

『大變ですな、それぢや。餘程時日がかゝるでせうな？』

『何アに、見物見たいなもんですから、一年かければ充分です。半年でも行つて來れば來られるんですから。』

『でも半年ぢや爲方がないでせう。我々の會社の伴侶のやうに、唯、見物といふわけにも行かないでせうから。』

『まア、それはさうです。』

『旦那もいつか行くやうなことを仰有つたことがありましたね。』

かう傍から母親が言ふと、

『何うです？　一つ。』

旦那は取敢へず盃をさした。

會釋して男の受けたのに、母親は傍から酌をした。

旦那は捌けて種々なことを男に話しかけたり訊ねたりした。初めて相對した刹那の動搖した低氣壓はいつの間にか去つて、からりと晴れたとまでには行かなくとも、靜かに落附いた氣分があたりに漂つてゐた。小藤はつとめて一座の梶を旨く取るやうにと心がけた。

しかし山崎にはこの會合がさう得意でもないらしかつた。それが小藤にはよくわかつた。話をする中も、いくらか思ひあたつたやうなところがあつた。初め思つたとは反對に、旦那の方が却つて砕けて打解けて蟠りのないやうなのを小藤は見た。

『外國へ行くさうですね。』

『何うなりますか。』

山崎は輕く笑ひながら答へた。

山崎は女の口を透して、この旦那の何ういふ性質で、何ういふ爲事をしてゐて、何ういふ氣分で、常に何ういふことを言つてゐるかといふことをかなり詳しく知つてゐた。しかしそれと反對に女が自分のことを何ういふ風にこの旦那に話してゐるかといふことは山崎にもわからなかつた。山崎は口裏から女

その足音が上り切つたと思ふと、ガラス障子のかげに半身の姿が見えて、だらりと下げた白い手首が見えて、やがて靜かに山崎は入つて來た。

二人は相對した。

旦那は髪を綺麗にわけた男を見た。いくらかきまりがわるさうに赤くなつた色の白い鼻の高い莞爾した顔を見た。結城か何かの一枚着に高貴の縞の羽織を着て、新しいキャラコの裏白の足袋を穿いて、金と赤銅のたゝきわけの時計のくさりを兵兒帯に絡ませてゐるのを見た。

其處に來て、

『初めまして……。』

『やあ、初めまして。』かう言つて互に挨拶したが、旦那はわざと砕けて、『よく聞いてはゐるんですよ。』

『いや。』

かう言つて山崎は頭を下げた。山崎の眼には肥つたがつしりした旦那の姿が映つた。

母親は小藤がいくらか赤くなつたやうな顔に微笑を湛へて、二人のかうして相對してゐるのを見た。

母親は笑ひたいやうな氣分になつた。

『きまりをわるがつてゐる事はちつともないッて言ふのですに……。』

『それでも……』山崎はかう言つてやり場に困つた眼を母親の方に移した。

かう母親は小藤に言つた。

『さうね。』

母親は下りて行つた。下で何か言つてゐる氣勢がした。行くとか行かぬとか、きまりがわるいとか言つてゐるらしかつた。小藤はちよつと立つて右の高窓の明いてゐるのを他から見られないやうに閉めた。が、下で頻りに母親が何か言つてゐるのに耳を假しながら、急に眞面目な沈んだ顏をして、『お氣の毒ね、本當にすまないわねえ。』

『………。』

『勘忍して下さい。』

『何ァに好いよ。』

旦那は小藤の顏を見て笑つた。小藤の眼には涙がうるみ出してゐるのを旦那は見た。

『本當に、そんなにきまりをわるがらないでも好う御座んすよ。お出でなさいよ。』かういふ母親の聲が下でしたが、やがて母親は銚子の代りを持つて來て、『今、來ますツて。きまりがわるいのよ。』

でも、山崎は容易に上つて來なかつた。『何うしたんだらうね。』かう母親は獨語のやうに言つて、階段のところへ行つてもう一度聲をかけたが、やがて思切つたといふやうに靜かに男の階梯を上つて來る足音がした。その足音は旦那の胸にも小藤の胸にも際立つて響いて聞えた。

電話から歸つて來た妹が、母親に用をきゝに二階に上つて來ると、『あのね、もう、婆や歸つて來た？　それぢやァね、すぐお酒の支度をしてお吳れッてね。それから餉臺を持つてお出で。』

『何方の？　小さい方？』

『大きい方だよ。』

小藤は傍から言つた。

妹はやがて欅の新しい大きな餉臺を運んで來て其處にひろげた。それと同時に、母親は取敢へず午の菜のこちの煮たのと盃と德利とを持つて來てその上に並べた。『まだ、何にも來ませんけど、お一つ。』などと母親は酒を勸めた。

旦那は强ひて機嫌の好いやうな顏をして、盃を口に當てた。しかしその心の中の懊惱は小藤には一々よく解つた。それに、自分の勝手を通して見ると、今度は旦那が氣の毒になり出して來た。氣が附くと、小藤は旦那の情と男の心とを比較して考へてゐた。

やがて料理が來て餉臺の上に並んだ。相對して同じやうに箸と盃とが置かれた。旦那はその箸が相手の箸と共にいつも遣ふ象牙の箸――小藤のと箸箱の中に一緒に入つてゐる象牙の箸ではなくて、普通の割箸であるのを見た。旦那は何か言ひたさうな顏をしたが、しかし默つてゐた。

『ぢや、呼ばうかね。』

さうすれば、此處で一時間ほど話して、そして歸して了ひますから。さうすれば、あの人だツて、氣持よく歸つて行きますから。』

『好いよ、さう言つてお出でよ。』

『なら、さうして下さる。』小藤はかう言つていそ〳〵と下りて行つたが、やがて引違ひに上つて來た母親は、『本當ですか、好いツて仰有つたの？　お氣の毒ですねえ。本當に申譯がないんですけれど、運わるくお眼にかゝつちやつたもんだから。』

『向うでも、逢ふツて言ふんですか。』

『何うですか、それはまだ話して見ないんですけども……。それはきまりがわるがつてゐるんですよ。明日來りや好かつたなんて言つてゐるんですよ。』

『なァに、私さへ我慢すれば好いんですから。』

『お氣の毒ね。』

近所の料理屋に電話をかけに妹をやつたり、酒屋に婢を走らせたりして、家の内は俄かに賑やかに生生として來た。母親と小藤とが二階にあがつたきりでゐると、旦那は、『下がさびしいだらうから、誰か行つておやりよ。』などと言つた。母親は、『なァに、下は奴ちやんが相手になつてゐますから、構ひませんよ。』

るか、さうでなければ自分が歸るか。この場合この二つの道しかないといふことを旦那は考へた。無理に男をかへして見たところで、それで今日は面白く遊んで行くことは出來なかつた。そこまで思つて行つた旦那は、今更何うすることも出來ぬハメに自分の陷つてゐるのを見た。『いつそ歸らう。』と決心して、帶をしめ直したり、帽子を手に取つて見たりしたが、それも出來ない自分であることを考へて旦那はまたぐつたりと其處に坐つた。

小藤は上つて來たが、

『もう、歸すわ。母さんに賴んで來たわ。』

と、旦那は低頭くやうにして、『好いよ。それほどお前が言ふんなら、逢ふよ。俺さへ我慢すれや好いんだから。』旦那の聲は稍曇つた。

小藤は默つて旦那の方を見た。

『好いよ。本當に好いよ。』旦那は急に快活に、『逢ふよ。さういふ慕を打つのも面白いだらうよ。さう言つて來る方が好い。』

『でも……。』

『好いツて言ふのに。』

『さう？』小藤は急に打解けた旦那の顏を見ながら、『本當にさうしていたゞくと好んですけどもね。

やしませんよ。歸しますよ。もう少しやすませて歸しますよ。本當に、申譯はないんです。』
かうは言つたものゝ、母親も矢張困るには困つたのであつた。何うして好いかわからないので、下に行つて、唯坐つてゐた。事を大袈裟にして、婢などに見られるのも厭だッた。妹も心配さうな顔をして箪笥のところに立つてゐた。
更に二階に上つて行つた小藤は、『ね、さうして下さいな。ね。後生ですから。私の心だつて察して下さいな。歸すにしたッて、何うかしなけりや歸せないぢやないの？』
『なら、僕の方で歸らう。』
かう言つて旦那は起き返つた。
『貴方が歸らなくつたッて好いわ。なら、歸すから――。』
『いや、僕が歸らう。』
『いゝと言ふのに、わからないのねえ、本當に……。』懊惱したといふやうな顔をして、つと立つて、小藤は欄干の處に行つて、暫し考へるやうにして立つてゐたが、そのまゝまた階下へと下りて行つた。
旦那はまた横に身を倒した。始めは頬杖をついて、深く考へるやうなさまをしてゐたが、溜息をついて、ごろりとなつて、其處に置いてあつた講談本などを無意味にひろげて見た。下で何か話してゐるのが聞くまいとしても耳に入つて來た。ふとあることを思つた旦那は急に身を起した。女のいふ通りにしてや

天井を見てゐた。小藤は體を寄せるやうにして、『ねえ、貴方、貴方逢つて下さらない、後生だから、逢つて下さると好いわねえ。』

『いやなことだ……。』

『後生だから、逢つて下さいよ。向うだツて困るのよ。顔を合せさへしなけりや好いけど、すつかり逢つちやつたんだから、變なのよ。貴方、いつか何ういふ男だか、賴りになる男だか何うだか見て下さるツて言つたぢやないの。ね、さうして下さると好いわねえ。』

『いやだよ。』

旦那は此方を向きながら、『この位ひどい目に逢はせて吳れゝば、もう澤山だよ。……これでも足りないのかえ。もつと酷い目に逢はせるつもりなのかえ？』

『すぐあゝいふから困るわねえ。さうぢやないんですよ。向うだツて、きまりがわるい思ひをしてるんですもの。此まゝ歸すわけには行かないぢやないの？』

旦那に默つて了つた。小藤も默つて突詰めた心で其處に坐つて、吸ひさしの卷煙草に火をつけて吸つてゐたが、『なら好いわ。』といふやうな顔の表情をして、そのまゝ下に下りて行つた。暫くして母親がまた上つて來たが、旦那は矢張動かうともしなかつた。爲方がないので、『實はね。金を返しに來たんですからね。これから、ちよつと酒でものませてやらうかと思つてゐたんですけれどもね……。何ァに構ひ

ら、座敷なんかで話してゐないわ。もつと奥に隱れてゐるわ。』
上つて來た母親に、『ねえ、母さん、今來たばかしなんですねえ。旦那はさうぢやないッて言ふのよ。』
『それは、今、來たんですけどね。』母親は濟まないといふやうな顏をして、『此間、お話しましたね。あの時のお寶を返しにちよつと來たんですがね。本當に、何うして氣がつかなかつたんでせうね。』
旦那は默つて坐つてゐた。稽古が濟んで小奴が二階にあがつて來た時には、其處には誰もゐなかつた。『さうですッてね。』など〻小奴は笑つた。『え、今來たには來たんですけど、それは本當ですけれど……。さうね、私、よく知りませんの。始終、出てゐる方が多いもんですから。』
『それは、知つて〻も、君には話せないだらうね、それは無理はないよ。』
など〻旦那は言つた。
小藤は何うしようかと思つた。そのま〻奧の待合の方へ男をやらうとは思つたけれど、運わるく顏を合せて了つた以上、男同士の間に何等の解決をつけないでは、山崎を其處にやるにもやれないといふやうな處があつた。山崎も詰らなさうな顏をして煙草などを吸つてゐた。『困つたわねえ。もつと早く隱れるわけには行かなかつたのかねえ。』など〻小藤は言つた。
小藤が再び二階に上つて行つた時には旦那は仰向けになつて、後頭部に手を組合せて、まじらまじら

てぴたりと坐つた。

『貴方のいらつしたのがちつとも聞えなかつたのよ。御免なさいとか何とか言つたの？』

『無論さ。』

『四疊半でお稽古をしてたからだわねえ。』笑つて見せて、『彼方でもきまりがわるがつてゐるのよ。眞赤になつてたわ。貴方、顏を見て？』

『見たよ。』

『顏と顏とをちやんと見合せたの？』

『それはさうさ。』かう言つたが、旦那は眞面目に、『果して想像してゐた通りだね。』

『さうぢやないのよ。』小藤は眞劍に辯解するやうな調子で、『もうすこしさつき來たばかりよ。芝居の切符を持つて來て吳れたのよ。うそと思ふんなら、母さんに聞いて御覽なさい。本當に今來たばかりなんだから。來てまだ二十分と經たないわ。今芝居の話なんかしてたのよ。つまらない芝居だけども、今度は母さんにも來て見て下さいッて言つてた處よ。彼方は隱れるつもりだつたんでせうけど間に合はなかつたので、きまりがわるがつてゐたわ。』

『何が何だかわかるもんか。』

『それは本當ですよ。お師匠さんが來る少し前に來たばかしなんですよ。さういふわけなら、初めか

『顔を見たの?』

『あゝ。』

『あはゝ。』

と小藤は面白さうに笑つた。そのあとから小藤はまたすぐ顔を赤くした。

山崎は呆氣に取られたやうにして長火鉢の横のところに坐つてゐた。矢張きまりがわるかつたやうな顔をして、低頭いて、煙草を傍にある長煙管につめてゐた。

『何うして聞えなかつたんでせうね?』

『本當ね。』

妹はさも大事件が起つたかのやうにぼんやり立つて姉の顔を見詰めてゐた。

『お稽古の音で、聞えなかつたのね。』

『さうよ、屹度。』

『あはゝ。』

と小藤はまた思ひ出して笑つた。

やがて下に下りて來る母親と入れちがひに、小藤は二階へと上つて行つたが、流石に眞面目な顔をして入つても行かれないので、わざと笑ひかけるやうな形をして、固くなつて坐つてゐる旦那の傍に行つ

暗い顏を唯一目ちらりと見た。小藤も山崎も狼狽して顏を赤くした。

『二階へゐらつしやいよ。』

から勸める母親の聲に續いて、やがて足音高く旦那の二階に上つて行く氣勢がした。母親はあとから跟いて行つた。

四疊半の三味線の音は、師匠の好い唄の節廻しにつれて賑やかにあたりに聞えてゐた。

『ちつとも知らなかつた。鍵がかゝつてゐなかつたのかねえ。』

『さつきお師匠さんが來たつきりになつてゐたんですよ。』

傍からかう妹は言つた。

『御免なさいとか何とか言つたのかしら? ちつとも聞えなかつたわえ。咲ちやんにも聞えなかつたらう?』

『え、ちつとも。』

妹はまご〳〵してゐた。

暫くして、『好いわよ、』と小藤は言つたが、考へるとおかしくなるといふ風で、ちよつと笑つて、『貴方逢つたの?』

『あゝ。』

『何んな友達にかわかりやしないねえ。』小藤は笑ひながら母親の方に話しかけるやうにして言つた。

丁度その時、小奴の清元の師匠が來て、上り口の隣の四疊半で、頻りに唄つたり彈いたりしてゐた。妹は隅の方の裁物板の前で熱心に冬物の針を運ばせてゐた。

注意深い母親が、山崎が來てゐる時はいつもかけて置かないことのない格子戸の鍵も、其時ばかりは、師匠が入つて來てそのまゝになつてゐた。

『御免なさい。』

かういふ聲がしたのも、格子戸のあいたのも、隣の三味線の高い調子に壓せられて、此方では皆な誰も氣がつかずにゐたが、ふと上り端の障子をあけて此方に入つて來るやうな人の氣勢がしたので、蟲が知らせたやうに、慌てゝ立つて行つて襖を明けた母親は、

『あら、旦那！』

と思はず叫んだ。

それを聞くと、山崎は慌てゝ立つて、そのまゝ身を隱さうとした。しかし長火鉢の方までまだ行かない中に、旦那の姿はもう座敷の方へと來てゐた。振返つた山崎の顏と眼と旦那の眼とは思はず宙に逢つた。

『二階へ、二階へ。』

かう言つて、母親は旦那を押すやうにして、なだめるやうにして階梯の方に伴れて行つた。小藤は旦那の

こんなことを言つて山崎は笑つた、小藤は急に、

『あそこは好いわねえ。』

『好いだらう?』

『私が藝者だか何だか、女中が知らずにゐるんですものね。』

『さうだつたね。』

山崎は思ひ出すやうにして笑つて『柳橋でも、あそこは好い部なんだよ、一流なんですよ。』

『さうらしいわね。』

四五日前、夜遲く電話がかゝつて來て、嬉々としてそこに出かけて行つた時のことなどを小藤は頭に繰返してゐた。男は何でもその夜はその近所に連中の會があつて『何うしても遁さないといふのを、ややうやく騙して遁げて來たんだよ。』などと言つてゐた。

やがて小藤は、

『あそこの勘定は何うして?』

『うむ、あそこはいつだツて好いんですよ。よく行くんだから。』

『誰と行くの?』

『友達とよく行くんだから。』

ある日の午後三時頃、山崎はやつて來て座敷の眞中に坐つて話をしてゐた。山崎は袂から今度始まる芝居の切符を三枚ほど出して、それを妹にやつたりなどした。『母さんも、今度はひとつ行つて見て下さい。變な芝居だけども。』などと言つてゐた。

山崎は母親に約束した金を先月は持つて來たが、それ以上に、母親は入費の多いのに困つてゐた。奥の小待合の勘定なども段々溜つて行つてゐた。

『實は、先の借金も氣になるんですけれども、ちよつと困りますから、この間借りたのだけ先づ返して置きます。』こんなことを言つて、山崎は小藤のかねて買つてやつた縫つぶしの財布から、金を十五圓出して母親に渡した。

『まだ、此間のもあるんだけど……。』

『いゝわよ。』

傍から小藤は言つた。

『餘程、あるだらうね、奥のも……。』

『さうね、かなりあるでせうね。』小藤は考へてゐたが、『いゝわ、心配しないでも、その中玉の方がさがるから、私、何うかして置くわ。』

『何うも、貧乏で困る。』

て男の行つてゐる奥の小待合の方へとよく出かけて行つた。

初めはそれもわからなかつたが、度重なるにつれて、段々旦那に怪しまれずにはゐられなかつた『何處に行つたんだえ？　お座敷かえ？』などゝ旦那は二階から下りて來て言つた。

その時には、『ちよつと其處まで。』などゝ母親はその場を繕つて置いて、裏からこつそりと妹を迎へにやつた。でも、何うかすると、小藤は容易に歸つて來ないやうなことがあつた。さういふ時には旦那は焦焦するやうな顏をしながら、それを押しかくして、強ひて何事もないやうにした。それが母親には辛く感じられた。

或時などはもう寢る時分になつて其處に今まで一緒に話してゐた小藤が、急に立つて、何も言はずに外に出て行つた。母親は困つたが、爲方がないので『もうおやすみなさい、遲う御座んすから。』こんな事を言つて強ひて旦那を二階に伴れて行つてやすませたが、後には旦那も素直に母親の言葉にばかり從つてはゐなかつた。俺も、ちよつと散歩して來る。』などゝ言つて、祕密を嗅ぎつけなければ置かないといふやうな張詰めた顏をして、格子戸を荒く閉めて、深夜の闇の中に出て行つた。ある時は、娘が歸つて來ても、今度は旦那の方が歸つて來ないので、心配して母親は妹と一緒にあちこちと搜し廻つて歩いたりなどした。

旦那は顏を曇らして默つ坐てつてゐたり、溜息を吐いたり、顏を上に向けて敷島の烟を輪に卷いたりした。さういふ時には、母親は妹や婢を促し立てゝ、二階の酒の支度を急がせるやうに勉めた。母親の心では、かういふ場合もつと氣轉をきかせてちやほやして吳れゝば好いと思つてゐるのに、人の氣も知らない娘は、おつくりもしないあらびた思詰めたやうな顏をして、機嫌を取るところか、ぐづ〳〵とつまらなさうに坐つてゐたりした。旦那はある處まで眞相は知つても、愛想をつかして離れやうとはせずに、寧ろ却つて意地になつて娘の心に絡み着いて來るやうな形を見せて來てゐるから、其方の方は安心だが、しかしそれが何處まで續いて行くかわからないやうな深い細かいところがあるのを母親は見た。けれど、酒になると、旦那は怒つてもゐられないといふやうに、わざと捌けて、輕い皮肉を言つたり、戲談を言つたり、唄を唄つたりした。かと思ふと、二人で何かで衝突して、互に負けずに何か言ひ合つてゐるところに母親は上つて行つた。『馬鹿。』などと旦那は罵つた。

それに、旦那のやつて來る日取はもとはちやんときまつてゐたのであつたが、此頃ではそれを望むことが出來なくなつてゐるのを母親は見た。此頃では旦那もすつかり變つて行つた。五日目に來たり、三日目に來たり、さうかと思ふと十日も間を置いて來なかつたりするやうなこともあつた。ある時は、それが運わるく度々男の來てゐるところに邂逅した。さういふ時には、母親はよせば好いと思ふのに、小藤の身になつては、それがまた出來ないらしく、酒のあとを旦那が二階で轉寢などしてゐる間を利用し

『俺だよ。』

『あゝ旦那！』髮を結つて貰つてゐるのを忘れたやうに、小藤は身をもがいて、『咲ちやん、母さん、旦那よ。』

慌てゝ奥から妹が出て來たが、そのまゝ下りて格子戸を明けた。その間に、奥にゐた男はそッと母親に押されて、勝手元の方へ出る細い廊下を向うの方へと出て行つたらしかつた。それが目に見えるやうに髮結には思はれた。

『二階におしよ。二階の方が好いよ。』小藤はかう妹に言つた。髮を結つて了つて髮結の歸る時には、家の中にはもうその男の姿は見えなかつた。

旦那の細かい心理の動き方なども母親にはよくわかつた。すまないと思ふ此方の心がいつとなく態度やら言葉やらに現はれて行くらしく、旦那はそこから常に祕密を知らうと心懸けてゐるやうに見えた。母親は入つて來るより早く、いつも鋭敏に娘の顏や妹の顏やあたりの狀態やらに細かく働いて行く旦那の眼を見遁さなかつた。簞笥の上の物品の置きやうにも、床の間に生けた花瓶の位置にも、幅物のかけ具合にも、茶簞笥の茶盆の並べ方にも、旦那は常に細かい注意を拂つてゐるらしかつた。母親は男の忘れて行つた煙草入を慌てて簞笥の中に藏つた。

『何んな人？』

『背の高い、顔のくしや〳〵した——。』

『あゝその人よ。私も陰ながら知つてるけれど、家のお客を内に引張り込むッて言つて、春の家のお上さん怒つてるのよ。』

『さうですか。』

髪結は驚いたやうに言つた。

髪結の見た所では、その方は滅多に家には來ないらしかつたが、旦那と男との衝突は、時々はあるやうに思はれた。母親は萬一を慮つて、奥の小待合の女將に情を明かして、困つた時には男を其の方へやるらしいのを髪結は見た。ある時は確かにさうだと髪結は思つた。顔を見たわけではないが、その時男は確かに其處に來て居た。座敷と四疊半とから見えない位置に男は坐つて、母親と妹と何か話してゐた。確かにその聲だつた。それに、四疊半の方で髪を結ふといふことも、その男の來てゐるのを證據立てゝゐた。

ふと格子戸の前に人の氣勢がした。明けやうとしたが鍵がかゝつてゐるので、其人は二三遍ガタ〳〵と押すやうにした。

『何方？』髪を結ひながら言つて訊いた小藤の聲には、張詰めたやうな處があつた。

心細くなるやうね。』と二筋三筋引出すやうにして見せると、『苦勞するからさ。心配があるんだよ。』旦那は厭に冷かすやうに言つて笑つて見せた。その笑ひの中にはある意味が籠められてあるのを髮結は見た。よく喧嘩が起らないものだ。大抵の家なら、もうすつた揉んだが起らずには居ないのだが、矢張此處の姐さんが上手なのだ。母さんも上手なのだ。髮結はこんなことを思ひながら、キリヽと根の元結を締めた。

男の長火鉢の傍にゐる時には、『四疊半で結ふわ。』かう小藤は言つて、臥席だの鏡臺だのを其方に持つて行かせた。近所でもかなりに評判になつてゐて、髮結は彼方此方で其話を聞いた。ある姐さんは『あの男評判な女たらしなんだからね。それを藤ちやん知らずにゐるんだからね。今にすつかり剝がれて了ふにきまつてゐるよ。』などゝ言つた。ある姐さんは、『さうだッてね、お前さん、逢ふことがあるかえ。へえ。それぢや此頃入り浸りなのだね。』などと言つて驚いたやうな顏をして見せた。その姐さんは、旦那はかねてよく知つてゐて、何處かで旦那に逢ふと、『貴方も好いけれど、もうすこし、しつかりなさいよ。』などとわざとけしかけるやうなことを言つた。

月の家の小鶴は、『だッて、お前さん、もう一人來るんぢやないの。さういふ話を聞いたことがあるよ。』

『あ、それぢやあれがさうかしら？』

髮結が思ひ出したやうに言ふと、

どが取出されて、賑かに唄ふ氣勢などがしてゐたが、やがて食事もすんだらしく、婆さんは呼ばれて、茶碗や徳利を片附けたり、餉臺を疊んで勝手に下げたりした。婆さんは昨日矢張同じやうにして旦那に酒を勸めた母親や姐さんのことなどを思ひ出して、再び男の顏を凝と見た。

『そこら、歩いて來ませうか。』

姐さんはこんなことを言つて、男を誘つて外の方へと出て行つたが、婆さんがすつかり用事をすまして了ふ時分には、もう歸つて來て、甘い物などをそこにひろげて、茶を煎れたりなどしてゐた。婆さんは姐さんの手から金鍔や鹿の子などを貰つた。

あくる朝は、姐さんは遲くまで寢てゐた。下の掃除がすんで、皆なが食事をすませて了つても、二階ではまだ起きたやうな樣子はなかつた。婆さんがバケツに水を汲んで、庭から裏に雜巾がけに行つた時にも、二階の雨戶はまだ堅く閉つてゐた。

肥つた髮結も、時には旦那、時にはその男の來てゐるのによく邂逅した。旦那は前から髮結を知つてゐるので、『この頃は益々肥るね。體が重いだらうね。』などゝ言つて、緣側で小藤が髮を結つてゐる前に立つてそれを見て居たりなどした。小藤は此頃髮の毛の拔けるのを氣にして、『こら、こんなに拔けるのよ。

と思つた。成程と思つた。と、肥つた旦那のことがすぐ思ひ出された。

『婆や、もう一本の德利に支度がしてあるかえ？』

『へえ。』

婆さんはさう言つて、さも珍らしいもの丶やうに、じろ〳〵と男の顏を見ながら、さつき其處の茶箪笥の上に置いた德利を母親に渡した。

婆さんはそのま丶勝手の方に引込んで、ごちや〳〵と洗物などをしてゐた。水がザァと水道の管から水桶の中に落ちた。婆さんはふと旦那が見たらと思つた。と、何だかその肥つた旦那か可哀相なやうな氣がすると共に、かういふことを平氣でする人達の生活をめづらしいもの丶やうにも思つた。

笑聲が頻りに聞えた。高い冴えた姐さんの聲と、低い中音の男の聲とが縺れ合ひ絡み合つてむつまじく聞えるかと思ふと、今度は母親の太い緩くりした笑聲が聞えた。婆さんが再び行つて見た時には、姐さんはいつかお座敷着を棒縞の粗い不斷着に着替へて、男の傍に體を凭せるやうにして坐つて、何か頻りに面白さうに話してゐた。此方の六疊では、妹が大きな裁物板を隅の方に出して、そんなことには頓着しないといふ風をして、頻りに裁縫の針を動かしてゐた。

婆さんは勝手をすますと、用がないので、入口の隣の四疊半のところに行つて、ぽつねんとして坐つてゐた。もう一人の方の姐さんは、さつき出て行つたきりでまだ歸つて來なかつた。一しきり三味線な

天ぷら、蒲燒、鮨の話も出れば、煎餅の話なども出た。秋蟹の子の旨い話なども母親と一緒になつてした。母親は、男が呼ぶのに、『お前さん』と言つたり、『貴方』と言つたりした。男は母親を『母さん』と呼んだ。妹は、『咲ちやん、咲ちやん』とやさしく呼んだ。

これまで田舍にばかりゐて、かういふ處に奉公したことのない婆さんには、こゝまで來ても、その男が何ういふ種類の男だといふことは飮込めなかつた。夕飯がすんで了ふと、母親はそのまゝ長火鉢の傍に行つて煙草を吸つたが、

『お腹が空きやしない？』

『いろんなものをさつき食べたから。』

『貰ひをかけても好いけど、あそこは面倒な家だから、もう歸つて來るよ。』母親はこんなことを言つてゐたが、程なく、『只今』といふ元氣の好い聲がして、格子戸が明いて、姐さんの莞爾した顏が此方へと上つて來た。

『待つてたの？ さう？ お腹が空いたでせう？』續いてかういふ姐さんの聲は、勝手で用をしてゐた婆さんの耳にも聞えたが、婆さんが呼ばれて其處に行つた時には、餉臺の上には肴と猪口と箸とがもうちやんと並んで置いてあつて、支度をして置いた德利が銅壺の中に浸けられてあつた。姐さんはお座敷着のまゝで、餉臺の傍に坐つて、斜に男と對して莞爾してゐた。此時婆さんは初めて心の中でははァ

物などをしてゐた。やがてそれを梯にかけに二階に上つて行つて見ると、その男は障子をしめた中に、友禪縮緬の小搔卷をかけて横向きになつて頻りに本を讀んでゐた。それでも婆さんはまた何處かの親類の男といふことを念頭から離さなかつた。

ところが、それが夕方になつても歸つて行かない。夕飯の時には、母親は肴などを取つて、『婆や、酒屋までちよつと行つて來てお吳れな。此前行つたから知つてゐるだらう。いつもの酒を五合ね。』などと命じた。婆さんは急いで横町の酒屋に行つて、此間の酒を德利に入れて貰つて、大勢藝妓達の綺麗にしてお座敷へ出て行く細い通を家の方へと歸つて來た。家では、

『姐さん、何時に行つたんだつけね、四時ね、もう三時間になるね。もう貰ひをかけても好い時分だね。』母親は誰に言ふともなくこんなことを言つてゐた。

『お前さん、姐さんが歸つてからにするかえ。』母親はかう男に訊いてから、大きな餉臺を其處にひろげて、夕飯を始めた。『婆やも、此處でお上りな。』かう言はれたけれど、婆さんは冷飯があるので、そのお櫃を抱へて自分のにきめられた膳を入口の隣の四疊半に持つて行つて、晝間殘して置いた煮豆で箸を取つた。

皆なの食事をしてゐる間、男は緣側の薄暮の空氣の中にくつきりと白い顏を見せて、今來たばかりの夕刊などをひろげて見てゐた。そして時々母親や妹と口を利いた。東京の町の旨い物の話などをした。

ろく二階の欄干を照したりした。小藤は滅多に機嫌のわるい顔を見せず、いつも元氣よくお座敷へと出かけて行つた。

其頃、長くつとめてゐた婢が急に田舍に歸らなければならなくなつたので、あとに桂庵の婆が二人三人目見得を伴れて來た。しかし何れも是れも思はしいのがなく、皆な一日二日ゐて歸つて行つた。一番あとに來たのは五十位の婆さんであつたが、これなら我慢が出來さうだと言ふので、兎に角置いて勝手元を働かせることにした。

『好い婆さんだね。あれなら好ささうだ。物事がはき〳〵して好い。』

などと旦那は言つた。婆さんは肥つた、さつぱりした好い旦那だと思つた。旦那は歸る時に、小遣におしと言つて、少しばかり銀貨を婆さんの手に載せた。婆さんは益々好い旦那だと思つた。ところがその翌日、髮を綺麗にわけた三十二三の色の白い好い男が不意にやつて來た。婆さんは始めは親類の男か何かと思つて、別に氣にも留めなかつた。男は旦那の昨日坐つた同じところに同じ蒲團を敷いて坐つた。頻りに母親や姐さんを相手にして話した。賑かな笑聲が勝手の方まできこえた。やがて姐さんの許にお座敷がかかつて來た。男は歸るだらうと婆さんは思つてゐた。ところが、『ちよつと行つて來る間、二階にでも行つて晝寢でもしておいでなさいよ、ね。ぢき歸つて來るから。』かう言つて姐さんは、綺麗におつくりをして、帶をぐる〳〵と巧に體を廻してしめて、褄を取つてそして出かけて行つた。婆さんは暫く外で洗濯

『その位なら頼まないわ。』

小藤はプリ〳〵して向うの方に立つて行つた。久しく逢はないので、小藤の心は山崎に向つて燃えつつあつた。詰らなさうな顔をして小藤は妹や母親に當り散らした。

母親は遂に折れて行つた。

『ぢや、お前、餘程注意しなくちやいけないよ。大丈夫といふ日を選んで逢ふといふやうにしなくつちや!』

『それは、私も考へてゐるわ。』

『困るけれどもねえ……もしわかると私が旦那に合せる顔がない。』

『皆な私にまかせてお置きなさいよ。もしものことがあつたつて、皆な私にまかせて知らない顔をして、お置きなさいよ。世間では、そんなことは何でもないぢやないの?』

『知れてゐなければ好いけれどねえ。今度わかると、二重に罪をつくるつてわけだからね。』こんなことを母親がくど〳〵繰返して言つてゐる間に、小藤は立つて、格子戸を明けて、足音輕く、男の許へ電話をかけに行つた。

月日は靜かに經つて行つてゐた。庭には冷たい雨が降つたり、干した足袋に夕日が當つたり、月が明

『だけど、お前、考へて御覽よ。旦那だつて餘り好い心持がしないのはわかつてゐるぢやないか。此間の話を聞いてゐたつてわかるぢやないか。お前だつて、これまで世話にもなつてゐるしさ……。それも、お前が何うなつても好いつもりなら知らないけれど。旦那だつてよしたくはないんだらう?』
『旦那の方でよせないんだよ。』
『あんな勝手を言つてる。』
『だツて、母さんにさういふところまでわかりやしないでせう。私でなくつちや、さういふところはわかりはしないわ。だから、大丈夫だつて言ふのよ。』
『なら、勝手におしよ。』
『またあんなことを言ふ。大丈夫ですよ。それにはちやんとわからないやうにしてするから……。それから旦那にもすまないことがないやうにしてしますから。』
『わからないやうに出來るんなら好いだらうよ……。けども、私はね、この前のやうな心配はもうこり〳〵だよ。今度知れると、それこそお終ひだからね。それに、今度は知つてゐるから油斷がなりやしないよ。落附いてなんかゐられやしないよ。』
『だから、母さんに承知して貰はなけりや爲方がないつて言ふのよ。』
『ぢや、私は知らないつもりでゐるから、お前が好いやうにおし。』

だもの。』

『それはさうだけども……』

『なら、何處か好い處をさがさなくつちや――』かう言つて小藤は考へて、『でも、ね、何んなことをしたつて、一度に十圓はかゝるからねえ。』

今度は母親が默つて了つた。

暫くしてから、小藤は『だつて、旦那だつてあの位わかつてゐるんだから、その位のことに大目に見て呉れてよ。』

『わかつてゐて呉れるから、猶困るんだよ。これが知れてゐないことなら、前にもしたことだし、何うでもかげで出來るんだけどもねえ……旦那だつて、だから、あんなことを言ふんだよ。何も彼も一緒につかつてゐたんだねなんて言ふんだよ。』

『なら、私は旦那にすむやうにするから好いわ。何でも別にするやうにさへすれば、好いわ。さうすれば心がすむわ。私にあの人があつては何うしいふことをしてゐるかつて言ふことは、旦那だつて、ちやんと知つてゐるんだもの。さうすれば家だけぢやないの？』

『それは構はないやうなもんだけどもね。』

『お母さん、隨分わからないわね。』

その場では、旦那は母親の言葉を信じたけれど、やがてそれはその傍から崩れて行つて了ふのを旦那は見た。何が何だかわからないやうなところがあつた。旦那と小藤と山崎との間は、今は精神の苦惱から肉體の苦惱になつて行つてゐた。小藤にもそれがよくわかつた。『そんなことはありやしませんよ。』とは言つてゐながら、心と體とがそれを裏切つてゐることを小藤は感じた。此處まで言つて置けば、山崎を十日に一度位此處につれて來ても差支ないといふやうな氣が小藤にもすると同時に、旦那にもそれは免るゝことの出來ないものであるといふやうに思はれた。旦那は溜息を吐いた。

『ぢや、當分、もとのやうに、お茶屋で逢ふことにしようかね。』

『いやよ、そんなこと――』

『その方が好いがな。』

『その位なら、こんな苦勞はしやしないわ。』

小藤は旦那の心の苦惱の其處にも此處にもあらはれて來るのを見た。言葉にも、態度にも、表情にも。旦那は昂奮したやうに、小藤の手を堅く握つたりした。

『それは困るねえ。』

『だツて、さうでもしなくつちや、あの人だつて可哀相よ。月々お寶を出すつていふ約束までしたん

下さい。今貴方にやめられると、本當に宅でも困つて了ふんですよ……』

『やめるもやめないも、そんなことはないですけどもね。』

『さうして戴くと本當に安心なんです。その代り貴方のお顏を潰すやうなことは決してさせませんから。』

『まァ、このまゝにして置くより他に爲方がないんですね。』

『さうして置いて下さい。さうしてぢつとして見てゐて下さい。』

旦那はわざと大きく『しかし、何うせ脈があがつてゐるんなら、今の中言つて戴く方が好いんですよ。體裁よく斷るつもりで言つてゐるんなら？』

『そんなことがあるもんですか。』

母親は頭を強く振つて見せた。其處に小藤は上つて來たが、母親と旦那と顏を合せて話し込んでゐるのを横目に見て、何とでも勝手に相談なさいといふやうな表情をして、遠い處に來て坐つた。旦那と母親とは一時話を中止しなければならなかつた。

かう言はれて見ると、旦那にもこれ以上何うすることも出來なかつた。

『でも、前にもさういふことがあつたんだから、絶無とは言はれない。』といふ意味のことを旦那が言つた時には、母親はすぐそれを否定した。

『いつそ打壞して了ひませうかね。』

旦那は笑ひながら言つた。

『でも、貴方にも別れるのはイヤなんださうですから。』

『それでもね、一緒になつちやつてはね。……そんなことも出來ないよ。』

『だから貴方のゐる中は、藝者はやめないつて言つてゐますよ。』母親は笑つて見せて、『それに、その方だつて、本當に何うなるもんだかわかりやしないんですからね。洋行するなんて言つてゐますけど、それだつてわかりやしないんですもの。』

『いや、旨く行けば結構だと思つてはゐるんですよ。前から僕は母さんにはさういふことは言つてある筈なんだから……當人の爲めにさへなれば、身を堅めるといふことは、僕は初めから贊成なんだ……』いくらか昂奮したやうな調子で、『唯、しかし好加減ぢや困ると思ふんだ。僕もかうやつて長い間來てるんだから、幸福であることを望んでゐるんです。』

母親は叩頭をするやうにして、『だから、私がやかましく申すんです。折角、これまでにして戴いた元も子もなくして了つて、家を疊まなくつてはならないやうになつては、それこそ大變ですから……。さういふことがあつては、旦那にもすまないつてよく言つてきかせるんですよ……。本當に御恩は忘れてはすまないんです。』ちよつと旦那の機嫌を取るやうにして、『ですから、もう少し長い目で默つて見てゐて

『そんなことはないよ。』

『とても駄目なのは、わかつてゐるんですけどもね。……私は隨分やかましく言つたんですよ。此前にも現にさういふことがあつて、申譯がないと思つてゐるんですから。でも、ね、とても私には堰き切れない。第一、困るんです、松月になんか行つてゐては、お賓ばかりかゝつて……。もう、それはいろんなものを失くして了つたんですから。』

旦那は憮然として『それは無理はないよ。僕には十分に世話なんか出來やしないんだから。あれの言ふのも無理はないんだよ。』

『そんなことはないんですけれども……私もおどかしては見たんですけども、いざといふと、何うしても、あれにかゝらなくつてはならない身なもんですから……末はあれより他にたよりになるものはないんですから。それは、どうせ駄目なんですよ。長いことはありやしませんよ。』

『それで、何うなつたんです？』

『難題を打附けてやつて見たんですがね。とてもそれは出來やしないんですよ。』

『難題つて言ふと――』

『あることをして見せない中は、兩方離れて逢はずにゐろつて言ふやうなことなんです。私もイヤでしたけれど困るもんですから、逢つて散々油を取つてやりました。』

かう旦那は打消すやうに傍から言つた。
『ちよつともよくないわ。だつて、母さん、かうなんですもの。金の爲めに私が別れないつて旦那は思つてゐるんですもの。金の爲めなら、ねえ、母さん、こんな苦勞はしないわ。』
『お前もわりいよ。』
『だから、わりいところはあやまつてゐるぢやありませんか。でも、旦那だつて、薄情なところがあるんだから……』
『まア、好いやね、お前。』
暫くして小藤は下に下りて行つたが、あとで母親は、
『何うもわが儘で仕方がないんです。それに、此頃、少し何うかしてゐるんですよ。疳積が起つて爲方がないんですよ。』
『一體、何うなんです？』
母親は暫く躊躇したが、『何うも困るんですよ。』
旦那はちよつと色を作したが、『困るつて、何う？』
『お話しなけりやわからないんですけどもね。』また躊躇して、『一體、かういふ話を貴方にお話しするつていふ法はないんですけども……』

て駄目ぢやないか。』

『だから、よすわよ……。私の心持がわからないんなら。』

『勝手にするさ。』

かう言つて見たものゝ、旦那にしても、小藤にしても何うすることも出來なかつた。默つて旦那は冷えた盃を口に當てた。

其處に母親は銚子を持つて上つて來たが、默つて坐つてゐる二人の顔を比べるやうにして見て、矢張默つて餉臺の傍に坐つた。沈默は暫しつゞいた。

『あついところをお一つ。』

かう言つて母親は徳利を持つた。旦那は默つて盃を出した。

『何うかしたの？』

母親は娘の方に向いて言つた。

『だつて、人を酷めてばかしゐるんですもの。』

『お前、また何か勝手を言つたんだらう？』

『勝手なんかちつとも言はないわ。旦那こそ無理ばかり言つて人を酷めるんだもの。』

『好いよ、好いよ。』

きつぱりとよすわ。』

『さういふ約束は出來ないね。』

『それ、御覽なさい。』眼から落ちる涙を袖に當てゝ、『矢張、おもちやにして置いたんだから、金ぢやないおもちやぢやないなんて言つて置いて、實は矢張さうだつたんだから。時々逢つて、私を自由にしてゐさへすれば好いんだから。私が何んな苦勞があらうと、何んな心配があらうと、來た時きりで、あとは知らん顔をしてゐるんですから。その證據には、お宅にだつて、あれほど行きたがつても、來ちやいけないと仰有るし、奥さんにだつて逢はせて下さらないぢやありませんか。』

『そんな無理を言つたつて駄目だ。』

『ちつとも無理なことはないわ。貴方はさういふ薄情なんだから……。だつてさうぢやないの。貴方のことを思つてゐればこそ、後々までも別れないやうにつて言ふんですよ。金ぢやないわ。金なんかで、そんなことを約束なんかしないわ。金の爲めばかりに私が貴方に離れまいとするなら、第一、今度のことだつてこんな祕密まで話してきかせないわ。內所にしておくわ。』

『だから、思ふやうにする方が好いつて言つてるぢやないか。』

『そら、すぐあゝなんだから。』

『だつて、さうだもの。今になつて何うも出來ないぢやないか。今更、お前のことをしてやらうたつ

んだから。』旦那が何か言はうとするのを遮つて、『さうよ。それぱかりに限つてはゐないわ。これまでにだつて、さう思つたことは幾度もあるわ。此方で寄りかゝるやうにすると、貴方はいつも避けるやうになさるぢやありませんか。』

『避けると言ふんぢやないよ、お前の心がよくわからないからだよ。』

『貴方なんか、して下さらうと思へば、いくらだつて出來るんですもの。』ヤヽ涙ぐんで『何うせ、貴方では駄目だと思つたんだわ。私だつて、これまで、男ではいろ〳〵な眼に逢つてゐますからね。玩弄物にばかりされて來てゐるんですからね。好加減なことばかり言はれて來てゐるんですからね。』いろ〳〵と昔を思ひ出すといふやうにして、『つ、つまらない。私のことなんか本當に思つて吳れる人はないんだから。』

『思つて吳れる人があるぢやないか。』

『たんと皮肉仰有いよ。貴方は私のやうなものを醋めて、それが本望なんでせう。』

小藤は烈しく下唇を嚙んだ。張り詰めた心を名殘なくその眼に現はしてゐた。

急に、

『なら、貴方は、私が今、あの人をよせば、すつかり私の面倒を見て下さる。私が死んだ後でも、お袋や妹が困らないやうにちやんと面倒を見て下さるの？　さうして下さるなら、私、あの人をよすわ。

旦那は點頭きつゝ聞いた。

一しきり話したあとで、

『何うしたつて別れるのはイヤですから。』かう言つて小藤は凝と旦那の顔を見た。

『だつて、僕だつて、さうまでして、お前にくつ附いてゐようとも思はないよ。』

『さう、本當にさうなの。さうなら、今、はつきり言つて頂戴。』

『だつて、さうぢやないか。』

『本當に、さうなのね。それなら、それで私にも考へがあるわ。』やゝ眞面目に屹とした調子で、『矢張、貴方は薄情なんだ。』

『何うして？　お前こそ薄情ぢやないか。』

『なら、何故、私をもつとしつかりとして置いて下さらない？　私は、何遍言つたか知れないわ。もつと何うかして下されば、私は引くなり何なりするつてあれほど言つたぢやありませんか。立派な引祝なんかして頂かなくつても、家が何うにか彼うにかやつて行けるやうになりさへすれば、引いて、堅く貴方一人を守つてゐるつてあれほど言つたぢやありませんか。その時、何故、貴方はして下さらなかつた？……』考へて、『それに、此間だつて、溫泉に行くお費があつたら、それはよして、私の身の爲めになるやうにと思つて下さるやうなところがあれば頼もしいけれど、さういふところは貴方にはちつともない

『前のやうな暮つて？』

『また此處に來るんだらう？』

『そんなことはしないわ。』

『何うだかわかるもんか。』

『なら、母さんに訊いて御覽なさいな。何でも貴方には隱さずに話してるんですもの。もう隱せないわ。』

『ぢや、何うするんだい？　一體。』

『逢はないでゐるのよ。逢はれるまでは逢はないつていふ約束をしたのよ。』

『何ういふ約束だえ？』

『でも、ね、本當に勘忍して頂戴……。あの人洋行するんですつて。そして、あつちから歸つて來たら――それでも私を思つてゐて呉れるやうだつたら、一緒にして下さる？』

『その時は俺は引退るのかえ？』

『引退らなくつたつて好いわ。矢張逢つてるわ。だつて向うだつてわかつてるんですもの。』

『そんなことは出來るかえ？』小藤は旦那の心の突詰めて來てゐるのを見た。

旦那の胸にも事件の眞相がかなりによくわかつて來てゐた。顏を曇らせながらも、小藤の言ふことを

今度は靜かに緩やかに小波を立てゝ滑かに流るゝやうになつた。その時から、山崎は無理をして、松月を引揚げて、もとの宿へと歸つて行つたし、小藤は小藤で、餘り焦々せずに、落附いてお座敷へも出かけて行けば、醉つて歸つて來るやうなこともなくなつた。さうなればなるほど、母親は偶の逢瀨を考へてやらなければならなかつた。

小藤は流石にそれを言ひ出さなかつたけれど、時々それを母親に迫るやうな態度を見せないでもなかつた。母親にはそれがよくわかつた。『だつて、向うだつて可哀相ですよ。お寶のないところを、月々いくらづつ出すなんていふ約束をする位なんだから……。本當に、向うだつてつまらないと思つてゐるんでせうよ。』と言つて見たり、『何うしてゐるでせうね、こんなに雨の降る日はさびしいと思つてゐるでせうね。でも仕方がないわ。』と言つたりした。ある時には電話をかけに行つて、留守だつたと言つて悄れて歸つて來たことなどもあつた。

その間にも旦那は一二度やつて來た。いつもに似合はず落附いて靜かにしてゐる小藤の形は旦那の眼にも不思議に映らずにはゐなかつた。旦那はいろ〳〵なことを根掘り葉掘りきいた。『もうゐないのよ。彼處は引上げて了つたんですもの。』かう小藤が言つてきかせたあとを手繰つて、深くその眞相を知らうとした。この落附いて靜かにしてゐる形が却つて旦那を不安にしたやうなところもあつた。

『ぢや、矢張、前のやうな幕を打つことになつたんだね。』

『それは大丈夫です。本當にすみませんでした。しかし、これで安心した。』山崎は胸を撫で下すやうにして見せた。

母親にはまた心配が一つ殖えて來てゐた。あゝいふ約束をして來たけれど、その約束の裏には、二人の仲を肯定したといふ形があつて、これから一週間に一度なり十日に一度なり何處かで逢はせてやらなければならなかつた。月々の金を男が出すとなれば愈々さうである。それは以前には旦那が知らなかつたから、ちよつとやそつとの首尾は家でも出來たけれど、今ではそれが餘程難かしくなつて來てゐる。旦那の知つてゐるといふことは、一方では荷が輕くなつたやうなところがあるけれど、一方では非常にャリ憎くなつたといふ處があつた。母親は旦那が戲談に言つたことを思出した。旦那は言つた。『ぢや、その時分には夜の物でも何でも、皆な一緒につかつたんだね。そいつはャリ切れなかつたな。ひどい目に逢はせたもんだ。』『勿論、それは戲談に輕い調子であつたけれど、その言葉のかげには、非常に重大な意味が籠められてあることを母親は想像した。

引かへて、小藤と山崎に取つては母親を說伏したといふことは、大に二人を安心させたといふ形があつた。今まで越え難い堰があつて、水がそれに當つて碎けて波を揚げてゐたのであつたが――揚げずとも好い波を立てたり、凄じい瀨をつくつたりしてゐたのであつたが、急にその邪魔な堰が除れたので、

『あそこに行つたのは本當にわるかつたんです。』

『でも、爲方がないんだもの。』

かうまた小藤は傍から言つた。

で、種々話し合つた結果、兎に角一年間は母親が觀察者の位置に立つて、二人の間を見てゐる、それまでに山崎はある金を月々母親の手許に送つて來る。それを實行しなければ二人の間は壞されて了つても苦情はない、そして洋行して歸つて來るなり、一段落つくなりしてから、樣子を見て、これで好いとなれば、その時は一緒にする。もし何等かの事情でやむを得ず壞れて行くやうなことがあつたら、其時はその金を返すといふ事に話がきまつて、母親は歸つて來た。

歸らうとする時、小藤は、

『母さん、持つて來て呉れて？』

『あゝ。』と言つて、不精々々に帶の間にしまつて來た金を出して、渡して、『これは返して貰はなけりや――』

『え、それは屹度返します。この十日までには入るところがあるんですから。本當に、母さんには申譯がない。』山崎はかう言つて頭を搔いて見せた。

『松月にも、もう足踏みしないやうに――』

『母さんの言ふやうに、何うにでもするつもりです。』

『しかしそれだけでは、そのつもりだけでは、私にはまだ安心が出來ないんですよ。安心が出來るやうにして下さらなけりや――。』

かういふやうな話が長く續いた。時々小藤も傍から口を挿れたりした。本當に、さういふ積なら、一年なり半年なり逢はずにゐるとか、逢つても今までのやうにだらしなく遊び廻るやうなことはしないとか、此方の了簡がすつかり母親にも飲み込めれば、その内には旦那にも詳しく話して暇を貰ふやうにするとかいふ話はそれからそれへと續いた。山崎は絶えず母親の機嫌を取るやうにした。無邪氣らしい顏には、人を引く微笑の影が常に往來した。

小藤はさう度々逢はないでも、十日に一度位逢はれゝば好いなどといふやうな話をした。外國に行く話を男が持ち出した時には、母親の感情ももう餘程打解けて、言葉も今までのやうに圭角を持たなくなつて來てゐた。

『洋行つて言つても、長いんぢやないでせう？』

『え、一年位。』

『その位なら、丁度好う御座んすね、ほとぼりがさめて。今ぢや、それや本當に困るんだから。松月の女將なんかに生中知られてゐるもんだから。』

自分の身と一緒に娘の身のことも心配になりますしね。それに體も弱いんですからね。』

山崎は默つて唯聞いてゐた。

『それや無理をしてゐるんですよ。此頃は――。自分の娘を前に置いて言ふんぢやないけども、此頃それは痩せて了つたんですからね……。』間を置いて、『ですから、今日は是非お前さんの心も聞きたいし、娘の了簡も聞きたいと思つてそれでやつて來たんですよ。私だつて、何もお前さんを恨みに思つてゐるといふわけではないんだから……。私の内が立行つて、娘が落附いて、稼業さへしてゐれば好いんですから……。』

山崎の了簡も、かねて小藤からちよいちよい聞いてゐるものと少しも違つた處はなかつた。山崎は母親が許して呉れるなら、何うか行末は一緒になりたいと言ふ希望であつた。『なら、お前さんだつて、もう少し眞面目に事を考へてして呉れなくては――。』

『え、それはわかつてゐるんです。母さんさへ承知して下されば。』

『私が承知するもしないもないんですけども……。それには、そのやうにして、眞面目に考へなけりや仕方がないんです。唯、遊んで、お寶をつかつてゐたばかりでは、私だつて、安心して娘をあげるといふ譯にも行かないやうなもんだから。』考へて『それなら、さういふやうに、お前さんの心が私にも飲込めて來るやうにして頂かないと――。』

ですけどもね……。一體、あんな松月見たいな家に來てゐるのからして、私なんかにはわからないんですよ。娘にも、それは口が酸くなるほど言ふんですけれど……。』

『イヤ僕も此頃はよくわかつて來ました。』

『それは本當に、あんなところにゐちや爲方がありやしないんですよ。あの上さんは、それは誰にきいたつて、よく言ふものは一人だつてありやしないんだから。』

『でも、爲方がなかつたんだわねえ。』かう傍から小藤は言つた。

山崎は、急に早口に、

『母さん、本當に申譯がありませんでした。母さん、何うかこれまでのことは許して、水に流して下さい……。』

『水に流すも何もないけれども……。何うかしなくつちや、本當に爲方がないんですよ。このまゝで行けば一家が立ち行かなくなるばかりなんだから。』

山崎は暫く考へてゐたが、『母さんさへ許して下されば、僕も考へてゐることがあるんです。』

『でもね、私の家では、娘ばかりがたよりなんですからね。これが拵いで食はして置いて呉れなけりや、何うすることも出來ないんですから……。それやね、稼業をして、辛い悲しい面白くないことをして來てるんですから、仲を堰かうなんてばかり考へてもゐないんですよ。しかし親の身になつて見ると、

『宅の方が困らなければ、何うして遊ばうとそれは構はないんだけれど……。これだつてまだ自分一人でやつてゐる譯ぢやなし、家にゐる子の手前だつてあるし、旦那の方のことだつてあるし、本當に困つて了ふんですからね。』

山崎は點頭いて聞いてゐたが、『本當に申譯はないんです。母さんには、是非一度お目にかゝつてお詫をしなければならないと思つてゐたんです。』

『詫なんか構はないんですけれど……。』

『本當にすまないと思つてゐるんです。』少し間を置いて、『しかし、母さんは何う思つてゐらつしやるか知りませんけれど、私が唯好加減に好きな眞似をしてゐると思はれると詰らないんです。決して好加減にしてゐるわけでもないんですから。』

『それはさうでせうけれど……。私の方でも、此頃のやうぢや本當に困るんですよ。』かう言つて小藤の方を見て、『そりやお前さんばかりぢやない、これもわるいんでせうけれど……。』

『僕がわるいんです――。』

山崎はかう言つて、低頭いた顏を愈々低頭かせた。『しかし、本當に誤解して下すつちや困るんです。好加減にしてるんぢやないんですから……。』

『それやね、ちつとやそつとのことはね、私だつて藝者のお袋ですから、大目に見ないこともないん

小藤は賴むやうに言つて、『向うでも、母さんにすまない、すまないつて言つてるんだから……。昨日、此處に來たのも、母さんが松月では何うしても逢つて呉れないつて言ふから、來たんだもの。』

『勝手なことばかり言つてるよ。』

『逢つて頂戴よ。』

逢つて、兎に角言ふだけのことは言つてやらうと母親は思つて出て來たのであつた。それに十分向うの了簡もきいて見なければならないとも思つて來た。

『何處にゐるんだえ？』

『奥よ。』

母親が其處に入つて行つた時には山崎は餉臺の向うに後姿を見せてゐたが、ひよいと此方を見て、慌てて、狼狽して、顏を赤くして居住ひを正した。餉臺の上には酒と料理とが出てゐたけれど、母親は存外醉つてゐない山崎を見た。『本當に申譯がないんです……。』かう言つて山崎は小さくなつて挨拶した。小藤は向う側に行つて坐つた。

『だつて、宅の方も困るんだから。』かういふ風に母親は始めた。母親は今まで胸に溜めて置いたことを今夜こそ殘らず打つけてやらうと思つて出て來たのだけれど、いかにも申譯のないやうな顏をして、小さくなつて低頭いて山崎の坐つてゐるのを見ると、流石にさう烈しい言葉も口からは出なかつた。

帳場から入つて行つて、其處にゐた女將に、『度々娘があがつて、』とか何とか言つてゐたが、ふと、何の氣なしに其處に入つて來た小藤は、

『あら、母さん、來てるの？』

かう言つて狼狽して顏を赧くした。《お母さん來てる、もないものだ》といふ顏の表情を母親はして見せたが、すつと立つて行つて、娘を人のゐないとつつきの間の方に押すやうにして連れて行つて、

『お前も困るぢやないか。』

『だつて？』

『何故、歸つて來ないんだえ？』

『もう一つ、此處でお座敷をさせて貰つたのよ。』

『本當に、お前には困つちまふよ。好い加減わかりさうなもんだね。』

『もう歸らうと思つてゐたところなのよ。爲方がないから……。』

『まだ、ゐるのかえ？』

『え。』

『一體、何うする積なんだえ？　お前。』

『逢つて頂戴よ。』

つてゐられたのに……。』

こんなことを思つて見たところで爲方がなかつた。何うかしてやらなければならない狀態に事情は益益進んで行つてゐた。狹い庭には秋海棠がしをれて咲いてゐる頃であつた。

その機會はやがて來た。ある夜、小藤は山崎と近所の待合に行つて、歸つて來なかつた。その待合には勘定が旣に澤山溜つてゐて、その日は少しでも拂はなければ藝者としての體面にも關するといふやうな具合になつてゐた。小藤は妹を中に立てゝ、母親にいくらか都合して貰はうと思つた。妹は行つたり來たりした。しかし母親は容易に娘の希望を容れてやらなかつた。『兎に角一度歸つてお出で。』かう言つて母親は頑張つた。

しかし何うしても歸つて來ないとなると、母親にも心配になつた。それに、お座敷も彼方此方からかかつて來た。昨夜から行つて今日はもう夜の九時近くなつてゐるのに、まだ歸つて來ないとなると、勘定の負擔も益々重くなつて行くばかりである。母親は、長火鉢の傍で長烟管に煙草を二三服つゞけて吸つてゐたが、急は決心したといふ風で、立つて簞笥の傍に行つて、鍵をぢやらぢやらさせて、錠前の嚴重についた小さい扉をあけて、抽斗の中からかねて自分の心がけて置いた金のいくらかを出して、それをもとのやうに閉めて、帶だけしめかへて、『ちよつと行つて來るからね。』と言ひおいて、格子戶を音高くあけて出て行つた。

と小藤は此頃は考へてゐた。

『お母さん、逢つて呉れたつて好いぢやないか。』

『誰に？』

『山崎にさ。』

『逢ふ折が來たら逢ふよ。あんな所にゐる中は駄目だよ。』

容易に母親はそれを取上げなかつた。母親には容易に取上げられない理由もあつた。しかし入費の方から來る事情は絶えずそれを促して行つてゐた。金のある時には、さういふ馬鹿騒ぎも平氣でするが、無い時にはひしと困つた。ある時は、小奴に多くもない前借を望まれて、いつもなら二つ返事でしてやることも出來ないやうなことなどもあつた。その時には、小奴は膨れて、默つて家に歸つて二晩も三晩も泊つて來た。小奴は小奴で、姐さんばかり勝手な眞似をしてといふ腹があつた。

母親は成行に任せようとは思つたけれど、その成行が娘に任せておいては何うなつて行くかわからなかつた。終には小奴も置けなくなつて、それを住み替へに出した元金もつかひ果して、旦那にも捨てられて、折角築き上げたこの家も離れなければならないやうなハメに陷らないとも限らなかつた。母親は小藤が十七八の時惚れた男に捨てられて、一時ヒステリィのやうになつて、夢中で海の方へ行つた時のことなどを思ひ出した。『あんな奴さへ出て來なければ、抱妓のもう一人も置いて、今時分はもつと樂にな

氣分の加減で細かい兩方の狀態まで入つて行つて、神經的に心配になることもないではないが、時にはまたかういふ風に情をわけて、二つの心を占領してゐる自分を祝福するやうな氣分にもなつた。顏を曇らせて懊惱しながらも容易に旦那が自分を捨てないといふ保證を得た時には、ことに氣が輕くなつて、浮々して、何となく生效があるやうにすら思はれた。『本當ね、ある姐さんが、昔、そんなもんぢやない、心なんて、いくつにもわけられるもんだよと言つたことがあるのよ。その時はそれは稼業の上のことで、本當ではそんなことは出來ないとばかり思つてゐたのに、矢張さうね。不思議なものね。』などと小藤は鈴吉に話した。

新しい旦那から貰つた金で、久し振りで奧の大きな待合に行つた時には、山崎の子分見たいな男を三人も四人も呼んで、銘々藝者をあてがつて、徹宵底拔け騷ぎをした。しかしそれが知れると、母親に喧しく言はれるので、內所にして置いたが、いつか何處からか洩れて行つたらしく『本當に、お前の了簡はわからないよ。ちつとは考へて物をしなくちや困るぢやないか。』

『だつて？』

『だつてぢやないよ。困つてゐる癖に……。そんなお寶があつたら、質に入れたものでも出せば好いぢやないか。さういふことをさせる男だから、見込がないつて言ふんだよ。』

それには小藤はいつものやうに反抗しなかつた。母親を說き伏せなければ今の場合何うしても駄目だ

わ。一緒になるつたつて、表向き一緒にならなくつたつて好いんだもの。時が來るまでは……。』

『兎に角、あんなところにゐちや駄目だね。』丁度其處に箱屋が祝儀を持つて來たので、かう言つて母親は立つて行つた。母親は錯綜した事件の成行を見たやうな氣がした。旦那に一伍一什を知られてから重荷を下したやうに思つた母親は、成行に任せるより他に爲方がないとも思つた。兎に角、自分は娘の世話にならなければならない身だ。娘の言ひ分もあるところまでは聞いてやらなければならない。此頃はこんな風にも母親は思つて來てゐた。

小藤はひとりでゐる時、よく自分をこの近所にゐる朋輩達と比べて見たりした。小鶴といひ、鈴吉といひ、その他奥の藝者といひ、皆な旦那には内所で種々なことをしてゐるのに、何も彼も旦那に打明けて聞いて貰ふことの出來る自分は仕合せだと思つた。氣が附くと、此頃、旦那にすまないといふ心持の非常に深く色濃くなつて來てゐるのを小藤は見た。

此處まで來ても、松月でこの春男同士が鉢合せをした夜の心持が同じく長く續いて行つてゐるのを小藤は見た。無論旦那に對する心の幾分は山崎に打明けて話しもするが、さらりとすつかり底の底まで話すやうなことはなかつた。旦那に對しても矢張さうであつた。夜の話を山崎がした時にも、『そんなことはないわ。存外あつさりしてる人よ。』などと笑つて打消したきりで、あとは深い話もしなかつた。旦那に聞かれても、小藤は矢張好加減のところで口を噤んだ。

『この頃わかつて來たわ。山崎もさう言つてたわ。何の彼のつてまき上げられるんだもの。勘定がなければ着物でも何でも質に置かせるんだもの。それに、此頃、あそこにも旦那らしいものが出來たよ。』

母親の顏を見て、『五十位のイヤな男……。それでも月々いくらか呉れるやうな話よ。』

『あんなお上さんでも、情婦に持つ人があるかねえ。道理で、此頃、イヤにぴらしやらしてると思つた。』

かう言つたが、母親はすぐ言葉をついで、

『それで、旦那の方は何うするんだえ？』

『何うつて？』

『斷るのかえ？』

『斷らなくつたつて好いわ。よくわかつてゐて下さるんだもの。』

『いくらわかつてゐたつて……』半ば言ひさして、『いくら、お前、わかつてゐたつて、旦那だつてそんなことを聞いちや好い心持はしないにきまつてゐるよ。』

『だから藝者はしてるわ。よさないわ。ちやんと母さんが安心が出來るまでは――。』

『あの人もそれを知つてゐるのかえ？』

『それは少しは知つてるわ。あの人だつて藝人見たいなもんですもの、野暮なことは言ひはしない

『本當だと思ふわ。唯、騙して金をまき上げる積ばかりぢやないわ。さういふ積なら、何うせ私のお賓のないのは知つてるんだから、向うだつて遁げるわ。私も出してゐるけれど、今度は向うでも隨分つかつてゐるんだから……。あれでもそんな男ぢやないのよ。』

『それで何う言ふんだえ？　一緒になるつて言ふのかえ？』

『それは先のことですけれどもね……殊に由ると、その中に西洋に行つて來なくつちやならないかも知れないつて言つてゐるから。』

『それが怪しいんぢやないかえ？』

『怪しいんなら、そんなことは言はないわ。それに、それはまだ本當にわかつたことぢやないんだから。矢張あゝいふことをしてゐると、一度何うしても西洋に行つて來ないと、貫目がつかないんだつて……。それには金の出所があるんだつて……。』

何うだかわからないといふ顏をして母親は首を傾けた。

『でも、他の女は皆な手を切つたらしいわ。でなけりや、あゝやつて、始終あそこに來てる筈はないんですもの。』

『でも、あんな處にぐづぐづしてゐるやうぢや駄目だね。あそこの女將さんに好いやうにされてゐるやうでは。あの女將さんのわるはお前にだつて解らないことはないだらう？』

飲め、眞赤に……

三味線の調子の中には、昔を思ふやうな悲しい情緒が名殘なく籠められてあつた。『あの時、丁度雨が降つてゐましたね。貴方つたら、醉つて了つて、丁度唄のやうだなんて言つて笑つたわねえ。あの姐さん、何つて言ひましたけねえ。さう〳〵菊勇？』

『さう〳〵菊勇ッて言つたかね。本當に昔になつちやつた。』

小藤は、『でも、貴方がわかつてゝ下さるから好いわ。』急に三味線を傍に置いて、『私は藝者を一生やめないから好いわ。いゝの？　さう思つてゐて頂戴！』

旦那は何か言はうとしたが、よして、また默つて盃を口に當てた。小藤も段々醉からさめて行くらしかつた。

『私、もう寢るわ。』

小藤は急に立つて、二階の方へと上つて行つた。旦那と母親とは、それから一時間ほど其處で話した。母親は隣の鈴吉が此頃照山に夢中になつて、家に歸つたことは滅多にないなどといふ話をした。

ある日、小藤と母親とは話した。

『お前、それは本當なのかえ？』

旦那は默つて見てゐた。
『さ、何故唄はないの？』
『醉つてるよ、醉つてるよ。』
『醉つてはしなくつてよ。さ。唄はないの？　ぢや、私が唄ふわ。』
かう云つて、博多節だの安來節だの端唄だのとのべつに引きりなしに小藤は唄ひ始めた。それは皆な長い間一緒に旦那と唄つて來たやうなものばかりであつた。ある姐さんがそれを小藤にうつしてやる間、旦那は默つて聞いてゐたやうな唄が多かつた。『竹と雀は仲よいけれど、末はかたきの餌差竿。』これを唄つたあとでは、『その女中ね、こんな唄を知つてるのよ。こんな唄、何年振りで彈いたかわかりやしない。さ、唄ひませうよ。』
小藤はかう言つてひとりで色々な唄を彈いてゐた。旦那の知つてゐるあらゆる唄は皆な其處に唄ひ出された。急に思ひ出したやうに、
『さ、あれを唄ひませう。さ。わしが在所――あれが始めよ。貴方とあれを唄つたのが始めよ。』調子を合せて、『あゝ、もう遠い昔になつちやつたわねえ。』
空が曇れば雪がちら〳〵
それぢやたまらぬあつ燗で

『勝手なことばかり言つてるよ。』

傍から母親は言つた。

『勝手ですかね……。さうですかね貴方。勝手なら勝手にしておきなさいよ……。それはさうと、お母さん、今日は面白かつたのよ。私がね、此土地に出始めの時分花菱といふ家があつたァね。其處にその女中がゐたんだとさ、そしてね、何でも其時小秀さんと政子さんと私と三人で行つたんだとさ、兜町のお客か何かで……。ところが、其時、私が何でもイヤだつて言つて無理やりに歸つて來たんだとさ。それを覺えてゐて話すのよ。この土地にもこんな若い妓にそんなのがあるかと思つて、すつかり感心しちやつたつて……。それで覺えてゐて、今度あそこに勤めるやうになつてからも、私をかけて吳れるんだとさ。それが嬉しいつて、つい、その女中と飮んぢやつたんだよ。』

『お前、それを覺えてゐるのかえ？』

『さう言へば、そんなことがあつたよ。あの時分は隨分賣れたんだからね。』かう言つたが、『おい、三味線を持つてお出！』

其處にゐた妹が持つて來て、袋を取つたりコマをはめたりするのを、待ちかねたやうにして取つて、

『さ、今日はお浚ひ……夕立や、サツと降り來る……ですか。』かう言つて、ぐた〳〵した風で三味線を彈き出した。

て何うしたら好いか困つてゐるんですもの。いつそ私は娘と別れようかと何遍思ふか知れないんですよ。だつて、それは娘は勝手なんですから、少し何か言ふとすぐ出て行つて呉れつて言ふんですから……。それも、見込みのあることなら、無理にでもお願ひして、何うにかしていたゞくといふこともあるんですけれど、丸つきり駄目なんですからね……。えゝえゝ駄目ですとも。あんな評判のわるい女將さんの家に來て、ごろ〳〵してゐるやうぢや僞方がありません。だから、娘がいくらお座敷ばかり排いだつて駄目ですとも……。唯、體をこはすのが心配ですよ。此頃はあれでも氣が張つてるでせうけれど、何うしても無理をしますからねえ。それを思ふと可哀相ですけれど……本當に困つて了ふんですよ。』

時には旦那の來てゐる夜に、夜遲く醉つて小藤は歸つて來たりした。『只今、』などと元氣よく格子戸を明けた。

『お前、また醉つてるね。體に障るよ。』

かう母親は言ふと、

『大丈夫よ。今日はまだそんなに醉つてやしないのよ。だつて、今日あそこの女中が私の昔のことを覺えてゐて褒めて呉れたんだもの。意氣投合しちやつた！』こんなことを言つて旦那の傍に、べたりと坐つて、『貴方、本當に、私を奧さんにして下さるなら、なつてあげるけども、矢張あのお照が可哀相なんでせう。貴方見たいな人は本當に張合がないわよ。』と小藤はわざと旦那の細君の名を呼捨てにした。

知れなかつた。其時分には其報酬に時には旦那に甘い歡樂を捧げて機嫌を取ることも出來れば、欺騙から來る自己の苦痛をもいくらかそれでまぎらすことが出來た。しかし今ではそれが全く出來なくなつて了つたのを小藤は經驗した。小藤には曇つた旦那の顏を見るのが、時には辛く、時には面倒臭く、時には悲しく、時には腹立たしかつた。

『此頃は何ういふ形式で逢つてゐるんだえ？』時には旦那はこんなことを聞いた。さういふ時には、旦那はいつも笑つて、機嫌の好さゝうな顏をしてはゐるが、實はさうでなくつて、陰には暗い心と銳い觀察とが潛んでゐるのを小藤は見た。ある時には、『でもね、爲方がないんですもの。今度は本當に止さうと思つたんですけども……その爲に、わざわざ溫泉なんかに伴れて行つて戴いたんですけれど、何うしても思ひきれないんですもの。』小藤は旦那の顏を見い〳〵、甘えるやうにこんなことを言つた。

旦那の想像は暗い方へ暗い方へと向つて行つてゐた。時にはそんなことを思つてゐるのかしらと思はれるやうな事まで言つた。小藤は落付いて、『でも、そんな私でもないんですよ。それア、稼業ですからお話したら怒る樣な事もしてはゐないとは言ひませんけども……。そんなでもないんですよ。貴方だつて、邪魔なら、あの國に歸つた人のやうに、何うにでもしておことわりしますもの。』さういふ時には、口に出しては言はないけれど、女の一人でゐる頼りなさと淋しさとが、いつも小藤の胸にこみ上げて來てゐた。

母親は旦那に言つた。『本當にこんなことをお耳に入れて、申譯がないんです。けどもわたしからし

のであるか、矢張『でも、困るんですもの、』と言つては受けた。

山崎もゐず、お座敷もかゝつて來ない時には、小藤はひとりぽつねんと長火鉢の前に坐つて種々なことを考へた。新しい旦那の方は、まるで知らないが、これもいつまで解らずにゐるといふ譯には行かなかつた。母親の曇つた顏、旦那の低頭いた顏、さういふものが簇つて身を責めて來る時には、いつそ早く何も彼も打壞して、自分ひとりにならうかしらなどと思つた。いつそ一年位田舍にでも行つて來ようかしらなどとも考へた。

旦那の眼と心とは鋭敏に動いた。あらゆる表情と言葉と氣分とから、絕えず女の持つてゐる細かい祕密を嗅ぎ出さうとしてゐた。この春山崎が來て泊つて行つたといふ事實が、何ぞと言ふと、背景となつて旦那の心に映つて來るらしかつた。

旦那は曇つた顏をしたり、わざと何も彼も飮込んだやうな顏をしたり、離れるにももう離れられないといふやうな表情を見せたりした。言ひたいことは山ほどあつても、それを何ういふ風に言ひ出して好いか、何ういふ風に言つたら最も有効だかといふことに迷つてゐるやうにも見えた。小藤は容易に自分から離れて行かれない旦那の懊惱を常に其處に搜し出した。しかし小藤に取つて、さういふ場合、それが單に得意とか安心とかいふやうなものではなくて、一面細かいつらい壓迫を感ぜずにはゐられなかつた。かういふ事實を旦那が知らなかつた時の方が何れ程樂でもあり、自由でもあり、暢氣でもあつたか

『でないと、金がかゝつて爲方がないわ。此處の拂ひだつて、もう好加減になつてゐるでせう。こんなところにゐちや、とても長くはつゞかないわ。女將さんがあれで中々取り家ですからね。此間の勘定だつて隨分高いわ。』

何うかすると、二人はこんな話をした。細かい山崎の收支の話などを根掘り葉掘り聞いて見て、『さうですかね。矢張眼の見えないところにお錢が要るのね。爲方がないわ。私も精々拵ぎますからね。貴方も少しはしまつて下さいね。さうして二人で拵いて、何處かもつと安いところをさがせば、何うにかかうにかなつて行きますよ。』『考へて、『これがね、私も平生、不見轉でも拵いでゐるんだと、もつと拵げるんだけども、私の年輩で、何方つかずでは、お茶屋でもかけ憎いんですよ。』

『さうだねえ。』

山崎は染々同情するやうに言つた。此頃、小藤はいつも庇髮にばかり髮を結つてゐた。そしてお座敷へでも何處へでもそれで出かけて行つた。その理由を山崎はよく知つてゐた。此間の勘定をする時、金が足りないで櫛と金の彫刻の根懸けとを男の着物と一緒に質に持つて行つて入れた。『藤ちやんは、束髮が似合ふわねえ、若くなるわねえつて皆なに言はれるのよ。』などと言つて小藤は笑つて見せた。

小藤は此頃はお座敷を斷るやうなことはしなかつた。何處へでも出かけて行つた。山崎が來てゐても、『拵いで來るわ。』と言つて出かけた。旦那が來てゐる時でも、元は、『今日は斷つて頂戴』とよく言つたも

いを見てゐたかと思ふと、小藤は急に立つて、紺蛇の目の傘をさして松月の二階へと出かけて行つた。

山崎も此頃は餘程心を小藤の方に向けてゐるらしく、大抵はその二階にやつて來てゐた。芝居の方に行くにも、いつも其處から車に乘つて行つた。山崎は借りた一貫張の机を窓の隅に置いて、其處で物を書いたり本を讀んだりした。小藤が此間の夜の旦那の煩悶を話した時には、山崎は皮肉な笑ひを顏にあらはして、フムフムと輕くあしらひながら聞いてゐたが、『母さんも知つてるのかえ？』

『話してきかせたわ。』

『何ッて言つてるたえ？』

『矢張、貴方は駄目よ。もう少し母さんの機嫌を直すやうにして下さらなけりや――。母さんさへ貴方と此處の女將とをよく思つてゐて吳れりや好いんだけど、さうでないもんだから、事が面倒で仕方がないんですよ。』

『母さんは堅すぎるからねえ。』

『だつて、それは無理ですよ。旦那には世話になつてゐるんですもの。母さんの身にしちや、困るんですよ。貴方もわりいのよ。その證據には母さんは始めは貴方をわりいとも何とも思つてゐはしないんですもの。』

『それはさうだね。』

『本當に勘忍して下さい、ね、ね。』旦那の手に縋るやうにして、『私は、私は……。私は罪をつくつてゐますから、何うしたつて、思ふやうには行かないんですよ。あの人の思ひだけでも、碌なことはないにきまつてゐますよ。あの人ね、國に歸つてからも、私のことばかり恨んでゐて、その思ひだけでも、惚れた男なんかには一緒にさせないつて言つてゐるんですつて。丸で骨と皮のやうに痩せてゐるんですつて、私、私なんか、何うせ碌な死に方はしはしませんよ。でもね、私が死んだらね、貴方を思つて死んだと思つて下さいよ。あゝあゝ胸が苦しい。いつそ死んで了ひたい。こんな苦勞をしてゐるよりか——』小藤はかう言つて、旦那の手を堅く握つた。眼からは涙が流れた。

欺騙の涙であらうが、何であらうが、そんなことは構はない。いくつにわけられた情でも、色彩の濃い強い情なら、それで好い。刹那だけよければそれで好い。こんなことを一方で旦那が思つてゐると同時に、小藤は小藤で、『何故かういふ熱い強い男らしい情があの山崎にはないのだらう。自分はまた何故さういふ情のない男を忘れることが出來ないのだらう。』などと思つた。樋を傳ふ雨滴の音の中に夜は靜かに更けて行つた。

小藤は自分に對する旦那の情の細かに絡み着いて來てゐる事を考へたり、何うしても山崎から自分の心の離れて行く事の出來ない事を考へたりして日を暮した。高窓の格子の下でそぼふる雨の糸のやうな

しかし許して與れと言ふのは、過去を許して與れと言ふのではなかつた。現在をも將來をも許して與れと言ふのであつた。小藤は旦那の體の血の自分の體にも漲つて來るやうなのを覺えた。

『好いよ、好いよ。わかつたよ。』

旦那はかう言つて、小藤を見下すやうにした。旦那の心には種々な影やら姿やら光線やらが往つたり來たりするらしかつた。時にはいつそ一思に思ひ切らうかといふ考が起つて來たり、此まゝ引込んで了つては餘りに意氣地がないと思つて見たり、いつそ此場を此まゝにして置いて、あとで思きり復仇してやれと激昂して見たり、その他あらゆる雜念が燃えるやうに起つて來るらしいのを小藤は見た。『一體、此方の註文が無理なんだから、爲方がないよ。……元は俺がわるいんだ。』旦那は後にはこんなことを言つて、仰向に倒れて頭の後に手を組んで長い間天井を見詰めてゐた。しかし小藤には終に旦那をなだめることが出來たのである。一時間ほどした後には、旦那は、『爲方がないよ。……お前の體だからお前の思ふやうにするさ。』などと言つた。

『で、何うするの？』

『好いやうにするさ。』

『やめるの？』

『何うだか自分にもわからない。』

旦那はまた默つて了つた。小藤は山崎との事情をあるところまで話さなければならないやうなハメになつてゐた。『勘忍して下さい――。』小藤は再び袖を顔に當てた。

不思議にも旦那の心が今までに似ず深く絡み附いて來るやうなのを小藤は感じた。今まで知らなかつたことが一つ〳〵旦那の心に蘇つて來て、あの時その時といふ風に細かい連絡を求めて居るのがよくわかつた。小藤が話したのは、その一部にしかすぎなかつたけれど、それからでも種々なことが想像された。松月の最初の晩のことだの、この二階で嬦曳したことだの、旦那の歸つて行くそのあとの一日二日を利用して男を引入れたことだのが皆なわかつて行つた。旦那は默つて小藤の顔を凝と見た。

旦那の苦惱は山崎に對する小藤の苦惱と同じことであつた。それだけそれが小藤にはよくわかつた。いつも煮え切らない、心を開いて來ない、本當に自分を思つてゐて吳れるか何うだかわからなかつたやうな旦那が、單に玩弄物として、金に對する報酬として、自分を見てゐたのではないといふことが次第に飲込めて來た。小藤は一面祕密の苦痛から重荷を下したと共に、一面底にかくれてゐた純な心の湧き返つて漲つて來るのを感じた。

『勘忍して下さい、ね、ね。』

小藤は體を寄せるやうにした。

たわ。けども、私を凭りかゝらせて下さらないやうなところがあるわ。私が頼りにしようと思つても、頼りにならないところがあるわ。それはさうでせう？』旦那の點頭くのを見て、『これが貴方がもつと頼りになるやうなら……。私が何うにでもなれるんなら、貴方の奥さんにでも何でもなれるんなら……。』急に種々なことが込み上げて來たといふやうに、小藤は袖を顔に當てた。欷歔げる聲が靜かにあたりに聞えた。一生懸命に拵いで、體がわるくなるほど無理なことをして、それでも思ふやうにならないと思ふと、小藤は堪らなくなつたのであつた。折角拵いで出した指環と帶留とを、また昨日内所で質に入れたことなどを思ひ出した。

『勘忍して下さいね、ね。』暫くしてから、かう言つて顔をあげた小藤の眼は赤くなつてゐた。

旦那は默つてゐた。想像してゐたことが一々事實になつて行くさびしさを旦那は感じた。女の言ふことにも無理はないと思つた。

『それで、何うなんだえ？　一緒になれるのかえ？』

『そんなことはまだわからないわ。矢張、お金なんか持つてるないんですもの。此前喧嘩した時の女とは別れたやうですけど……。』

『矢張騙されてゐるんぢやないかえ？』

『何うだかそれはわかりません……もつとよく心を見なけりや――』

『うそでなくたつて、爲方がないぢやないか。お前がイヤなら――。』

『いつイヤだつて言つて？』

『イヤも同じことだ。』

暫く沈默が續いた。旦那はいつもに似合はず眞面目な曇つた顏をして坐つてゐた。小藤はこの旦那との長い間の關係などを思つたゐた。この前にもさういふことがあつたけれど、これほど突詰めた態度に出て來たことはつひぞなかつた。

小藤は獨言のやうに、『だつて、そんなに疑はれるやうなことはしてはゐないんですもの。逢つたつて、また何うなるかわかりやしないんですもの……。』旦那の顏を見たが、急に、『此間も言ひましたわね。私、さびしいんですもの。拵いで親や兄弟のことばかり心配して此迄來たんですからね……。私の賴りになつて吳れるものは一人だツてないぢやありませんか。私が今、死んだつて、私のことを可哀相だと思つて吳れる人はありやしませんよ。それはお袋なんか私が死ねば、拵人がなくなるから困つて泣くでせうけれど、心から私のことを思つて泣いて吳れるんぢやないんですからね……。まア、待つて下さい。貴方だつて、私が本當に賴りかかつて行つて好いんだか、わりいんだかわからないやうな人なんですもの。』

『だから、さういふことになると言ふんだね？』

『だつて、私、これまで隨分貴方のことを考へて見ましたわ。それは本當よ。それやお世話にもなつ

『何うだえ？　夫婦になれさうかえ？』

『さう言へば、旅から歸つて來て一度は逢つたのよ。……でも、何でもないのよ。』

『申譯なんかしなくつても好いよ。ちやんと知つてるんだから――。』

『何う知つてるの？』

旦那の方からかけた鎌があるところまで女の祕密を開いて見せたやうな形になつたので、旦那は急に顏を曇らせた。

『邪魔ならいつでも引退るよ。』

『あんなことを。』

『だッて、さうぢやないか。お前がイヤなものをいつまでくつ附いて、追廻したつて爲方がない。』

『ぢや……。』かう言つて旦那の顏を見て、『もしか、私がさうだつたらやめて了ふつもり？』

『爲方がないぢやないか。』

『貴方、さう思つてるの？』

『それより先に、それぢや事實なんだね。此間中からあやしいと思つてゐたことは事實なんだね。』

『まァ好いわ、そんなこと。』下唇を咬むやうにして、『その位にしか思つてゐないんですね。何んなことがあつても面倒を見てやるつて仰しやつたのはあれはうそなんですね。』

え？　もう一時すぎぢやないか。』などと訊いた。

『寢られないから、外を歩いて來たのよ。』

『…………。』

旦那はそれから先を強ひて問はうともしなかつた。寢返りを打つとすぐまた寢た。小藤はそれから講談物などに讀み耽つた。

旦那はいつもその翌日は朝酒などをして、午後まで寢て、そして歸つて行くのが例になつてゐたが、旦那が來た日と歸つて行く日とでは、小藤の機嫌の夥しく違ふのを母親は見遁がさなかつた。旦那の歸り支度する傍で、小藤はいつも綺麗に髮を結つたりおつくりをしたりした。

ある日、旦那は突然に、

『まだ、逢つてるね。』

『何うして。』

サッと赧くなつた小藤の顏を凝と覗くやうにして見て、『よくわかるよ。』

『そんなことはないわ。』

『隱したッて駄目だよ。ちやんと顏に書いてあるもの。』

『あんなことを言つてゐる。』

二階から下りて來て、小藤はこんなことを言つた。

ある時は、男が旦那の來る少し前に來たらしかつた。その時は母親は娘が何ういふ風にその一夜を過すかを注意して見てゐた。母親の腹では兎に角長い間世話になつた旦那を粗末にすることは出來なかつた。もし粗末にするやうなことがあつたら、あとでみつしり言つてやらなければならないと母親は思つてゐた。と、旦那が酒を始めようとする頃、『私ちよつとお湯に行つて來るわ。』かう言つて小藤は石鹼や手拭を持つて出かけて行つたが、いつも長湯が嫌ひな癖に、その日に限つて一時間過ぎても歸つて來なかつた。

『お前、大變長かつたぢやないか。』わざと母親が旦那の前で言ふと、『だッて、梅ちやんだの鈴ちやんだのが大勢入つていろんな話をしてゐたんだもの、すつかりのぼせちやつた。』かう言つてとぼけて、ほてつた顏を手で撫でて見せた。

小藤は疵持つ足の何處となくそはそはしてゐた。旦那は別に氣の附いたやうなところはないけれど、或はそれは勘附いてゐながらわざと默つてゐるのではないかとも疑はれた。そしてその疑念は日を經るにつれ、度を重ねるにつれて、段々色濃くなつて行くのを小藤は見た。小藤はわざと鎌をかけて見たりした。

夜遲く蚊帳の中に入つて行くと、熟睡してゐると思つた旦那が目を覺してゐて、『何處に行つて來た

せても、それは何の効もないのを母親は思つた。餘り喧しく言ふと、小藤は詰らなさうな顏をして、またプイと出て行つた。

何う小藤が說きつけたか知らないが、此頃では、山崎は一日おき位にそこに來てゐるらしかつた。流石にお座敷だけは休まないけれど、何んなに遲く歸つて來た時でも、男のゐるらしい夜には、斷りもせずに、すうと格子戸をあけて、小刻みな下駄の音を夜陰に響かせて小藤は出かけて行つた。朝、歸つて來ると、顏も洗はずに小藤は二階に行つて寢た。時には髮結が來る時分になつてもまだ二階から下りて來ないやうなこともあつた。一中節の師匠はまた先月からおやすみにした。

新しくこしらへた方の旦那は、都合のわるい時には、『ね、今日は奧に行つてやりませうね。此間、お上さんが聞いてたから、私が何うかしてゐると思はれるとイヤですから。』かう言つて、そつちの方へ行つた。

しかし肥つた旦那の方は、旦那がその事情をいくらか知つてゐるのでさういふ器用な眞似は出來なかつた。小藤はあの時後を見ずに種々なことを饒舌つたり手紙を燒いて見せたりしたことを悔いた。そのため絞れる金も絞れなくなつたことなどを考へた。家では、旦那が來るといつも慌てゝ知らせて來たが、少し歸りやうが後れると、二度も三度も續けて妹がやつて來た。

『煩さいねえ、今行くよ。』

『母ァちやんや、そんなことばかり言つてはゐられないよ。』ある夜は松月の女將は醉つてやつて來て、こんなことを母親に言つた。

一夜用があつて母親が迎へに行つた時には、現在小藤の聲が二階でしてゐながら、『姐さん、さつき歸りました。』と女將は仕込の子に言はせた。それが母親の胸にぐつと來た。

『だツて、此處に傘があるぢやないか。私、用があるんだから。』かう言つた母親は、劍幕をかへて無理に二階へ押上つて行つた。其時、ふととつつきの室から出て奧の方へと身を躱した男の影があつた。それは確かに山崎であつた。

其處に出て來た小藤に、

『お前、用があるぢやないか。』かう言つて置いて、母親はそれから醉つてゐる女將の方に向き直つて、

『お上さん娘を寄せつけるのは勝手だけど、留守をつかふのだけはよしてお吳れよ。何んな用があるか知れないぢやないか。』

『お前さん、歸つたんぢやないのかえ？　もうさつき歸つたと思つた。』

女將はかう言つてとぼけた。

母親はいくら堰いても到底堰き切れないやうな狀態に娘の陷つて行つてゐるのを見た。女將の評判のわるいことだの、花牌を引く連中に雜つては身の破滅だといふことだのを――いくら喧しく言つて聞か

母親は肥つた旦那に對して殊にすまないやうな氣がした。溫泉につれて行つて貰つたり、金を出して貰つたり、その揚句に、新しい人を拵へて、またもとの男へ入揚たり、……『もう私はお前のあと始末はあき〳〵するほどしたからね。お前の好いやうにするが好い。』

母親はぷり〳〵して向うの方へ立つて行つた。まだ騙されてゐるかと思ふと、娘の腑甲斐ないのが今更のやうに腹立しかつた。

山崎と小藤と以前によく逢つてゐた松月の女將は、自分のふしだらから家が持ち切れないで、先々月あたり、荷物や道具を近所に預けて、仕込の子二人と老母とをつれて、近所に引越して來たが、小藤と女將との往來が此頃俄に繁くなつて來たのを母親は見た。何ぞと言つては、女將が出かけて來たり、小藤が出かけて行つたりした。その女將の評判のわるいのをかねて知つてゐる母親は、それとなく意見がましいことを言ふと、『母さん何にも知らないで。無闇なことをお言ひでないよ。世間では何と言つても、矢張何處か豪いところがあるんだよ、あの借金の中で、あゝして平氣で每日飮んだくれてゐられるんだからね。何處か怜悧なところがあるんだよ。』かう言つて小藤は益々繁く其處に出入した。

てつきりそれに違ひない。かう思つた母親は、ある夜はこつそりとそこに出かけて行つて見た。二階が二間あるが、一間の方には連中が集つて頻りに花牌を引いてゐるらしく、奧の一間の方は電燈が點いて靜かにしんとしてゐた。そこから小藤の笑聲がをり〳〵洩れた。

日も四日もずつと此處に來てゐるらしかつた。山崎と此處の女將とは懇意で、それで姐さんがこんなところに引張り込まれたのだといふやうなこともやがて小奴には飲込めて來た。で、其夜は滅茶苦茶に醉いで、夜遅くなつて小奴は、ひとりで其處から歸つて來た。

小奴は別にそのことについては、母親に話しもせず、ひとり心の中に祕めて置いたけれど、さういふことが何時までも母親に勘附かずには居られなかつた。箱屋が屆けてよこす祝儀などから段々母親にも知れて行つた。

『お前、何うするんだえ?』

ある朝、母親はかう小藤に言つた。母親は困つたやうな顔をしてゐた。

『何うもしないわ。』

『何うもしないたつて、私が困るぢやないか。』

『だから、間さへ缺かなけりや好いぢやないか? 私だつてその位のことはしたつて好いわ。』

『ぢや、何故また新しい人なんかを拵へたんだえ?』

『お賓が入るもの。』

『いくらお賓が入るたつて、私が中に入つて困るぢやないか。』

『いゝから見てお出でよ。』

處と此頃家を明けることの多いのも變であつた。ある時、池に臨んだ大きな待合で、姐さんの話が出ると、『いゝえ、昨夜なんか泊つて行きはしないわ。來るには來たけれども、一時間位して歸つて行つたわ。』とそこの女中が變な顏をして言つた。其時、小奴は、『へえ。』と言つて話を餘所に外して了つた。

小奴は何處か姐さんのそはそはと落附かないやうなのを見た。眼が敏捷に働いて、格子戶の明くのにも心を許さないといふ風が見えた。と、ある夜、鶴菱からお座敷が小奴にかゝつて來た。二三度行つたきりで、さう深く懇意にもなつてはゐないけれど、受けて出かけて見ると、他から出てゐる筈の小藤がかなり醉つた足どりで其處から出て來て『奴ちやん、兄さんがかけて上げたのよ。奥にゐるのよ。母さんには内所だよ。』

小奴は山崎が酒に醉つて、脇息に凭りかゝつてゐるのを見た。あまり評判の好くない女將も其處に坐つて盃を口に當てゝゐた。『兄さんとまた仲直りをしちやつたのよ。奴ちやん、一つ兄さんに盃を上げて頂戴よ。』小藤は眼の緣をほんのりと赤くして、わるく燥いで、人前も構はず、男に凭りかゝるやうな形をして見せた。

『自動車の時きりだね。奴ちやんに逢つたのは？』

山崎はこんなことを言つた。

小奴の眼は、小藤の心と體とが男に向つて熔けて流れて行つてゐるやうなのを見た。それに山崎は三

『だから、内所で逢つてるんだよ。本當に惚れてゐるらしいからね。あの人には――。藤ちやん、此間切れたつてきいた時も、さう手輕に行くものかしらと思つたんだもの。』

『それであの肥つた旦那のことは何と思つてゐるんでせう？』

『あの旦那？　あの旦那だつて、滿更イヤでもないんだらう。隨分長いからね。それに、あの旦那は、ちよつとのんきな、女に勝手なことをさせて默つて置くといふやうな旨いところがあるアね。……私もちよつと知つてるけれども。』

吳服屋はいくらかおどけた風をして見せたが、『ぢや、色男、でなければ、さういふ人が好いんですね、かういふ稼業をしてゐる人には――。でなければ金の澤山ある人……。』

『當り前さ、お前さん、一人や二人あるのを喧しく言はれるやうな旦那なら、私なんか眞平だわ。』

わざと當てつけるやうにして笑ひながら小鶴は言つた。吳服屋は舌を出して見せた。吳服屋はそれから靜かに持つて來た帶だのお召だのをそこに展げ始めた。

小奴は百太郎に聞かれてから、姐さんの樣子を注意して見ると、成ほど可怪しいと思はれるやうなことがないではなかつた。しかし、此間溫泉で懇意になつたといふお客の席が奥の待合にあつて、その時小奴も聘ばれて行つて居たから、それと間違へるのではあるまいかと思つて見た。けれど何うもあやしい處がある。鶴菱などといふ質のわるい小待合に行つて夜遲く歸つて來るのも不思議なければ、彼處此

『あたいもきいたよ。また、燒木杭だッてね。』

『さうかも知れないわ。』

『奴ちやん、何とも言つてゐなかつた？』

『奴ちやん、知らなかつたわ。そんなことはないでせうッて言つてたわ。』

『ぢや、まだ走りね。』

小鶴は面白さうに笑つた。

『姐さん、何處で聞いて？』

『何でも奥の方に、そら、小さな待合があらァね。そら鶴菱とか何とか言つた？　あそこいららしいね。』

『一體誰のことなんです？』

傍から吳服屋が訊くと、

『そら、お前さん、知つてるぢやないか。此間中、よくあそこに行つてゐた色の白い…。』

『あゝあゝ。』點頭いて『あの人とまた出來たんですか。』

『さうらしいよ。』

『だッて、あそこの母さん、零しぬいてゐたぢやありませんか。』

やつて來てゐた。矢張この姐さんも土地にきこえた腕者で、情夫もあれば旦那もある、今だに不見轉は盛にするといふ風であつた。この小鶴と內所でちよつと關係してゐて、春夏には貸したやうな顏をして出の着物を拵へて呉れる越後生れの呉服屋がゐたが、ある日、

『桐家の姐さんも中々盛ですね。』

などゝ言つて、新しく出來た旦那が前の肥つた旦那の歸つて行つたあとからすぐやつて來た話などをしてきかせた。

『さうだつてね……。』

『でも、肥つた旦那はのんきですね。少しは知つてるらしいけれど、別に文句も起らないやうですね。』

『藤ちやん、旨いから。』

『しかし、はたで見てゐても餘り好い心持がしませんね。』

『矢張、男だから。』

かう言つて小鶴は笑つて、『しかしさういふことを一々取揚げてゐては藝者屋なんかには入れないわね。』ふと思ひついたやうに、『さう言へば、百ちやん。』とわけの藝者の方を向いて、『昨日、お前さん言つてたね。藤ちやんがあの芝居の人と一緒に歩いてゐたつて。』

『え。』

てあるので、向うからは見えないけれど、此方からは、桐屋の二階の縁側のところがよく見えた。しかし藝者の母親だけに、そんなことは別に氣に留めてはゐないらしかつた。只妹娘などが、山崎が來る時分、『また、あの好い男が來てるよ。』などゝ言つて簾越しに覗いて見ては話した。

そこの妹が飼臺を運んで行つたり、母親が銚子を持つて行つたり、小藤がお座敷から歸つて來たまゝの扮裝で笑ひながら入つて行つたりするのが、一々手に取るやうに見えたかと思ふと、雨戶が午近くまで閉つてゐることもあれば、小藤が寢衣姿のだらしない風をして、眠むさうな眼を眩しさうに日影に向けながら雨戶を繰つてゐることなどもあつた。

『また違つた人が出來た。』かう向うの二階屋の母親の氣の附いた時には、丁度飛行船が大きな姿を夕暮の金色の空に現はして、スクリウの音が、けたゝましく四邊に響きわたつてきこえてゐた。その時は誰も彼も皆んなその二階の欄干のところに並んで出て見てゐた。小藤も、小藤の母親も、妹も、その新しく出來た旦那らしい男も。

その二階から三軒ほど向うに、月の家といふ藝者屋があつた。そこの小鶴といふ姐さんは、小藤と同年輩で、元は小藤と同じ家にゐて、小藤の方が一年ほど出やうが早かつたため、始めは彼方此方と小藤が引廻してやつたやうな關係になつてゐたが、後には段々競爭的になつて、向うが自前になれば此方も自前になる。向うが抱妓を置けば、此方も抱妓を置くといふ風に互に張り合つたやうな形になつて今日まで

かけてゐると、その末の七歳になる位の女の兒が、『ねえちやん、桐家のねえちやん。』など、聲をかけた。何うかすると、その母親や大きい妹娘などが、屋根越しに小藤の母親に挨拶したりなどした。

ミシンを內職にしてゐる家の細君は、ある時亭主と話して、

『また、違つた人が來るねえ。』

『さうらしいね。』

『此間から、裏の通りあたりで、立派な髭の生えた人に逢ふから、何處に行くんだらう。前の內のかと思つたら、矢張隣に行くんだよ。今朝、歸つて行つた。』

『あの白つぽいインバネスに、新しいパナマの帽子をかぶつた？』

『さう……矢張、泊つて行くらしいね。……イヤな稼業だね。』

『待合見たいなもんだからな。』

『本當にさうね。そして、兩方で知らずにゐるんだらうね。兩方で自分がひとりの旦那のつもりでゐるんだらうね。』

こんなことを言つて笑つた。亭主の仕事をする二階の六疊は、丁度隣の八疊の床の間と壁一重になつてゐるので、時には夜おそくまで、細々とした話聲などが聞えた。

向うの二階屋の母親の眼には、これ以上に一層そのさまがはつきりと映つて見えた。此方は簾が下し

暫くしてから、着物を着て、戸をあけて、長い暗い廊下をひとりで向うの方へと出て行く小藤の姿が見えた。室に入りながら、『まァひどい限に逢つちやつた。硝子戸が壞れて、ランプが消えて丸で眞暗になつて了つたんですもの。ひどい荒れよ。急いで出て來ちやつた。』などと小藤は言つた。

丁度その時分、すぐ下の大きな川で、鐵橋が落ちて貨車が三臺流されて、三人車掌が溺死したといふ報は、やがて山の溫泉場にも傳つて來た。猶二日ほど其處に滯在してゐなければならなかつた。

桐家の隣には、ミシンを內職にする一家族が住んでゐて、神經をそゝるやうな機械の音が常に喧しく其處から聞えて來た。それに子供が大勢ゐて、障子は破れ、襤褸は干され、箒のやうな頭をした細君は手かひに餘る子供達をいつも大きな聲で口汚く罵つた。亭主は茫々と汚い髭を生して、何處にも勤めずに、唯ぶら〳〵と遊んで暮した。

それと塀をつらねた細長い古い家はその向うに見えてゐるこれもさう大して新しくない二階屋の持家で、其處には唐辛子粉を製造する男が住んだり、護謨鞠を製造する職人が住んだりしてゐたが、近頃また人がかはつて、今度は人形を拵へる男が移轉して來てゐた。そのトタン葺の屋根を越して、その持主の二階屋があつて、そこには土地のある姐さんの母親が末の子供達をつれてわかれて住んでゐたが、それが丁度桐家の二階の緣側と斜に相對するやうになつてゐた。小藤の妹が洗濯物を二階の軒の物干棹に

男が其の湯の落ちる筧の近くに行つて、默つて頭を湯に打たせてゐるのがぼんやりと幻のやうになつて見えた。

『湯がぬるくなつたわね。』

『何うしても水が入るから。』

『明日の朝は入られないかも知れませんね。』

『この分で行くと水になつて了ふね。』

『そして貴方は何時までゐるの？』

『あと十日位。』

『もうお歸んなさいよ。』

『でも、まだ仕事がすまないから、それをすましてと思つて……。』

ふとまた凄じい風雨が土砂やら木の葉やら木片やらを硝子戸に打つけたと思つたが、硝子の一ところの急に碎けて落ちる音がけたゝましくきこえて、それと共に、風に煽られたランプは忽ち吹き消されて、あたりは眞の闇になつて了つた。今度は却つて戸外が薄白く、樹や草の風雨に動いてゐるさまが微かに浴槽の中から見えた。

沈默が長く續いた。

『これでも明日歸るんですか。』

『え。』

小藤は笑つて、『もつとゐたくなつたけど……爲方がありませんね。』

『さうだね。』

『そのかはり、東京に歸つたら……。』

『山崎によろしくかえ？』

『さうぢやないんですよ。あの人なんか私のやうなものでなくつても相手が澤山あるぢやありませんか。』

『…………。』

ちよつと男が立つて、着物をぬいだところに行つて、内から手早く戸に栓をかつたのを女は見た。しかし女は知らん顏をして、自然に任せるといふやうな風をして、長い髱を此方に見せて、靜かに湯に浸つてゐた。薄暗いランプの光線は玲瓏と湛へた湯を白く微かに照してゐた。

急に凄じい風雨が山の木の葉や枝を前の硝子戸に烈しく打つけた。

『ひどい荒れね。』

小藤は再び言つた。沈默がまた續いた。筧から湯の落ちる音が靜かに風雨の中に聞えた。

なければ、出さないで又考へるとして、出したからつて、別の方をよさなくつても好いんだから——涼しい風に枕をしながら、小藤は終日長くこんなことを考へた。かと思ふと、午寢の夢に、國に歸つた男が悲しさうにして歩いてゐるところを見たりなどした。

蟬の聲が瀨の音に雜つて聞えた。山にはもう秋が來てゐた。

歸り際に旦那は少しの暇を拵へて迎へに來た。それは母親が來てから十日目で、小藤が此處に來てからあと二三日で一月になるといふ日數であつた。旦那の眼には、來た時から脚本を書く紳士と小藤との間が何となく不安に見えた。旦那は急いで山を下る支度をした。

その前の夜の十時すぎに、小藤はひとりで湯に入りに行つた。丁度二百十日前後の風雨で、これでは明日は歸れるか何うかと疑はれたが、兎に角用事があるから、汽車がとまらない限りは歸ると旦那は言つてゐた。雨はまだ盛に降つてゐた。外では山の鳴る音が凄じくあたりにきこえてゐた。

薄暗くついたランプの下で、靜かに落附いて、小藤が湯に浸つてゐると、ふと戶を明けて、ちよつとのぞいて見て、そして靜かに入つて來た黑い影があつた。それはその脚本を書く紳士であつた。

『誰かと思つたら、貴方ね。』

『一人?』

『え……ひどい荒れですね。』

藤はいつもそれを茶請にして勸めた。年增の女にも、女中にも、脚本を書きに來てゐる紳士にも……。ある日見るとそれはもう殘り少くなつてゐた。それをすくふやうにして小藤は食つた。

小藤は時々今にも歸りたくなるやうな風を見せた。『兎に角一度歸つて來やうかしら。』などゝも言つた。『だつて、母さん、さうのんきにはしてはゐられないよ。折角のお客が皆な落ちて行つて了ふし、それに、奴ちやんでも、しつかりしてゐれば好いけれど、さうお茶ばかりひいてゐては、生計にだッて困るわ。旦那にだッて、さう〳〵は願はれないもの。』かう言ふ時には、小藤は奥の馴染の客をもう少し深く引張つて、そこから月々の金をぢかに貰ふやうにして一方には山崎を何處か人に知れない靜かな二階か何かに寢泊りさせて、母親にも心配をかけずに、靜かに逢ふやうにしなければ……などと思つてゐた。情夫でなしに、旦那なら、もう一人位家に入れても、母親が默つて大目で見てゐるのを小藤はよく知つてゐた。山崎が來る時にも母親はそんな風な口振をも見せたし、自分の周圍の藝者達を見渡しても、それ位のことは平氣で幅でやつてゐる人達が多かつた。ある藝者屋の母親は、二三人位までは大丈夫ですけれどもね。もう四人となると、それでも餘程面倒ですよ。それを、あそこでは五人來るんだッて言ひますからね。この間なんか鉢合せをして隨分面喰つたさうですよ。』こんなことを言つて笑つて話した。

しかし、旦那がもう少し金を出して呉れるか、何うか、それも探つて見なければならなかつた。もう一人なければ生計がとても足りないといふことを匂はせて、（それをはつきり言つて了つては駄目だ）出さ

母親はやがて娘がその男とかなり深く懇意になつてゐるのを見た。口の利き方などにも存外馴々しいところがあつて、よく戯談を言つては笑つた。母親は始めはいくらか疑つて見たが、段々落附くと、さういふ間柄でもないといふことがわかつて來て安心した。

その他にも娘の懇意にしてゐる人達に母親は段々親しくなつて行つた。大勢の人達にちやほやされて騷がれてゐる娘を母親は到るところで發見した。居心の好い深切な宿の取扱ひも氣に入つた。『本當に好いところだ、かういふところで長く保養すると好いんだよ。』と母親は言つた。

『でもね、さういつまでもぐづ〳〵してはゐられないわ。私だッて遠出などとゆつくりしてゐられる身分ぢやないんですもの。』

『それはさうだけれど折角來たんだから。』

『しかしさう長くはゐられないわ。』

母親と娘とは田舍の溫泉場を珍らしがつて、一緒に大湯に入りに行つたり、草花の一面に咲く高原の方へ出かけて行つて見たりした。ある朝は、後の大きな山に美しい虹が懸つて、それが見てゐる中に、段々薄く薄くなつて行つた。山の峡にある小さな湖水は、いつも夕日に美しく輝いて見えた。母親は何年にも彈いたことのない三味線を取つて、變な抱へ方をして、爪彈で昔風の乘合などを彈いた。

旦那のわざ〳〵買つて寄越した榮太樓の甘納豆の罐は、茶道具の傍に置いてあつたが、人が來ると、小

小藤は考へるやうにして、『そら、あの人よ。そら、此間話した、餘程此方から手紙を出してやらうと思つたけれど、却つてよくないかしらと思つてよしたのよ。』

『それから、奥からもかゝつたよ。』

『さう……』それと同時に何處かの會社で好い所をつとめてゐるといふ鬚の濃い金のありさうな四十位の紳士が小藤の頭に浮んで見えた。母親はまだ知らないが、奥の女將が一月ほど前に取持つて呉れて、すぐ裏が返つて、それから二三度やつて來て泊つて行つた人だ……。

宿屋の前に來た時、向うから浴衣がけで、麥稈帽をかぶつて、莞爾と笑ひながら此方にやつて來る一人の男を母親は見た。やがて近寄ると、その男は馴々しげに、

『今お着きですか。』

『え……。貴方は?』

『ちよつと散歩。』

かう言つて摩れちがつて向うに行つた。母親は、

『誰?』

『隣にゐる人、東京から來てゐる人よ。』

母親はちよつと振返つて見た。

『さうなの……。』

小藤は餘り好い心持がしないやうに見えた。流石に罪だといふことをも感ぜずにはゐられなかつた。

『せめて妹にでも停車場まで送らせてやるとよかつた。』

『そんなんだと好いけども……それどころぢやないんだから。』

二人は默つて並んで歩いた。短刀を振廻した夜のことなどがまた鮮やかに小藤の胸に往來した。しかしさういふ難かしい厄介物がゐなくなつて好いとばかりは思はれなかつた。やがて二人の前にはさびしい溫泉場が見え出して來た。人家が崖に凭つたり山に凭つたりして、大きな入口のある大湯からは、手拭を下げた田舍の男だの女だのがぞろぞろ出て來た。

『さびしいところね。』

『でもお湯は綺麗よ。』

二人はまた暫く默つて歩いたが、小藤は、

『他に、私の許に何處からかかゝつて來て？』

『內海と春の家と、それから昨日だつたか、さう〳〵一昨日だ。松の家からかゝつて來て、いつ歸るんだかわかるなら、はつきりしたところを聞かせて下さいつてお上さんが言つてたよ。』

『さう……』

が、不意に、

『さう言へば、お前、此方に來てゝよかつたよ。お前がゐると大變だつたよ。』

『何故。』

『そら、あれがね、愈々國元から親類が出て來て無理につれて行かうッて言ふんでね。大騷ぎさ。是非お前に一度あはなければ歸らないつて言つてね。婆さん弱つてゐたよ。』

『向うの親類の人に逢つたの？　母さん。』

『逢つたには逢つたけれども、わからない田舍者だから、何うにもなりやしないよ。いつそ早く片を附けて了ふ方が好いと思つたからね。餘り何も言はなかつたよ。』

『でもう歸つたの？』

『何でも今日あたり歸つたんだらうよ。何うしてもお前に逢はなけりやイヤだつて言つて、何んて言つても坐つたきり動かないんだもの。そして、あとでは泣くんだもの。』

『氣の毒は氣の毒ね。』

『でも、お前がゐると大變だつたよ。それこそ此間のやうにすつた揉んだが始まるところだつたよ。行先をね、敎へて吳れッて逹つて言ふんだけどもね、滅多なことを言ふと、此處までやつて來ないとも限らないからね。丁度好い幸ひにして、私は出て來ちやつた……。』

日に何遍となく紳士の室に出かけて行つて話した。紳士も退屈すると、よく小藤の室に來て遊んで行つた、小藤はひとりで、金のことなどを考へた。それには何うしても金を澤山に拵がなければならない。金はあるけれど、今の旦那は山崎との關係を知つてゐるから、とても充分には出して吳れない。それには山崎との關係を知らない客を一人二人つかまへて、それから新しい財源を得なければならない。あれかこれかと小藤は馴染客を心の中で物色したりなどして日を暮した。

ある時行つて見ると、その紳士の机の傍に、山崎に宛てた此處の繪端書が一枚置いてあつた。『これを出すんですがね。貴方も署名しませんか。』などゝその人は笑ひながら小藤にわたすやうにした。『だッて私よく知らないんですもの。』かう言つて手に取つて見ると、書きに來た脚本の出來榮などを報じてあつて、裏に、『君を知つてゐるSと懇意になつた。』などゝ書いてあつた。何でも大坂の東區あたりの旅館にゐるらしかつた。

母親が來た時には、時間をしらべて、小藤は町外れの杉森のところまで迎へに行つた。車から下りた母親は、荷物だけ車夫に先に宿にとゞけさせて、娘と並んで話しながら歩いて來た。

旦那が昨日來て種々土產を買つて來て吳れたことや、妹がさびしがつてゐるからさう長くは逗留して行かれないといふことや、此頃は小奴がお茶ばかりひいてゐて困るといふ話などを步きながらして來た

山崎とはかなりに深い親友であるらしかつた。この溫泉に來てゐるのも、實はその十月の中幕を書くつもりでやつて來たのだといふことであつた。『隨分新聞では種にされますけどもね、あれで學者ですからね。ちよつとあの位外國の芝居に明るい人はないいんですからね。いや、浮氣ぢやないいんですよ。つい面白いから遊ぶんですよ。それに、女に持てるもんだから、いろんなことをするんですね。』

『それはさうでせうね。あゝいふ方ですから。』小藤はわざとこんなことを言つた。小藤は紳士の口から種々なことを聞き得たのを喜んだ。山崎の聲名の高いのや、かういふしつかりした友達も一方にあつて、その人の將來を保證したやうに言ふ言葉を聞くのも小藤の耳には快く響いた。まさか山崎の女の話まで持ち出して行くわけには行かなかつたけれど、あるところまでは紳士の方から面白さうに話してきかせた。『うむ、あの事ですか、あの女優のことなんか何でもないいんですよ、世間で大きく言ふんですよ。』

今まで知らなかつた山崎の一方面が小藤にはいくらかわかつて來たやうな氣がした。あの時喧嘩したのも、餘り此方がむきになりすぎたのだ。あの位のことで別れられる仲ではなかつたのだ。でなければ、男が生眞面目で、酒にも醉はずに、あゝした起誓なんか書くわけはない。かう思ふと、小藤の體には山崎の心が再び強い力で蘇つて來てゐた。『來月は歸つて入らしやるんですかね。』などと小藤は訊いた。

小藤は俄かに元氣づいて來た。ひとりで彈く三味線も急にはしやいで來たやうに思はれた。小藤は一

『山崎君を知つてるんですか。』

小藤が餘り深く立入つて聞くので紳士は不思議さうに小藤の顏を見て言つた。それはそれから行つたり來たりして大分懇意になつてからのことであつた。

『え、ちよつと知つてゐるんですがね。』

かう言つた小藤の顏はやゝ赧くなつた。

『あれで、山崎君は、そつちにかけては中々ヤリ手ですからな。』

『さうですつてね。』

『君もその一人ぢやないんですか。』

『いゝえ、私は、』餘りに突如な言葉にちよつと慌てた小藤はすぐ打消すやうにして、『私はちよつとお目にかゝつたきりですもの――。』

『何處でです?』

『ちよつとしたところで、ですけれどもね……。』かう言つて、『私は覺えてゐますけれど、あちらではもうお存じないかも知れません。』

何うだか知れたものではないといふ風が紳士の顏に見えてゐたが、しかしそれを追及するやうなことはせずに、却つてそれを肯定したといふやうな形で、種々と山崎のことを話してきかせた。

が、何うしても旨く行かないので、今度は馴々しく小藤の方に向いて、いろ〳〵と話を仕かけた。思つたよりも人づきの好い話好きな人を小藤は其處に見た。忽ち芝居の話になつて行つた。

『さうですか、貴方方でもあゝ言つた芝居を御覧になることがあるんですか。』

『ほんの少しですけど……。』走り過ぎた韁を引しめるやうにして、『そら、あの何とかいふ、此前、女王をした女優がありましたね。あの人なんか存じてゐますのよ。』

『さうですか。』

『今、大阪に行つてるやうですね。』

『え。』紳士はかう輕く點頭いて見せたが、『今度のは面白いでせうよ。十月にやる奴は――。』

『さうですか。でも、私達にはちよつとむづかしすぎますわ。歌舞伎ですと、眼で見るんですけども、あゝいふ芝居は耳できくんですから、少しうつかりしてゐると、すぐわからなくなつて了ひますのね。』

紳士は大きく笑つて見せた。それは感心だといふ表情が歴々と紳士の顔に見えてゐた。小藤は山崎といふ名が幾度となく咽喉まで出かゝつて來たけれど、强ひてそれを嚥み込むやうにした。矢張想像した通り、芝居や小說の方をやる人で、山崎などは無論知つてゐるらしかつた。

小藤は自分の室の緣側まで其人を引張つて來て茶などを勸めた。

と、半月ほど前から、何か物を書きに來てゐて、まだ當分は滯在してゐるらしい。學生などがよく其處に訪問して來て、先生々々などと言つてゐるといふことであつた。『面白いお方ですよ。此間も此方で三味線を彈いてゐたら覗いてなんかいらつしやいましたよ。』かう女中のお春は話した。

『今度ね、そんな話が出たら、是非入らつしやいッて言つて下さい。』

小藤はかうお春に言つた。

しかし小藤はその人と懇意になるのに、お春の手を待つてはゐなかつた。ある時、小藤が裏を散歩してゐると、その書生と紳士とはふとそこにやつて來て、かはるがはる鞦韆に乘つた。書生の高く揚るのに比べて紳士は何うしても書生の達した位置までは達することが出來なかつた。小藤は笑ひながら立つて見てゐた。

『何うしても駄目だ。學校にゐる時分はもつと上手だつたがな。』

こんなことをその紳士は言つた。紳士も笑つて小藤の方を見てゐた。

『お上手だこと。』書生の高く揚るのを見た時、小藤はかう言つてほめた。

『矢張かういふことは、書生時代でなくつちや――。』

『さうですともね。』

かう傍から小藤は聲をかけた。兩方の間の墻は忽ちにして取除かれた。紳士はもう一度やつて見た

鎖に賴らなければ登れないやうな嶮しいところがあるなど丶人々は話した。

ある夜は月が明るく室の中までさし込んで來た。垣の外には薄の穗が靡いて、虫の音が湧くやうにきこえた。山はもうすつかり秋になつてゐた。學生達は退屈まぎれに唐茄子などを買つて、中をくりぬいて、火をつけてキヤツ〳〵と言つて無邪氣に騷いでゐたが、小藤は年增の上さんと其處に行つて、一緖に長い間それを立つて見て居たりした。幼い頃のことなどが染々と思ひ出された。

やがて湯から歸つて來た小藤は、ひとりで靜かに寢られることを喜んだ。

鬚の生えた小づくりな三十位の紳士が机に向つて熱心に物を書いてゐた。時には仰向に倒れて晝寢をしてゐることもあれば、一緖につれて來た書生らしい若い男と何か頻りに議論めいた話をしてゐることなどもあつた。大きな旅行用の鞄は兩方に明いて、中から外國語の本が澤山にあたりに取出されてあつた。何うかすると書き損ひの原稿紙が緣側から庭に飛んで行つてゐることなどもあつた。その前の廊下を通つて小藤はいつも湯殿や厠の方へ行つた。

ある日書生とその紳士が話してゐる言葉がふと小藤の耳に留つた。それは山崎の關係してゐる一座の役者や女優や出し物などについての話であつた。この九月には歸つて來て、それから稽古にかゝるんだが、今度は出し物が好いから屹度面白いだらうなど丶二人は言つてゐた。小藤はそれからは廊下を通る度に、常に二人の話に注意するやうになつた。その擧動にも絕えず眼をつけてゐた。女中に訊いて見る

と目をつけられてゐるのを發見した。ひとりになつてから、人々は皆な馴々しい眼を小藤の方に向けた。廊下に、湯殿に、厠に、散歩をする路に、多勢の眼は、皆な此方に向つて輝きつゝあつた。浴舍の退屈と無聊とは一層さういふ空氣を濃やかにするらしかつた。小藤は一種の得意を覺えずには居られなかつた。小藤はわざと襟のところにだけ濃く白粉をつけて、湯上りすがたをあたりに際立たせて見せたりなどした。

『旦那さんはいつお歸りになります。』などゝある男は笑ひながら戲談のやうにして訊いた。ひとりで三味線を彈いてゐると、浴衣がけの色の生白い男が、わざと此方を見ないやうにして、その前の庭を横つて行つた。

ある年增の上さんは、東京の日本橋あたりの商家の妻で、子供を伴れて一月も前から來てゐたが、その人とは三味線から懇意になつて、段々其處にやつて來て淸元などを一緒に彈くやうになつた。一しきり彈いた後では、小藤は甚句だのカッポレだのを賑かに彈いて見せた。

表の方にゐる學生達は、退屈して腕相撲をしたり、琵琶唄を唄つたり、西洋劇の女優の聲色をつかつたりして遊んだ。あの中學校の生徒が大勢やつて來た時には、生憎あれ模樣で、裏の高い山に凄じい雲がかゝつて、雨が土砂降りに降つたけれど、それでも是非登山するのだなどゝ言つて、糸立を買つて、草鞋をつけて、ゲイトルの紐を結び直して勇しく隊を組んで奥の山の方へと登つて行つた。奥の山には、

だ來たばかりだし、それに此まゝ東京の暑いところに戻つて行くのも厭だし、二三日靜かに獨りで暮してゐて見たいので、代りに母なり妹なりの來る間を、小藤は獨りで其處に殘ることにした。旦那の歸る時には、小藤は町の出口の杉の森の所まで送つて行つて、うねくと屈曲した長い路にいつまでも見えてゐる旦那の車を見送つた。高原には白い雲がふうわりと浮んでゐた。

小藤は急にのんびりしたやうな氣分になつて、湯に入つたり、其處等を散歩したり三味線を彈いたりして暮した。女中達はひとりになつてから大勢寄つて來て話した。海岸に生れてまだ東京に行つたことのないといふ女もあれば、ある町の料理屋に奉公して、三味線や唄などに興味を持つてゐる女などもあつた。小藤は旦那がゐる間は、成たけ隱すやうにしてゐた自分の稼業を、今は知れても構はないといふやうな話の仕方をして、後には丸髷を輕い銀杏返しに結つたりなどした。お春といふ色の白い如才のない女中とは、中でも殊に懇意になつて、芝居の話などを小藤はよくして聞かせた。役者の繪はがきを歸つたら送る約束などをもした。

初めて來た時には、田舍臭いイヤな溫泉場だと思つたが、旦那がゐなくなつてからは俄かに自由な靜かな質朴な勝手の出來る溫泉場のやうに思はれて來てゐた。ひとり殘るのを心細く思つたのは、全く取越苦勞に過ぎなかつたのを小藤は發見した。

尠なくともこの溫泉宿の中で、小藤は浴客を始め、宿の人々にまでもめづらしい美くしい東京の藝者

『當り前ぢやないか。こんなところまで來て、そんな惚けなんか聞きたくない。』

『惚けぢやありませんよ。昔話ですよ。』

『よくそんなことが言へたもんだ。』

『言つたッて構はないわ。』

『馬鹿々々しい。默つて聞いてゐれば、好きなことを言ふ！』

小藤は旦那がそのことについてまだいくらか疑つてゐるのを前から知つてゐた。しかし、かう急に怒り出したのは、別に原因があつた。小藤は昨夜獨りで離れて寢た。今夜もお腹が痛いの頭が痛いのとさつきから言つてゐた。

小藤は默つて考へて居たが、

『私、明日歸らうかしら？』

『勝手にするが好い。』

『だッて、折角保養に來ても、保養になんかならないんですもの。』

かう言つてプイと小藤は緣側の方へ立つて行つた。

一週間にならない前に、旦那は急な用事が出來て歸つて行つた。その時一緒にとは言つて見たが、ま

て、雲の往つたり來たりするのを眺めながら、東京のことや山崎のことなどを頭に浮べて日を暮した。歡樂の面影は未だに小藤の頭を去らなかつた。ある時は、それが颶風のやうに突如としてかの女の體を襲つて來た。『もし此處で逢つたら……。逢ふやうなことがあつたら……。その時は何うだらう？　まさかに怒つた知らない顏もして居られないだらう。先方だッて、他人のやうにはしてゐられないだらう。』こんなことを思ふと、小藤はかうして山の中に詰らなく暮してゐるのが馬鹿々々しいやうな氣がして、明日にも歸つて、電話を懸けて、元の鞘を戻さうかなどゝ思つた。さうした心は不思議にも自然に旦那の心に通じてゐるらしかつた。小藤の態度やら言葉やらから解つて行つてゐるらしかつた。

ある日の新聞に、小藤は山崎の消息が出てゐるのを見た。何でも山崎は一座と共に大阪に行つてゐるらしかつた。その夜、小藤は何氣なくそれを旦那に話した。其時は旦那は別に氣にも留めてゐなかつたが、つい興に乘つて餘り深く饒舌りすぎた小藤は、やがてすつかり旦那の機嫌を損じて了つたのを見た。『もう好い加減にしろ。』などゝ後には旦那は言つた。

『好いぢやありませんか、昔のことだから。』

負けてゐずに小藤が言ふと、

『誰もわるいッて言ひやしないよ。』

『本當にすかない。すぐあゝ怒るんだから。滅多なことも言へやしない。』

もなし、何の爲め？　何の爲め？……

明方近く、小藤は深い睡眠から旦那に搖り覺まされた。やがて暫くして、旦那は手拭を持つて湯に出かけて行つた。

散歩から歸つて來ると、湯に入つて、それから酒を飮んで、醉ふとすぐ旦那は籐椅子の上に行つて高い鼾をかいて寢た。時々茶を淹れて、菓子など取寄せて、二人一緒に食ふこともあるが、さういふ時にも別にこれはと言つて面白い話も出來なかつた。芝居の話をしても旦那は唯フムフムと言つて聞いた。ぢき大きなあくびなどをした。

山の上にあるお宮に一緒に出かけて行つた時でも、旦那は足弱の小藤の後れ勝ちなのを待つでもなく、ズン／＼眺望臺のある處まで行つて、ベンチに腰を掛けてひとりであたりを眺め廻した。旦那は小藤のそれほど興味を覺えない山や川の名を煩さく話して聞かせたり、此處等の住民が、冬の客の來ない間の内職に、山の奥の篠竹を切つて來て、養蠶の籠をつくる話をしてきかせたりなどした。

かう長く旦那と一緒にゐた經驗のない小藤には、これまで知らかなつた旦那の生活が段々はつきりと解つて來たやうな心持がした。午後からは小藤はいつも輕い頭の眩惑を覺えた。

小藤は旦那の散歩に行つた間や、轉寢をしてゐる間などに、ひとりで、小さい方の籐椅子に身を横へ

『もう酒がさめて？』

『すつかり覺めた。』

『今日は汽車に乘つた疲勞が出た故か、體が少し變よ。それにお腹が痛いの。』小藤はわざと下腹を押すやうにして見せた。

蚊帳の外の薄暗い行燈は、一層小藤の顏を蒼白く痩せてヒステリックに見せた。それに比べて、何といふ丈夫な立派な肥つた旦那の體格だらう。小藤はいつか寫眞で見た肥つた丸顏の細君などを思出してゐた。

『何うしてかう私は弱いんでせうね……。それから比べると奧さんは丈夫ね。』

『うむ。』旦那は笑つて、『少し物を食ふやうにする方が好いよ。滋養物を澤山に取るやうにしなければいけないよ。肉類を少し食ふやうにすると好いんだがな。』

『肉類は私何うしても嫌ひ……。』

『野菜ばかりで……しかも、ほんの少ししか食はないんだもの。あれぢや體が痩せるばかりだよ。』

それはこれまでにも度々二人の間に取換された會話であつた。

小藤は旦那が何の爲めに、多くの金を自分につぎ込むのだらうなどゝをり〳〵は考へた。遊ぶのが面白いといふ風でもなし、三味線を彈いて騷ぐのでもなし、さうかと言つて深く思合つてゐるといふので

つたり何かすることもあるけれど、それは皆な自分や染次姐さんが教へたものばかりで、きまつて『妙見さんへ願こめて』だの、『留めても歸る』だの『山谷の小舟』などが出た。『また山谷？』かういふやうな顔をして、小藤はいつも三味線の調子を合せた。

清元と常盤津の區別が此頃やうやくわかつたなどゝ旦那は言つてはゐるが、それでも『釣女』を彈いてゐると、『それは清元だねえ、好いねえ、』などゝ言つた。きかせるつもりか何かで、興に乘つて小藤が長い段物を彈いてゐても、やがては退屈したやうな顔をして、旦那はすつと立つて縁側の籐椅子の方へと行つた。小藤は、『都々逸だけはせめて唄へるやうにしてお置きなさいよ。その位のもの知つてゐないと不便だわ。』かう言つてある時一生懸命にそれを教へたことなどを思ひ出してゐた。

三味線にも倦きると、小藤は涼しい風に枕をして、持つて來た長い長い講談物を讀み耽つた。その間を旦那は獨りで町の方へ散歩に出かけて行つたりなどした。夜は酒を飲んで早くから旦那は寢た。

『姐さん、蚊が少しゐるねえ。蚊帳を吊つて頂戴な。』かう言つて小藤が寢る支度をする時分には、旦那は最初の睡眠から覺めて、手拭を持つて湯に出かけて行つてゐた。

床の中に入つてから、

『貴方は丈夫ね。病氣などしたことはないでせうね。』

『うむ。』

けたことがなかつたが、小藤はその時感じたさびしさと物足らなさとを早くも昨夜の汽車の中で感ぜずには居られないのを發見した。面白い中は煩さいほど種々なことを話しかけるけれど、詰らなくなると、旦那はいつも押默つて、むつゝりして、此方から話しかける言葉にも碌々返事もしないのが例であつた。それに旦那は、何ぞと言ふと、さういふ場合、女の機嫌を取るのは自分の威嚴に關するといふやうな顏色をした。種々な物に對する二人の趣味なども夥しく違つてゐた。

『綺麗な花ね。』かう言つて小藤が見せても、旦那はウムと言つたきりでそれに取合はないやうなことが多かつた。『どうしてあゝ勝手だらう。』

小藤はいつもかう腹の中で物足らなく思つた。銚子に行つた時にも、『さういふ風ぢやとても貴方には女なんか出來ませんね。さういふところでもちよつとやさしいことを言ふんですよ。』こんなことを言つたのを小藤は昨夜も思ひ出してゐた。

午後には小藤は三味線を借りてひとりで彈いた。

情夫に持つなら、役者よりも何よりも三味線彈が一番面白い。湯治場などに行くと殊にさうである。二人で合はせて三味線を彈いてゐると、長い日も殆ど飽きるといふことを知らないさうである。小藤は旦那にさういふことを望むのではないが、せめては唄でも滿足に唄へれば好いと思つた。下手でも少しは三味線が持てるやうな人であれば好いと思つた。機嫌の好い時には、何うかすると、小聲で唄をうた

那に打つけるやうにしたが、さて落附いて見ると、思つたほどわるいところでないのが段々小藤にも飲込めて來た。『この二間が使へれば、向うとは離れてゐて靜かで好いわ。それに、何にしても眺めが好いわねえ。』かう言つて小藤は喜んだ。毛筋を長く兩方の鬢にさして、咬へ手拭をして、長い廊下を湯から戻つて來た時には、『綺麗な湯よ。透き徹るやうよ。貴方も行つてゐらつしやいよ。』か言つて晴々したやうな顔色をして笑つて見せた。

鐵瓶をかけた古風な青銅の火鉢、その傍には茶器と茶の罐と鬱金の茶布巾をかけた茶盆とが並べて置いてあつて、皿には宿で出した菓子などが入れられてあつた。小藤は大きな信玄袋の中から旅行用の化粧箱を出して、鏡臺の前に坐つて長い間おつくりをした。

で、さつぱりして、派手な中形に着替へて下駄をつゝかけて歩いて見たり、宿の裏のお宮の祀つてあるところに行つて、そこにある鞦韆で學生達の運動してゐるのを長い間小藤は立つて見てゐたりした。離れた二階には、官吏の避暑旅行らしい夫婦づれが來てゐて、顔の蒼いヒステリイらしい細君が、小藤の意氣な姿をめづらしいものゝやうに凝と長く見送つてゐた。浴槽につゞいた旅館の厨では、薄暗い光線の中で、此處の主婦らしい意氣な丸髷の三十女が多勢の婢や僕を相手に、襷がけになつて劾々しく働いてゐるのを小藤は見た。

旦那とは此前に一度銚子の方へ行つて二三日滯在してゐたことがあるばかりで、他には何處にも出か

れに言ふでもなく言つて、それを二つ三つ手巾で結へた。

『少し歩きますから、車屋さん先に行つて下さいよ。』

小藤のさした蝶の大きく縫ひのしてある白い蝙蝠傘は、あたりに際立つて美しく日に光つた。一町ほど前に旦那の車は行つてゐたが、やがて其處で留つて、小藤の靜かに歩いて來るのを待つてゐた。

箱根のやうな贅澤な室や湯殿や女中は得られなかつたけれど、幸ひに溫泉は空いてゐた。かれ等は眺望の好い八疊と六疊を借りることが出來た。其處からは、起伏した低い丘を隔てゝ、遠く海の日に光るのが見えた。

『好いわねえ。』

小藤は暫し立つてあたりを眺めてから、緣側に置いてある籐椅子に長く身を橫へた。緣側の向うには草藪が續いて、萩が咲いたり薄が靡いたりしてゐた。かれ等の下りて來た停車場は丘の陰のところに白く簇々と固まつて指さゝれた。

車から下りて宿に入つて來た時には、家の構造の粗雜なのと、女中の氣のきかないのと、長く滯在してるらしい學生達のじろ／＼と此方を見るのとに厭氣がさして、室に就く前に廊下のところで、『もつと好い宿があるんでせう。』とか『私達の來るやうなところではなかつた。』とか言つて、小藤は苦情を旦

がした。

小藤は五六年前に、ある下町の商家の意氣な若旦那と一緒に箱根に行つた時のことなどを思ひ出しながら、水のちよろ〳〵と落ちる庭を前にして坐つてゐた。明るい電車、明るい氣の利いた女中の顏、若旦那の意氣な姿、花崗石で疊みあげた大きな湯殿——さういふ過ぎ去つた光景が不思議にも小藤の眼に歴々と見えた。

裏の小屋には馬がゐて、草の腐る臭ひが、をり〳〵朝風に吹かれて此方までやつて來た。櫛巻きにした其家の娘は、繩のやうな帶をしめて、無作法にもいつまでも立つて此方を見てゐた。

『あゝいふ娘でも、矢張、惚れたとかはれたとかいふことがあるんですわねえ。』小藤はこんなことを言つて笑つた。

しかし其處から溫泉場に達する高原の路は、流石に小藤の眼と心とを十分に惹いた。路の兩側には、赤い黃い紫の野の草花の一面に敷いたやうに咲いてゐて、綺麗な水が、美くしくちよろ〳〵と到る處に流れてゐた。昨夜からの雨は拭つたやうに晴れて、明るい日影は山から高原へと一杯にさしわたつてゐた。

『車屋さん、ちよつと下して……』小藤はこんなことを言つて、車から下りて、紫の色の濃く眼に附いた桔梗を草原の中から採つて、『綺麗な色ね、何ッていふ好い色でせう。こんな紫があるでせうか。』誰

は感ぜずには居られなかつた。昨夜一緒に乘つてゐた都風の人達や外國人はもうとうに何處かで下りて、二等室にも田舍者の厚い唇だの荒れた手だの日に燒けた顏などがわびしく殘つてゐた。旦那の顏も何處となく煤けて黃ばんで見えた。

サツと凄じい谷川が流れ落ちてゐたり、深い谷に恐ろしい黑い雲が渦卷くやうにわきあがつたり、高い高い山が行手を塞ぐかと疑はれるばかりに聳えてゐたりした。下りたところは小さな停車場で、田舍田舍した藁家の前に、車が一二臺並んで置いてあつたが、逢ふ人每に、誰もこの似合はない二人の姿を物珍らしさうに見ないものはなかつた。ある男は長い間立つて見送つてゐた。

『貴方、もう少し構ふ方が好いわ。羽織は着ていらつしやる方が好いわ。出して上げませうか。』

度々かう言つて世話を燒いても、

『好いよ、好いよ。』

と平氣で言つて、麥稈の安い帽子を阿彌陀にかぶつて、わざとインバネスも被ずに步いて行く旦那の姿を見ると、小藤は思はず溜息が出た。

停車場前の休茶屋では、あまりに上さんがじろじろ見るので、小藤は終にはいくらか自暴になつて、わざと鏡臺を借りたり、肌ぬぎになつておつくりをして見せたりした。

『藝者ですよ……東京の藝者ですよ、旦那につれられて來てるんですよ。』と言つてやりたいやうな氣

眼には、山の上にある涼しい眺望の好い溫泉場が映つて見えてゐた。

『でも遠いでせう？』

『なァに、一晩夜汽車の急行に乘れば、明日の朝に着くんだから、わけはないよ。あゝあそこが好い。あそこが好い。』ちよつと間を置いて、『涼しいところだからね。無論蚊なんかゐやしないよ。それに眺望の好いところだよ。停車場から上つて行くところには、草花なんかゞ一杯咲いてゐて、それは見事だよ。あそこなら靜かだ。それに海が近いから新しい魚も食へる。あそこが好い、あそこが好い。』

『ぢや其處が好いわ。』

旅に出たことのない小藤は、何となく氣が勇んで來てゐた。小藤は靜かな暢氣な田舍の溫泉場を想像した。

その時は旦那は忙しい體を一週間ほど都合して、小藤を山の溫泉へと伴れて行つた。長い／＼退屈する汽車、二等室の電燈に無數に集つて來る草原の蟲、凄じい風雨、闇を劃つて怖しく聳えてゐる山々の黑い影、夜の明けた時には、今までに見たことのない山の中を汽車は駛つてゐて、細い岨に添つた路を簑を着た百姓が雨にそほ濡れて歩いてゐるのを小藤は見た。

眼に見ゆるものは、總べてめづらしいものばかりではあるが、しかし恐怖に近い一種の心細さを小藤

つしり稼ぐ方が好い。そんなに弱つてゐては爲方がないからな。』かう言つて旦那はあれかこれかと溫泉をさがした。

『でも、これひとりで行つてゐられるでせうか。』

傍から言ふ母親の言葉を小藤は打消すやうにして『時々來て下さりやその間位は一人でゐられますとも。』

『ゐられなかつたら、母さんか誰か行くさ。』

『私が行かれると好いんですけれど、さうすると駄目ですからね。』

『ひとりでもゐられてよ。』

小藤はつねに似ず乘氣になつてゐるのを旦那は見た。

餘り流行るやかましい溫泉では、却つて保養のためにもならないと言ふので、旦那はあれかこれかと猶ほ溫泉の選擇をした　箱根は贅澤すぎるし、熱海や修善寺は暑いし、伊香保は好いけれども、交通が好くなつてから、浴客が大勢行くやうになつて、まごまごすると、八疊の間に二組も押籠められないとも限らない。日光の奧は靜かだが、あそこは遠すぎ、不便すぎる。それに溫泉が硫黄で女には向かない……。

『さうだ、さうだ、あそこが好い。』旦那は不意に好いところを思ひ附いたやうにして言つた。旦那の

」、そこには、いつも女に騷がれてゐる山崎がゐた。
小藤の體はめつきりと痩せ細つて來てゐた。腹がわるかつたり胃がわるかつたりした。ある時は、電話の受話器を耳にしながら、急に烈しい眩暈を感じて、そのまゝ其處に倒れて大騷ぎをした。小藤は蒼い顔をして、茶簞笥の上からいつも水薬の壜を取つて飮んだ。見るのもきらひな鷄卵のきみを無理に母親から勸められる時には、小藤はいつも顔を蹙めた。
『姐さん、本當に痩せたわねえ。夏痩せにしてはいつもよりひどいわねえ。』などと言つて、小奴は小藤の顔を見た。
外にはきら〳〵と暑い日が光つて、碧く輝いた空は狹い庭からひろびろと見渡された。紫陽花の紫がくつきりと冴えた光線の中に見えるやうな日には、二階を上つて行くところにある大きな鏡に、頭痛膏を張つた小藤の顔が際立つて蒼白く映つて見えた。小藤は寢たり起きたりしてゐた。
『何うかしたんだね。大事にしなくつてはいけないよ。』
來る度に旦那は心配さうに言つた。
溫泉行の話がきまつたのは、八月の初めの頃であつた。『さうさな、俺は忙しいけれど、時々行つて見てやるよ、一週間位なら暇が出來ないことはないけれど、行くなら一月位行つてゐなければ保養にならないからな……』何うせお座敷は隙なんだらうから、ゆつくり保養して來て、涼しくなつてから、み

幇間を亭主にしてゐる一人の中姐さんは、『でも、本當に、藤ちやんのやうに思ふことがあるよ。つくづく飽き飽きして了ふ事があるのね。何か變つた事があれば何でも好いから出て來れば好いなんて思ふのね。さういふ時に魔がさすのよ。』

『何んな魔がさしても、體なんか何うなつても、もつと面白い事が不意に湧くやうに出て來れば好いと思ふわ。』小藤はかう言つて、中姐さんの方を見て、『でも、姐さんなんか好いわ。延孝さんが優しいから。』

『中に入つて見りやさうでもないよ。矢張同じことよ。』

『さうかしら。』

自分の戀に熱してゐる間に、その周圍にも種々な事件のあつたのを小藤は見た。ある姐さんは、十二三年も添つた亭主と財産を半分わけにして、ある義太夫語りと別な土地に行つて稼業をするやうになつた。ある姐さんは若い男ととち狂つて、旦那をも捨てて、遠い田舍に住替へに出て行つた。ある妓は肺病で死に、ある妓は男と海岸に行つて情死未遂をした。小藤はをりをり自分のやつた事を獨りで頭に浮べて見たが、それは丁度暗い單調な闇の中に一時にぱつと輝いた幅の廣い太い光線のやうなものであつた。そしてそれは今遠いいく自分の手のとゞかない處に行つて了つてゐた。小藤は溜息をついた。

新聞に出て來る山崎の名は、をりをり小藤の眼に留つた。その役者の一座の消息を注意して見てゐる

るのを嘆かずにはゐられなかつた。

小藤にはまた元の生活が戻つて來てゐた。母親の眞面目くさつた顏と、妹の何事にも動じないやうな鈍い表情と、瘋狂な弟の角刈頭と、田舍出の下女の佛頂面と、さういふものが再び小藤の周圍にあつた。一中節の老いた師匠は、例のごとく撥を三味線に當てゝ、熱心に頭を振つて、一種特有な懸聲をしてむづかしい節廻しを唄つた。小藤はまた小藤で、俄かに火の消えたやうに靜かになつた家をさびしがつてよく近所の朋輩の許に行つては時間を潰した。『姐さん、お座敷。』かう言つて來る箱屋の聲にも、昔の鈍い同じ調子があつた。

かうした單調な空氣は、再び小藤を暗いさびしいところに伴れて行かずには置かなかつた。何處に行つても、お茶屋に行つても、お座敷に行つても、誘はれて遠出に出かけて行つても、いつも其處には見馴れた同じ女將と女中とがゐて、型に入つたやうな追從と世辭とをお客の前に捧げてゐた。何百遍彈いたか知れないお座附を附ける時には、小藤は言ふに言はれない單調と退屈とを感じて、ひとり手に溜息が出るやうな氣分になつた。

『藝者なんて、よく飽きずにやつてゐるものね。』

ある席で、姐さん達ばかりになつた時に、かう小藤が言ふと、

『だッて、それぢやおまんまが食べられないもの。』ある年增の老妓はかう笑ひながら言つた。

燒いて？』

『いいぢやないか、わざ〳〵燒かないでも……。』

『でも燒いて了ふのよ。』かう言つて小藤はマッチを擦つてそれに火をつけた。

起誓だけは抽斗の奧に藏つて置いたけれど、その折々につけての種々の思ひを籠めた男の手紙が、かうして燻つて燃えて行くのを見るのは、小藤には餘り好い氣持がしなかつた。小藤はメラ〳〵と見るが中に燃えて灰になつて行く中に自分の魂の消えて行くやうなさびしさと悲しさとを感じた。

『ひどい煙だ。』

旦那はこんなことを言つて、二階の障子を明け放つた。靑い烟はそこから蛇の這ふやうにすうと出て行つた。

『これでさつぱりした。』

心にもないことを言つて小藤は旦那の方を見て莞爾と笑つて見せた。旦那の眞面目くさつた煤けた顏がイヤに小藤の胸につかえた。

『これの方は何うだえ？』暫くしてから旦那は笑ひながら短刀を振廻す眞似をして見せた。

『何うせ、いつまでもお寶をつかつてゐることの出來るやうな人ぢやないんですから。』小藤はかう無造作に言つて退けたが、しかし小藤は今でも矢張時日をきめてその二階に行かなければならない身であ

『まだ忘れられないんだらう？』

『もうイヤ……。すつかり男がわかつて了つたんですもの。あれぢやとても駄目ですもの。女につかはせるのを商賣のやうにしてるんですもの。とてもあれぢや堪らないわ。こつちが潰れて了ふばかしですもの。』ふと思ひついたやうに、『ほら、此處に、女から來た手紙がありますよ。これを此間ソッと取つてやつたのよ。……そら、御覽なさい。此處にも無心を言つてやつたことがちやんと出てるから、此間のお金も隨分骨を折つて拵へて上げたんですから、又復ッて言つては何うかと思ひますけれど、心がけては置いて見ます。明日お目にかゝつた時くわしく――ね、かうやつて、皆な女から卷き上げるんですよ。』

『何だらう、一體？　藝者だらうか？』

『藝者にしちや文句が巧すぎるわねえ。素人かも知れませんよ。木村まさッて言ふのね。かういふのが澤山あるんですよ。』

『盛なもんだな。』かう言つた旦那はさういふ色男の世界を想像するといふやうな顔をしたが、『しかし何處が好いところがあるんだね。何ういふ處だえ。お前だッて、忘れられないやうなところがあるんだらう？』

『そんなものはないわ。もうすつかり思ひ切つて了つたんですもの。こんな手紙、あると、またイヤだから、すつかり燒いて了はうと思つてるのよ。』かう言つて小藤は火鉢を引寄せたが、『好い？　此處で

『さうでもないわ、いつでも、玄關まで出て來るんですもの。お世辭の好い方よ。……私これで四度お目にかゝるけれど、いつだッてイヤな顏なんかしてゐたことはないわ。いつも調子が同じよ。』かう言つて、『お庭に植木屋が大勢入つてゐたわ。樹が多くつて、夏はすゞしいでせうね。霧島が綺麗に咲いてゐたわ。』

『今度、本當に、てる子ちやんを借りてお出でよ。ひとりでも泊つて行くよ。』かう言つたが、考へるやうにして『私にもね、母さん、あの位の子が一人あると好いんだけどもねえ。さうすると、まぎれてゐて好いんだけれど……。どうして出來ないんでせうね。』二三年前、子供が欲しくて欲しくて、到る處の神に願をかけたことなどを小藤は思ひ出してゐた。

二三日して旦那がやつて來た時には、小藤は今まで隱して置いた山崎との關係をかなり細かいところまで話して聞かせた。簞笥の抽斗をあけて束にして置いた手紙などをも出して見せた。旦那は其處に萬年筆で書いた達者な字を見た。細かい字ではあるが、文句には芝居の臺辭か、でなければ小說の中の形容詞のやうな旨い言葉が澤山に澤山に列ねられてあつた。『旨いことが書いてあるねえ。』齷齪した事務の中に每日沒頭してゐる旦那は、かう言つて別世界を見るやうな心持で、その美しい巧みな手紙の文句を見入つた。

『これで皆な騙されるのね。』

『上らなかつたの？』
『え。』
『上れば好いのに……』
『でも……』
『髷に結つてゐて？』
『いゝえ、束髪。』
『てる子ちやんは？』
『下女と何處かに遊びに行つたッて仰しやつたわ。』
『今度、お前、一度てる子ちやんを借りてお出でよ。可愛い子ねえ、本當に……。眼が好いわねえ。丸で西洋人形のやうね。』かう言つた小藤は去年の夏頃旦那がその末の女の兒を伴れて來て泊つて行つた時のことなどを思出してゐた。歸りには自動車の待つてゐる處まで小藤はその七歳になる子を負つてつれて行つた。それを近所の抱妓達は珍しさうにして大勢見てゐた。
『てる子ちやんは奥さん似かえ？』
『さうね、奥さんよりも、何方かッて言へば、旦那に似てるわ。』
『奥さん、立派にしてゐて？』

罪深い業などが繰返して新に考へられた。小藤は橋向うから來る髮結に、『お氣の毒ですけどもね、また向うの笹まきを一圓だけ誂文して下さいな。明日持つて來るやうにね。』と頼んだ。妹に持たせて、明日は旦那の家に屆けさせてやらうなどと小藤は思つてゐた。

小藤は三味線を下して、暫く稽古を中絶させてゐた一中節を彈いて見たりなどした。傾城淺間を半分ほど習つて、『お師匠さん、今月から少し休みますから。』と言つた時のことなどを小藤は思ひ起さずにはゐられなかつた。其時分から山崎は家にやつて來るやうになつてゐたので、世間がうるさいと思つて、小藤はさう言つて一時斷つたのであつた。いつの間にか教はつた傾城淺間は、大抵は忘れて了つて、道成寺も滿足には彈けなくなつてゐるのを小藤は見た。『一中節のお師匠さんの許へ行つてね、また來月から始めますからッて、さう言つて來ておくれな、奴ちやん。』三味線を藏ひながら、小藤はかう小奴に言つた。

笹卷を妹が旦那の家へ持つて行つた日には、小藤はお座敷に出てゐなかつたが、歸つて來るとすぐ、

『旦那はゐたかえ?』

『お留守らしかつたわ。』

『奥さんが出たの?』

『え……いつも莞爾した好い奥さんね、上れ上れッて言つて下すつたけども……。』

て、『そんなことを言つたの？　次手に旦那によろしくつて？』かう繰返して言つた時には、流石に總身の血汐が頭の先まで上つて來るやうに小藤には感じられた。金さへあるならば、もう一度男をその女の手から奪ひかへして、うんと見せつけてやりたいなどと思つた。『でも、そんなことをしたツて爲方がない。何うせ、さういふ男なんだから……もう此方に用はない男なんだから。さうよ。向うにも未練があるから、さういふ眞似をするのよ。』

『それはさうね。でも、私、口惜しかつたわ。』

『まだ何をするか知れないよ。その位のことで濟めば好い方だよ。』

かう傍から母親が言つた。

しかし小藤にはそれ以上に腹が立つた。その女の顔——好い旦那があつて金が自由になるのを見得にしたやうな女の顔が癪に觸つた。小藤はその日一日浮かない顔をしてゐた。そして時々思ひ出したやうに、『今にすつかり裸にされて了ふんだね。その時の勘定だつて皆な女がさせられたんだらう。男が旨いんだから。』かうは言ふものゝ、その男の旨い口と體とが、意地わるくも小藤の體にも蘇つて來てゐた。それを押へながら、小藤は一日一日と過して行つてゐた。一方では旦那の來ようの遲いのなども氣に懸つた。

小藤はその孤獨な心を旦那によせかけて行かうとは思はなかつたけれど、旦那に對して自分の行つた

て女をたらすといふほどの腹のある男でもない。あの時だつて、あんな喧嘩にならうと思つて、女をつれて來たわけではない。しかし、いかにしても女に持てすぎる。女に對して意志が弱すぎる。女の金で遊ばせて貰つて、それで平氣でゐるやうな男では、何うせ行末の見込がない。かう思つた小藤は、翻つて自分の男に入揚げた金、指環、帶留、つゞいて旦那の不機嫌などゝいふことを考へて溜息をついた。

矢張、一生かういふ稼業をしてゐるより他に、私には行く路はない。藝でも磨くより他に爲方がないんだ。』かう想つた小藤の眼には涙が滲み出して來てゐた。何處かで復習つてゐる仕込の子の金切聲が悲しく總身に染みわたるやうなのを小藤は感じた。

小奴が知らずに聘ばれて行つた時には、山崎は此間の女の他に役者と老妓とお酌とを伴れて來たといふ話であつた。小奴を聘んだのも、實は間接に小藤に見せつける爲めであるらしく、自動車で景氣よくやつて來て、景氣よく騷いで引上げて行つたといふことである。小奴は口惜がつて、女と山崎とのいちやつき方などを小藤に話した。『だッて、自動車に乘つて行けッて言ふから、其處まで一緒に來たんですけれどもね。それは騷ぎよ。女を抱いたりかゝえたりしてきやつきやつと騷いでゐるんですよ。そして、あそこで下りる時に、姐さんにも母さんにも、次手に旦那にもよろしくッて言ふぢやありませんか。私はくやしくなつて了つた。』

『お前さん、そんなものに乘るからだよ。お前さん、馬鹿ねえ。』かう小藤は言つたが、ちよつと考へ

『さうね……。』

かうは言ふものゝ、折々その餘燼が小藤の胸に燃え返つて來て、此儘になつて了ふことか堪らなくさびしいやうに母親には見られた。お座敷がかゝつて來ても『何だか、氣分がわるいから、今日は斷つて頂戴。』などゝ言つて小藤はよく二階に行つて寢た。

其頃は晴れた日が續いた。二階の欄干からひろ〴〵と展げられた碧い空には、雲がふうわりと白く浮んで通つて行つたりした。寢ながらぢつとそれを見詰めた小藤の眼からは涙が流れた。

男から何とか言つて來るだらうと期待したが、果してその三日目に電話がかゝつて來た。しかし小藤はそれに出やうとはしなかつた。

取次いだ小奴は、『姐さん、こんなことを言つてたわ。姐さん怒つてるかえなんて言つてたわ。隨分ねえ。』と言つた。小藤は默つて小奴の顏を見た。

男が縒を戻さうしてゐる行爲はそれに留らなかつた。その後も度々電話がかゝつて來た。捨てるには惜しい女であるには相違なかつた。小藤はそれにいくらか自分の孤獨を慰められながら、しかしとても成立つ見込のない愚かな自分の希望を押へるやうにしてゐた。今度縒をもどせば、それこそ身の破滅だといふ風にも小藤は考へた。

小藤は長い日を男の性質を考へなどして暮した。男は決して母親の言ふやうな惡人ではない。意識し

でも、小奴とは何か其時のことを話して居るのを母親は耳にした。『だつて、餘りだもの、昨夜といふ昨夜は本當に愛想が盡きた。』などと小藤は言つてゐた。

しかし何が何だかわからない。喧嘩をしたつて、それでおいそれと切れられるものだか何だかわからない。こんなことを思つて母親は取合はずにそつとして置いたが、小藤の決心は存外固いらしいのが段段母親にも飲み込めて來た。

餘ほどひどい愛想づかしをやつて來たらしかつた。前から溜つてゐた疳癪が一時に破裂したらしかつた。『もう、あんな奴、二度と顏を合はせる用はないんだから。』母親がそれとなく探りを入れると、小藤はわざと平氣な顏をしてこんなことを言つてゐた。

かと思ふと、『でも、惜しいわねえ。つかつた金が惜しいわ。何うかして母さんのだけでも取る方法はないかねえ？』

『なアに、お前さへその了簡になつたんなら、それで好い。金は惜しいけれどもね。取らうなんと思ふと、却つてまた引かゝつて了ふから。』

『それは大丈夫だけどもね……。』から言つて考へて、『彼方此方にあゝいふ女が澤山あるのね。お茶屋などでも、隨分引かけられてるところがあるのだつて。』

『わるい夢を見たと思へば好いよ。』

さういふ女が彼方此方にあるんだね、屹度……。』

『さうらしいわ。でも、ね、母さん、女はまごくしてましたよ。あんな喧嘩にならうとは思はなかつたでせうからね。』

母親は好い懲悔だなどと思ひながら靜かに煙草を吸つた。『でも、彼奴の爲めには、餘程つかつてるよ。五六百ぢやきかないよ。』

『さうね。私も、初めはあんな人ぢやないと思つた。姐さんだつて、考へたんでせう。』

『これで納まれば好いがね。』

『でも、隨分ひどい愛想づかしだつたわ。男が一文なしに扱き下げられてゐましたもの。』

其夜は小奴と母親と二人がかりで着物を着替へさせて、靜かに二階の寢床の中につれて行つて寢かした。あくる朝起きやうが遲いので、母親が心配してソツと二階に行つて見ると、薄暗い光線の中に小藤はもう眼ざめて、眼を大きく明いて、ぢつと一ところを見詰めてゐた。母親は一枚雨戸を細目に明けてそして靜かに下りて來た。

やがて小藤は起きて來たが、何をするのも詰らないといふ風で、いつものやうに髮も梳かず、おつくりもせず、豐川さまもおがまず、ぽつねんと喪心したものゝやうにして長火鉢の前に坐つてゐた。昨夜醉つて歸つて來たことだけは話し合つたけれど、そのことに就いては、小藤も母親も一言も言はなかつた。

てやると、小藤はちよつと眼を明いたが、またそのまゝすやくと寢入つた。

暫くして、同じ待合に行つてゐた小奴は、心配らしい顏をして歸つて來たが、小藤の倒れてゐる傍を通つて、長火鉢の傍に坐つて、小聲で母親と長いこと話した。小奴の話では、何でも山崎がよし町の女を見せつけに伴れて來たらしかつた。それは二十三四で、姐さんなどよりも格はわるいけれど、色は拔けるやうに白い綺麗な女で、好い旦那があるらしく、ダイアの指環なども二つも三つもはめてゐた。『姐さん、ぐつと來たんでせう。隨分騷ぎだつたわ。私が下の座敷にゐると、お上さんが私を呼んで、姐さんが大變だからつて言ふから、慌てゝ行つて見ると、それは大騷ぎよ。姐さん眞青になつて、眼を吊し上げて、痰呵を切つてゐる最中なのよ。姐さん、平生はあゝ見えてゐても、いざとなると、それは大變なんですからね……。すつかりいろんなことを言はれて、扱き下されてゐたわ。それにあの人もね、隨分腹を立てゝゐて、何をするかわからないやうな劍幕だつたから、お上さんと一緒に無理に車に乘せて歸してよこしたんですよ。』

『向うの女は何うしてたの？　其間？』

『何でもかうね。その女も餘程深く騙されてゐるのね。その女の前で心を見せるとか何とか言つて一緒につれて來たものらしいのね。』

『だから、最初から私は駄目だよとちやんと言つたんだけれど、姐さんにはわからないんだもの……

『本當よ。うそだと思ふなら見てお出でよ。男つてあんなもんかしらん。』小藤は考へながらまた下唇を咬んだ。

ある夜おそく小藤は泥のやうに夥しく醉つて歸つて來た。車から格子戸を明けて家へ上るにすら、足元が蹌踉として體が自由にならないといふ風であつたが、『母さん、あん畜生と切れてやつた。ざまア見やがれつて言つてやつた。あゝこれでせいせいした。』

かう言つたと思ふと、お座敷着のまゝで、兩手を顏に當てゝぐつたりと打伏しに倒れて了つた。今日結つた銀杏返しの根は拔けて、髷は散々に壞れてゐた。

『お前、何うしたのだえ? それで寢ては堪らないよ。着物がくしやくしやだよ。』

しかし小藤は起上らうともしなかつた。母親が傍に行つて見ると、長襦袢の紅い袖口に當てた青白い頰は濡れて、襟足のところが輕く浪を打つて動いてゐる。小藤は泣いてゐるのであつた。

『何うしたんだえ?』

かう言つても小藤は矢張默つて歔欷してゐた。

爲方がないので、暫らくソツとそのまゝにして置くと、やがて烈しい酒の醉ひに泣きながらも眠つて行つたらしく、顏に當てゝゐた兩手を外して、顏を疊の上に押附けて了つた。枕を持つて行つて宛かつ

『あんなところにかくして置く奴があるもんかね。』呆れて小言も言へないやうな氣分に母親もなつてゐた。

『だつて、もしかわかるとわるいと思つたんだよ。正直なのね。』

『馬鹿におしでない。』

母親はかう言つて、ぶつ〳〵言ひながら、その通帳を簞笥の奥深く藏つて、ピンと錠を下した。

それから段々注意して見ると、牡丹の彫刻の帶留もなければ、金で見事に彫つた櫛も見えなかつた。その他に大事に大事にしてゐた蛇の彫刻の指環もなかつた。

『お前、ちよつとお見せ。』

かう言つて母親は傍に寄つて來たが、それでも旦那に買つて貰つたダイアだけは離さずにはめてゐるのを見て安心したといふやうに、『困るねえ、お前。一體何うしたんだえ？　お前だつて子供ぢやないぢやないか。』

『大丈夫よ。もうよすんだから、今度はうんと言つてやらなきやならないことがあるんだから……。』

下唇を咬みながら、『本當だよ、母さん、私だつて馬鹿ぢやないから安心おしよ。今度逢つたら、うんと言つてやることが澤山あるんだから……。』

『何が何だか……。』

母親が保管して藏つて置いた筈の質の通帳があ、る時思ひもかけない二階の蒲團の下から出た時には、母親は思はず赫としてそれに眼を注いだ。怪しい、怪しい、さういふ金が何處から出るかと疑つたのがそれであつた。そこには尠なからぬ金の上借がしてあるのを母親は見た。

小藤は其時長火鉢の傍にゐた。

二階から急いで下りて來た母親は、

『これはお前かえ？』

小藤はチラと其方を見たが、平氣で、『さうだよ。此間借りて貰つたんだよ。』

呆れた顔をして母親が其處に棒立に突立つてゐると、

『好いぢやないの？　私のものを私が借りたんだから。』

『十五日と書いてあるよ。』母親はその時思ひ出すやうにして、『奴ちやん、お前さんかえ？　この使ひに行つたのは？』

『わかつちやつたの？　姐さん？』

かう言つて笑ひながら小藤は三疊から出て來た。

『困つた人だねえ。』

『だつて、お寳がなけりや爲方がない。ね、奴ちやん。』

母親と山崎との間は日増に面白くなくなつて行つてゐた。たまに來る旦那の嫉妬よりも毎日顏を見合せてゐる母親の態度や氣分の方が一層小藤には邪魔に感じられた。小藤はそのことでよく母親と喧嘩した。

『そんなことを言ふなら、洗ひざらひ、旦那に話してやるから、さうお思ひ……。』

かう母親が言ふと、

『勝手におしよ……。その代りすぐ出て行つて下さいよ。これは私の家なんだから。奴ちやんだけ置いてあとは皆な伴れて出てお出でよ。』思ふやうにならぬことばかり多いのに痼癪を立てゝゐる小藤は、柄にもないことを喚き散らして近所を騷がした。

山崎が來ても、母親はもう初めのやうにチヤホヤするやうなことはなかつた。『女たらし。』『娘を騙した惡性男。』などといふ言葉が絶えず母親の蔭口に上つた。ある時は母親は手厳しく貸した金の催促をした。從つて山崎の足は段々桐家の入口から離れて行くやうになつてゐた。小藤はいくらか自暴になつたやうになつてよく山崎を松月の方へ引張り出した。

恣まゝにしたか、二人の間は何んな關係になつてゐて、何處までが本當で何處までが噓であるかといふこともはつきりとはわかつてゐなかつた。小藤はその隙間から自分の巧みな柔らかな言葉を旦那の心に滲み込ませて行つた。

それに、小藤にしても、その旦那から離れやうとする氣はなかつた。眞面目な質朴な、それでゐてよく細かいところに入つて行くことの出來る性格は、金以上に小藤の心を占めてゐた。それに、家庭のことや、弟妹のことの相談相手になつて貰ふにも何處か賴もしいやうなところがあつた。

二人になつてからは、小藤は一層心と體を旦那の方に寄せて行つた。

『だつて、こんなことで別れられて？』

『…………。』

『それはね、私もね、一時はね、わるいことをしたとは思つたんですけれどもね。まだ、本當に何んでもないんですよ。新聞にもある通り、女たらしだつて言ふ評判な男なんですもの。矢張あゝいふ人は違ひますよ。柔かい手で女の心を暗まして了ふやうなところがあるんですよ。ですから、今ぢや母さんなんかすつかり信用しなくなつたんですもの。』

『何だかわからない。』

『なら聞いて御覽なさい母さんに……。』

に書いてあることもある。をり〳〵家に男が來るらしい痕跡もある。かう旦那の思ひ詰めてゐるらしいのを小藤は見た。

『ぢや、本當なら、何うして？』

『藝者なんて、何うせそんなものだから爲方がないさ。人間並にあつかつたのが此方の馬鹿さ。』

其處に染次だの露香だのがやつて來たので、話は其儘になつて了つた。旦那は暫くは詰らなさうに溜息などを吐いてゐたが、賑やかな女達の話やら、三味線の音やら、美しい明るい色彩やらに埋められて遊ぶ時は面白く遊ばなければ損だと思つたらしく、やがていつものやうに機嫌を直して、盃を手にするやうになつて行くのを小藤は見た。

やさしい言葉と巧みな表情とがかういふ場合に殊に有效であるのを小藤はよく知つてゐた。小藤はあらゆる機會を失ふやうなことはしなかつた。『では、見てゝ御覧なさいよ。私がそんな女だか何うだか、長い目で見てゝ下さい。』などと言つて、旦那の傍に靜かに體を寄せて行つた。

しかもその間にも、小藤は旦那が何の位の程度までその祕密をかぎつけてゐるかと判斷することを忘れなかつた。旦那の口裏から判ずると、旦那はまだ山崎の何ういふ種類の性質の男であることをはつきりとは知らないらしかつた。それに、家に來て時々衝突することがあつても、それが何ういふ風に行はれてゐるかといふこともよく判つてゐないらしかつた。從つて二人が何處に行つて何ういふ風で歡樂を

新聞の記事を讀んだものなら讀んだで爲方がないといふ腹がちやんと出來てゐた。
『何うして？』
『面白かつたかつて言ふんだよ。』
『面白かつたわ。』わざと落附いて笑つて見せて、『だつて、新聞なんか何を聿くかわかりやしないんですもの。おいらんをしたことがあるんですつてね、私が――。』
『すつかりわかつたよ。』
『さう……。そして、あんな新聞を何處で見たの？』
『何處だつて好いよ』
『でも困るわねえ。』間を置いて、『あんな小さな新聞なんかに書かれたことを一々本當にされては困るわねえ。あんなことを書いた人はちやんとわかつてるんですからね。私、取消を出すわ。本當に稼業にさはりますもの。ちよつとお客にした人をあんな風に書かれちや本當に困るんですもの。』
『何うだかわかるもんか。……もうちやんとわかつたよ。すつかりわかつたよ。あの時だつて……。』
松月での二階の懸持を持ち出さうとするのを小藤は遮るやうにはぐらかして、
『ぢや、貴方は私よりも新聞の記事の方を信用するのね。』
『でも、ちやんと思ひ當るぢやないか。』松月の二階ばかりではない、二階の男からよこした手紙の中

『顏色がわるいわ。』

『さうか。』

などと言つて、またごろりと肱枕をした。

染次が帳場の方へ行つたあとで、突然旦那は、

『此間は面白かつたらう？』

『此間つて？』

小藤の顏はサツと赧くなつた。それを押かくすやうにして『何？　一體？』

『しらばつくれたつてわかるよ。池上は面白かつたらうつて言ふのさ。』

『池上なんか知らないわ。』

『知らないことがあるもんか。ぢや、見せてやらうか。』かう言つて旦那が立上るのを、小藤は遁げるやうにして、『ちよつと露香さん。』かう言つて其處に坐つてゐるお酌を呼んで、急いで向うに立つて行つた。山崎の席にも出て種々なことを知つてゐる露香にも口留をして置かなければならないことが澤山あつた。

染次が此方へ來やうとするのをちよつと控へて貰つて、小藤が再び其處に來た時には、旦那は矢張肱枕をして、ぢつと疊を見詰めてゐた。小藤は一時ははつとしたけれど、其時にはもういくらか落附いて

細く鋭く働いてゐた。それに、今日あたり山崎がやつて來るかも知れなかつた。それには何處かに伴れ出す方が都合が好いと小藤は思つた。

『今日は久し振であそこに行きませうよ。ね、此間も、お上さんが旦那は何うしたつて聞いてたわ。たまには行つて上げなさいよ。』かう小藤が旦那の顔を見ながら言ふと『うん、行つても好い。』などと旦那は煮え切らない調子で言つた。

進まぬのを無理に誘ひ出して、小藤は旦那を奥の待合へと伴れて行つた。出る時、小藤は小奴に、『來たら電話をかけておくれ、』と耳打した。

離れた一間は青葉を透して來る日影に美しく照り輝いてゐた。小さな花壇には、赤いダリヤが美事に咲いて、隣家の杏が旨さうに黄く熟してゐるのが此方から見えた。半かかげた新しい簾には薫風が靜かに渡つた。

此間聘んだ露香といふお酌が最初に來て、少し後れて染次がやつて來た。旦那はいつもに似合はずイヤにはずまない顔をして、何か話しかけても、ウム／＼とばかり言つて詰らなさうにしてゐた。寝たり起きたり溜息を吐いたりしてゐる旦那を小藤は凝と見た。

『何うかして？』

『なアに、何うもしない。』

新聞を手に取つて、讀んで見たあとで、母親は小藤に言つた。

『大丈夫よ。こんな小さな新聞を旦那は見やしないよ。』

『でもね。』

母親は山崎が女たらしと書かれた記事を肯定したやうな顏をして、それについて何か言はうとした。しかし娘の昂奮してゐる顏を見ると、言つても無駄と思つたか、其まゝ何とも言はずに默つて了つた。山崎は母親から金を借りて未だにそれを返さうともしなかつた。母親の觀察では、とても娘の思つてゐるやうなことが山崎との間に成立しようとは何うしても思はれない。ある點では娘が確かに騙されてゐるとさへ母親は思つた。

二三日經つてから、ひよつくり旦那がやつて來た。

小藤は一番先に旦那の顏から新聞の記事を見たか見ないかを讀まうとした。旦那の顏はいつもよりは少しむづかしいと初めには思つたが、話をしてゐるうちに、それは此方の思ひなしで、旦那はそれを知らないらしいのを小藤は見た。旦那は割合に機嫌の好い顏をして、いつものやうにいろ〳〵なことを話した。

しかし一度安心した小藤は、まだ安心の出來ないといふやうな心持を何處かで感じた。此方がさう思つてゐるからさう見えるばかりではないといふことを旦那の顏やら言葉やらに見た。小藤の眼と頭とは

には小藤がその土地での手取りであるといふことやら、不見轉あがりで昔は女郎もしたことがあるといふことやら、散々金を絞つた揚句に男を突放して短刀でおどかされたといふことやら、種々なことが書いてあつて、最後に、山崎の女たらしで、其處にも此處にも女があつて、『何方が何方だかわからない、好い相棒だ。』といふ風に結んであつた。

『屹度、あそこの女將が饒舌つたんだよ。』暫くしてから小藤はかう言つてその新聞を傍に置いて、『でなくつちや、この間のことなんかわかる筈がないんだもの。』

再び新聞を手に取つて見て、

『新聞なんて好い加減なことを書くもんね。私が女郎をしたことがあるんだとさ。……屹度彼奴が書いたのよ。彼奴にちがひないよ。』いくらか昂奮した顔をした小藤は、自分のことよりも寧ろ山崎についての記事が胸につかへるやうなのを覺えた。

それに、一方では小藤は旦那がこの記事を見ることを恐れた。山崎との關係はつとめて旦那には祕密にして置いた。二階の男の方の話を大きく色濃くして、その陰に山崎の方は蔽はれて了ふやうにくと話して置いた。新聞の記事ではあるけれど、いざといふ場合には、如何やうにも辯解することは出來るけれど、兎に角、この記事が旦那の眼に觸れないことを小藤は望んだ。

『困るねえ、見ると――。』

何うだかわかるものかといふやうな皮肉な表情を小藤は旦那の顏に見たいつものやうに容易に旦那の機嫌の直らないのを小藤は見た。旦那は冴えない顏をして默つて盃の數を重ねた。何うかすると、小藤の酌を待たずに、德利から自分の盃についだりした。物を運んで上つて來る母親の顏を凝と見た。そして思はず溜息が小藤の口から出た。

しかし旦那は別に烈しく怒つたといふ風をも見せなかつた。その夜は泊つて、靜かに話してそしていつものやうに穩かに歸つて行つた。朝、床の中で、『本當に一月ほど何處かにやつて下さいよ。好いでせう？』などと繰返して小藤は言つたが、旦那はそれに取合はうとはしなかつた。

旦那の歸つたあとで、小藤は長火鉢の前に坐つて。獨りで深い物思ひに沈んだ。つくづくかういふ生活はイヤだなどと小藤は思つた。いつものやうに山崎に電話をかける氣にもなれなかつた。隣では役者の留守に照山が來てゐるらしく、鈴吉の笑ふ聲と男の戲れる聲とが樂しさうに縺れ合つて聞えてゐた。

小新聞ではあつたけれど、ある日の記事に、山崎と小藤との艷話が誇張して半段ほど書いてあつた。それを弟が工場からの歸途に買つて來て姉に見せた。

『まア。』

かう言つて新聞を手に取つたが、そのまゝ小藤の顏は長い間そこから離れようとはしなかつた。其處

旦那が默つて煩悶してゐる形は一々小藤の頭にすき透るやうにはつきりと映つて見えた。言ひたいことが山ほどあつても――普通ならば烈しく怒りたいところをぢつと押へてゐるのを小藤は歴々と見た。それを隱すやうにして旦那は、急に盃を口に當てた。

『いやね、貴方はまだ怒つてゐるのね。』

『怒つてやしないよ。』

『うそ、怒つてゐてよ。ちやんとわかりますよ。……でも、ね、本當にね、困るんですもの、イヤでしたけれどもね。爲方がないんですもの。今ぢやもう昔のやうな荒い稼業も出來やしませんしね。それも、ね、昔からこの土地にゐて、藝でももつとしつかり出來てゐるなら、お茶屋さんでも、その方はしなくつてもかけて吳れますけれどもね。私なんかまださういふ姐さんの組には入れないんですからね。何うしてもこれを拶がないと、』ちよつと腕を當てる眞似をして、『何うしてもお座敷が少くなりますからね。』

『わかつたよ、わかつたよ。だからさういふ二階を澤山に拵へて置くさ。』

『すかない！　まだ怒つてゐるのよ。』

小藤はわざと向うを向いて見せたが、暫くしてから、『だから、すつかり話したから好いぢやありませんか。今度何うかして、旨く切れたら、もうそんなものは拵へませんから……。本當に今度位こりたことはないんですもの。』

『貴方、一緒に行つて下さらない？』

『俺？　俺は忙しくつてとても駄目だ。』

もし旦那が少しの間何處かに行つてゐることに同意したならば、其處へも山崎を呼び寄せてこつそり遊ぶことが出來ると小藤は思つてゐた。

『さうしたいんですけれどもね。』

『駄目だよ、そんなこと。』

『でもね、困るんですもの。』

旦那はその話を避けるやうにした。爲方がないので、小藤も後には別の方に話を持つて行つた。常によく旦那の氣質を呑込んでゐる小藤は、つとめて心細いやうな姿を見せたり、艶な眼色をして體をその傍に寄せて行つたりした。しかし旦那は考へるやうな表情をして、默つて唯小藤の顏を見た。

何んなに不機嫌な時でも、酒を出してお酌をして、美しい長い髱を見せて、三味線の一つも彈くと、機嫌がぢきに直つて行くのを小藤は昔から知つてゐた。しかしそれでも直らないやうな時には、小藤はわざと突かゝつて行くやうな樣子を見せたり、自暴のやうに無理に酒を飮んで見せたりした。『だつて、何うせ歸つて行くことは出來ないんでせう。泊つて行かずには居られないんでせう。』小藤はいつもかういふ眼色をして見せた。しかし今日はいつものやうには行かなかつた。

『嘘を言つちや駄目だよ。』

『嘘なんかちつとも言ひやしない。唯、あの人が疑つて、大騷ぎをして、そして貴方のところにまでおせつかいに言つてやつたんですよ。』ちよつと間を置いて、『一體、何んなことを書いて上げたんですの？』

『何でもないよ、別に……。』

『手紙があつて？』

『ある。』

『今度見せて下さいね。』

『そんな物を見たつて爲方がない。』

『でも、見たいわ。本當に見せて下さいよ。その代り、それを見せて下されば、私は何でもすつかり話してきかせてあげますから。』

小藤は思つたほど旦那の心の張詰めてゐないのにほつと呼吸を吐いたやうな氣がした。小藤はわざと此間の出來事の方を大きく色濃く話して、一方の方は飽までもその陰に隱すやうにした。

『本當に一月ばかり何處かに行つてほとぼりをさますと好いんですがね。何處か好い處はありませんかしら？』

『それはいくらもあるだらうさ。』

やしない。何んな苦勞でもしますから――。』

『それで一體何うしたんだえ？』

『今ですか。爲方がないから、好加減なことを言つて置いたんですけれどもね。……私、もう、あれから怖くなつたんだもの。まご〳〵すると、殺されるか何だかわかりやしないんですものね。何處か一月ほど田舍にでも行つてゐやうかと思ふんですけれども……。』

『何うしても切れるのはイヤだつて言ふのかえ？』

『切れるとか切れないとか、そんな話を持出すどころぢやないんですよ。今、切れ話を持出さうもんなら、それこそまた此間のやうなことをするんですもの。』

『罰だね。』

旦那は靜かに笑つた。

『本當ね。本當に、これまでいろんなことをして來た罰よ。』につこり笑つて見せて、『そりやあの人は嫉妬やきなんですから。ありもしないことにもすぐ疑つて大騷ぎをするんですから。私、初めは馬鹿にしてたけれども、此頃は本當に怖くなつた。』

『もう一つの方は何うなんだえ？』

『あれは何でもないんですよ。お客なんですもの。』

小藤は旦那に言つた。『なら、引かせて下さいよ。ね。ね。さうすれば、私は屹度人に指なんか差されないやうに堅くしてゐますから……。こんな稼業をしてゐるのはもうつく〴〵厭になつちやつた。』

默つて考へ込んでゐる旦那の顏を覗くやうにして、『だつて私、さびしいんですもの。つかまへどころがないやうな氣がしてゐるんですもの。』

『そんなことは駄目だね。』

『駄目？』考へて、『本當に、私なんか苦勞ばかりして來たやうなものですね。一家の犧牲になつて、私ばかり働いて、それで、誰も心から私のことなんか考へて吳れる人はないんですものね。私なんか何うなつても泣いて吳れる人はないんですから。』

染々とした調子で、

『ね、今度のことだけは堪忍して下さい。私のわるかつたことは何うにでもお詫びをしますから。』小藤の目から淚が滲み出して來てゐるのを旦那は見た。

『濟んだことなんか何うでも好いよ。』

『本當に申譯がない――。』かう言つたが、『本當にやめさせて下さい。お寶なんかそんなに澤山にいり

て御覽なさい。』かういふ聲がして、つゞいてあとから、其處の母親の聲やら今まで一緒に話してゐた鶴次といふ妓の聲などがごたごたと混つてきこえた。『お前さんは、誰だか知らないけれど、小藤さんに話があるなら桐家にお出でなさいな。他人の家にそんな恰好して、入つて來て、それで好いと思ふんですか。』

かういふ母親の動じない聲もした。

男の疳立つた聲と女達の爭ふ聲とは猶暫しの間混り合つてきこえてゐた。小藤はその間をぢつとして暗い闇の中に潜んで立つてゐたが、かういふ事件を朋輩の妓達に知られたり見られたりしたのを堪らなく羞かしく思つた。蚊は多く小藤の周圍に集つて來た。

暫くして、ソッとやつて來た抱妓に、

『どうして？』

『もう大丈夫よ。狂言らしいのよ。母さんに言ひ込められてぐづ〳〵してたわ。もう歸るでせう。』

『何うも難有う。』

『でもね、もう少しそこにぢつとしてゐらつしやいよ。知れると怖いから。歸つたらすぐ教へますから。』かうソッと言つて抱妓はまた向うに行つた。小藤は種々な思に胸を搔き亂されながら一時間近くもその暗い蚊の多い空家の中にゐた。

『小藤姐さん、大變よ。』

かう言つて、顏の色を變へていきなり小藤を引立てるやうにした。小藤は表の方で誰か高い聲を立てたのを聞いたばかりであつたが、それをきくとそのまゝ跣足で奥の緣側から飛び下りて、丁度明いてゐた裏の空家の方へと駈けて入つて行つた。小藤の直覺はすぐその事件の何であるかを知つた。小藤は唯わく〳〵震へた。

『さうしていらつしやいよ。知れると大變ですから。』

抱妓は小聲で言つた。

途切れ途切れに話す抱妓の話によると、男は短刀を懷に呑んで、激昂した眞靑な顏をして、表口から『小藤を出せ』と言つて入つて來たといふことであつた。『ね、其處にさうして入らつしやい。出ちや駄目ですよ、家の姐さんと母さんとで何うにかするでせうから。』抱妓はかう言つて向うへ引返して行つた。

小藤はわく〳〵震へながら、體中を耳にして、呼吸を殺して表の方の氣勢を聞いた。

『……確かにゐた。確かにゐた。入つて來るのを見てゐたんだ。』

かういふ男の聲が鋭く聞えた。

つゞいて、其處の姐さんの聲で、

『だつて、ゐないもの出しやうがないぢやありませんか。ゐると思ふなら、そこいら何處でもさがし

それにこんなに女から言はれながら、體が震へるばかりに怒つてゐながら、弱い女に向つて強い烈しい態度に出ることの出來ない男が癪に觸ると同時に、性慾さへ滿足させてやれば、何んなに侮辱されても甘んじて女に從つてゐる男にも業が煮えた。

『今日は歸るわ。』かう言つて、すうと立つて、小藤は二階から下りて來た。

夜おそく家の周圍をつけつ狙ひつしてゐるものがあるのを二三日前から母親は知つてゐた。隣との間にある細い巷路、其處に長い間その男が立つてゐたり、高窓の雨戸を閉めやうとした時にツと慌てゝ壁から飛び退いて行つたりした。隣の鈴吉も其處から男の影の出て來るのを見たなどと話した。水道の管のところにのつそり立つてゐたことなどもあつた。『お前滅多に外に出られないよ。困つたことになつたねえ。』などと母親は心配した。

それが誰であるかは母親にも小藤にもよくわかつてゐた。小藤は流石にそれを恐れずにはゐられなかつた。思ひ詰めた男心は何んなことをするかわからない。さうかと言つて、もう一度よりを戻して、やさしい言葉をかけてやる氣にもなれない。小藤は神經の昂つた青白い顏をして二階に行つて、ひとりで深い溜息などをついた。

月の薄明るい晩であつた。小藤が奧の藝者屋に遊びに行つてゐると、突然そこの抱妓が、

ぢやなし、イヤだつていふ女などにいつまで思ひを殘してゐなくたつて好いぢやありませんか。』

欺かれたといふ念が赫と男の體に燃えるやうに起つて來たらしく小藤には思はれた。小藤も焦燥と疳癪が立つて來た。思ふことが自由にならずに思はぬ人に深く思はれてゐることが小藤には腹立しかつた。

男は張り詰めた忿怒をいくらか柔げたやうに、『なら、爲方がない。僕の心がわからないんなら、爲方がないけど……。』

『わかりませんとも……。私だつて私のしたいこともあれば、私の惚れた男もあるんですからね。』

『ぢや爲方がない、勝手にするさ。』

『勝手にしますとも……。仰有らなくたつて勝手にしますとも……。好いぢやありませんか。私に何んないろがあらうと、旦那があらうと、私の好きですることですもの。構つたことはないぢやありませんか。默つてきいてゐりや、旦那に言つてやるの何のつて、勝手に言つておやんなさいな。』

男の體はまたぶる〳〵と震へた。小藤は腹が立つて爲方がないやうな氣がした。男がかなりの金と情とを自分につぎ込んで呉れたことなどは、小藤の頭にはもう少しも殘つてゐなかつた。寧ろ稼業とは言ひながら、生活のためとは言ひながら、かういふ男に、身を任せたといふことが腹立しかつた。其日、小藤は山崎と旦那のことで母親と强く言ひ争つて來た。何處を見わたしても、自由にならない。何處に行つても思ひのまゝにならない。それが腹立しい。『勝手にするが好い。』小藤はかう思つた。

一夜小藤は二階の男に言つた。『だつて、そんな無理を言つたつて爲方がないぢやありませんか。いくらお金を積んで下すつたつて、私がイヤなら爲方がないぢやありませんか。』

男は押默つて、下唇を咬みながら小藤の顔を見た。男の顔は蒼白く、額には青い筋が立つてゐた。體の震へてゐるのが歴々と見えた。

暫くしてから、

『ぢや、今までのは皆な本當ぢやなかつたんだね。』

『本當もうそもありやしないわ。貴方も考へて御覽なさいな。私だつて、さう〳〵貴方の言ふなりにばかりなつてゐられやしませんからね。』

『だつて、此間さう言つたぢやないか。さうさへすれば、廢業でも何でもするつて言つたぢやないか。』

『貴方も隨分わからないわねえ。人間には底の底と言ふことがあるんですよ。言つたことを一々本當にしてゐるやうな人が何處にあるもんですか。』

男は低頭いたまゝまた下唇を咬んだ。沈默が暫く續いた。

『ぢや、イヤだつて言ふんだね？』

『他にいくらも女なんかあるぢやありませんか。貴方だつて、これまで滿更女を知らないつて言ふ方

つたやうに樂しく打解けて過したが、しかもその夜の印象は長く小藤の頭に殘つて容易に忘れられなかつた。小藤はをり〳〵寂しいつまらない心になつた。二人の間に取かはされた起誓などは、白紙か何ぞのやうにすら思はれた。小藤は旦那が平生哭々も言つて聞かせる言葉などを思ひ起してゐた。口癖のやうに旦那は言つた。

『人間は何でも生活だからね。何んなことをしても、人間は生きて行かなけりやならないんだからね。何うしても自分で獨立して行くやうにしなければいけないよ。それは獨立はさびしいものだよ。獨立は孤獨だよ。大きい獨立になればなるほどさびしさの程度も大きくなるんだよ。しかし、このさびしさと孤獨とには、人間は堪へて行なければならないんだからね。』さういふ言葉が染々と深く小藤の胸には思ひ出された。小藤は、『矢張、惚れた方が負けね。その代りに惚れられるよりも惚れた方が面白いには面白いけれど。』かう言ふ言葉などをも思ひ起した。これまでにつかつた金や、言葉の端々にそれとなく現はれる母親の意見や、何も知らない旦那に對しての罪ふかい行爲や、さういふものが一つ〳〵小藤の心に蘇つて來たりした。しかしそれもすぐ孤獨から崩れて行つた。ひとつの心すら完全に占領せずに、唯齷齪と働いてばかりは小藤にはゐられなかつた。小藤の心はある時は男の方に向いたり、旦那の方に向いたり、生活の方に向いて行つたりした。時には何も彼もわからなくなつて、亂れた糸のやうにこんがらかつた。『何うでもなれば好い。』などと小藤は思つた。

し、それは小藤には何だか一時の氣休めを言はれてゐるやうな心持がした。で、其處から海岸の方へ出かけたが、長い間、小藤は暗い自動車の中で、隅の方に腰をかけて、深い沈默に沈んでゐた。男は何彼と機嫌を取るやうにして言葉をかけたが、小藤は唯點頭いて聞いてばかりゐた。小藤は一緒に來た若い二人の男のわるく騒ぐのを唯卑しむやうな心持で見た。

二人になつてから、

『隨分、賑やかだつたわね。』

『忙しくつて困るよ。皆な一々世話をしてやらなけりやならないんだからね。』

『お盛んで結構だわ。あの人と一緒に何處かに行けば好かつたわ。私が邪魔をしたやうなものね。』

『煩さくつて爲方がないんだよ。』

『何うせさうでせうよ。女なんか――。』かう言つたが、『私、何だか、具合がわりい。』亂れかけた髮を櫛で梳きながら、『私の顏、今日は蒼いでせう？』

『何うかしたのかえ？』

『疲れたんでせう。』

小藤はかう言つてさびしく笑つて見せた。

その夜は旨いやさしい男の言葉に丸められて、暫くした後は、劇場での不快と孤獨とを全く忘れて了

ういふ女にはよく分るのだと思ふと、小藤は侮る事の出來ない競爭者を其處に發見したやうな氣がした。
初めの幕の明く前に、山崎はフロックコオト姿で、すつきりとした形を舞臺にあらはして、この芝居をするについての口上を述べたが、その時には、小藤は喜ばしい誇を總身に覺えて、滿場の拍手喝采に値ひする男の價値を尊く思つたけれど、さういふ空氣を完全に理解することの出來ないさびしさがやがて次第に小藤の胸を襲つて來た。小藤はこれまで完全に占領したと思つてゐた男が自分の傍を離れて、すうと向うに行つて了つたやうな心持を覺えた。

夜おそく劇場のカフエで大勢の人達に山崎の取卷かれてゐるのを見た時には、殊にその感が深かつた。例の天平式とかいふ髪を兩方からわけた新しい若い女達は、先生、先生、と言つてその周圍に集つて、生々とした調子で、自由に快活に外國の劇の話などをした。青い酒、赤い酒、灯の明るい光線の中を人達は面白さうに行つたり來たりした。ある群では、今日の劇の成功を祝するため、座頭の役者を呼んで盃を擧げてゐたが、其處にも山崎は引張られて行つてゐた。小藤は廊下で逢つてかねて見知越しのお酌と一緒に、室の隅の方に小さく席を占めて、知らない風をして、唯その賑やかな光景を眺めた。
その女優が入つて來て、山崎を連れて向うの方に行つたが、やがて歸つて來た山崎は、そツと小藤のゐる方へとやつて來て、『何うも忙しくつて爲方がない。もうぢき隙になるからね。』などと囁いた。しか

來たのに氣が附いてゐた。芝居を見に行つた歸りには、山崎の乾分のやうな若い男を二人もつれて、自動車で一緒に遠い海岸の方へ行つて、一夜騷いで歸つて來たりした。

山崎が噂に立てられた女優は、若い色の白い豊な頰をした綺麗な女であつた。仲間ではかなり評判のある方で、その時には西洋の女王見たいな役をつとめてゐた。鍛錬のない淺い細い聲で、踊りのない體のこなしはわるく堅く小藤の眼に映つたけれど、その言ふことゝ表情とは、常に見つけた歌舞伎とは丸で變つた一種の自由を持つてゐるのを小藤は見た。樂屋の出口で、向うから出て來る山崎と邂逅して、立つて長いこと話してゐるのを此方から見てゐた時には、小藤は何とも言はれない嫉妬に體の熱く燃えるやうなのを覺えた。女の振り返つて此方を見た一瞥は深く小藤の胸を刺した。

『あの人ね？　別品ですね。』

あとでかう笑ひながら言つた小藤の顏は青白かつた。山崎の周圍には若い男だの、役者だの、女優だのが常に喧しく賑かに取卷いてゐた。山崎は忙しさうにして、樂屋から舞臺の方へと走つて行つた。ピストルを打つ時の相圖などを山崎はした。

其處には舊劇などに見る事の出來ない世界のあるのを小藤は感ぜずにはゐられなかつた。むづかしい西洋の話、小說や戯曲の話、新しい思想や文句、さういふものを易々と理解して、笑つたり騷いだりしてゐる女優の群が小藤には羨しくも面憎くも思はれた。不斷、山崎が話して聞かせる難かしい話も、さ

『好いてせう？　緩くりして行つても？』

『イヤ今日は歸る……。』

（生憎ねえ）口には言はないが、さういふ心持は小藤の顏に歴々と見えた。

事もなく月日は經つて行つてゐた。菖蒲の節も過ぎ、梅雨は續いて降り、蚊帳は長持の中から取出して吊られた。小藤は去年旦那に拵へて貰つた裾にボッボッと水草と螢の模樣の出た袷を着てお座敷へと出て行つた。

小藤はこのうつり替の時に、風呂敷に冬着を包んで、それを母親に橋向うに持つて行つて貰つた。そこにある大きな質屋は、姐さん方の着物を常に預るところで、家に徒にねかして置くよりは着物を保存する上にも好いと言はれてゐた。『あそこの姐さんでさへ預けるんだものねえ、お前。今日は大勢あそこに行つてたよ。菊屋のお爺さんも來てゐたよ。』雨を衝いて行つて歸つて來た母親は笑ひながらこんなことを小藤に話した。小藤は通帳を引くりかへして見た。

小藤は山崎と關係してから、いつともなく借金の多く出來て來てゐるのを思つた。家に來るやうになつてから、遊ぶ金はいらなくなつたとは言へ、それでも時には別な靜かなところに行つて、思ふまゝに自由に遊ばずにはゐられなかつた。小藤は夫婦約束をしてから、男がもとのやうに金を出さなくなつて

母親はひつくりかへして見てゐたが、『こんなことをしたのかえ？』といふやうなあきれた顏をして、娘の顏をぢつと見守つた。『でもね、これをした時にはね、お互に眞面目でゐたんだからね。酒なんか少しも飮んでゐないんだからね。』小藤は平氣でこんなことを言つた。

ある日、山崎が長火鉢の處にゐると、格子戸が靜かに明いた。『何方？』と言つて取次に出た妹は、慌てゝ引返して來て、其處に坐つてゐる姉の傍に行つた。直覺でそれと知つた小藤は、急いで立つて、上り端の方へと行つたが、

『入らつしやいまし。』かういふ小藤の聲がして、やがて、『今日はね、叔父が來てゐるんですよ。面倒だから、すぐ二階の方へいらつしやい。』

續いて二階の階梯を上つて行く氣勢がした。山崎は小藤の聲と旦那の太い聲との雜り合ふのを耳にした。暫くして下に下りて來た小藤は、茶の支度を妹にさせてそれを二階に持つて行かせた。山崎は歸り支度をした。

『好いのよ。まだ好いのよ。』母親の顏を見ながら、『今日緩くりして行かない？　行くなら、行くやうにするから。』

『今日は歸るよ。』

『さう？』昨日から來てゐても、歸すのは惜しいといふやうな顏を小藤は見せた。

『だつて、旦那はさういふことは喧しく言はない筈なんだもの……。知れたらその譯を話すから大丈夫よ。』

『お前話しやしないだらうね。』

『それは話しなんかしやしないよ。』

『困るねえ。』

『困る、困るつて、母さん煩さいねえ。私が好いやうにするから、默つて見てお出でよ。』

『でも、私が困るよ。二階に來てる時、いらしつたり何かするかと思つて、おち〳〵眠られやしないよ。』

『大丈夫だつて言ふのに……煩さいねえ。』小藤は最後にはいつもさう言つてその話を打切つて了つた。

ある夜、小藤は長火鉢のところに坐りながら、矢張さういふ話を母親としてゐたが、

『だつて、母さんにはよくわからないから、そんなことを言ふんだよ。大丈夫ですよ。濱町にある年增の人なんかとは、もうとうに切れてゐるんだよ。女優だつて、此方が馬鹿にしてゐるんだから……。母さんが心配したやうなもんぢやないよ。』かう言つたが、急に、『ぢや見せてあげようか。』

わざ〳〵立つて、二階に行つて、箪笥の抽斗の中からその起誓を出して來て、それを母親に見せた。

の血を入れずみにした時もさうであつた。ある男にせまられて起誓を書いた時もさうであつた。小藤は、『起誓なんか書いたり、入墨なんかしたりすると、屹度切れて了ふもんですね。不思議ですね。あんなことをするもんぢやありませんね。』かう曾て旦那に言つたことがあつたが、その時にはそんなことはすつかり忘れて了つてゐた。小藤は何うしても一緒にならずには置かないと思つた。

小藤はひとりでその嬉しさを心の底にひめてゐた。それは打明けて人に話すのには餘りに惜しいやうなものであつた。小藤は機嫌の好い顏をして、をり〳〵ひそかに鼠鳴きをした。

母親の眼は、娘が次第に深みに墮ちて行くのを見遁さなかつた。何う考へても、娘の心が餘りに多く男に偏りすぎてゐる。今では、男は平氣で其處に來て泊つて行つた。

『困るねえ。』

母親がかう言つて、二度のところを一度にさせようとしても、小藤はそれに取合はうともしないし、またさうかと言つて、それに反抗して疳癪を起すやうなこともしなかつた。

『だツて、爲方がない。』小藤はいつもさういふ顏を母親にして見せた。

旦那に對しての母親の心配をも小藤はさう苦勞にはしてゐないやうに見えた。つとめて隱さうとするやうな氣分すら段々薄くなつて行つてゐるのを母親は見た。

近頃、そこに新らしい一枚の紙が加はつてゐた。それは山崎の書いた起誓見たいなものであつた。小藤はひとりでゐる時、抽斗の錠を明けて、封筒に入れてあるその文言ををり〳〵讀んで樂みにした。其處にそれがあるといふことは、男が其處にゐるといふことゝ同じやうにすら小藤には思はれた。小藤はそれを繰返して見ながら、それを男が書いた時のことを眼の前に浮べて見た。

男は始め萬年筆で罫のある西洋紙にそれを書いた。わざとハイカラがつて、男の名をドイツ語にしたりした。その時、小藤は『そんな西洋紙になんかいやですよ。眞劍なんですもの。』かう言つて、しつかりした厚い半紙を出して、それに日本の文字で解り易いやうに書き直して貰つた。

『これで好いかえ？』かう言つて山崎は笑ひながらそれを小藤に渡した。

一字々々讀んで見て、『これで好いわ。』と小藤は言つたが、嬉しさうに振つて見せて、

『もう大丈夫よ。これがあれば、貴方はもう本當に私のものなんだから、貴方一人で勝手なことは出來ないんだから。好う御座んすね。』かう言つてそれを確と懷の中に挾んだ。そして別に、一枚同じ文句のものを自分で書いて『字が拙いけれど……これで好いわねえ。何うせ小學校を卒業しただけの女なんだから。』と言つて男に渡した。其時、男は酒も飮んでゐなかつた。眞劍な眞面目な顏をしてゐた。それが小藤にも賴もしく嬉しく思はれた。

これまでにも小藤はさういふことをしたことは度々あつた。しかし大抵は酒の席か何かであつた。男

ないが、先の心を汲んでやるだけの心持がなくつちや爲方がない。』小藤はさういふ言葉の中から旦那の心の細かい姿を捜すことが出來るやうな氣がした。小藤は旦那の言ふ言葉が一つ一つ胸に觸れて來るやうなのを感じた。小藤は手紙を卷いて封筒に入れながら旦那の顏を凝と見た。

『藝者なんてイヤな稼業ね。早く引いて了ひたい。』甘えるやうに小藤は言つた。

二階に置いてある簞笥の抽斗の奧に、小藤は種々のものを藏つて置いた。別の土地にゐた時分、かなり此方から熱心になつて、拇指の下のところに男の血を青く小さく入ずみにして、別れてからそれを消酸銀で燒き取つた痕跡が今でも依然として殘つてゐるが、その男から來た手紙は未だに束にしたまゝになつて澤山に其處に入つてゐた。其他、ある客と上方の方へ行つた時の旅館のつけや、その時々に關係したお客の住所を書きとめた手帳や、心覺えにをり〳〵書いて置いた日記や、抱妓になつて行つた時の證文や、母親からわたされた臍の緒や、小學校時代に學校で教はつた歴史と地理の帳面や、さういふものが質の通帳などと一緒になつてごた〳〵と入れられてあるが、何うかすると、小藤はひとりで長い間其處に坐つて、熱心にそれを整理してゐることなどがあつた。さういふ時には、小藤は昔を思ひ出すといふやうな顏の表情をして、二階に母親と妹が上つて來るのを知らないほどに、熱心にそれに心を集めてゐた。そしてそれを片附けて了ふと、小藤はいつもピンと堅く錠を下した。

『それはさうね。』
『お前なんか、そこをよく考へなけりやいかんよ。いくら稼業だからと言つたつて、矢張同じ人間なんだからな。血も肉もある同じ人間なんだからな。それはもとの女に合力を賴んで來るのは意氣地がないけれど、せめては斷るにも、本當のことを言つて斷つてやれよ。』
『さうね――』
旦那はいつもに似合はず眞面目になつて、自分と山崎との間のことを知つてゐて言ふかと思はれるやうに、『何うしたッて、本當でなくつては駄目だよ。誠實といふことが何よりも人間には大切だよ。いくらかういふ稼業をしてゐて、噓をつかずには片時もゐられないやうな境遇にゐたッて、矢張誠實でなくては成功しないよ。その證據は何處にでもあるぢやないか。』
『本當にね。』赤く醉つた旦那の顏を小藤は見て、『ぢや、矢張、自分で書いて丁寧に斷つてやるわ。』
『それが好いよ。』
『それは、ね、本當に世話になつたんですからね。』
『男の情といふことを考へなけりや、藝者でも矢張いゝ藝者にはなれないよ。お前達には男の情なんて言ふものはあり餘つて困る位だらうけれど――うるさくつて爲方がない位のものだらうけれど、そこをよく汲んでやるやうでなければ立派な姐さんにはなれないよ。今の手紙だッてさうだ。無理には違ひ

『でも、俺なんかいくら落魄れてもこんな手紙をお前のところによこさないから安心してお出でよ。』

『それや貴方なんかそんなことはないけれど、あれば私だッて一生懸命にしますけれど……』かう言つて小藤は考へて『それにしても、本當に何ッて言つてやつたら好いでせうね。返事を出さずに置く方が好いでせうか。』

『何うでもお前の思ふやうにするさ。』

他の話をしてゐる間にも、それが絶えず小藤の氣にかゝつてゐた。丁寧に言つて來てゐる言葉のかげに、恐ろしい執着と怨恨と忿怒とが籠められてあるやうに思はれて、昔の罪が更に新しく蘇つて來てゐた。一方では病んだ妻と子とを抱へて困つてゐるその男の境遇が歷歷と眼の前に浮んで見えた。僅かな金だからいつそ出してやらうかとも思つたが、そんな金があるなら、山崎と何處へでも行つて遊べるといふ氣がして、すぐそれを打消して了つた。

『でも、稼業ですものね。爲方がないわね。』他の話をしてゐながらも、氣になるやうに、小藤はいつか話を其方の方へと持つて行つた。

『それはさうさ……。稼業だから爲方がないにきまつてゐるさ。しかし、嘘をついてやるのはよせよ。此際、嘘をついて斷つてやるのは、餘りに罪に罪を重ねるやうなものだ。赤裸になつた男心に更に煮湯をかけてやるやうなものだからな。』

手紙を讀み了つた旦那は、『一體、いくら世話をしたッて、もとの女のところにこんなことを言つて來られるもんかね。――』

『だからよく〳〵だッて言ふのよ。そんなことを言つてよこすやうな人ではないんですからね。金のつかひ方なんか綺麗な人だッたんですからね。』また考へて、『それに、此處にも書いてありますが、家のことで、少しお金を都合して貰つたことがあつたのよ。それの催促ぢやないッて呉々も書いてあるわね。それにしてもそんなに困るのかしら。』

『しかし、何んなに困つても、かういふ手紙は書きたくないね。』

暫く考へてゐた小藤は、『何ッて返事をやりませうね。』

『斷つてやるのかえ？』

『何うかして上げたいと思ふけれど、また、そんなことをして逢つたり何かすると面倒ですからね。……留守だと言つて、妹に返事を書かせてやりませうか。』

『僕も詰ると、矢張これに同じ末路を見るんだね。』旦那は笑ひながら小藤の顏を見た。

小藤は昔のことや今のことを思ひ出すやうな顏をしてゐたが、

『本當にね、あの田中さんがそんなにならうとは思ひませんでしたよ。人間ッて浮沈があるもんですね。』

顔をして、それを帶の間に挿んで、

『お前、今來たのかえ？　此手紙？』

『え。』妹はかう言つて、『だから、今、姉さんを呼んだのよ。二階に持つて行かうと思つたけれど、田中さんッてそれあの方でせう。二三年前によく家に來た方でせう。だから、姉さんを呼んだのよ。』

『さう。』

小藤はかう言つたが、何も言はずに、そのまゝ二階に上つて行つて、旦那の傍に坐つたが、『今、かういふ手紙が來たのよ。讀んで御覽なさい。』

かう言つて、その手紙を出して旦那に渡した。

『何だえ？　一體？』

『もと、世話になつたことのある人よ。そら、貴方も知つてるでせう。田中さんッて言ふと、そら、よく貴方の妬いた人よ。』旦那が手紙を讀んでゐるのを覗くやうにして、『餘程困つてるんだわね。藝者のところにこんなことを言つて來るのはよく〳〵のことね。失敗に失敗を重ねて、細君や子供が病氣で、金を工面に國に行きたいのだが、その金がないから、工面して呉れッて書いてあるわね。よく〳〵のことね。』考へて、『子供ッて言ふのは、可愛い坊ちやんよ。よくあそこに一緒に伴れて來たりしたんですもの。』

ある夜小藤は一通の手紙を受取つた。それは丁度旦那が來て二階で酒を飲んでゐる時であつた。明日旦那が歸つたら、すぐ電話を山崎の許にかけようなどと思つて、三味線を彈いたりお酌をしたりして小藤がゐると、下で、

『姉さん。』

と妹の呼ぶ聲がした。

『何ァに、』と返事をしたが、別に急用でもないらしいので、すぐには立たずに、暫くしてから下りて行くと、簞笥の上のところに一通の手紙の白く置いてあるのが眼についた。何氣なく手に取つて見た小藤は、其處に昔世話になつた見馴れた男の手蹟を見た。

それは小藤が此土地に始めて出た時分から一二年ほど世話になつた人であつた。深切な人で、自前にしてやるなどと言つて、少なからぬ金をも出して呉れた。ある年の暮には、小藤は別に金が入りもしないのに、ひしと詰つたやうなことを言つて、かなり多い額の金を都合して貰つて、それを贅澤につかひ果したことなどもあつた。それから小藤は一年ほど其男に逢つてゐたが、段々手元が詰つて行つたらしく、後には不渡の小切手などを料理屋に出して、それからその土地にもすつかり顏を出せなくなつて了つたのであつた。

小藤は簞笥のところに立つて、封を切つて、それを走り讀みに讀んで見たが、ちよつと考へるやうな

今の旦那に對しては、母親は今までの多くの娘の相手よりもより多くの好意と信用とを持つてゐた。娘の心次第で、あるところまでは信用して世話をして貰へる人と思つて大切にしてゐた。會社の掛長としてよりも、その家が財産家であるといふことを母親は聞いて知つてゐた。『お前本當に旦那を大事におしよ。あゝいふ心の柔らかな練れた人はさう澤山にありはしないよ。』『今度のことの起らぬ前に、母親はかう度々小藤に言つた。

母親は長い間苦勞して來ただけに、何うかして、家内が安全に、子供達がそれ〴〵立派に獨立して行くやうになることをのみ心がけた。それ以外に、母親には生活の意義がなかつた。母親はをり〳〵自分の長い半生を振返つて考へて見た。父親の意氣地のないために、代々の家藏を人手に渡して、段々底の底まで零落して行つたことや、小藤が生れたばかりの時、離緣話が持上つて、幼兒をつれて里に歸つてゐたことや、子供に別れるのが辛さに、唯それが辛さに、何んな思ひをしても、子供だけは育てゝ行かうと決心して、それからは夫などは相手にしなかつたことなどが繰返された。兎に角、今では子供は大きくなつた。長い間母親の苦心して來たことは半は成し遂げられた。しかし母親は今度は、何うにでも自由になると思つて來た子供が自由にならないといふことを自覺して來てゐた。小藤のさびしい心は察しられるけれど――ちつとやそつと浮氣は爲方がないと思ふけれど、娘が矢張父親の性質に似てゐて、暢氣な勝手な贅澤なことをするのを見ると、それを默つてぢつとして見ては居られなかつた。

わからないものだよ。』などと母親は小藤に言つた。母親も小藤と同じやうに、山崎の話やら周圍やらからその本當の生活を知らうとつとめた。

母親はこれまでにも、娘の相手にした人達―旦那達のことについて種々心配もし苦勞もした。娘は怜悧ではあるけれど、矢張まだ年が若く經驗が積まないだけに、目先が見えないで、鼻先ばかりの考で扱をすることが度々あつた。小藤が他の土地にゐる時分には、母親は遠く離れて郊外に住んでゐたのであるが、少し關係が深くなると、小藤はよくその客を母親の家の方に伴れて行つた。そしてそれを男に對する手練の一つにしてゐるのを母親は見た。そのために、母親は娘と同じ穴の貍とされて、思ひもかけない迷惑を受けたこともめづらしくはなかつた。ある田舍の旦那などは、怒つて三百代言らしい男を家にさし向けて寄越したりした。だから、此の土地に一緒になる時にも、それに懲りてゐる母親は、『お前、餘りおつちよこちよいな事をして呉れては困るよ、お前は困ると、ほつたらかして了ふけれど母さんが困るよ。これからあと始末は御免だよ。よく考へて物をしなければいけないよ、もう一人前の姐さんになつたんだから、此家の主人だから、好いかえ、よく言つて置くよ。』と呉々も言つて聞かせた。それにも拘らず、娘は困ると、矢張いつも母親に凭りかゝつて來た。

『何うも、かういふ稼業をしてゐますと、何うしても人間が薄情になりますよ。決して好い稼業ぢやありません。』母親はある時こんなことを今の旦那に言つた。

ゐた。ある時、『僕だッてその位のことはあるさ――』山崎はこんなことを大勢の役者の前で言つて、『本當だよ。好色一代男といふ本に、女さへその積りなら、雨戸の此方と向うとでも、工夫をして首尾をさせるといふことが書いてあるが、本當にその通りだよ。女ッて大膽なもんだよ。女さへその積なら何んなことだッてさせるから不思議さね。』などと得意さうに顎を撫でると、

『でも、これからと思ふ時に、入口の雨戸をコッコッ、俺だよは餘り好い物ぢやありませんな。此間、それでまごついて、屋根づたひに隣に逃げたといふ話を誰かしてましたよ。』ある役者はかう笑ひながら言つて、自分の經驗を面白をかしく話して一座を笑はせた。『しかし一番苦しいのは押入詰めだ。』などといふ役者もあつた。

ある役者は、『でも、矢張此方の氣に入らない女には、いくら金をつかはれても駄目ですよ。女とは違ひますからね、男は――。それを、あの人ばかりはさうぢやないんだから、盛なもんですよ。』などとある人氣役者の話をした。

母親が心配したほどのこともなく、旦那も知らず、小藤も機嫌よく、山崎は段々多く來て泊つて行くといふやうになつて行つてゐた。山崎と母親との間もその度毎に親しみを增して來て、(その男の言ふことが本當なら、娘の思つてゐるやうにしてやつても好い)といふ腹が滿更底の底に起らぬこともないではなかつた。『さうだね、ちよつとさつぱりして男らしい人だね。でも、お前、人といふものは容易には

しかし遲くなつて、やむを得ず初めて二階に泊つて行つた時には、流石に困つた色が歴々と母親の顔に見えた。『大丈夫よ。』かう小藤が言つて聞かせても、何處となく安心の出來ないやうな風を母親はしてゐた。

爲方がないとは思ひながらも、山崎の來てゐる間は、母親は入口の格子の戶の明く音が氣に懸つて爲方がなかつた。それは大抵旦那の來た翌日とか翌々日とか、さういふ恐れのない時を選んでする業ではあるけれど、ひよつとかして、格子ががらりと明いて、『今日は――』といふ太い錆びた旦那の聲を聞かないとも限らなかつた。ある時は、吳服屋の聲をそれと間違へて、二人の向ひ合つて坐つてゐる長火鉢の間のしきりの襖を慌てゝ強く閉めたりなどした。『藝者屋のお袋も並大抵ぢやないよ』母親は親類の家などに行つてよく話した。

山崎は成たけ人目に觸れないやうに裏道を選んでやつて來た。寺の後のやうなところを通つて、細いゴタゴタした通に出て、それから髮結などの住んでゐるところを拔けて、溝板を少し渡つて行くと、丁度そこが桐家の後に出て行くやうになつてゐた。山崎はいつも其處に行つて、立留つて、軒を並べた二階の方を見るのが例だつた。そこには洗つた女の白足袋などが吊して下げてある。別に變つたこともない。旦那が來てるやうな樣子もない。かう思つて、ぐるりと廻つて、そして格子戶を靜かにあけて入つて行つた。平凡な色事に馴れた山崎には、さういふ人知れない祕密の幕が一種の好奇心を誘ふ好題材となつて

もある人ならば、ちつとは無理をしても差支ないけれど、死んだ親からわけて貰つた少しばかりの財産があるばかりで、將來の希望も學問も何も持つてゐない人だけに滅多なことは出來なかつた。

その頃は晴れた美しい日が續いた。菖蒲の紫白、遲咲の白い躑躅、蛙の聲はやゝ老けて、夜遲くお座敷から歸つて來ると、新綠を包んだ白い靄の中に、光鋩のない電燈の光がぼんやりと夢のやうに見えてゐた。小藤の心は山崎のことゝ旦那のことゝ二階のこととで巴渦のやうになつて亂れてゐた。旦那からは、二三日の中に歸京するといふ端書が屆いて來てゐた。

山崎は足繁く桐家にやつて來るやうになつてゐた。二人はもう滅多に待合には行かなかつた。山崎だけには何も彼も隱さない小藤は、『でもね、母さんもね、此頃ぢや爲方がないと思つてあきらめてゐるらしいのよ。金を遣はれるよりも好いと思つてるんでせう、』などと話した。

それに、口の旨いやさしい人柄なところが、段々母親の氣にも入つて來てゐた。怜悧な山崎は、小藤そのものよりも母親や妹や小奴の機嫌を取ることを忘れなかつた。來る度に、きまりがわるさうにわざと頭を抱へて見せたり、鏡臺に向つて小奴にながし目をつかつて、變に氣を持たせて見せたりなどした。山崎は誰にも評判がよかつた。

た金を母親は喜ばしさうな顔をして受取つて置いたが、それすら小藤には不愉快であつた。『そんな金なんか受取つて、母さん、あとで困るよ。遣つちや厭ですよ。』かう小藤は言つて顔を蹙めて見せた。

此頃男は一層沈默に落ちて行つてゐた。話をしてゐる間にも、深い溜息が絶えず出た。

『何うしても、この女の體と心とを自分のものにすることが出來ないのかなア。』と慨嘆してゐるやうにして、小藤の顔を凝と見た。近所だけに、種々な噂を小耳に挾んで、懊惱したり煩悶したりしてゐるのが歴々とその顔に浮んで見えた。時には小藤は、無氣味になつて滅多なことは言はれないといふやうな氣がして、浴びせかけた酷い言葉を半ば飲み込んで了ふやうなことも度々あつた。

『母さん、困るね。何うかならないもんかね。昨夜はつく〴〵無氣味になつちやつた。矢張、ピストルなんか買つて持つてるんだッて。本當に、あの位、嫉妬深い、執念深い人は私は初めてよ。』偶には機嫌を取つてやらうと思つて出かけて行つて一晩泊つて來た翌朝小藤はこんなことを母親に言つた。

『困るねえ。』

『本當に困つちやつた。今、私がよすなんて言はうものなら、それこそ何んなことをされるかわからない位なんだから。』

『本當だねえ。』

小藤は何故もう少し考へてしなかつたかといふことを痛切に悔いてゐた。社會上の位置もあり、名譽

つてゐて何うする積なの？　死ぬ積なの？　いやだね、まァ。それよりもつとはきはきなさいよ。一人の女なんかにぐづぐづしてゐるもんぢやないのよ。私がゐないたッて、他にいくらも女があるぢやありませんか。』

さういふことを言ふのが無理なのは、小藤にもわかつてゐたが、物を思ひ詰めた蒼白い神經性の顏を見ると、何故かさういふ言葉がひとり手に口から出て來た。腑甲斐ない男の心持に痛い棘の鞭を當てるのが痛快なやうな氣がした。

出來ない相談を持ちかけて、寧ろ思ひ切つて吳れるやうに『なら、三人藝者を置いて下さい。さうすれば……』といふやうな語氣を小藤が見せた時には、男は默つて下唇を嚙んで低頭いてゐた。そしてその時は何も言はなかつたが、二三日してからの夜の話に、『此間言つたことは本當かえ？　本當にさうなら僕にも考へることがあるから。』と男は言つた。今の旦那もよして、藝者も廢業して自分にのみ固くしてゐて吳れるならば、言ふ通りにしてやつても好いといふ腹を男は見せた。

さういふ熱い甘い男心につけ込んで、言はゞ赤兒の手を捩ぢるやうな酷いことをして、家作をして貰つたり抱妓を置いて貰つたりする姐さん達は到る處にあつた。現にその土地での金持と言はれる鶴次姐さんなどは、さういふことを幾度もして、そして今日の位置を築き上げた人である。しかし小藤にはそれは出來なかつた。『此處に少しばかりあるから、預けて置くから、』と言つて、男が持つて來て置いて行つ

置く時の用意にと積んで置くやうにしてゐた。

其方に行つてゐる時に、家に旦那が來たといふ電話がかゝつて來て、泊らずに早く歸つて來るやうな時には、『だッて、旦那ですもの、爲方がないわ。』小藤は膠もなくかう言つて幌で其處から歸つて來た。

それにも拘らず、その男の心は益々小藤に向つて熱くなつて來てゐた。それが小藤にはまた堪らなく厭であつた。惚れる一方で、眞劍な張詰めた青白い顏をしてゐるのを見ると、いくら生計の爲めとは言ひながら、何うしてかういふ男とかういふ關係をつける氣になつたらうなどと思はれた。其處で男の世話をしてゐる婆さんの話によると、男は小藤をすつかり自分のものにする算段を頻りに腹の中でしてるらしく、その唯一の財産である自分の持家を賣る計畫などを立てゝゐた。時には女のつれないのに絶望して、劇藥を机の抽斗に入れて置いたりした。

『そんなもの持つてゐてはイヤですよ。』ある時小藤はかう言つて、無理に男に抽斗の中からそれを出させてそして二階から通りに捨てた。散藥の一杯入つて小さな壜は、ころころと屋根の上に轉つて、舗石の上に落ちて粉微塵になつて碎けた。

白い藥が一面にあたりに散つた。

『本當に、こんなものを持つてちや氣味がわるくつて爲方がない。』その時小藤はかう言つて男の昂奮したセンチメンタルな顏を見て、『貴方ももう少し男らしくしなくつては仕方がないわ。そんなものを持

近所の二階を間借をしてゐるもう一人の男が薄々勘附いてゐるらしいのがその頃小藤には氣に懸つてゐた。小藤はつとめてそれを打消すやうにした。男は時々圖星に當るやうなことを言葉の端々に見せた。

しかしその男はそれを正面から打ち出すことの出來るやうな性質でないのを小藤はかねてよく飮込んでゐた。或はこの男が一番執念く小藤に附き纏つてゐるかも知れなかつた。また一番深く小藤に熱い心を捧げて居たかも知れなかつた。薄情なことを小藤が言つたり機嫌がわるかつたりすると、その男はいつも身も世もないやうに默つて悲しさうにしてゐた。

年はまだ若かつた。

小藤は何故通り一遍のお客にして置かなかつたらうと後悔した。春月といふ待合で一年前ほどに出來たのだが、まだ遊び馴れないヽヽの取れないそれでゐて金廻りの滿更わるくないお客なので、單に待合の客として置くのは惜しいやうな氣がして、例の『さうすれば、私の御祝儀は一々頂戴しなくつたッて好いわ。』から始めて、遂々月ぎめの金を貰ふ段にまで漕ぎ附けて、男の方から此土地に用もないのに、二階の間借をさせるまでになつたのであるが、小藤は自分に旦那のあることをほのめかして、成たけ男には家に出入りの出來ないやうにと仕向けて置いた。然し全然來ないやうにするわけにも行かないので、たまには長火鉢の前に坐らせたことなどもないではなかつた。從つて母親も無論それを知つてゐた。『これも生計むきの爲めだから。』と言つて、月々に貰ふ金は、きちん〳〵母親に預けて、もう一人抱妓でも

などと母親は思つた。

山崎はやがてやつて來て、その夜は二階で酒を飲んだりした。小藤は泊める下心であつたらしいが、男は流石に容易にそれを肯かないらしかつた。『初めて來て、そんなことは出來ないよ。』などといふのを母親は二階の階梯のところで聞いた。しかし二人は遲くなつても容易に二階から起きて來るやうな樣子もないので『いよ〳〵これは泊ると見える。』と母親は思つてゐると、十一時過になつて、急に男の歸る支度をするらしい氣勢が二階から聞えた。

『ぢや、其處まで送つて行くわ。』

こんなことを言つて、小藤は男と一緒に通りの方に出て行つたが、軈て機嫌の好い顏をして戻つて來て、『もう芝居が始まるんで忙しいんだツて、』などと言つた。

『でも、お前、困るよ。』

『大丈夫ですよ。』

小藤は前と違つて莞爾してゐた。

『だつて、度重るとね、何うしてもかういふことは眼に立つものだから。』

『大丈夫よ。』

わざと長く引張るやうに、甘えるやうに小藤は言つた。

『いゝから、私にまかせてお置きよ。心配なんかしないでも好いよ。知らん顏をしてさへすりや好いんだよ。』

小那のことは自分で何うでもするから心配しないでお置きよといふやうな語氣がその中にあつた。母親は默つてそこらを片附け始めた。

母親は思つた。さう言へばそれに違ひない。旦那と娘との關係は自分が知つたことではない。切れようが切れまいが、また先の旦那との間柄のやうな喧嘩が起らうが、これは皆な當人同士のやることで、此方の知つたことではない。過失のないやうに、此處等にざらに見る藝者屋の姐さん達のやうに恩も義も知らないものに娘をしたくないと思へばこそ、いろ〳〵とやかましいことも云つて見る氣にもなるのだが、當人がさういふ氣なら、何うもこれも致し方がない。するやうにさせて置くより他爲方がない。かう思ひながら、母親は默つてゐた。

それに、母親には、それを堰いて、着物や指環を持ち出すやうになつてはそれこそ猶困るといふ腹もあつた。外で遊んで大穴をあけられるよりも、追附くものなら當人の思ふまゝにさせて追附けて置きたいといふ風にも母親は考へた。それに、その男にもつき合つて見れば、娘以上にその眞價を知ることも出來る。もし本當に娘が言ふやうに先々までのことを眞劍に考へるやうな男であつたら、娘だツて一生藝者をさせて置きたいといふのではなし、それは何ういふ風にでも旦那に話が出來ないでもないから

が映つた。

『何うしたのさ……』

『電話をかけたんだよ。』

母親も妹も呆氣に取られたやうにして默つて了つた。暫くしてから母親が、

『お前、何うする？』

『いゝから心配おしでないよ。此處は私の家だよ。私が好いやうにするよ。』

かうなつてはいくら爭つて見ても無駄であつた。一たびかうと決心すれば容易に動かない娘の性質を母親は昔からよく知つてゐた。幼ない時分にもさういふことは度々あつた。髻を取つて引き摺り廻しても、自分の言ふことの通らない中は決して承知しないといふやうな質の娘であつた。十九の時初めて持つた旦那は好い旦那で、小藤自身も惚れてゐたが、矢張その性質が因で後には別れなければならないやうになつた。さういふ時には『だッて、私は私だもの。私は母さんぢやないんだもの、私だもの。』といふ言葉が屹度小藤の口から出た。

とても無駄だとは思ひながらも、

『でも私が困るぢやないか。』

かう母親が言ふと、

藤はそれを鏡臺の抽斗の奧深く藏つた。それは小奴を抱へて呉れた前の旦那が、わざ〳〵定紋までつけせて拵へて呉れた桑の大きな鏡臺であつた。

旅にある旦那から二度目の端書が來た時には、小藤は矢張り長火鉢のところに坐つてほつねんとしてゐた。妹が立つて行つて受取つて、それを姉に渡すと、小藤はちよつと見たばかりで、すぐ裏をひつくりかへして何も言はずにそれを傍に置いた。

『まだ北海道？』かう母親が訊くと、

『さうらしいよ。』かう言つたきりで小藤は別に何も言はなかつた。港らしい船の澤山集つた風景を母親はそこに見た。

ある日の午後のことであつた。小藤は矢張思ひ餘つたといふやうにして長火鉢の傍に坐つてゐたが、ふいと立上つて、急いで格子をあけて表の方へと出て行つた。やがて暫らくして歸つて來た小藤の顏には、張詰めた眞面目な色が歴々と見えてゐた。小藤は再び長火鉢の傍に來て、長烟管で一服烟草をトンとはたいたが、座數で母親と一緒にあたりを散らかして裁縫をしてゐる妹の方を向いて、『お前、其處等もうお片付けよ。お客さまが來るんだから……』

『お客樣？』かう吃驚したやうに言つて、其方を見た母親の眼には、いくらか昂奮した白い小藤の顏

れに違ひない。或は一生の妻にするとまでも言つたかも知れないが、しかしそれが何の位まで眞實で、そしてまた小藤が何の位まで男に打込んでゐるかといふことは、ちよつと母親にも容易に飲込めなかつた。娘だツて馬鹿ぢやない。寧ろ人一倍すぐれて怜悧の方である。時には怜悧すぎると思はれる位である。滿更男に手玉に取られるやうなこともすまいとは思ふが、さうかと言つて旦那があるのに滅多なことはさせられないといふ心配が母親にはあつた。

母親は小藤の態度やら言葉やらから、細かい氣分や心持を嗅ぎ出さうと心がけた。ある時は小藤は深く思ひ詰めたやうな顏をして長火鉢の前にぼつねんと坐つてゐた。ある時は機嫌よくはしやいで獨りで嬉しさうな舌打などをしてゐた。隣の鈴吉が遊びに來た時には、惚氣半分に面白さうにその話をしてゐるのを母親は聞いた。その時小藤は、『だつて、お前さん、さう堅くばかりしてゐちや稼業はつとまりやしないよ。拔道がなくつちやね。』などと言つた。それは隣の役者の居ない時に矢張その照山といふ情夫が來て泊つて行くといふ鈴吉の惚氣に相槌を打つたのではあるが、それが單に鈴吉に對して言つた言葉とばかり母親には思はれなかつた。

時には小藤はひとりで一枚の寫眞を出して見てゐたりした。何時そんなものを貰つて來たか知らないが、それは山崎が洋服姿で二三人の男と一緒に撮したもので、一人は名高い役者であつた。小藤は小奴にそれを見せて、『好い男だらう』などと言つた。小奴は笑つてそれを手に取つて見た。そしてあとで小

『好い男ね、本當に――。』

小奴はそッと母親に言つたりした

母親は『それで、何うしたえ。お前此間のは？……』

『まだ返さないけど、大丈夫よ。あちらの使つたのはそれどころぢやないんですもの。』

その日は小藤は何となく機嫌の好い顏をしてゐた。兎に角惚れた男を宅に伴れて來て、二階に上げて、その鏡に一緒に顏を映したといふことが小藤には嬉しかつた。多勢の女の中からさういふところまで男を引張つて來たといふことが、何だか男と自分の關係を一層深くしたやうに思はれた。小藤は男の言つた言葉を繰返して考へて見たり、男を二階の主人公にして樂しい想像に耽つて見たりした。旦那のことの浮んで來るのを小藤は何遍となく打消した。

『でも、お前、それぢや旦那に濟まないよ。』母親が眞面目な顏でかう言ふと、小藤は『だッて母さん、そんなことを言つたつてそれば駄目よ。一體母さんは藝者屋の母さんのやうぢやないんだからね。私だッて生涯旦那の世話になつてゐられるものぢやなしさ。』かういふと小藤の眼は變に活きて輝いてゐた。

小藤の樣子に注意することを怠らないと共に、母親は一方山崎に對して種々な細かな觀察をした。見たところ、わるさうな人間ではない。それは確かである。金のありさうな藝者を覘つて旨いことをしようとするやうな人柄でないことも確かである。男は無論小藤に種々と巧いことを言つたに相違ない。そ

ねつた裏から裏へと行くやうな細い露地の中に女の入つて行くのを見た。一方はトタンの塀、一方は藝者屋の裏になつてゐるやうなところで、雨あがりの泥濘は深く小藤の吾妻下駄に喰ひ込んだ。『路がわるいから、拾つていらつしやい。』小藤は振返つて幾度となく男に注意した。

山崎の眼には、軒にかゝげた桐屋といふ丸い軒燈と、綺麗に磨かれた格子戸と、意氣な下駄箱と、定紋のついた傘箱とが一番先に眼に着いた。續いて丈の低い小づくりな眼のあたりの小藤によく似た母親と、淺黑い肥つた妹が奧から出て來るのを見た。

傍の長三疊から出て來た小奴は『まア、好く、』と言つて顏を赧くして挨拶した。

その時は別に何事もなかつた。山崎はちやほやする母親と小藤とを相手に、長火鉢の傍で茶を二三杯御馳走になつて、芝居や役者の話を二三十分もして、最後に小藤に誘はれて二階に上つて見た。

二階の六疊には大きな鏡のついた立派な簞笥が置いてあつて、長押にはさる大官の書いた書の横額が大きくかゝつてゐた。小藤はその鏡にわざと二つの顏を並べて映させて笑つて見せたりした。二階から廣々と晴れた空が見渡された。

あとで母親は言つた。『成ほどやさしさうな人だね。第一人柄だアね。しかしお前、餘程氣をつけなけりやいけないよ。人は見かけによらないもんだから。』

『大丈夫よ、母さん、そんな人ぢやないんだから。』

すッて。此頃矢張何處か藝者氣でないところがあるのね。』こんなことを言つて笑つて見せたり、『タクシー？　もう賴んで貰つたわ。もう來るでせうよ。』と言つて嬉しさうに男の手を握つたりなどした。

夕暮の町には、灯が明るく鮮かについて、人がぞろ〳〵とアスハルトの道を歩いて行つてゐた。並木の柳の間からは、暮れ殘つた空の赤く燃えるやうなのが靜かに葉を透して見られてゐた。二人を乘せた自働車はやがて勢よくその間を通つて行つた。女のヴェイルは薄暮の空氣の中に白く飜つて見えた。

山崎の懷が輕くなる頃には、女の工面も、もうさう〳〵は出來なくなつて來てゐた。さうかと言つて、通り一遍のお客のやうに、向うから來るのを待つてばかり居られない小藤は、種々と工面をしては、男の許に電話をかけた。

始めて男を小藤が自分の宅へと伴れて來たのは、旦那が旅に出かけて行つた五日目位のことであつた。それは矢張いつもの家に行つて泊つたあくる日の歸途で、『いゝからちよつと寄つて入らつしやいよ。誰も氣の置ける人なんかありやしませんよ。お袋と妹ばかりですから。』かう言つて小藤は無理に男を伴れて來た。

小藤は先に立つて、人目に觸れないやうな裏道ばかり拾つて歩いて來た。山崎は、やがて通から曲りく

『遠くへ行くのも好いけれど、僕は何うしても、明日の午後には事務所へ行かなけりやならない用があるんだから。』

『何うせさうでせうよ。』

『近い處の方が好いね、明日の朝歸れるやうなところの方が……。』

『稻毛だつて逗子だつて歸れるぢやありませんか。』

『でも、わざ〳〵田舍まで行かなくつても、面白いところは東京にもいくらもあるよ。』

あれのこれのと言つて、容易に話は纏らずにゐたが、終にはもう少し此處で靜かにしてゐて、日が暮れてから、自働車で森ケ崎に行かうと言ふことにやがて二人は一決した。

『ぢや、私ね、ちよつと家に行つて、支度して來るから。』と小藤は言つた。

小藤が家から歸つて來た時には、日はもう暮れかけてゐた。湯に入つたり髮を丸髷に結つたりした小藤は常よりも幾倍も立上つて美しく見られた。色の白い顏がくつきりと拔け出すやうに見えた。

小藤は旦那から貰つた金のいくらかを母親に渡さなければならなかつたのであるが、

『だツて、下さらなかつたんだもの、爲方がないわ。呉服屋は斷つてお置きよ。』などゝ母親に言つて出かけて來た。

嬉々として小藤はゐた。丸髷を男に見せて、『好く似合ふでせう。……私、丸髷が一番よく似合ふんで

『稻毛が好くなつて？』

『稻毛もつまらない。』

かう打消した男には、ある女と稻毛に行つて、三日ほどゐたことがあるのであつた。從つて其處の女中頭の顏も知つてゐるし、何の彼のと噂されるのが厭であつた。其處では、かれは興行の後の慰勞りたいなものを開いて若い人達を御馳走したこともあつた。

『何故つまらないの？』

『でも、おんなとこ、海も濁つてゐるし、食ぶものだツてないし……。』

『でも、靜かで好いぢやないの？』小藤はかう言つたが、『おゝつまらない譯があるのね？』

『譯なんかありやしないよ。』

『誰かと行つたことがあるんでせう。それでせう。それに違ひない。誰と行つたの？』

『そんなことはありやしないよ。』

男が默つてゐるので、

『逗子に行きませうか。』

『一體何うしたのだえ？』

かう言つた男はもうすつかり眼を覺してゐた。

『煩さいなァ。』

『何うせ煩さいでせうよ。』

かう言つて、『なら、話して聞かせて上げませうか。』艶な眼色をして、顏を寄せて、小聲でわざと大きく、『……』

『……………』

『何も言つちや厭。何も言つちや厭……。その代り、今日は一日歸しやしないから。』

『何處にしませうね？』

『さァ。』

若い車夫は其處に車を横附けにして待つてゐた。

小藤は女將や女中と一緒に外まで出て見送つてゐたが、車夫が膝かけを旦那の膝の上にかけた時、

『ぢやね、御機嫌よくね。途中からちよいちよい手紙を下さいね。』

旦那は輕く點頭いて見せた。

『左樣なら。』

『左樣なら。』

賑やかに送る聲はあとから追ひかけるやうに旦那に聞えた。旦那の眼には、小藤の疲れたやうな艶な白い顏があとまで殘つた。

小藤は廊下へ來て、ほつと呼吸をついて、

『まだ、早いのね、七時半ね。』

『これからゆつくりおやすみよ。』笑ひながら女將はかう言つて奥の間へと入つて行つた。

『何うしたッて言ふんだえ？』

『貴方、寢惚けてゐるのね。昨夜、あんなにやいた癖に……。』

『それで、いつ頃歸るの？』
『二十日位何うしてもかゝるよ。』
『私、伴れて行つて貰へない？』
『駄目だよ。』旦那は笑つて『その代り、何か好いお土産を買つて來てやるよ。』
『お土産なんかいらないわ。』
やがて少し明いた襖から女中が顔だけ出して、車の來たことを知らせて來た。小藤はちよつとと言つて、着物を着て帶をしめたが、そのまゝ其處に置いてあつた新しい紙幣をまた頂く眞似をして、紙入に挿んで、帶の中に深くさし入れた。小藤は旦那のあとをついて下りて行つた。
『もう、お歸りなの？　早いのねえ、御飯でも召上つてゆつくりしていらつしやれば好いのに。』かう言ひながら奥から出て來た女將の顔は、酒と花牌との疲勞にわるく黄んで、徹夜をした眼の縁は赤く充血したやうに見えてゐた。
『大變にお世話になつた――。』
『いゝえ、碌々お構ひもしないで。その代り此次ぎには屹度この埋合せをしますから、本當にお近い中に、是非ね、いらつしやるやうに、ね。』女將はこんなことを言つて、旦那のあとに跟いて、廊下を入口の方へと出て行つた。

『今朝はすぐ歸る。』

『さう。』かう言つたが、『あゝ眠い、だつて、昨夜寢たのは二時でしたもの。』

『それまで花牌を見てたのかえ。やつたんぢやないか。』

『私はしやしませんけどもね。皆な夢中よ。それは面白いものね、花牌ッて。岡田のお上さんが一番勝つてよ。何でも五六十圓勝つたでせう。あとでは此處のお上も混つてやつたわ。餘程の手合せよ、昨夜は——私の寢る時分、まだ盛にやつてたわ。』

『まだやつてるかしら？』

『やつてるでせう、屹度。』

『駄目だよ、やつちや……。』

『大丈夫よ。』

『それにしてもちつとも知らなかつた、昨夜お前の歸つて來たのは——。』

きてゐて講談本などに讀耽つた。それに引かへて、朝早く旦那の眼覺めた時分は、小藤にはまだ夜中で眠いのをよく搖り起されるのが例であつた。

『半夜づつ起きたり寢たりしてゐるやうなもんだね。』などと旦那はいつも笑ひながら言つた。

やがて旦那は輕い鼾をかき始めたので、小藤はそつと手を延して、蒲團の下にある旦那の金時計をさがしてぱつと蓋をあけて見た。

針は十一時五分のところを指してゐた。

十時半の約束が急に小藤の胸に支へた。

『ちよつと／＼花牌を見てきますからね……。………………。………………。』

『うん、よし、よし。』

などと旦那は眠さうに言つてゐた。同時に寢反を打つて、此方を向いて細い眼を明けて見て、またすぐ心持好さゝうに眠つて行つた。

朝早く旦那が眼を覺した時には、小藤はもう其處に戻つて來てゐた。出て行つたのは、微かに覺えてゐるが、何時間外にゐて、其間何ういふことをして戻つて來たかといふことは旦那は全く知らなかつた。

ある六疊の方へと二人は行つた。そこにはもうちやんと支度が出來てゐた。

『さう。何處かへ行くの、明日？　會社の用で？』ふと驚いたやうにかう言つた小藤は自由に心配なしに男と遊ぶことの出來る時間の出來たのを喜びながら、

『餘程長く？』

『なァに、二十日位だよ。』

『隨分長いわね。ぢやその間逢はずにゐるの？　私も一緒に伴れて行つて頂戴よ。』

『遠いんだからな。』

『何處？　北海道？　行きたいわねえ。好いでせう、一緒に伴れて行つて下すッても……』

かう言ひながら、小藤は腹の中で、それでは今夜は金は持つて來てゐるに違ひないと思つた。其處ですぐ金の話をしようと思つたけれど、何うせ今夜は泊つて行くのではあるし、旦那の口振から押せば、明日は旅行の準備で朝早く歸らなければならないらしいから、小藤は言出さうとしたのをよして、ぐつすり旦那の寢て了ふのを待つた。

旦那はいつも後向きになつてすぐ寢て了ふのが癖であつた。そのあとを小藤はいつも長い間ひとり起

満足で不愉快であるらしかつた。旦那はてれ隠しにわざとお酌を相手に無邪氣な話などをして笑つた。かなりに飲んだ酒も思つたやうに發しないといふ風であつた。

そこに小藤は上つて來た。

……………………………「…………、…………。………

……、……………。」…………「…………。…………。……

……。…………。」

「……、……………。…………。」

『お前もやるのかえ？』

『私？　私なんか下手だから駄目よ。此間も負けちやつた。』

『あんなものやつちや駄目だな。』

『しやしませんよ。でもね、』今度は染次の方に向つて、『でもね、負けると、取かへさうと思つて、したくなるものね。』

『それは、さう……』染次は煙管を手ではたきながら言つた。

席はもう終りに近づいて來てゐた。興も去つたらしかつた。

食はないといふ飯を無理に一膳旦那に食はせて、染次やお酌をもかへして、それから二階の隅の方に

塵をも動かすばかりにあたりに漲り渡つた。『どうも、追附けない。』染次はかう言つて三味線を下に置いた。

『本當ね、何うしても節が取れないのよ。私なんかもお上さんに幾度も教はるんだけれど、』小藤は傍からかう言つて、『でもね、今ぢや、東京でも、本當に安來節を唄へる人は數へるほどしかないんだッて言ひますからね。』

『拙くなつたよ、此頃は、私も、』女將はかう言つて盃を旦那にさした。

其處に綺麗におつくりをした可愛い三子と露香とが一緒に入つて來た。『まァ、綺麗だ。この位の中が好いね。』などゝ染次は言つたが、ちよつとと言つて、再び下りて行つた小藤は、容易に上つて來なかつた。女將が下りて行つたあとで、染次もつゞいて下りて行つたが、やがてまた上つて來て、お酌に躍らせる支度をさせた。

お酌が長い袖を飜して彩やかな踊を濟して了つても、小藤はまだ其處にやつて來ないので、老巧な染次の取廻しにも、席は何うかするとすぐ白けさうになつた。染次も大抵は飲込んでゐたけれど、餘り長くなるので、後には、『藤ちやん、何うしたんだらう。』などゝ言つた。

『懸持なんだよ。』

かう旦那は言つてはゐるが、小藤が來て其處に坐つてゐないといふことは、旦那に取つて少なからず不

『何か一つ？「筆のかさ」でも……』
『いや、もう今日は。』
などと言つて旦那は盃を口に當てた。
旦那と女將との話もよく合ふらしいのを小藤は見た。酒の話や、盃の話や、つづいて旅の話なども出た。女將が昔行つてゐた山陰地方の話が出た時には、『さうですか、旦那も行つてゐらしたことがあるんですか、何年頃？　廿五年頃？　それぢや私より少し前だ。』などと女將は言つた。安來節の話が出ると、
『それは、お上さんは上手よ。』
と傍から小藤は言つた。
『あれは好いね。追分のやうなもんだけども、あれよりも、もつと好い。山晴れ、山晴れなんツて言ふのがあるね。』かう言つたが、旦那は考へるやうにして、『もう二十年も前だ。今の會社ぢやないけれど、もとゐた會社だけれど、あそこに支店があつてね、二年ばかり行つてゐたもんだよ。その時分には、よくあの唄を聞いたもんだ。』
『ひとつ、お上さん唄つて頂戴。』
女將は『駄目だよ』とか何とか言つてゐたが、やがて高い冴えた聲で、『安來三軒、名の出たところ』といふのを唄ひ出した。醉つた顏を上に向けて、體を少し斜にした女將の喉から巧みな節の抑揚が梁の

『此間、仲で、かういふのを教はつて來たんですよ。』

などゝ言つて、染次は新たに調子を合せて、

三日月の光出ぬ間にちよとかけ出し、戀がならひか、人目が邪魔か、まがる横町に柳影……

傍にゐた小藤は、

『好いわねえ、もう一度聞かして頂戴な。』かう言つて、染次がもう一度彈き終るのを待つてから、『お上さん下の三味線をちよつと貸して下さいね。私、今日箱を持つて來なかつたから……』

女中が下から持つて來るのを待つて、

『私にも一つうつさして頂くわ。』

かう言つて小藤は三味線の調子を合せた。やがて染次の好い聲につれて、その三下りの同じ唄は、流るるやうに二三遍その一間に漂ひ渡つた。

『いい唄だ。』

などと旦那は傍から言つた。

染次は三四年も前からこの旦那を知つてゐた。唄も餘り唄はないが、何處か靜かな落附いたわる騷ぎをしないやうな處があつて、小唄や歌澤などをよく好んで彈かせた。染次は小藤とこの旦那とにめづらしい昔の小唄ものを三つも四つも敎へた。

『染次姐さんに、冬子さんに、それから、お酌……。お酌は誰が好いでせうね？』
『さうね、三子さんに、それから、此間お定姐さんの許から出た好い子があるわね。』
『露香さん？』
『さう〳〵露香さんッて言つたね、あの子。あの子が好いわ。』
女中はすぐ下りて行つた。やがて下で電話をかける氣勢がした。

女中が酒と通し物とを運んで來てから間もなく、帳場で酒を飮んでゐた女將は、やがて靜かに上つて來て、『まア、ねえ、藤ちやんからは始終うかゞつて知つてゐるんですよ、よく入らつしやいました。こんな家でもね、たまにはね。來て頂くやうにね。』かなり醉つてゐるけれど、しつかりした態度で、ちやんと挨拶して、小藤の勸めるまゝに旦那の前の餉臺のところに來て坐らうとしたが、ふと氣が附いたといふやうに、床の間に置いてあつた脇息を持つて來て、それを旦那の傍に据ゑた。女將の醉つた眼には、高貴か何かの着物に同じ縞の羽織を着た、太い金ぐさりを帶に卷きつけた肥つたやさしい眼の色の淺黑い四十男の姿が映つた。
女將を對手に旦那が話をしてゐる隙に、小藤はちよつと奧の方に行つて見たが、再び戻つて來た時には、もう其處には、染次姐さんが來てゐて、例の旦那の好きな小唄ものなどを彈いてゐた。

分と機嫌とをこの短かい會話の間に小藤はすつかり觀察して了つて、『それにね、こゝのお上さんも此間から旦那に逢ひたいッて言つてゐたし、恰度好いと思つてね。時にはかういふところに來て下すつたッて好いわね。……』笑つて見せて、『私ね、今日もね斷らうと思つたのよ。まだいくらか氣分も本當ぢやないし、髮だッてこんなになつてゐるんですからね。』鬢のところを撫でゝ見て、『だけども、此處のお上さんへ此間中から度々かけて吳れて、今日も不斷着のまゝで好いッて言ひますからね。それに、お客さまも知つてる人なの。』

『大丈夫かえ？無理をして？』

『え、もう大抵大丈夫……。でも此間お醫にかゝつてから、二日寢たんですけどもね。』

不意に、

『誰かかけて下さるわね。』

『あゝ。』

『染次姐さんと、あそこの冬ちやんと、それから、お酌を二人ばかりね。』

『そんなに聘んだッて爲方がないぢやないか。』

『でも、久し振りだから好いわ、染次姐さん、逢ふ度に聞くのよ。』

旦那の返事も待たずに、立つて行かうとする女中を呼留めて、『お鶴さん、ぢやね、かけて頂戴ね。』

『いゝえ。』

『何處？』

『眞砂からかゝつて來て。』

『さう、ぢやね、別に用はないのね。』

『左樣なら。』

かう言つて妹は丁寧に挨拶して、駒下駄の音高く歸つて行つた。

小藤が二階に行つた時には、旦那は茶を飲みながら、大きな體を幅をして坐つて、頻りに女中と何か元氣よく話してゐた。小藤は入るとすぐ敏捷な眼を旦那の顏の上に働かせたが、

『今晩は、入らつしやいまし。』

かうにこやかに挨拶して、旦那の傍の處に行つて坐つて、『私ね、此間から、加減がわるくつて、丸つきりお座敷を休んでゐたんですよ。痩せたでせう。』色の白い頰のあたりを撫でゝ見せたりして、『今日は株屋さんが二三人下に來てるのよ。それにね、別ですけどもね、花牌か始まつてるのよ、此處のお上さんの連中ですけどもね。』

『何うしたんだえ？　加減がわるいッで、風邪かえ？』

『え、風邪ですけども、ね、何だか變なのよ。胃腸もわりいッて言つてたわ、醫者は――』旦那の氣

それは腹の中に飲込んで了つて、女優だのハイカラな若い藝者だのに騷がれてゐる男の顏を凝と見つめた。此の間の夜染々と行末の話をしたことは、あれはまだ何うだかわからないけれど、一時の嬉しがらせを言つてゐるのかも知れないけれど、もし本當にさうであつたら、何んなに嬉しいだらうと小藤は思つてゐた。小藤は不思議にも此頃男に盲目になつてゐる自分の心を振返つて見た。

『今晩は。』

かう言つて、三筋姐さんが入つて來て、何か二言三語話してゐる時に、表に客の氣勢がして、何か言つてゐる聲が聞えて、やがてつゞいて二階の階梯を上つて行く足音がした。小藤はちよつと立つて廊下へ出たが、丁度其時此方にやつて來る女中のお秀とばつたり其處で出會した。

『いらしつてよ。』

『さう誰が送つて來て?』

『妹さんが送つて來て、待つてますよ。』

『さう。』小藤はいくらか胸が戰へるやうな心持がしたが、そのまゝ玄關の方へと行つて、其處に待つてゐる妹に、

『御苦勞さま……ぢや、ね、別に用はないからね、歸つても好いよ。奴ちやん、まだ家にゐたかえ?』

『あゝ。』

また酌をして、『實は、ね、今日ね此處に知つてるお客が來るんですッて？』

『君の？』

『え。……本當に厭ですよ。浮氣をしては……。私、此間言つたこと、本氣なんだから、私、これまでにこんなに本氣になつたことはないんだから。』ちよつと考へて、『明日まで遊んで行つたッて好いんでせう？』

『さう遊んでばかりはゐられないよ。來月の舞臺の稽古も見てやらなくつちやならない處もあるんだから。』

『好いのよ、明日まで遊んでいらつしやいよ。ね、ね。』かう押つけるやうに言つて、『來月は行つて見るわ。皆な出るんでせう？　傳ちやんも？　さう。橘屋も？……なんなら、此方でも總見をするやうに骨を折りませうか。』

『でも、難かしい芝居だからな。ちよつと君達には面白くないよ。』

『西洋の芝居？』

『あゝ。』

『でも、ハイカラで好いわ。私は來月は屹度行つて見るわ。』〈でも、御迷惑？〉かう言はうとしたが、

『誰にしませうね。お定さんにしませうか。それとも照吉さんにしませうか。』小藤は腹の中で旦那のことを知つてゐない老妓をあれかこれかと考へてゐた。

『誰でも好い。來なくつても好い。』

『でも、ね、一人聘びませうよ。何だか餘りさびしいから。』かう言つて、『なら、三筋姐さんにしませうか。』

『三筋ッて、逢つたことがあるかしら？』

『そら、あるぢやありませんか。此間、皆さんして來ていらしつた時に、「夕立」を踊つた人よ。』

『あゝあの人か。好い姐さんだ。』

『ぢや、さうしませうね。』傍にゐる女中に向つて、『ぢや三筋姐さん。』

女中が立つて行つたあとで、小藤は男の傍に寄り添ふやうにして、『私にも、一つ頂戴な。』前に置いた盃を男が飲み乾さうとすると、『いゝのよ。それを頂戴よ。』かう言つて、男の手から盃を取つて、飲んで、返して、酌をして、ぢつと男の顔を見てゐたが、

『貴方、薄情ね。』

『何故だえ？』

『何故でも……。』わざと理由は言はずに、『今日は緩りして行つても好いのね？』

電話口のところから廊下に出て、小藤は暫し立つて考へてゐた。旦那は泊らずには歸つて行くやうなことはない……。困つたもんだ。折角電話をかけて、呼び寄せて置いたのに、今夜は緩くり話さうと思つて樂んでゐたのに……。旦那もまた今日あたり來るとは思はなかつた。此間來てからまだ五日位にしかならないのに……。(好いわ、何うにかなるわ。來るなら、來てから、何うにでもなるわ) かう思つて、女將のところに行つて、『今、お客樣がもう一人來ますから。』

『おつれ?』

『さうぢやないのよ、別なのよ。』かう言つて、小藤は笑ひながら、あらましを女將に心得てゐて貰ふことにした。『あゝ、さうかえ?』などゝ女將も笑つた。酒好きな女將は帳場の長火鉢の前で、頻りに盃を口に當てゝゐた。いくらか上方の訛りの殘つてゐる言葉で、長い年月を男と酒とに沈湎して送つて來たやうな四十女であつた。借金で困つてゐて、時々執達吏を向けられる話などを、醉ふと女將はあけすけに誰にでも話した。

山崎は奧の一間に女中を相手にして酒を飲んでゐた。そこに小藤は入つて來たが、電話のことは顏にも口にも現はさずに、『誰か一人姐さんを聘びませうね。』

『あゝ。』

るが、それからは、太い錆びた旦那の聲と細い冴えた姐さんの聲が一緒に縺れ合つて、それが遲くまでボソボソと聞えてゐた。朝は旦那は起きるとすぐ、どてら姿でくはへ楊枝をして、近所の錢湯へと出かけて行つた。そしてそこから歸つて來て湯豆腐か何かで朝酒をやつてゐる旦那の顏が、かなり赤くなつた頃、二度寢から目覺めた小藤は、艶な長襦袢姿で、寢みだれ髮に横櫛をして、いつも二階から下りて來た。

『家から電話よ。』

かう知らせられて、電話口に行つた小藤は、『あゝ、さう。母さん、』などゝ始めは言つてゐたが、段々困つたといふやうな語氣がその言葉に現はれ出して來た。

『さうなの？　入らしたの？　今さう？』ちよつと途切れて考へてゐたが、『此方に來て頂けないだらうか？』

かう言つて暫し母親の言葉を聞いてから、『だッて構ひやしないよ、時には來て頂いたッて好いわ……。さう言つて頂戴な。さうしてね、誰かに送らせて來るやうにして下さいな。ちよつと、今、歸るといふわけには行かないんだから……。』また母親の言葉を聞いて、『まア、何でも好いのよ。さうして頂戴よ。その位のことは、母さんだッて、して呉れたッて好いのよ。』かう言つて、まだくど〳〵言つてゐる母親の言葉を聞かうとはせずに、そのまゝ電話を切つて了つた。

さういふ素振を氣にも見せない小藤の顔も見られないやうな氣がした。

何も知らない旦那は、

『奴ちやん何かお彈きな。』

『え。』

うはの空の返事をした小奴には、姐さんと旦那との關係などが考へられてゐた。姐さんだッて、この旦那が滿更イヤではないのは、長い間の關係でわかつてゐた。現にこの間までは、今度のやうなことは起りさうにも思はれなかつた。旦那が來ないと、小藤は心配して、『何うしたんだらう、旦那は？　病氣でもしてるんぢやないかしら？』などゝよく言つた。

旦那は小藤と小奴とを連れて、寢るまでの時間つぶしに、通の方へ出かけて行くことなどもあつた。時には流行の縫ひのある襟を買つて呉れたり、名高い天ぷらを御馳走して呉れたりした。鮨屋へ三人して寄つて家への土産を買つて來ることなどもあつた。

何うかすると、旦那の來た晩お茶を挽いて、二階の階梯の下の三疊で小奴は小さくなつて寢た。さういふ時には、二階の話聲が遲くまで耳について爲方がなかつた。寢る時にはいつでも旦那が先づ二階に上つて行つて、それから姐さんは、少しの間長火鉢の傍で、世間話をしたり新聞の續き物を讀んだりして、母親や家族のものゝ寢るのを待つて最後に長襦袢姿で厠へ行つて、そして二階に上つて行くのが例であ

こんなもの。』と言つて、詰らなさうにそれを投げるやうに傍に捨てた。
『……がひごとかなはず――』と讀んで見て、『おほゝ』と小奴は大きく笑つた。
『もう一つの方は？』
『駄目だよ。こんなもの、好加減に唯紙に書くばかしなんだよ。』小藤はかう言ひながら、もう一枚の方を火に翳すと、
――追々うん來るなり――
と出て來た。
『馬鹿にしてるよ。こんなことときまりきつてるぢやないの、四錢損した。』
『でも、此方の方は好いわ。兎に角よくなるんだから。』
小奴はそれを手に取つて見た。
『だから、およしッて言つたんだ。』笑ひながら母親の言ふあとについて、どれ〱、などゝ言つて、旦那はそれを取つて見て『かなはずのずが面白いね、』などゝ笑ひながら言つた。小藤は詰らなさうな顏をして、その袋の中から五色豆を一つ二つ摘んで食つた。
何もめづらしくはないことだが、小奴は旦那に對する小藤の態度やら言葉やらに一種の興味を持つてゐた。時には不思議なことのやうにも考へられた。心は別な好い男の方に偏つてゐて、さうして少しも

が、やがて此方を振向いて、『姐さん、何を買ふの？　運星？　願ひごと？』
『兩方お買ひよ。』
『私の辻占はそれはよく當るんですから……へえ何うも難有う。』などゝ言ふ中年らしい男の聲がしてゐたが、やがて格子の閉まる音と共に、『來た、來た、また來た、來たわいな……』と流して行くふるひの音がカタカタきこえた。
此方へ入つて來た小奴の手から、三角の袋を二つ取つた小藤は、急いで、願ひごとの方の袋を破つて見た。中から、白い紙と十粒ほどの五色豆が出た。
見てゐた小奴は、
『姐さんあぶり出しよ。』
『さうね。』小藤はそれを半ば熨になつた火鉢の火の上に翳した。
次第に白紙の中に現はれて來る字を小藤はぢつと見守つてゐた。願ひ事までは明瞭と見えて來たが、あとの二三字が容易に出て來ないので、小藤は火箸で火をほじくり起して、またそれをその上に翳した。
『姐さん何んて出て？』
小奴は小藤の顏を意味ありさうに眺めながら傍から訊いた。
『駄目よ、中々出て來ない。』小藤はかう言つたが、やがて『かなはず』と出て來たのを見て、『駄目よ

一夜旦那が來てゐた。旦那は好い心持さうに醉つて、長火鉢の傍に長く寢ころんで頻りに何か話してゐた。電燈の明るい下には、綺麗におつくりをした小藤の白い顏と、派手な草花の模樣の出た襟とがくつきりと浮き出すやうに見えてゐた。母親は傍で旦那の相手になつてゐた。

カタカタとふるひを振ふやうな音が急に細い新道の中にきこえて來し續いて、『來た、來た、また來た、來たわいな、持つて來て、寄つて來て來たわいな。』といふ節が面白くあたりに高くきこえた。

『何だえ？　あれは？』

『辻占ですよ。』母親は旦那に言つた。

『面白い辻占だな。あんなのが流行るのかえ？　此頃？』

『え、此頃ちよいちよい來るんですよ。』

小藤は默つてゐたが、急に、『奴ちやん、呼んで買つて御覽よ。』

『買ふの？　姐さん。』

小奴が立ちかけると、『およしよ、つまらない。あんなもの』かう傍から母親が留めるやうに言つた。

『好いからさ、買つて御覽よ。』

小奴は立つて、上り端の障子をあけて、それを呼入れて、『一つ二錢、高いわねえ。』などと言つてゐた

『お前、考へてしなけりや困るよ。』

母親がそッと言つて聞かせると、『大丈夫よ。そんなんぢやないんだから。』かういつも小藤は言つた。しかしそれを信用して、知らん顔をして、好きなことをさせて置くのは危險だといふやうに母親には思はれた。何うも通り一遍のお客でないといふことは、小藤の態度でよく解つた。それに母親は種々な噂をちよいちよい彼方此方で耳にした。

小奴はそれまでに既にその山崎と小藤との席に一二度聘ばれて行つてゐた。小奴も好い男だと思つた。男らしいところがあつて、それでやさしい。それに、笑ふ時に何とも言はれない愛嬌が眉と眼のところにある。遊び方にもわるく騷がない粹なところがある。姐さんの惚れるのも無理はない。小奴は初めて逢つた時からさう思つた。

『奴ちやんはそのお客を知つてるんだらう？』かう母親に訊かれても、小奴は小藤から口留めされてゐるので、『いゝえ……』などゝ言つた。

『そんなことはないだらう？』

『いゝえ、本當に知らないのよ。』

小奴には母親以上に、小藤と男との關係が飲み込めてゐた。電話がかゝつて來ると、急いでそはそはして出て行く小藤の顔色などもよく讀めた。

ゐないと言ふのを、猶押切つて訊くわけにも行かなかつた。小藤は電話の番號を熱心に電話帳の中からさがしたり、本局にその番號を聞き糺して見たりした。やがてそれは濱町の岡本きさといふ家といふことがわかつた。雜業としてあつて、待合らしくなかつた。

次に逢つた時に、その話をして『貴方も隨分ねえ。ちやんとゐた癖に、』と言ふと『いや、本當にゐなかつたんだよ。ゐれば出るさ。僕は丁度あの時有樂座に行つてたから。』かう言つて男は辯解した。しかし、その年增の女のことが何うしても小藤の氣に懸つた。其處に何か深い祕密が橫はつてゐるやうに疑はれた。しかし正面から言つては、到底男が隱して話さないにきまつてゐるので、小藤はわざと餘り氣にかけないやうな顏をして、裏からこそ〳〵と男の言葉に注意した。始めは、男は、役者の親類になつてゐるやうな家だなどゝ言つて居たが、後にはそれは大勢女を置いてゐる、ある稼業の家だといふことが段段わかつて來た。着物の好みがちと澁すぎると思つたも道理、身裝のことなどは、そこの女將が一々心配するらしかつた。

『あんな婆さん、もうイヤなんだけれどね。隨分世話になつたもんだからね。』知れたら爲方がないといふ風で、後には男はこんなことを大きく言つた。

小藤は此頃はいつもの肝癪も起さずに、常に機嫌の好い顏をしてゐた。お座敷にも元氣よく行けば、母親や弟や小奴等に對しても無理な事を言はなかつた。時には母親の機嫌を取る樣な素振をも見せた。

次に、小藤は男の關係してゐる女に就いて、種々に測量して見た。財布、着物、時計の鎖、袂の中や雜誌の間に挾まれた紙屑、さういふところから微かながらも女の面影を搜さうとした。女優とはまだ關係があるらしいけれど、此方からはさう深く打込んではゐないらしかつた。『あれも、好いけれど、餘り甘すぎてね。何うも手がないよ。ちよつと、此方が騙される位でなくつちやね。』などゝ男は言つた。その女優と箱根に行つた時のことも男は平氣で話した。人に知られないその女優の體のことなども笑つて話した。

『矢張、體の好い人形だよ。』

などゝ男は言つた。

柳橋に一人、よし町に一人、その他赤坂にもあるらしかつた。あちらこちらの老妓の話や、一緒に遊ぶ役者の女の話や始終行つてゐるお茶屋の話などから、さういふことが段々わかつて來てゐた。ある時、電話をかけると、新聞社にも事務所にも何方にも男はゐなかつた。事務所の方では、電話に出た男がイヤに笑つて、ひやかすやうなことを言ふので、それを好い事にして、追詰めて行先の電話の番號を訊いてそこにかけて見ると、確かに待合か何かでなければゐないと思はれる女中が出て來て、『ちよつと待つて下さい、貴方は?』かう言つて名を聞いて引込んで行つたが、暫くしてから、今度は其處の女將らしい年增の女が出て來て、『今日は入らつしやいませんが、』と言つた。確かにゐるといふことは直覺で分つたが、

『わかつてるぢやないか、俺だッてちつとは世話は出來るよ。』

『何うせ、ちつとでせう。世話をしなけりやならない人が澤山あるんでせうから……』

『…………』

『それ御覽なさい。返事が出來ないぢやありませんか。』

『何とでも言ふさ。今にわかるから？』

男にはまだ定つた妻がなかつた。いづれ大勢の女の中から一人を選ばなければならない身であつた。それが小藤の心と體とを一層男の方に引張つて行くやうに思はれた。しかしその話が出ると、男はいつも言つた。『嬶なんか持たないんだよ。一生、獨身で通すんだよ。家庭なんかつくつて面白くない顏を毎日合せて暮らすよりも、かうして暢氣に遊んで歩く方が好いからな。』

『何うせ、さうでせう。貴方は薄情だから。』小藤はかう言つて男の顏を見た。小藤は種々な方面から男の心を測量しようとした。

男もまんざら面白くないことはないらしかつた。電話をかければ無論喜んでやつて來るし、時には向うから電話をかけて寄越すことなどもあつた。それに、遊ぶ金も何方かと言へば綺麗で、『私が持つてるわ、今日は私に拂はせて置きなさいよ。』と女が言へば、さうかと言つて快く拂はせるが、その時々の金は大抵は財布の中に用意して持つて來てゐた。

そこから楊柳などの青々と生えた蘆の新芽のたぷたぷした小さな枝川を隔てゝ、向うに瀟洒な草葺の家などが見えた。それは有名な姐さんと役者との媾曳するためにあるやうな家であつた。男はそれを指して小藤に言つた。『あそこはちよつと好いぜ。來たことがある？　ない？　あそこが有名な枕流亭だよ。例のあの役者の來るところだよ。一度行つて見やうぢやないか。』

『矢張、今でもあの姐さん來るのね。』

『それは來るさ。自動車などで夜おそくやつて來るんだよ。』

『何でも先の旦那か何かに貰つたんでせう？』

『さうだ……。』

『さういふ粋な旦那を持ちたいわねえ。』

小藤は自分の旦那の話をもあるところまで山崎に話してきかせて置いた。勿論、それは輪廓だけで、深い長い關係までには及んでゐないが、男の心を引寄せる手段として、また、眞にさうなつた時の準備として、『でも、ね、いくら物の解つた旦那だッて、かうして貴方と遊んでゐることがわかれば、もう世話になつてはゐられないやうなもんですからね。その時はちやんと覺悟してゐるのよ。』

時には更に一歩を進めて、

『その時は、何うして下さるの？』

母親が少し變だと氣が附いた頃には、二人の關係はもうかなり世間に知れてゐた。藝者達の中でも、『さうですッてね、もと小りんちやんが出てゐたんだッてね。』などゝ噂した。ある家の抱妓は、夜おそく二人で並んで通を歩いてゐるのを見たなどゝ話した。

『好い男だよ、ちよつと苦味走つたやうなところのある男だよ。』

ある老妓はこんなことを言つた。

小藤ももう內所にして置かうなどとは思はなかつた。男振と言ひ、人物と言ひ、世間の名譽と言ひ、自分の情夫として恥しいところがないばかりでなく、寧ろさういふ男を擒にした自分の腕を誇りたいやうな心持がしてゐた。小藤は男を呼び出しては、よくあちこちの待合に行つた。

ある待合の一間は、池のある樹の深く茂つた暗い庭に面してゐた。そこにはさかりのついた蟾蜍が何處からともなく無數に集つて來て、不思議な形をして黑く澤山に重り合つてゐた。ある待合の一間は、白壁の土藏と土藏との間に挾つたやうになつてゐて、それに朗らかな朝の日影が美しく照り添つた。ある遠くの方にある靜かな高樓では、下に洋々とした大河が流れて、靑い白いペンキ塗の小蒸汽が白い烟を四邊に靡かして水を切つて通つて行つてゐた。そこは小さな室が幾つとなく水に臨んで並んでゐるやうなつくりで、對岸の大きな工場の汽笛は、靜かに水を渡つて、曉の寢亂れ髮の上に震へるやうに響いて聞えた。

いつも借りつけの待合の電話を借りようとは思つたが、何處となくまだ祕密にして置きたいやうな氣がしたので、小藤はわざ〳〵通りへ出て、角にある自動電話の中へと入つて行つた。ベルの音がして、暫く經つて、『貴方？　私、わかるでせう。今日來られない？　なら、屹度ね。この間のところでも好いけど、別なところにしませうか。松月ツてね、そこのお上さんは、本當に氣が置けない人なんだから……ぢや、屹度ね。』やがてかういふ小藤の聲が其中から聞えた。で、それをすまして歸らうとすると、ふと路の角で、盛裝した小りんが莞爾と挨拶して通つて行くのに逢つた。

家に歸つて、湯に行つたり髮を梳いたりして、心待ちに待つてゐると丁度日が暮れかけた時分、箱屋が松月からの口を知らせて來た。

すつかり支度が出來てから長火鉢のところで一服煙草を旨さうに吸つて、トンとはたいて、

『母さん？　鍵？』

『何うするの。』

『少しお寶が欲しいの。』

母親の渡した鍵を持つて、簞笥の前に行つて、暫し坐つてゐたが、『此間の御祝儀も此處に入つてるの？　さう？　ぢや母さん、ちよつと一枚借りるよ。』かう言つて小藤は十圓札を母親に出して見せた。

それから二日ほど置いて、旦那はやつて來た、しかし小藤はそれを素振にも現はさなかつた。いつものやうに酒を勸めたり醉の覺める間を通りに一緒に散步に出かけたりして、機嫌よく旦那を欵待した。旦那はその翌日の午後までゐてそしてほんのりと醉つて歸つて行つた。恰度その時、肥つた髮結が來てゐたが、小藤は立ちもせずに『ぢや、今度は何時？　十日頃。』などゝ言つて機嫌よく格子を出て行く後姿を見送つた。

髮が出來上らない中から、小藤の心はそは〳〵とある物に向つて浮かれ立つて來てゐた。もう少しさつき箱屋が來て、小奴の祝儀と此間の祝儀とを一緒に屆けて來た。それを母親は上り端のところで受取りながら、『眞砂さんのはまだ下りないのかね、それから春の屋にもまだ二つさがらないのがあるよ』勝どん、一つ催促して見てお吳れよ。』などゝ言つてゐた。そして、それを受取つてから、母親は小奴の方の祝儀帳と小藤の祝儀帳とを並べて出して、印をつけて、鍵をぢやら〳〵音させて、それを簞笥の中に藏つてゐた。

（あそこに、十五六圓はある。それに、昨日旦那からお小遣に貰つた金が少しある。澤山だ。）小藤は髮の鬢の出し方などを指圖しながら、腹でこんなことを思つてゐた。

で、髮が出來上ると、それをちよつと鏡に映して見たが、いつものやうに、鏡臺を出してそれを丁寧に直さうともせずに、そのまゝ格子を明けて急いで外へ出て行つた。

小藤も手に取つて見て、『英語？　フランス語？　それともドイツ？』

『英語の雜誌だよ。』

別にそれを取らうともせずに、山崎は唯莞爾してゐた。『ぢやね、何かね、早いところが好いわね。もう遲いから。』女中はかう言つて急いで帳場の方へと行つた。

その翌くる日も夕方近くまでゐて、歸りに山崎は綺麗に勘定をした。それが一層男に對する女の信用を深くした。その時小藤は、『ちよつとお見せなさいな。』かう言つて男の財布を手に取つてひつくりかへして見て、『好い縫ひ潰しね。誰に貰つたの。うそ、うそ、屹度誰かに貰つたんですよ。』などゝ言つた。山崎は名刺の裏に電話の番號を二つ書いて女に渡して、『何方かにかけりや大抵ゐるよ。午後四時頃なら、此方の方だ。』などゝ言つた。一方は新聞社で、一方は一座の事務所だと男は話した。

歡樂に疲れたやうな顏をして、やがて小藤は家に歸つて來た。此頃はそんなことは滅多にないので、いくらか不思議にして、『何うしたんだえ？　お前、』など母親は訊いた。

『だつてあれから稻垣へ行つて、雜魚寢をするとか何とか大騷ぎなんだもの。長いお座敷で飽き飽きして了つた。くたびれちやつた。』かう言つて小藤は湯にも行かずに其まゝ二階に上つて、厚い柔かい蒲團を重ねて布いて、その中に疲れた體を入れて、ぐつすりと死んだやうになつて、夜の十時過迄寢てゐた。

男は軽く默頭いて見せた。小藤は何處か品のある、やさしい、わる騒ぎをしない、色艶の好い、眉の濃い男の顏を其處に見た。それに何處か無邪氣な世ずれない所があつた。其處が彼方此方の女に持てるところだと小藤は思つた。その男とある女優との仲が、ある時新聞に出てゐたのを小藤は讀んで知つてゐた。

『そんなに醉つてゐないのねえ。』

『イヤ、隨分醉つてゐるよ。』

『でも、それほどぢやないわ。』また顏を見て『少し飲みませうね。』

『あゝ。』

『それからね、私ね、昔逢つたことがある人のやうに、此處の家には言つて置くわ。好いでせう?』

『あゝ。』

小藤が立ちかけたところに、湯鑵を持つて入つて來た女中のお秀は、莞爾と二人の顏を見比べて笑つた。『お銚子?　それから何か！　あ、何かちよつとしたものをね。』お秀はかう小藤の命ずる言葉について言つて、傍に置いてある雜誌を手に取つて見たが、『之は日本の本ぢやないのね。あ、これぢや逆ね。丸で、私達にはチンプンカンプンね。』

『どれ?』

『待つたでせう？』
嬉々としてその傍に寄添ふやうにして坐ると、
『いや、さう待ちやしない。此處に來てから一時間と經ちやしない。』
『さう……。』
『でも、分らなくつて困つたよ。こんなところだとは思はなかつたから、始めあつちの方へ行つちやつた。』
『さう。』
かう言つたが、小藤は、『で、何うして？　小りんちやんは？』
『何うもしやしない……。』笑つて見せて、『でも、廊下まで送つて來て、何うしたの？　なんて言つてゐたつけ。今夜は是非歸らなけりやならない用があるからッて……。』
『まだ騷いでゐるんですか。』
『騷いでゐるとも、まだあれから藝者が來て、飛んだり跳ねたりさ。爲方がないから、ソッと拔けて來たんだよ。』
『默つて？』
『あ……。』

蛙の鳴く聲が靜かにきこえた。

路から奥に入り込んだやうな靜かなところに其小さな待合はあつた。『いながき』と假名で書いた軒燈に並んで、八重の櫻の咲亂れた枝が垂れ下がるやうに白く灯に映つてゐるのが見えた。そこで車を下りた小藤は褄を取つたまゝ小刻みな足音を敷石道に立てゝ、ちんまりした奥の格子を明けて、

『今晩は。』

と言つて入つて行つた。

仲で引手茶屋の女中をしたといふ四十位の女將と、肥つた色の白い女中のお秀とが、それと聞き附けて急いで帳場から出て來たが、いつも機嫌の好い莞爾した女將は、『大變に早かつたこと。』などゝ言つて小藤を迎へた。

『鶴？　龜？』

『鶴の方よ。』

いつもなら、帳場に寄つて、五分や十分は何か世間話を種々として行くのが例であつたが、今夜は氣が急くといふ風で、小藤はすぐその六疊の間の方へ行つた。

小藤の眼には、室の中央にある黑塗の餉臺に斜に凭りかゝつて、讀みさした雜誌を傍に置いて、色の白い莞爾した顏をいくらか上向きにして此方を見てゐる男を見た。

車夫は小藤の好きないつもの正さんであつた。

『稻垣？』

かう言つて威勢よく駈け出した。

『もう花もおしまひね。』

『本當でさ、毎年、咲いたと思ふと、すぐ散つて了ひますからね。一週間と持つてはゐませんや。』

『本當ね。』

車は青葉になりかけた花の陰を靜かに滑かに走つて行つてゐた。夜はもう更けて、あたりはしんとして、其處等に並んだ屋號を書いた待合の廣告燈が徒らにさびしく四邊を照してゐた。交番の前には、巡査がぼつねんとつまらなさうに彼方此方と歩いて立つてゐた。不意に自動車が一臺、けたゝましい音を立てゝ、大きな光つた眼を闇にかゞやかして、飛ぶやうに此方にやつて來たが、忽ち小藤の車とすれちがつて向うに行つて了つた。白いヹールと長い髱と派手な襟と中折の帽子との一緒に縺れたさまがあとに殘つた。

『奥へ行くのね。』

『よく繁昌しますよ。あそこばかりは不景氣知らずでさ。』

少し行くと、だらだらと下りる坂があつて、其處から路は細い通りへと入つて行つてゐた。何處かで

話をかけて見る氣にはなれなかつた。

それとも知らずに、其處の女將は、客の一人の希望を小藤に傳へて、『何う？　都合がわるいの？』などと訊いた。小藤はすぐ斷つて了つたけれど、その時には、何とも言はれない不愉快さとさびしさと辛さとを感じた。

爲方がないので、お座敷へ行つて、うはの空で何か頻りに饒舌つてゐたが、ふと下で電話のベルの鳴る音がして、やがて女中の此方へ登つて來る氣勢が冴えた小藤の神經に歴々と響いて聞えた。

立つて行つて、

『稲垣ぢやない？』

『さうよ。』

と、小藤は平生の落附いた態度をすつかり失つて了つたやうに、急いで、むしろ慌てゝ、音を立てゝ二階の階段を下りて行つたが、電話の前に立つと、『さう、貴方、お秀さん？　さう、ぢや、私、すぐ參りますから。』かう言つてチリンと切る音がした。

初めからちやんと話してあるので、其處の女將も強ひて小藤を引留めることも出來なかつた。今度は小藤は前とは反對に、わるく落附いて、急にはしやいだやうな態度を見せてゐたが、車が來ると、そのまゝ客に挨拶して、そこそこに其處から出た。

『ぢや、好いのよ、貰つて行つたッて構はないよ。何うせ藝者が大勢ゐるんだから。』

かう女中頭が言つて呉れた。高砂の女將とは、小藤は不斷ことに懇意にしてゐて、それは何んな無理でも通るやうな家であつた。此處にゐるよりは、其方に行つてゐる方が便利だと小藤は思つた。で、小藤はそれを受けて置いて、座敷に行つて、ソッと山崎に眼くばせして、そして車の來るのを待つて出かけた。

其處に行くと、稻垣にすぐ電話をかけて、男が來たら知らせて貰ふやうに懇意の女中に頼んで置いて、それから小藤はお座敷へと入つて行つた。客は醫師の仲間で、中には一二度逢つた人などもゐた。小藤はお酌をしたり三味線を彈いたりしてゐる間にも、絶えず向うから電話のかゝつて來るのを心待ちに待つた。男が拔けやうとしても拔けられずに困つてゐるさまや、賑やかに騷いでゐる一間のさまなどが眼の前に見えたり消えたりした。餘りに醉つて來られなくなつたのではないかなどゝも心配した。後には『あんな旨いことを言つて、實は初めから來る積りでも何でもなかつたんぢやないかしらん。』などと疑つた。『かついでやつたなどと笑つてゐるのぢやないかしらん。小りんちやんと今時分は床の中で笑つて話してるのではないかしらん。』かう考へた時は小藤はいくらかせきこみ加減になつて、自分で下唇を強く咬んだ。

下に下りて行つて、『もう、何時？　十一時すぎ？』などと言つたが、流石に氣がさして、自分から電

名高い役者がゐるといふことが、座敷を面白く賑かにしてゐた。役者は成たけ酒を飲まないやうにして、セルの袴の襞を崩さずに、シャンとしてゐたが、その一言一行が藝者連にはめづらしく話の種になるらしかつた。醉拂ひは醉拂ひとして傍に騷がせて置いて、姐さん達は其方へ行つて、その役者のやつた此間の役の話などをしてゐた。

時間は經つて行つてゐた。幇間が、『髮は根上り、烟管は脂下り。』といふ小唄ものを踊つて一座を笑はせたりなどした。その間にも、山崎が頻りに何うかして拔け出さうとしてゐるのが小藤にはよくわかつて見えたが、しかしそれは容易に思ふやうにはならぬらしかつた。『山崎君、用がある？　そんなことがあるものか。今夜は徹夜だ。これから大に騷ぐんだ。』などと肥つた男は言つた。

何うしやうかなどと思つて困つてゐる時、運よく、『藤ちやん、ちよつと。』かう言つて、女中はソッとあと口を知らせて來た。

帳場の方へ行きながら、『もう貰つても好いのかしら？』などと女中に言つたが、やがて電話室の中からは、『長くは居られませんが、一時間位なら、うかゞひますが。』といふ小藤の聲が洩れてきこえた。

其處から出て來ると、

『何處なの？』

『高砂。』

ら。』

かう言つて置いて、小藤はそこに電話をかける振をして、帳場に行つて、電話室に入つて、かねて借りてゐる近所の藝妓屋から内のものを呼び出して貰つた。

『さう。來ない。來ないのね。大丈夫ね。ぢやおそくなるかも知れないから、時間がすぎたら、寢ても好いよ。』電話口に出た妹にかう言つて、次に行く先の待合に電話をかけて口をかけて貰はうとは思つたけれど、さういふことが女中に知れてはと思つて、よして、そのまゝ座敷の方へと引返して來た。山崎は其時はもう座に戻つてお定姐さんと頻りに何か話してゐた。肥つた男は『おい、君。』などと言つて山崎の肩に凭りかゝつた。小藤は勝ち誇つたやうな得意さを感じながら其處に坐つてゐる小りんの方を眼で見た。相圖をして、隙を見て、再び廊下に出た二人は、

『何處へ行くんだえ？』

『稻本ッていふ家ですがね……。知れちや具合がわるいから、貴方、先へ行かれない？』

『今、すぐ？』

『すぐでなくつても好いけれど……。』

『よし、よし。』

かう言つて山崎はそッと向うに行つた。

『…………。』

『だつて……小りんちやんにわるい。』

『何ァに、あんなものなんか。』

『うそ。』

『本當だよ、好いだらう？』

『……。…………、…………。』

『ぢや他でも好い。』

『ぢや、ね。』かう言つて、小藤は男の白い顔を見て、『でも、今夜は駄目なんでせう？』

『駄目なことはないよ。』

『ぢや、ね。』かう言ひかけたが、もしや今夜あたり旦那が來やしないかしらと小藤は思つて見た。もう一週間ほど旦那は來なかつた。今夜あたり來るかも知れなかつた。夜おそく來ることは滅多にないけれど、大抵午後か夕方に來るにきまつてゐるけれど、さうかと言つて安心しても居られなかつた。

『何時？　もう？』

『まだ、早いよ、九時少しすぎたばかりだよ。』

『ぢや、ね、ちよつと待つて下さいね、好いところがあるから、そこに電話をかけて聞いて見ますか

その後小藤は暫くその男に逢ふやうな機會を得なかつた。其家にもやつて來たやうな樣子はなかつた。女中に聞いて見ても、『あの方何うしたか、此頃ちつともお見えにならないのよ。』などと言つた。

ところが、ある夜、同じ家に聘ばれて行くと、役者だの幇間だの大勢ゐる中に雜つて、其男は春雨などを躍つて、一座を興がらせてゐた。一座はもう深く酒に亂れてゐた。壺坂のさはりを一方で彈いてゐると、一方では客が追分などを唄つてゐた。他の土地の藝者が三人も四人も來てゐた。

小りんが、『小藤姐さん、今晩は。』などと挨拶した。

少し經つてから、ふと見るとその男の姿は見えなかつた。小藤は何氣なく廊下の方へと出て行つた。一座の賑かなのに引かへて、そこはしんとしてゐた。樹の間を透して來る灯が庭の花を白く見せて居た。

ふと、醉つたらしいその山崎が向うの方に立つてゐるのを小藤は發見した。しかし小藤は默つて靜かに庭の方を見てゐた。

ふと男の手招きするのが見えた。

やがて靜かに寄つて來た男は、腕を小藤の肩にかけるやうにした。

『…………。』

微かに囁く聲が小藤の耳に入つた。

『たつて？』

心の内は燃えて居ながら、流石にそれをぢかに打出すわけにも行かなかつた。それに、小りんを中に置いた關係がいくらか小藤の心の熱をさましてもゐた。あんな不見轉なんかといふ腹が小藤にあつた。小藤はわざとすまして、芝居の話だの脚本の話だのをした。

けれど心を通はせる機微な機會を失ふやうなことはしなかつた。小藤は心を傳へるためのあらゆる眼色をして見せた。ある時は小りんに對する手痛い批評を見せ、ある時は心があつてそして無いやうな姿を見せ、ある時は焦々と燃えるやうな形をして見せた。小藤に取つては、靜かな動かない男の眼や態度が頗る物足らないやうにすら思はれた。

いよ〳〵お立ちといふ間際になつて、男は醉つたといふ風で、最初にお定の手を握り、續いて小藤の手を握つた。丁度この時小りんは廊下の方へ出て行つてゐなかつた。小藤は熱い力强い男の手の壓力を感じた。小藤は冗談のやうにそれを强く握り返して、笑ひながら、小りんに對するある輕い嫉妬のやうなものを見せた。男は再び握り返した。

小りんに對しては男はわざと澄まして行くやうな風をして出て行つた。しかしあとから小りんは追懸けて行つた。で、離座敷から帳場の方へ行く長い敷石道の間、二人は並んで何か話して行つた。褄を取つた艶な姿や、帽子をかぶつた脊の高い男の黑い影や、長く出た髱や、白く見える派手な襟などの上に、庭樹の間を洩れて來る灯の影がチラチラと美しく搖いた。

少し話したり飲んだりしてゐる中に、客は昨夜おそく自動車でやつて來たといふことや、小りんが爲の意氣な客の相手に聘ばれたといふことや、若い藝者はよし町の友奴といふ妓で、さつきから度々電話がかゝつて來て、もう歸らなくつてはならないといふことや、お定姐さんの前に照吉姐さんとお靜さんとが來てゐてお酌などを呼んで大騷ぎをしたといふことや、鼻の大きい方の客はこの家の大事なお客だといふことなどが段々小藤にも飲み込めて來た。鼻の大きい方は、何でも何處かの會社の好いところを勤めてゐる人らしかつた。

帳場に來る途中で、小藤は丁度行き逢つた番の女中を捉へて、

『あの方ちよいちよい來るの？』

『好い男の方？　さうね、二三度。』

『小りんちやん、いつでも聘ばれるの？』

『さういふ譯でもないけれど……。何うして？　知つてる方？』

『山崎さんッて言ふんでせう。』

『さう。』

『私、ちよつと知つてるの。芝居の脚本などを書く人ですよ。新聞などにもよく出る人ですよ。』

『さうですつてね。ちよつと好い男だね。』女中はかう言つて忙しさうに向うの方へ行つた。

『いゝえ、そんなに……。』

『姐さん、何處に行つてゐらつしたの？』

傍から小りんが訊いた。

『信樂に行つてゐたの。』かう小藤は言つたが、『りんちやん綺麗ね、いつ見ても惚々するやうだわ。それに、りんちやんは髮が好いから。』

『あら、姐さん……。』

『だツて、さうですものね、お定姐さん。』髯の意氣な客が盃を此方にさすのを受けて、ちよつと眼を働かせて、『此方はちよいちよい此處に入らッしやるの？　さう！　ちつとも知らなかつた。此間なんか、しらばつくれて、こつちは丸で知らないやうなことを仰しやつてるんですもの。』

『さう？　隨分こちらは人がわるいから。』

傍からお定が笑ひながら合せた。

もう一人の客は、濃い髯の鼻の大きな莞爾した四十男であつた。身裝はさう凝つてはゐなかつたけれど、隨分遊び馴れた人だと言ふことは一目でわかつた。『これが桐家の小藤さんと言ふのかえ？　好い藝者だ。何うだ一つ。』などと言つて盃をさした。他からつれて來た若い藝者は、その傍に身を寄せて、小聲で何か言つたりしてゐた。

つた。小藤は『歸りますとも……さう仰しやらなくつても歸りますよ。これでも家には、ちやんと旦那が待つてるんだからね。』などと言つた。小藤は夥しく醉つて歸つて來た。

それから一月二月は經つてゐた。一夜小藤がある家に出てゐると、其處に貰ひの電話がかゝつて來た。それはかねて贔負にして貰つてゐる大きなお茶屋で、かけて呉れたのはその女中頭のお富さんであつた。『さう。もう明くばかしですから、すぐ貰つて參りますから。』かう言つて、座敷に歸つて、お客の歸るのを待兼ねるやうにして、小藤は出かけた。

敷石づたひに中庭を通つて、灯の明るくついた離座敷に入つて行つた小藤の眼には、お定といふ老妓と、他の土地から來たらしいピカピカした若い藝者と、小りんといふ容色の好い土地の不見轉とが二人の客の間に雜つて、卷烟草の烟の深く籠つた中に坐つてゐるのを見た。ふと小りんの隣に坐つてゐる客と眼を合はせた小藤の胸は俄かに躍つた。小藤は其處に例の綺麗な顔と意氣な髯とを見た。

わざと落附いて、

『隨分籠つてるわねえ。』

かう言つて、裾を引いて、すらりとした姿を見せて、向うの障子の角のところを二寸ほど明けて、そしてお定の傍の火鉢のところに靜かに坐つて、『待つたでせう！』

『私、知つてる人かしら？』

『さうらしいよ。是非、藤ちやんをッて言ふのよ。』

『さう？』

かう言つた小藤の胸には、今まで描いて來たさまぐ〵の五色の色彩はすつかり消えて、その代りに、以前のさびしい辛い平凡な生活の壁がひしと前に暗く横つて來るのを見た。小藤はほつと溜息を吐いた。

何の事だ、座敷に待つてゐた客は、四五年前、小藤がまだ自前にならない時分に、奥の方の小待合で五六度聘んで吳れた請負の方の人か何かで、顏の歪んだ頭の半禿げたイヤな好色な四十男であつた。座敷に入つて行つた時、小藤は胸の塞がるやうな重苦しさを感じた。

其夜は癪にさはることだらけであつた。イヤにしなだれかゝるやうにする態度や『これでも昔の客だよ。』といふ風の鼻先にぶら下つてゐる形や、矢張同じやうにおきまりの金で何うにも自由になるといふ顏色や、女中を前にその時分の話を得意さうにしてきかせる氣障さ加減や、何も彼もすべて小藤の神經を焦立させないものはなかつた。小藤はつい前に置いてある盃を取つて、呷るやうにして酒を飲んだ。段々醉が廻つて來た。『貴方、冗談しちやいやですよ。もうちやんと垣が結つてある自前の姐さんですよ。昔の小藤ぢやありませんよ。ちやんと旦那があるんですよ。』などと言つて、後には顏に似合はない啖呵を切つた。客も初めは冗談にして莞爾してゐたが、後には眞劍になつて怒つて、『もう歸れ。』などと呶鳴

度しかその二階に泊りには行かなかつたけれど、近所なものだから、何ぞと言つてはその男は訪ねて來て、時には、何うかすると旦那に勘附かれさうになつて困つたことも度々あつた。それに、むつゝりした捌けない氣風が小藤には堪らなく厭であつた。小藤は何故僅かばかりの金で、さういふ關係をつけたかと今では後悔してゐた。遊人に金でもやつて、情夫になつた振をして貰つて、そして別れて了はうかなどと此間中も考へてゐた。

氣が附くと、車はいつかその待合の前に來てゐた。

『今晩は。』

かう言つて入つて、小藤は先づ女將のゐる帳場の方へ行つた。しかし其處には女將の代りに、お増といふ女中が一人ぽつねんとして坐つてゐた。

『何んなお客？』

かう訊いた小藤の胸は少し躍つた。

『肥つた人よ。』

（肥つた人？　ぢや違ふかしら？）『何處かで飮んで來たやうな風ぢやなくつて？』

『まだしらふよ。』

（ぢや、違ふんだよ）小藤はがつかりしたが、それを面には顯はさずに、

することは出來なかつたけれど、向うでも滿更に思つてゐないといふことは、眼色や言葉の態度でよく飮込めた。『今度、一度、本當に話さうね。』などとそのお客も上手な口を利いた。彼方此方の女達に仕込まれたやさしい落附いた氣分が言葉にも態度にもそれと見えた。

着物を着たり帶をしめたりする間にも、そのお客の顏は、小藤の眼の前にちらついて見えてゐた。まさかそこに一人で來るわけはないと一方では打消しながら、一方では確かにあのお客だといふ氣が盛にした。旦那は一昨夜來たばかりだから、今夜あたり來るわけもなし……それにもう遲いし……こんなことをも小藤は考へてゐた。

支度が出來て、紙を帶の間に挿んだり何かしてゐると、其處に表に車の來る氣勢がした。小藤は褄を取つて出かけた。

車の上でも小藤は絕えずその意氣な髯と綺麗な顏とを思ひ出してゐた。あるはなやかな色彩の濃い奇蹟が何處からか急に現はれて來て、さびしい平凡な今の生活を全く破壞して了ふ時機が愈々到達したやうにも思はれた。此間深川の不動前で見て貰つた時にも、易者は言つた。『今月はイケませんが、來月は身の上に大きな變動があります。今まで一緒にゐたものと離れなければならないやうな形も見えてゐます。』一緒にゐるものとは誰だらう? あれに相違ない。こんなことを小藤は繰返して考へた。

旦那の外に、內所で近所の二階に來て住んでゐる男があつた。その男の事に相違ない。小藤は月に三

挨拶して箱屋の歸つて行く氣勢を見送つてから此方に來ると、母親は『もう遲いぢやないか。』
『何時？』
『十時だよ。』
『ちよつと行つて來るわ。これも稼ぎだから。』
『お前も隨分きまぐれだね。眞砂なんて家へ滅多に行つたことはないぢやないか。それもこんなに遲く。』
『でも、ちよちつと行つて來るわ。たまには行つてやらなくッちやね。』かう言つてすぐ出かける支度をした。小藤の胸には、宴會の席で見た顏の綺麗な髯の馬鹿に意氣なお客の顏が歷々と映つて見えてゐた。『さう！ あちらがさうなの！ あの芝居の脚本などを書く！ さう！』かねて新聞や何かで其名を知つてゐて、不斷から逢ひたいと思つてゐた人がそこにゐやうとは小藤は思ひもかけなかつた。小藤は其傍に行つて酌をしたりした。『さうですッてね、此方ですッてね。今お廣姐さんに初めてうかゞつたのよ。』などと言つて、芝居の話や脚本の話などをした。その客の名はさうした社會にもかなりによくきこえてゐた。その客が役者と一緒に柳橋あたりの待合に行く話なども小藤はちよい〳〵耳にしたことがあつた。『此方の方にもちつとお出かけなさいよ。』後には打解けて小藤はこんなことを言つた。名高い役者の話や、此の春にやる一座の出し物の話などもした。まさかに初めて逢つた宴會の席で、それ以上話を

ある宴會の席からかなり遲く歸つて來て、着物をぬいで敷島をふかしながら、長火鉢のところで、夕刊を見てゐると、通りに人の足音がきこえて、格子戸が明いて、『姐さん、お座敷。』といふ箱屋の聲がした。

『何方？』

『眞砂さん。』

『誰が行くの。』

『姐さん方は何方も入らつしやらないやうです。』

《ようかしら》かう思つたが、ふとあることを思ひ附くと胸は急に踊り出した、もしやあの人ではないかと思ふと同時に、小藤は急いで立つて上り端の方へ行つた。

『お客は何んなお伴だかわからないの？』

『何でも、姐さんを御存じのやうでした。』

『お一人らしいの？』

『それはよくわかりませんけれど……。』

小藤は考へて、『ぢやすぐ參りますツて……。』

て、私の方ばかり眞劍になつたつて、貴方の方が何の位眞劍だかわかりやしないんですもの。なら、もつと、私にして下すツても好いんですもの。出來ないんぢやないんですからね。私のことをもつと心配して、私が立派にやつて行けるやうにして下すつても好いんですもの。』

ある時は、『なら、私、引いて了ふわ。藝者なんかもうつく〴〵イヤなんだから、ね、好いでせう、ね……。とても一人でゐちや、猶淋しくつて仕方がないツて言ふの？　大丈夫ですよ。さうすりや、貧澤なんか言はないで、おとなしくしてゐますよ。芝居なんかもう見に行きませんよ。それこそ三毛と二人きりで、おとなしく暮してゐるわ。』

その旦那は一週に一度位づつはやつて來て泊つて行つた。大きな會社ではないが、ある會社の好いところにつとめてゐる人で、世の中にもいくらか立てられてゐた。四十二三で、肥つたあから顏の笑ふと愛嬌のあるどつしりした人であつた。小藤は三四年前から知つてゐた。小奴を抱へて與れた旦那が來る時分には、つい近所の待合でをり〳〵逢つてゐた。その時分にも一二度は家に來て泊つて行つたことなどもあつた。母親も前から知つてゐた。

隣の鈴吉と役者との關係は、小藤は何方かと言へば馬鹿にしてゐる方であつたが、それでも時に羨しいなどと思ふこともないではなかつた。體をまかせる男は澤山にあつても、心と體とを一緒に抱き入れて與れるやうな男は何處にもなかつた。孤獨は段々深く小藤のひとり寢の床を襲つて來てゐた。

なくとも、いくらでも、學問のある財產のある家柄の立派な容色のすぐれて美しい令孃を自由に搜すことが出來た。さうかと言つて、世帶やつれをして衣の裾もほら〳〵と朝晚生計の苦勞に心配が絕えないといふ生活に入つて行かうとも願はなかつた。小藤は同じ撥を取つた朋輩の細君となつてからのしがない生活を其處で見た。ある女は場末の町で小さい煙草店などを出して、指環もはめずに、亂れた髮をしてしがない月日を送つてゐた。ある女は先妻の子を三人預けられて、婢もつかはずに眞黑になつて働いてゐた。ある女は、『藤ちやん、堅氣になんかなるもんぢやないよ。ちつとも好いことなんかありやしないよ。もう少し藝でもありや私はもう一度出て見やうと思つてゐる位なんだもの、何處へ行つたッて好いことなんかありやしないよ。』かう言つて亭主が段々邪慳になつて來る話などをした。『爲方がない、一生撥と一緒に暮らすんだよ。』こんなことを言ふ時には、小藤はわざとはしやいで、何だッて構ひやしないといふ氣で酒などを飮んだ。

『旦那と相惚が一番だ。それほど無事なことはない。』といふ言葉がこの社會にあるが、小藤はいつそさうしやうかしらんとも考へて、例に似合はない眞劍なまことの心を旦那に注いで見ることなどもあつた。しかし矢張其處にも不滿足があつた。旦那には立派な細君があり、大勢の子供があつた。此方の望んだやうに、熱い心を受け入れて吳れることは旦那には出來なかつた。淋しい寢覺や、悲しい懊惱や、苦しい煩悶をなだめて吳れることは旦那には望むことが出來なかつた。ある時小藤は旦那に言つた。『だッ

でをり〳〵繰り返した。その男とはある奥の待合の一間で別れた。その朝は黄いえにしだの花に冷たい雨が細かく降りかゝつてゐた。『僕はもう來ないよ。達者でゐたまへ。』かう言つて、男は車の來るのを待ちかねるやうにして歸つて行つた。

　小奴を置いて呉れた男のことなども考へられた。男は女のつれないのに失望して、始めは見せつけるために土地の小福といふ藝者を買つてゐたが、それもいつか身代を滅茶苦茶にして今では何處に行つたかわからなくなつてゐた。『しかし、あの人とはとても一緒になんかなれやしない。氣が合はないんだから、義理づくめにされたやうなもんだから。』こんなことを小藤は母親や小奴に話た。『しかし、お前はとてもかたぎのおかみさんになんかなれないよ。とても駄目だよ。お前のやうなものを細君にする人は、餘程の田舍の大盡か何かでなくつちや駄目だよ。矢張金が一生の伴侶だよ。だから抱妓でも殖すやうに心がけなけりやいけないよ。』散々人を犠牲にして置いて、弟や妹の面倒を見させて、自分達もかうして何不足なく食はせて貰つてゐて、そしてかういふことを言ふ母親も薄情だと小藤は思つた。

　しかし母親の言葉を本當だと思ふこともないではなかつた。自墮落で我儘で、勝手で、無節操で、金を持つてゐられない質で、それで何うして堅氣の細君になぞなれるものかとも思つた。それに、翻つて相手をさがして見ても、三十位で、好い男で、女に思ふまゝ贅澤をさせて、それで立派に一家の細君と立てて置いて呉れるやうな男は何處にも見當らなかつた。さういふ男は何もかうした社會に一生伴侶を求め

の世の中に出て、亭主を持つたり、可愛い子を抱いたり、餘所目には樂しさうに見える家庭をつくつたりしてゐる多勢の從姉妹等を見ると、假令その家庭が何んなに苦しいものであつたにしても、其處には別に靜かなやさしい情味があつて、自分等の知ることの出來ない樂しい平和があるやうに思はれて、羨しかつた。小藤はをり〳〵その生活に引くらべて考へて見たりした。何といふ相違たらう。辛い悲しい淺間しい戀の穽、欺騙と虛僞と淫蕩との絕えず渦を卷いてゐる恐ろしい暗い淵、歡樂と病氣と苦痛との絡み合ひ縺れ合つてゐる深い谷、さういふ中にも溺れずに何うやら彼うやらやつては來たが、やつて來ただけそれだけ辛い悲しい身を削られるやうな心の境を小藤はこれまで澤山に經て來た。『稼業だから仕方がないわ。』かう言つて自分で自分を鞭打つて勵ましては來たものゝ、あつい情や、純な無邪氣な男心や、誠實なやさしい胸の波や、さういふものに對しては、流石に冷めたい石とばかりになつては居られなかつた。小藤は自分に向つて波を打つて來た無數の男心が其處にも此處にも無殘にさいなまれ、虐げられ、冷却させられて行つてゐるのを見た。ある男は彼女の爲に生命を捧げようとした。ある男は彼女の爲めに財產を蕩盡した。ある男は憤怒のピストルを彼女に向けやうとした。ある男は內地にゐられなくなつて外國に走つた。さういふ男心の不思議にも今になつて新しく心の底に蘇つて來るのを小藤は感じた。『あの時思切つて、引かされて行つて了へばよかつた。あの人ならば、親はなし、弟はなし、家はそんなに好くはなかつたけれど、生活に困るやうなことはなかつたのだから。』こんなことを小藤はひとり寢床の中

置かなければならなかつた。小藤は餘所の家のわけの妓のよく賣れる話を小奴の前でいつも話してきかせて、『本當だ、奴ちやんもしつかりしなくつちや仕方がないよ。お勝ちやんなんか、何時でも札が反つてゐないことはないッて言ふぢやないか。それに、お前さん、少し口のきゝ方がぞんざいだよ。何んなお客だつて、裏が返らないやうぢや仕方がないよ。私なんか奴ちやん位の時には、三味線を教はりながらも、お客の心持なんかを考へてゐたもんだよ。うつかりしてゐちや、此商賣は出來やしないよ。藝者には、手がなくつちやねえ、遊ぶ方だッて面白くないんだから。』

小藤は鈴吉や他の同じ年輩の人達の手前にも、もう一人仕込の子を搜して置かなくてはなどと考へて居た。

しかし一方では、小藤は長い間やつて來たその生活に疲れて來てゐた。これから仕込の子の世話に齷齪して近所の人達のやうに將來に望を繫げて見るにも堪へないやうな氣がした。振返つて見ると、自分の是まで經て來た生活、唯無意味に無自覺に過ぎて來た生活、それが何うかすると今更のやうに歴々と眼の前に浮んで見えた。自分一人が沒落した一家の犧牲になつて來たのである。そして女の盛りをかうして徒らに過ぎ去つて了つたのである。かう思ふと、自己を憐む念が此の頃盛に小藤の心に起つて來た。しかし何處かでは、今更そんなことを言ふ年齡でもないといふ氣もするが、何うせかうした生活を送つて來た身、母親の言ふ通りに男よりも金を伴侶にしなければならないといふことも考へるが、普通

えたりした。

『もう、あいつとは別れるんだよ。もうつく〴〵倦きちやつたよ。』こんな事を平氣で饒舌つて歩く姐さんなどもゐた。………………………………、………………………………。………………………………、………………………………。………………………………、………………………………。

しかし、いくら爛れた放縱な生活でも、生活は矢張生活であつた。一歩は一歩自分の地盤を築き上げて、他人には笑はれず、土地でも立てられる身分になりたいといふ希望は、さういふ姐さん達の誰の心の中にも滿ちあふれてゐた。格安の仕込みの子、容色の好い體の丈夫な抱妓、でなければ着物の世話の入らない餘り金を欲しがらないわけの妓などを人達はいろ〳〵にして搜した。桂庵口では碌なものはないなどと言ひながらも、取りかへ引かへ目見得の妓を伴れて來させて、手金の損をするのも厭はなかつた。好い妓があると聞くと、手蔓を求めて遠くまでわざ〳〵見に出かけて行つたりした。

鈴吉の家にも、その隣の松助といふ中姐さんの家にも、仕込の子がゐて、それに姐さん達は朝に晩に一生懸命に三味線や踊を教へた。何うかして、もうすこし樂になりたい。もう少し地盤を築き度い。誰もかれもさう思はないものはなかつた。それに自分の姐さんとしての見得からも、一人や二人の抱妓は

何も彼も質草に持ち出した。

かと思ふと、五六年の間に、驚くほどの金を拵へた姐さんなどもゐた。今では何でも五六萬圓も持つてゐるといふ噂であつた。その姐さんは、土地子で、踊も三味線も達者だが、病氣ではないかと思はれるほどの好者で、いつでも男の三人や四人は相手にせずには居られなかつた。

その一軒置いて隣には、土地で名高い若い藝のある妓が、その社會での名代の色師に深く打込んで、旦那からは離れる、他人からは笑はれる、持つてゐる身の廻りの物は皆なくして了ふ。『あの妓がねえ、あんなおとなしい妓が、さういふことをしようとは思はなかつた。今にすつかり裸にされて放り出されて、土地にもゐられなくなる位が落ちだよ。早く眼が覺めれば好いが……。』などゝ人々は噂した。『でもあの男にかゝつちや駄目ですよ。何んな女でも裸にされないものはないんですから。赤坂でもよし町でも、あの男の爲めにひどい眼を見た女は幾人もあるんですから……。』などゝ自分で見て來たやうに話をするものなども中にはあつた。

働いて金をためる爲めにのみ生きてゐるといふやうな肥つた女髪結も居れば、ゾンザイな口の利方をして毎月僅かな月謝の前借をする清元の中婆の師匠などもゐた。長唄の男の師匠は、拙い〱と言はれながら、あちこちと出稽古に午後から出て歩いて、後にはある抱妓とある待合で出來合つたりした。何處の家にも旦那が一人づつゐて、それが夜おそくやつて來て、三味線の音が俄かに靜かな夜の灯の中に聞

ダイアの指環がもう無くなつて了つたなどと言はれた。ある姐さんは、今まで何年か世話になつて、家まで新築して貰つた立派な旦那をやめにして若い男を公然に引入れて、大きな丸髷に結つて、一緒に並んで通りの方へ出かけて行つたりした。ある姐さんは重い肺病をわづらつてドッと床について、もう明日にもわからないなど丶評判されてゐた。かと思ふと、ある若い踊をする綺麗な妓には、この土地にも數へるほどの立派な好い旦那がついて、時の間に着物が立派になり、指環が殖え、裏の座敷の上に二階が增築され、今まで着物のわるいので評判だつた妹のお駒の化粧までも目に立つほど新しく立派になつて來てゐた。『あそこの家には運が向いて來たんだね。此頃ぢや、あのお父さんが道樂を始めたッて言ふぢやないか。小紋さんを買つてゐるッて言ふぢやないか。』こんなことが多くの人の噂に上つた。

その父親は花牌を引くので、その向ッの方にある藝者屋の上さんの二階によく出かけて行つたッ花牌を引く連中には、待合や小料理店の女將が多かつた。年を取つた姐さんなども雜つてゐた。そこでは來る人の下駄を一々ちやんと下駄箱にしまつて萬一の時を慮つた逃道が裏の方から通りの方へ出て行く樣になつてゐた。夜はおそくまで花牌の音がしんとした二階の一間にきこえた。そこの上さんは、長い淫蕩と零落とを經て來たやうな四十女で、一刻も盃を口に當てずには居られないやうな人であつた。北海道から樺太の方までも步き廻つてゐた。それは夜毎の手合はせのおてんで、生活の一部を助けてゐるやうなくらしで、可愛いお酌が一人ゐるけれど、着物がないので、お座敷に出すことも出來ずにゐた。困ると、

『でも、ね、鈴ちやんもひどいのよ。それはね、稼ぐつて言へば仕方がないやうなもんだけれど、田村さんだツて、おとなしくしてゐるんだからね。宅は、意氣地がない、意氣地がないツて言ふけれど、此方にゐれば自分の身の廻り位は、何うにかして行くんだからね。可哀相だよ。』

『それはさうと、奥では、此頃落附いてゐるやうだね。』母はかう笑ひながら言つて、『お前、早く顔を洗つてお出でよ、今日はぐづ〳〵してゐられないんだらう。』

『あゝ。』

かう言つたが、小藤は立ちもせずに、其處に置いてある新聞を取つていつもの一面の續き物を讀み始めた。

その近所には、同じやうな二階と屋號を書いた同じやうに丸い軒燈とがずらりと一列に並んでゐて、い、わけと七三の妓が毛筋を長く、艶な姿をして、朝湯からの歸りを長い立話に耽つてゐたりなどした。ある家からは、あんなにまでしなくても好いと思はれるほど、仕込の子の悲しさうな稽古の聲が震へて高くあたりに聞えた。ある家の前では、姐さんが起きて、勝手のところで楊枝をつかつてゐるのなどが見えた。

いろ〳〵た噂がこの狹い新道には絶えずきこえてゐた。ある姐さんは役者に夢中になつて、此頃では

喜ばなかつた顏や、何うしても男を歸すやうに歸すやうにと仕むけた素振や、その女中のゐなくなつたあとで、『何うして、泊めるのをイヤがるんでせうね。』と何も知らない鈴吉の囁いたことや、『でも、此方はよし町にお馴染があるんだつて、それをお近さんは知つてゐるんで、それで成たけ歸すやうにするんですとさ。』と自分が場合を繕つてやつたことや、さういふものが一つ一つはつきりと小藤の頭に浮んで來た。……。

……。

……。

『お近さんは、それから何うしたんでせう。』

『それはね、女中だからね、そんなことがお上さんに知れると大變だから、仕方なしに口は拭いてゐるけれど、心ぢや好い氣持はしてゐないのにきまつてゐるのよ。』

『道理で、お近さんが、此間、鈴ちやんのわる口を言つてゐたわ。それでわかつた。』小奴はその時思當るやうな顏をして言つた。

隣との話が絕えたところに餉臺を運んで來た母親は、

『歸つて來たら、また近所迷惑だ。』

『なアに、宅なんか。歸つて來なけりや、來ない方が好いのよ。その方が面倒臭くなくつて好いわ。』

暫く途絶えて『兎に角、一度、宅に手紙を出して見るわ。何ッて言つて來るか面白いわ。』

『さうね。』

昨夜おそく照山から端書が來た時にも、小藤は母親と小奴にその話をして笑つた。『さうですか、あそこのお近さんとも出來てゐるんですか。まア、ねえ。』などと目を睜るやうにして小奴の言つたのはもう二月ほど前のことであつた。その時母親は『昨日隣に來てゐた男だらう。そんなに好い男ぢやないがね。』

『ちつとも男なんかよくはありはしないよ。唯、口が旨いのねえ。お金だつてさうありやしないんだよ、兄さんが歸つて來りや來ないよなんて如才のないことを言つて入り込んだんだよ。鈴ちやんの方だッて、さう惚れてもゐないんだらうけれど、始めは唯稼ぐつもりで始めたことなんだらうけれど、あの人のことだから、お茶屋さんへ行くのはつまらない、兩爲めだなんて言つて引張つて來たんだらう。それに、お近さんのことも薄々は知つてゐるんだよ。だから、あそこに行くのは、何處となく烟たいんだよ。それに、私がね、いろんなことを知つてゐるもんだから、私にだけには何でも話すんだよ。あそこの女將にそんなことが知れると大變なもんだから。』

小藤はその時鈴吉とその照山と出來た時のことなどを思つてゐた。お近といふ女中が藝者の來るのを

『でも知らないかも知れない。』

『それはわからないけども、角座で打つてゐて、南の新地に昔の情婦が出てゐては大抵逢つてゐるわね。』小藤は獨りで舌を出して笑つた。

そこには母親が入つて來てゐた。

『お前、大きな聲で何を云つてゐるのよ。』

『默つて、默つて……』小藤はそツと手で母親を制して、『逢つてるとすると、心配ね。』

『何ァに、好いのよ。心配なんかしやしないよ。』

『歸つて來ると、また騷ぎだァね、胸倉だァね。』

『大丈夫よ。もうそんなことは氣になんかしないから。お互に嫉妬をやく位なら何うせこんなにして一緒になつてゐやしないから……。』

『そして照山さんは、いつ歸るの?』

『もう、ぢき歸るんでせう。』

『兄さんは?』

『宅? 宅はね、十日か十五日頃歸つて來るわけなんだけども、此頃ちつとも手紙が來ないのよ。』

『ぢや、いよいよ怪しいのね。』

『さう。』

かう言つたが、ぎつくり思ひ當つたといふやうに隣から來る聲は暫く絶えた。

小藤は獨りで笑壺に入らずには居られなかつた。隣の鈴吉が亭主のやうにしてゐる役者は、兄さんは、今一座と共に大阪に行つて角座を打つてゐる。そこにその兄さんの以前の情婦である春月の女將が藝者になつて行つてゐる。それを知らせて來た照兄さんといふのは、四五日前まで役者の留守を幸ひに、毎晩のやうに隣へ來て泊つて行つた人である。そしてその人も今大阪に行つてゐる。照山と鈴吉の近頃の關係のことを細く深く知つてゐる小藤は、それに興味を持たずには居られなかつた。小藤は鈴吉とその照山といふ客と三人して、ある大きな待合で雜魚寢をした時のことなどを思ひ出した。

『一體、何ういふんだらうね、藤ちやん。』

隣からまた鈴吉の聲がきこえて來た。

『さうね。』小藤は笑つて、『私は思ふわ、屹度、照山さんが南の新地か何かで遊んで、春月の女將に逢つたんだわね。そしてお前さんの話か何かしたんだよ。さうすると、まア、さうですかッていふやうな譯なんだよ。』

『ぢや、宅ぢや、無論春月の女將に逢つてゐるだらうね。』

『逢つてゐるさうだね。』

漸くきこえて、

『え？　もう起きたの？　今朝は早いのねえ。』隣から鈴吉の聲が高く冴えて聞えて來た。

『昨夜照兄さんから手紙が來たでせう？』

『何うして？』

『何うしてゞもさ。』

小藤は獨りで笑ひかけて、『確かに來たはずよ、誰かと一緒に名前が書いてあつたでせう？』

この返事は暫く來なかつたが、やがて『お前さんの許にも來たの？』

『あゝ。』

『あたしの方にはね、誰だかわからないのよ。照兄さんだとは思つたけれどね。名前が女名前なんだよ。』

『何つていふ名なの？』

『横山てるッて言ふのよ。今も、變だと思つたから、宅の兄さんに手紙を出してきいてやらうと思つてゐるのよ。』

『その横山てるツて言ふのだよ、お前さん。此處で春月の女將をしてたのは――。南の新地で、また褄を取つてゐるツて言ふぢやないか。』

小奴はそのまゝ二階に上つて行つたが、やがて何か言ふ氣勢がして、

『さう、もうそんなになるの？　すぐ起きるよ。』といふ姐さんの聲がした、雨戸を明ける音が續いて聞えた。

此家の姐さんは、何方かと言へば薄手で、脊の高い姿の好いすらりとした藝者であつた。年は二十七八で、土地子ではないけれど、もうかなりこの土地に長くゐるので、そこで桐家の小藤と言へば、かなりの中姐さんに立てられてゐた。『さうさな、あまり若くつても困る。さうかと言つて、餘り婆さんでも仕方がないな。』などとお客のいふ席には小藤はいつも聘ばれて出かけて行つた。

やがて小藤は寢衣のまゝ、眠さうな顔をして、亂れた髪を櫛でときながら、二階から下りて來たが、大きな鏡の前に立留つて、ちよつと顔を映して見て、『髪結さん、早く來て呉れなくつちや困るわねえ。もう、今日で、五日になるんだもの、よく持つたわねえ。』獨言のやうに言つて髪の根をぐら／＼させて見て、『奴ちやん、お濱さん何處にゐるかちよつと見て來ておくれな。』

そのまゝ格子を明けて小奴の駈け出して行くのを見送つてから、小藤は靜かに長火鉢の前に來て、長煙管で一服二服煙草を吸つてゐたが、隣の鈴吉が仕込の妓に何か言つてゐる聲を聞きつけて、『鈴ちやん……。』と大きく聲をかけた。

『鈴ちやん。』

んを起して來てお吳れな、今日はあそこへ行かなくつちやならないんぢやないかえ？』

『さうね。』

かう言つて小奴といふ二十歲位の此家のわけの藝者は、座敷の向うから出て來たが、『でも、ね、昨夜遲かつたから、屹度、まだ眠いんでせう。二時でしたからね、姐さんの寢たのは――。』

『でも、起さなければ、お午になつても起きやしないよ。そして、おそくなれば、起さないッて言つて怒るぢやないか。……姐さん、寢かして置けば、いつまでだッて寢てゐるんだからね、それに、お前さんも行くのかえ？』

『え。』

『何うせ寄附なんだらう？』

『何でもそんな話でしたよ。』

『寄附々々ッて本當にしやうがないね。』母親はかう言つたが、『お前さんは、手傳ひの方かえ？』

『え、そんなことを言つてたわ。何でも模擬店の方を少し手傳はなくつちやならないんですッて。……』

少し途切れて、『でも姐さんは唄の方に廻つたから、早く歸れるッて言つてゐたわ。』

『しやうがないねえ。』

かう母親は再び言つたが、『まア、起して來ておくれよ。』

燈影

窓の障子は少し明いて、其處から朝日が麗らかにさし込んでゐた。軒には雀が樂しさうに囀り、共同水道管の下に置いた手桶に水の落ちる音が外から靜かにきこえて來てゐた。高窓の中は、四疊半で、そこにある長火鉢の鐵瓶からは、湯氣が白く高く騰つて、可愛い三毛の小猫が猫板の上に小さくつくなんで丸くなつてゐた。

四疊半の隣は八疊の座敷で、正面の床には暗褐色の壁を地にして、繪の短冊を二枚挿んだ幅物と、花瓶に挿した白い紅い桃の花と、大きい西洋人形の箱入りにされたのとが明るく朝の光線の中に見えてゐた。

簞笥の上の時計の針はもう十時を餘程すぎてゐた。

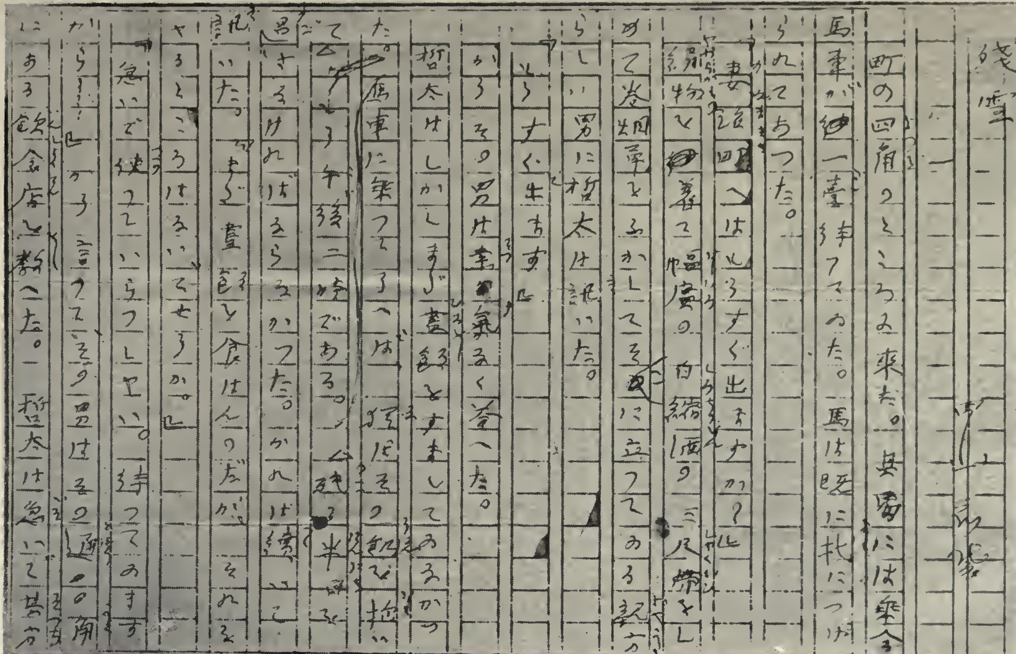
勝手から四疊半に入つて來た母親は、先づ沸え立つた鐵瓶を下して、それから襷を外して其處に坐つて、傍にあつた煙草盆を引寄せて、長い煙管で一服二服旨さうに煙草を吸つてゐたが、「奴ちやん、姐さ

燈影

日曜の遠足……………………………………………………六六八
悪友?……………………………………………………………六八

花袋全集第五卷目次

燈影……三
孤獨……一九三
風雨の夜……三四三
燈臺へ行く道……三七四
トコヨゴヨミ……四二一
毒草……四四五
九時すぎ……五一五
山の湯……五三六
戀ごころ……五七〇
野の道……六四二



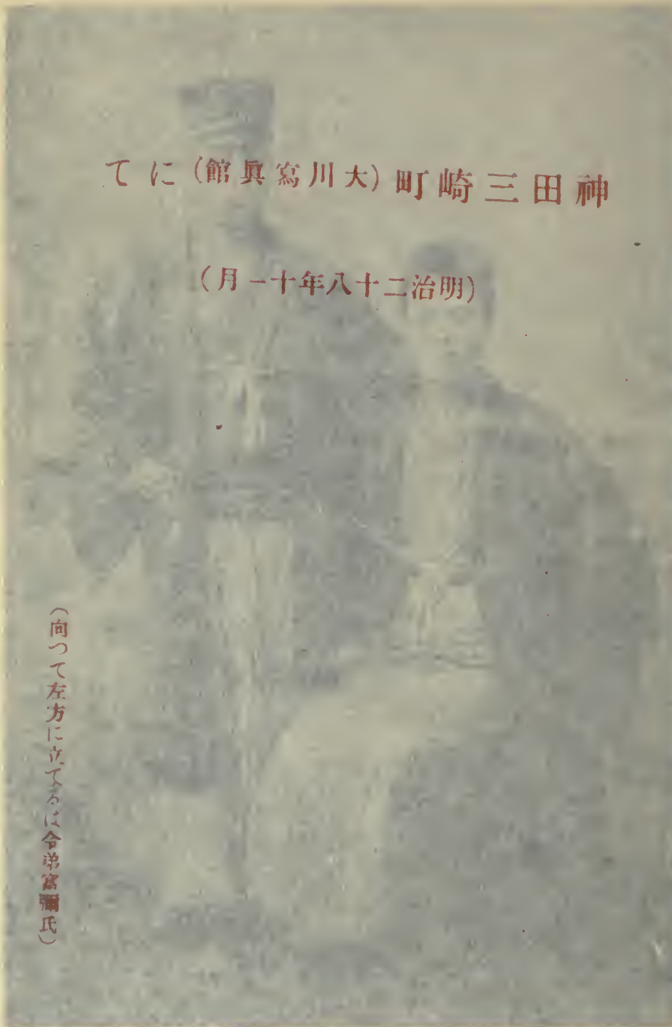
残雪　花袋

町の四角のところに来た。其処には丁度今
馬車が一台待つてゐた。馬は既に車につけ
られてあつた。
「要路へはもうすぐ出ますか？」
縞物を着て帽子の白縮緬の三尺帯をし
めて巻煙草をふかしてそこに立つてゐる若い
らしい男に哲太は訊いた。
「ええ、すぐ出ます」
かうその男は気軽く答へた。
哲太はしかしまだ躊躇してゐるかの
やうに馬車に乗つて了へば、躊躇の[illegible]
で了ふ午後二時である。残る半
さきければさうさかつた。かれは続いて
訊いた。「まだ弁当を食はんのだが、それを
やるところはないでせうか。」
「急いで使つていらつしやい。待つてゐます
から、」かう言つてその男は其の通りの角
にある[illegible]を教へた。哲太は急いで其方



長篇『殘雪』の原稿





神田三崎町(大川寫眞館)にて

(明治二十八年十一月)

(向つて左方に立てるは令弟富彌氏)

田山花袋著

花袋全集

第五巻

燈影 外十一編

花袋全集刊行會



